

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

—岡谷市 その4—

昭和52・53年度

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

編者 宇野昭
史学研

「岡谷市その4」正誤表

頁	行	誤	正
ii	上から19	経塚(経塚原)遺跡(SKTA)	経塚(経塚原)遺跡(SKZA)
iv	" 20	(7) 遺構外出土の遺物	(7) 遺構外出土遺物
xii	下から12	志平遺跡 弥生時代土器(1:2)	志平遺跡 弥生時代土器(1:3)
xiii	上から5	3・4・条痕b	3・4・条痕b ₁
xiv	" 23~24	種子圧痕のある土器	種子圧痕の残る土器
xv	" 4	甕・壺(1:2)	甕・壺(1:4)
32	" 19	第2号住居址	第3号住居址
32	" 37	図2	図6
36	" 1	その北側に	その南側に
38	" 38	(図13)	(図7)
40	" 32	南壁→東壁→北壁	南壁→西壁→北壁
41	図		(図6のうちF ₄ の下のF ₁ はF ₂ に)
48	上から12	笹沢浩「八門講座……」	笹沢浩「入門講座……」
55	" 1	(経塚原)遺跡(SKTA)	(経塚原)遺跡(SKZA)
63	" 5	(図5~9、図版……)	(図12~16、図版……)
67	" 23	土製品(図14-166~122)	土製品(図21-116~122)
67	" 24	116は最大形24mm	116は最大径24mm
67	" 29	石器(図10~14、表1~10)	石器(図17~21、表1~10)
68	" 30	……aより太め	……a ₁ より太め
70	" 6	a ₁ (104・105)……104・105は	a ₁ (104)……104は……
70	" 14	一点出土したのみである(106)	一点出土したのみである(105)
70	" 17	(107~110)出土している。107は……	(106~109)出土している。106は
70	" 18	平坦な面	平坦な面
72	" 13	1~20、表2、図版20・21)	1~20、表11、図版20・21)
76	" 21	刃部は断面が偏平	刃部は断面が扁平
78	" 16	(図版17-3、18-1・2)	(図版17-8、18-1・2)
78	" 18	(図版17-3~6)	(図版18-3~6)
79	表1註	A ₂ ……若干の……B ₁	A ₂ ……若干の……A ₁
79	"	A ₂ '……若干の……B ₁ '・B ₃	A ₂ '……若干の……A ₁ '
79	"	A ₃ '……B ₁ 'より……	A ₃ '……A ₁ 'より……
79	" 8	偏平なB	扁平なB
79	" 15	がBタイプに	がAタイプに
79	下から13	……思われるB ₁ の……	……思われるA ₁ の……
80	表4註	偏平	扁平
81	下から11	V. エッジ(表7~9)	V. エッジ(表6~9)
108	上から12	図版22-3、同24-1、	図版22-3、同23-1、
109	下から9	5は連続爪形……	6は連続爪形
116	上から3・15	偏平	扁平
118	" 7・28	偏平	扁平
119	" 12	偏平	扁平
123	下から14~15	(図11・25~28、図版24・34・35)	(図11・25~27、図版24・32・35)
124	上から1	在する壁高	存する壁高
124	" 37	(図12・25~28、図版33~35)	(図12・25~27、図版33・35)
126	上から35・36・38	偏平	扁平
127	上から31	(図14・27、図版……)	図14・28、図版……)
134	" 22	その一つと頂点	その一つの頂点……
161	" 2	1 位置(II-図2、……)	1 位置(II-図1・3)
172	" 8	2個体17・16が……	2個体17・18が……

頁	行	誤	正
172	上から 9	種子(10) 1 点	種子(9) 1 点
176	" 8	(図版41-1)	(図版41-4)
176	" 22	表7の石器一覧表	表8の石器一覧表
184	" 37	挟雑物	夾雑物
185	" 9	挟雑物	夾雑物
194	" 8	鍛冶関係	鍛冶関係
194		図88-15	図88-15
194		図89-40~43	図89-40~43
195	" 2	紡種車	紡錘車
196	" 34	15~28の杯	18~28の杯
199	" 4	(図21・50・84・86・92・93、……)	(図21・84・86・90~93、……)
200	" 5	(図50-50~60)	(図90-50~91-60)
200	" 31	焼成を行なった	焼成を行なった
200	" 32	鋏(11・14)……鋤(35)……	鋏(11・14)……鋤(35)……
203	下から 3	(図48~74、図版50~54、表6)	(図48~75、図版50~54)
204	上から 8	(図69-400、……)	(図70-400、……)
204	" 12	(図48~74)	(図48~75)
207	" 10	ニ 楔(十字)状	ニ 楔(Y字)状
209	図	図33の註の説明	反対にする
210	上から34	連続する撚紋……	連続する楔状文……
211	" 27	(図74-536)	(図75-536)
211	" 31	(図74-547・548)	(図75-547・548)
211	" 36	(図74-537…、図63-265…、図71-44)	(図75-537…、図64-265…、図版72-441)
212	" 7	593はE A……	537はE A……
212	" 11	566は第10……	266は第10
212	" 14	565は第10……	265は第10
213	" 2	底部(400)で	底部(152)で
213	下から16	(図76~83、表3・8、……)	(図76~84、表1~3……)
218	上から 1	(……図81-162~188)	(……図81-162~188、図版58)
218	" 12	打製石斧83・105……	打製石斧83・110……
218	" 37	(図82-206・219……)	(図82-206~219、……)
220	下から10	(図85-1~4、……)	(85-1~5、……)
226	" 3	1点(3)出土している	1点(3)出土している
227	" 3	肉眼観察	肉眼観察
228	上から23	第3のグループは	第3のグループは……
302	表	図番号55欄……H 夔……	図番号55欄……H 夔D……
302	表	図番号56欄……H 夔E II……	図番号56……H 夔C……
302	表	図番号57欄 57	91-57
304	表	土錘の項	}長さmm 胴径mm 孔径mm
306	表	" }長さcm 胴径cm 孔径cm	
308	表	図番号40	図番号48
309	上から 2	1 位置(II-図2・図版70)	1 位置(II-1・3、図版70)
316	表	鉄製品欄 経塚1住 紡錘車	経塚1住 紡錘車
316	表	鉄製品欄 船霊社4住 鎌11	船霊社4住 鎌-1
図版	上から 7	志平遺跡弥生時代土器(1:2)	志平遺跡弥生時代土器(1:3)
図版	" 40	図版No.4・5	4・5を入れかえる
図版	" 42	4・5の土拵	4・5の土拵

長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

—岡谷市 その4—

昭和52・53年度

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

序

昭和52年度長野県中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、岡谷市内その4地区5遺跡の発掘調査が、4月18日から11月4日にかけて実施されたが、5遺跡のうち船霊社遺跡については未買収地があり、翌53年度5月15日から7月13日まで再度調査を実施した。

岡谷市は、諏訪湖の西岸に位置し、北の長地山地、西の塩嶺・川岸山地、南の湊山地に囲まれ、諏訪盆地の西縁に当る地域で、諏訪盆地と伊那盆地・松本平を結ぶ重要な位置をしめている。この地域は、古くから遺跡発掘調査の進んだ所のひとつで、学術発掘調査例が30件を越え、編年上の標準遺跡も多い所である。しかし、中央自動車道の通過する諏訪湖西岸地域は、遺跡数の多さに比して発掘調査例は少なく、今後の調査に待たれる所であり、また、本年度の場所は地形的に恵まれた所でもあり、今回の発掘調査には大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように、弥生後期の単純な3軒の住居址の検出された志平遺跡、類例少ない縄文時代晩期の多数の土器片を出土した経塚遺跡、縄文・平安時代の重複遺跡で特に平安時代の良好な資料を提供した洩矢遺跡、縄文中期初頭の集落や土器編年に新知見を多数加えた船霊社遺跡等、予想以上の効果をあげることができた。

報告書の刊行に当って、この発掘調査の実施に深い御理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同諏訪工事事務所、余寒未だ去りやらない4月から、冬到来直前の11月にかけて長期間この発掘調査に精励された大沢団長を始めとする調査団の各位、この調査のために御協力いただいた諏訪中央道事務所、岡谷市当局並びに、同市各地区被買収者組合等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和55年3月20日

長野県教育委員会教育長 水口米雄

例 言

- 1 本書は、昭和52・53年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいて行なわれた発掘調査のうち、長野県岡谷市その4地区の調査報告書である。
- 2 調査された5遺跡のうち、船霊社遺跡のみが両年度にわたり、他の4遺跡は昭和52年度終了した。
- 3 調査結果については、担当者の変更などあり、十分意を尽せない部分がある。一部の遺物については統一的な分類基準を試みたが、遺跡の性格の相違などから、全体的な統一ができず、原則として検出された遺構・遺物の図示に重点を置いて編集した。
- 4 執筆担当者が多数のため、基本的事項のみの統一はできる限り計ったが、表現方法等に多少の相違のある点は了解されたい。
- 5 作業分担は途中退団者の分も含め関係者全員の協議によって決定した。
 - 各遺跡の発掘担当者は本文5頁に記載してある。
 - 整理復元作業は、高林重水、長崎元広、堀知哉、高桑俊雄、岩崎孝治、佐藤信之、北原弘子、島田哲男、関喜子、矢崎つな子、小林深志、若菜初の岡谷班関係者を中心として、小松原義人、根津清志、細川光貞、福沢幸一、丸山日出夫、矢嶋恵美子、中村健一が一部をそれぞれ担当した。
 - 拓本・実測・トレースは、堀知哉、高林重水、長崎元広、高桑俊雄、島田哲男、丸山日出夫、中村健一、丸山雅子、和田博秋、百瀬長秀、青沼博之、笹沢浩、岩佐今朝人、樋口昇一が分担した。
 - 写真関係は、現場は各担当者が、室内作業に移った遺物は主に木下平八郎が主となり、青沼博之が一部をそれぞれ担当した。
- 6 執筆に関しては、退団者や調査団全体の整調を考慮し、関係者協議の上分担を決めた。(巻末)
図版編集は百瀬長秀が主となり、青沼博之が一部を分担し、全体の編集は樋口昇一が当った。
- 7 石器の石質については、信州大学教育学部齋藤豊助教授の御教示を得た。
- 8 本報告書関係の遺物、実測図等は、長野市長門町長野県中央道遺跡調査団に保管してある。
- 9 図版中各図右上の数字(大)は枝番を示し、右下の数字(小)は実測図・拓影図の遺物番号に該当する。

本文目次

序	
例言	
第I章 調査状況	1
第1節 調査にいたるまで	1
1 中央道関係の経過	1
2 発掘調査委託契約	2
1) 発掘調査委託契約書	2
2) 長野県中央道遺跡調査会	3
(1) 長野県中央道遺跡調査会規約	3
(2) 昭和52・53年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿	5
(3) 昭和52・53年度長野県中央道遺跡調査団岡谷班名簿	5
第2節 調査の実施と経過	6
1 調査の経過	6
2 発掘調査協力者	7
3 現地指導・視察者	7
第3節 発掘調査の方法	8
第II章 岡谷市の概況	9
第1節 岡谷市の環境	9
第2節 岡谷市の遺跡	11
第III章 遺物の分類	24
第1節 縄文時代の石器	24
1 打製石斧	25
2 横刃型石器	26
3 使用痕のある剝片・石核・原石	26
第2節 平安時代の土器	28
1 土師器・黒色土器・須恵器	28
2 灰釉陶器	28
第IV章 調査遺跡	29
第1節 志平(志平元屋敷)遺跡(SSBA)	29
1 位置	29
2 発掘区の設定と調査の経過	29
1) 発掘区の設定	29
2) 発掘調査の経過	29
3 土層	32
4 遺構と遺物	33

1) 縄文時代の遺構と遺物	33
(1) 土壇	33
(2) O地点と袋状ピット	35
(3) 遺構外出土遺物	36
2) 弥生時代の遺構と遺物	37
(1) 弥生土器の器種分類	37
(2) 第1号住居址	38
(3) 第2号住居址	40
(4) 第3号住居址	43
(5) 遺構外出土遺物	44
3) その他の遺構と遺物	45
(1) ロームマウンド1	45
(2) 遺構外出土遺物	45
5 まとめ	45
1) 縄文時代の遺構と遺物	45
2) 弥生時代の遺構と遺物	46
(1) 住居址	46
(2) 土器	46
第2節 経塚(経塚原)遺跡(SKTA)	55
1 位置	55
2 発掘区の設定と調査の経過	55
1) 発掘区の設定	55
2) 発掘調査の経過	55
3 土層	57
4 遺構と遺物	59
1) 縄文時代の遺構と遺物	59
(1) 「集石」群	59
(2) 遺構外出土遺物	63
2) 平安時代の遺構と遺物	70
(1) 第1号住居址	70
(2) 第2号住居址	72
(3) 土壇1	75
(4) 遺構外出土遺物	76
5 まとめ	76
1) 縄文時代の遺構と遺物	76
(1) 「集石」群	76
(2) 土器	77
(3) 石器	79

第3節 洩矢遺跡 (S M Y A)	103
1 位置	103
2 発掘区の設定と調査の経過	103
1) 発掘区の設定	103
2) 発掘調査の経過	103
3 土層	107
4 遺構と遺物	108
1) 縄文時代の遺構と遺物	108
(1) 第6号住居址	108
(2) 土壇1・2・3	111
(3) 土器集中地点	112
(4) 遺構外出土遺物	112
2) 弥生時代の遺物	119
3) 平安時代の遺構と遺物	119
(1) 第1号住居址	119
(2) 第2号住居址	121
(3) 第3号住居址	123
(4) 第4号住居址	126
(5) 第5号住居址	127
(6) 焼土遺構	127
(7) 土壇4・5・6	129
(8) 集石1	130
(9) 遺構外出土遺物	130
4) その他の遺構と遺物	130
(1) ロームマウンド1～5	130
(2) 集石2・3	132
(3) 大形ピット	133
(4) 段状遺構	133
(5) 焼土地点	133
5 まとめ	134
1) 縄文時代の遺構と遺物	134
2) 平安時代の遺構と遺物	135
第4節 船霊社 (小田井) 遺跡 (S F T B)	161
1 位置	161
2 発掘区の設定と調査の経過	161
1) 発掘区の設定	161
2) 発掘調査の経過	164
3 土層	166

4	遺構と遺物	166
1)	縄文時代の遺構と遺物	166
(1)	第1号住居址	166
(2)	第2号住居址	169
(3)	第9号住居址	170
(4)	第10号住居址	172
(5)	第11号住居址	173
(6)	第14号住居址	176
(7)	竪穴1	179
(8)	土壇	180
(9)	黒曜石集中地点	184
(10)	焼土検出地点	185
2)	古墳・平安時代の遺構と遺物	185
(1)	第5号住居址	185
(2)	第13号住居址	187
(3)	第3・6・7号住居址	190
(4)	第4号住居址	195
(5)	第8号住居址	197
(6)	第12号住居址	199
(7)	遺構外出土の遺物	200
3)	その他の遺構と遺物	201
(1)	柱列1	201
(2)	ロームマウンド	202
5	まとめ	203
1)	縄文時代の遺構と遺物	203
(1)	集落	203
(2)	土器	203
(3)	石器	213
(4)	土製品	220
2)	古墳・平安時代の遺構と遺物	221
(1)	古墳時代後期の集落と土器	221
(2)	平安時代前半の集落と土器	222
(3)	鉄製品	224
(4)	土錘	229
(5)	その他の遺物	230
第5節	小手場沢遺跡	309
1	位置	309
2	発掘区の設定と調査の経過	309

3	土層	310
4	遺構と遺物	310
1)	縄文時代の遺構と遺物	310
(1)	焼土遺構	310
2)	弥生時代の遺物	311
3)	平安時代の遺構と遺物	312
(1)	炉址	312
4)	遺構外出土遺物	312
5	まとめ	312
	岡谷市その4地区縄文・弥生時代住居址一覧表	315
	岡谷市その4地区古墳・平安時代住居址一覧表	316
	執筆分担一覧	317

目 次

第 I 章～第 III 章

図 1	岡谷市内遺跡分布図	18
図 2	志平、経塚、洩矢遺跡付近地形図	20
図 3	船霊社、小手場沢遺跡付近地形図	23
図 4	打製石斧形態分類図	25
図 5	横刃型石器形態分類図	26
図 6	使用痕部の形態分類図	27
図 7	灰釉陶器分類図	28

第 IV 章

第 1 節 志平遺跡

図 1	志平遺跡付近の地形と調査区・遺構	30
図 2	志平遺跡土層図	31
図 3	志平遺跡土壇群	34
図 4	志平遺跡袋状ピット	36
図 5	志平遺跡第 1 号住居址	39
図 6	志平遺跡第 2 号住居址と埋甕炉	41
図 7	志平遺跡第 2 号住居址遺物出土状態	42
図 8	志平遺跡第 3 号住居址	44
図 9	志平遺跡弥生時代土器実測図	49
図 10	志平遺跡弥生時代土器実測図	50
図 11	志平遺跡縄文・弥生時代土器実測図及び拓影図	51
図 12	志平遺跡縄文時代土器実測図及び拓影図	52
図 13	志平遺跡縄文・弥生・平安時代石器実測図	53
図 14	志平遺跡縄文・弥生・平安時代石器・土製品・金属品実測図及び拓影図	54

第 2 節 経塚遺跡

図 1	経塚遺跡付近の地形と調査区・遺構	56
図 2	経塚遺跡土層図	58
図 3	経塚遺跡「集石」群	60
図 4	経塚遺跡「集石」群内出土土器接合関係図	61
図 5	経塚遺跡第 1 号住居址	71
図 6	経塚遺跡第 1 号住居址カマド	72

図 7	経塚遺跡第2号住居址	73
図 8	経塚遺跡第2号住居址カマド	73
図 9	経塚遺跡土塚1	75
図 10	経塚遺跡土塚(須恵器)及び遺構外(灰細陶器)出土土器実測図	75
図 11	刃こぼれ・刃つぶれの1単位の長さの分布	81
図 12	経塚遺跡縄文時代土器拓影図(I・II群)	83
図 13	経塚遺跡縄文時代土器拓影図(II~IV群)	84
図 14	経塚遺跡縄文時代土器実測図(V群)	85
図 15	経塚遺跡縄文時代土器拓影図(V群)	86
図 16	経塚遺跡縄文時代土器拓影図(V群)	87
図 17	経塚遺跡縄文時代石器実測図	88
図 18	経塚遺跡縄文時代石器実測図	89
図 19	経塚遺跡縄文時代石器実測図	90
図 20	経塚遺跡縄文時代石器実測図	91
図 21	経塚遺跡縄文時代石器・土製品、平安時代土製品・鉄製品・石器実測図	92
図 22	経塚遺跡平安時代土器実測図	93

第3節 洩矢遺跡

図 1	洩矢遺跡付近の地形と調査区・遺構	104
図 2	洩矢遺跡土層図	105
図 3	洩矢遺跡土層図	106
図 4	洩矢遺跡第6号住居址	109
図 5	洩矢遺跡土塚(1~3)・集石(1・3)	110
図 6	洩矢遺跡土器集中地点遺物出土状態	111
図 7	尖頭器状石器の加工過程	115
図 8	不定形石器の加工過程	119
図 9	洩矢遺跡第1号住居址	120
図 10	洩矢遺跡第2号住居址	122
図 11	洩矢遺跡第3号住居址・カマド	123
図 12	第3号住居址出土緑釉陶器実測図	125
図 13	洩矢遺跡第4・5号住居址と4号址カマド	126
図 14	洩矢遺跡焼土遺構	128
図 15	洩矢遺跡ロームマウンド(1~5)	131
図 16	洩矢遺跡大形ピット	132
図 17	洩矢遺跡縄文時代土器拓影図(6号址出土・I群)	138
図 18	洩矢遺跡縄文時代土器拓影図(II群)	139
図 19	洩矢遺跡縄文時代土器拓影図(II・III群)	140
図 20	洩矢遺跡縄文・弥生時代土器拓影図(III・IV群他)	141

図 21	洩矢遺跡縄文時代石器実測図	142
図 22	洩矢遺跡縄文時代石器実測図	143
図 23	洩矢遺跡縄文時代石器実測図	144
図 24	洩矢遺跡縄文時代石器実測図	145
図 25	洩矢遺跡縄文・弥生・平安各時代石器・石製品・土製品・鉄製品実測図	146
図 26	洩矢遺跡平安時代土器実測図	147
図 27	洩矢遺跡平安時代土器実測図	148
図 28	洩矢遺跡平安時代土器実測図	149

第4節 船靈社遺跡

図 1	船靈社遺跡付近の地形と調査区・遺構	162
図 2	船靈社遺跡土層図	165
図 3	船靈社遺跡第1号住居址	167
図 4	船靈社遺跡第1号住居址遺物出土状態と土器接合関係	168
図 5	船靈社遺跡第1号住居址炉址付近遺物出土状態	169
図 6	船靈社遺跡第2号住居址	170
図 7	船靈社遺跡第9号住居址	171
図 8	船靈社遺跡第10号住居址	173
図 9	船靈社遺跡第10号住居址埋葬炉	173
図 10	船靈社遺跡第11号住居址	174
図 11	船靈社遺跡第11号住居址遺物出土状態と土器接合関係	175
図 12	船靈社遺跡第14号住居址	177
図 13	船靈社遺跡第14号住居址遺物出土状態と土器接合関係	178
図 14	船靈社遺跡竪穴1	179
図 15	船靈社遺跡土壇全体図	181
図 16	船靈社遺跡土壇	182
図 17	船靈社遺跡土壇・ロームマウンド	183
図 18	船靈社遺跡土壇長軸・短軸相関図	184
図 19	船靈社遺跡黒曜石集中地点	185
図 20	船靈社遺跡第4・5号住居址	186
図 21	船靈社遺跡第12・13号住居址	188
図 22	船靈社遺跡第13号住居址カマド	189
図 23	船靈社遺跡第3・6・7号住居址(上面)	191
図 24	船靈社遺跡第3・6・7号住居址(下面)	193
図 25	船靈社遺跡第4号住居址カマド	196
図 26	船靈社遺跡第8号住居址とカマド	198
図 27	船靈社遺跡第12号住居址カマド	199
図 28	船靈社遺跡柱列1	201

図 29	土器成形の模式図	204
図 30	器形及び口縁部・口唇部・底部の形態分類	206
図 31	隆帯による区画文の種類別模式図	208
図 32	玉抱き三叉文の種類別模式図	208
図 33	器種別文様帯の模式図	209
図 34	石鏃の形態分類	213
図 35	使用痕あるものと黒曜石片出土分布図	216
図 36	打製石斧の形態別縁辺につく磨耗痕の位置模式図	217
図 37	土器片遺物の形態分類	221
図 38	釘の製作過程模式図	224
図 39	釘の断面全周と長さの相関	225
図 40	釘の幅と厚さの相関	225
図 41	羽口の内径と外径の相関	228
図 42	住居址内における鉄製品出土地点模式図	228
図 43	土錘の形態分類	229
図 44	土錘の破損部分類	229
図 45	土錘の重量分布	229
図 46	土錘の重量と長さの相関	229
図 47	両端切断土錘の相関	230
図 48	船霊社遺跡縄文時代土器実測図	233
図 49	船霊社遺跡縄文時代土器実測図	234
図 50	船霊社遺跡縄文時代土器実測図	235
図 51	船霊社遺跡縄文時代土器実測図	236
図 52	船霊社遺跡縄文時代土器実測図	237
図 53	船霊社遺跡縄文時代土器実測図	238
図 54	船霊社遺跡縄文時代土器実測図	239
図 55	船霊社遺跡縄文時代土器実測図	240
図 56	船霊社遺跡縄文時代土器実測図	241
図 57	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	242
図 58	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	243
図 59	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	244
図 60	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	245
図 61	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	246
図 62	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	247
図 63	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	248
図 64	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	249
図 65	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	250
図 66	船霊社遺跡縄文時代土器拓影図	251

図 67	船靈社遺跡縄文時代土器拓影図	252
図 68	船靈社遺跡縄文時代土器拓影図	253
図 69	船靈社遺跡縄文時代土器拓影図	254
図 70	船靈社遺跡縄文時代土器拓影図	255
図 71	船靈社遺跡縄文時代土器拓影図	256
図 72	船靈社遺跡縄文時代土器拓影図	257
図 73	船靈社遺跡縄文時代土器拓影図	258
図 74	船靈社遺跡縄文時代土器拓影図	259
図 75	船靈社遺跡縄文時代土器拓影図	260
図 76	船靈社遺跡縄文時代石器実測図	261
図 77	船靈社遺跡縄文時代石器実測図	262
図 78	船靈社遺跡縄文時代石器実測図	263
図 79	船靈社遺跡縄文時代石器実測図	264
図 80	船靈社遺跡縄文時代石器実測図	265
図 81	船靈社遺跡縄文時代石器実測図	266
図 82	船靈社遺跡縄文時代石器実測図	267
図 83	船靈社遺跡縄文時代石器実測図	268
図 84	船靈社遺跡縄文・平安時代石器実測図	269
図 85	船靈社遺跡縄文時代土製品実測図	270
図 86	船靈社遺跡縄文・平安時代土製品実測図	271
図 87	船靈社遺跡古墳時代土器実測図	272
図 88	船靈社遺跡平安時代土器実測図	273
図 89	船靈社遺跡平安時代土器実測図	274
図 90	船靈社遺跡平安時代土器実測図	275
図 91	船靈社遺跡平安時代土器実測図	276
図 92	船靈社遺跡平安時代鉄製品実測図	277
図 93	船靈社遺跡平安時代鉄製品・土製品実測図	278

第5節 小手場沢遺跡

図 1	小手場沢遺跡調査区	309
図 2	小手場沢遺跡焼土遺構と屋外炉	310
図 3	小手場沢遺跡縄文・弥生時代土器拓影図	313
図 4	小手場沢遺跡縄文・平安時代遺物実測図	314

目 次

第 I 章～第 III 章

表 1	岡谷市内の時代別遺跡数一覧（昭和54年3月現在）	12
表 2	岡谷市遺跡一覧	13
表 3	遺跡別・器種別石器個体数一覧	24
表 4	打製石斧遺跡別、形態別個体数一覧	25
表 5	横刃型石器遺跡別・形態別個体数一覧	26

第 IV 章

第 2 節 経塚遺跡

表 1	剥片・石核・原石の石質	79
表 2	剥片・石核・原石の形態	79
表 3	剥片・石核・原石の重量	80
表 4	剥片の重量	80
表 5	刃こぼれ・刃つぶれの数と単位数	80
表 6	刃こぼれ・刃つぶれのあるエッジの角度	81
表 7	刃こぼれ・刃つぶれのあるエッジの数	81
表 8	刃こぼれのつき方	81
表 9	1つのエッジにある刃こぼれ・刃つぶれの単位数	81
表 10	経塚遺跡縄文時代石器一覧	94
表 11	経塚遺跡平安時代土師器計測一覧	101
表 12	経塚遺跡平安時代砥石一覧	102

第 3 節 洩矢遺跡

表 1	素材別使用痕あるものの割合	116
表 2	洩矢遺跡縄文・平安時代石器一覧	150
表 3	洩矢遺跡平安時代金属製品一覧	156
表 4	洩矢遺跡平安時代土器一覧	157

第 4 節 船霊社遺跡

表 1	使用痕の数別・素材別数一覧	215
表 2	使用痕の種類別素材別数一覧	215
表 3	船霊社遺跡縄文時代石器の石質別一覧	219
表 4	中央道関係遺跡出土鉄鏃一覧	225

表 5	中央道関係遺跡出土鉄鎌一覧	226
表 6	船霊社遺跡土坑一覧	279
表 7	船霊社遺跡縄文時代主要土器分類一覧	281
表 8	船霊社遺跡縄文・平安時代石器一覧	285
表 9	船霊社遺跡古墳・平安時代土器一覧	301
表 10	船霊社遺跡縄文・平安時代土製品一覧	303
表 11	船霊社遺跡古墳・平安時代鉄製品一覧	307

図 版 目 次

図版 1	志平遺跡	1. 遠景（北より） 2. 近景（発掘前、南より） 3. 近景（発掘中、南より）
図版 2	志平遺跡	1. 1号住居址（西北より） 2. 2号住居址（北方より） 3. 4. 2号住居址 炉址1 5. 6. 2号住居址炉址2
図版 3	志平遺跡	1. 3号住居址（北西より） 2. 1号住居址炉址 3. 1号住居址土器出土状 態 4. 5. 3号住居址炉址 6. 土坑群（東より）
図版 4	志平遺跡	1. 土坑1 2. 土坑2 3. 土坑3 4. 土坑4 5. 土坑5 6. 土坑6 7. 土坑7 8. ロームマウンド 9. O地点袋状ピット
図版 5	志平遺跡	縄文時代遺物（1：3） 1～4. 土器 5. 打製石斧
図版 6	志平遺跡	縄文・弥生時代土器 1. 縄文土器（土坑5）（1：3） 2. 弥生土器－中部高 地型櫛描文 3. 同一中部高地型櫛描文 4. 同一畿内型櫛描文
図版 7	志平遺跡	弥生時代土器（1：2）
図版 8	経塚遺跡	1. 遠景（西北より） 2. 近景（北東より） 3. 集石2（北東より）
図版 9	経塚遺跡	1. 集石1. 上面遺物出土状態（東より） 2. 集石1. 下面（北より） 3. 集 石内遺物出土状態
図版 10	経塚遺跡	1. 1号住居址（北西より） 2. 1号住居址カマド（北西より） 3. 1号住居 址カマド横ピット
図版 11	経塚遺跡	1. 2号住居址（北西より） 2. 2号住居址カマド（北東より） 3. 土坑1.（須 恵器甕破片出土状態）（南より）
図版 12	経塚遺跡	縄文時代土器（1：3） 1. II・III群土器 2. V群1類土器
図版 13	経塚遺跡	縄文時代土器（1：3） 1. V群1類土器 2. V群1類土器 3. V群2類土器
図版 14	経塚遺跡	縄文時代土器（1：2）V群土器
図版 15	経塚遺跡	縄文時代土器（1：2）V群土器

- 図版 16 経塚遺跡 縄文土器整形技法 1. ユビナデ 2. 工具圧痕 3. 4. ケズリ 5. 6. ケズリとミガキ a
- 図版 17 経塚遺跡 縄文土器整形技法 1. ケズリ 2. ミガキ a 3. 4. ミガキ a 5. ミガキ b 6. 施文に伴なうミガキ a 7. 施文に伴なうミガキ a 8. ナデ
- 図版 18 経塚遺跡 縄文土器整形技法等 1. 2. ナデ 3. 4. 条痕 b 5. 条痕 b₁ 6. 条痕 b₂ 7. 沈線の施文具痕 8. 種子圧痕
- 図版 19 経塚遺跡 縄文時代石器 1. 使用痕のある剥片 (1:1) 2. 打製石斧 (1:3)
- 図版 20 経塚遺跡 平安時代遺物土師器・鉄器 (1:2)
- 図版 21 経塚遺跡 平安時代土器 須恵器・灰釉陶器 (1:2)
- 図版 22 洩矢遺跡 1. 遠景 (西より) 2. 近景 (東より) 3. 6号住居址 (北西より)
- 図版 23 洩矢遺跡 1. 6号住居址炭化材出土状態 2. 1号住居址 (北西より) 3. 1号住居址遺物出土状態 (北より)
- 図版 24 洩矢遺跡 1. 2号住居址 (北西より) 2. 3号住居址 (北西より) 3. 3号住居址カマド (北西より)
- 図版 25 洩矢遺跡 1. 4・5号住居址 (北西より) 2. 大形ピット (北西より) 3. 焼土遺構 (南より)
- 図版 26 洩矢遺跡 1. 3号住居址内ピット 2. 土壇 1 3. 土壇 2 4. 土壇 3 5. 土壇 4 6. 集石 3 7. 集石 1 (北西より) 8. 9. ロームマウンド 2
- 図版 27 洩矢遺跡 縄文時代土器 (1:2) 1. 6号住居址 (上段)、I群 (下段) 2. I群土器
- 図版 28 洩矢遺跡 縄文時代土器 (1:3) 1. II群土器 2. II群土器
- 図版 29 洩矢遺跡 縄文時代土器 (1:3) 1. II群土器 2. III群土器
- 図版 30 洩矢遺跡 縄文時代土器 (1:3) 1. III群土器 2. IV群土器
- 図版 31 洩矢遺跡 縄文時代石器 (1:1) 1. 小形石器 2. 使用痕のあるもの
- 図版 32 洩矢遺跡 縄文時代・平安時代石器 (1:3他)
- 図版 33 洩矢遺跡 縄文時代・平安時代遺物 1. 使用痕のあるもの (使用痕部拡大写真) (1:½) 2. 滑石製品 (1:1) 3. 土製品 (1:2) 4. 羽口とカマドの粘土 (3号住居址) (1:3) 5. 鉄製品 (1:2)
- 図版 34 洩矢遺跡 平安時代土器 (1:2) 1・2・4・5号住居址
- 図版 35 洩矢遺跡 平安時代土器 (1:2) 3号住居址、焼土遺構及遺構外
- 図版 36 船霊社遺跡 1. 遠景 (北東諏訪湖より) 2. 近景 (南より) 3. 近景 (西より)
- 図版 37 船霊社遺跡 1. 昭和52年度発掘区航空写真 2. 昭和53年度発掘区 (D区) (南より)
- 図版 38 船霊社遺跡 1. 1号住居址 (南より) 2. 1号住居址遺物出土状態 3. 1号住居址中央部遺物出土状態
- 図版 39 船霊社遺跡 1. 2号住居址 (西より) 2. 2号住居址 (東より) 3. 1号住居址・2号住居址 (北東より)
- 図版 40 船霊社遺跡 1. 9号住居址遺物出土状態 (東より) 2. 9号住居址 (北東より) 3. 10号住居址 (北より) 4. 10号住居址埋甕炉 5. 同断面
- 図版 41 船霊社遺跡 1. 11号住居址遺物出土状態 (南西より) 2. 11号住居址 (北より)

3. 11号住居址遺物出土状態 4. 11号住居址ピット8
- 図版 42 船靈社遺跡 1. 14号住居址遺物出土状態 (南西より) 2. 14号住居址 (北より)
3. 14号住居址遺物出土状態 4. 土壇6 5. 土壇44
- 図版 43 船靈社遺跡 1. 土壇11 2. 土壇31 3. 土壇40 4. 黒曜石集中第1地点 5. 黒曜石
集中第2地点 6. 同断面 7. 竪穴1、土壇11 (東より)
- 図版 44 船靈社遺跡 1. 4・5号住居址 (北より) 2. 4・5号住居址 (西より) 3. 4号住居址
北カマド正面 4. 同左側面 5. 6. 5号住居址張出しピット (P₈)
- 図版 45 船靈社遺跡 1. 3・6・7号住居址 (北西より) 2. 3・6・7号住居址 (東より)
3. 6・7号住居址羽口出土状態
- 図版 46 船靈社遺跡 1. 8号住居址 (北より) 2. 8号住居址 (北東より) 3. 8号住居址カマド
(南より)
- 図版 47 船靈社遺跡 1. 12・13号住居址 (北東より) 2. 12号住居址 (東南より) 3. 12号住居
址カマド正面 4. 同右側面
- 図版 48 船靈社遺跡 1. 13号住居址 (南より) 2. 13号住居址カマド正面 3. 同左側面
4. 12・13号住居址 (西より)
- 図版 49 船靈社遺跡 1. 柱列1 (西より) 2. B地区発掘状況 (西より) 3. D地区発掘区 (西
より)
- 図版 50 船靈社遺跡 縄文時代土器 (1:3) 1・9号住居址
- 図版 51 船靈社遺跡 縄文時代土器 (1:3) 9・10・11号住居址
- 図版 52 船靈社遺跡 縄文時代土器 (1:3、277をのぞく) 11・14号住居址
- 図版 53 船靈社遺跡 縄文時代土器 (1:3) 14号住居址、土壇5・11・40・77
- 図版 54 船靈社遺跡 縄文時代土器 1・2. 土器底部 3. 指圧痕の残る土器 4. 種子圧痕の残
る土器 5・6. 種子圧痕のある土器 7. 種子圧痕のある土器 8. 葉(?)圧
痕のある土器
- 図版 55 船靈社遺跡 縄文時代石器 (2:3) 1. 石鏃 2. 石鏃・石匙・ドリル・スクレーパー
- 図版 56 船靈社遺跡 縄文時代石器 (1:3) 1. 打製石斧 (IA・IB類) 2. 打製石斧 (IB類)
3. 打製石斧 (IC類・IIA・IIB類)
- 図版 57 船靈社遺跡 縄文時代石器 (1:3) 1. 打製石斧 (II C類・III A類) 2. 打製石斧 (III B
類・III C類) 3. 大形打製石斧
- 図版 58 船靈社遺跡 縄文時代石器 (1:3) 1. 横刃型石器 (IA・IB・IC類) 2. 横刃型石
器 (II A類・II B類) 3. 横刃型石器 (III A・III B・III C類)
- 図版 59 船靈社遺跡 縄文時代石器 1. 磨製石斧 (1:3) 2. 凹石 (1:3) 3. 石皿 (1:
6)
- 図版 60 船靈社遺跡 縄文時代石器 1. 打製石斧使用痕 2. 同 3. 同 4. 同 5. 凹のあ
る打製石斧 6. 同
- 図版 61 船靈社遺跡 縄文時代遺物 1. 凹のある打製石斧 2. 打製石斧使用痕 3. 土偶 (足~
胴) ((1:2) 4. 土偶 (頭部) 5. 土偶 (足部) (1:2) 6. 土器片錘・土
製円板 (1:2)

- 図版 62 船霊社遺跡 古墳時代・平安時代土器杯(1:2) 甕・甑(1:4)
 図版 63 船霊社遺跡 平安時代土器杯・皿(1:2) 甕・鉢(1:4)
 図版 64 船霊社遺跡 平安時代土器杯・蓋(1:2) 甕・壺(1:4)
 図版 65 船霊社遺跡 平安時代土器・杯(1:2) 甕・壺(1:2)
 図版 66 船霊社遺跡 平安時代遺物 1. 杯E(甲州型)の底部と器内暗文・墨書 2. 土錘(1:2)
 図版 67 船霊社遺跡 平安時代鉄製品(1:2) 1. 鉄製品 2. 鉄製品
 図版 68 船霊社遺跡 平安時代鉄製品(1:1) 鉄製釘
 図版 69 船霊社遺跡 縄文時代・平安時代遺物 1. 羽口(1:3) 2. 鉄滓 3. 鉄滓(1:3)
 4. 鉄滓(1:3) 5. 砥石・石錘(1:4) 6. クリ 7. クルミ
 8. アワ状炭化物 9. マメ状炭化物
 図版 70 小手場沢遺跡 1. 遠景(西南から) 2. 近景(北東から) 3. 焼土遺構
 図版 71 小手場沢遺跡 1・2. 縄文時代土器(1:2)
 図版 72 小手場沢遺跡 縄文時代・平安時代遺物 1. 縄文時代石器(1:1) 2. 同(1:2)
 3. 縄文時代土錘(1:1) 4・5・6. 平安時代土錘(1:1) 7. 平安時代鉄製品
 (1:1) 8. 同土器(1:2)

第 I 章 調 査 状 況

第 1 節 調査にいたるまで

1. 中央道関係の経過

昭和32年4月に公布された「国土開発縦貫自動車道建設法」に基づく中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間約360km、そのうち長野県内は岐阜県中津川市から恵那山トンネルで飯田盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓をかすめて山梨県に至る間約122kmの長さである。

買収された用地は、昭和54年3月現在6,994,000㎡の広さに及ぶ。ルート内に含まれる埋蔵文化財包蔵地は216遺跡を数え、調査対象面積も280,000㎡以上に及んでいる。昭和42年9月に文化庁と日本道路公団との間に取り交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、昭和45年までの数年にわたり度重なる協議が日本道路公団名古屋支社との間に続けられ、漸く昭和45年9月に下伊那郡阿智村小野川地籍から発掘調査が開始され、本年で9年を経過した。その間、用地買収・登記の終了を待って、原則として下伊那・上伊那・諏訪郡の順に発掘調査が進められ、昭和53年度までに216遺跡の調査が終了した。

発掘調査には県独自の組織が持たないので「長野県中央道遺跡調査会」を特設し、その中に調査団を組織してこの業務を遂行している。調査団の運営には、団長と共に県教育委員会文化課に置いた指導主事が調査主任として現地へ長期出張し、当っている。昭和45・46年度には調査主任2名、調査班2班編成であったが、昭和47年度から増員され5名（他1名は一部担当）の調査主任が数班編成で業務に当たってきたが、昭和51年度は調査地区の関係もあって指導主事が4名に減員され、かつ、茅野市・原村地区で阿久遺跡など数ヶ所で大遺跡に当たってしまい、調査進行上極めて大きな支障をきたした。

そこで52年度は3名を増員し4月5日、茅野市・原村その3地区5遺跡（内継続3遺跡、調査費100,283,000円）、岡谷市その4地区5遺跡（調査費25,864,000円）の発掘調査と、茅野市・原村その2地区の整理作業（調査費12,779,000円）を公団と契約し、5班編成で調査が開始された。だが中心となる調査員が集らず、岡谷地区の調査は市当局の御好意で市職員2名の1年間出向という協力で実施することになったが、阿久をはじめとする茅野市・原村地区でも重要な遺構が続々と検出され、益々調査体制は苦しい状況に追いこまれた。とくに阿久遺跡ではその重要性が全国的に指摘されはじめ、3年目へ入る調査継続のやむなきに至った。

ところが53年度に入ると前年度末急に決定した諏訪南インターにかかる調査が追加され、調査員の補充がないまま主任4名の増員で調査体制がスタートした。4月5日、発掘調査（茅野市御社宮司、同頭殿沢、原村阿久、富士見町手洗沢、同御射山、岡谷市船霊社計6遺跡調査費106,891千円）と整理作業（茅野市入の日影遺跡以下9遺跡分調査費24,509千円）に分割した契約が公団と交され、発掘調査3班、整理作業

第1章 調査状況

1班で開始された。

53年度はとくに阿久遺跡の保存問題が激化し関係各機関の度重なる慎重審議の結果、現路線を変更せず、土盛り方式による遺跡保存という新方式によって結着をみた。「阿久」に明け暮れた1年ではあったが、茅野市御社宮司遺跡も1ヶ年を費やし、岡谷市船霊社遺跡も買収以前ながら地主の理解によって路線内の未調査地区が完掘され、ここに昭和45年9月からはじまった中央道西宮線にかかる県内の遺跡の発掘調査はほぼ完了し、あとは記録保存のための報告書作成業務を残すのみとなった。

2 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施工前に日本道路公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で保護協議することになっている。この結果、記録保存と決定、発掘調査が必要となった場合、公団は県教育委員会に委託して調査を実施することになっている。そのため県教育委員会は、公団と現地協議など度重なる事務折衝の上、調査遺跡の発掘面積・調査費・調査期間・調査方法が定められる。その後相互の委託・受託の文書の往来があって、岡谷市その4地区については、つぎのような発掘調査委託契約が締結された。

1) 発掘調査委託契約書 (52年・53年)(内53年度分についてはく)内に記す)

- | | |
|-----------|---|
| 1 委託事務の名称 | 中央道埋蔵文化財発掘調査(岡谷市その4) |
| 2 委託期間 | 昭和52年4月5日から昭和53年3月20日まで<53年4月5日~54年3月20日> |
| 3 委託金額 | 25,864,000円也 <106,891,000円-他市町村発掘調査分も含む> |
| 4 委託金支払場所 | 日本道路公団名古屋建設局 |

日本道路公団(以下「甲」という)は、長野県教育委員会(以下「乙」という)に頭書の発掘調査の実施を委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議し書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し、甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2 甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受領した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3 乙は、発掘調査の実施にあたり作業個所に作業表示旗をかかげ発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書(B5版20部)を作成し、委託期間内に甲に提出しなければならない。

5 乙は、費用精算調書を作成し、委託期間満了後

1箇月以内に甲に提出しなければならない。	し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額
第6条 この契約に基づく報告書、費用精算調査其 他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指 定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理 するものとする。	に対して年8.25%の割合で計算した金額を徴収す ることができる。
第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもつ て取得した購入物件等はすべて甲に帰属するもの とする。	2 甲の責に帰する事由により第4条の規定による 委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対 して遅滞日数に応じて年8.25%の割合で遅延利息 の支払いを請求することができる。
第8条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物 法等に関する諸手続については、乙が代行するも のとする。	第10条 乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解 除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の1を 違約金として甲の定める期限までに納付しなけれ ばならない。
第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に 第5条第4項に規定する報告書を提出しないとき は甲は遅滞損害金として期限満了の翌日から起算	第11条 この契約を変更する必要が生じたときは、 甲乙協議して定めるものとする。
上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印の上、各自1通を保有する。	
昭和52年4月5日〈昭和53年4月5日〉	
委託者 名古屋市中区栄4丁目1番1号(中日ビル11~12階)	
日本道路公団名古屋建設局	
局長 平野和男 ㊟	
長野県教育委員会	
教育長 水口米雄 ㊟	

2) 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度当初の理事会において、発掘調査の受託が決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約、昭和52・53年度役員、岡谷市その4地区調査団組織はつぎのとおりである。

(1) 長野県中央道遺跡調査会規約

(目的)	第2条 この調査会は、長野県中央道遺跡調査会(以下「調査会」という)と称する。
第1条 この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用を研究することを目的とする。	(組織)
(名称)	第3条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。 (1)会長 1名 (2)理事 若干名 (3)監事 2名

第I章 調査状況

(事務所)

第4条 調査会の事務所は、会長が別に定める事務所に置く。

(会長及び理事)

第5条 会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2 理事は次に掲げるもののうちから会長の委嘱した者をもってあてる。

- (1) 学識経験者
- (2) 関係学会の役員
- (3) 関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者
- (4) 関係市町村教育委員会の教育長
- (5) 関係行政機関の職員

(会長及び理事の職務)

第6条 会長は、調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2 理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

- (1) 調査会の運営に関すること
- (2) 発掘調査の受託に関すること
- (3) 規約の改正に関すること
- (4) その他必要な事項

3 会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代理する。

(理事会の招集)

第7条 理事会は必要に応じて会長が招集する。

2 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(顧問)

第8条 調査会に顧問若干名を置くことができる。

2 顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3 顧問は会長の諮問に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

(監事)

第9条 監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

2 監事は、調査会の会計を監査する。

(役員任期)

第10条 役員任期は1年とする。ただし、その職

にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

(幹事)

第11条 調査会に幹事を置く。

2 幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

3 幹事は、会長の命を受け調査会の業務を処理する。

(調査団)

第12条 調査会に調査団を置く。

2 調査団の組織及び運営について別に定める。

(事務の管理執行の規定)

第13条 調査会の業務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

(経費)

第14条 調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

(会計の区分)

第15条 調査会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

2 調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

(出納及び現金の保管)

第16条 調査会の出納は、会長が行なう。

2 調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

(決算)

第17条 会長は、会計年度終了後1ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

(財務に関する事項)

第18条 この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

(委任)

第19条 調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

(付則)

この規約は、昭和45年7月22日から施行する。

第1節 調査にいたるまで

(2) 昭和52・53年度中央道遺跡調査会役員名簿（共に10月現在） ○印は53年度 ●印52年度

顧問	一志 茂樹	(県文化財保護審議会会長)			
会長	水口 米雄	(県教育長)			
理事	金井喜久一郎	(県文化財保護審議会委員)	熊谷 大一	(辰野町教育長)	
	米山 一政	(県文化財保護審議会委員)	岡西 良治	(岡谷市教育長)	
	桐原 健	(県文化財保護審議会委員)	●中村 文武	(諏訪市教育長)	
	原 嘉藤	(信濃史学会常任理事)	○今井 正明	(諏訪市教育長)	
	毛涯 修	(県教育次長)	木川 千年	(茅野市教育長)	
	●太田 波夫	(県文化課長)	松沢 達	(原村教育長)	
	○千野 久義	(県文化課長)	小林 繁治	(富士見町教育長)	
	下平 晃	(伊那教育事務所長)	●小島 与四郎	(諏訪教育会長)	
	●三浦 邦治	(諏訪地区教委協議会長)	○八幡 栄一	(諏訪教育会長)	
	○花岡 文吉	(諏訪地区教委協議会長)	林 茂樹	(宮田小学校長)	
	監事	●小栗 栄重郎	(県文化課課長補佐)	矢島 雅幸	(茅野市教育委員会社会教育課長)
		○青木 和久	(県文化課課長補佐)		
	幹事	青沼 一之	(県文化課文化係長)	今村 善興	(県文化課指導主事)
		久保 浩美	(県文化課文化財係長)	樋口 昇一	(県文化課指導主事)
小林 正良		(県文化課主査)	●山田 瑞穂	(県文化課指導主事)	
堀内 規矩雄		(県文化課主事)	伴 信夫	(県文化課指導主事)	
●宮島 孝明		(県文化課主事)	丸山 徹一郎	(県文化課指導主事)	
○佐藤 正志		(県文化課主事)	笹沢 浩	(県文化課指導主事)	
西沢 宏明		(県文化課主事)	関 孝一	(県文化課指導主事)	
吉沢 乙一		(伊那教育事務所総務課長)	小林 秀夫	(県文化課指導主事)	
●武井 今朝人		(伊那教育事務所主査)	青沼 博之	(県文化課指導主事)	
○内河 一男		(伊那教育事務所主任)	○白田 武正	(県文化課指導主事)	
●寺沢 公明		(伊那教育事務所主事)	○山下 泰男	(県文化課指導主事)	
○木藤 辰男		(伊那教育事務所主事)	○百瀬 長秀	(県文化課指導主事)	
片桐 光雄		(伊那教育事務所社会教育課長)	○土屋 積	(県文化課指導主事)	
小山 民雄		(伊那教育事務所社会教育課主事)	○和田 博秋	(県文化課指導主事)	
小口 幸雄		(伊那教育事務所諏訪支所長)			

(3) 昭和52・53年度長野県中央道遺跡調査団岡谷班名簿

昭和52年度		昭和53年度	
調査団長	大沢 和夫	調査団長	大沢 和夫
総括	今村 善興	総括	今村 善興
調査主任	樋口 昇一、山田瑞穂	調査主任	青沼 博之、山下 泰男
調査員	高林 重水、長崎 元広	調査員	堀 知哉、高桑 俊雄 岩崎 孝治

第 I 章 調査状況

調査補助員 小林 深志、山田 武文 調査補助員 佐藤 信之、北原 弘子
 若菜 初、小山 繁夫 島田 哲男、関 喜子
 矢崎つな子

なお、52～54年間における整理作業等には、岡谷地区班以外の下記の調査団員の協力があった。

調査主任 伴 信夫、笹沢 浩、小林 秀夫、白田 武正、百瀬 長秀、土屋 積
 和田 博秋、岩佐今朝人

調査員 小松原義人、細川 光貞、根津 清志、福沢 幸一、木下平八郎、平出 一治
 松永 満夫、村上(小池)孝、中島 庄一、矢島 宏雄、坂野 和信、山本 賢治
 藤森 美枝

調査補助員 白井 泰彦、中村 健一、塚田 敏彦、宮坂 直子、丸山日出夫、山内志賀子
 赤羽 淑子、丸山 雅子、矢嶋恵美子

第 2 節 調査の実施と経過

1 調査の経過

●昭和52年度 岡谷市その4地区5遺跡は、当初志平遺跡から開始される予定であったが、耕作物などの関係から、急拠予定を変更し、4月18日、洩矢遺跡から開始された。その経過については次の表及び各調査遺跡の項にくわしいが、多少土地買収問題にからむ混乱もあり、船霊社遺跡の一部を除いて、11月4日終了した。この間、発掘調査の実働日数139日、のべ協力者は25,525人に及んだ。

遺跡名	地目	全体面積	用地内面積	調査予定面積	実調査面積	発掘調査期間(月)											
						4	5	6	7	8	9	10	11	12～3			
志平	畑	30,000	3,500	800	812			6 9 (23)									
経塚	畑	12,000	6,400	4,000	1,246	結			8		5 (42)						遺
洩矢	畑	9,000	3,000	700	576	団 式	18		4	23 (32)		30	5				物
小手場沢	畑	3,600	2,400	500	341	発 掘					6	20 (9)					整
船霊社	52	20,000	7,000	2,000	790	準 備						20		4 (33)			理
	53			1,500	1,525		15		13 (39)								
計		74,600	22,300	9,500	5,290		18								4 (178)		

●**昭和53年度** 前年度未調査だった船霊社遺跡の一部分は、地主・公団両者の話し合いの結果、未買収であったが、発掘調査が許可され、5月15日より開始され、前年度分とあわせてほぼ一遺跡の大半を7月13日までに調査することができた。その間発掘調査の実働日数39日、延人員は757人、昭和49年度からはじまった岡谷市地区の調査はここに全部終了した。

2 発掘調査協力者

発掘作業は岡谷市当局の好意で応募した市民の方々を中心にし、53年度は諏訪市内からも参加して実施し、整理作業も両市及び辰野町在住の方々の協力を得た。

52年度

岡谷市

浅川 栄次、鮎沢はつ子、鮎沢八重子、鮎沢 静子、今井 敏雄、岩本よし子、大槻 周治
小口 隆博、小口 利忠、笠原 良子、小坂 節子、小林三八子、小泉 西男、小林亥之一
坂下 正雄、佐野 裕子、清水 喜造、清水うめ子、鈴木 庄作、瀬戸 達雄、高木 保人
中島 甫、中村 亀義、花岡 貞男、浜 さとみ、浜 まき子、浜 幸助、浜 園枝
堀川佐源次、丸山 光男、松下 貞重、松下 永喜、山岡 岩雄、陸川 三郎

(片倉清志、小林謙一、西村一実、早川博幸 — 以上4名岡谷西部中生徒)

53年度

岡谷市

鮎沢 静子、岩本よし子、大槻 周治、小林亥之一、小泉 西男、清水うめ子、清水 喜造
高木 保人、中島 甫、浜 幸助、花岡 貞男、山岡 岩雄、陸川 三郎

諏訪市

岩波やよい、岩波けさ江、伊藤 俊男、小林 花子、野村しめよ、野澤 明子、野澤 和代
野澤 博子、原 とめ、藤森ミツ子、藤森 正子、細野たつよ、守屋 かの、守矢 たつ

辰野町

春日 信子、桜井けさよ

3 現地指導・視察者

日本道路公団 名古屋建設局庶務課、諏訪工事事務所関係者

県教委事務局 教育長、文化課、伊那教育事務所関係者

市町村関係 岡谷市教育委員会関係者

研究者 会田 進、一志茂樹、伊藤正和、鶴飼幸雄、梅沢太久夫、江坂輝彌、遠藤令仁、
岡田正彦、大田喜幸、河西清光、桐原 健、小林達雄、小林正春、高橋一夫、
田中 基、長沢 宏、中村竜雄、永峯光一、服部敬史、服部久美、原 嘉藤、
平出一治、藤森徳雄、古田武彦、堀川瑞恵、三沢弥太郎、宮坂光昭、武藤雄六

その他 岡谷市民タイムス、岡谷日報、南信日々、信濃毎日、朝日、読売、毎日各新聞社、
SBC放送局 (敬称略)

第 3 節 発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は、道路建設工事による全面破壊に伴う事前調査である。工事着工前に記録保存を目的として行なうので、用地内に限ってできる限り精密な記録化が望まれ、その結果を公表する事が義務づけられている。調査方法は「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針」に基づいている。

遺跡名は全てローマ字四文字で記号化している。頭の S は日本道路公団諏訪工事事務所の管轄を表わし、次の 2 文字は遺跡名の頭文字 2 つ、最後の 1 文字は遺跡区分を表わす。この区分は、予め分布調査等で確認された遺跡範囲のうちどの部分を中央道が横切るかで四区分したもので、O－遺跡の全面、A－遺跡の頂部、B－遺跡の中央部、C－遺跡の先端部、をそれぞれ横切ることを示している。

事前調査であるから、原則として用地内は全面発掘するのが望ましいが、とりあえず全面にグリッドを設定し、グリッド調査の結果遺構検出の見込みがない遺跡については調査をそこで留め、遺構が検出された遺跡については全面発掘に切り替えた。なお、グリッド設定方法は、用地内をセンターライン沿いに 50m ずつに区分して「地区」とし、ローマ字(大文字)で名称を与えた。この地区内をさらに 25 区画に区切り小牧寄りからローマ字名称(小文字)を与えるとともに、センターラインに直交方向を 2 m 毎に区切り、センターラインを 50 とし、東京に向かって左からアラビア数字 2 桁名称を与えた。この両者の組み合わせからなる名称を与えられた 2 m 四方の区画が 1 グリッドとなる。表土剥ぎには重機を用い能率向上をはかった。

実測方法は平板測量を主体としているが、一部の遺跡では遣り方測量で行なっている。測量の基準点は日本道路公団作成の平面図に依っており、地形測量も同平面図を利用した。絶対標高は日本道路公団作成の水準点を利用し、方位は磁北を用いている。

発掘調査中の記録は、「調査日誌」、「住居址調査カード」を使用した。

第 II 章 岡谷市の概況

第1節 岡谷市の環境

岡谷市は長野県の南部諏訪盆地の北西部にあたり、下諏訪町・松本市・塩尻市・辰野町・諏訪市に接している。東の諏訪湖へ流入する塚間・横川・砥川の三河川流域の旧岡谷市・長地地区、諏訪湖から南流する天竜川流域の川岸地区、諏訪湖西部の湊地区と、それを取り巻く長地山地・高ボッチ山地・西山山地・川岸山地・湊山地からなり、面積79.1km²、東西7.3、南北16.7kmの南北に長い地域で、昭和52年度現在人口やく60,000人を数える。(図1)

古くからの交通の要地として栄え、官牧岡屋牧を支配する集団の居住地として発達したこの地は、中世において諏訪社大祝の各地頭の支配下にあったことは、各所に残る山城の存在がこれを物語っている。江戸時代の初期に成立した14か村は、明治7年10月、西山田村等3か村が長地村、岡谷市等6か村が平野村、三沢村等5か村が川岸村、花岡・小坂村が湊村となり、昭和11年、平野村が市制施行して岡谷市となり、昭和30年に湊村と川岸村が、昭和32年に長地村が合併して今日の岡谷市が形成されている。

諏訪盆地は、中央大地溝帯の西部の盆地列の中にある。飛驒山脈や赤石山脈の東面する大断層崖は、幾度かの断層運動によってその前面の盆地との間に2000mにも及ぶ比高を生じたもので、盆地はこの大地溝帯の中央に位置し、その低地に水をたたえたものが諏訪湖である。この盆地は霧ヶ峯・八ヶ岳火山帯と守屋・入笠山地にはさまれた紡錘形の盆地で、その東翼は塩尻峠付近から長地山地・下諏訪町高木・諏訪市大和・茅野市永明寺山に続く断層線と、西翼の塩尻峠付近から間下・花岡・小坂を経て入笠山東斜面・釜無山へ続く断層線と2つの構造線に切られて、その中間が陥没し、両側の山地が隆起してできた地溝帯で形成されたもので、この地溝の北部にたたえられた諏訪湖の北西岸に岡谷市がある。

岡谷市は、地形上北部及び西部の山地、横河川扇状地と湖岸沖積地・天竜川流域・低地・湊山地と湖西断層崖地域等に分けられる。その地域別の特色はつぎのとおりである。

北部・西部の山地。横河川と砥川にはさまれた南北8.5、東西4kmの範囲が長地山地で、二ツ山(1826.4m)と福沢山を主峰とする中山山地帯で、福沢山から南の山地や、湖岸低地に面しては断層崖を浸食する小縦谷が見られる。この西を、鉢伏山に源を発する横河川が南流して諏訪湖へ注いでいる。上流9.5kmは東の長地山地と西の高ボッチ山地との間を流れ、横河川の谷を形成している。この西に、鉢伏山(1928.5m)から南の横峯・高ボッチ(1664.9m)に至る山塊が続き、さらに西の、東山から塩尻峠を経て小野峠に至る山地を西山という。これらの山塊は、旧来湖西の人々によって西山と総称され、この西山は塩尻峠を境にして東山山地と勝弦山地に分けられる。

横河川・塚間川の扇状地。山麓の出早神社北部の遷急点で山地をはなれた横河川は、南方諏訪湖に向けて大扇状地を形成し、岡谷市街地の中北部はこの扇状地上に立地している。塩尻峠御野立の東北部にある浅い谷から南南東に流れる小河川が塚間川である。総延長約5kmの短い川ではあるが、岡谷市役所付近か

第II章 岡谷市の概況

ら下浜地籍にかけて扇状地が形成され、横河川の扇状地と複合して岡谷市の中央部の平坦地形が作られる。また、西山山地の山麓線と塚間川の間には、標高820~770 m、幅200~500 mで南北に細長く連なる段丘状の地形が見られ、その南西部は塩嶺病院付近に源を發し南南東流して本町を横切り、岡谷駅の方向に流れて天竜川に合流していた旧大川の谷に切れ、塚間川の右岸にだけ發達している。この段丘は、西山山地の南縁に沿って天竜川流域の丘陵性緩斜面に続き、一方長地山地の崖錐状段丘面に連結しそうで、諏訪湖の汀線変化によって生じたものといわれる。先の二つの扇状地扇端部から湖にかけて湖岸平野がある。湖南の豊田・中洲・茅野方面の広い沖積平野に比べ湖北では扇状地を除いては沖積平野は狭い。

川岸山地。天竜川の西岸高尾山から南部辰野町に至る壮年期の地貌する古世層の山地である。高尾山の南、小野峠以南の山地は1000 m級の中山山地で、北から大洞沢・後田沢・中沢・大沢などに浸食される。

天竜川沿岸低地。天竜川の沿岸は長さ200~300 m、幅の狭い沖積地を形成し、その兩岸の山麓には小さい崖錐や扇状地があって、その裾が天竜川の側浸で段丘状になっている所がある。川岸で一番著明な段丘は駒沢段丘である。この段丘は、峰畑から堂山に至る天竜川左岸の段丘で堆積層の下部には古生層系統の砂礫や、東岸湊山地の安山岩礫があり、上部には軽石質の火山灰が厚く、一部には礫層を含んでいる。この段丘には遺跡が多く、古くから人々の生活基盤となっている。

湊山地。この山地は守屋山から続く山地帯であるが、辰野町と諏訪市を結ぶ有賀峠からの谷をはさんだ三角形の山地で、形態上は単独の火山を構成していない。山稜部には、北西から南東にかけ須ヶ平・池ノ平・傘平等の平坦面が並び、緩い起伏の山稜線をつくり、また西部斜面には辰野方面に向って老年期の谷も見られる。山体を構成する熔岩は天竜川の東岸鮎沢から駒沢を経て辰野町平出に至る山腹にはほとんどころに両輝石安山岩の板状節理の露頭が見られる。この山地の天竜川東岸斜面にはいくつかの浅い谷が造られ、河川の争奪が行なわれて谷中分水嶺のできている所もある。池の平から次山を経て駒沢新田で天竜川に合流していた追鶴沢は、北西部から侵入してきた原の沢にその上流部を切頭されている。

湖西断層崖。諏訪湖の西岸湊山地の北東斜面は比高300~500 mの断層崖である。この断層崖は釜無山断層崖と呼ばれるもので、塩尻峠東麓からここ諏訪湖西岸を経て富士見峡隘部に至り、延長30 kmに及ぶ断層崖である。これらの断層崖は逆断層でできたもので、崖面にはケルンコルと呼ばれる山脚を切る凹地と、ケルンバットといわれる山脚上の小丘とが列状に並んでいる。花岡公園や小坂城址等はケルンバットの一例である。断層崖の基部には小さい沢から崩れ落ちる岩層が堆積して、いくつもの崖錐面ができています。そして、その上に湊地区の集落が列状に連なり、塩嶺累層の熔岩流の割れ目には湧泉がある。

現在の岡谷市の集落は、横河川と塚間川の扇状地と周囲の山麓地帯、それに天竜川兩岸の川岸地区と、諏訪湖西岸の湊地区に列状に形成されている。北部の山麓地帯には下諏訪町の東山田に続き、中屋・中村・横川・今井の諸集落があり、西部の山麓には間下・岡谷の集落、また扇状地の中央には東堀・西堀・小井川・小口の諸集落、その扇端には小尾口・浜があり、川岸地区の天竜川右岸には三沢・新倉が、左岸には橋原・鮎沢・駒沢が、西部湖西には漁村的性格をもつ小坂・花岡が形成されている。中央自動車道は、辰野町から、天竜川左岸段丘上の上端を通過し、橋原地区で鋭角的に東南に方向を変え、諏訪湖西岸の断層崖下を横切り、諏訪市有賀地区へ通じている。

第2節 岡谷市の遺跡

諏訪湖を中心にした諏訪盆地は、旧石器時代から続く古い歴史を秘めた地で、とりわけ縄文期の遺跡の宝庫として著名である。それと共に先学の続出と相まって、長野県下では最も考古学的調査の進んだ地域であることも多くの人々の認めるところである。この諏訪盆地の北西部を占める岡谷市も同様に幾多先学によって遺跡の調査及び報告書の刊行が進み、その結果が戸沢充則氏によって岡谷市史上巻(昭和40年刊)に集大成されている。岡谷市史によれば、岡谷市内140余個所の遺跡を地形的にみて、天竜川沿岸部、諏訪湖西岸部、塩嶺山地とその周辺丘陵部、長地山地と周辺丘陵部、横河川扇状地部に五大別して述べられている。この中には、樋沢・下り林・海戸・扇平・梨久保・後田原・広畑・榎垣外・上向・庄ノ畑・天王垣外・岡屋・橋原・コウモリ塚古墳・スクモ塚古墳等々、学史的に著名なものも多く、標式遺跡となっているものがいくつもある。(図1)

中央道西宮線は、諏訪湖の西岸、小坂・花岡地区を通り、橋原から天竜川東岸の山麓地帯を通過して、上伊那郡辰野町に接続する。この通過地帯は、上記天竜川沿岸部の遺跡、諏訪湖西岸部の遺跡地帯に当る。岡谷市の遺跡分布は第1図に示してあるが、このうち、中央道が通過する遺跡は次のように調査された。

- | | |
|------------------|---|
| 昭和49年度－岡谷市その1地区－ | 六地在家(1)、追鶴沢(2)、原沢(9)、昌福寺裏山(10) |
| 昭和49年度－岡谷市その2地区－ | 満田台(満田)(50)、小坂城址(中世城址)、御頭屋敷(55) |
| 昭和50年度－岡谷市その3地区－ | 新井北(64)、新井南(65)、馬捨場(性格不明で抹消) |
| 昭和52年度－岡谷市その4地区－ | 志平(志平元屋敷)(32)、経塚(経塚原)(36)、洩矢(37)、船霊社(小田井遺跡群)(47)、小手場沢(48) |
| 昭和53年度－岡谷市その4地区－ | 船霊社(47)の前年度未掘部分の調査 |

これら15遺跡は先の岡谷市史の地域区分に従えば、天竜川沿岸(右岸)部の遺跡として、六地在家、追鶴沢、原沢、昌福寺裏山、志平、経塚、洩矢の7遺跡、諏訪湖西岸部のそれとして御頭屋敷、船霊社、小手場沢、満田台、新井北、新井南、(馬捨場)の6(7)遺跡、両者の中間として小坂城址が位置する関係にある。勿論、これら既調査の遺跡以外、図1でわかるごとく、附近にはまだ未調査遺跡が点々と連続している。

岡谷市の遺跡数は表1に示してあるが、表にみられる如く、遺跡数は、縄文・平安・弥生の順となっていて、縄文時代の遺跡が圧倒的多数を占めている。しかし、諏訪湖周辺の他地域と比較すると、各時代別の遺跡数には、あまり差がみられない。特に、弥生時代の遺跡の多いことは、他地域の比ではない。なかでも、54度調査が行なわれた橋原遺跡では、弥生時代後期の大集落が確認され、天王垣外、海戸遺跡と相まって、諏訪地方の弥生文化を知るために欠かすことのできない遺跡となっている。このことはこの地域が中部高地の縄文文化の範疇にありながらも、そのみにとどまらず後の弥生・奈良・平安時代以後まで新しい文化を受け入れ発展させることができる要素・地理的条件に恵まれていたことを示している。

諏訪湖を源とする天竜川は、川岸地区を通り、やがて伊那谷へ流れている。山深い諏訪地方にとって、伊那谷をのぼってきた西からの文化を受け入れるためには、天竜川は重要な役割をはたしてきたのである。この川岸地区は、三沢区の一部を除き、天竜川のすぐ近くまで、山が迫り俗にうなぎの寝床と言われる程に、人が住むにはせまい土地である。このため背後の山から、天竜川へ流入する沢が小さな扇状地崖錐

第II章 岡谷市の概況

地形を多く形成している。人々の生活は、古来よりこのような地形の上に主として営まれてきた。その代

表1 岡谷市内の時代別遺跡数一覧
(昭和54年3月現在)

時 代		遺 跡 数	合 計
縄 文 時 代	草 創 期	2	160
	早 期	19	
	前 期	36	
	中 期	72	
	後 期	24	
	晩 期	7	
弥 生 時 代	前 期	0	48
	中 期	14	
	後 期	34	
奈 良 平 安 時 代	土 師 器	50	113
	須 恵 器	43	
	灰 釉 陶 器	20	

表的なものとして、後田原、長塚、広畑、橋原、洩矢の各遺跡がある。しかし、このように長期間にわたり生活の営まれた遺跡と異なり、背後の山間地に点在する小規模な遺跡がいくつかみられる。これらは生活期間も短く、そのほとんどが土器1～2形式位のものである。この高地性の遺跡は縄文時代のものが多いが、中には沖ノ沢遺跡のように、平安期に及ぶものもある。どのような社会的条件のもとに、このような遺跡が成立したかは類似資料の発見と今後の研究に期待したいが、今後の開発には充分注意し、これら遺跡の集大成を行なう必要があるであろう。

諏訪湖西岸部は、山腹が湖岸まで迫るといふ平坦地に恵まれない地域ではあるが、小坂地区には、ややひらけた地形がみられる。そのために、この地域最大の扇状地がみられ、この扇状地を中心に大小の遺跡が集中しており、小坂地区とその分布を2分している。平坦地の少ないこの地域では、遺跡はわずかな平坦地を求めて集中している。このような地理的悪条件にもかかわらず、7基の古墳がこの地にみられる。特に蕨手刀を出土した大林古墳、小形獣文仿製鏡と玉類を出土

した小坂糖塚古墳は特異な存在といわなければならない。

これらの古墳、遺跡を成立させた社会の生産構造がどんなものであったのかは、大変興味深いものである。前面を湖に接したせまいこの土地では、漁業生産を除いては、その成立は考えられないであろう。事実、これを裏付けるようにこれらの多くの原始・古代の遺跡からは、漁撈に関する遺物が多数発見されている。

中央道はこのように、土地のせまい湊、川岸両地区を通るのであるが、その通過地点は、せまいながらもわずかな平坦地と背後の山間部との接点に当る。この地区では、従来このような立地上の遺跡の調査は殆ど行なわれたことがなく、遺跡のあり方を知るうえにも、ある程度の成果を上げることができたのではないだろうか。今後の研究の一助となれば幸いである。

表2 岡谷市遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代			奈良平安			中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		
1	六地在家	川岸駒沢新田境久保					○						○	○			
2	追鶴沢	川岸駒沢新田追鶴沢					○										
3	太ノ田I	川岸駒沢太ノ田				○	○										
4	横畝	川岸駒沢新田横畝											○				
5	地替	川岸駒沢新田地替											○				
6	高天原	川岸駒沢新田下地替					○						○				
7	中ノ沢	川岸新倉中ノ沢				○	○										
8	沢入	湊沢入					○						○				
9	原沢	川岸駒沢原沢					○						○				
10	昌福寺裏山	川岸駒沢内林				○	○						○	○			
11	堂山	川岸駒沢堂山					○										
12	峯畑	川岸駒沢峯畑					○	○					○	○	○		
13	昆沙門堂下	川岸新倉夏明						○									
14	後田原	川岸新倉夏明			○	○	○	○					○	○	○		
15	新倉長塚	川岸新倉塩坪													○		
16	長塚	川岸新倉塩坪					○	○	○				○	○			
17	鮎沢大塚	川岸鮎沢					○						○	○	○	○	
18	松加保	川岸鮎沢松加保					○						○				
19	上垣外	川岸新倉丸山			○		○						○				
20	小洞日影	川岸新倉丸山												○	○		
21	マミノオ	川岸三沢高尾山麓					○										
22	妙王池	川岸三沢高尾山麓												○	○		
23	広畑	川岸三沢広畑高尾山麓				○	○	○					○				
24	西除入	川岸三沢高尾山麓				○	○										
25	鬼戸	川岸三沢鬼戸												○	○		窯址 (須恵・埴輪)
26	塚の山古墳	川岸三沢塚の山												○			馬具
27	一ノ沢	岡谷一ノ沢															打製石斧 黒曜石
28	岡屋	岡谷牛平および除入			○	○	○						○	○			
29	宮の上	川岸三沢宮ノ上					○										
30	熊野神社境内	川岸三沢熊野神社境内						○									
31	荒神塚古墳	川岸三沢垣外															金銅環・管玉 勾玉・小玉・太刀 馬具・鉄鏃
32	志平(志平元屋敷)	川岸志平				○	○	○	○				○	○	○	○	
33	追平	川岸橋原志平山神平				○	○										
34	沖ノ沢	川岸橋原志平追平				○	○						○				
35	栃久保	川岸橋原志平栃久保				○											
36	経塚(経塚原)	川岸橋原志平経塚原				○	○	○	○				○	○	○		
37	洩矢	川岸橋原			○	○	○	○					○	○	○	○	
38	橋原	川岸橋原					○	○				○	○	○	○	○	
39	須ヶ平(又五郎)	湊花岡渡戸				○							○				
40	須ヶ平糠塚古墳	湊花岡渡戸															
41	城日向	湊花岡城日向													○	○	

第II章 岡谷市の概況

No.	遺 跡 名	所 在 地	旧石器	縄 文 時 代						弥生時代			奈良平安			中世	備 考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		
42	白浪神社古墳	湊花岡八重場沢															鉄鏃、直刀
43	八重場沢	湊花岡八重場沢				○											
44	霊 湊 山	湊花岡霊湊山一带															
45	久保寺古墳	湊花岡霊湊山上															直刀
46	大塚古墳	湊花岡小田井中小路															直刀
47	船霊社(小田井)	湊花岡小田井			○	○					○	○	○	○	○		
48	小手場沢	湊花岡小田井小手場沢		○				○			○	○	○				
49	満 田 沖	湊花岡小田井湖中															石剣
50	満 田 台	湊小坂追平				○	○	○				○	○			○	
51	神 場 木	湊小坂神場木										○	○				
52	小坂糠塚古墳	湊小坂糠塚御社宮司社境内											○				六獣鏡 勾玉、管玉
53	日影古墳	湊小坂日影											○				直刀
54	観 音 山	湊小坂観音山				○											
55	御頭屋敷	湊小坂山ノ神				○						○	○	○			
56	矢 垂	湊小坂矢垂			○	?	○					○	○				
57	小坂上垣外	湊小坂上垣外				○											
58	烏帽子石古墳	湊小坂立道															勾玉、管玉
59	円道久保	湊小坂円道久保												○			
60	大林古墳	湊小坂大林															蕨手刀
61	花 上 寺	湊小坂花上寺					○										
62	安 沢	湊小坂安沢				○											
63	平 山	湊小坂平山				○						○	○	○			
64	新 井 北	湊小坂新道合・竹原・やげん山		○		○						○	○	○			
65	新 井 南	湊小坂新井・日向畑		○	○	○	○	○				○	○	○	○		
66	狐 穴	湊小坂狐穴			○	○						○		○			
67	樋 沢	岡谷樋沢・塩尻市筑摩地境界		○													
68	樋沢岩垂	岡谷樋沢					○										
69	樋沢清水	岡谷樋沢		○													
70	樋沢松田	岡谷樋沢															石斧
71	大 久 保	岡谷成田町												○			石包丁
72	若宮古墳	岡谷本町十五社境内											○	○			
73	横 道	岡谷中央町一丁目									○						
74	岡谷丸山	岡谷中央町二丁目・天竜町二丁目		○	○	○	○	○			○	○	○	○	○		
75	海 戸	岡谷天竜町二丁目・三丁目		○	○	○	○	○			○	○	○	○	○		
76	清水権現	岡谷田中町一丁目										○					
77	杏林製薬工場内	岡谷湖畔一丁目									○						
78	釜 口	岡谷天竜町三丁目				○											地点不明
79	下 浜	岡谷天竜町三丁目															磨製石斧 地点不明
80	弁 天 島	岡谷湖畔一丁目湖中															石剣
81	天王垣外	岡谷中央町二～三丁目									○						勾玉
82	新屋敷長塚	岡谷本町四丁目				○						○					
83	間下丸山	岡谷山下町二丁目		○	○	○	○					○	○	○		○	

第2節 岡谷市の遺跡

No.	遺 跡 名	所 在 地	旧 石 器	縄 文 時 代						弥生時代			奈良平安			中 世	備 考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		
84	小 部 沢	岡谷本町三丁目					○										
85	月見ヶ丘	岡谷山手町一丁目					○										
86	滝ノ沢	岡谷山手町一丁目															打製石斧 石 鏃
87	下り林	岡谷山手町二丁目			○	○	○										
88	中谷原頭	岡谷中谷原頭															乳棒状磨製石斧 地点不明
89	立正閣上	岡谷山手町二丁目			○												
90	ウツギ	岡谷山下町二丁目				○	○										
91	化 木	岡谷山下町二丁目				○	○										
92	間下山の神	岡谷山下町二丁目											○				
93	堤 上	岡谷神明町一丁目				○											
94	市営球場南	岡谷神明町一丁目				○	○						○		○		
95	西 林	岡谷神明町一丁目															黒曜石
96	神 明 町	岡谷神明町一丁目				○											
97	間下堂山	岡谷神明町一丁目					○										
98	牛 平	岡谷塩嶺病院敷地内			○		○						○				
99	今井十五社境内	岡谷神明町三丁目															石棒
100	柳 海 途	岡谷今井柳海途					○										
101	中 島	岡谷神明町三丁目					○					○					
102	深 沢	岡谷今井深沢															
103	膳 棚	岡谷今井膳棚				○	○										
104	今井丸山古墳	岡谷今井丸山															直刀
105	唐松林古墳	岡谷今井											○				
106	タワラコロビ古墳	岡谷今井												○			
107	長者蔵古墳	岡谷今井上ノ原															
108	大 日 向	岡谷今井							○				○	○			
109	上 向	岡谷今井上ノ原			○	○	○	○					○	○			
110	地 獄 沢	岡谷今井					○					○	○				
111	地獄沢古墳	岡谷今井													○		
112	今井山ノ神	岡谷今井					○										
113	扇 平	長地横川				○	○						○	○			
114	扇平古墳	長地横川															
115	長 久 保	長地横川	○														
116	山の神古墳	長地横川															
117	唐櫃石古墳	長地横川											○	○	○		
118	姥懐古墳	長地横川											○	○	○		直刀
119	上ノ原	長地横川			○	○	○										
120	上 屋 敷	長地横川			○		○										
121	丸 山 辻	長地横川															珠状耳飾 地点不明
122	塚屋古墳	長地中村															
123	梨 久 保	長地中村	○		○	○	○	○			○		○	○	○	○	
124	火燈古墳	長地中村															
125	清 水 田	長地中村				○	○										

第II章 岡谷市の概況

No.	遺 跡 名	所 在 地	旧石器	縄 文 時 代						弥生時代			奈良平安			中世	備 考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		
126	コウモリ塚古墳	長地中屋															馬具
127	古塚古墳	長地中屋														○	
128	目 切	長地中屋				○											
129	干 草 原	長地中屋山中			○	○						○	○	○			
130	常現寺長久保	長地中村常現寺沢奥															打製石斧
131	豊太郎垣外	長地横川															石鏃
132	権 現 堂	長地東堀				○											
133	片 間 町	長地東堀				○						○	○	○			
134	榎 垣 外	長地中屋	○	○		○	○	○			○	○	○	○	○		
135	金 山 東	長地東堀										○	○	○			
136	スクモ塚古墳	長地中屋										○	○				直刀、馬具、勾玉
137	東町田中	長地東堀										○					
138	尼 堂	長地東堀															打製石斧 石 鏃
139	阿原神田・清水池	岡谷市堀ノ内一丁目				○						○	○				
140	清 水 池	岡谷市堀ノ内一丁目										○					
141	堀 ノ 内	岡谷市堀ノ内二丁目					○										
142	土 器 免	岡谷市堀ノ内二丁目									○	○					
143	紺屋垣外	岡谷市東銀座一丁目				○						○					
144	弥惣垣外	岡谷市大栄町二丁目									○	○					
145	庄 ノ 畑	岡谷市銀座二丁目				○	○	○	○		○	○					
146	太ノ田II	川岸駒沢西山															黒曜石
147	桑 木 畑	川岸駒沢西山															黒曜石
148	梨 平	湊			○							○	○				
149	唐 傘 平	湊															石鏃
150	能 登 舟	川岸新倉				○						○	○	○			
151	中 島	川岸三沢				○	○					○					
152	出 頭	川岸三沢															
153	出 の 洞	岡谷市山手町				○											
154	禪 海 塚	岡谷市山下町					○	○									
155	郷 田	岡谷市郷田														○	
156	横 道 上	小井川															
157	間下権現沢	小井川															
158	長 原	今井															
159	今井大洞	今井															
160	横河山おおだくみ作業道I～II	横河山				○	○	○									地図外
161	常現寺沢II	長地常現寺				○											
162	大 曲	岡谷市大曲				○											
163	間下化木	岡谷市間下					○										
164	出 の 洞	岡谷市間下					○					○					
165	峯 堂	岡谷市川岸三沢										○					
166	下ノ屋敷	岡谷市川岸三沢															
167	中 尾	岡谷市川岸三沢					○										

第2節 岡谷市の遺跡

No.	遺 跡 名	所 在 地	旧 石 器	縄 文 時 代						弥生時代			奈良平安			中 世	備 考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		
168	西垣外	岡谷市川岸新倉										○	○	○			
169	神明平	岡谷市川岸新倉				○						○					
170	横川山樽沢	岡谷市横川山樽沢			○												地図外



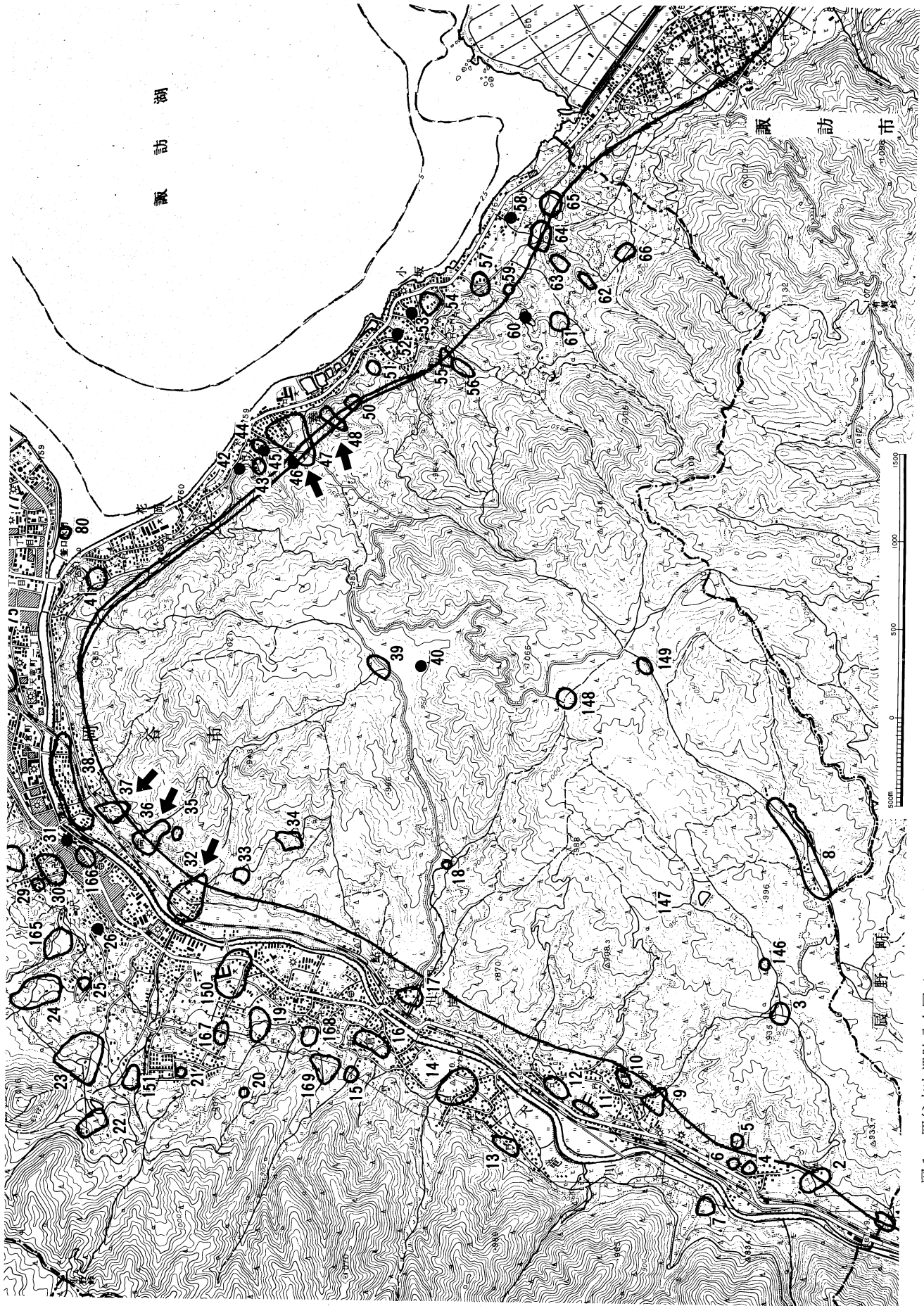


図1 岡谷市内遺跡分布図 (1 : 30,000) (●印本報告収録遺跡)

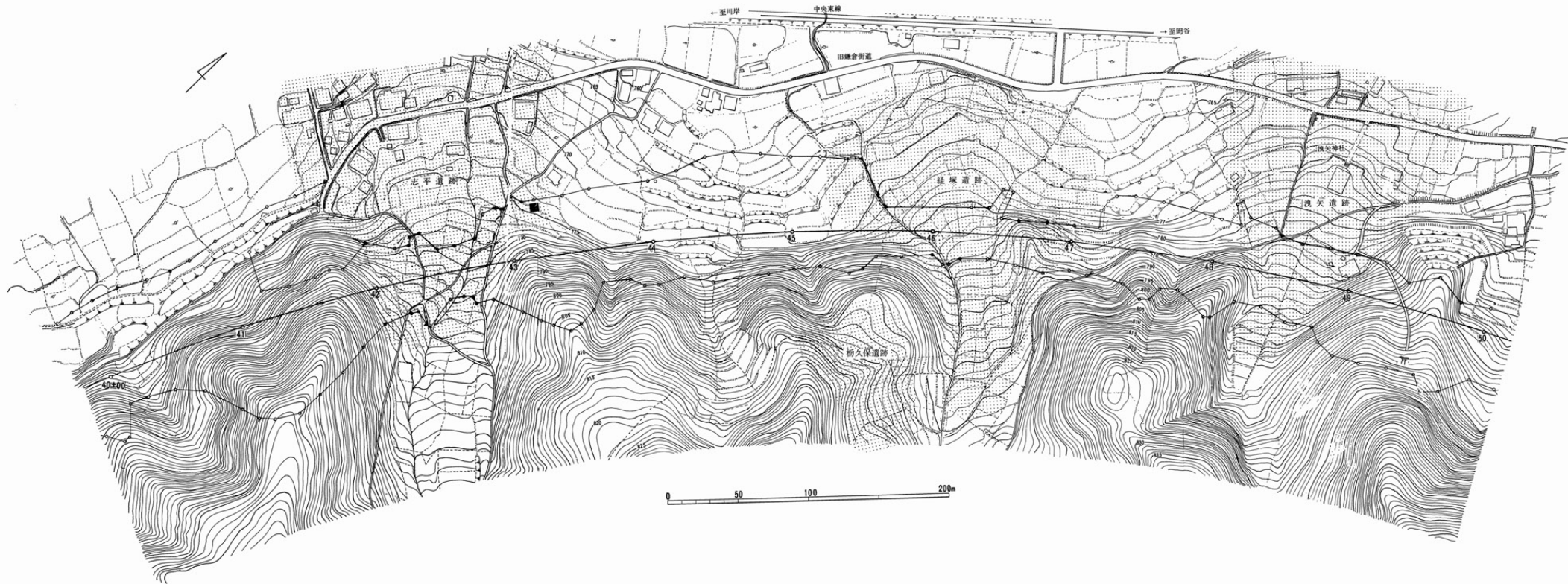


图2 志平、経麻、流矢遺跡付近地形図 (1:2,000)

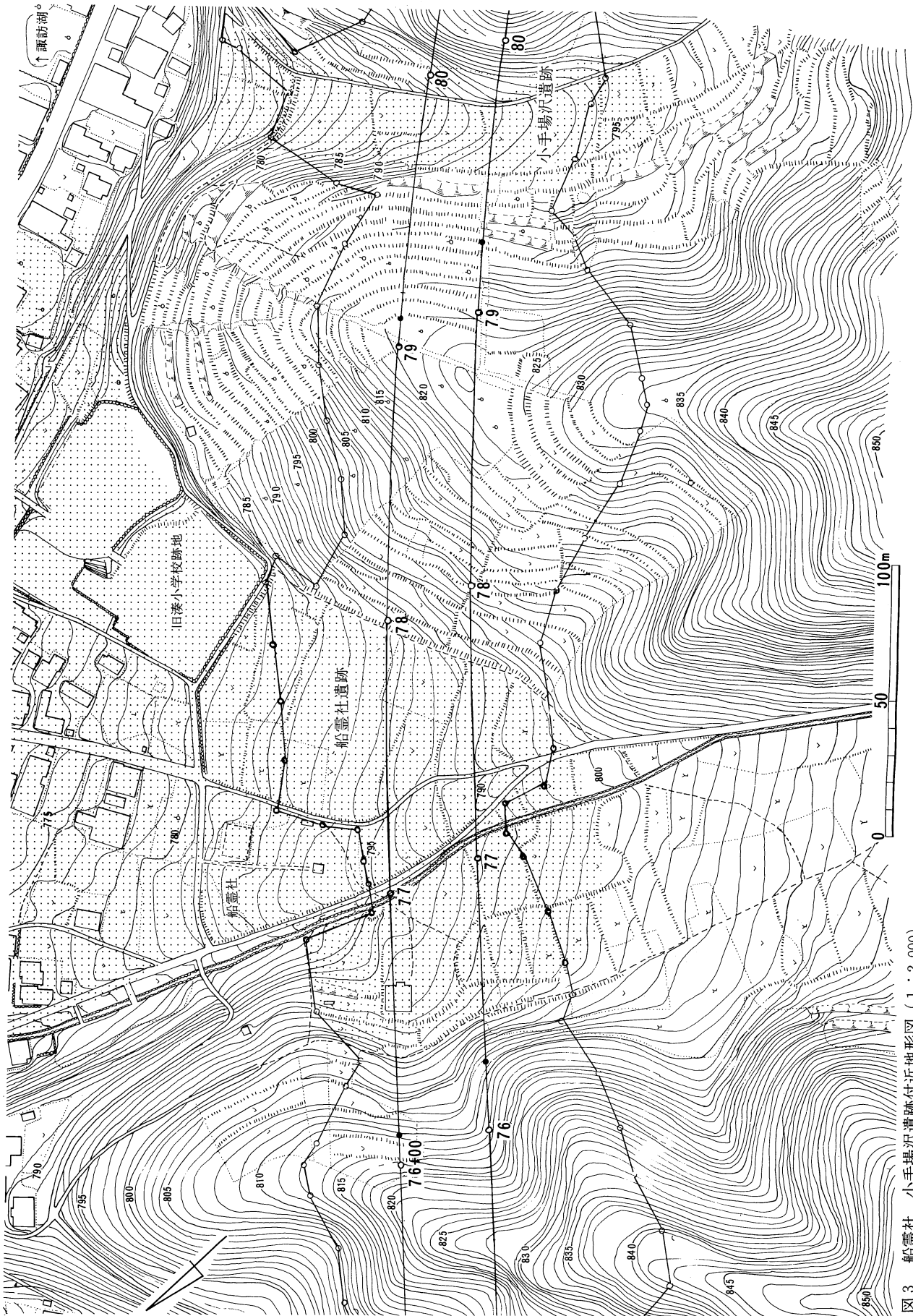


図3 船靈社、小手場沢遺跡付近地形図 (1:2,000)

第三章 遺物の分類

第1節 縄文時代の石器

中央道用地内における発掘調査で得た石器の形態分類については本調査団内部でそのつど検討を加えてきた。その最初は千鹿頭社遺跡であり、以後、十二ノ后遺跡、大石遺跡、判の木山東遺跡等でさらに詳細に検討が加えられてきた。もとより整理作業の時間的制約もあり、製作技術・機能までも含んではおらず形態が中心となり十分な内容とはいえないが、遺跡内、あるいは遺跡群内での石器組成のあり方等、全体像を知る上では必要なことであろう。

本報文中で報告されている5遺跡は、遺跡の規模、時代を異にしてはいるが、諏訪湖南岸から天竜川最上部に形成された小扇状地上に立地する遺跡群としてとらえることができ、その中で石器形態のあり方組成等を見る上で参考となる遺跡群であろう。表3に見られるよう遺跡により、石器器種別数にかなりの差が見られるが、ここでは、比較的数量が多い、打製石斧、横刃型石器、剥片・石核・原石の一部あるいは各辺に使用痕と思われる、刃つぶれ、刃こぼれ状の痕跡のあるものの三器種に限り形態分類を試みた。石鏃については十二ノ后遺跡でくわしくふれられているので、十二ノ后分類を基にし、各遺跡毎にふれるのみとした。

使用痕ある剥片・石核・原石については、検出された黒曜石に見られるものを中心とし、観察された結果から分類した。さほど注目されていたものではないが、黒曜石の産地をひかえている土地柄だけにその数も多く、他器種との共存のあり方等、今後注意していかなければならないものと思われる、基礎資料を示すのみかも知れないが、あえて分類を試みた。経塚遺跡で、計測値その他から報告してある。今後、この種の資料が蓄積され、性格の解明ができることを期待する。

表3 遺跡別・器種別石器個体数一覧

遺跡名	器種	器種別石器個体数														その他
		石鏃	石匙	石錐	スクレイパー	打製石斧	横刃型石器	磨製石斧	乳棒状石斧	凹石	磨石	石皿	小形打製石斧	ピエスエスキュー	使用痕あるもの	
志平遺跡	中期 初期 中期	1	0	1	0	11	1	4	0	3	1	0	0	1	7	石剣2、抉入石器2 他49
経塚遺跡	前 晩 期	20	0	6	9	60	25	4	1	4	0	4	2	206	石剣2、抉入石器2 他49	
洩矢遺跡	前 中 期	21	1	4	13	23	8	6	0	9	4	2	0	9	144	6
船霊社遺跡	中期 後 晩 期	66	3	6	3	154	50	4	21	16 3	8	4	18	54	398	石槍状2 石錘1 他12
小手場沢遺跡	中 後 晩 期	3	0	0	0	6	1		0	0	0	0	0	0	4	
合計		111	4	17	25	254	85	17	22	28 7	13	6	22	66	759	

- 註1 長野県中央埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——諏訪市その3——昭和49年度
 2 同 ——諏訪市その4——昭和50年度
 3 同 ——茅野市・原村その1——昭和50年度
 4 同 ——茅野市・原村その2——昭和51年度

1 打製石斧(図4)

十二ノ后・大石・判の木山東各遺跡で形態分類が行なわれているので、分類基準についてははくしくはふれない。分類の基準となっているものは、(1)刃部形態、(2)側縁形態の平面形である。(1)については、その平面形態をA—直刃、B—円刃、C—斜刃の三種に分け、(2)については、I—刃部に最大巾をもち頭部に行くに従いその巾をせまくする。II—胴部に最大巾をもつ胴ふくれ状の側縁を呈する。III—側縁の両辺が平行を呈す。IV—胴部に抉りがあるもので、上下が対称形をなすものである。従来よく用いられている、撥形、短冊形、分銅形が基準となっており、Iが撥形、II・IIIが短冊形、IV分銅形となる。A～C、I～IVの組合せにより12種に分類できる。

使用されている石材については、赤石山系から産出される石材が多用されている点は5遺跡で共通しているが、縄文晩期が中心となる経塚遺跡では、石材の様相が変わっており、また、IV形態の分銅形の打製石斧が検出されているのは経塚遺跡だけと、時期的に限定される形態としてとらえることができる可能性をもっている。側縁部に抉りのある打製石斧

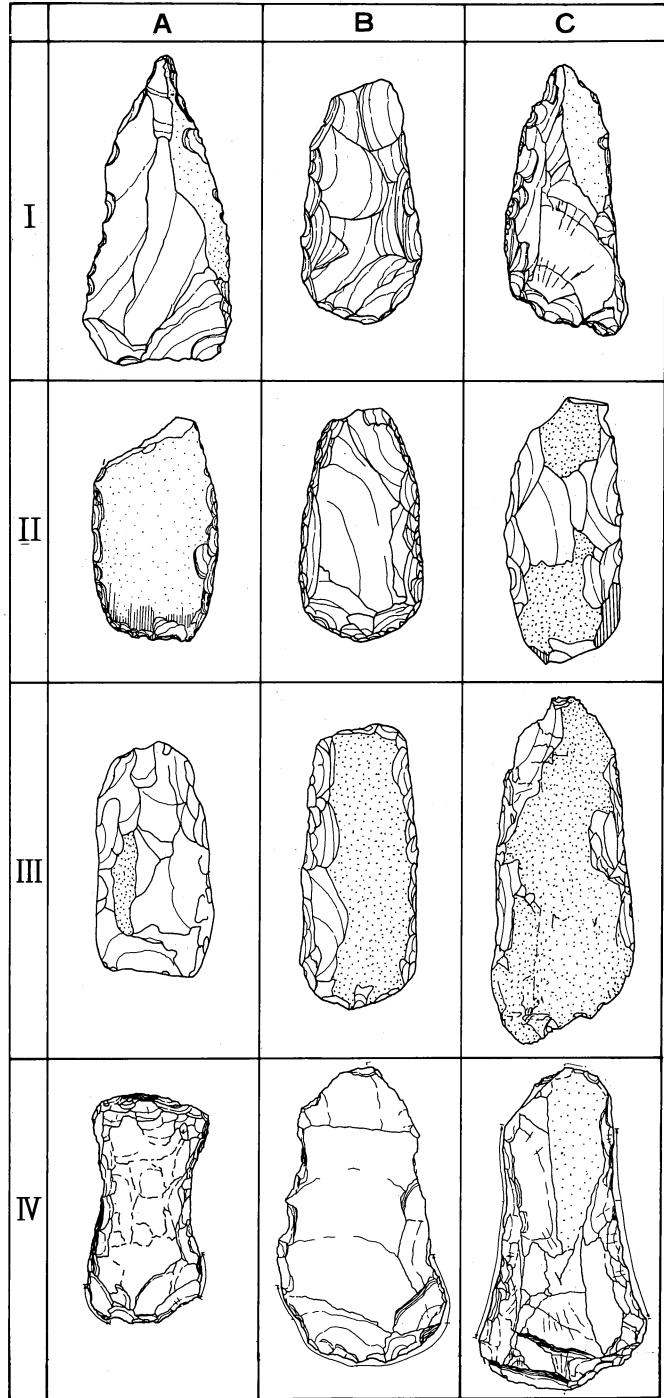


図4 打製石斧形態分類図

は数量的にはわずかではあるが検出されている。抉りの位置、深さ等からIV形態に入れないものは、I～III形態のバリエーションとしてとらえ、抉りあるものでは形態分類をしなかったが、分類は可能である。

表4 打製石斧遺跡別・形態別個体数一覧

形態	遺跡名												
	IA	IB	IC	IIA	IIB	IIC	IIIA	IIIB	IIIC	IV A	IV B	IV C	その他
志平遺跡	2												
経塚遺跡	2	4	4	2	1	2	5	2		1	4	3	I-3、II-5、III-14 IV-3、A-1、B-1、不明3
洩矢遺跡			2		6	3	1	2	1				III-1、B-5、C-1 不明-1
船霊社遺跡	7	7	14	4	17	15	9	14	7				I-15、II-13、III-18 C-2、不明-12
小手場沢遺跡								2	2				B-1

2 横刃型石器 (図5)

打製石斧同
様、分類の基準
は平面形態に
おき、刃部を、
A—円刃、B—
直刃、C—
内湾刃とし、
刃部に対する
辺—背—の形
態でI—IV種
に分類した。
Iは直な背を
もつもの、II
はゆるやかに
外湾する背を

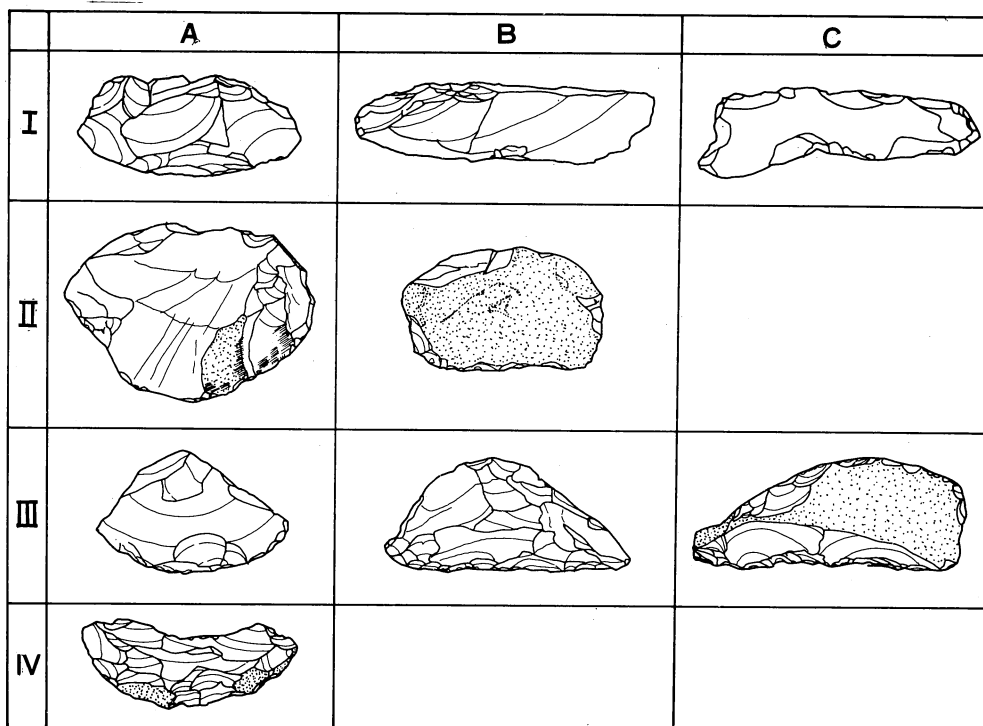


図5 横刃型石器形態分類図

もつもの、IIIはIIよりも外湾度が高い三角形状の背をもつもの、IVは内湾する背をもつものである。A—C、I—IVの組合せにより12種の分類ができるが、IIC、IVB、IVCの三形態は、本書で報告している5遺跡から出土していない。また、IVA形態は洩矢遺跡から2点のみの出土であり、各形態とも、5遺跡ではかなりのバラつきが見られる。

表5 横刃型石器遺跡別・形態別個体数一覧

	IA	IB	IC	IIA	IIB	IIC	IIIA	IIIB	IIIC	IVA	IVB	IVC	その他
志平遺跡	1												
経塚遺跡	5	5	2		9		2						I-2
洩矢遺跡		2		2	2					2			
船霊社遺跡	6	8	12	4	7		6	4	3				
小手場沢遺跡	1												

3 使用痕のある剥片・石核・原石 (図6)

使用痕とは、この項で説明する石器または素材に残された諸痕跡を指す。これらはいずれも定形石器の表面の肉眼もしくは顕微鏡観察によって指摘できるもので、諸痕跡のうち使用痕である可能性があるもの8種類を指して使用痕と呼ぶ。これ以外にも今後別種の使用痕が指摘される可能性はある。使用痕の成因については、それが真に使用の結果であるか否かを含め一層の検討を要するし、自然破砕や発掘中から発掘後のアクシデントの痕跡との区別についても考慮しなくてはならない。定形石器以外での観察は不十分であるが、定形石器以外にも諸々の使用痕が残されているものとする。剥片・石核・原石は、そのまま2次加工を加えれば定形石器を形成し得るわけで、石器の素材と言える。すなわち、原材に1次加工を加

えたものが剥片・石核であり、1次加工がなされないものが原石である。ここでは、素材全てを扱うのではなく、石鏃・スクレイパー・ドリル等比較的小形・薄手で鋭利な刃部を必要とする石器製作に好適な、黒曜石・チャート・硬質安山岩等の材質の素材に限定する。そうした素材のうち、2次加工が加えられず、使用痕のあるものを分類の対象とする。分類基準は、素材（Ⅰ～Ⅳ）、使用痕の種類（A～I）、使用痕部の形態（a～c）の3種の組み合わせである。

① 素材

Ⅰ 剥片、Ⅱ 石核、Ⅲ 原石、Ⅳ その他、とする。

② 使用痕の種類

- A 使用痕が認められないものである。
- B 刃こぼれ……縁辺の片面のみに見られる非連続的な細かい剥離を指す。
- C 刃つぶれ……縁辺の両面に見られる非連続的な細かい剥離を指す。
- D 線状痕……表面に見られる長めの細い溝状痕跡を指す。
- E 擦痕……表面に見られる短めの太い溝状痕跡を指す。
- F 点状痕……表面に見られる点状、或は円状を呈する加撃痕と思われるものを指す。
- G つぶれ……縁辺・稜線・リングの凸部等に見られる、細かい刃つぶれや点状痕の集中を指す。
- H 磨耗……縁辺・稜線・リングの凸部等に見られる、ドリル様使用痕を指す。
- I 磨研痕……表面に見られる鈍い光沢を指す。

③ 使用痕部の形態

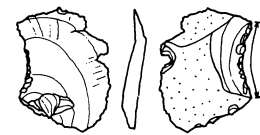
- a 使用痕部（特に刃こぼれ、刃つぶれ）が外湾するものを指す。
- b 同様に内湾するものを指す。
- c 同様に直線的なものを指す。

④ 分類の記述方法

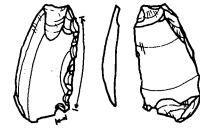
素材を記し、次に（ ）を付しその中に使用痕の種類と使用痕部の形態を連続して記述する。使用痕が2ヶ所以上認められるものは、（ ）内に付加して記入する。例えばⅠ（Ba）は、外湾する刃こぼれを1ヶ所有する剥片を意味し、Ⅲ（Bc+2Cb）は、直な刃こぼれ1ヶ所と内湾する刃つぶれ2ヶ所をもつ原石を意味する。

以上の分類は、諏訪市十二ノ后遺跡での分類に基づき、調査団全体で検討したものである。

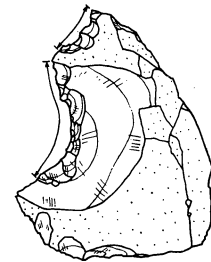
（註） 使用痕の種類については「石器の用途と使用痕」S・A・セミヨーフ著 田中琢訳（考古学研究14巻4号）を参考にした。それぞれの使用痕については十二ノ后遺跡に例示してあるので参照されたい。



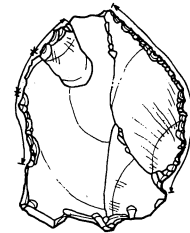
1. ICb



2. I (Bc+Bc)



3. III (Bb+Bb)



4. I (Ba+Ba)

図6 使用痕部の形態分類図

第2節 平安時代の土器

本書で報告されている志平、経塚、洩矢、船霊社、小手場沢の5遺跡は、諏訪湖西岸から天竜川最上流部左岸にかけて存在する小扇状地上に立地し、いずれの遺跡からも平安時代にかかる、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器が出土していることから、これらを一括して分類することにした。該当する時期の土器分類はすでに、十二ノ后遺跡で行なわれており、その分類は、諏訪湖盆を対象としたものである上に、本書で報告される5遺跡とは地続きの諏訪湖南岸に立地していることも併せ、十二ノ后遺跡で行なわれた器種分類を踏襲した。詳しい分類基準は同遺跡の報告を参照されたい。

(1)

1 土師器、黒色土器、須恵器

供膳形態の土器では、十二ノ后遺跡での分類に従い、杯をA～E、蓋をA～C'、皿、椀、鉢に分類し、さらに法量の相違により、I～IIIに細分してある。Iは口径16cm以上20cm未満、IIは12cm以上16cm未満、IIIは12cm未満のものを指す。土師器杯Eは口径13cm以上をI、11cm以上13cm未満をII、11cm未満をIIIとしてある。また、底部調整でヘラ切りのを1、糸切りを2、ヘラ削りを3、ヘラ磨きを4、ナデを5とし、それらがロクロ回転を利用した場合をa、手持ちの場合をbとしてそれぞれ表現してある。

煮沸形態の土器では甕・羽釜が出土している。同じく十二ノ后分類に従い、最も出土量の多い土師器甕をA～F、小形甕をA～Dに分類してある。小形甕C、Dは十二ノ后分類に見られない器種なのでつけ加えた。口径の法量により、口径16cm以上20cm未満をI、12cm以上16cm未満をII、12cm未満をIIIと細分してある。羽釜は洩矢遺跡のみから出土した。口径14cmから30cmまでと大きさに差があり、口縁部もやや内傾するものと、ほぼ垂直に立ち上るものがあるが一括してとらえた。くわしくは洩矢遺跡の項を参照されたい。

2 灰釉陶器 (図7)

灰釉陶器についても器形と法量によって分類を行なった。土師器・黒色土器・須恵器に共通する器種も存在するが、ここでは一般的分類に従い、統一的には扱っていない。

器種には椀・皿・壺がある。椀は内湾気味に素直に立ち上がるもので、径高指数は44～28である。1種類のみで椀Aとする。皿は内湾気味のものと単純に開くものがあるが、径高指数は25～17である。素直に立ち上がるものを皿A、口縁部下内面に段をつけるものを皿Bとする。壺は器形全体が扱えられるものは1点のみである。一括してAとする。

供膳形態の器種については、他種にあわせて法量による分類を行なった。口径20～16cmをI、16～12cmをII、12cm以下をIIIとした。壺については出土量が少ないため分類してない。

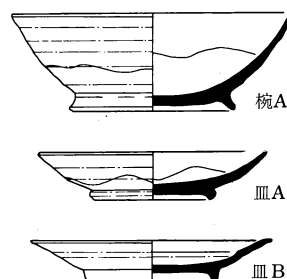


図7 灰釉陶器分類図

註1 長野県教委「中央道報告書-諏訪その4-昭和50年度」

第IV章 調査遺跡

第1節 志平(志平元屋敷)遺跡(SSBA)

1. 位置(Ⅱ-図1・2, (P18~23)、図版1)

岡谷市川岸上手ノ木9869の1番地にある。守屋山系に源をもつ志平沢が現天竜川の手前200~300m附近で小さな扇状地を作るが、本遺跡はその扇頂部附近から谷間に入る一帯、標高約785~775m、天竜川との比高約15m前後に位置する。北西面に緩やかに広がる、この小規模(250~300m)な扇状地は、今回の調査地点が最高部にあたり、むしろ中心地域は扇中央から扇端にかけての現天竜川に近い部分の志平部落内に展開するらしい。

今回の調査地点は、中央自動車道が橋梁で通過する部分である点からもわかる如く、両側に山が迫り、平坦面は幅約100mと狭く、通常の遺跡立地条件からみて余り期待はできなかったが、縄文~弥生時代の遺構が検出でき、同種地形の多い附近一帯の遺跡の在り方究明に一視点を与えてくれたといえる。

本遺跡の前面で天竜川は大きく内湾するように蛇行するが、その内側の山地と天竜川との間は比較的広い水田地帯であり、弥生時代以降の利用も充分考慮される地域であり、現に構造改善事業時に遺物出土の報もあるが、確認されてはいない。なお、この水田地帯を涵養するだけでなく、部落共有の湧水が、扇端に5ヶ処あり、わけても2ヶ処は現在なお豊富な水量がある。

また、こうした天竜川に注ぐ小さな沢の形成する小扇状地は多いが、本報告書記載の経塚遺跡は、約300m、そこから100m上流(東側)に洩矢遺跡がそれぞれ立地している。現況はすべて畑地であった。

2. 発掘区の設定と調査の経過(図1、図版1)

1) 発掘区の設定(図1)

扇頂部にあたる部分の用地内の畑地は、遺跡の広がり追究の上からも必要と考え、全域を方眼で区画するグリット方式をとった。まず、東西方向の基準線は、公団用道路センターSTA45+20~同45+60を結ぶ直線とし、東西のそれはSTA45+40の点で直角に振って求めた。そしてSTA45+0を起点として45+50までをA地区、45+50から45+100までをB地区としたが、後述するごとく、発掘終了直前、用地北東隅の畑から土器出土の報に接し、グリット法による区画外だったので、急拠トレンチ法による調査を行い一応例外として0地区としたところもある。各地区のグリットの名称は調査団の基準に従った。

2) 発掘調査の経過(図1)

当初、岡谷地区は本遺跡から開始される予定であったが、地権者との交渉がまとまらず、急拠洩矢遺跡へ変更したため、調査は6月6日(月)からとなった。グリット設定の終了後、耕作物等の関係上用地東側の

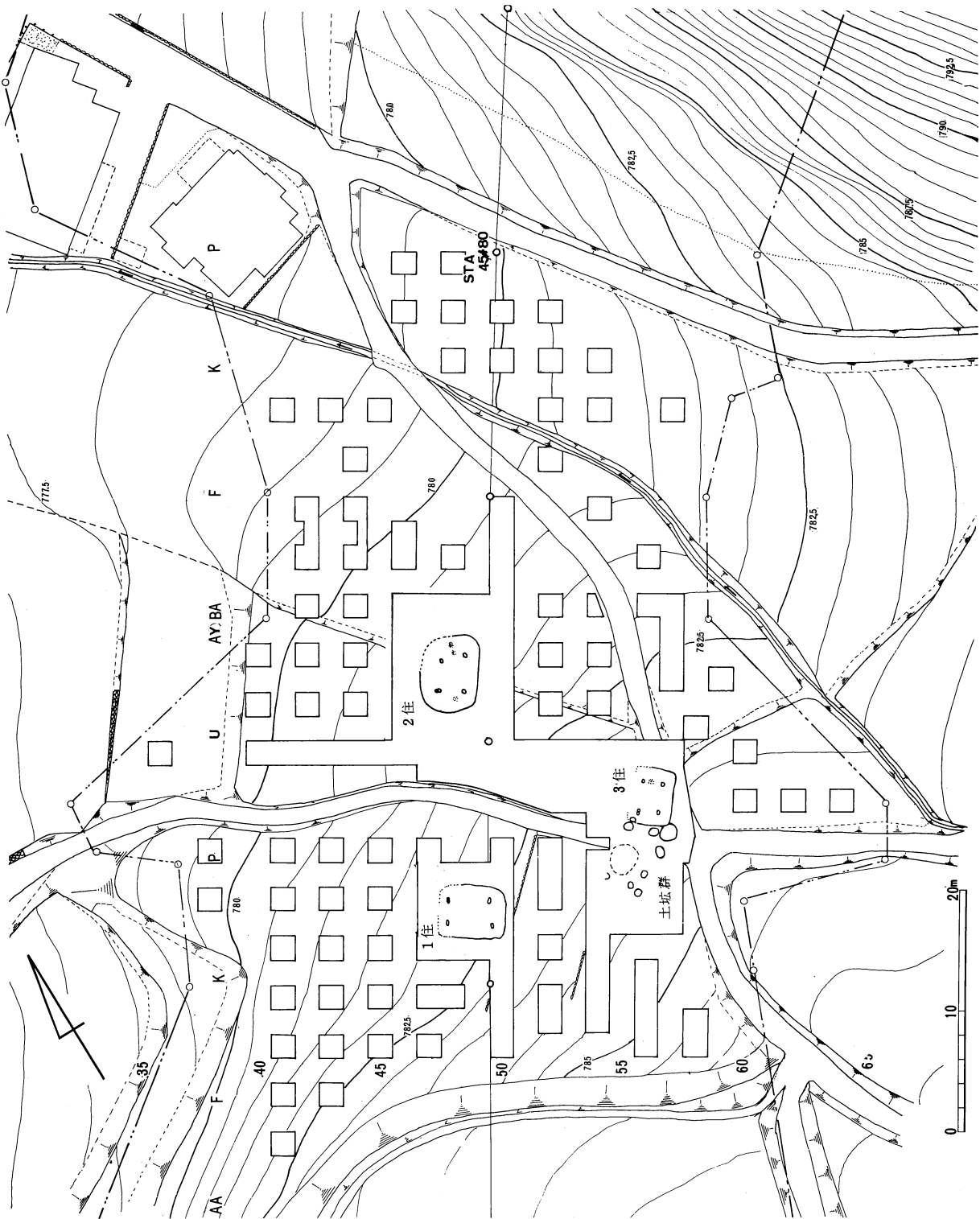


図1 志平遺跡付近の地形と調査区・遺構 (1:500)

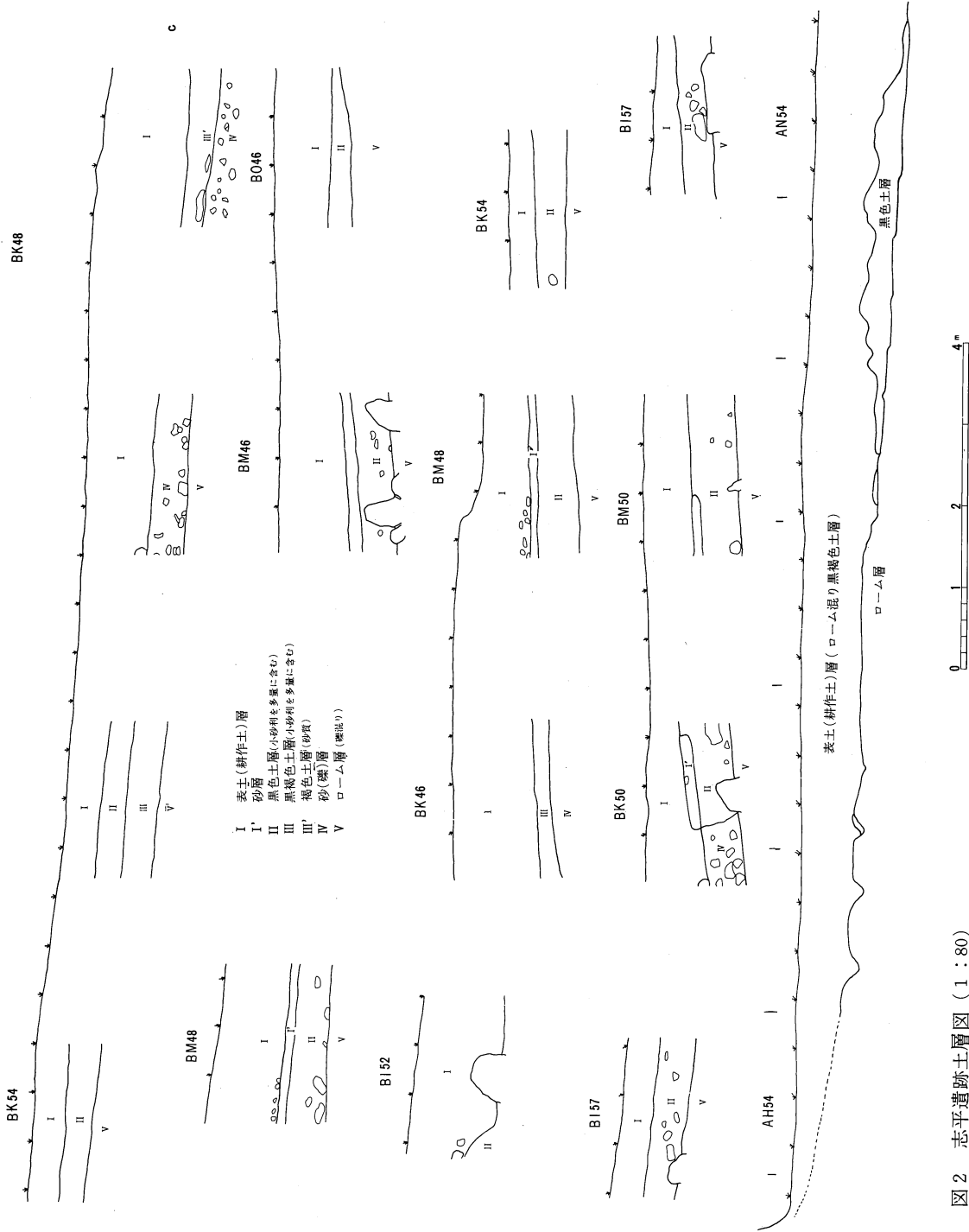


図2 志平遺跡土層図(1:80)

第IV章 調査遺跡

山寄りにある道路付近から調査を開始した。このB地区中央には小流ではあるが志平沢が流れており、当初より余り期待していなかったが、予想通りセンターライン上のB地区C～E列付近に古い沢の跡が検出できた。図1にみるごとく、B地区は大半が志平沢の小氾濫をうけており、遺物・遺構等も断片的であったので直ちに調査を中止してA地区へ移った。

A地区は扇頂部のほぼ中央高所にあたり、とくにここを南北に通ずる小路の西側(AQ列以西)は、黒土層も深く、遺構の存在が予想され、反対に小路東側は黒土層が浅く、一部地表には耕作によるロームの露出部分もあり遺構の攪乱も考慮された。

まず、A地区センターライン北側の小路東側部分のAT～AYの49～40地区は予測通り耕作土5～10cmと浅くまた地盤のローム層も相当耕作による攪乱が認められ遺構の存在は皆無であったが、AV～AX49～47グリット付近にわずかな黒土層の落ち込みを認め、拡張したところ周壁を相当けずられ、住居内部にも耕作のあとが明瞭に残る弥生後期の第1号住居址が検出された。また、センターライン南側50列以降東西に走る小路をこえた用地内の範囲はローム層が古い沢や現在の志平沢に向かってゆるく傾斜している上に、ローム層上の凹凸が激しく遺構の存在は確認できなかった。しかし、二本の小路がX字状に交叉する付近は、黒土層も厚く30cm程度を計る部分もあったので拡張し、小路の下に一部かかって第3号住居址を検出した。

小路西側は黒土層も深く、最も期待したが、意外に遺構は少なく、センターラインのAL～ANにかかって第2号住居址が存在したのみで、それ以北はローム面も安定していて地形的にも住居等の構築に好条件であるのに、小ピットが数ヶ検出されたのみで、他に遺構は発見できなかった。一方、本遺跡の主体となった弥生後期以外の遺構・遺物として、最終段階になって、第2号住居址西側AM～AP55～58グリット範囲に縄文中期初頭の土坑群が集中的に検出された。そこで西側の山寄り部分を調査したが、同種遺構はなく、むしろ、該期の住居址など中心部分は小路より南側の用地外にのびる可能性が強くなった。

ところが、調査終了まぎわ、地元の方の教示で、今回の調査地点をはずれた東側山地の先端部畑地(II-図2■印)にかつて土器の出土があったことがわかり、急拠0地点と命名してトレンチ法による調査を実施した。その結果、少量の土師器、灰釉陶器小片のほか、ややまとまって縄文中期中葉の土器片が出土したが、同期の遺構は検出できなかった。ただ時期不明の袋状ピットが遺物集中部分よりやや離れて発見された。0地点は地形的にはやや特異な場所であるが、下方の扇状地中心部からかつて同期の遺物が相当出土したという事実が報告されており、或はここも用地外に遺跡が広がっている可能性がよい。

7月9日、やや短かったが延べ23日間にわたる調査を終了した。

3. 土層(図2)

本遺跡は扇状地の扇頂部にあたり、両側に山地が迫る比較的狭い部分であり、かつ緩傾斜である上に耕作物—例えば長芋の栽培などの結果、地域による土層の相違が著しい。例えばA地区山寄りのAH54～AN54グリット土層図(図2下)にみられる如く、耕作土が深い場合でも長芋の栽培でローム面までほとんど攪乱をうけている部分(AI54～AJ54グリット)や、時期不明であるが同図右側のAL54～AN54グリットのローム層上に残る浅い階段状の痕跡があるなど、黒土層が厚くても後世の攪乱が判断できる部分が多い。このうちB地区で検出した第2号住居址付近やそれ以北の地域も、比較的黒土層の安定した堆積を示すが、図2にみるように2号址北半もほとんどローム面まで耕作による荒れが目立っている。一方、B地区は先記したごとく、志平沢の流路にあたり、とくにその東半は土層図にみるようにわずか2m離れ

たグリットといえども土層の堆積関係は異なり、礫を含んだり、砂層が部分的にあったり、黒土層が上下に分離するなど、まったく共通する層序関係が認められなかった。

こうした中で、1～3号住居址や土壇群の存在したA B両地区にまたがる中心部付近は、耕作による攪乱はあるものの、一般的に表土（耕作土15～50cm）下に黒色土層乃至褐色土層（15～30cm）が堆積し、以下ローム（小礫を含む部分もある。）層となる。傾斜地のため各層の厚さは一定していない。なお、黒色土層や褐色土層とも3号址付近を除いてプライマリーな状態の部分は少ないが、遺跡全体一とくに本遺跡の中心部と思われる部落により近い付近での観察から、表土—黒色乃至褐色土層—ローム層という層序や、黒色～褐色土層が遺物包含層であることも確認されている。

4. 遺構と遺物

1) 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土壇（図3，図版3-6，4）

3号住居址の南側に土壇の集中する地区があった。合計8基あるが時期を認定できる土器片を出土した土壇は3基で、いずれも縄文中期初頭の梨久保式であり、残り5基も、周辺出土土器から同時期とみられる。この土壇群と関係する住居址は、今回の調査区域からは未検出に終わったが、この土壇群の東側一帯には、その存在が予測される。なお、土壇群の西側中心部からは、ロームマウンド1基が検出された。このロームマウンドや土壇1・4・5・7に囲まれた範囲には、ローム地山にくい込んで多くの石が並んでいるが、すべて自然石である。また土壇7とロームマウンドとの間の部分には、現代の農道を造成する時の石敷と穴があった。以下各土壇について略記したい。

①土壇1 平面形はほぼ円形で口径63cm、底径52cm、深さ26cmを呈し、形状はタライ状である。底は平底に近いが東側が深い。底も壁も硬さは中ぐらいである。小穴などはみられない。内部には上部に黒色土層があり、底に近づくにつれて少しのローム土混りの褐色土層となっている。埋土の上部の中心部には土器片がかたまっており、その東に接して打製石斧1点（図14-24）が遺存していた。これらの遺物は底から数cmほど浮上していた。土器は梨久保式（図11-42・43）である。

②土壇2 土壇1の南西側となりに検出された。平面形は隅丸方形に近く、形状はタライ状である。

平底で底も壁もやや軟かい。口径は東西83cm、南北72cm、底径は東西50cm、南北42cmであり、深さは約20cmである。埋土は上部に黒色土層があり底に近づくにつれ少しのローム土混りの褐色土層となっている。内部の中央に底面より5cm浮上して梨久保式の土器片（図11-44・45）が7点ほど遺存していた。

③土壇3 弥生後期の3号住居址に北端をわずか切られ、西側は土壇7に接触している。平面形は楕円形で、底は平らではなく、とくに西側は壁が長くのびている。形態は摺鉢状である。底も壁もあまり固くない。口径1.2m、底径65cm、深さ25cmである。内部には幼児頭大から拳大の石が積まれていた。この集石は穴の掘込面から始まり下部へ続いているが底部付近は石を含まないローム混りの褐色土層が堆積していた。この層からも木炭が検出された。集石の間には黒褐色の土が入り込み、木炭片も点々とみとめられた。石は赤く変化しているものはなく表面の観察からは焼けているとはいえない。内部南側には大小の自然石が地山から顔を出している。また東側の外部ローム面にも地山から露出しかけた自然石が多くあった。遺物は無かった。

④土壇4 土壇3の南側に位置する。平面形は隅丸方形で底は丸底の形をしている。形状は皿状であ

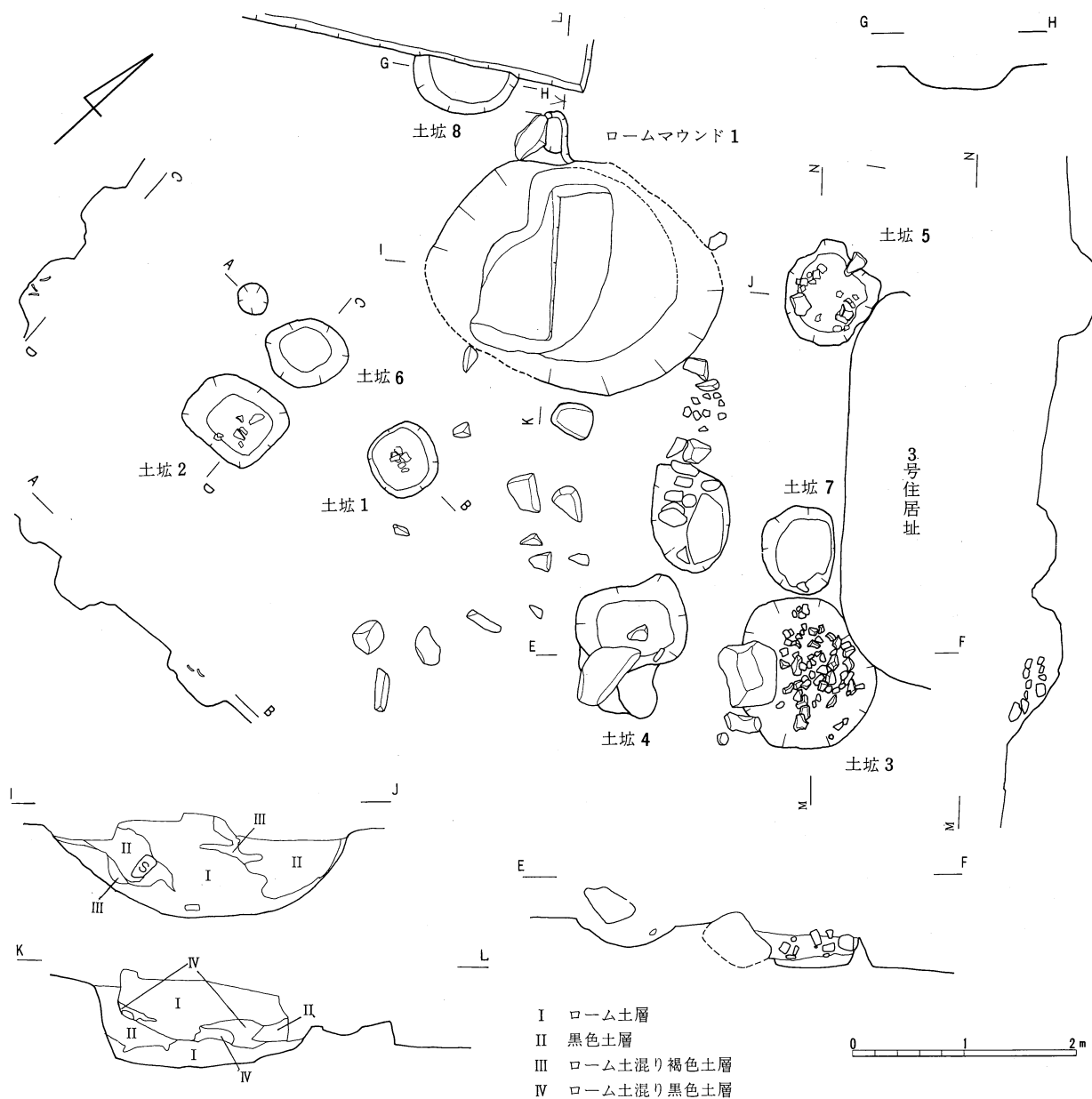


図3 志平遺跡土壇群 (1:60)

る。口径 100×80cm、深さ18cmである。この土壇の東側には、2段の凹みが連続しているが攪乱によるものらしい。穴の中位には大石があり、穴の底には幼児頭大の石が密着していた。北東隅の壁に接して底面より10cm浮上して打製石斧(図14-18)が出土した。埋土の中位にあった大石は人為的に置かれた状態であった。

⑤土壇 5 3号住居址の西壁隅に接触している。平面形は不整円形で、底は中心から少し低い状態の平底で、形状は深いタライ状を呈する。壁は東壁が垂直で他は外傾する。口径95×82cm、底径70×61cm、深さ26cmである。遺物は、土壇群の中では最も豊富で埋土の上部に梨久保式の土器片(図11-46~48)多数と黒曜石片が遺存した。さらに2点の磨石(図14-35・36)が東壁ぎわと西壁ぎわの埋土上部に検出された。また南壁の埋土上部に人頭大の石があった。

⑥土壇 6 土壇 2の北側に位置する。平面形は円形で底は平底である。形状は摺鉢状である。口径60×63cm、底径35cm、深さ18cmである。西側の外には径28cm、深さ10cmの浅い凹みがある。遺物は無かった。

⑦土壇 7 土壇 3と3号住居址に接触している。平面形は楕円形で、底と壁の境が連続的で北壁は垂直

だが南壁は外傾する。断面が丸底風で、形態は深い皿状である。底は凹凸があり壁も床も軟弱である。口径が78×64cm、深さ20cmである。遺物は無かった。

⑧土坑 8 土坑群のなかでは最も西に検出された。後世の掘り込み溝により西側半分を切り取られている。平面形は円形で底は平底である。形状はタライ状を呈する。口径95cm、底径70cm、深さ28cmである。遺物は無かった。

遺物 土坑内及び附近から出土した土器（図11-42~48）は、その大半が縄文中期初頭で、わずかに弥生土器や土師器の小片があったにすぎない。土坑 1 出土の42はやや外傾するのみの単純な深鉢で、頸部の一条の隆起連続爪形文帯の上には横に押し引き気味の平行沈線文を、頸部以下は縦走する平行沈線文を密に施文している。口縁・胴部ともこれら文様施文は、やや間隔のあいた一本の沈線を斜行して引き、文様の単純化に変化を与えている。43はこの期特有の地文の斜縄文を縦に区画する例である。土坑 2 の44・45とも口縁部に文様の集中する例で、とくに44は無文地に平行沈線によるY字文が内変する口縁部をめぐり、頸部隆帯上やY字文上辺に三角形印刻文をまねた刺突文が施されるキャリパー状の器形をもつ深鉢である。土坑 5 のうち46は唯一の大形破片であるが口縁部と底部を欠く。頸部付近の大きな刻目をつけた同心円状の文様の下にこの期独特のY字文が三角印刻文をともなって描かれている。地文にはやや明瞭な結節縄文が全面に施される。47は頸部から外に開く単純な深鉢であるが、頸部以上は平行沈線文のみによる数段の文様帯が描かれ、以下は地文の斜縄文を同一平行沈線文によって縦に区画する典型的な例である。図示しなかった資料もほぼ同一でこれら土坑群はほぼ中期初頭の梨久保式に属するものと考えてよいであろう。すべて深鉢で、胎土に雲母や大粒の石片を含むものが多く、明るい褐色系の色調を主とする。整理箱 1ヶ程度の出土量である。

なお、土坑に伴う石器（図13・14）としては土坑 1・4の打製石斧（18・24）と、同5の磨石（35・36）のほか、黒曜石片のうち使用痕あるものが数片のみであった。磨石は共に片面のみ浅い凹みが1ヶ中央につけられている。

(2) 0地点と袋状ピット（図4，図版4-9）

志平遺跡のある狭い扇状地の東北側の山地が、緩い傾斜地に移行する部分にあたり、縄文中期遺跡の立地としては余り例のない地形といえよう。グリッド設定もできないのでほぼ東西に2mの間隔を置いて2×20mの3本のトレンチを設定し、北側からA～Cとし、西端から2m四方に区切って1～10区として調査を開始した。地表面にほとんど遺物の散布はなく、10cm前後の耕作土の下に10～20cmの黄褐色土層があり、この2層は耕作による攪乱が認められた。次の30～40cmの黒色土層の上半部が遺物包含層で、以下部分的に薄い黄褐色土層をへてローム層へと移行する。黒色土層上半部の遺物出土状態は、その上層においては土師器、須恵器、灰釉陶器や弥生土器の小片が散在し、下層のややかたくしまった黒色土層中から縄文中期初頭～中葉にかけての土器がブロック状に数ヶ処にまとまるような傾向で出土した。しかし、黒色土層の下半部から黄褐色土層・ローム層に近い部分はほとんど遺物の出土は皆無となり、わずかな範囲であったが遺構は後述する袋状ピット1ヶのみで他は検出できなかった。地形的な面からみれば、もう少し下(北)方の平坦な部分が遺跡の中心部と考えられるが、地主等の話では、全然遺物の出土はないといい、やや遺跡自体の性格究明がむずかしい。

Aトレンチ9～10区にわたって検出された袋状ピットは、黒色土層とローム層の間にある10cm前後の黄褐色土層面から掘られている。平面は径1.4mのほぼ円形を呈し、深さ80cmを計る。底部中心に径15cm、

第IV章 調査遺跡

深さ25cmの円形の小ピットがあり、その北側に底面に密着した長方形の台状の石（12×25cm、厚さ9cm）が置かれていた。底面は踏み固められたようにかたく、中心のピットに向かってわずかに傾斜している。袋状といっても、底部が強く奥に張り出した感じで、ピット内やその埋土からも遺物は皆無であった。土層からみてもごく新しい構築でもないが、さりとて縄文～土師期に帰属させる根拠もない。一応、縄文期の中へ入れておく。

(3) 遺構外出土遺物（図9～14、図版5・6）

上記の0地点も含め、土塚群以外の出土遺物についてまとめたい。

土器 土塚群や0地点を除くと縄文土器の出土はいたって少ない。しかし、既調査時のそれも含めると志平遺跡全域からは早期～晩期のすべての土器が出土していることになり、とくにその中において、今回の土塚群や0地点、更に既調査時の資料では中期が圧倒的に多く、どこかに該期の中心部があることがわかる。以下簡単に説明を加えたい。

中期を除くと前期の羽状縄文のある繊維土器（図11-49・50）と工字文のある晩期（85）のみで、他に時期不明の無文土器が数片あるのみである。中期は量も少なくないので以下分類して述べたい。

完形品は皆無であるが、破片からみて深鉢が主となり、わずかに浅鉢が見受けられる。西日本の土器に注意したが検出できなかった。0地点が90%以上を占め、それ以外は小破片のみが散在して出土した。

a類（52～58） 半截竹管による平行沈線を主体としたものに半隆起線文（53・54）、三角印刻文（53）、三叉文（58）、三角刺突文（51・57・58）などの文様をもつものなどがある。当地方の中期初頭の梨久保式などに比定される一群であるが、多少の細分も考えられる。土塚群などとほぼ同位置であろう。

b類（59～67） 四角押しきを主文様構成としている一群で、隆起線の断面は三角形を呈する。また、雲母を多量に混入したり、輪積み痕を明瞭に残すものなどもあり、猪沢式に比定できる。

c類（68～80） 三角押しきによる施文が多用され、三角連続文、楕円区画文などがある。長石の粉末が混入され、明るい橙褐色・赤褐色で固く非常に焼成がよい厚手の土器である。80は無文の浅鉢であろう。新道式である。0地点の主体はこのc類とb類である。

d類（81） 平行沈線による文様帯を特長とする所謂平出三類Aである。精選された粘土に大粒の長石が混入され、やや薄手作りで灰褐色を呈する。b～c類に伴うが今回の調査では数片のみであった。

e類（84） キャリパー状の口縁部に太い沈線による渦文を、胴部は斜縄文の上に同種沈線による懸垂文で縦に区画する曾利Ⅲ式に比定できる土器である。他は小破片のみで多くない。

なお82は前期諸磯系とも考えられるが胎土などからd類に含める可能性もあり、83と共に図示するにとどめたい。

土製品としては耳飾と円板がある。耳飾（耳栓）（図14-37）は臼状に凹んだ部分が片面だけ残り、反対側は欠損している。円板（図14-38）は周囲をやや粗く打ちかき研磨痕はない。裏面に横に浅い条線様の文様が残るが耳飾と共に後・晩期のものであろうか。

石器 定形的石器も、またそれ以外の黒曜石、チャート等の剥片も余り多くない。縄文期遺構の中心部からはずれている点が反映しているといえよう。数量も少ないので、他遺跡の如く器種分類の基準（24頁）

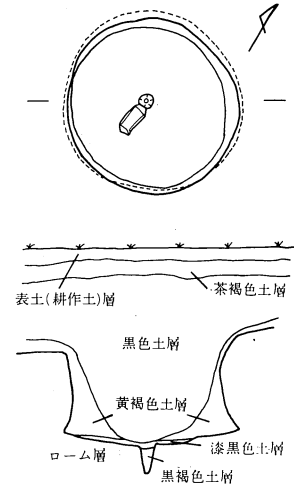


図4 志平遺跡袋状ピット
（1：60）

にとられず、簡単な記述にとどめたい。

石鏃(図13-3) 黒曜石製。二等辺三角形の底辺にやや深いえぐりがある両面加工のものであるが、多少厚手造り。完形の本例が唯一の出土品で、表採資料には破片も含めて3ヶある。

石錐(8) つまみ部の大きな例で、錐の部分は欠損している。黒曜石製。

使用痕ある剥片(9~14) 黒曜石製の剥片の縁辺に刃つぶれ、刃こぼれや線状痕、擦痕などの使用痕ある一群であるが、本報告書の他の遺跡の如く或る程度の出土量がないので、あえて分類せず、図示するにとどめる。図示した以外に3点あるのみである。

打製石斧(17~26) 粘板岩・砂岩・緑色片岩を用いた、長さ10~15cm程度の中形のものが多い。一面に自然面を残すものと両面に加工する例でも、刃部や側縁の剥離は余り変らない。完形品は図示した以外なく、その大半は欠損品で、その多くは胴部から折れている。I・III類が大半を占める。

横刃型石器(31) 打製石斧の中にも横刃的機能を考えるべき例がいくつかあるが、明確なのは31のみである。砂質粘板岩製で自然面の残る一面の刃部にのみ加工を施している。IA類。

磨製石斧(1・2・29・30) 大形と小形の二者がある。大形は長さ10cm以上あり塩基性緑色岩製で、刃部は蛤刃状を呈する。小形例は5cm前後でチャート製。1は側面を加工し多様な機能を有しており、刃部は使用による摩擦が認められる。2は唯一の定角石斧であるが、欠損が著しい。

磨石(16) 一般的な磨石と異なり縦長の形態をとる。全面にやや粗い縦方向の研磨痕がのこり、先端部のみ敲打痕がある。敲石とすべきかも知れない。砂岩製で1例のみである。

凹石 多孔質の安山岩製で、中央に1ヶの凹みを残すものがある。欠損品が3ヶある。

石製品(7) 第2号住居址の埋土出土品である。滑石製で全面をよく研磨し、棒状を呈するが、先端はやや尖らせている。縄文前期の滑石製品にも類例はあるが、時期の決定はできない。

2) 弥生時代の遺構と遺物

岡谷市教育委員会の2回にわたる小規模な発掘(昭和40・42年)によって、扇央から扇端にかけて弥生後期住居址1の完掘と不明確なもの2が調査され、同期の遺跡として周知されていたので、今回も地点はやや離れるが弥生時代遺構の検出に重点がおかれた。その結果、弥生後期のほぼ同時期の竪穴住居址3軒を完掘でき、量は少なかったが該期の土器も出土した。今回の5遺跡の調査で、弥生関係は本遺跡のみなので、第三章「遺物の分類」では弥生土器を取りあげなかった。そこで、遺構の説明に入る前に、弥生土器の器種分類をまず行っておきたい。

(1) 弥生土器の器種分類(図9~11, 図版7)

壺・甕・高杯がある。文様は全て櫛で描いており、従って、特別にことわりがない場合には、例えば、櫛描波状文は櫛描を省略し、たんに波状文と記した。

壺 AとBがあり、ともに1個体ずつの出土である。Aは口縁部が屈曲し、内傾するもので、内傾した部分には斜線文を連続して描き、頸部はヨコナデののちに、短線文と波状文を一条ずつ描く(8)。Bは口縁端部を僅かに内傾させたラッパ状に開く口縁形態をもつもので、ヨコナデののちに、2条またはそれ以上の波状文を描くものである(17)。外面に僅かに刷毛目を残す。

甕 全器種中、最も数量が多い。口縁部下半から体部上半に描かれる文様帯の有無、体部形態の相違、最大径の位置から、A~Eに分けられる。これらは、法量の大小、櫛描文の描き方によって、さらに細分

第IV章 調査遺跡

も可能であろうが、絶対量が少ないので、ここでは、口縁部径が、20cm以上を大形甕、以下を小形甕と表現して、記述することとした。甕の基本的な整形は、口縁部はヨコナデ、口縁部下方から底部までは刷毛整形するが、この基本からはずれるものも若干あり、これについては、以下の説明文で記述をした。刷毛目は一般に細かく、特に施文部分は意識的に軽く施したことが多い。これは、施文部分と無施文部分を意識して器面調整をおこなった結果であろう。波状文は観察可能なものは総て右（時計）まわりで、断絶点を1周のうち、何回ももつ、手描きの中部高地型櫛描文と、断絶点が1回のみ、回転台使用の畿内型櫛描文の2種類がある。前者は4例（1・10・11・20）、後者も4例（4・5・9・24）ある。なお、後者に属すると思われるものは破片の中にも数例あると思われるが、1周をめぐるものでなく、確たることはいえない。従って、観察可能な例では大形甕の多くは畿内型が、小形甕は中部高地型が多い傾向にあるが、傾向として指摘しうるとどまる。

A（11・22） 文様帯をもち、最大径が体部にあるもの。口径に比較して器高が小さく、体部が大きく張るために壺に近似した器形となる。小形甕2例がある。文様帯は波状文を数条描くか、波状文と短線文を組みあわせたものがある。

B（2・4・5・9・10・12・13・24） 文様帯をもち、最大径が口縁部にあるか、ほぼ等しいもの。8例知られ、甕の主体を占める。大形甕は総てこれに含まれる。体部は甕Aほどでないにしても、外に張る。従って、口縁部はゆるやかに外反し、頸部でゆるやかに収縮したのちに、体部でゆるやかに張る器形となる。大形と小形の甕がある。口縁端部では、まるくまるまるものと、僅かに端部が内傾するもの（12・13・24）とがある。文様帯は大形甕と小形甕とでは若干の相違がある。前者は波状文を数条描くか、それに短線文を加える。つまり、横帯文は波状文を単独に用いるにせよ、短線文と組みあわせるにせよ、最低3条は描いているのに対して、小形甕は2条である。もっとも、後者は1例と少ないので、積極的根拠とはなり得ない。

C（1・20） 文様帯をもち、最大径が口縁部にあり、体部の張りが小さいもの。口縁部の外反もBに比較して小さい。小形甕のみ3例ある。文様帯は2ないし3条の波状文を描いたものである。この場合に波状文は中部高地型である。

D（14） 器内外面に刷毛目をもつだけで、文様帯を持たず、かつ、最大径が口縁部にあるもので、体部が張りだすもの。器形は甕Bに似る。小形甕1例がある。

E（3・5・21） 器面に刷毛目をもち、文様帯を持たず、最大径が口縁部にあるもので、体部の張り方が小さいもの。器形は甕Cに似る。小形甕3例がある。

高坏（18・19・23） 3例のみで全器形をうかがえるものはない。器面を篋磨きしたのちに赤色塗彩するものと、篋磨きしただけのものがある。

(2) 第1号住居址（図5・9，図版2・3・7）

A地区のセンターライン上AM・AN48～50グリットを中心に検出された。主軸方向はN—50°—W。付近一帯は表土下の黒土層が最も深い部分であり、地盤のローム層も緩傾斜するが安定し、2・3号住居址に比べて遺存状態は一番良好であった。ただ長芋栽培による深耕部分があり、本址北西壁付近がために破壊されていた。

1～3号址とも、住居址の存在する部分は黒土層—ほぼ周壁の高さ—から土器片の出土が急激に増加し、他は遺物の出土が僅少なので容易に判別できた（図13）。本址も検出面は黒土層中であり、ローム層との

区分が明確なためプラン
 検出は簡単であった。埋
 土は大半が黒土であり、
 一部に茶（暗）褐色土が
 認められた。長径 6.0m、
 短径 4.5mの長方形プラ
 ンを呈する。ほぼ3～4
 度の傾斜地に作られたた
 め、ローム層の掘り込み
 は最も高い南東壁の45cm
 から次第に高さを減じ、
 北西壁は先述した如く、
 長芋による攪乱でまった
 く確認できなかった。部
 分的に2～3cmの茶褐色
 土層がローム面上に観察
 できたので、周壁はほぼ
 50cm前後の高さと推定で
 きる。柱穴はほぼ規則的
 な長楕円形の4本(P₁-35
 ×12, -35cm、P₂-37×15,-
 55cm、P₃-35×17,-37cm、P₄
 -33×15,-21cm)が主柱で、
 他はすべて深さが10cm以



図5 志平遺跡第1号住居址(1:60)

下で支柱穴とは考えられない。P₁とP₂、P₃とP₄の柱間は約2m、P₁とP₄が3.8m、P₂とP₃が3.5mを計る。炉は当地方該期住居址と同じく、P₁・P₂の主柱穴の中間やや壁よりに弥生後期櫛描文土器の胴上半部を埋設した埋燗炉(5)で、径約30cm、深さ25cmの穴には焼土、灰が充満し、一部床面へも散布していた。床面は地形に従って炉の方へゆるく傾斜しているが、非常に固く踏みこまれ、容易に検出できた。床面上には浅いピットが中央部に向かいP₃・P₄をかこむように半円状に分布するが、このP₃・P₄間の空間部は何か意味をもつものであろうか。ちなみに、これらのピットの大半はロームによって貼床されていた。また南東壁の中央には半完形土器など数個体分の土器がまとまって出土する1.2×0.5m、深さ30～20cmの不整長楕円形ピットがあり、東隅には径50cmの底面に平石をおく円形ピットがそれぞれ検出された。共に焼土などなく貯蔵穴的用途を考えてよいだろう。なお東隅に近い床面上には、ほぼ器形のわかる、煤の多量に付着した甕形土器の半分(4)がやや斜めになって出土した。床面上には5ヶの台石状の平石があるが、P₁の南東、長楕円形ピット西の2ヶが床面に密着したもので他は数cm浮いていた。床面に密着した遺物の出土は数片のみで、他はすべて住居址埋土中である。これら小片の土器の出土状態については、次の2号址と同傾向なので省略する。

出土遺物 壺A(8)、甕B(2・4・5)、甕C(1)、甕D(3)と甕底部片が図示しうる総てである。

第IV章 調査遺跡

壺Aは口縁部が $\frac{1}{6}$ 個体現存のみであり、復元を試みた。推定口径14.6cm。

甕Bは大形甕(4・5)と小形甕(2)とがある。4は器外面がかなり磨耗している。3条の波状文の櫛は上から8・7・7本である。口径24.8cmの細砂粒を多量に含む土器である。5は外面に煤が多量に付着している。波状文の櫛は上から8・7・8本、短線文は7本である。細砂粒を多量に含む。口径22.1cm。埋甕炉として利用されたものである。小形甕は体部以下を大きく欠損しているが、口縁部形態から本類に含めた。波状文の櫛は8本であり、金雲母等の砂粒を多量に含む。推定口径16.4cm。

甕Cは淡褐色の明るい色調をもち、器外面に煤が部分的に付着する。波状文は2条で、櫛は各々8本である。底部内面はあらく篋で磨いている。口径16.3cm。

甕Dは外面がかなり磨耗しているが、内面は丁寧に篋で磨いている。体部下半は縦方向に篋で磨いている。口径16.4cm。なお、底部片7も外面に縦篋磨きの痕跡がみられ、甕の体部下半の整形が知られる好資料である。

石器としては硬砂岩質の自然石を用いた砥石(図14—33)のほか黒曜石の剥片(図13—13・15)があるが、確実に住居地に伴うものかどうかは判然としない。

(3) 第2号住居址(図6・7・9・10, 図版2・7)

第1号住居址の北東14m、AV~AY47~49グリット内に検出された。北向きの緩斜面あたり、ローム層までの耕作土が最も浅い部分であったので、住居址の存在はすぐ判明したが、傾斜の低い北側部分は攪乱が甚しく、プラン確認に日数を要した。埋土は、炭化物やロームの小粒を含むしまりのある暗褐色土であるが、処々に1号址と同じく、黒色土と単純によんでよい部分もあって明確な区分はできなかった。堆積状態は深耕による床面までの攪乱が部分的にあるものの、傾斜に沿った自然堆積であった。

プランは長径6.5m、短径5mの楕円ないしは隅丸長方形を呈し、主軸はN-42°Eで、3号址と共に扇状地地形に対しては直角の方向をとっている。周壁は高い南側でローム層を30~40cm掘り込んでいるが、北側半分は耕作のためほとんど失われ、床面の残存状態からようやく推定できる程度であった。床面は多少の傾斜はあるが、ほぼ水平でよく周壁の近くまでふみ固められていたが、かえって住居址中央部一帯はローム層中に自然礫が含まれていて、堅い床面が見られなかった。

柱穴は最終的なものがP₁~P₄、それ以前がP₁・P₄・P₈・P₉の各4本と考えられる。P₁(43×35, -25cm)、P₂(36×23, -13cm)、P₃(35×27, -22cm)、P₄(38×25, -25cm)の配列は、P₃の位置がやや内側に寄るため台形となって、不規則な感じがする。それに対し、P₁・P₄にP₈(31×12, -12cm)、P₉(23×10, -25cm)をあてるとほぼ等間隔となり、プランからみた位置もよい。このP₈・P₉とも、ロームによる貼床があり、上記のような2回以上にわたる支柱の移動を考えた。なお、P₁~P₄とP₂・P₃のほぼ中間にあるP₆(24×23, -15cm)とP₇(20×21, -15cm)は支柱穴と考えてよいであろう。以上のP₁~P₉(P₅をのぞく)以外の床面上に散在するピットは、その形状からみて柱穴と認定するには明確さを欠くが、南壁→東壁→北壁に沿ってやや同形のピットが並んでいるのが気になる。

炉は主軸上の両側、北東壁と南西壁に各2ヶずつ存在する(F₁~F₄)。F₄を除く3ヶが埋甕炉である。また、F₃が支柱穴(P₃・P₄, P₄・P₉)間にあるのみで、他は周壁側に片寄る。2回の支柱建替えを推定すれば、F₁とF₄、F₂とF₃の組合せが考えられるが、後述するごとく、F₃・F₄には貼床があったのでむしろF₁とF₂、F₃とF₄のセットが妥当性をもってくる。F₁(45×40, -14cm)は炉体に甕(9)の胴部のみを正位に埋め、F₂(20×18, -11cm)は甕(11)の口縁から胴部上半を逆位に用いていた。F₃(30×30, -9cm)は焼土中に甕(10)

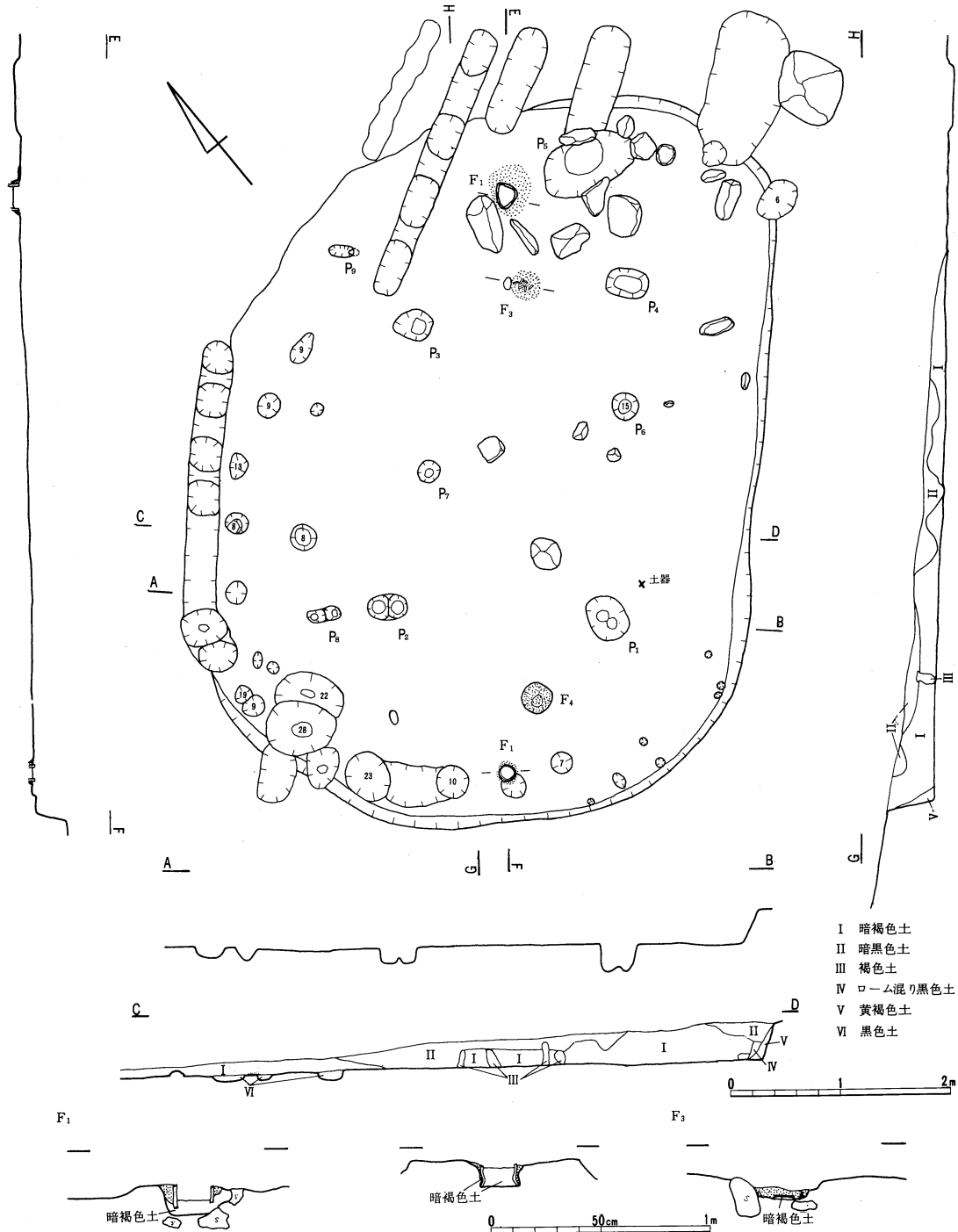


図6 志平遺跡第2号住居址（1：60）と埋葬炉（1：30）

の胴部が破損して、散乱した状態で検出されたが、F₁・F₂同様、埋葬炉としてよいであろう。F₁・F₂は炉体の中にほとんど焼土・灰はなく、周囲に散布していたが、F₃・F₄は炉址内にそれらが充満し、床面と同一レベル上には貼床が明瞭に残っていた。

F₁の東側、周壁との間に大形のP₅（88×50、-20～30cm）がある。貯蔵穴と考えられる。周囲に人頭大の自然礫が散在するが、床面に密着するもの、或は台石のような加工痕の認められるものはない。再述する如く、本址は耕土が浅く、東・北壁に一部表現してある細長いピット一畝の痕跡が住居址内やその周辺に多数検出され（図版2-2参照）、相当床面近くまで荒されているので、浮いた礫は勿論、西壁隅の連続したやや大



図7 志平遺跡第2号住居址遺物出土状態 (1:60)

形のピット群も、本址に付属するものではないと解釈したい。

なお、遺物の出土状況は埋土のやや厚い南側から西側にかけて多く、住居址西半分に密集する感があるが、これは耕土の浅深のためであり、やはり本遺跡に共通する住居址埋土に遺物、特に土器片が集中して、他からほとんど出土しないという傾向と同一であろう。出土土器は埋葬炉使用のもの以外はほとんど小片のみである。図7に出土状態と一部土層と

の関係を図示したが、床面密着例は少なく、床面上10cm前後の暗褐色土乃至黒色土層中から漸次多くなり、同層の上部付近から耕作土下部に最も多く出土する傾向が認められた。大半が小破片であり接合した資料も少なく、特記すべき事実もないので図上には省略した。

出土遺物 壺B (17)、甕A (11)、甕B (9・10・12・13)、甕D (14)、甕E (15)と高杯 (18・19)がある。

壺Bは推定口径17cmの淡褐色をした、焼きのよい土器である。器面は磨耗が著しく、口縁部に2条まで確認されたが、波状文の描き方等は不明である。

甕Aは埋葬炉F₂として用いられたもので、体部に櫛の歯8本をもつ3条の波状文をめぐらす。それには断絶点が上段11、中段10、下段に6以上認められる。燈褐色の色調をもち、胎土内に多量の砂粒を含む。口径14.8cm。

甕Bは全て大形甕で、波状文と短線文(9・12)、または波状文と短線文を山形に連続して右まわりに用いた鋸歯文からなるもの(10)とがある。12・13はともに口縁部を一部欠損しており、推定口径はともに22cmである。9は埋葬炉F₁、10は埋葬炉F₃として用いられたものである。

甕Dは推定口径17.5cm、Eは口径19.8cmの小形甕で、砂粒を少量含む、焼成のよい土器である。

高杯は2点出土した。18は口縁部が鋭く外反し、端部は内傾する。杯体部は椀状である。脚部は欠損。

口縁部はヨコナデののち、体部にかけて、内外面とも刷毛をほどこし、さらに、ラフに篋で磨いている。外面には部分的に煤が付着する。暗茶褐色の焼成のよい土器である。口径16.4cm。19は椀状の杯部のみであるが、脚部は欠損している。多分、末広がる脚部がくるであろう。内外面とも不定方向に篋で磨き、赤色塗彩している。白色砂粒を少量含む、軟質の胎土をもつ。推定口径15.2cm。

石器は、唯一のチャート質の磨製石鏃（図13-4）が出土している。また、両面に研磨痕のある石斧形石器（図14-34）もあるが、他の図13-6~9と同じく総て埋土中であり、本址に伴うかどうか不明である。

本住居址は最低1回の建て替えが予想されるが、遺物から新旧の確認はできない。

(4) 第3号住居址（図8・10・11，図版3・7）

本址は1・2号址より南東約10m離れた、A R56グリットを中心に検出された。扇状地でも最も扇頂部に近い北に向いた緩傾斜地面上で、志平遺跡全体からみれば最高地点に位置するであろう。

埋土は西北壁側に道が造られた点を除けば住居址南半では、比較的プライマリーな状態が観察された。北西側から北東へローム粒の混らないよくしまった褐色土が凹レンズ状に堆積し、その上位を黒色土が逆三角形堆土としてのり、さらに上部が黒褐色をした耕作土が覆うという状態であった。しかし、北側 $\frac{1}{3}$ が攪乱をうけているので部分的には混乱した層序も認められた。

プランは長径5m、短径3.7mを計る隅丸長方形で、主軸方向は、2号址と同じくN-44°-Eである。本址の南西部は縄文中期初頭を主とした土坑群が狭い範囲に8基検出されているが、西隅には土坑5が壁を接し、南隅では土坑3の一部をかすめ、土坑7とも近接している。しかし、これら西南壁から東南壁にかけてはローム層を50~30cm掘り込んだ周壁が明確に残るが、西北壁の全部と東北壁の半分が傾斜地であるため、耕作によってすべて切りとられ、削平されていた。床面も全面ほぼ水平で固くしまり、とくに支柱穴を結ぶ内側はバリバリで、1・2号址にくらべると保存状態は良好であった。

柱穴はP₁（29×33、-47cm）、P₂（37×28、-48cm）、P₃（28×20、-43cm）、P₄（31×23、-53cm）が支柱穴でP₅（34×16、-15cm）は位置、深さからP₄の支柱穴と考えてよいであろう。支柱の配置はほぼ等間隔で規則的だが、該期に多い上面が細長い形のはP₄・P₅のみである点、P₃が真直な穴でなく内部に多少傾斜している点、P₂の外観が柱穴らしからぬ形であることなどが注意される。なお、東隅の東北壁のP₆（26×20、-13cm）は床面からは浅いが壁についており内部に石などがあって、柱穴と考えてよいであろう。その他、床面上にあるピットは深さがなく柱穴とはできないが、東隅の南東壁直下に5ヶ並ぶ小穴は周壁保護のためのものであろうか。西隅の土坑5に接するピット（52×41、-14cm）は、検出状態から縄文時代の土坑群の仲間ではなく、本址の付属施設としてよいであろう。底に近く石と弥生土器片が検出されている。一方、反対側の東隅のピット（50×30、-38cm）は摺鉢状であるが、P₆との関係から貯蔵穴的な用途を考えたい。

炉はF₁（35×18、-25cm）はP₁とP₂を結ぶ線上のほぼ中央、住居址の主軸線上にあり、底部を欠く甕（21）を正位にきちんと埋めた埋甕炉であり、炉の補強のためか甕の外側には同類の土器片をはさんであった。炉体内には焼土・灰などなく、西側床面上に少量散布していた。本址はこの他焼土等の痕跡はなかったがP₃の東側に床より数センチ浮いて丸太材らしい炭化材（径5×20cm）が、同じ大きさの炭灰とともに横になって遺存していたのが注意された。

遺物の出土量は3住居址中最も少ないが、その出土状態などはまったく同じで、住居址外になると小片といえども出土しなかった。床面乃至それに近い面からの26点のうち、埋甕炉のほか、東北壁中央の甕、P₃とP₂を結ぶ中間、床よりやや浮いて出土した赤色塗彩の高杯破片（23）以外、ほとんど小片であった。遺

第IV章 調査遺跡

物の出土状態などは、2号址と同じなので省略したい。その他、埋土中より縄文時代の土製耳飾（耳栓）が出土し注目された。

出土遺物 器形のほぼ推定可能な土器は甕A(22)、同B(24)、同C(20)、同E(21)と高杯(23)の計5点である。

甕Aは1条の波状文短線文で文様帯を表現していると思われるが、体部上半部以下を欠損している、文様帯の総てについては不明である。内面は磨耗が著しく、整形痕の観察はできなかった。胎土内に金雲母を含む。推定口径18cm。

甕Bは器面に全く刷毛目を持たない唯一の例であるが、体部下半は欠損している、総てについては不明である。口縁端部は僅かに内傾している。口縁部はヨコナデ、頸部以下は篋によるナデがなされているように観察されるが、はっきりしない。体部最大径から下方は煤が付着している。筒は上段から6・8・8本である。口径23.4cm。

甕Cは3条の波状文をもつ小形甕である。外面は磨耗がみられ、かつ部分的に煤が付着し、整形痕は観察できない。推定口径17.8cm。

甕Eも小形甕で器面の磨耗が著しく整形は明らかでない。口径17.8cmで埋甕炉として用いられた。本住居址出土の甕は淡褐色系統の色調で、焼成が良いが、甕Eは砂粒を多量に含んだ、焼成不良の土器である。

高杯は杯部を欠損する。脚部外面は、脚部を3段に縦位に、口縁部は横位に篋で磨き、内面は、杯部と接合部は刷毛、脚部は刷毛ののちに指でナデつけ、口縁部はヨコナデしている。外面は赤色塗彩している。口縁部径12.5cm。

石器としては黒曜石の小片のほか、図14-28に示す下伊那地方の該期打製石器に類似するものがある。

(5) 遺構外出土遺物

本遺跡においては、弥生時代の3基の住居址以外、特に遺構がないのみでなく、再述するごとく目立つような遺物も皆無であった。

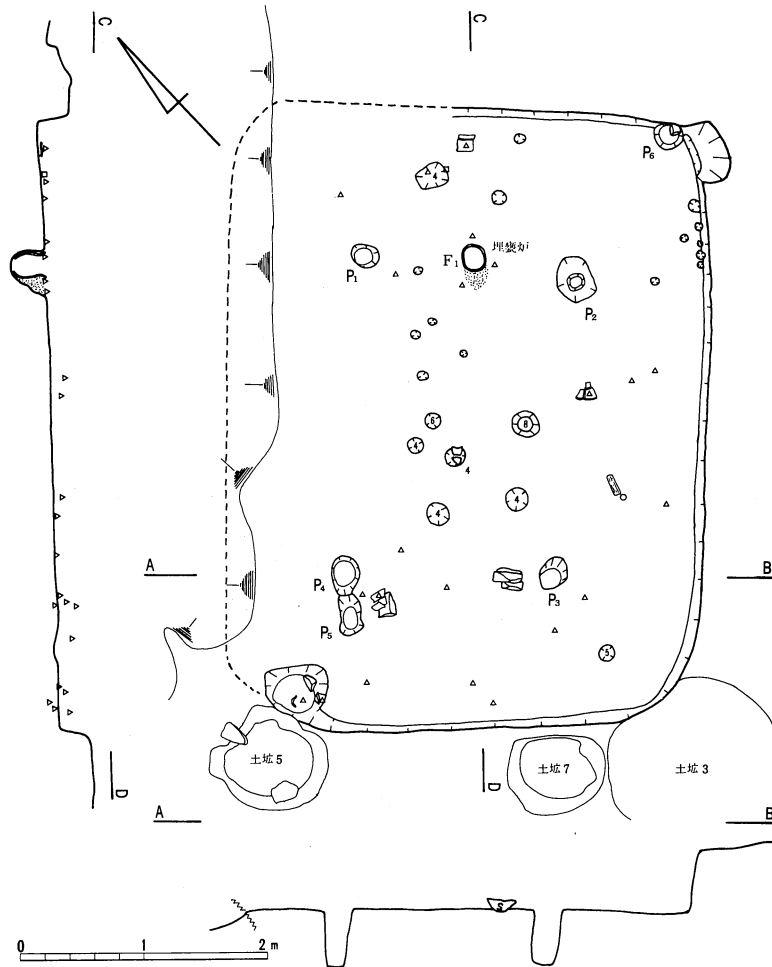


図8 志平遺跡第3号住居址(1:60)

3) その他の遺構と遺物

(1) ロームマウンド1 (図3, 図版4-8)

土壇群の拡がりをつかむため平面を掘り下げる時検出された。断面をみるため十文字に切り、その東西の区画のみ掘りあげた。マウンド部分の形は円形であるが、マウンド上面の南側半分は後世に削られている。中心部では、ローム土層が上位から穴の底まで続き、底部では、ローム地山との境界が全く不明瞭であり、連続している状態であった。マウンドの周囲には黒色土が貫入する状態で詰まっており、所によって黒色土中にローム粒が入ったり、ローム混り褐色土が入り込んだりしていた。遺物の検出はなかった。土壇群との切りあいもなく、出土遺物も不明なので、性格や時期を決定できない。

(2) 遺構外出土遺物

時期不明な砥石(図14-32)、掛金(同-40)が各一点と寛永通宝1ヶが埋土から採集された。

5 まとめ

本遺跡は、今回の調査以前2回にわたる発掘調査が小規模ではあるが実施されている。今回の調査地点の北西100mがA(第一地点)、更に100m下った天竜川に近いB(第二地点)地点である。丁度、扇頂、扇中央、扇端部を調査したことになる。まずA地点では、旧鎌倉街道拡張工事により大半が破壊されていたが、推定一辺約5mの方形竪穴住居址が検出され、櫛描沈線文などを特徴とする後期弥生土器500片と砥石が検出された。今回調査の1号址とほぼ同程度で、時期的にも差がない。この住居址埋土や付近からはかなり多量の縄文中期土器(梨久保式、後田原式、井戸尻式、曾利式)が出土したという。一方、B地点は、天竜川との比高が5mに満たない扇端部の畑地である。天竜川による冠水の痕跡はないが、志平沢の氾濫による礫や砂の多い部分である。ために明確な遺構は検出できなかったが、住居址、遺物集中地点、炉址らしきものが発見された。地点により縄文後期(加曾利B式併行・滑車型耳飾)、同中期、弥生後期、平安時代と変化があり、炉址のある部分はA地点住居址と同時期の住居址らしい。完形の土器のほか、石庖丁、石錘、磨製石鎌なども採集されている。

こうした2回にわたる調査の結果、本遺跡は縄文時代から平安時代へわたる複合した集落遺跡として知られていた。以下、縄文、弥生両時代についての簡単なまとめを記したい。

1) 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代の遺構として、土壇群の検出のみに終り、住居址などを発見できなかった。発見された土壇群は、縄文中期初頭に位置することは間違いない。小範囲であったので、その拡がりには追及できなかった。該期は、岡谷市内の扇平や梨久保遺跡などの例をあげるまでもなく、住居址などより土壇の検出が著しく多いことが判明している。しかし、阿久遺跡の調査などにより、土壇乃至ピットは前期にも多いことが確認されてきている。しかし、一般に土壇といってもその形状は様々であり、今回の調査例も、土壇3のようにその大きさや内部の在り方から墓壇の解釈もできるものや、土壇1・2のように小形で浅く、貯蔵穴的用途も考えられない例もある。その配列も小範囲であるため全体像を想定しにくい。扇平遺跡でその集成を行っているが、まだ当分土壇の実体を把握するのは困難であろう。

第IV章 調査遺跡

次に出土遺物は、土塚と同時期の中期初頭の一群と、0地点を中心にした中期中葉の一群が最も多かった。各項でも触れたが、中でも0地点は先記したA地点に近く、その出土土器からみてやはり扇中央部にこの期の集落が存在する可能性が強いことを示している。今回の調査が、扇中央部に及ばなかったため該期の遺構を検出できなかつたともいえるが、しかし、地形的にみれば、八ヶ岳西南麓のように大規模な集落ではなく、数軒を単位とした小規模な内容ではないだろうか。

既出資料も加えて、本遺跡の全体をみると、早期末～前期初頭(木島式など)、前期中葉(諸磯式、北白川下層式など)、後期中葉(加曾利B式など)、晩期後半の各期は、痕跡的に遺跡全面に足跡を残し、中期初頭は扇頂部・扇中央部を中心に土塚などの遺構をかまえ、中期中葉になると、他地域同様、遺跡は大きくなり、扇中央部を中心としてより広がる傾向をみせているといえよう。しかし、中央自動車道にかかわる天竜川右岸地域の調査では六地在家遺跡で4軒の住居址が検出されたのみで、同左岸の後田原、長塚、殿村遺跡などに較べると、地形的な面からも小規模にならざるを得ないであろう。

2) 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居址

ほぼ同時期と考えられる3軒の住居址を検出した。扇頂部に近く、この3軒が本遺跡の弥生後期集落の南端であることは間違いない。既調査のA・B両地点などの状況から、弥生期集落は扇状地の中心線より西側に主に分布し、扇端部になるに従って濃密になるらしい。扇状地形という制約でもあるだろうが、西側扇側部に連なる豊富な湧水や、その水によって涵養された天竜川との間に開かれた西側の水田地帯の存在も見逃せない。しかし、昭和54年度岡谷市教委によって調査された橋原遺跡は、直線距離にして約1km東にあるが、本遺跡より相当大きな扇状地の扇端部に20軒以上の住居址が発見された。本遺跡も、橋原例から類推すると、扇端部により濃密な集落の存在を考えてもよいかも知れない。

3軒の住居址は、内容、規模ともさして変らない。ただ、3号址のみがやや小形である点、2号址のみ埋甕炉が東北壁、西南壁に2ヶずつある点がちがっている。柱穴は4本、主柱穴内の中間部位に1ヶ所埋甕炉をもつ在り方など、該期住居址と似ている。天竜川沿岸の同一グループに属する上伊那郡辰野町樋口五反田・同樋口内城遺跡には同時期の資料が多い。

個々の住居址の構造分析や集落内における在り方については、宮沢恒之氏が上・下伊那郡下の発掘調査された主な弥生遺跡20ヶ所、住居址数114例を資料として、竪穴の形態、床面規模など精密な分析結果を発表している。本遺跡例はわずか3例ではあるが、余り特異な点は見出せない。土器の項で指摘されたような、伊那谷と諏訪地方の差異は住居址ではないが、今後、橋原遺跡の整理が進む中で解明される点があるかも知れない。

(2) 土器

志平遺跡の所在する諏訪湖盆は天竜川上流域に位置する一方、塩尻峠を越えれば、容易に松本平にでることが可能である。従って、弥生時代中期中葉以降の弥生土器は、天竜川中流域(下伊那地方)の文化と千曲川流域(松本平)の文化とが常に接触しあう中で、かなり独自性の強い土器が成立した。それらは、すでに天王垣外式―海戸式なる土器型式名が与えられて、明らかにされている。しかし諏訪湖地方の後期弥生土器は岡ノ屋式土器なる型式名は与えられているものの、その型式内容とその性格は十分ではなく、さら

に、その前後の土器群については、ほとんど明らかにされていないのが現状であるといえる。従って、本遺跡出土の土器群が示す内容は、当地方の後期弥生土器の性格と、編年研究を進める上で、好資料であるばかりでなく、弥生時代後期に至って、顕在化する千曲川流域と天竜川流域の土器文化の対峙⁽⁶⁾の中で、その接触区域の土器内容が明らかにされるのみならず、広く、弥生時代における文化接触のあり方を探る上で貴重な資料を提供したことになろう。

その意味で、本遺跡出土の土器群の性格を、周辺地域との比較の中で若干まとめてみたいと思う。

本遺跡で検出された3軒の住居址から得られた弥生土器は、下伊那地方の座光寺原式土器⁽⁷⁾と強く共通する面が多い。壺A、甕C・D・Eの多くはまさに座光寺原式土器そのものか、それに近似するものである。甕に描かれた文様帯も、例えば波状文と短線文の組みあわせ、3条またはそれ以上に描く波状文や短線文の存在は座光寺原式土器の甕と強く共通する面である。他方、甕A・Bにみられる口縁部の外反及び頸部から体部への張り方は、座光寺原式土器の甕では口縁部が、次期中島式土器⁽⁸⁾ほどではないにしても、短かく、強い。また、体部の張り方も弱く、むしろ甕C・Eに似るのが一般である。この点ではむしろ、千曲川流域の後期弥生土器の甕と共通する面が強い。同様の例では2種の櫛描文にもいえる。つまり、天竜川流域の後期弥生土器を特徴づける畿内型櫛描文と、千曲川流域のそれを特徴づける中部高地型櫛描文の共存である。特に、甕Bにみられるように器形は千曲川流域の後期弥生土器と共通する要素を持ちながらも、そこに描かれる櫛描文は畿内型で、下伊那的である。逆に甕Cでは器形は下伊那的でありながら、櫛描文は中部高地型で千曲川流域的である。このように、本遺跡出土土器の約半数は、千曲川流域と下伊那地方の後期弥生土器を特徴づける諸要素が混在しているといえよう。しかし、壺Aや甕の一部に描かれる短線文と壺Aおよび甕Eは、全く千曲川流域にはみられず、他方、赤色塗彩された高杯は千曲川流域の特徴を示すもので、両地域の特徴をもつものが、単独に存在しているのも大きな特徴といえよう。

以上のように、志平遺跡出土土器の示す様相は、下伊那地方と千曲川流域の特徴をもつ土器がそのまま共存する一方、甕の中に示されるように、両地域の土器要素が融合しあって成立したものもかなりみられるのである。従って、本遺跡出土土器は両地域にはみられない後期弥生土器であるといえるものであり、例えば、甕Aのように壺の器形に近い甕の存在も、こうした指摘の上で始めて理解できるものといえよう。勿論、甕Aにみられる壺に近い器形をもつ甕は、例えば千曲川流域の吉田式土器⁽¹⁰⁾の中にもみられるのであって、単に、諏訪湖盆地域のみにみられるものではない。しかし、千曲川流域では後期前葉で姿を消し去ってしまっているのである。

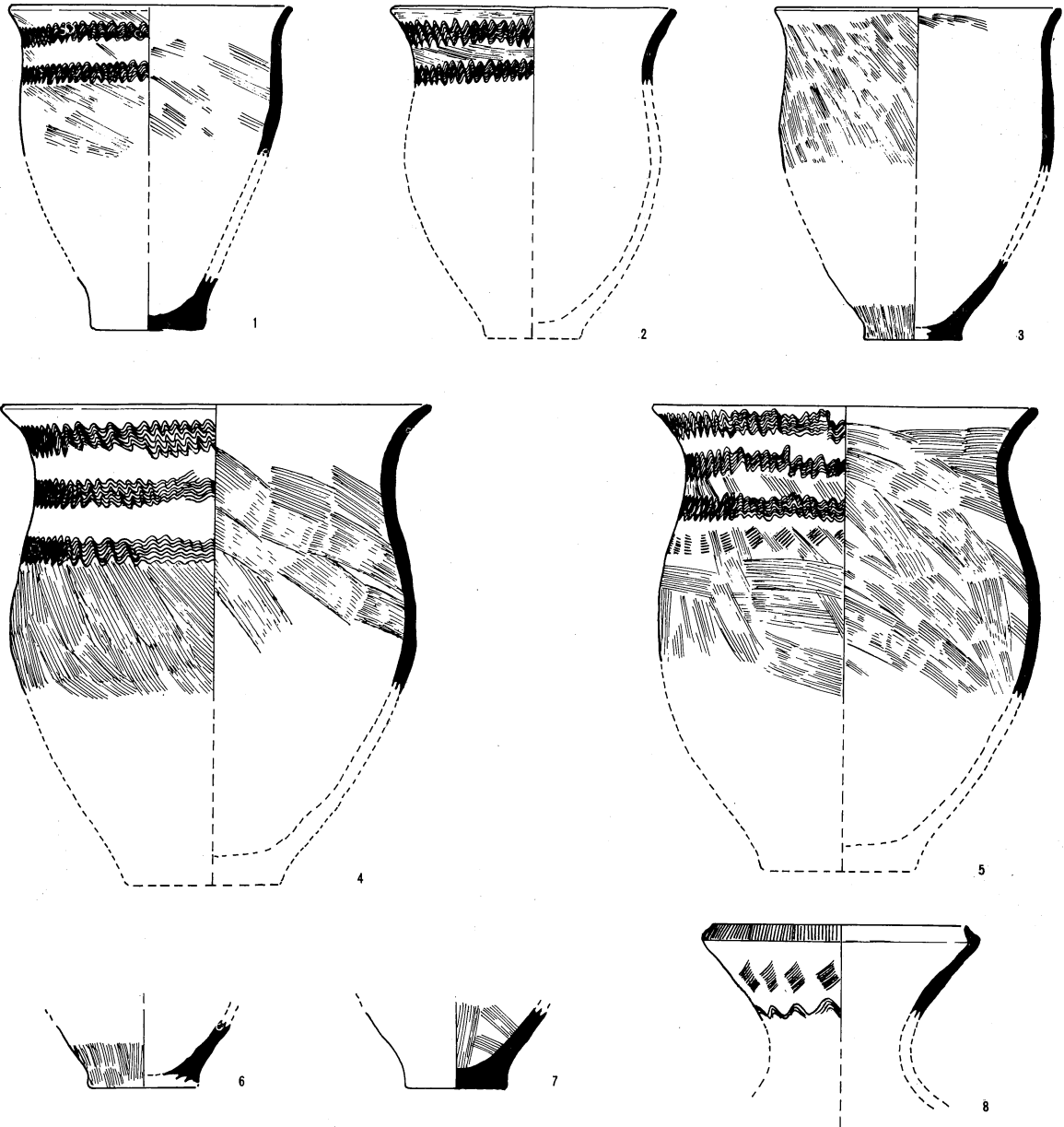
諏訪湖盆地域にみられる、いわば弥生時代後期の南・北両文化の融合現象は、天竜川上流域にもみられる。上伊那郡辰野町樋口内城遺跡第22・23・42号住居址⁽¹¹⁾では、下伊那地方でははっきりしていない、恒川式土器⁽¹²⁾と座光寺原式土器の間を埋めると思われる土器群が出土している。ここでは、吉田式土器と共通する土器群とともに、恒川式土器から座光寺原式土器に移行すると考えられる過渡的要素をもつ土器群が共存しているのである。⁽¹³⁾

志平遺跡出土土器群は、まさに、樋口内城遺跡22・33・42号住居址出土土器に後続するもので、それは下伊那地方の座光寺原式土器、千曲川流域の箱清水式土器⁽¹⁴⁾に併行関係のある、弥生時代後期中葉の土器群と考えられるものであり、下伊那地方の土器を基調としながらも、複雑に千曲川流域からの文化的影響も受けて成立した、諏訪湖盆地域の独自性のあるものといえよう。

第IV章 調査遺跡

- 註1 中村竜雄 『長野県岡谷市川岸志平遺跡発掘調査報告書』 岡谷市教委 1966
中村竜雄・高林重水 「岡谷市川岸志平遺跡第2地区発掘報告書」 岡谷市教委 1967
- 2 佐原真 「弥生式土器製作技術に関する二三の考察—榑描文と回転台をめぐって—」 『私たちの考古学』5 1959
笹沢浩 「中部高地型榑描文の系譜」 『中部高地の考古学』 1978
- 3 神村透 「中部高地」 『日本の考古学』3 1966及び註2
- 4 桐原健 「弥生式遺物」 『海戸』 岡谷市教委 1967
- 5 註4に同じ
- 6 註2に同じ
- 7 今村善興 「飯田市座光寺原遺跡」 『長野県考古学会誌』4 1967
佐藤甦信 『的場』 松川町教委 1973
- 8 宮沢恒之 「飯田市中島遺跡」 『長野県考古学会誌』4 1967
- 9 笹沢浩 「八門構座・弥生土器—中部高地3」 『考古学ジャーナル』134 1977
- 10 笹沢浩 「箱清水式土器発生に関する一試論」 『信濃』22-11 1972
- 11 『中央道報告—上伊那郡辰野町その2—』1973
- 12 宮沢恒之 「飯田市恒川遺跡」 『長野県考古学会誌』4 1967
- 13 註10に同じ
- 14 註10に同じ

1号住居



2号住居址

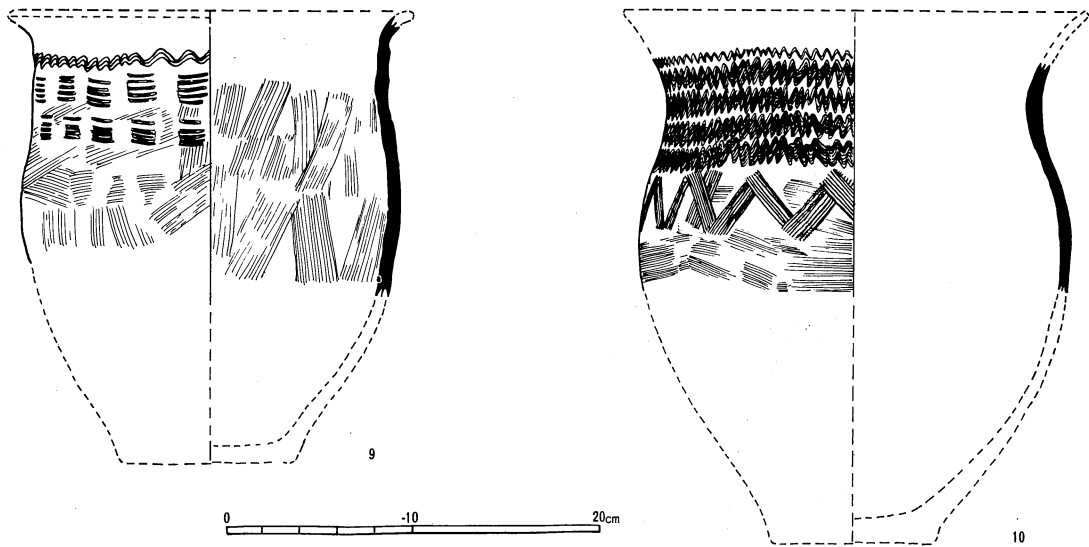
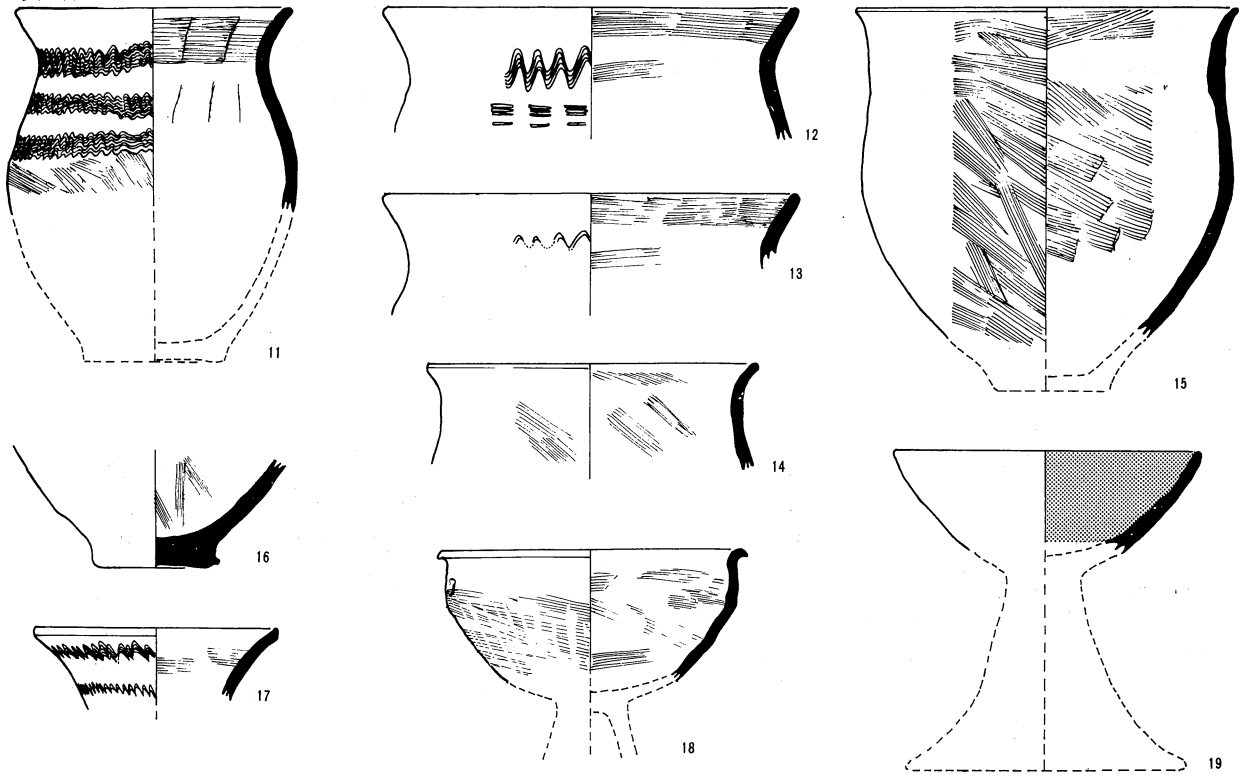


図9 志平遺跡弥生時代土器実測図 (1:4)

第四章 調査遺跡

2号住居址



3号住居址

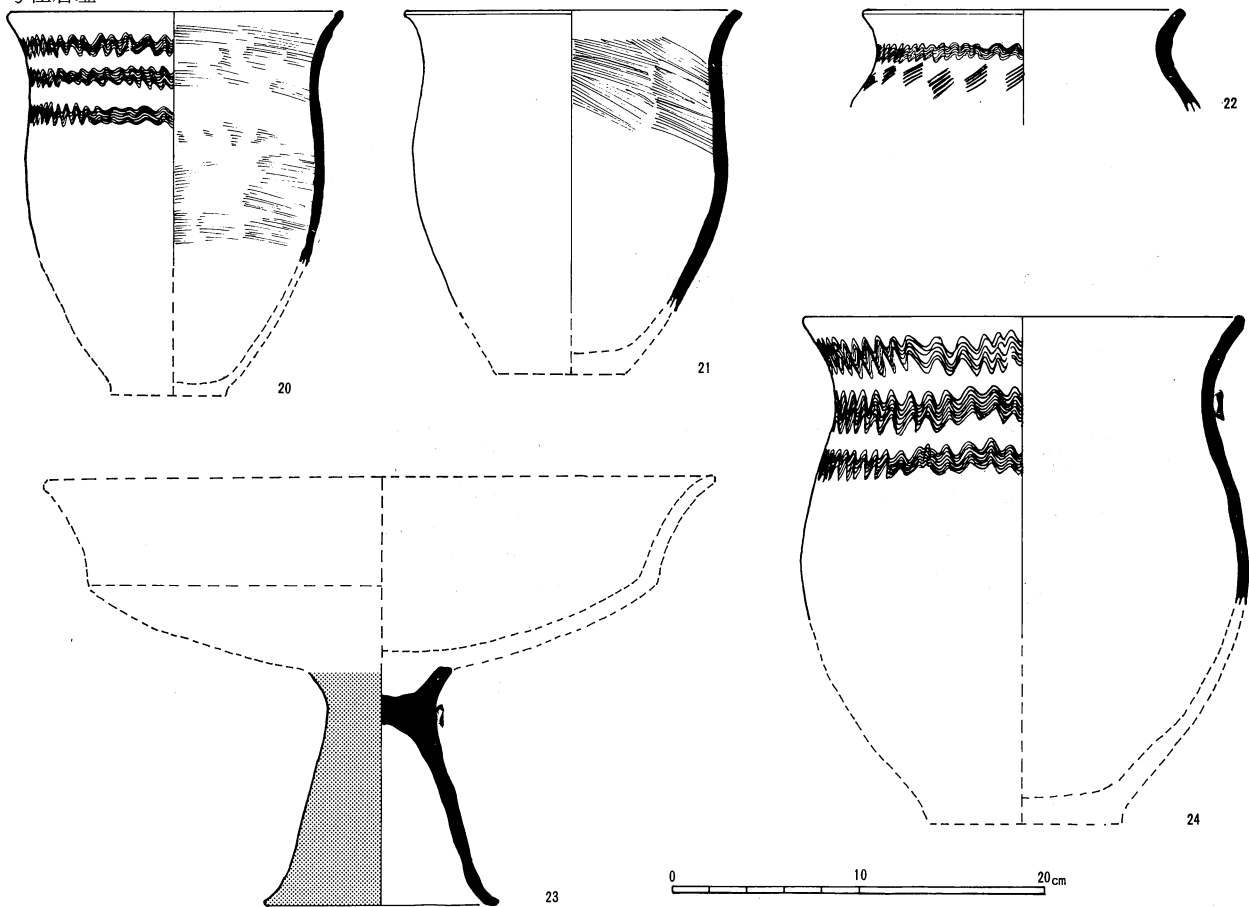


図10 志平遺跡弥生時代土器実測図(1:4)

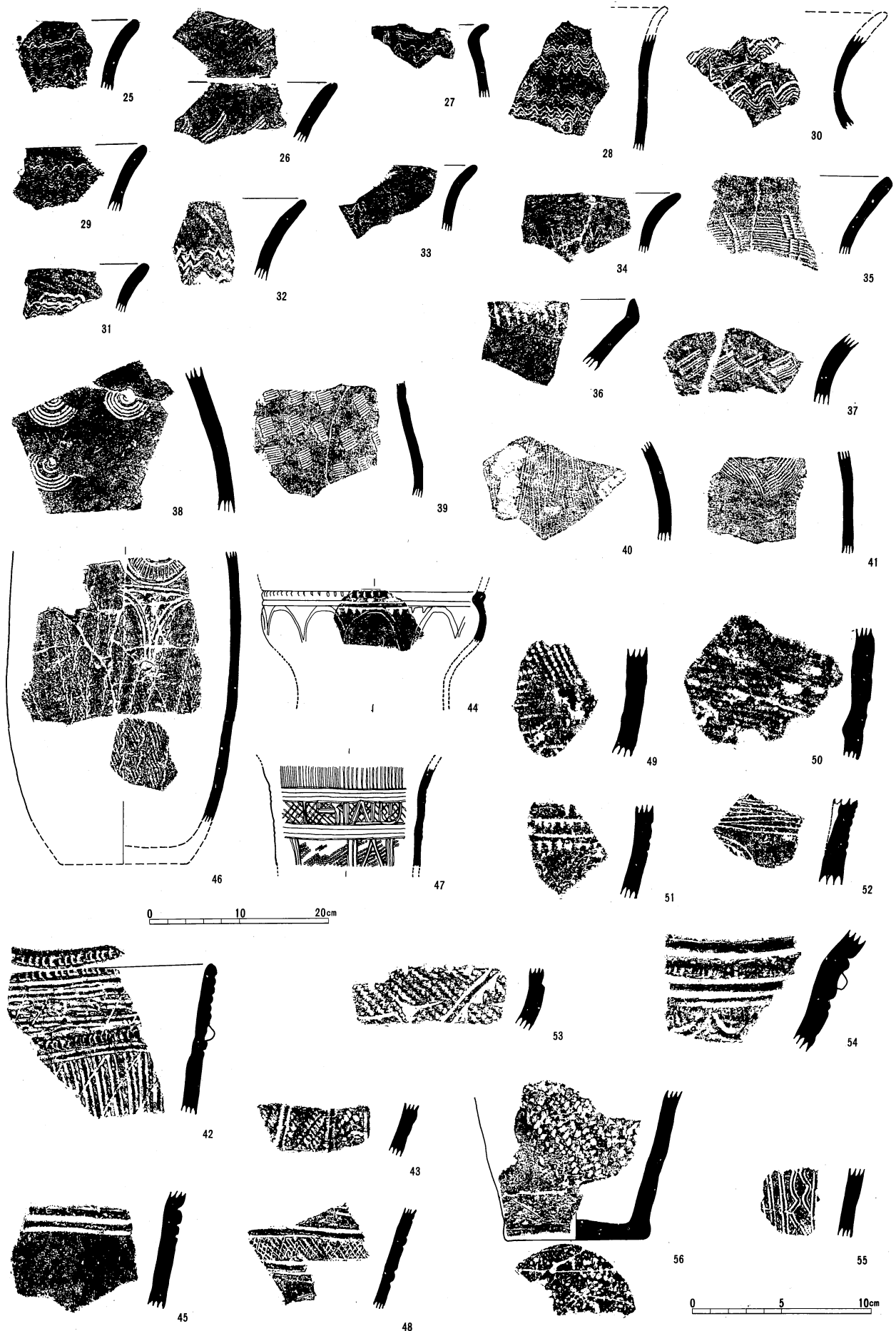


図11 志平遺跡縄文・弥生時代土器実測図及び拓影図(44・46・47 1:6, 他は1:3)

第IV章 調査遺跡

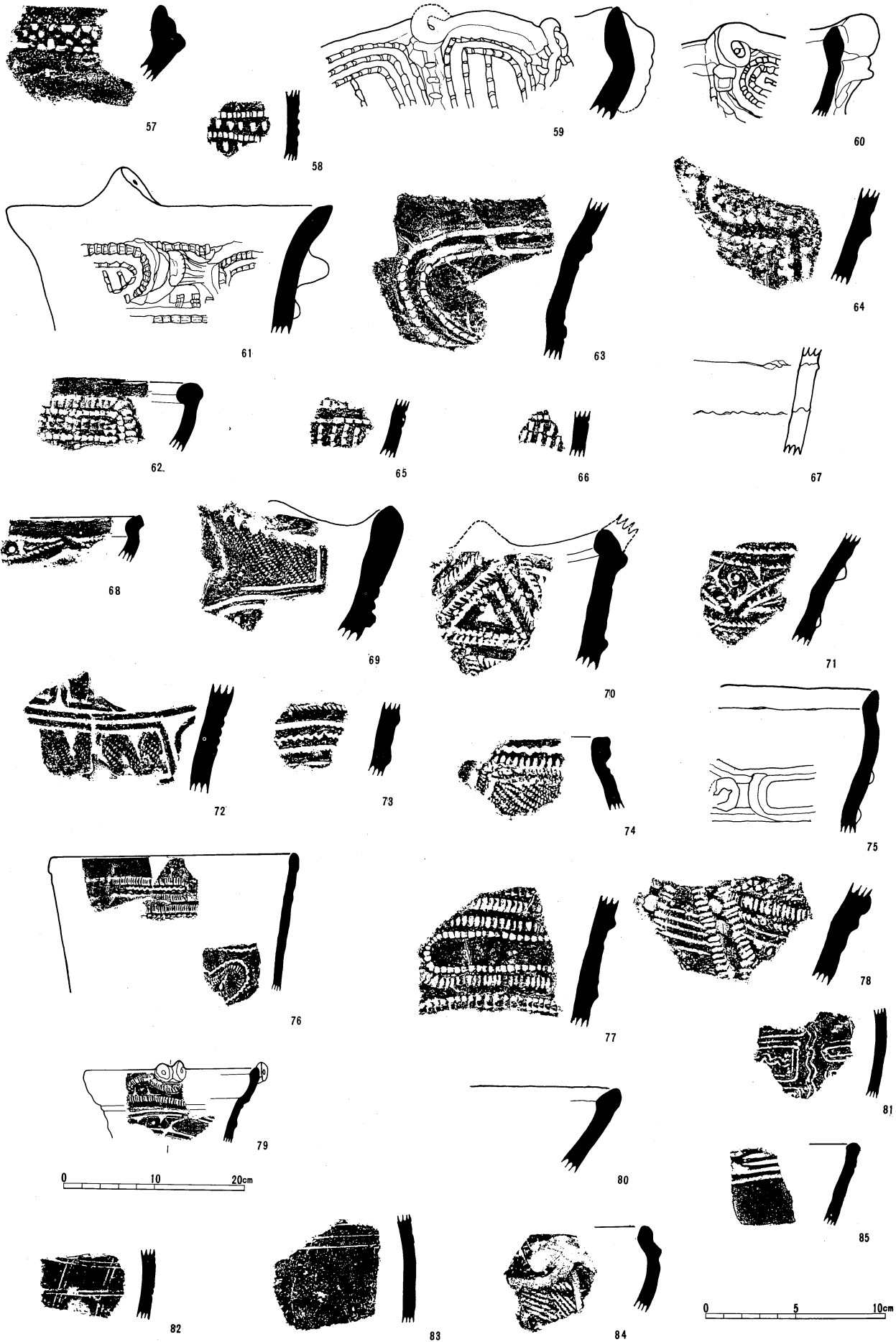


図12 志平遺跡縄文時代土器実測図及び拓影図(76・79 1 : 6, 他は1 : 3)

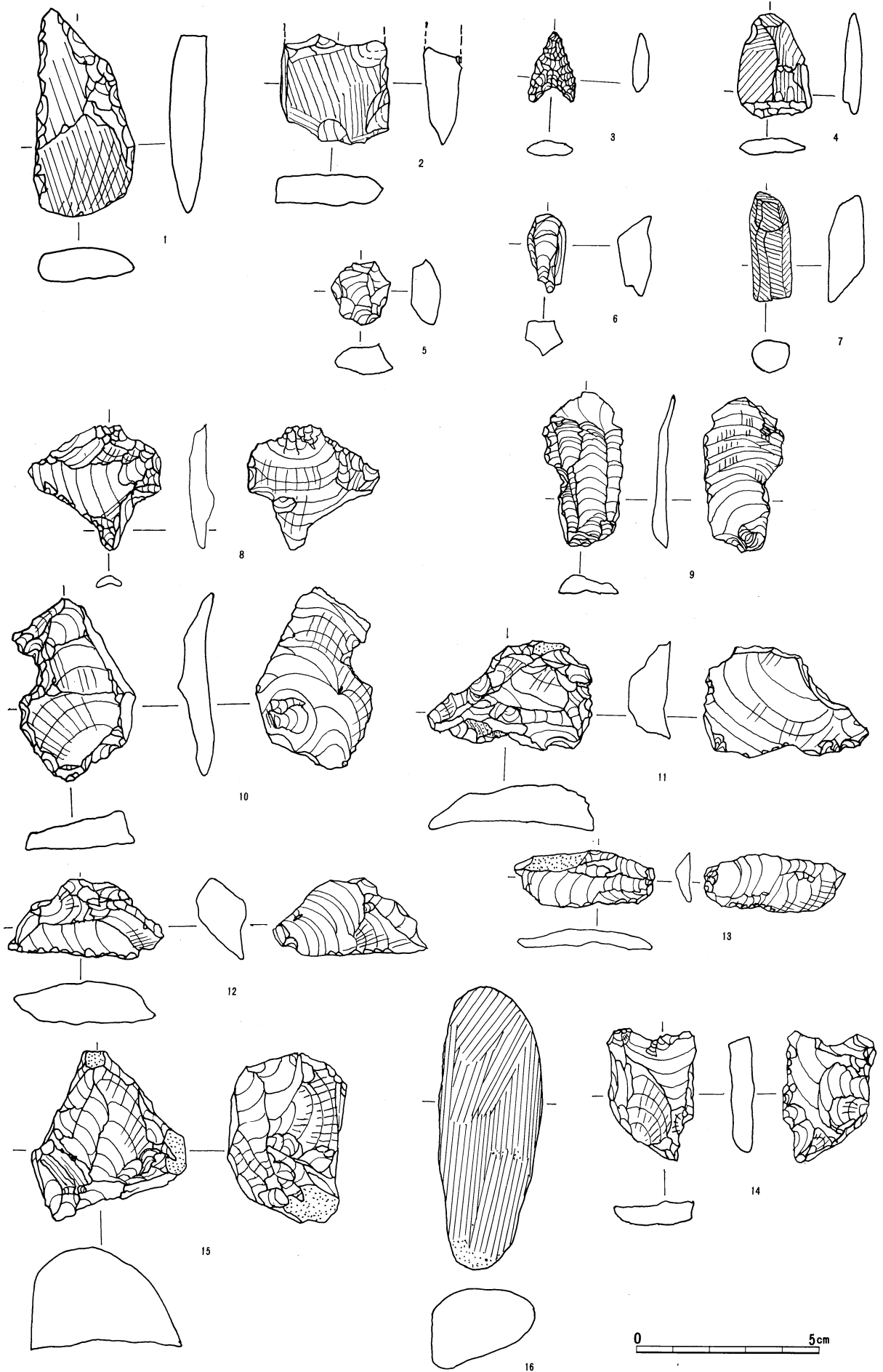


图13 志平遺跡繩文・弥生・平安時代石器実測図(1:1.5)

第IV章 調査遺跡

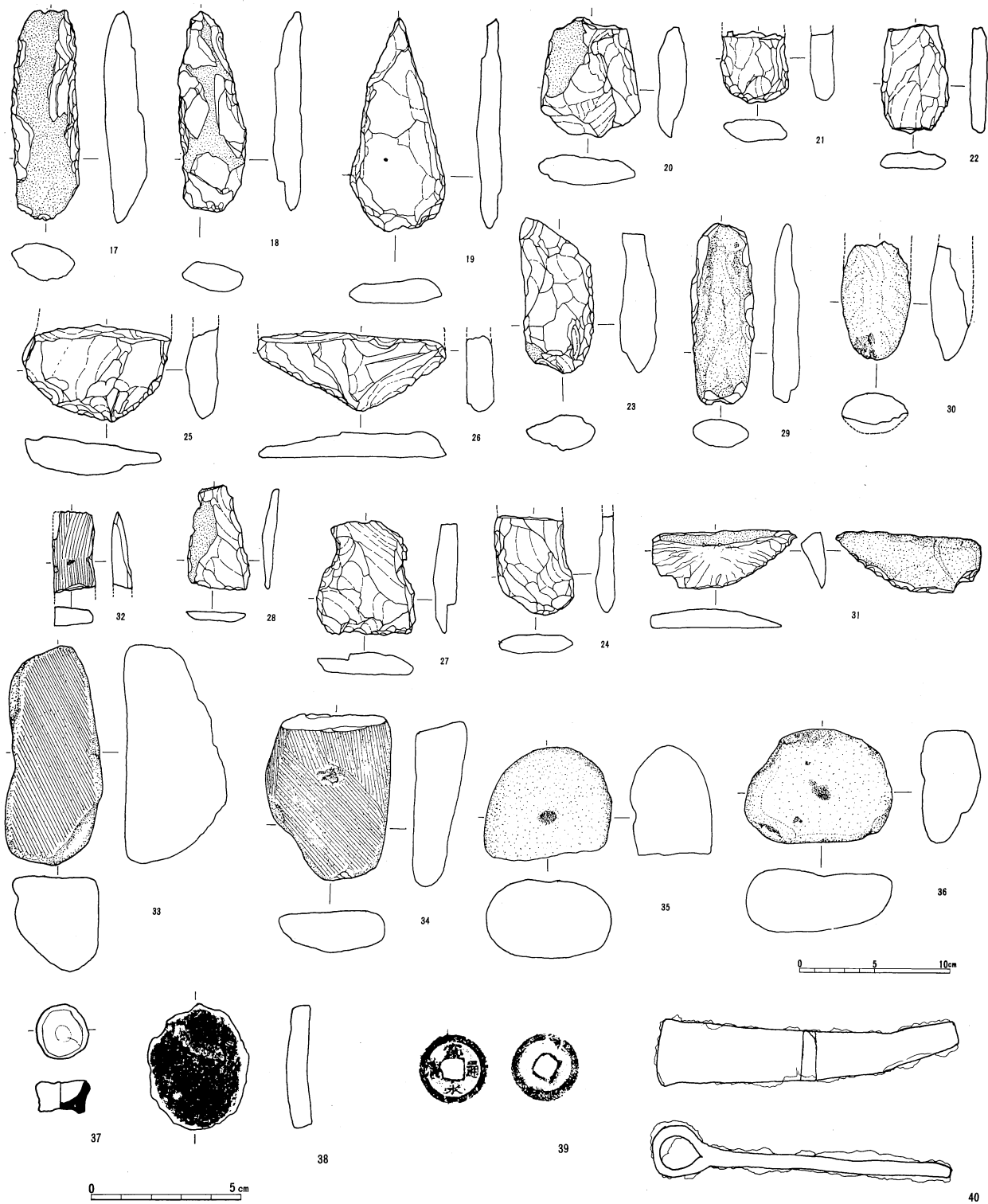


図14 志平遺跡縄文・弥生・平安時代石器・土製品・金属器実測図及び拓影図(17~36 1 : 4, 37~40 1 : 2)

第2節 経塚（経塚原）遺跡（SKTA）

1 位置（Ⅱ-図2、図1、図版8）

岡谷市川岸経塚原9996-2を中心にある。この地帯では守屋山系の山地が天竜川に接する部分には、いくつかの小さな河川（沢）による小扇状地地形がみられる。本遺跡はその中では比較的広い方である。約250m西に志平、約100m東には洩矢の各遺跡が同地形上に雁行して位置している。天竜川までの直線距離は200m、標高770～780m付近で、北北西に直線的にのびてきた幅狭い谷が、大きく西に広がる扇頂部一帯にある。また、本遺跡の背後の山地上わずかに開けた斜面上には縄文中期初頭期の朽久保遺跡がある。今回の調査地点は、志平、洩矢各遺跡同様、自動車道が橋梁で通過する部分である点からもわかる如く、両側に山地が迫っているが、上記の如く東側山地はほぼ直線的にのび、西側が扇頂部から相当広がるため、景観的には上記二遺跡より大きくみえる。

本遺跡は扇頂部から扇端部にかけて存在すると予想されているが、用地はその扇頂部約2500m²のみであり、中心部は用地外にあるらしい。なお、今回調査した地点よりやや谷奥へ50m程入った畑からは縄文前期末～中期初頭の土器片や石鏃などが出土するので、一連の遺跡と考えてよいであろう。扇状地を形成した経塚沢は、現在西寄りの山地側を流れているが、調査の結果では、全面に流路を変えたことがわかり、当初は東側山地で次第に西へ変遷していったらしい。なお、東側山地の突出部先端には湧水を貯めた池があり、扇側・扇端にも数ヶ所の湧水がある。

なお、本遺跡の名称は、公団契約時には「経塚原」であったが、岡谷市教委では「経塚」を使用しており、遺物処理上にも問題がないので、混乱を招かぬよう「経塚」に統一した。

2 発掘区の設定と調査の経過（図1、図版8）

1) 発掘区の設定（図1）

グリット設定は、最も遺構出現の可能性ある扇頂部中央の畑地を選び、センターラインSTA49+00と49+40を直線で結び東西の基準線とし、STA49+20の点で直角に振って南北方向の基準線（磁北より約40度西へ傾く）とした。当初、東西方向は用地内でもSTA48+00付近の水田まで遺跡が広がるものと予想していたので、STA49+20を起点として以西にA・B地区、以東をC・D地区に区切った。しかし、結果的にはA地区全域とD地区のO・M以降の山地は遺構・遺物がほとんど検出されず、B地区とC地区の半分約80m間が調査区域となった。一方、南北方向も他遺跡と同じくセンターライン南側を50とする2m間隔に区切ってグリットを設定した。

2) 発掘調査の経過（図1）

当初、調査予定面積が5遺跡の中で最も多いのでその進行を懸念したが、上記の如く、A地区の大半で遺構が確認できず、かつ、B地区でも1号住居址のみの検出に終り、前半は予想以下の日程で終了した。しかし、後半はB地区に検出された大規模な「集石」群の確認のため意外に日時を費す結果となった。



図1 経塚遺跡付近の地形と調査区・遺構 (1:500)

7月11日より開始したグリット調査は、A地区では水田造成のための攪乱と、その下部はすぐ河(沢)床礫の堆積で遺構の存在はまったくつかめず早めに切り上げた。同時に行ったB地区では、K～Nライン北西は、現経塚沢の流れにより相当深く黒土層が堆積し、山寄りのBM57・BH55などでは約2mにも及びその下部はA地区同様の大石が覆うという状態で、遺構の存在は全く期待できなかった。しかし、この厚い黒土層中には縄文前期末～中期初頭の土器片や磨製石斧なども出土し、前述した用地外のより谷の奥まった所に中心部のある同期遺跡との関連が指摘できる。一方、B地区でも経塚沢の左(北)側のBN～BY列内は扇頂部の最も高い部分にあたり、むしろ黒土層は浅く、20～30cm前後で、基盤のロームも大小の礫を含んで余り安定せず、遺構もなく、遺物もごくわずかであった。

7月中旬、比較的耕土が浅く、かつ礫の多かったBV～BY43～41を中心に平安時代の1号住居址が、あわせて同傾向の土層状態にあったCA～CC55～53付近で、炭化材が床面に散在する2号住居址をそれぞれ検出した。また、1号住居址の西側BT42グリットからは須恵器大甕の入った土壇が発見されたので付近を拡張した。

7月下旬、1・2号住居址の掘り下げと同時に、縄文晩期土器片の出土が多く、かつ「集石」群の予測されるC地区山寄り一帯を、2号住居址付近まで全面調査することにする。経塚原開拓の記念碑のある付近のCG～CL43～47一帯は、一段と低い畑であるが、黒土層が深く、その基盤は沢の流路を示す大小の礫となっていた。しかし、CI～CK49～54にかかる一帯は、遺物が一面に散布し、かつその間に焼土がわずかではあるが堆積しているなど、何らかの遺構を考慮すべき状態となったので、一応全面発掘へと切りかえた。遺物はすべて出土地点を記録する方法をとったので、「集石」の検出と共に時間がかかり、全面が露呈したのは8月下旬になってしまった。

数群に分離可能にみえた「集石」群も、断面図作成のために数ヶ所で狭いトレンチを設定していくうち、次第に人為的とするより、自然的な堆積と考えるべきとの意見が強くなった。しかし、将来のためにも「集石」群の実測図は必要と考え、全面にわたる実測図を作成した。この間、1・2号住居址の発掘、整理も同時進行し、あわせて東端山地にも調査区を延長した。それはこの部分が、付近では最も平地に突出している上、遠望すると、古墳の墳丘を思わせる地形を呈していたので、或る期待をもって発掘したが、得るところがなく自然地形であることがわかった。こうして9月3日、ほぼ調査を終了し、9月5日残務整理後、次の小手場沢遺跡へ移動した。

3 土層(図2)

本遺跡もまた、扇状地上の立地に加え耕作による攪乱などもあり、地域によって大幅な土層の相違が認められた。水田(一部畑地)であるA地区は、耕作土下20～40cmにかためられた床土があり、以下黒土層がつづく場合と、50cm前後で自然礫を含む沢の流路に近い状態の堆積が認められた。遺物は皆無である。B地区に入ると沢を狭んで大きな相違がある。左岸に当る山地までのわずかな畑地は、耕土下1.5m～2mで先の礫層に達するが、その間、褐色土-黒褐色土-砂礫層-黒土層の順となるが、砂礫層は数m離れたグリット間でも有無がある。最下層の黒土層上面と黒褐色土層が遺物包含層となる。

B地区のF～J43～48は、耕作土下すぐ黒色土となり50～70cmで大石がゴロゴロする状態となり、ほとんど遺物は出土しない。ここより東側のB地区の大半は、扇央部に近いので耕作土が浅く20～30cmで茶褐色土層となり、その下に小礫を多く含む粘着性のないロームの地山となる。この茶褐色土層は自然堆積で耕作のため相当けずられている。ために耕作土-地山といった部分もある一方、この付近で黒土層が存在

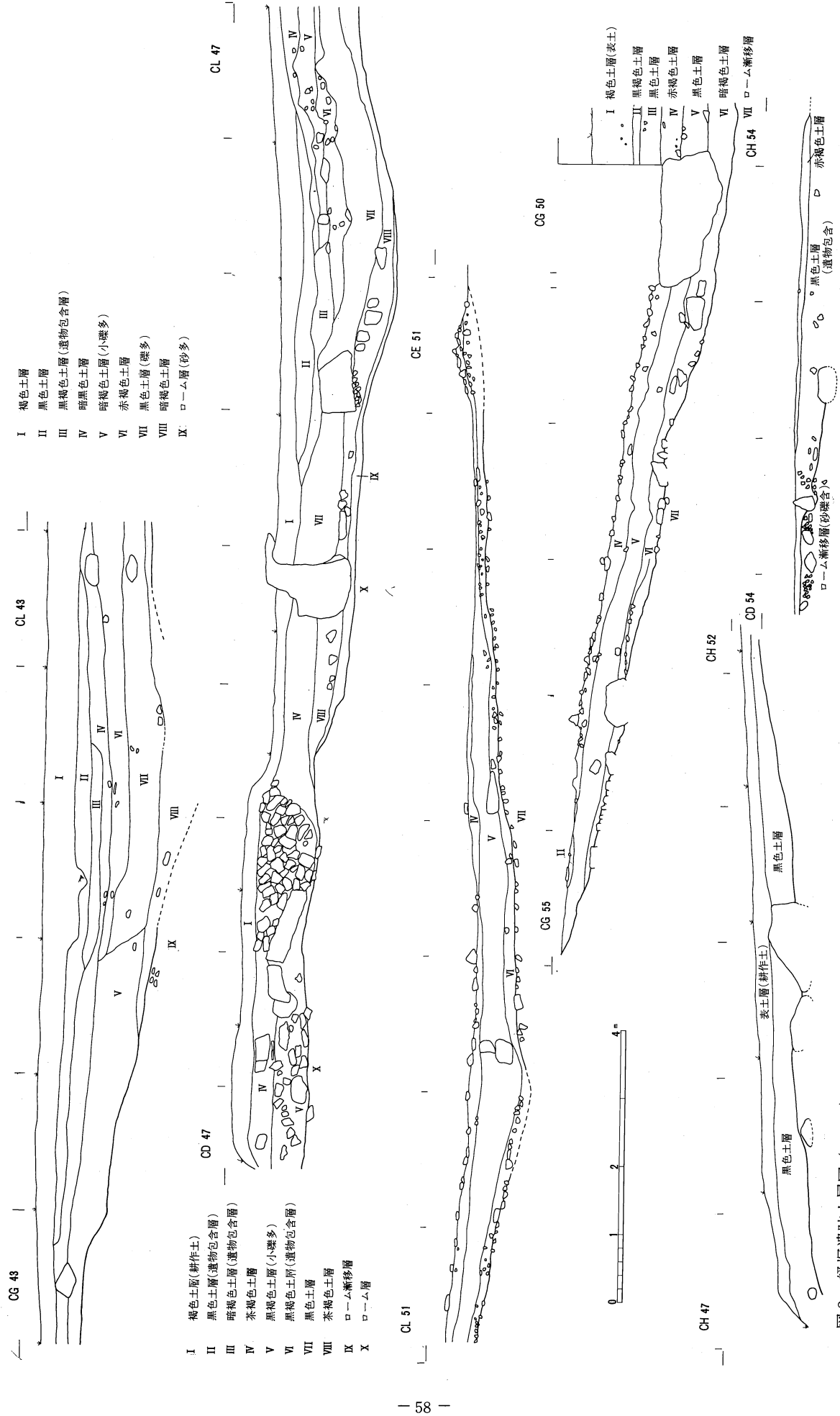


図2 経塚遺跡土層図 (1:80)

すると土塚や住居址の存在が予測された。1・2号住居址などはこうして発見された。また、A B両地区の境界付近は扇状地の最も高い部分であるため、先の地山までほとんど攪乱をうけている。1・2号住居址ともこうした礫の多い地山を掘り凹めて構築してある。

C地区になると再び扇側へ向うため、地山は東側に近づくほど深くなり、山地との境付近であるC L列では4 mの深さを計るほどになる。C D～C G列付近よりこの傾向が認められる。扇頂部に近い50列より上と、扇中央部に近づく49列以下ではこの堆積状況も異なるが、その中間地域の一般的な堆積状況は次のようになる。耕作土30～60 cm、黒色土30～100 cmとつき次に小礫が出はじめ、以下暗褐色や赤褐色土50～70 cmとなり、次にローム漸移層ともいべき黄褐色土層で、最後にロームの地山となる。この黒色土層は、遺物を多出した「集石」群や住居址内では、木炭粒やローム粒をわずか含むが、他では余り夾雑物がない。また、遺物の包含はこの黒色土層中であり、その下部の小礫の多い暗褐色土層では皆無となる。だがB F～B H列にかけては古い沢の流れが、拳大の石を混えた黒色土層が溝状(深さ20～30 cm)に扇状地の地形と同じ方向に走っていて、相当の深さまで、縄文晩期のみでなく中期初頭の土器片がわずか出土した。

以上のように扇状地上に立地する本遺跡は、その中央部は浅く、扇側が深くなる一般的な土層堆積関係を示し、沢の流れの影響をうけない中央部に住居址が検出されたに止まった。人為的構築と考えて調査した「集石」群も種々検討した結果、自然堆積の可能性が近いと判断することにした。

4 遺構と遺物

1) 縄文時代の遺構と遺物 (図3～図13、図版9～19)

今回の調査では、住居址、土塚等は未検出に終わった。しかし、以下の「集石」群については、調査中は勿論調査後の整理段階の検討でも、「遺構」として位置づけるか否か決定し得なかったが、一応、集石自体は自然堆積と結論づけるが、「集石」群中に焼土が存在すること、遺物、とくに土器の出土が多いごとの二点を考慮し、純然たる「遺構」ではないが、今後同種遺構の研究のためにも、やや詳しく調査経過や結果を報告することにした。名称はまぎらわしいが「集石」群とした。

(1) 「集石」群 (図3・4、図版9)

扇状地の中心部で1・2号住居址が検出され、グリット掘りが扇状地の西端部にさしかかった時、縄文時代の晩期第V群土器片や石器の検出が頻繁となった。中には第I～IV群(早～後期)土器や土師器片等も含まれていたが晩期土器片が最も多かった。そこで全面掘りに方針をかえ、遺物の全点につき位置とレベルを記録する方法に切り替えた。掘り進むにつれ石が集中的に現われ、一定の拡がりをもっていることが確認された。そこで人為的な集石遺構の一種かもしれないと考え周囲を更に拡張した。すると扇中央寄りに5.5 m×4.5 mの範囲に別の集石のまとまりが現われた。この後で検出された集石を2号と呼び最初に検出された集石を1号と呼ぶこととした。この集石の性格を探るため最終的には扇状地の上方をも全面的に掘り下げてみた。すると二つの集石のまとまりが検出された。発掘時には最後の2群の集石については呼称をつけなかったが、ここで記述の都合上、2号の上部の集石を3号、さらにその上部の集石を4号と呼ぶこととする。

集石1は、扇状地の最東端部すぐ東側が山地になる部分にあり、北側の天竜川方向に向ってゆるく傾斜する面に4.5 m×8 mの範囲に、傾斜方向に沿って細長い長楕円形の形に拡がっている。表土面から集石面までの層序は集石1の範囲内では一様であったが、各層の厚さは異なり、上方ほど表土面から集石面まで

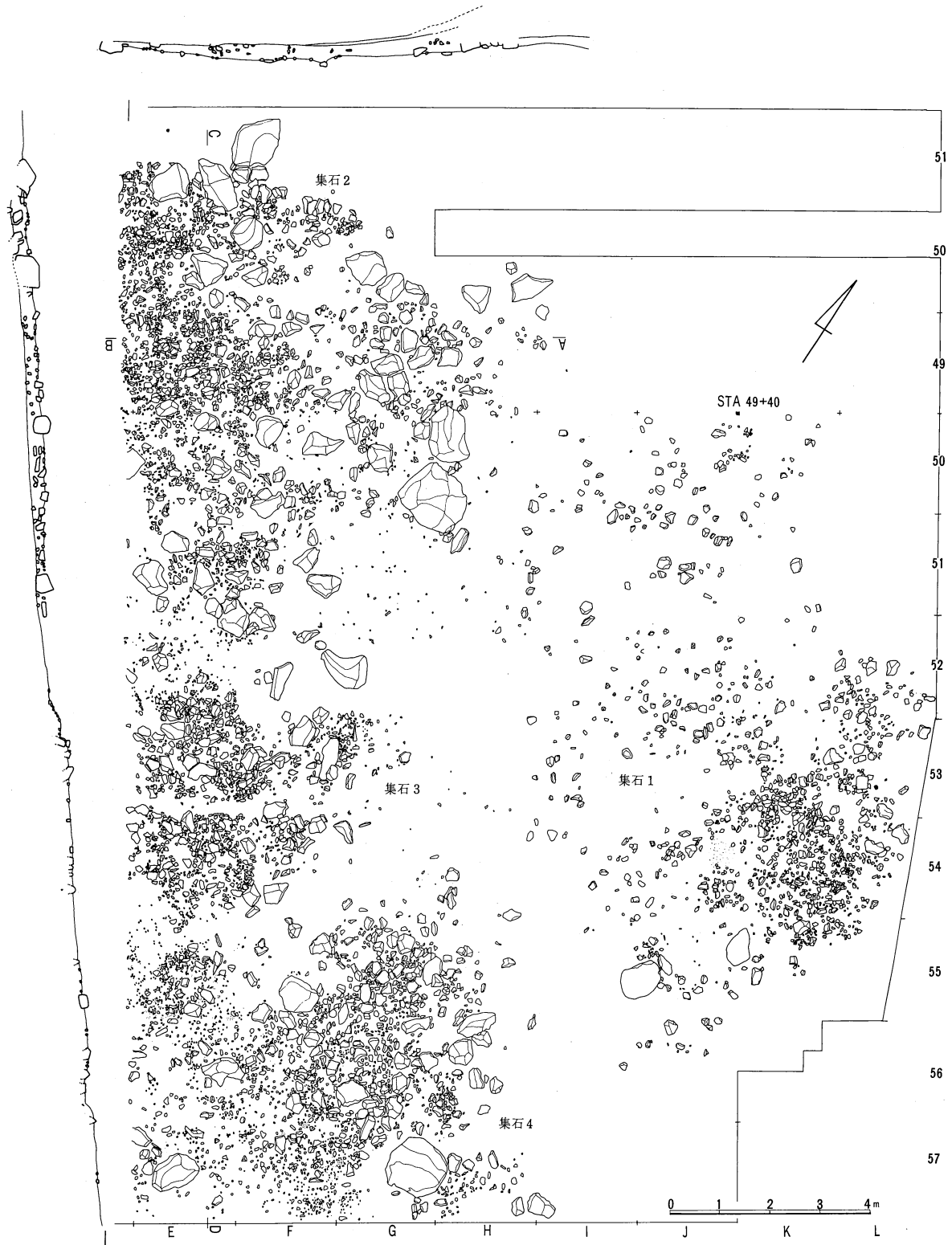


図3 経塚遺跡「集石」群 (1:120)

は浅かった。北端のセンター杭の部分では最も厚く土層が堆積しており、表土層(褐色土層)60cm→第1黒色土層40cm(この上層10cmは黒褐色土層)→赤褐色土層30cm→第2黒色土層40cm→暗褐色土層40cm→ローム

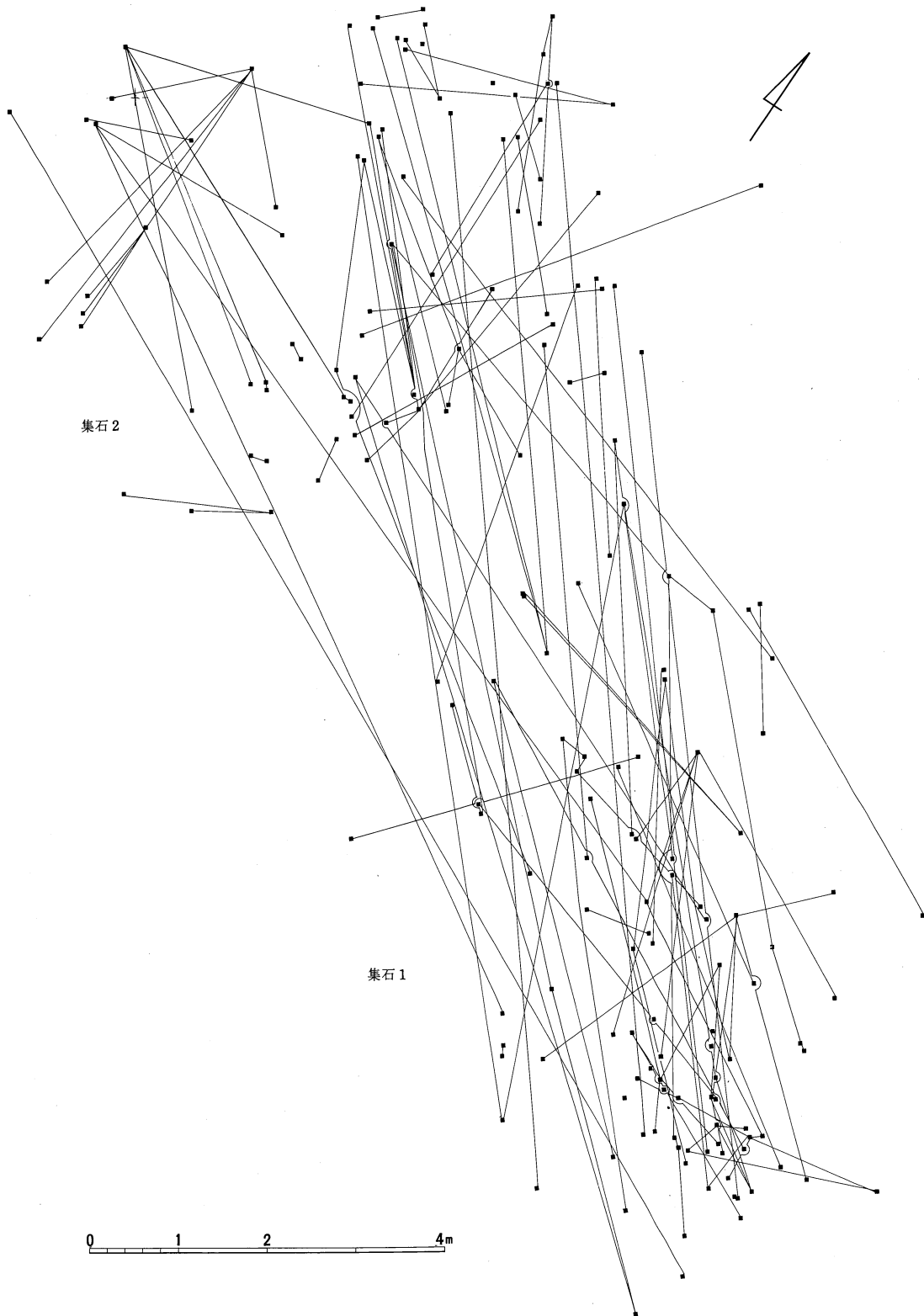


図4 経塚遺跡「集石」群内出土土器接合関係図(1:70)

第IV章 調査遺跡

漸移層という層序であった。集石面は第1 黒色土層下部から赤褐色土層の上部に形成されていて、縄文晩期の遺物も集石面の上部から散見されたが、主としてこの集石の層に集中して検出された。ただし赤褐色土層には遺物量は少ない。この遺物検出層の上位では土師器片や灰釉陶器片も若干、混在していた。また晩期の遺物検出層の下位、そして赤褐色土層下部から第2 黒色土層上部にかけて主に縄文前期末～中期初頭の遺物が検出された。この赤褐色土層下部から第2 黒色土層には集石はほとんどみられない。

集石の全体図のうち集石1については、その最上面を作図したのでやや密度が希薄となっているが、上方の密集部分には、中心に厚さ5cm、径60cmの焼土がみられた。1号集石を構成する石は2～4号に較べて大きさが平均化して一定していた。試みに集石の周囲にある大きめの石を残しておいて、この最上面の集石を取り除きながら掘り下げると連続して集石があらわれた。しかし、特に人工的、意図的な配列は読みとれなかった。それに、焼土の周囲を精査したが床面、壁、柱穴などは存在せず屋外の焚火跡の可能性がよい。さらに集石1の性格をつかむため、最後に十字に切り掘り下げたが、第2 黒色土層とその下部の暗褐色土層を取り除くと再び集石面が現われた。しかし、この方は、大小の石がぎっしりと詰っており明らかに自然の堆積状態であった。

集石2～4は、動かすことが不可能のような大石から拳大以下の径3～5cm大の小石まで大小各種から構成されている。このうち特に集石2は、大石が環状に並ぶようにも見えたが意識性や計画性はみとめられなかった。そして集石3と4および2の南半では、石がローム土風の黄褐色土層に一部くい込んだり含有されたりしていること、2号～4号集石は風雨で形成されたと思われる。図示できない小指大の小石や砂質のザラザラしたローム粒も含まれていることから、自然の堆積だと判断された。しかも石の堆積状態は、地形の傾き方向に沿って、上方にある石が下方の石の上に一部かぶさる形で堆積している。地質の専門家(測量研究所の藤森徳雄氏)の教示では、この重なり状態は、自然作用で石が低い方へ流れたことを物語るもので、明らかに、自然堆積によるものだという。集石2～4は、集石1の下層にある集石面に連続していることも断面作成で確認でき、集石4・3・2・集石1との中間の集石のまばらな場所が、ローム質の土層面を追うかぎり、溝状地形のように低くなっており、黒色土も最も厚く堆積していた。そして、集石1の北方、天竜川側では、CD48～CL48列、CG43～CL43列、CG44～CL44列、CD53～CH53列、CH47～CH51列には、湧水地点をもつ溝状の沢地形や若干の集石があり、前期末・晩期土器片も少量だけ検出されているので、集石は連続していると考えられた。

遺物は集石1と2にのみ集中して、3・4にはほとんど無かった。遺物は、晩期を中心とした縄文土器片のほか、土師器、須恵器の破片も混って出土したがこの混在の傾向は、集石2に多かった。平安時代の1号住居址と2号住居址が近接しているためであろう。集石1では下層に縄文前期末～中期初頭(第II・III群)の土器片もわずかに検出された。打製石斧等の石器類は、集石2より集石1に多く認められた。特殊な遺物として石剣が、集石1内の北端から出土したが周囲に特別な石の配置や穴は存在しなかった。赤色塗彩の耳飾(耳栓)も4号集石の北端から出土したが特別な出土状態ではなかった。

縄文晩期の集石遺構の可能性もあると判断した以後は、遺物の位置とレベルを1点ごとに記録する全点主義の方法をとった。それをもとにして整理の際、土器片の接合作業を可能なかぎり進めた。その関係を作図したのが第4図である。この図から、地形の傾斜面に沿って高い方と低い方の土器片とが接合する例が非常に多いことがわかった。これは土器片が傾斜方向に沿って自然作用を受けて流れたことを示している。縄文後・晩期にはこうした配石・集石・石積などの遺構が多く検出される。本調査団の実施した茅野市御社宮司遺跡(昭和52・53年度調査、未報告)でも、やや似た状況が確認されている。

(2) 遺構外出土遺物 (図5~14、図版12~19)

集石が自然堆積によるものである可能性が強いとすれば、本遺跡においては明瞭な縄文時代の遺構は存在しない。ゆえに縄文時代の遺物は出土地区、層位を考慮せず一括して説明することにした。

遺物には土器、土製品、石器がある。

① 土器 (図5~9、図版12~18)

土器は五群に大別される。第Ⅰ~第Ⅳ群はいずれも小破片で器形を知り得るものは無い。また遺跡全域から、散漫に出土しており、明瞭な包含層は把握されない。遺跡の末端に当たるか、上流の遺跡からの流出の結果であるかと思われる。これに対し第Ⅴ群は「集石」付近に集中し、他地区では少量しか出土していない。「集石」自体は人為物ではないにせよ、「集石」付近を一種の生活面としていた可能性は高いものと思われる。以下、各群を説明する。

第Ⅰ群 (1~6) ……胎土に繊維を含む類を一括する。

第1類 (1~3) ……原則として外面が丁寧に研磨され、内面は簡単に磨くか粗なままで器表が剥落することが多い。繊維の量は多い。研磨後、外面には楕状もしくは板状工具による浅い条痕が加えられるものと、いわゆる絡条体圧痕文が加えられるもの、無施文のものがある。

第2類 (4) ……胎土の繊維の量は微量で砂粒の混入が目立つ。器表は内外とも粗である。外面に刻目状の押圧痕が加えられる。

第3類 (5・6) ……外面には単節又は無節の斜縄文が加えられ、内面は丁寧に研磨される。繊維、砂粒ともに多く含まれている。

第Ⅱ群 (7~110) ……胎土に繊維を含まず、縄文及び半截竹管を用いた各種の施文が用いられるものを主とし、概ね前期に属するものを一括する。

第1類 ……やや薄手で胎土に雲母粒が目立つ。内外面とも指によるものと思われるオサエの痕跡が顕著にみられ、内面にはナデ痕が残る。

第2類 (7~9) ……胎土に少量の雲母を含む。器表は内外面とも研磨されるらしい。施文は半截竹管を用いた平行沈線、連続爪形文や、鋭いへら様工具による三角形構図の沈線文等がみられる。

第3類 (10~53) ……波状口縁の深鉢が多いらしく、口端部は平坦な面をつくる。底部は鋭く外反するらしい。胎土には砂粒、長石等の鉱物粒、微量の雲母粒等が含まれる。器表内面は研磨されるのが原則らしいが、焼成不良で風化が著しいものも多く、調整が看取しきれない。幅の狭い半截竹管を用いた施文を主とし、施文方法によって細分するが、器体の部分によって異なる施文方法が用いられるとすれば、この細分は単に便宜的なものにすぎない。

a. (10~37) ……半截竹管による連続沈線が引かれるもので、原則として第3類総てに共通する、いわば地文である。沈線は平行に連続するものとやや乱雑なものがあり、浅いものと深めものがある。粘土粒をボタン状に貼付したり、沈線間に半截竹管による刺突が加えられたりするが、これらはc以下で説明する地文に付加される施文、いわば仕上げの施文の一種である。

b. (38~40) ……半截竹管による浅い連続押引が加えられるもので、aの連続沈線同様の地文とみられる。但し、bを地文とする土器は本遺跡では確認されてない。

c. (41~49) ……aにみられる地文の上に結節状浮線文が加えられるものである。貼付される粘土紐の描く構図の全貌はつかめないが、波状口縁に沿った貼付と胴部上半での渦巻状の貼付とは確

第IV章 調査遺跡

認められる。貼付後、半截竹管の連続押引が加えられる。また、ボタン状に粘土粒を付加するものもある。

d. (50~53) …… a にみられる地文の上に細い粘土紐を貼付し、半截竹管を用いた沈線で貼付部分を区切るものである。手法は c に近似している。

第4類 (54~82) ……一類型として捉えるには根拠が弱いものの、第3類の規格からはみ出すものと、第III群第1類への過渡的要素をもつものを一括した。再整理の必要を感じるが、断片的資料であるため、施文方法の差から細分するに留める。

a. (54~60) ……石英・長石等の鉱物粒子を含み、器表内面はよく研磨される。半截竹管を用いた連続平行沈線を、中心部を陰刻した三角形構図や渦巻構図に配する。構図・手法とも第III群第1類 a と共通するが、用いられる竹管がやや細めなものと、第3類 d と同様、半截竹管による区切り状の沈線が付加される点で差がある。

b. (61) ……砂粒を含む胎土で、器表内面は研磨される。第3類 a と同様の地文に、太い棒状工具で沈線を描く。

c. (62~65) ……胎土には少量の砂粒・鉱物粒を含む。器表内面は丁寧に研磨される。単節縄文を地文とし、結節状浮線文を貼付する。地文を除けば施文は第3類 c と共通する。

d. (66~70) ……胎土に砂粒と石英粒を含む。器表内面は簡単に研磨される。施文は単節斜縄文を地文とし、細い粘土紐を貼付する。66は便宜上同一類に含めたが、内傾する口縁端部が内屈して刻目が加えられたり、貼付された粘土紐上に縄文が付加されるなど異質な要素を持っている。

e. (71~73) ……いずれも外傾する口縁部の端部付近のみ残存する。砂粒・石英粒を胎土に含み、器表は内外面とも簡単に研磨される。施文は斜行するへら描きの連続沈線もしくは半截竹管による連続沈線の上に、細い粘土紐を斜めに貼付する。また、沈線が施されない部分では粘土紐を渦巻状に貼付する。71は外反する口縁部下に横走するための隆帯を配し、押圧痕を加えてある。

f. (74~77) ……胎土には少量の砂粒が混入される。器表内外面とも研磨される。施文は、半截竹管による連続平行沈線と、三角形又は円形の陰刻及陰刻風の刺突とがある。地文として部分的ながら半截竹管による沈線がみられる。

g. (78~82) ……口縁部が外に開く深鉢らしいが器形の詳細はわからない。胎土は石英・長石を多く含み、器表は簡単に研磨される。施文は押圧を付加した隆帯を貼付し、刺突が加えられる。地文に縄文が施されるものもある。e・f に共通する要素をもつものと考えられる。

h. ……外反する口縁をもち端部は大きく内屈する浅鉢であるが、口縁端部のみ残る。胎土には長石粒が目立ち、器表は丁寧に研磨される。無施文である。

第5類 (83~107) ……胎土に繊維を含まず、縄文のみ施文される類を一括した。これも便宜的な分類に過ぎない。

a. (83) ……胎土には砂粒が目立つ。器表内面はわずかに研磨されるのみである。単節の羽状縄文が施される。

b. (84~86) ……胎土・器面調整とも一定しないが、砂粒を多く含み、内面には研磨痕が残る。無節の羽状縄文が施される。

c. (87・88) ……胎土には砂粒を多く含み、器表内面は丁寧に研磨される。単節で中心に結節をもつ羽状縄文が施される。

d. (89~107) ……斜縄文が施される類を一括した。胎土、器面調整、焼成等まちまちで、斜縄文も単節と無節があり、単節では粒の大小の差がある等多様である。何型式分かを含まむものと思われる。

第6類 (108) ……砂粒・鉱物粒を胎土に含み、器表内面はナデ痕が残る。単節の撚糸文が縦位の帯状に施される。

第7類 (109・110) ……長石等の鉱物粒子を含み、器表内面は研磨されるらしい。薄手で焼成も良い方である。胎土は他類との間に明瞭な差を見出しにくい、製作方法に差を認めてよいのではない。施文は単節羽状縄文を施すものと、細い粘土紐上及び口端内面に半截竹管による連続押圧及連続押引を加えるものがある。

第Ⅲ群 (111~126) ……中期に属すると思われるものを一括したが、位置づけに関しては問題を含んでいる。

第1類 (111~121) ……胎土中に石英粒が目立つ。器表内面の研磨は簡単に粗なものが多い。施文はやや太めの半截竹管を用いて連続平行沈線を引く。

a. (111~119) ……連続平行沈線のみで、中央を削り取った三角形構図や羽状構図がみられる。構図は第Ⅲ群第4類 a と近似している。

b. (120・121) ……単節斜縄文を地文とし、連続平行沈線が加えられる。器表内面の研磨がやや丁寧である。

第2類 (122) ……円筒形の深鉢の底部で、胎土には細かい長石粒が目立つ。器表内外面ともへら状工具を用いて研磨するが、光沢は鈍い。施文は恐らく太い隆帯を用いた区画文を中心にしており、隆帯の裾は太い半截竹管様工具により連続押圧が加えられる。

第3類 (123~125) ……位置づけ不明瞭なものを一括した。胎土には砂粒が目立ち、細かい長石粒や雲母粒は含まれない。器表内面はケズリが行なわれる。施文は隆帯を貼付し、棒状工具による沈線と刺突とが加えられる。

第4類 (126) ……輝石らしい鉱物粒が胎土中に目立つ。器表は内外面とも研磨され、内面は丁寧である。施文はへら状工具を用い、縦位の羽状沈線を帯状に配する。

第Ⅳ群 (127~136) ……後期に属するものをさす。おおむね1類型にまとめて良いものとみられる。胎土は砂粒を含み、器表はユビ又は棒状工具で荒くナデられるものと、さらに丁寧にナデられたり研磨されたりするものがある。施文はへら状工具による沈線と、地文の単節斜縄文のみである。沈線2~3本を単位とした渦巻を含む曲線構図と、三角形による横位区画構図があり、沈線間に押圧気味の刺突痕がみられるものがある。

第Ⅴ群 (137~254) ……晩期に属するものを指す。出土土器の大半を占め、ほぼ単一型式とみられるが、器形はごく一部分が把えられたにすぎず、施文の構図も不完全にしか把えられない。細分の可能性をさぐるためにまず土器の諸要素を把えることにする。

A. 器種 ……浅鉢、深鉢、壺に大別される。深鉢と壺とは両者の中間形態を示すものがあってその境界は明瞭ではない。浅鉢は量が少ないが総て精製土器として扱って良い。深鉢は量的に圧倒的に多く、精製土器は少量である。壺は少量で粗製のものが大半である。

また、浅鉢、深鉢とも共通の細部形態をもつ。すなわち、肩が張って稜をつくる器形が特徴的に認められることが既に指摘されているが、この肩の張りの有無により大きく2種類に分類できる。⁽¹⁾

第IV章 調査遺跡

肩の張るものをA、張らないものをBと仮称する。深鉢・浅鉢とも口縁部の傾きに3種類ある。内傾を1、直立を2、外傾を3と仮称する。この二つの特徴を組み合わせれば、A₁~A₃、B₁~B₃の六器形が設定できる。波状口縁を呈するものは本遺跡では明瞭に把えられない。体部以下の形態も不明である。壺については全く不詳である。

B. 文様帯と施文……器体を横位に区画した文様帯が設定できる。

1. 口端部文様帯……二種類ある。その1はいわゆる口外帯である。外傾する口端に細い粘土紐を貼付し、ヘラ状工具で沈線と押圧痕とを組み合わせる。器表の研磨と組み合わせ、外見上削り出し風に整える。その2は連続する刻目風の押圧痕で、ヘラ状工具を用いて口端に全周させる。施文帯とは別に小突起を貼付することがある。また、小さな波状口縁を呈するものも口端部文様帯の一種と把えるべきかもしれない。
2. 口縁部文様帯……二種類ある。その1は2~数条の沈線を全周させるものである。ヘラ状工具を用いた太い沈線が多く、面を取って削り出し風にみせるものが大半である。その2は太い隆帯を貼付するもので、隆帯上には押圧痕が加えられる。
3. 体部文様帯……施文される面積が最も広く特徴的な文様帯で二種類ある。その1はいわゆる浮線網状文で、口外帯同様細い隆帯を貼付し、ヘラ状工具を用いて研磨を加え削り出し風に見せている。隆帯の描く構図は断片的にしか把えられないが、横走する隆帯間に細長い菱形が配される。隆帯を用いず沈線のみで似た構図を描くものがある。大半は丁寧に研磨され、赤色顔料が塗布されるものもある。その2はヘラ描沈線による横位の羽状構図である。この他条痕が加えられるものの中には縦位に屈折する沈線を描くものがあるらしい。

C. 条痕と研磨……施文の要素と器面調整とを兼ね備えたものに条痕と研磨がある。まとめの項で詳述する。

A~Cの諸要素をもとに分類を試みる。

第1類

浅鉢 a (137・167~171) ……器形はAが多く、器表はヘラ状工具の研磨をうける。体部文様帯に浮線網状文をもつ。口端部文様帯をもつものもある。

浅鉢 b (138・172) ……器形はB₃で器表は研磨される。体部文様帯はヘラ描沈線を用い、浮線網状文を省略した構図となる。

深鉢 a (173~178・185~187) ……器形はAが多く、器表はヘラ状工具で研磨される。体部文様帯に浮線網状文をもち、口端部文様帯は有るもの(173~178)とないもの(185~187)がある。

深鉢 b (179~184) ……器形は不詳で、器表はヘラ状工具で研磨される。口端部文様帯に押圧痕をもつ。184は口端を瘤状に削り出しており、古い要素を残している。

深鉢 c (193~211) ……器形はBらしく大半は大形である。ヘラ状工具による研磨はやや粗く、内面に及ばないものが多い。口縁部文様帯に削り出し風の沈線をもつのが特徴で口端に押圧痕付きの瘤が貼付されることがある。

深鉢 d (152) ……器形は不明で器表はヘラ状工具で研磨される。口縁部文様帯には削り出し風でない沈線が描かれる。

深鉢 e (139・140・142~147・151~158) ……器形はBが多く、Aでも肩の張りはあいまいである。器表は口縁部のみ研磨される。小さな波状口縁や、小さな瘤が貼付されることがある。施文はされない。

深鉢 f (141・148～150・159～162・215・216・223～249) ……器形はA・B両者がある。口端まで条痕があるものと、口端直下に浅い沈線を加え以下に条痕がみられるものがある。器形により口端に瘤や押圧痕が加えられるが、その規則性は把えない。体部に縦位に屈折する構図の条痕をもつものがある。

壺 a (188～190) ……器形はAが多い。器表はへら状工具で研磨される。体部文様帯には浮線網状文が加えられる。

壺 b (191・192) ……器形はAで、器表は未調整である。体部文様帯にへら描きの羽状沈線をもつ。

壺 c (212～214) ……器形は不詳で、深鉢Cと同様の器表調整・施文をもつ。

壺 d (217～222) ……器形はAで、口端～肩までの器表はへら状工具で研磨される。肩以下には条痕が加えられる。

第2類 ……貝殻条痕を模した条痕や、それに付随する隆帯・連続押圧痕をもつものを一括したが、量は少ない。施文と器面調整で分類した。

a. (250～254) ……明黄～橙褐色で胎土に砂粒が目立つ。内面は器表の剥落が著しく、器面は観察できない。貝殻条痕を模した深い条痕が加えられ、口端部直下には深い押圧痕をもつ隆帯が貼付される。

b. (163・164) ……第1類と同様の胎土・調整であるが、ハケメ状の条痕が横位に付され、aのさらに模倣品とみられる。口端部に押圧痕があったり口縁部文様帯をもつ等、要素としては第1類に近いものであろう。

c. (165・166) ……b同様胎土は第1類に近いが、押圧痕をもつ太い隆帯、或は隆帯を半円形に連続貼付して押圧痕風に施文する。ハケメ状の条痕が加えられるものがある。

第1類の深鉢の底部外面に植物種子の圧痕が残されるものが若干ある。見かけはイネ科の種子に似てはいるがさほど明瞭ではなく、速断できない(図版18-8)。

② 土製品 (図14-116～122)

土製耳飾と土製円板がある。土製耳飾は1点出土している。116は最大形24mm、高さ15mmの輪形を示す。断面長方形で厚さ5.5mm、上下面とも平坦である。胎土には砂粒を含む。器表は内面を除く全面が研磨され、全面に赤色顔料が塗布される。土製円板は8点(117～122)出土している。いずれも土器片を加工し不整形で、直径60～65mmが2点、55mm前後が5点、30mm前後が1点である。円板中央付近に穿孔の途中かとも思われる凹みが加えられるものが1点(119)ある。

③ 石器 (図10-14、表1-10)

出土した石器には、石鏃、スクレイパー、抉入石器、ドリル、ピエス・エスキーユ、調整剥離をもつ剥片、使用痕のある原石・石核・剥片、打製石斧、横刃型石器、磨製石斧、乳棒状石斧、石剣、凹石、敲打器、磨石がある。出土状況から帰属する時期を限定するのは困難で、全石器を一括して扱わざるを得なかった。また、各品種の細分は本遺跡独自に行った。

ア) 石鏃 (1～18・34) 20点出土している。石鏃の形態を規定する諸要素を総て条件に加えて分類すれば、本遺跡出土の石鏃の大半は異なった類型に属し、分類は事実上不可能となる。そこで、要素のうち、基部形態、側縁形、抉り、長幅指数を取り出して分類する。

a (1～5) ……有茎石鏃を一括する。側縁は直線的で、抉りは明瞭に加えられる。長幅指数は1.4～1.6で縦長である。1は右図右辺→右図左辺、右図右辺→左図左辺、左図右辺→右図左辺の順に剥離

第IV章 調査遺跡

されることが観察しうる。

- b₁ (6・7) ……無茎凹基、側縁は直線的で抉りが浅いものである。
- b₂ (8～11) ……無茎凹基、抉りが深く、推定長幅指数1.8以上の非常に縦長なものである。側縁は10以外は外湾気味で、最大幅は基部先端よりやや上方にある。
- b₃ (12～14) ……無茎凹基、抉りが深く、推定長幅指数1.2～1.4と縦長なものである。側縁は直線的だがいく分か外湾するものもある。b₁との差は抉りの深さに、b₂との差は長幅指数にある。
- c₁ (15) ……無茎凹基、抉りが非常に深く、側縁は外湾し、最大幅は中央付近にある。
- c₂ (16) ……無茎凹基、抉りが深く、側縁は外湾し、最大幅は基部先端よりやや上方にある。c₁との差は抉りの深さにある。
- d (17・18) ……無茎平基のものを一括する。

この他に、分類不能な破片1点と、加工途中の未成品1点(34)がある。

イ) スクレイパー (19～24) 9点出土している。刃部の形状から3タイプに分類した。

- a (19・24) ……2点出土。刃部が全周もしくは舌状を呈するものである。19は荒い剥離によって刃部がつくられる。片刃で裏面は未加工のままである。20は部分的に両刃で、細かい調整剥離が加えられる。基部は右側面基部寄りからの打撃によって破損後、縁辺に再度調整が加えられている。
- b (20～22) ……4点出土している。偏平な素材を用いて三角形を呈し、直線的な刃部をもつものである。三角形の頂点は1～2ヶ所が未加工のままだが、縁辺は3辺とも刃として調整される。刃部はおおむね片刃だが、部分的には両刃となる。素材は残核(21)と自然面を残した剥片(20・22)である。
- c (23) ……3点出土している。1点は塊状の、2点は偏平な素材を用いている。外湾する縁辺1辺を比較的長い刃として調整するほか、他辺にも直線的で短い刃がつけられる。

ウ) 挟入石器 (25・37) 2点出土している。25は断面三角形の不定形縦長剥片を利用し、内湾部分に小さな抉りが入れられるほか、使用痕(刃こぼれ)が側辺に残される。37は偏平な剥片を利用し、両側辺に対になるとみられる抉りを入れる。図下端に刃がつけられれば石匙として良いものであるが、刃こぼれが残されているのみである。

エ) ドリル (27～30・32) 6点出土しており、つまみ(基部)の有るもの(a)とないもの(b)とに分けられる。

- a₁ (29) ……1点出土している。偏平な剥片の先端を調整し、径4.5mmの細い刃をつける。基部は未加工である。
- a₂ (30・32) ……2点出土している。塊状のフレイクもしくは残核の尖部を刃とするが、aよりは太めである。基部は全面もしくは部分的に刃潰しが行なわれている。
- b (27・28) ……3点出土している。棒状のフレイクの先端を刃としたもので、全周刃潰しが行なわれる。刃部と基部の形態に差がなく基部も刃として利用し得る。

オ) ピース・エスキーユ (26) 2点出土している。

カ) 調整剥離をもつ剥片・石核・原石 (31・33・35・36・38～40) 16点出土している。剥離の状態によって2種類に分類する。

- a. 刃潰し状の調整剥離をもつもの (31・33・35) ……4点出土している。縁辺から全面に及ぶ長い剥離を連続して加えてあり、エッジは潰れている。ドリルにみられる刃潰しに似たものと、原石に加

えられた粗大なものがある。

b. 荒い調整剥離をもつもの (36・38~40) ……12点出土している。剥離は大きめで荒い。素材も不定形で、石器というよりは単なる剥片(または原石・石核)に近い。40のみは、押圧剥離が連続して加えられる。

キ) 刃こぼれ・刃つぶれがある剥片・石核・原石 (41~74) 206点出土している。大半は刃こぼれである。原石を素材としたもの12点、石核を用いたもの44点、剥片を用いたもの150点である。その他の使用痕はつぶれを除けば肉眼観察が困難で、顕微鏡観察の余裕がなく、省略せざるを得なかった。

ク) 打製石斧 (78~95) 64点出土している。基準に従って分類する。

I A (78) ……2点出土している。78は刃部の剥離が大きい。右図右側縁中央にはつぶし状のえぐりが入れている。

I B (79) ……4点出土している。79は刃部が片面のみ調整される。

I C (80~82) ……4点出土している。80は右側縁が内湾気味となる。刃部の側縁寄りと稜の磨耗が目立つ。片面加工である。81・82は刃部は典型的なC型である。刃部は磨耗と風化が著しく、とりわけ81の右側縁刃部寄りと82の刃部右側が顕著である。

II A (83) ……2点出土している。83は風化が著しい。

II B (84) ……1点出土している。84は基部以外の全周側縁が鋭利で、刃部には顕著な磨耗がみられる。

II C (85・86) ……2点出土している。85・86とも風化が著しく観察は困難である。

III A (87~89) ……5点出土しているが、総て刃部はC型的である。87は全周側縁が鋭利で、側縁よりも稜の磨耗が著しい。左図左辺中央付近に2ヶ所えぐりが入る。88は左側縁中央と右側縁刃部寄りが顕著に磨耗する。89は磨耗痕はわずかである。

III B (90) ……2点出土している。90は側縁形はむしろI型に近いくらいで、刃部は顕著に、稜もある程度磨耗する。

IV A (91) ……1点出土している。刃部はC型・A型の間接的な形態で、側縁の刃部寄りに顕著な磨耗がみられる。

IV B (92・93) 4点出土している。92は本来の形態は不明だが基部~側縁はいったん欠損後再加工されてIV B型になっている。刃部は著しく磨耗する。93は粗大な剥片に若干の刃部加工したもので基部は未調整である。刃部は著しく磨耗する。右側縁・左側縁に2ヶ所ずつのえぐりが残されているが、その位置は対称的ではない。

IV C (94) ……3点出土している。94は刃部がつぶれ、側縁は両側とも著しく磨耗する。刃部右隅から左側縁刃部よりにかけて左上がりの帯状に炭化物が付着する。

形態が完全にとらえられないものが30点ある。I型3点、II型5点、III型14点(95)、IV型3点、A型1点、B型1点、全く不明のもの3点である。この他ごく小型の打製石斧、局部磨製石斧が4点ある。形態分類にあてはめれば、I B型(76)、III B型(74・75)、IV型(77)である。75は刃部のみ研磨される。いずれも実用品として使用には耐えそうもない。

ケ) 横刃型石器 (97~103) 25点出土している。基準に従って分類する。

I A (98) ……5点出土している。98は刃部・背部とも磨耗する。

I B ……5点ある。図示し得るものはない。

I C (97) ……2点出土しているが刃部の調整は不十分である。この他I型に属する破片が2片ある。

第IV章 調査遺跡

II B (99~102) …… 9点出土している。99・102は打製石斧からの転用品である。101は板状の薄い素材を用い、一見石庖丁に似る。

III A (103) …… 2点出土している。103はむしろII A型に近い。

コ) 加工痕・使用痕のある剥片 32点出土している。打製石斧・横刃型石器等と同質の石材を用いているものである。3種類に分けられる。

a. (104・105) ……縦長の剥片を素材としているものを指す。6点出土している。104・105はほぼ完存するものとみられ、不定形な剥片のエッジを調整して刃部としている。他もエッジに調整又は使用の結果とみられる剥離が残されている。

b. ……横長の剥片を素材としているものを指す。4点出土している。a同様の剥離が残される。

c. ……打製石斧・横刃型石器等定形石器の破損品もしくは破損品が再利用された可能性の強いものを指す。22点出土している。

サ) 磨製石斧 4点出土している(113~115)。113は定角で研磨は丁寧である。114は剥離が深かったためか研磨が十分ゆきとどいていない。115は基部が敲打を受けている。

シ) 乳棒状石斧 1点出土したのみである(106)。基部にはやや平坦な面が2面つくられている。

ス) 石剣 2点出土している(112)。112は身部中央に原因不明の凹部が残されている。

セ) 凹石・敲打器・磨石 2~3者の機能を合わせ持った石器もあるため、総てを一括した。4点(107~110)出土している。107は上下に凹みを1つずつもち、上下面とも研磨される。側面は敲打されるが、敲打面は平坦な面をなして連続し、側縁を全周する。107・108は磨石で、108には凹みが残されるが、むしろ石器の器表の剥落のように見える。109は研磨なのか敲打なのか判別しきれないが、平坦な面をつくり出している。

ソ) 砥石様石器 1点出土している(111)。一見自然礫風だが、一面にひっかき傷のような擦痕が残される。若干の研磨を受けたものであろうが、本来の砥石とは異なろう。

クースの各石器の石質は、砂岩8.8%、細粒砂岩27.2%、砂質粘板岩29.6%、粘板岩26.4%、緑色岩4.8%、その他3.2%となっている。その97%までは周辺の岩脈より採取可能な石板であった。またセ・ソの各石器は総て複輝石安山岩で製作されており、こちらも周辺の岩脈で採取可能である。

2) 平安時代の遺構と遺物

(1) 第1号住居址 (図5・6・22、図版10・20・21)

B地区V~X42・43グリットを中心にした扇状に近い北向きの斜面に検出された住居址で、ローム層まで掘り下げた時点でプランを確認した。東約20mに2号住居址がある。斜面にあるため西北壁は、わずかにローム層を切り込む程度で、かろうじて検出することができた。確認できた壁高は高い南東壁で40cm、北東壁で30cm、浅くなる西南~西北壁で10~5cmである。平面形・規模はカマドのある南東壁が直線的でなく外側に張り出したため不整形となるが、4.8m×4.6mを計る。主軸方向はS-45°-Eである。埋土は、炭化物・ローム粒を含む黒色土層で、人頭大から拳大の礫を多く含んでいる。本遺跡の立地する扇状地は全体に礫が多く、表土層からローム層に至るまで、多量の礫が含まれている。このため、住居址はあかも礫層を掘り込んだ状態であり、壁は崩れ易く、床は礫のため、かなりの凹凸が見られた。プランもまた制約されたであろう。住居址中央付近の埋土である黒色土層上部には、人頭大の礫を含んでややレンズ状

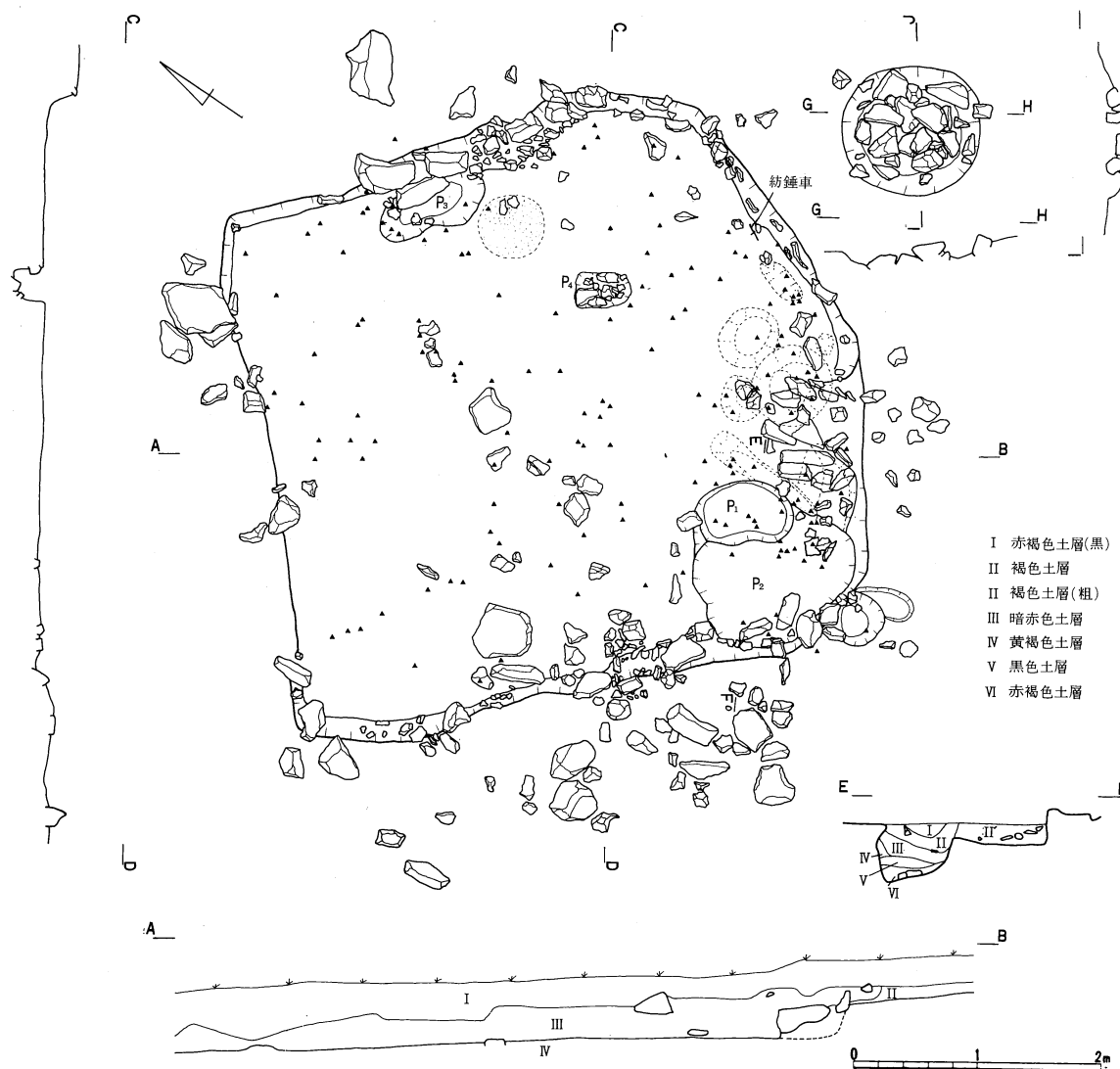


図5 経塚遺跡第1号住居址 (1:60)

I 表土(耕作土)層 II 黒褐色土層 III 黒色土層 IV ローム層

に堆積しているのが見られ、住居址の埋没が、自然堆積によるものであることが認められた。床は強く固められてはいるが、ローム層中の礫のため状態は良くない。住居址中央付近は比較的堅くたたきしめられているが、壁周辺は軟弱で、固められた痕跡は見られなかった。柱穴はP₄ (45×29、-25m)のみで対称地点の床を精査し、かつ屋外施設にも注意してみたが、柱穴らしきものは検出できなかった。なお、P₄内には柱をしっかりとさせるために用いたと思われる拳大の石が多数見られた。

カマドは、南壁中央やや西よりに設けられた石組粘土カマドである。全長約1m、幅90cmを計測する。遺存状態は良好であるが、天井石がはずれて火床上に落下していた。両袖部は、基本的にはそれぞれ2列の石を、一部は3列の石を組み、強固な造りである。燃焼部には焼土が厚く堆積し、両袖の石組にも、火を強く受けた痕跡が見られた。焚口部は床面より、やや低くなっており、焼土に落下した天井石につぶされた状態で、土師器杯が出土した。支脚石は見られなかった。カマドの右側には、P₁ (80×50、-85cm)、P₂ (80×80、-73cm)の貯蔵穴と思われる大形ピットが検出された。P₁はP₂を切っていて、ピット内には、土器片及び、カマドからかき出したと思われる焼土が多く見られた。P₂は焼土を含まず、大形の須恵器片、完形の灰釉杯が出土している。東壁中央の壁近くの床下に、径50cm、厚さ10cmの焼土が検出された。この

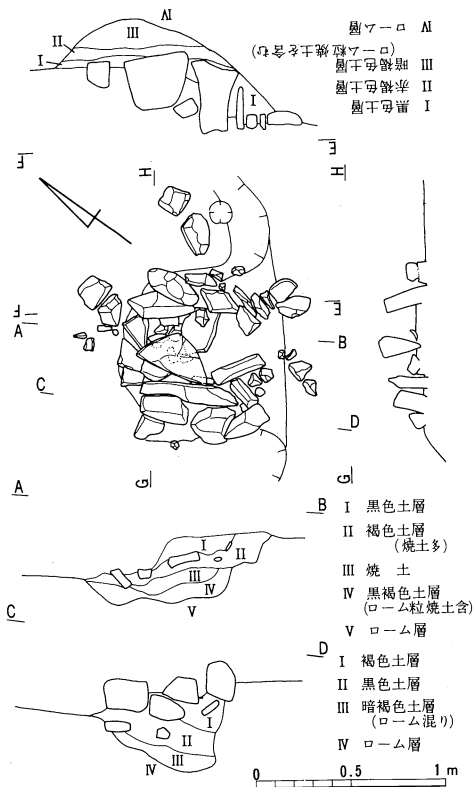


図6 経塚遺跡第1号住居址カマド(1:40)

焼土の上部には固められた床が見られ、明らかに古い焼土である。この焼土の横には、貯蔵穴と思われる大形のピットP₃(93×45、-52cm)があり、このピットの上部にもやや堅めの床と思われる土層が見られたことから、あるいはここに古いカマドがあったとも思われ、この住居址が建て替わられている可能性もあるが、はっきりとは確認できなかった。

遺物は全体に少ないが、カマド付近に集中しており、カマド内から土師器杯、カマド左側に土師器杯2点、鉄製紡錘車、カマド右ピット内から灰釉陶器・須恵器が出土している。

出土遺物には土器と鉄器がある。(図21-126・128、図22-1~20、表2、図版20・21)

土器には土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。供膳形態の土師器は20点以上出土しており、椀A1、杯D6、皿A4点を含む。椀A(16)はヘラミガキがなされず、体部下外面には薄く粘土をはりつけてナデている。皿Aはいずれも器肉が厚く、糸切り痕を残し、立ち上がる部分で

いったんくびれており、いわゆるカワラケに近い。煮沸形態の土師器は30点以上ある。甕B1、甕D2、甕E20、羽釜2、小形甕A1、小形甕B2、小形甕C2点を含む。甕B・D、小形甕Aは典型的とはいえず、各類型の系譜をひくものと考えておく。黒色土器は40点以上あり、杯B2、杯C10点を含む。13は分類からはずれる杯で、径高指数が極度に大きく、口縁部はいったん内湾したあと外反する。ロクロ成形され底には糸切り痕が残る。器外面は口縁部がロクロナデ、頸部以下がヘラケズリを施している。内面は口縁部がヨコヘラミガキ、頸部がヘラケズリ、体部下半がタテのヘラミガキを施している。

須恵器には甕が4点ある。20以外は破片のみである。灰釉陶器は3点あり、皿A1、皿B1、壺1点である。

鉄器には紡錘車と刀子があり各1点ずつ出土している。紡錘車(図20-126)は円板と軸とは別づくりで、円板中央に図右側より貫孔し軸を挿入している。円板は全体に図右側より左側へ歪んでいる。貫孔の影響であろうか。円板は直径45mmの正円形で厚さ1mm、軸は径4mmの正円形である。現存重量22.6gを量る。刀子(図20-128)は基部で巾7.5mm、厚さ2mmを計測する。袋状の柄に着柄したものとみられ、基部先端上は銹化した材の痕跡が巻きつくように残されている。現存重量2.7gを量る。

供膳形態の組成が黒色土器とともに、土師器杯D、皿Aが大きな比率を占めること、土師器甕にみられる整形の粗悪化、羽釜の存在、折戸53窯期(新)の灰釉陶器の存在などから、十二ノ后遺跡奈良平安時代土器編年の10期にほぼ該当すると考えられる。従って、本住居址は11世紀末から12世紀代のものであろう。

(2) 第2号住居址(図7・8・21・22、図版11・20・21)

第1号住居址より上方約20m、扇状地の中央部にある。DB54グリットを中心に検出された。本址の西南壁付近は、畑から出た自然石を集めた境界の土堤が築かれており、余り期待できなかったが、グリット



図7 経塚遺跡第2号住居址 (1:60)

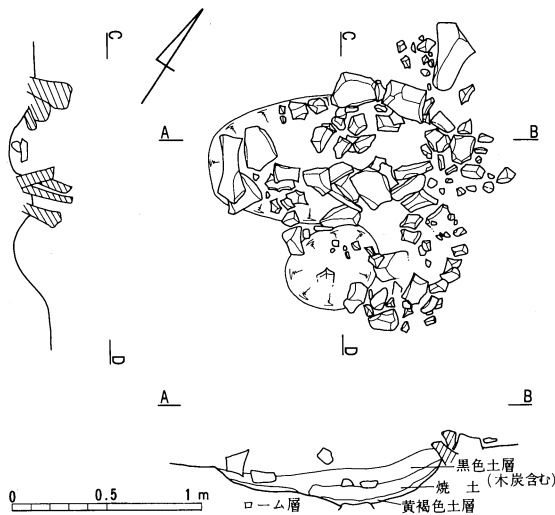


図8 経塚遺跡第2号住居址カマド (1:40)

調査で、木炭片と焼土が黒色土層中に混在するので全面発掘に切りかえた。

東から西に緩傾斜する付近一帯は耕作土も浅く20cm前後、住居址のある部分のみ木炭粒のやや混入する黒色土層が床面まで堆積するが、周壁外は耕作土からすぐ10cm程の茶褐色土となりローム土層へ移行する。検出面は浅いため東側の周壁付近の一隅で茶褐色土層から把握できたが、大半は黒色土層であった。また、1号址同様自然礫が多い地域のため、検出には日時を要した。なお、本址北側にピットがあったが埋土等からみて後世のものと判断し処理した。

平面形・規模は北西、南西両壁を欠くが、床面などから推定して径4.5~4.8mの隅丸方形であろう。壁高は残存する北東、南東壁で25~10cmロームを掘っている。南西壁は近時の土堤構築で大半が破壊され、北西壁は自然傾斜の低い部位のため耕作による攪乱をうけて確認はできない。中央部の床面はよく固めら

第IV章 調査遺跡

れ、容易に検出できたが、周壁に近づくにつれて不明瞭となる。南東壁の東側半分幅15、深さ5～10cm程度の周溝があるが、一部にローム粒や木炭粒を含む黒色土で貼床された箇所があったり、周壁外につづくピット(P₃)が穿たれたり、自然礫が落ち込んでいたりしている。柱穴と認定できるピットは強いてあげればP₁(50×45、-20)であるが、これも壁に片寄りすぎでいたり、形状の点からも疑問が残る。1号址同様支柱穴のない住居址としてよいであろう。

北東壁の東寄りに片寄って石組粘土カマドがある。長さ1.5m、幅は焚口部で80cmを計る。遺存状態はやや悪く、天井石らしいものは付近になく、火床には後から投棄したか或はカマド外側へかためたらしい幼児頭大から拳大の余り火熱をうけない自然石が無雑作に堆積していた。両袖部は2～4列の石を立てて築いたらしいが、余り強固とはいえない小形の石が多い。粘土による補強はほとんど痕跡的であった。焚口から燃焼部は深さ15～20cm位ローム層を舟底状に掘って火床とし、下底部に10cm前後の焼土が堆積している。なお、この焼土層の上には木炭粒を含む黒色土がのるが、床面上の黒色土とは異なりやや土質が荒く、小さな礫片を含み、その上面が堅く、容易に識別できた。一般的にカマド周辺には土器などの遺物が多いが、本址はほとんどなく、わずかに焚口部の前面と右側のピットから灰釉陶器が出土したのみであった。カマド右袖口に接するピット(20、-18cm)は黒土層が充満していたが、底面などは堅くなく、大石を抜いたような状況であって貯蔵穴らしくない。むしろ北側の連結するP₁・P₂(38×40、-18cm)の方が、位置、形状から貯蔵穴のである。なお、南東壁中央にある大形のP₄(150×50、-22cm)は、住居址埋土と同じであるが、床面と同一レベルにローム粒の多く混入した黒褐色土の貼床があった。P₁と同じように貯蔵穴であろうか。また、住居址中央部を南北に走る溝(幅10、-3～-7cm)は、すべてP₄同様の貼床下に検出されたが、古い住居址の周溝なのか、本址に伴う遺構なのかよくわからない。

図7にみるように、本址には多くの炭化材と焼土が散在している。最長の炭化材は長さ40cm、幅9cm、厚さ8mmあるが、柱というより板状のものが多い。焼土も厚さ5cm以上はなく、2～3cmで薄い。綿密に調査したが床面に密着する例はなく、すべて床面より5～15cm浮いた住居址埋土の黒色土層中であり、出土面が堅い状態とか、貼床上とかの微妙な変化もなかった。この出土面の上位は耕作による攪乱を充分受ける深さであり、現状は相当変化をしよう。いずれにしても、火災に遇って廃絶したか、その逆の経過を考慮できる住居址である。

なお、本址は1号址同様、大小の自然礫を含むローム層を掘り凹めたため、床面は勿論、周壁などにも地山に入ったままの石が多く、その構築は相当困難をきわめたであろう。

遺物の出土量は少なく、その出土状態も特定の部分に集中せず住居址全域にわたる。遺物には土器と鉄器がある。(図21-127・129、図22-21～30、図版20・21)

土器には土師器・黒色土器・灰釉陶器がある。供膳形態の土師器は10点以上あり、杯B・杯C各1点を含む。煮沸形態の土師器は4点あり、甕D・甕E・羽釜各1点を含む。30は甕Dの系譜に属するものとみられ、口縁部は短かく外反し、胴部は心もち張り気味である。器内外面とも口縁部はナデ、胴部は縦位のハケメがなされるほか、胴部外面にはわずかにケズリ痕が残る。黒色土器は数点あり杯B1点を含む。灰釉陶器は40点近くあり、椀A19点、皿A2点、皿B1点、壺2点を含む。輪花をもつものが若干あり、22のみ指頭で、他はへらで加えられている。底部に糸切り痕が残るものがへらケズリされるものより多い。折戸53号窯期(新)の所産であろう。

鉄器には刀子と釘があり、各1点ずつ出土している。刀子(図21-127)は板状で刃はつけられておらず、基部もしくは未加工品であるのかもしれない。幅7.5mm、厚さ2.5mm、現存重量6.6gで、端部は若干ねじ

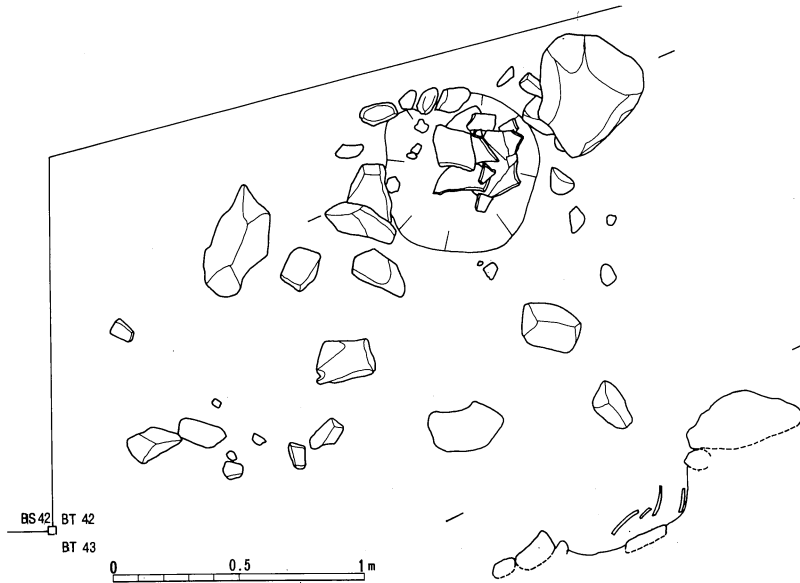


図9 経塚遺跡土坑1 (1:30)

れている。釘(図21-129)は幅6mm、厚さ7mmの角柱状の鉄材の端部を若干叩き平らにして折り曲げてある。分類に従えば(=)に相当しよう(本書225頁参照)。現存重量9.0gを量る。

本址の所属年代は1号住居址とほぼ同時期であろう。

3) 土坑1 (図9・10、
図版11・21)

1号住居址の西南4m、BT42グリット北隅、用地境に

検出された。付近は耕作土が20~30cmと浅く、ローム層も礫が非常に多い一帯なので、その間の黒色土層も安定せず、あっても10~15cm程度で、ない部分が多かった。本址は長径64cm、短径60cmの円形を呈しローム層を約15cm舟底状に掘り凹めている。南と北側には地山にくい込んだ大石があり、西側もプランに沿って拳大から幼児頭大の自然石がめぐっており、むしろ、石の間を掘り凹めたという表現が適切であろう。埋土は黒色土層で、やや粘性があり他の住居址中のそれと多少異なっていた。周囲にあまり自然石のない、東側からみて奥壁(西北壁)にあたる部分に須恵器甕の破片約10点がやや斜めに積み重なるように埋めてあった。他に土器片や焼土はなく、北・西側とも用地外のため拡張できず、周囲にも特記するような状況は観察できなかった。

この須恵器(図10-31)は、胎土に砂粒が目立ち、焼成はあまり良くない。器形はとらえられないが、肩が張り、最大径が胴部上半にある丸底の甕であろう。外面には垂直もしくはやや右傾するタタキメが残され

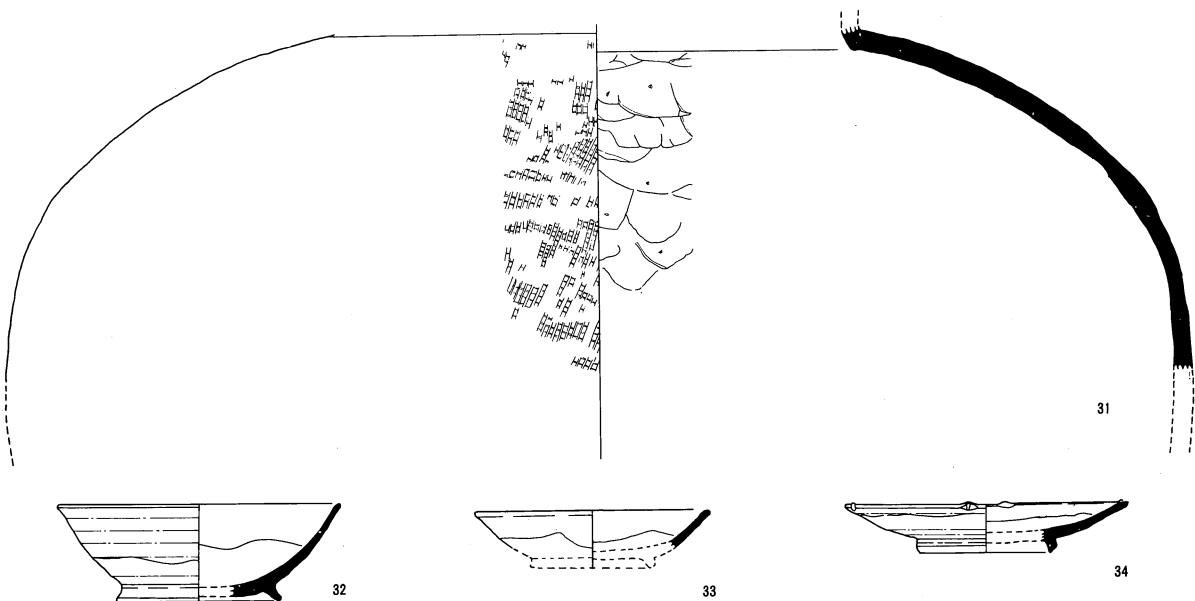


図10 経塚遺跡土坑(須恵器)31及び遺構外(灰釉陶器 32~34)出土土器実測図(1:4)

第IV章 調査遺跡

るが、部分的にナデられ消されている。内面にはタタキに伴う当て板の当り痕が残され、これも部分的にナデて消されている。当て板の痕は胴下半では左下側が、上半では左側がそれぞれ深い。左側に当て板の先端部が当てられたことを示すものであろう。当たり痕跡の単単位内で、胎土内の粒子がわずかに移動しているのが観察される。左から右へ動いており、当て板がタタキの衝撃によって若干ずれることに伴うものではなかろうか。こうした当て板の痕跡は、タタキが時計方向の順に行なわれたものと考えれば、最も合理的に説明できよう。なお、タタキ板はタタキメの状態からみて縦に、当て板は横に持つことも注意されよう。時期的には、当て板の痕跡等からみて奈良時代以前にさかのぼることはないだろう。

4) 遺構外出土遺物 (図10-32~34、図21-125・130~133、図版20・21)

土器・土製品・石器・鉄器がある。土器には土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。供膳形態の土師器は30点以上あり、杯B 3点、杯C12点、杯D 5点、皿B 3点を含む。煮沸形態の土師器は30点以上あり、甕D 3点、甕E17点、羽釜 3点、小形甕B 1点、小形甕C 3点を含む。このうち甕Dは典型的なものではない。黒色土器は50点以上あり、杯B 1点、杯C16点を含む。須恵器は数点あり、杯C 1点、壺 1点、甕 5点以上を含む。灰釉陶器は100点程あり、椀A 16点、皿A 7点、壺 3点を含む。土製品には土錘が2点ある。いずれも I Ba型に属する (本書229頁参照)。

石器には砥石が6点あり形態によって二分類される。

A (130、131) ……棒状の直方体を呈するもので4点出土している。130はややきめが荒く、他の3点はきめが細かい。砂岩・ホルンフェルス製である。

B (132、133) ……扁平でやや大形だが形態が不明なもので2点出土している。いずれもきめが荒い。風化した花崗斑岩製である。

鉄器にはやりがんなと性格不明なものがある。やりがんなは1点出土している(125)。刃部は断面が扁平な三角形で、基部には柄の材の痕が残る。長さ(推定)15cm、刃部最大幅1.4cm、同最大厚0.25cm、基部幅0.6~1.2cm、基部厚0.2~0.7cm、現存重量26.1gを計る。

このほか、弥生土器小破片若干、内耳土器片若干、近世陶器、近世・近代のものとみられる鉄製品等が、出土している。

5 まとめ

1) 縄文時代の遺構と遺物

(1) 「集石」群

調査時点で大きな期待をかけた「集石」群が、明確な遺構として把握できなくなった結果、本遺跡は、遺構としては平安時代にかかる住居址2と、須恵器甕破片を伴う土壇1のみであった。

まず「集石」群については、前述したように自然堆積とする立場をとり、遺構として位置づけなかった。しかし県内では、一般的に縄文(後)晩期遺跡では、遺物はあっても遺構がないといわれている。本遺跡と同じ市内にある学史的に著名な庄の畑遺跡⁽³⁾、50年度中央道調査にかかる新井南遺跡⁽⁴⁾でも、良好な遺物の出土はあったが、住居址などの遺構は未検出であった。ただ、最近調査した駒ヶ根市荒神沢遺跡⁽⁵⁾ではじめて住居址1と260余にのぼる土壇が発見され、また、晩期前半を代表する北信佐野遺跡⁽⁶⁾でも不明瞭ではあるが集石乃至配石址が報じられ、52・53年度中央道調査の茅野市御社宮司遺跡⁽⁷⁾も、本遺跡とほぼ同時期であるが、同種遺構や土壇の発見があった。こうした後・晩期の遺構は、中期などに比べるとまだ例も少なく、

不明確な点が多いが、そのためにも「集石」群をあえて取りあげ今後の研究の資料とした次第である。

平安時代については他遺跡例に比べると資料も少ないので省略し、以下「集石」群に伴った縄文時代の土器・石器についてのみ、多少の集約を試みたい。

(2) 土器 (図12~16、図版12~19)

① 各群の時期

出土した土器の帰属する時期については、厳密にはとらえきれないが、その概略を考えてみる。

第Ⅰ群は早期末~前期前半に属するものとみられ、第1類・第2類は早期末に、第3類は前期前半のいずれかの時期に、それぞれ位置づけられよう。第Ⅱ群は前期に、そのうち第1類は前期前半のいわゆる中越式、第2類は前期後半の諸磯B式に、第3類は諸磯C式にそれぞれ属するであろう。第4類は多様な要素をもつが、諸磯C式より新しい前期末~中期初頭の要素をもつ点で共通する。第5類は関山式に近似するものや諸磯式に類似するもの等雑多である。前期前半~末までの土器を含むものと思われる。第6類は北陸地方に、第7類は関西地方にそれぞれ関連性が求められよう。

第Ⅲ群は中期に属する。第1類は第Ⅱ群第4類から導き出されるものとみられ極めて近い関係にあらう。或いは前期最末に位置づけるべきかも知れない。第2類は藤内式、第3類は中期中葉にならうか。第4類は曾利V式である。第Ⅳ群は後期の堀ノ内I式に含まれる。

第Ⅴ群は晩期末に位置づけられ、第2類aを除けば氷式に属している。但し、第1類の浅鉢b、深鉢d等をより新しい要素として分類する考え方もある。本遺跡では出土量が少な過ぎ判断し得ない。第2類aは東海地方の狭義の条痕土器を模倣したものだが、胎土は第Ⅴ群の中では特異で、東海地方或いはその隣接地域との交流を考えるべきであらう。

② 第Ⅳ・Ⅴ群土器の製作技法 (図版16~18)

第Ⅳ群・Ⅴ群土器の器表にみられる成形・整形の痕跡を概観する。

i. 成形の痕跡

ア. 粘土紐の積上げ痕……深鉢の体部下半に若干残される。

イ. オサエ……指頭の圧痕。粘土紐接合部分を強く押圧して締めるものとみられる。但し第Ⅴ群2類の一部には、口縁部付近の整形にも同様な方法がみられるようである。すなわち、指で器壁を押し延して細部形態を整えているらしい。

ii. 整形・施文の痕跡

ア. ユビナデ(図版16-1)……指頭もしくは同大の棒状工具で、外面をナデつける。未乾燥な状態で行なわれており、あるいはオサエと共通する目的であるのかも知れない。

イ. ケズリ(図版16-3-6、17-1)……器表を削り落とすもので、ヘラ状工具を用いているかもしれない。ケズリに伴って胎土中の混和鉱物の粒子が移動し、その移動痕が器表に残される。器表外面は全面に残されるものがあり、内面でも胴部上半~口縁部にかけて残されるものがみられる。深鉢では、底部外面、胴部上半に明瞭に残されることが多く、胴部下半は風化が進んでいるものが多いためか観察し得ないものが多い。口縁部は研磨されることが多く消されている。ケズリの方向は、器形が十分とらえられない以上ははっきりした傾向はつかめないが、底部~胴部下半では下から上へ、胴部上半では図の左から右へ(工具は逆時計回転ということになる)痕跡が残される場合がある。器壁薄化、器表の突出部分(成形不良部分)の調整が目的であらうが、施文の下地づくりや次に述べるミガキの

第IV章 調査遺跡

下準備に用いられる可能性がある。

ウ.ミガキ或いは研磨(図版16-5・6、17-2~7)……器表を研磨するものである。痕跡から判断して使用した工具は何種類かあるものとみられる。

単位が明瞭に残されるものはおおむねへら状工具を用いているものとみられる(a)。へらミガキと称しても不都合のない程のものもある。へら状工具を何回も重ねてミガキを加え全面的に滑沢を持つ程に仕上げるもの、帯状にミガキが加えられる部分と加えられない部分があるもの、へら状工具の間隔が疎なもの、ケズリ部分にごく疎らに残されるもの等があるが、大半は水平方向に加えられる。

単位がとらえられないが全面的にミガキがみられるものもある(b)。風化の進んだ土器が多く、へら状工具の単位が風化により不明瞭になったものも含まれよう。第I群~III群の土器の器表調整で「研磨」と記したものとの間には差異が認めにくい。

ミガキの効果は、器面をきめこまかくし滲透性を減ずる効果と装飾的效果が指摘されている。ミガキが顕著なのは浅鉢や深鉢口縁部で、外面に重点的に加えられることが多いらしい。第V群の浅鉢a、深鉢a・bでは施文の隆帯の裾を押さえ、隆帯上も含めて全面をへら状工具でミガキを加えるし、深鉢cにみられる沈線のふちの面取りも、このミガキと同手法であろう。施文と対にして用いられる装飾効果の高い手法である場合が目立つ。

エ.ナデ(図版17-3、18-1・2)……器表を撫でつけるもので、線状に工具の移動痕が残される。ミガキとの区分が困難なものもある。

オ.条痕(図版17-3-6)……施文・整形の両者の要素を備えていると思われる。工具痕を残すことをねらって器表を撫でつけるもので、ケズリの効果も含んでいるかもしれない。条痕の凹部にわずかに胎土中の鉱物粒の移動痕が確認されることがある。工具には貝殻(a)や材(b)があるが、本遺跡では貝殻は確認されていない。材には何種類かある。土師器のハケメと酷似するもの(b₁)は調整された板材を用いている可能性が高い。細く密な材を浅くあてたものと、粗大な材を深くあてたもの、その中間的なもの等がある。貝殻の条痕に似せたもの(b₂)は櫛状に調整した材を用いたものと思われる。

iii. 施文

施文が単純なためか割り付けの痕跡は把握できなかった。施文手法は65頁~67頁で既に触れてあるが、まとめれば以下のようなになる。

ア.隆帯……細い粘土紐を貼付し、その裾はへらで押さえてミガキを加え、削り出し風に見せている。

一方太く荒い粘土紐を貼付し、裾はへらを用いずに恐らくユビで押さえただけのものもある。

イ.沈線……棒・へら状工具を用いるもので、へらを用いて面取りし(ミガキと共通する)削り出し風に見せるものと、工具痕がそのまま残るものがある。後者には、何回か重ね引きした痕の残るものと、そうでないものがある。器体を全周する沈線では一気に引けるはずはないので、重ね引きし、そのつぎ目を消去したものであろう。

ウ.押圧痕……口端や隆帯上に残されるへら状工具の圧痕で、へら等で引いた刻目、彫り込んだもの、等も若干みられる。突き刺したものはない。太い隆帯には押圧痕に似せて粘土紐を丸めて貼付する場合がある。

製作技法の断片をとらえたが、その全体を理解するには観察が不十分である。今後の課題としたい。

表1 剥片・石核・原石の石質

		黒曜石							チャート	頁岩	石英	計 (%)
		A ₁	A ₂	A ₁ '	A ₂ '	A ₃ '	E	F				
刃こぼれ・刃つぶれ無	原石	3 (15.0)	1 (5.0)	9 (45.0)	7 (35.0)							20 (100.0)
	石核	17 (22.4)	12 (15.8)	22 (28.9)	14 (18.4)	3 (3.9)	5 (6.6)	3 (3.9)				76 (100.0)
	剥片A	9 (39.1)	1 (4.3)	11 (47.8)	1 (4.3)		1 (4.3)					23 (100.0)
	剥片B	112 (49.1)	10 (4.4)	81 (35.5)	12 (5.3)	8 (3.5)	1 (0.4)		2 (0.9)	1 (0.4)	1 (0.4)	228 (100.0)
	剥片C	15 (26.3)	2 (3.5)	25 (43.9)	11 (19.3)	4 (7.0)						57 (100.0)
刃こぼれ・刃つぶれ有	原石	6 (54.5)	1 (9.1)	4 (36.4)								11 (100.0)
	石核	8 (36.4)	4 (18.2)	9 (40.1)	1 (4.5)							22 (100.0)
	剥片B	107 (59.4)	11 (6.1)	50 (27.8)	4 (2.2)	2 (1.1)	6 (3.3)					180 (100.0)
定形石器	26 (65.0)	1 (2.5)	10 (25.0)	1 (2.5)		1 (2.5)		1 (2.5)				40 (100.0)
計	303 (46.1)	43 (6.5)	221 (33.6)	51 (7.8)	17 (2.6)	14 (2.1)	3 (0.5)	3 (0.5)	1 (0.2)	1 (0.2)	657 (100.0)	

A₁……完全透明。 A₂' ……若干の夾雑物を含むB₁'・B₃。
 A₂……若干の夾雑物粒を含むB₁。 A₃' ……B₁'より不透明部分が多い。
 A₁'……いく分か縞状の不透明部分をもつ。

表2 剥片・石核・原石の形態

	総計	刃こぼれ・刃つぶれ	
		数	(%)
原石	31	11	(35.5)
石核	98	22	(22.4)
剥片	(計) (488)	(180)	(36.9)
	A 23	0	(0)
	B 408	180	(44.1)
	C 57	0	(0)
計	617	213	(34.5)

① 刃こぼれ・刃つぶれのある剥片・石核・原石

i. 素材の材質 (表1)

黒曜石が99%を占める。黒曜石を材質によって分ければ、その96%がBタイプに属している。若干の夾雑物粒子を含むが透明度が高く、質感は皆よく似ており、同一の露頭で採取されたものとみられる。石器或いはその素材製作に好適である。中でも最上質と思われるB₁の占める割合は、石器に高く、刃こぼれ・刃つぶれの観察されない素材に低い傾向がみられる。

ii. 素材の形態 (表2)

剥片・石核・原石中、刃こぼれ・刃つぶれの残される素材の割合は35%前後とみられる。剥片を柱状のA、偏平なB、塊状のCと形態分類すれば、A・C中には刃こぼれ・刃つぶれはみられない。剥片B中に刃こぼれ・刃つぶれが残される割合は45%近くに上昇する。刃こぼれ・刃つぶれの大半は素材の縁辺(エッジ)に残されており、端部にみ

られる場合も端を尖らせるような残され方では無い、という事実に符合するものであろう。また、石器素材の大半は剥片Bに求められようから、剥片Bは両者共通の素材ということになる。

iii. 素材の重量 (表3・4)

重量で素材の大きさを代表させることにする。原石・石核が剥片より重いのは当然であろう。石核・

(3) 石器

(図17~21、
表1~10、
図版19)

出土した石器剥片等の大半は晩期末に位置づけ得るものであろう。このうち、刃こぼれ、刃つぶれのある剥片・石核・原石及びその素材について考えてみたい。詳細は表1によって検討されたい。

第IV章 調査遺跡

表3 剥片・石核・原石の重量

重量 素材(%)	重量 (g)												計 (%)
	~ 2.5	~ 5	~ 7.5	~ 10	~ 15	~ 20	~ 30	~ 40	~ 50	~ 100	~ 200		
刃こぼれ・ 刃つぶれ無	原石	5 (26.3)	2 (10.5)	3 (15.8)	1 (5.3)	1 (5.3)		1 (5.3)	1 (5.3)	1 (5.3)	4 (21.1)		19 (100.0)
	石核	21 (27.6)	24 (31.6)	14 (18.4)	4 (5.3)	6 (7.9)	6 (7.9)	1 (1.3)					76 (100.0)
	剥片	264 (83.8)	39 (12.4)	12 (3.8)									
同有	原石・ 石核		3 (8.8)	9 (26.5)	7 (20.6)	6 (17.6)		5 (14.7)	1 (2.9)	1 (2.9)	1 (2.9)	1 (2.9)	34 (100.0)
	剥片	117 (65.0)	48 (26.7)	15 (8.3)									180 (100.0)
計	407 (65.2)	116 (18.6)	53 (8.5)	12 (1.9)	13 (2.1)	6 (1.0)	7 (1.1)	2 (0.3)	2 (0.3)	5 (0.8)	1 (0.1)		617 (100.0)

表4 剥片の重量

重量 素材(%)	重量 (g)												計 (%)
	~ 0.5	~ 1.0	~ 1.5	~ 2.0	~ 2.5	~ 3.0	~ 3.5	~ 4.0	~ 4.5	~ 5.0	5.0 ~		
刃こぼれ・ 刃つぶれ無	剥片A	1 (4.3)	5 (21.7)	6 (26.1)	4 (17.4)	4 (17.4)		1 (4.3)			2 (8.7)		23 (100.0)
	剥片B	54 (23.2)	59 (25.3)	45 (19.3)	23 (9.9)	15 (6.4)	8 (3.4)	4 (1.7)	5 (2.1)	2 (0.9)	2 (0.9)	16 (6.9)	228 (100.0)
	剥片C		8 (14.0)	10 (17.5)	14 (24.6)	5 (8.8)	3 (5.3)	8 (14.0)	2 (3.5)	1 (1.8)	2 (3.5)	4 (7.0)	57 (100.0)
同有	剥片B	10 (5.6)	28 (15.6)	38 (21.1)	25 (13.9)	16 (8.9)	11 (6.1)	13 (7.2)	11 (6.1)	11 (6.1)	2 (1.1)	15 (8.3)	180 (100.0)
計	65 (13.2)	100 (20.3)	99 (20.0)	66 (13.4)	40 (8.1)	22 (4.5)	26 (5.3)	18 (3.7)	14 (2.8)	8 (1.6)	35 (7.1)		488 (100.0)

剥片A……柱状, 剥片B……扁平, 剥片C……塊状

表5 刃こぼれ・刃つぶれの数と単位数

長さ 種類(%)	長さ (mm)																						計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		22 ¹
刃こぼれ・ 刃つぶれの 数	1 (0.3)	17 (4.3)	30 (7.6)	40 (10.2)	36 (9.2)	35 (8.9)	40 (10.2)	24 (6.1)	25 (6.3)	21 (5.3)	10 (2.5)	12 (3.0)	14 (3.6)	16 (4.1)	12 (3.0)	7 (1.8)	11 (2.8)	10 (2.5)	4 (1.0)	8 (2.0)	5 (1.3)	1 (0.3)	14 (3.6)	393 (100.0)
刃こぼれ・ 刃つぶれの 単位数	4 (0.7)	43 (7.1)	67 (11.7)	91 (15.1)	61 (10.1)	57 (9.4)	66 (10.9)	42 (7.0)	34 (5.6)	31 (5.1)	18 (3.0)	18 (3.0)	17 (2.8)	14 (2.3)	12 (2.0)	1 (0.2)	7 (1.2)	2 (0.3)	4 (0.7)	5 (0.6)	3 (0.5)		7 (1.2)	604 (100.0)

iv. 刃こぼれ・刃つぶれの単位 (表5・6、図11)

1つの連続する刃こぼれ・刃つぶれが1単位になるとは限らない。エッジの表面・裏面に連続して刃こぼれが残されるもの、二つ以上のエッジにまたがって刃こぼれ・刃つぶれが連続するもの等は、分割し単位とすべきであろう。前者は剝離を起こさせた力の方向が異なり、後者は持ち方を変えなくてはできないわけで、それぞれ、別の作用の結果であると思われるからである。

各単位の長さを1mm目盛りで計測すると、4mm・7mmの2つの頂点ができ、11~15mm、16~21mmが

原石では、刃こぼれ・刃つぶれを残す素材の方が重いものが多い傾向にある。2.5g以下の石核・原石は、いわば屑であろうか。剥片Bの重量分布は、刃こぼれ・刃つぶれのある素材、ない素材共、おおむね共通である。

表6 刃こぼれ・刃つぶれのあるエッジの角度

エッジの角度	～10° ～20° ～30° ～40° ～50° ～60° ～70° ～80° ～90° ～100°									
エッジ数 (%)	14 (3.6)	60 (15.3)	84 (21.5)	45 (11.5)	60 (15.3)	41 (10.5)	37 (9.5)	23 (6.6)	19 (4.9)	8 (2.0)

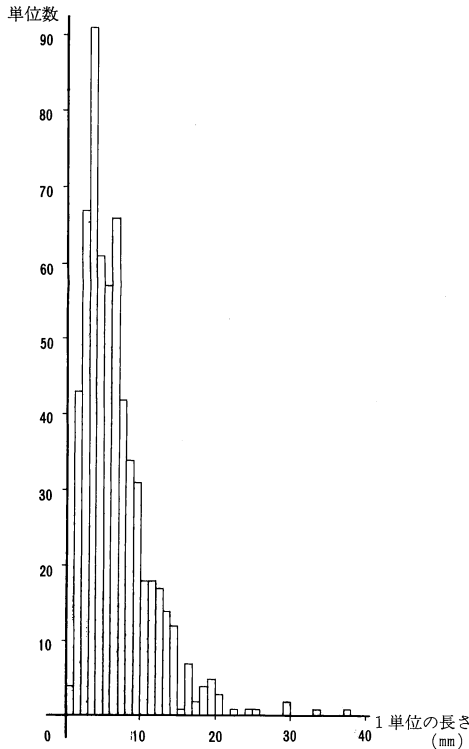


図11 刃こぼれ・刃つぶれの1単位の長さの分布

表7 刃こぼれ・刃つぶれのあるエッジ数

刃こぼれ・刃つぶれのあるエッジ数	個体数 (%)
1	78(37.0)
2	83(39.9)
3	38(18.0)
4	16(7.6)
5	1(0.5)

表9 1つのエッジにある刃こぼれ・刃つぶれの単位数

1エッジ上の単位数	エッジ数(%)
1	275 (66.3)
2	98 (23.6)
3	29 (7.0)
4	7 (1.7)
5	5 (1.2)
6	0
7	1 (0.2)

(算術平均 2.86)

表8 刃こぼれのつき方

刃こぼれのつき方	個体数 (%)
1+2	10 (4.7)
1	68(31.6)
2	35(16.3)
3	102(47.4)

各々一つのまとまりとなる。算術平均は7.3mmである。単純な二項分布とも見られるが、4mm前後を一小単位とすれば、6～10mmは小単位が2つ、11～15mmは小単位が3つ、16～21mmは小単位が4つ、それぞれ連続して成立している、という解釈もできる。

刃こぼれ・刃つぶれのあるエッジの刃角を計測すると、21°～30°、41°～50°の2つの頂点をもつ分布を示す。この分布も、単位の長さの分布形と似ている。

v. エッジ (表7～9)

エッジ毎に各単位をとらえてみる。エッジは平面的な角から角までとする。二平面からなる縁辺でも平面形によって別のエッジに分けた場合もあり、いくつかの平面からなる縁辺の連続を1つのエッジとした場合もある。素材を手を持って使用する場合、持ちかえる必要のない範囲を想定している。

素材1個体をとってみると刃こぼれ・刃つぶれの残るのは1～2本のエッジである場合が多い。エッジ上の単位の並び方を分類し、表面裏面に連続して並ぶ(1)、表面・裏面に連続せずに並ぶ(2)、表面または裏面の片方のみ並ぶ(3)とすれば、単純な3を示す素材と複雑な1・2を示す素材は、ほぼ同数である。

以上、統計的処理を試みたが、明瞭な傾向は指摘しえなかった。裏返せば、刃こぼれ・刃つぶれが残される作業にとって、手頃な縁辺をもつ良質の素材があれば十分なのであり、作業自体も不特定であることを示しているのかも知れない。

第IV章 調査遺跡

- 註1 永峯光一 「氷遺跡の調査とその研究」 『石器時代』 9 1969
 - 2 註1に同じ
 - 3 藤森栄一 「南信庄ノ畑の土器」 『考古学』 7-7 1936
藤森栄一他 「岡谷市庄之畑遺跡」 『長野県考古学会研究報告書1』 1965
戸沢充則 『岡谷市史』上巻（第一編） 1973
 - 4 長野県教委 『長野県中央道報告—岡谷市その3—昭和50年度』 1976
 - 5 駒ヶ根市教委 『荒神沢遺跡』 1979
 - 6 永峯光一他 『佐野』長野県考古学会研究報告書3 1967
山ノ内町教委 『佐野遺跡範囲確認調査報告』 1975
 - 7 未報告 昭和56年度刊行予定
 - 8 佐原真 「土器面における横位文様の施文方法」 『石器時代』 3 1956
『清水天王山遺跡第1次～第3次発掘報告』 清水市郷土研究会 1960
『紫雲出』 香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会 1964
横山浩一 「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」 『九州文化史研究所紀要』 24 1979
- 註1 文献

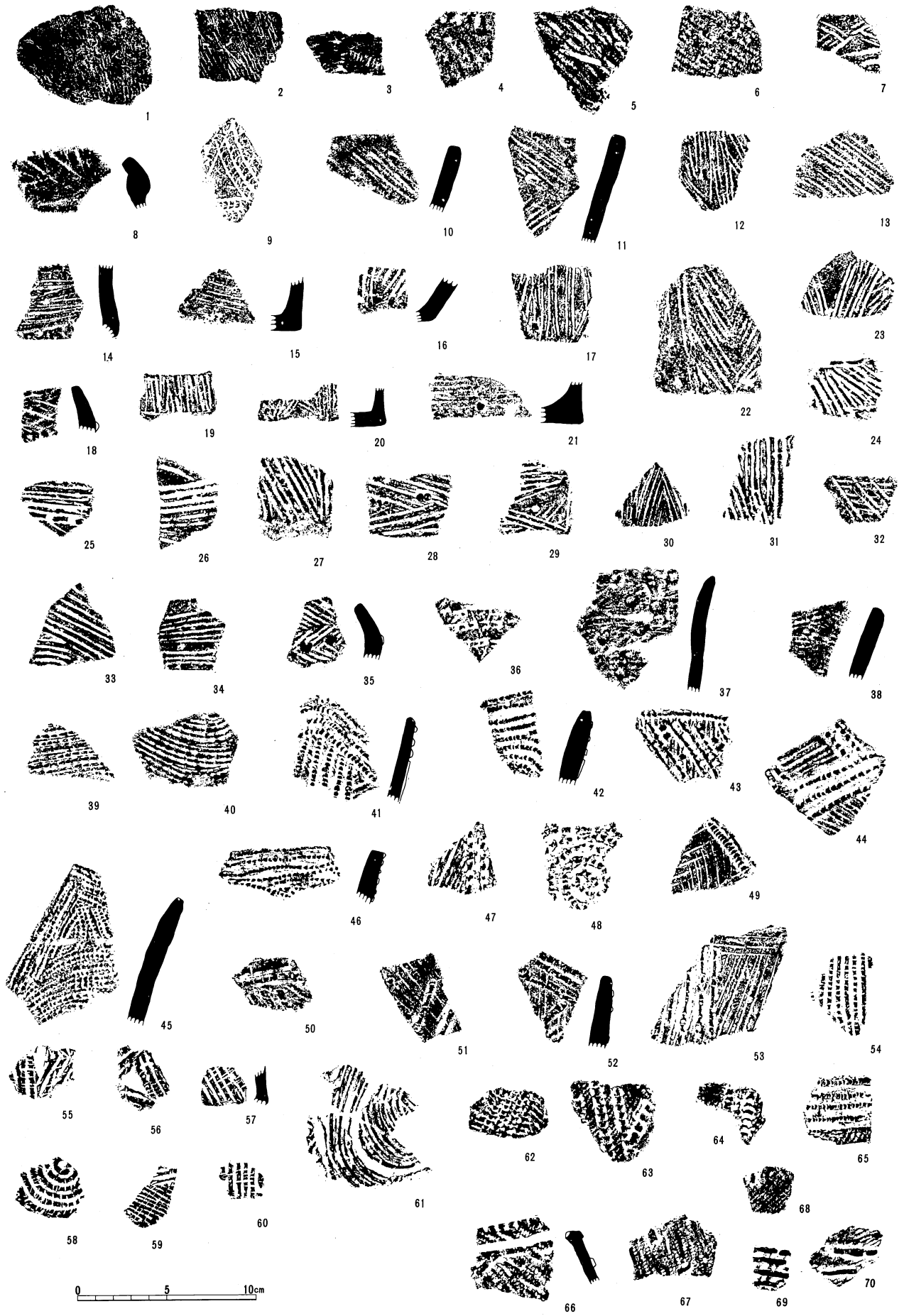


図12 經塚遺跡縄文時代土器拓影図 (I・II群) (1:3)

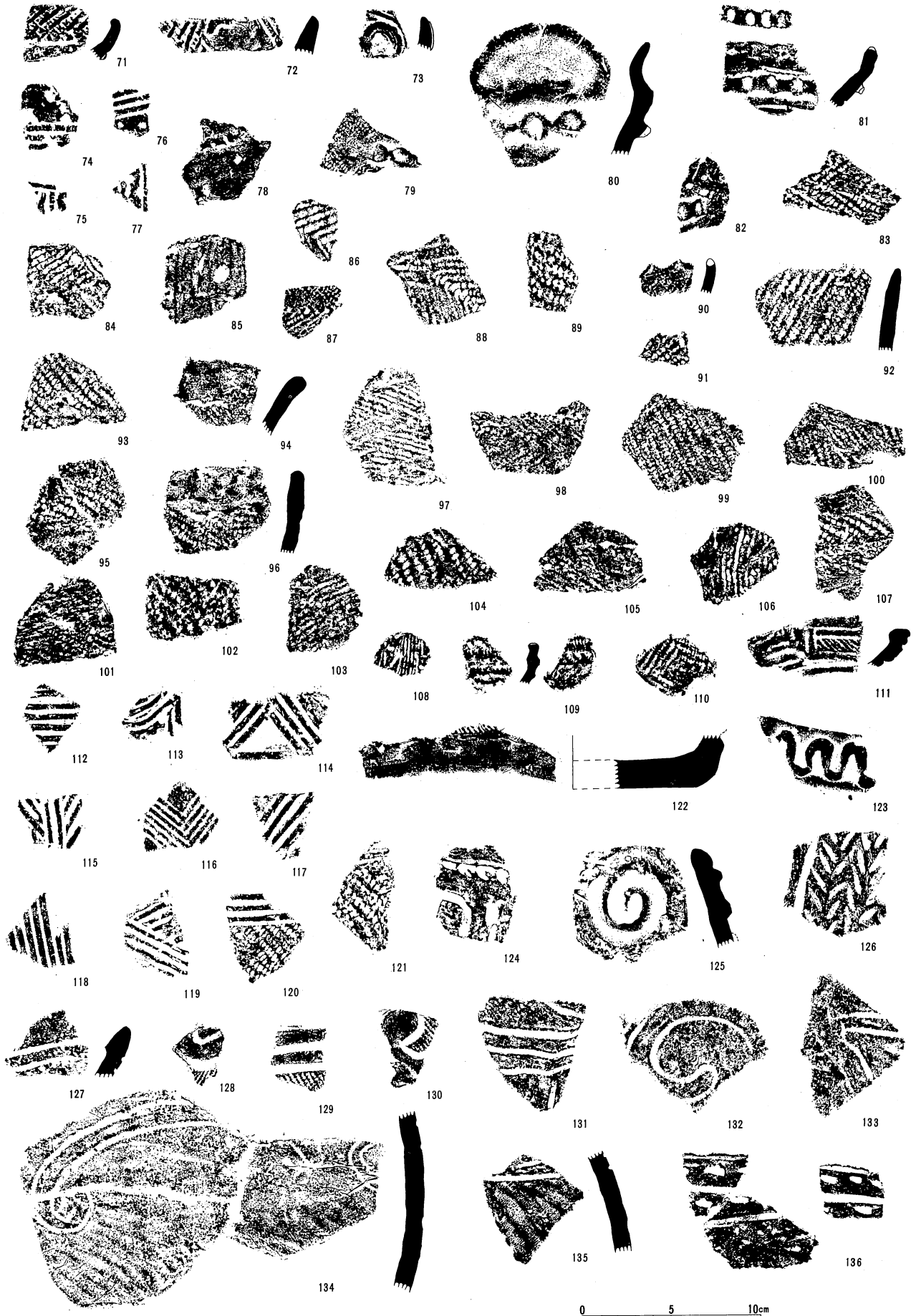


図13 経塚遺跡縄文時代土器拓影図(Ⅱ~Ⅳ群)(1:3)

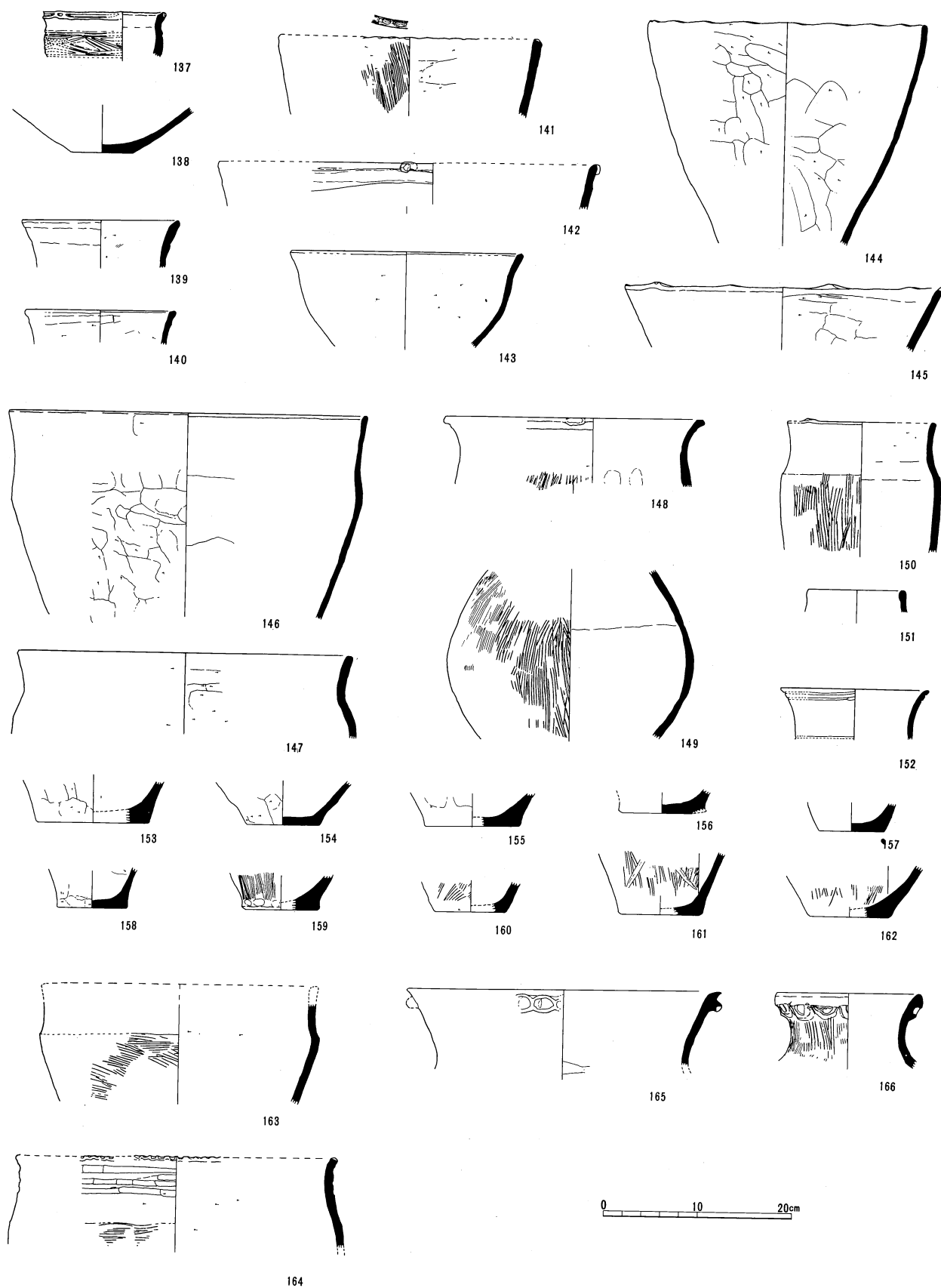


図14 経塚遺跡縄文時代土器実測図（V群）（1：6）



図15 経塚遺跡縄文時代土器拓影図 (V群) (1 : 3)

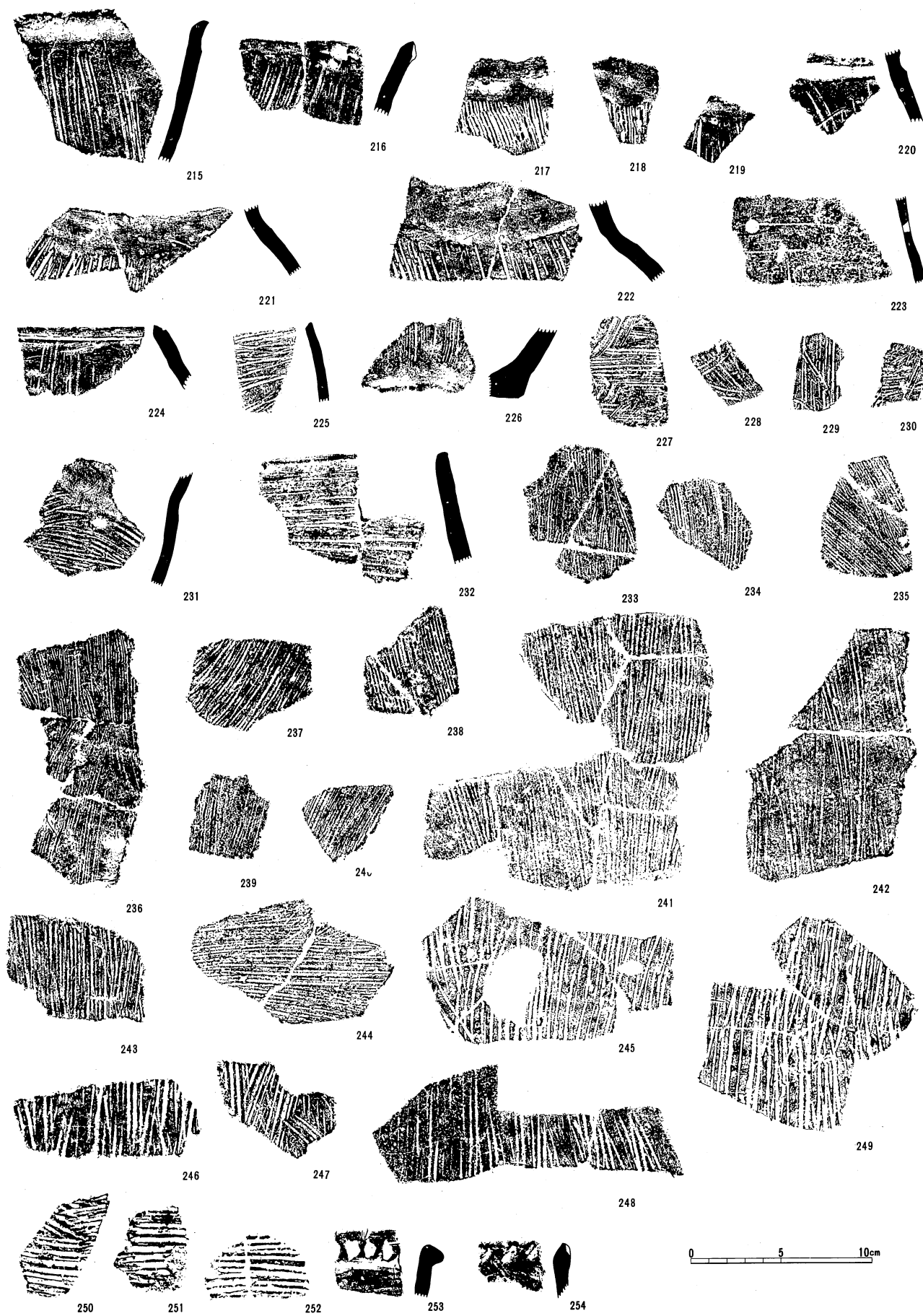


図16 經塚遺跡繩文時代土器拓影図 (V群) (1:3)

第四章 調查遺跡

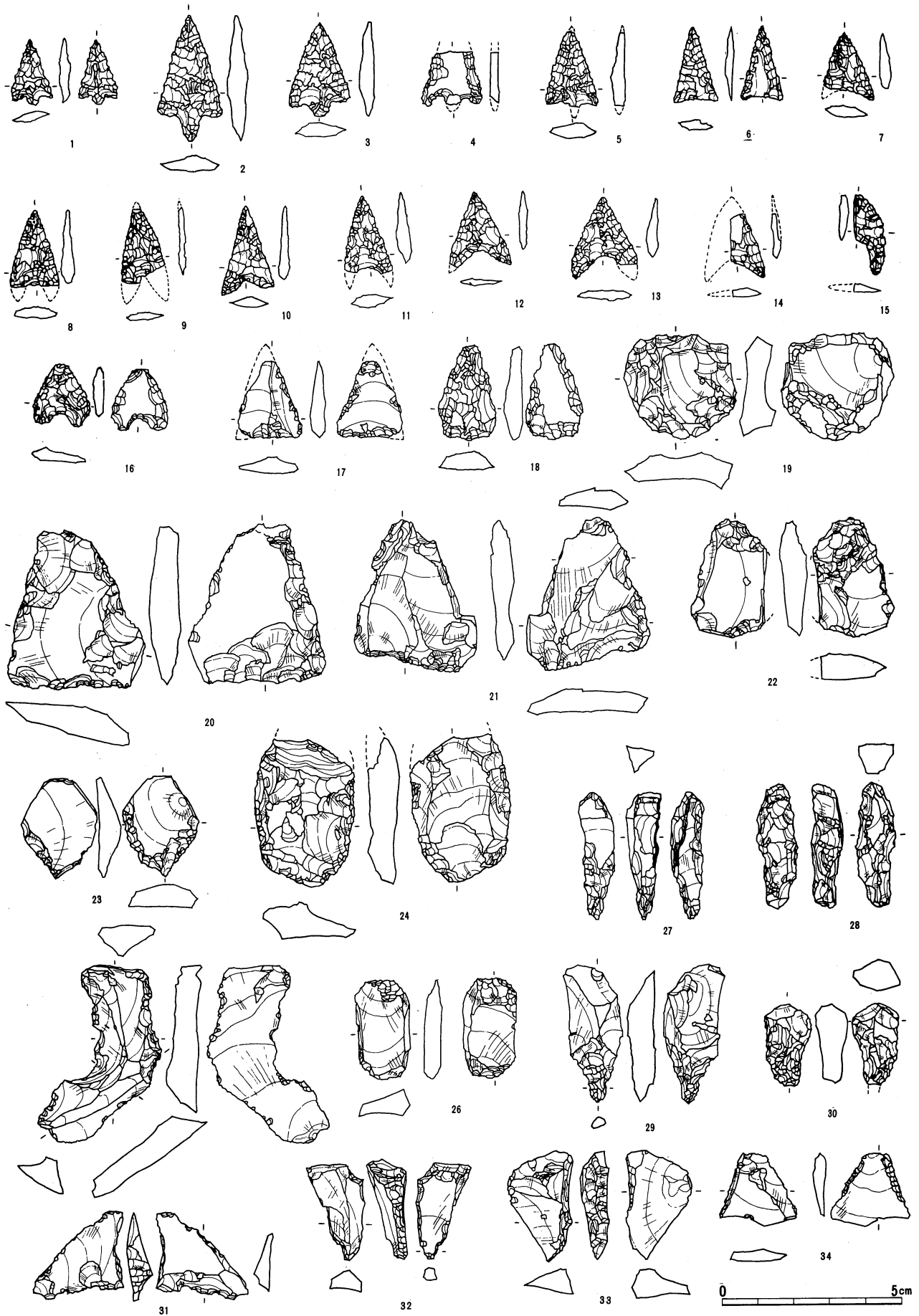


図17 経塚遺跡縄文時代石器実測図(1:1.5)

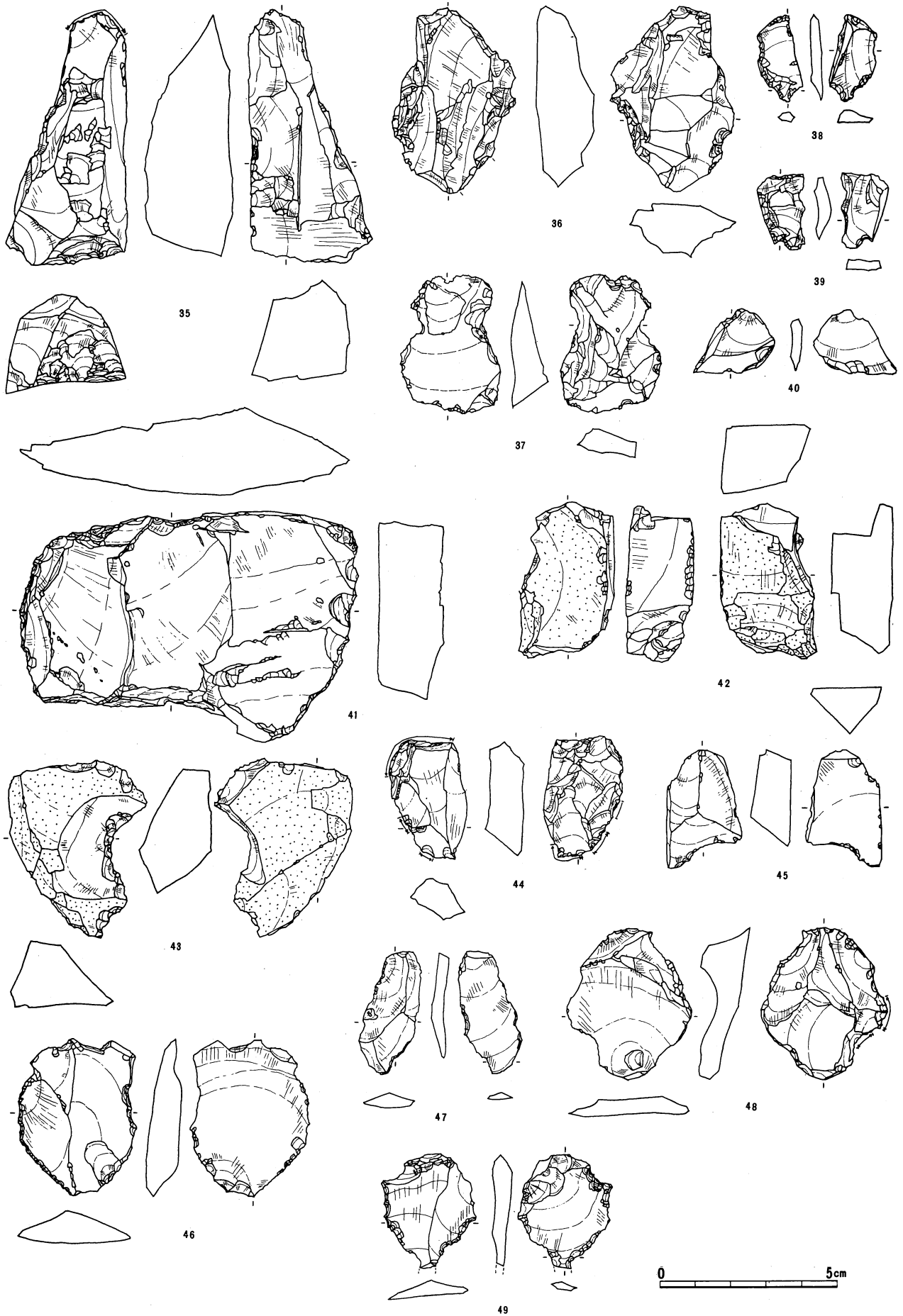


図18 経塚遺跡縄文時代石器実測図(1:1.5)

第IV章 調査遺跡



図19 経塚遺跡縄文時代石器実測図 (1:1.5)

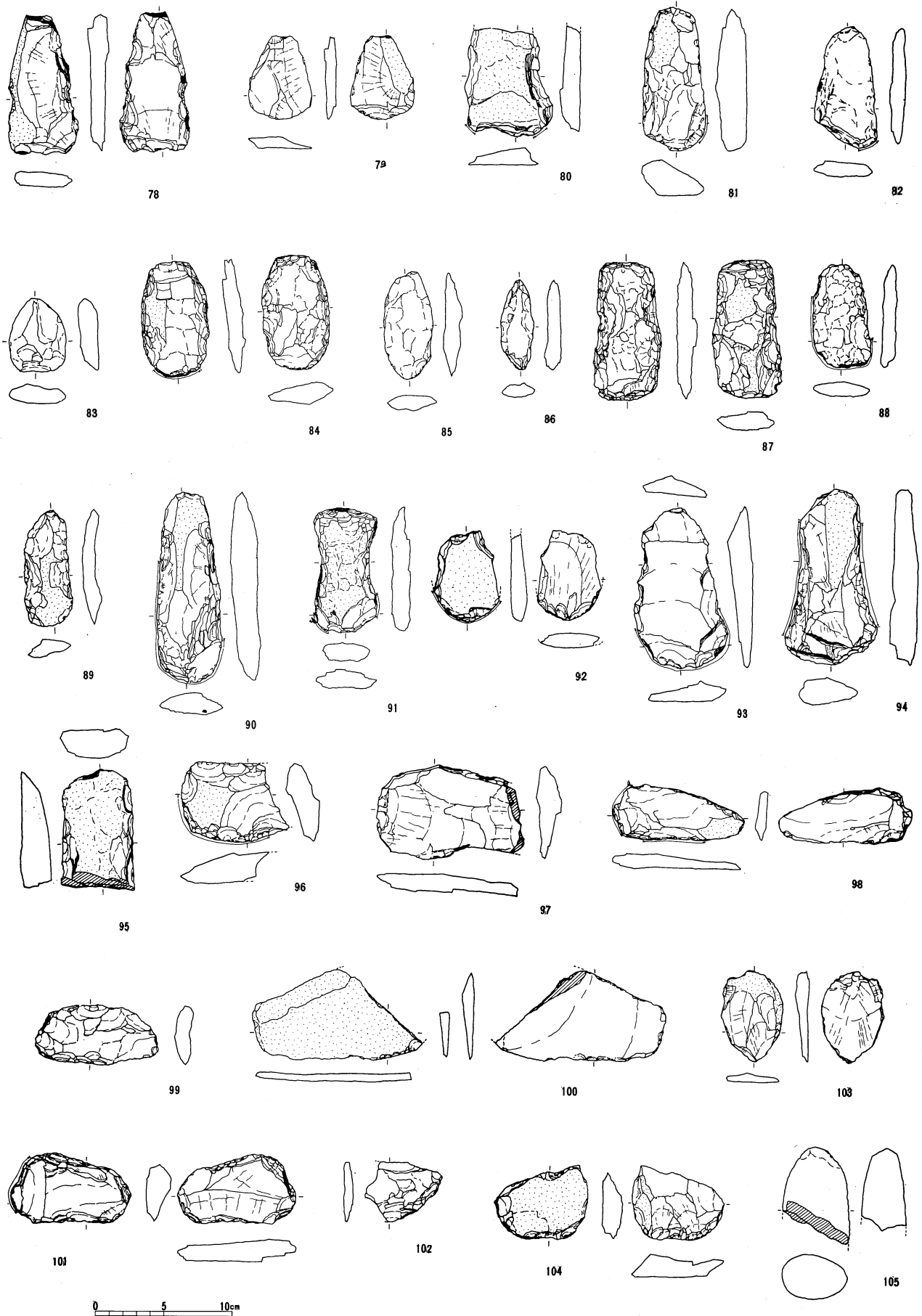


図20 經塚遺跡縄文時代石器実測図(1:4)

第IV章 調査遺跡

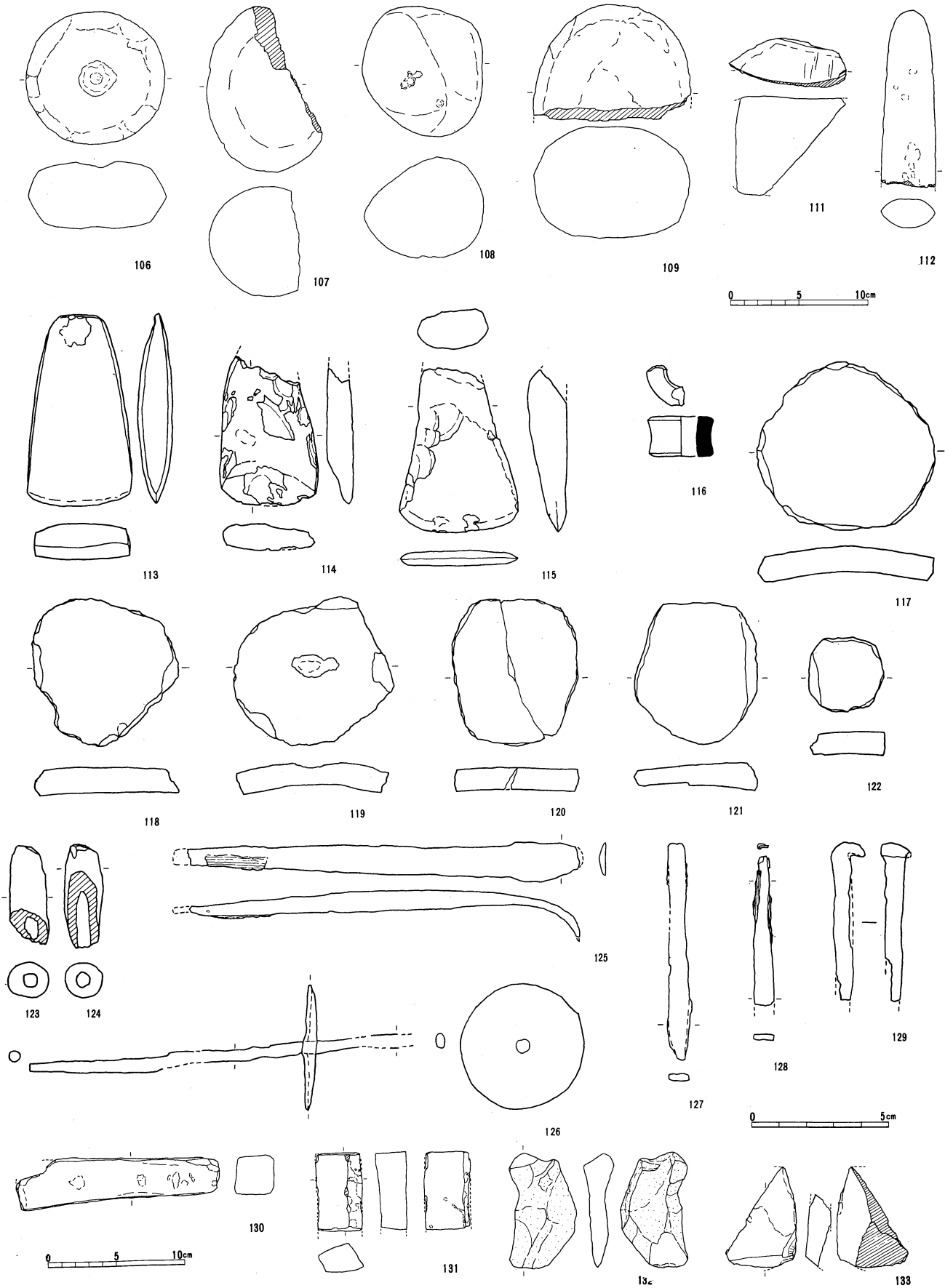
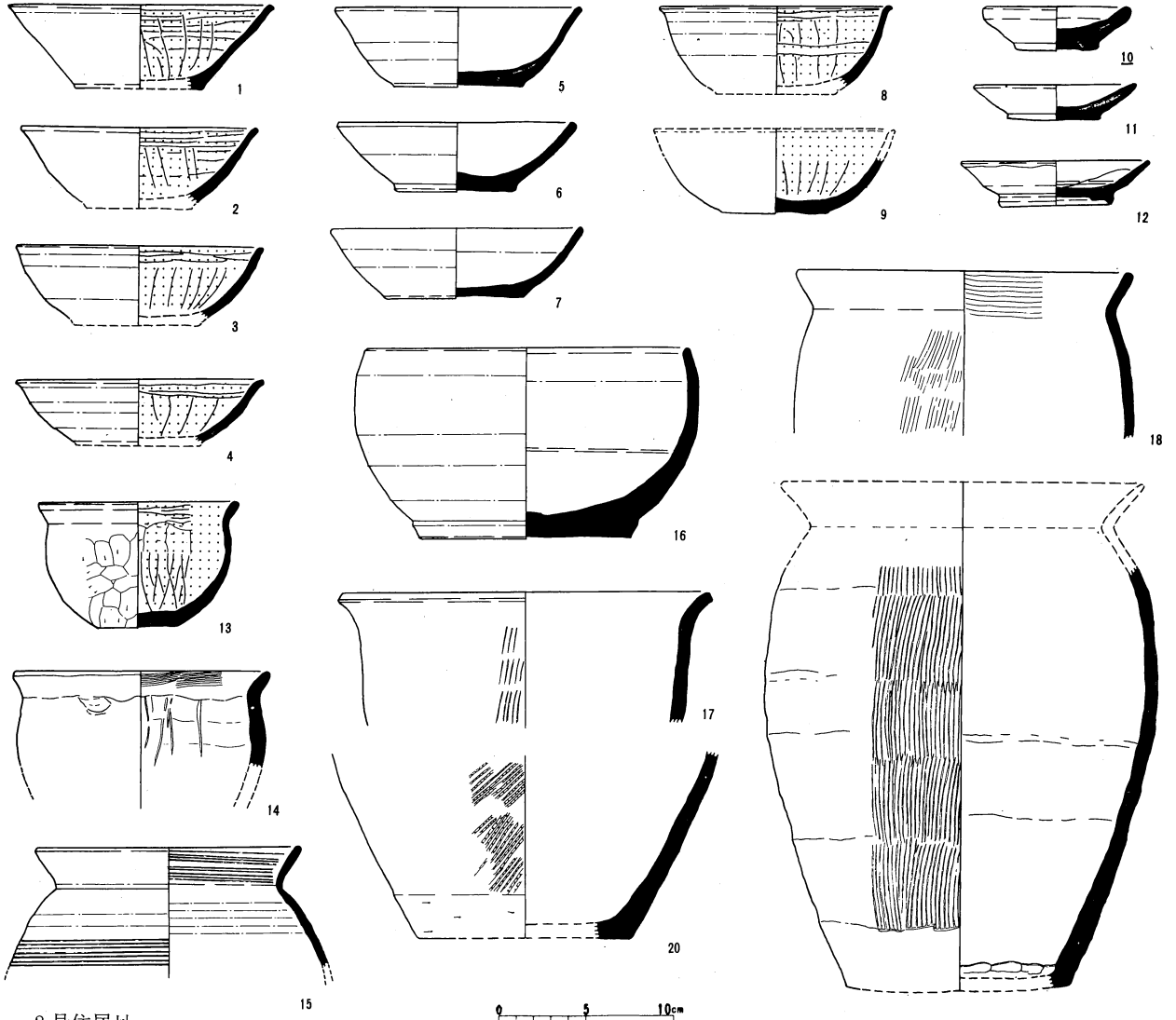


図21 経塚遺跡縄文時代石器（1：4），同土製品（1：2）、平安時代土製品・鉄製品（1：2）、同石器（1：4）実測図

1号住居址



2号住居址

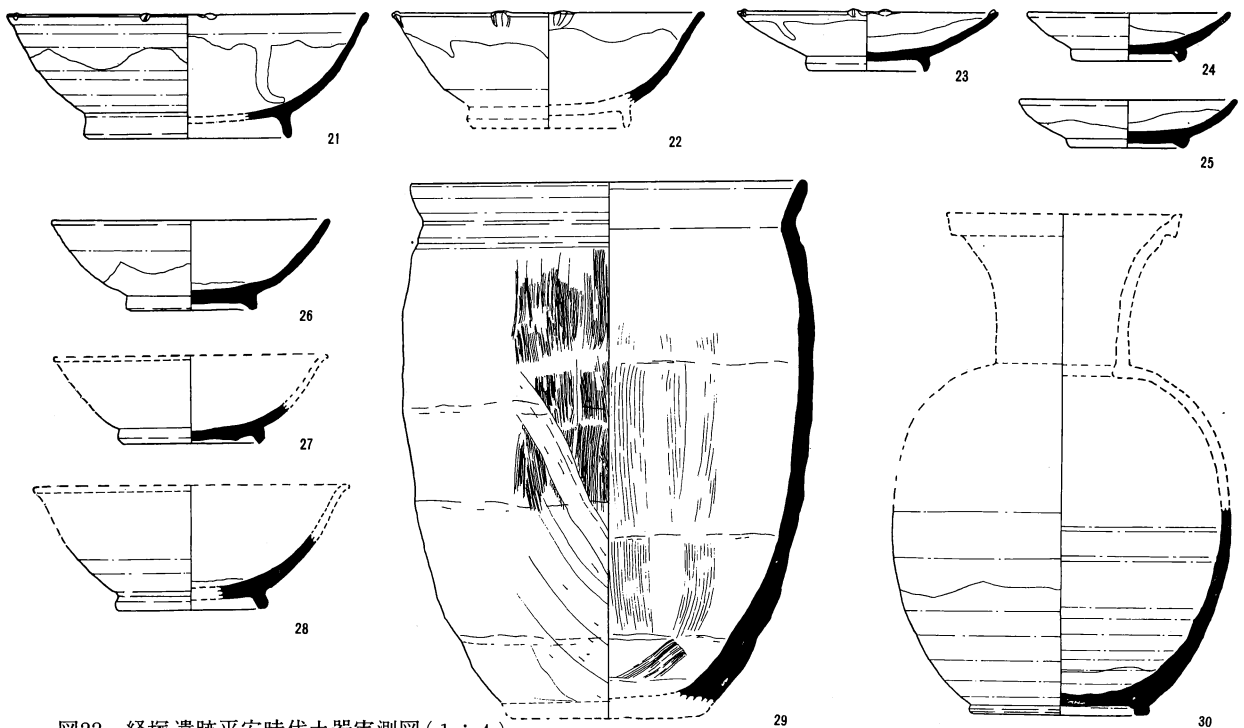


图22 経塚遺跡平安時代土器実測图(1:4)

第IV章 調査遺跡

表10 経塚遺跡縄文時代石器一覧

石 鏃

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量 g	長幅指数	石 質	破 損	備 考
1	1	a	18	10.5	3	0.3	1.7	黒曜石 A	—	
2	2	a	35	18	5.5	1.6	1.9	" A	—	
3	3	a	26	17	4	1.1	1.5	" A	—	
4	4	a	(14.5)	16.5	2.5	0.7	—	" A	a・d	
5	5	a	(19.5)	14	4	0.9	—	" A'	a・d	
6	6	b ₁	20.5	12	2.5	0.4	1.7	チャート	—	
7	7	b ₁	18.5	(14)	3	0.5	—	黒曜石 A	—	
8	8	b ₂	(21)	13.5	3.5	0.7	—	" A'	c	
9	9	b ₂	(20.5)	(12)	2	0.5	—	" A	a・c	
10	10	b ₂	24.5	14	3.5	0.7	1.8	" A	c	
11	11	b ₂	(22)	13	3.5	0.8	—	" A'	c	
12	12	b ₃	(21)	17.5	2.5	0.6	—	" A	—	
13	13	b ₃	22.5	18	3	0.7	1.3	" A'	c	
14	14	b ₃	(18)	(9.5)	2.5	0.4	—	" A'	a・b・c	
15	15	c ₁	22	(9)	2.5	0.4	—	" A'	a・b・c	
16	16	c ₂	17	16	3.5	0.8	1.1	" A	—	
17	17	d	(21)	17.5	4.5	1.3	—	" A	a・c	
18	18	d	26.5	15.5	5	2.2	1.7	" A'	—	
	19	—	(20)	(12)	5	1.0	—	" A	a・b・c	
34	20	—	(20)	(21.5)	3.5	1.3	—	" A	—	

スクレイパー

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量 g	刃部長さmm	刃部ふくらみ値	刃部角度	石 質	備考
21	21	b	39.5	34	6.5	7.7	26.5	— 1	41~50	黒曜石 A	
20	22	b	44	38	8	14.2	a 27, b 31.5 c 39.5	± 1, ± 1 + 1, - 0.5	41~60, 41~50 41~70	" A	
24	23	a	(41)	27.5	9	10.8	—	—	61~80	" A'	
22	24	b	(33)	20.5	7.5	5.5	—	—	61~80	" A	
23	25	c	27.5	21	6	3.4	a 21, b 17	+3.5, +1.5, -0.5	61~70, 61~70	" A	
	26	c	—	—	5	1.6	a 23.5, b (10)	+ 6, - 1	51~60, 51~60	" A'	
	27	b	—	—	—	1.5	—	—	51~90	" A	
	28	c	—	—	—	2.5	—	—	51~60	" A	
19	29	a	29	31	9	8.8	全 周	—	51~80	" A'	

ドリル

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量 g	錐部長さmm	錐部幅mm	石 質	備 考
29	30	a ₁	38	15	6	3.5	6.5	4.5	黒曜石 E	
27	31	b	35	8.5	7	2.4	15	5.5	" A	
28	32	b	34	11	8	3.2	9	7	" A	
	33	b	34.5	11.5	7.5	2.5	—	—	" A	
30	34	a ₂	22.5	13	9	3.5	—	—	" A	
32	35	a ₂	(36.5)	13	10	3.0	—	—	" A	

そ の 他

図番号	登録番号	器 種	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量 g	石 質	備 考
37	36	抉入石器	39	28	9.5	9.2	黒曜石 A	使用痕有
25	37	"	49	18	8.5	8.4	" A	"
33	38	調整剥離 a	31	18	8.0	2.3	" A	
	39	" a	(30.5)	18.5	8	3.2	" A'	使用痕有
31	40	" a	22	25	5.5	2.5	" A	"
40	193	" b	18.5	23	3.5	1.1	" A'	
	261	ピエス・エスキーユ	26.5	18	15	6.2	" A	
26	270	"	27.5	15.5	7.5	3.1	" A	

使用痕のある剥片・石核・原石

図No.	No.	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考	図No.	No.	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
	37	I(Bb+Bb+Ba)						挟入石器		90	I Bc	33	28	10	6.2	黒曜石A	
25	37							挟入石器		91	I(Bc+Bc+Bc+Bc)	33	19.5	7.5	4.6	" A	
	39							調整剥離a		92	I(Cc+Ba+Bc)	39.5	17.5	9	4.5	" A	
31	40							"		93	I Bc	31	19	11	5.1	" A	
35	41	II(B-)	73.5	33.5	27.5	60.6	黒曜石A'	"	60	94	I(Bc+Bb)	47.5	18	11	5.7	" A'	
	42	II(Bc+Bc)	39	29.5	12	7.3	" A	調整剥離b	50	95	I(Bc+Ba)	22.5	32.5	9	5.4	" A'	
	43	II(Bc+Ba+Bc)	35	23.5	11	7.7	" A	"	64	96	I(Bc+Bb+Bc)	23	29.5	4.5	2.6	" A'	
42	44	III(Bc+Bc+Bc)	45	25.5	18.5	25.1	" A		56	97	I(Bc+Ba+Bc)	22.5	29.5	8.5	3.5	" A'	
	45	III(Bc+Ba)	47	29.5	29	30.5	" A'			98	II(Bb+Bc)	17.5	37.5	9	4.4	" A	
	46	III(Bb+Bc)	37	19	13.5	5.9	" A'			99	I(Bc+Ba)	31.5	23.5	5.5	3.9	" A'	
	47	III(Bc+Bc+Bc)	28	35.5	7.5	8.5	" A			100	I(Bb+Ba)	27	26.5	6	3.8	" A	
	48	III Bc	25.5	16.5	10	3.6	" A'		65	101	I(Bb+Bc)	34	18.5	6.5	3.4	" A'	
	49	III Bc	46.5	22.5	9	9.8	" A		62	102	I(Bb+Bc+Bc+Bc)	22	28	5.5	2.9	" A	
	50	II(Bc+Bc)	39.5	27	15	10.1	" A		68	103	I(Bc+Bb+Bc)	21.5	24.5	8	3.5	" A	
	51	II Bc	36.5	19.5	10	7.4	" A'			104	I(Bc+Bc)	21	28.5	6.5	3.8	" A	
44	52	II(Bc+Dc+Ba)	35	21	11	7.8	" A		59	105	I(Bc+Bc+Bb+Bc+Bc)	37.5	20.5	6	3.3	" A	
	53	III Bb	48.5	31	10	13.2	" A			106	I Bc	42	15.5	7.5	4.2	E・A	
43	54	III(Bb+Bb)	50.5	39.5	19.5	27.9	" A		51	107	I(Bc+Ba+Bc)	28.5	26.5	7.5	3.4	" A	
	55	II(Bb+Bc)	35	27	17.5	12.5	" A			108	II Ba	32.5	26	9	4.5	" A'	
	56	II(Bb+Bc)	25	34.5	8.5	5.5	" A'		63	109	I(Bc+Bc)	23	23.5	9	4.2	" A	
45	57	II(Bb+Bc)	33	21	13.5	6.6	" A			110	I Bc	31.5	30	7.5	4.3	" A	
	58	II Bb	30	49	17	21.6	" A'			111	I(Bc+Bc)	20	33	9.5	4.3	" A	
	59	II(Bb+Dc)	39	32	24	24.8	" A			112	I Bb	22	33.5	9.5	5.2	" A	
	60	III(Bc+Bc)	42	27	20	13.7	" A			113	I(Ba+Bc)	23.5	27	9.5	4.0	" A	
	61	II(Bb+Bc)	26.5	39	17	14.7	" A'			114	I(Bc+Bc)	16	40.5	7	3.3	" A	
	62	II(Bc+Bb)	21	21	10	3.5	" A			115	II(Bb+Bb)	26.5	22	9	4.3	" A	
	64	III(Bc+Bc)	47.5	49.5	21.5	43.8	" A			116	I(Bb+Cc)	37	20	5.5	3.8	" A'	
36	65	III(Bc+Bc+Ba)	51.5	34.5	15.5	21.2	" A'	調整剥離b		117	I(Ba+Bc)	34.5	20	7	3.8	" A	
	66	II(Bc+Ba)	28.5	19	7.5	4.0	" A			118	II(Ba+Bc+Bc)	28.5	21.5	10.5	4.2	" A	
	67	II Bc	29	20.5	10.5	5.4	" A			119	II Cc	24	25	7.5	3.7	" A'	
	68	II Ba	34	21.5	12	6.5	" A			120	II(Bc+Bc)	26.5	24.5	8	3.3	" A	
	69	III Bc	96.5	65	22.5	150	" A	調整剥離b		121	I(Bc+Bc)	23	18	7	3.6	" A	
	81	I(Bb+Bc)	27	36	7.5	6.9	" A			122	I(Ba+Bb)	22	26.5	7	2.5	" A	
	82	I(Ba+Bb)	27.5	35.5	9	8.3	" A	調整剥離b		123	I(Ba+Bc+Bc+Bc)	30	15	10.5	2.8	" A'	
	83	I(Bc+Bc)	36.5	34.5	8.5	10.1	" A			124	I Bb	23.5	33	5.5	2.9	" A'	
46	84	I(Bc+Ba)	41.5	37.5	9	11.8	" A			125	I(Bc+Bc)	24.5	26.5	3.5	2.0	" A	
48	85	I(Bb+Ba+Bc)	42.5	35.5	15	11.2	" A			126	I(Bc+Bb+Bc)	21.5	28.5	5.0	2.1	" A	
	86	I(Ba+Bb)	37.5	27	6	5.5	" A	調整剥離b		127	II Bc	33	14.5	11	4.2	" A	
	87	I(Ca+Ba)	39	27	7	6.0	" A'			128	II Bc	21	34	5.5	3.4	" A'	
49	88	I(Ba+Ba)	31	28.5	7	4.1	" A			129	II(Bc+Bb+Bb)	26	26	6	3.1	" A'	
67	89	I(Bb+Bc)	34	27.5	9.5	6.4	" A			130	I Bb	21	24.5	6	2.2	" A	

第IV章 調査遺跡

図No.	No.	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考	図No.	No.	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考	
	131	I (Bb+Bc)	14.5	27	7	2.4	黒曜石A'			172	I (Ba+Bc)	16.5	23.5	3.5	1.2	黒曜石A		
	132	I Bc	22	31	4.5	2.2	" A			173	I (Bb+Ba)	16.5	23.5	3	1.2	" A'		
	133	I Bc	17	27.5	8	2.8	" A		61	174	I (Bc×8)	21	18.5	3.5	1.2	" A		
	134	II Ba	22	18.5	9	3.7	" A'			175	I (Ba+Bc+Dc)	15.5	23.5	6.5	1.5	" A		
	135	I (Bb+Ba+Bc)	23.5	32	9	3.7	" A	調整剥離b		176	I (Bc+Bc+Ba)	15.5	23.5	5	1.7	" A'		
	136	II (Bc+Bc)	25.5	16.5	8	3.3	" A			177	I Ba	20.5	20	6	1.9	" A'		
	137	I Bb	23.5	23	9	2.8	" A			178	I (Bc+Ba+Ba)	22	18.5	7	2.5	" A		
	138	I Bc	20	25.5	7	3.1	" A'			179	II Bc	16.5	22	5	1.2	" A		
	139	I (Ba+Bb)	27.5	19.5	6.5	2.6	" A		54	180	I (Ba+Bc)	22.5	19.5	3.5	1.3	" A		
	140	III (Bc+Ba)	21	26	8	3.7	" A'			181	I Bc	16.5	25.5	4	1.6	" A		
	141	I (Bc+Bb)	20.5	22.5	6	1.9	" A			182	I (Bc+Dc)	24.5	20.5	7.5	1.7	" A		
	142	I (Bb+Bc+Bb+Bc)	24	23	4	2.2	" A	調整剥離b		183	I (Bb+Ba)	24	18	4	1.9	" A'		
47	143	I (Bc+Ba)	35.5	15	4	1.7	" A			184	I (Bc+Bc+Bc+Bc)	24	23	4.5	2.1	" A		
	144	II (Ba+Ba)	30.5	20	6	2.6	" A			185	II (Bc+Ba)	27	15.5	4.5	1.5	" A		
	145	I (Bb+Ba+Bc+Ba)	28	19.5	5	2.1	" A			186	I Bc	15.5	13.5	3.5	1.2	" A		
	146	I Bc	27.5	21	5	2.4	" A'			187	I (Bc+Bc)	18.5	22.5	5.5	1.5	" A'		
	147	I (Bc+Bc)	25.5	20.5	5	1.6	" A		55	188	I (Bc+Bc+Ba+Bc)	17.5	19.5	5.5	1.3	" A		
	148	I (Bc+Bc+Bc)	20	22.5	4	1.7	" A			189	I (Bc+Bc)	23.5	16.5	4	1.6	" A'		
	149	I (Ba+Bb)	20.5	20.5	4.5	1.9	" A			190	II Ba	20	14.5	7	1.4	" A		
	150	I Ba	16.5	31.5	8	3.2	" A			191	I Bc	25.5	13.5	5	1.6	" A		
	151	I Bc	25	19.5	7.5	2.7	" A'	調整剥離b		192	I (Ba+Bb+Ba)	21	16.5	5	1.4	" A		
	152	I (Ba+Ba+Bb)	24	22	7	3.5	" A'			194	I (Bc+Bc+Bc)	18	19.5	5.5	1.2	" A'		
	153	I (Bb+Bc+Ba)	28.5	19	6	2.2	" A			195	I (Bc+Bc+Bc)	17	27	3.5	1.2	" A		
	154	I (Bc+Bc+つぶれ)	18.5	22.5	7	2.2	" A'			196	I (Bb+Ba+Bc)	26	14.5	7	1.9	" A		
	155	I Bc	19.5	24.5	4	1.5	" A'			197	I (Bc+Bb)	12	20.5	6	1.6	" A		
	156	I Bc	21.5	20	5	2.0	" A			198	III Bb	23	18	4	1.5	" A		
	157	I (Ba+Ba)	24.5	20	7.5	2.8	" A	調整剥離b		199	I (Ba+Bb)	23	17.5	4	1.2	" A		
	158	I (Bb+Ba+Bb+Bc)	28.5	18.5	8.5	2.7	" A'			200	I (Bc+Bc+Bc+Bb)	26	13.5	3	1.0	" A		
	159	I (Bc+Ba)	24	16.5	4	1.2	" A'		66	201	II Bc	25	9.5	5.5	1.2	" A		
	160	I Bb	28.5	18.5	7	2.1	" A			202	I Ba (全周)	13.5	19	6	1.5	" A'		
	161	II (Ba+Bc)	25	17	6.5	1.5	" A			203	I (Bb+Ba)	16.5	20.5	3	1.0	" A'		
	162	II (Bc+Bc+Bc)	22.5	23	5.5	2.1	" A			204	I Ba	20.5	15	4.5	1.2	" A		
	163	I Bc	26	26	3	1.7	" A			205	I Ba	21	16.5	5	1.2	" A		
	164	I Bc	33.5	14	7	1.8	" A			72	206	I Bc	13	28	3.5	1.0	" A	
	165	II (Bc+Bc)	21	19	5.5	1.9	" A			207	I (Ba+Bc)	20.5	19.5	6.5	2.0	" A		
	166	I (Bc+Bc)	15	28.5	5.5	1.9	" A'			208	I Bb	12.5	22.5	4.5	1.1	" A		
	167	I (Bc+Bc)	20	20.5	8	1.9	" A			209	I (Bc+Bc)	20.5	15	5.5	1.5	" A		
	168	II (Ba+Bc+Ba)	20.5	19.5	5	1.6	" A			73	210	I Bb	21	15.5	4.5	1.0	" A'	
	169	I Bc	25	20	6	2.4	" A			211	II Bc	14	19	6	1.5	" A'		
	170	I (Bc+Ba+Dc)	30	13	5	1.9	" A'			212	I (Bc+Bc+Bb+Bb+Dc)	24	12.5	4	1.2	" A		
52	171	I (Bc+Bb+Ba)	19.5	21	4	2.0	" A											

図No.	No.	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考	図No.	No.	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
	213	I (Bc+Ba)	12	25	3.5	1.2	黒曜石A			241	II Bc	22	9	5	0.8	黒曜石A'	
	214	I Bc	13.5	22.5	6	1.2	" A			242	I (Bb+Bc+Bb)	13	14.5	2	0.5	" A	
	215	I (Bc+Bc)	13	21.5	9	1.4	" A'			243	I (Bc+Bc+Bc)	20.5	10	9	1.3	" A	
	216	I (Bc+Bb)	18.5	21	4	0.8	" A		53	244	I (Ba+Bc)	23.5	10.5	2.5	0.5	" A	
	217	I (Ba+Bc)	16.5	18.5	6	1.3	" A'			245	I (Ba+Bc+Bc)	10	16	3.5	0.6	" A'	
	218	I Bc	22.5	15	4	1.0	" A			246	I (Bc+Ba)	13.5	12.5	2	0.3	" A'	
	219	II (Bc+Bc+Bc)	24	11	4.5	1.2	" A'			247	I (Bc+Bc)	8	20.5	3.5	0.5	" A	
	220	I Ba	13.5	24.5	4.5	1.1	" A'		58	248	I Ba	19	11.5	2.5	0.4	" A'	
	221	I (Ba+Bc+Bc)	11.5	19.5	3.5	0.7	" A			249	I (Ba+Bc)	17	11.5	3.5	0.6	" A	
	222	I Bb	18	11	4.5	0.6	" A			250	II (Bc+Bc)	20.5	9	4.5	0.9	" A	
	223	I Bc	11	15	5	0.9	" A			251	I Bb	16.5	12.5	2.5	0.3	" A'	
	224	I (Bc+Bc)	13.5	21	4	0.8	" A'			252	I Bb	11	16	5.5	0.4	" A	
	225	I (Bc+Bc)	22.5	12.5	5	1.0	" A			253	I (Ba+Bc)	19	15.5	2	0.4	" A	
71	226	I (Bc+Bc)	11.5	23.5	2.5	0.9	" A			254	I (Bb+Bb)	14.5	10.5	2	0.2	" A'	
	227	I (Bc+Bc)	21.5	12	3	0.7	" A		57	255	I Ba	11.5	9.5	2	0.3	" A	
38	228	I (Bb+Bb+Bb+Ba)	23.5	11	3.5	1.0	" A	調整剥離b		256	I Ba	32.5	27.5	8.5	7.6	" A	
	229	I Bc	13	16	4.5	0.7	" A'		69	257	I (Bc+Bc)	27.5	20.5	11	4.9	" A	
	230	I (Bb+Ba)	16.5	22.5	3.5	1.0	" A			258	I Bb	21	42.5	8	5.2	" A'	
39	231	I (Bb+Bb+Bc)	12.5	21.5	5.5	1.2	" A	調整剥離b		259	I Bc	18.5	25.5	9	2.5	" A'	
	232	I Bc	18.5	12.5	4	0.7	" A			260	II (Ba+Bc)	44	19.5	9.5	7.8	" A'	
	233	I Bb	21	12.5	3.5	0.7	" A			262	I Bc	37.5	27	9	7.6	" A	
	234	I (Bb+Bc)	18	18	3	0.6	" A			264	II Bc	34.5	23.5	16	9.8	" A'	
	235	I (Bc+Ba)	23	12.5	3	0.9	" A			265	I Bb	36.5	19	8.5	6.3	" A	
	236	I Bb	17	18.5	2.5	0.7	" A			266	II Bc	30.5	17.5	13	5.8	" A'	
	237	I (Bb+Bb+Bc+Ba)	14.5	22	2	0.6	" A			267	II Bc	29	38.5	10.5	11.0	" A	
70	238	I (Bc+Bb)	20.5	13.5	5	0.9	" A'			268	II Bc	27.5	25.5	14	9.1	" A'	
	239	I (Bc+Bb)	14.5	21	3	0.6	" A										
	240	II (Bc+Ba)	17	13.5	5.5	1.0	" A										

- ・計測数値は総て実長・実重量である。
- ・石鏃・クスレイベー・ドリル・調整剥離のある剥片等の分類は本遺跡独自に行なっている。
- ・石質は本文P 213, に従う。
- ・石鏃の長幅指数は長さ÷幅、欠損部位は a : 尖頭部 b : 側辺部 c : 脚部 d : 茎部とする。
- ・スクレイベーの刃部は主要剥離面を表にし、上から時計回りに a・b・c……の順に計測した。
- ・ふくらみ値は、刃部両端を結んだ基準線より最突部又は最凹部までの長さ (mm) である。+は凸を-は凹を示す。
- ・使用痕ある剥片・石核・原石には、他器種の石器で刃こぼれ・刃つぶれのあるものも含めて掲載した。分類は本文P 26~27に従った。刃部角は使用前の角度を10°単位で測定した。

第IV章 調査遺跡

打製石斧，横刃型石器，その他

図 番号	登録 番号	器 種	分類	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	破 損	備 考
83	1	打製石斧	II A	5.4	4.1	2.5	1.3	40	粘板岩	—	
84	2	〃	II B	8.3	4.9	4.4	1.6	80	〃	—	刃部磨耗
85	3	〃	II C	7.8	3.6	?	1.3	40	〃	—	
	6	〃	II	—	—	—		(30)	砂岩	胴～刃部	
	7	〃	II	—	4.7	—	2.3	(120)	粘板岩	刃部	側縁部磨耗
	8	〃	II	—	3.6	—		(30)	砂質粘板岩	胴～刃部	側縁部磨耗
78	9	〃	I A	10.1	5.0	4.1	1.5	85	〃	—	側縁部磨耗，えぐり
	10	〃	I A	10.8	4.7	4.5	1.4	80	〃	—	えぐり2ヶ所
	11	〃	I B	11.6	5.9	5.5	1.6	140	砂岩	—	刃部・側縁部磨耗
	12	〃	I B	9.8	—	—	1.6	(60)	細粒砂岩	側縁部	全周磨耗，えぐり
	13	〃	I B	—	5.1	5.0	1.5	(60)	砂質粘板岩	頭部	刃部磨耗，えぐり
79	14	〃	I B	6.0	4.7	4.3	1.1	28	細粒砂岩	—	側縁部磨耗
81	15	〃	I C	10.5	4.7	3.9	2.6	140	砂岩	—	刃部・側縁部磨耗
82	16	〃	I C	8.6	4.6	4.6	1.2	60	粘板岩	—	えぐり
	17	〃	I C	7.9	4.0	3.1	1.5	50	〃	—	側縁部磨耗
	18	〃	I	—	—	—	1.4	(65)	細粒砂岩	頭部・刃部	全周磨耗
	21	〃	I	—	—	—	1.4	(35)	砂質粘板岩	胴～刃部	
	24	〃	I	—	—	—	1.2	(30)	粘板岩	胴～刃部	頭部磨耗
87	25	〃	III A	10.0	4.9	3.9	1.4	85	砂質粘板岩	—	えぐり2ヶ所
	26	〃	III A	6.4	3.6	3.0	1.1	25	粘板岩	—	全周磨耗
89	27	〃	III A	8.4	3.5	3.0	1.4	40	砂岩	—	
90	28	〃	III B	13.9	4.7	4.0	2.1	165	粘板岩	—	全周磨耗
88	29	〃	III A	7.5	4.0	3.5	1.2	45	〃	—	側縁部磨耗
	30	〃	III A	6.5	3.7	2.9	0.7	20	〃	—	全周磨耗
95	31	〃	III	—	5.4	—	2.2	(150)	砂質粘板岩	胴～刃部	えぐり
	32	〃	III	—	5.2	—	2.1	(145)	粘板岩	胴～刃部	えぐり
	33	〃	III	—	6.6	—	2.1	(230)	細粒砂岩	頭部・刃部	側縁部磨耗
	34	〃	III	—	6.7	—	3.2	(300)	〃	頭部・刃部	えぐり
	36	〃	III	—	5.3	—	1.5	(82)	粘板岩	胴～刃部	側縁部刃つぶし
	37	〃	III	—	5.2	—	1.3	(65)	砂質粘板岩	胴～刃部	
	38	〃	III	—	5.4	—	2.2	(85)	細粒砂岩	胴～刃部	
	39	〃	III	—	5.6	—	1.5	(65)	砂質粘板岩	胴～刃部	
	40	〃	III	—	4.2	—	0.8	(27)	〃	胴～刃部	
	41	〃	III	—	4.1	—	1.3	(54)	粘板岩	胴～刃部	
	42	〃	III	—	3.8	—	0.5	(11)	細粒砂岩	胴～刃部	
	43	〃	III	—	4.9	—	1.1	(22)	砂質粘板岩	胴～刃部	頭部磨耗
	45	〃	III	—	—	—	1.2	(22)	細粒砂岩	側縁部	
91	46	〃	IV A	9.1	4.6	4.2	1.5	85	砂質粘板岩	—	側縁部磨耗
93	48	〃	IV B	11.6	6.6	5.8	1.6	125	砂岩	—	側縁部磨耗，えぐり 3ヶ所
92	49	〃	IV B	—	4.5	4.6	1.2	(46)	細粒砂岩	頭～側縁部	刃部磨耗，えぐり
	50	〃	IV	12.8	5.6	5.0	1.9	185	砂質粘板岩	—	えぐり2ヶ所

図 番号	登録 番号	器 種	分類	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	破 損	備 考	
94	51	打製石斧	IV	11.7	6.1	5.9	1.8	155	細粒砂岩	—	刃部・側縁部磨耗	
	52	"	IV C	12.6	6.6	6.5	2.0	210	"	—	全周磨耗	
	53	"	IV C	10.4	4.4	3.9	1.5	90	砂質粘板岩	—	側縁部磨耗	
	54	"	IV C	10.8	5.1	5.0	1.5	112	砂岩	—	全周磨耗, えぐり	
	55	"	IV	—	—	—	1.6	(150)	砂質粘板岩	頭部・刃部	側縁部磨耗	
	56	"	IV	—	7.1	—	2.0	(173)	細粒砂岩	頭部・刃部	側縁部磨耗	
	58	"	IV	—	—	—	1.4	(40)	"	頭部・刃部		
	59	"	III B	—	8.7	8.0	2.5	(235)	"	頭～胴部	側縁部磨耗	
	62	"	B	—	—	—	0.6	(15)	粘板岩	頭～胴部		
	80	63	"	I C	—	6.2	6.1	1.4	(95)	砂質粘板岩	頭部	刃部磨耗
66		"	A	—	—	—	2.1	(120)	"	頭～胴部	刃部・側縁部磨耗	
67		"	—	—	—	—	—	(28)	"	頭～胴部		
68		"	—	—	—	—	—	(8)	"	頭～胴部		
69		"	—	—	—	—	—	(10)	"	頭～胴部	全周磨耗	
70		"	II A	8.6	5.2	4.4	1.5	(85)	細粒砂岩	頭部	側縁部磨耗	
71		"	II	—	4.3	—	1.5	(55)	粘板岩	頭部・刃部	側縁部磨耗	
72		"	II	—	—	—	—	(12)	砂質粘板岩	胴～刃部		
76		73	"	II B	3.8	2.6	1.9	0.6	6	緑色片岩	—	
86		74	"	II C	6.6	2.3	2.2	1.2	20	粘板岩	—	
77	75	"	II	—	—	—	0.4	(2)	"	刃部		
75	76	局部磨製石斧	III A	—	2.6	2.4	0.5	(10)	"	頭部		
74	77	打製石斧	III B	4.5	2.4	—	0.6	8	"	—		
	78	"	III	—	4.3	—	1.7	(50)	砂質粘板岩	刃部	側縁部磨耗	
96	79	横刃型石器	I A	5.9	—	—	2.1	(105)	砂岩	側縁部	打製石斧を転用	
	80	"	I A	—	—	—	2.0	(127)	細粒砂岩	側縁～刃部の大半	えぐり	
	81	"	I A	6.3	—	—	1.8	(105)	粘板岩	側縁部	側縁部磨耗	
	82	"	I B	5.7	—	—	1.7	(75)	"	側縁部	背部磨耗, 打製石斧を転用	
	83	"	I B	3.7	—	—	1.0	(35)	砂質粘板岩	側縁部	刃部・側縁部磨耗	
	84	"	I B	5.8	—	—	1.8	(143)	粘板岩	側縁部	背部磨耗, 打製石斧を転用	
	85	"	I B	3.2	—	—	0.9	(18)	"	側縁部		
	86	"	I C	6.8	—	—	1.9	(135)	細粒砂岩	側縁部		
	87	"	I	5.4	—	—	1.1	(37)	粘板岩	側縁部		
	88	"	III A	4.7	—	—	0.9	(40)	細粒砂岩	側縁～刃部の一部	背部磨耗	
	89	"	II B	3.5	—	—	0.8	(15)	粘板岩	側縁部	刃部磨耗, えぐり, 打製石斧を転用	
	90	"	II B	5.2	—	—	0.6	(20)	緑色片岩	側縁部	打製石斧を転用	
99	91	"	II B	4.4	8.9	7.7	1.6	60	砂質粘板岩	—		
	92	"	II B	6.5	—	—	0.8	(75)	砂岩	側縁～背部の一部	全周磨耗	
100	93	"	II B	6.9	—	—	3.3	(168)	細粒砂岩	側縁部	背部磨耗, 打製石斧を転用	
	94	"	II B	—	—	—	0.8	(19)	"	側縁部	打製石斧を転用	
	95	"	II B	—	—	—	1.0	(25)	"	側縁部	背部磨耗	
	98	96	"	II B	4.0	9.6	6.9	1.1	45	粘板岩	—	背部刃つぶし, 打製石斧を転用

第IV章 調査遺跡

図 番号	登録 番号	器 種	分類	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	破 損	備 考
101	97	横刃型石器	II B	5.2	8.7	7.5	1.8	95	粘板岩	—	背部, 側縁部刃つぶし, 打製石斧を転用
102	98	"	III A	—	—	—	0.7	(15)	緑色片岩	側縁部	
	99	"	I C	—	—	—	0.6	(15)	"	側縁部	刃部磨耗
	100	"	I	5.3	—	—	0.9	(35)	砂質粘板岩	側縁部の大半	
	149	"	I B	3.5	—	—	0.9	(15)	粘板岩	側縁部	
	19	"	I A	—	5.2	—	2.1	(90)	細粒砂岩	両側縁部	
	20	"	I A	—	—	—	2.0	(100)	"	側縁部	側縁部磨耗
103	101	使用痕のある剥片	A	6.7	4.6	—	0.8	25	"	—	基部以外磨耗
104	102	"	A	6.8	5.1	—	1.6	65	"	—	基部以外磨耗
	103	"	A	—	6.5	—	1.1	(55)	砂質粘板岩	—	
	104	"	A	—	4.5	—	0.7	(15)	粘板岩	—	
	105	"	B	5.8	8.3	6.1	1.0	50	細粒砂岩	—	
	106	"	B	7.1	5.9	6.0	1.5	60	砂岩	—	
	107	"	B	5.2	6.2	6.1	0.9	35	粘板岩	—	
	108	"	C	—	—	—	—	—	細粒砂岩	—	
	109	"	C	—	—	—	—	—	"	—	
	110	"	C	—	—	—	—	—	"	—	
	111	"	C	—	—	—	—	—	粘板岩	—	
	112	"	C	—	—	—	—	—	細粒砂岩	—	
	113	"	C	—	—	—	—	—	"	—	
	114	"	C	—	—	—	—	—	砂岩	—	
	115	"	C	—	—	—	—	—	砂質粘板岩	—	
	116	"	C	—	—	—	—	—	"	—	
	117	"	C	—	—	—	—	—	"	—	
	118	"	C	—	—	—	—	—	"	—	
	119	"	C	—	—	—	—	—	"	—	
	120	"	C	—	—	—	—	—	細粒砂岩	—	
	121	"	C	—	—	—	—	—	砂質粘板岩	—	
	122	"	C	—	—	—	—	—	細粒砂岩	—	
	123	"	C	—	—	—	—	—	粘板岩	—	
	124	"	C	—	—	—	—	—	砂質粘板岩	—	
	126	"	A	11.2	4.1	—	0.8	80	細粒砂岩	—	
	127	"	A	10.2	5.6	—	2.0	120	"	—	
	128	"	B	7.6	3.6	—	1.4	50	粘板岩	—	
	134	"	C	6.2	4.7	—	0.9	25	砂質粘板岩	—	
	139	"	C	4.8	4.5	—	0.6	15	細粒砂岩	—	
	140	"	C	5.3	3.0	—	1.2	15	砂質粘板岩	—	
113	145	磨製石斧	—	6.9	3.7	3.7	1.3	55	珪質岩	—	
115	146	"	—	—	4.2	4.2	1.4	(45)	塩基性緑色岩	頭部	
114	147	"	—	—	3.5	3.3	0.9	(25)	珪質岩	頭~胴部	
105	148	乳棒状石斧	—	—	—	—	3.4	(140)	砂質粘板岩	胴~刃部	

図番号	登録番号	器種	分類	長さcm	幅cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石質	破損	備考
	150	磨製石斧	—	—	—	—	—	(30)	細粒砂岩	頭部・刃部	
	151	使用痕ある剥片	C	—	—	—	—		閃緑岩	—	
	152	"	C	—	—	—	—		砂質粘板岩	—	
112	153	石剣	—	—	3.7	—	1.9	(155)	緑色片岩	—	
	154	"	—	—	—	—	1.7	(30)	ホルンフェルス	—	
106	161	凹石・磨石・敲打器	—	10.0	9.3	—	4.9	715	複輝石安山石	—	
108	162	凹石・磨石	—	9.2	8.6	—	7.3	705	"	—	
107	163	"	—	11.8	—	—	7.5	(840)	"	—	
109	164	敲打器	—	—	10.4	—	7.8	(960)	"	—	
111	165	砥石様石器	—	—	—	—	7.5	(245)	"	—	

表11 経塚遺跡平安時代土師器計測一覧

図番	遺構	種別	器種	技法	口径cm	器高cm	底径cm	径高指数	備考
1	1住	K ₀	杯 C II	2 a	15.0	4.8	7.3	32.0	
2	"	K ₀	杯 C II	—	13.4	(4.6)	(6.0)	(34.3)	
3	"	K ₀	杯 C II	—	14.0	(4.5)	(7.1)	(32.1)	
4	"	K ₀	杯 C II	—	14.1	(3.8)	(7.0)	(27.0)	
5	"	H	杯 D II	2 a	14.0	4.5	7.3	32.1	
6	"	H	杯 D II	2 a	13.6	4.0	6.9	29.4	
7	"	H	杯 D II	2 a	14.3	4.0	7.8	28.0	
8	"	K ₀	杯 C II	—	13.3	(5.0)	(6.8)	(37.6)	
9	"	K ₀	杯 C II	2 a	(13.7)	(4.8)	6.0	(35.0)	
10	"	H	皿 A III	2 a	8.4	2.5	2.4	29.8	
11	"	H	皿 A II	2 a	9.1	2.0	2.7	22.0	
12	"	K	皿 B III	2 a	10.7	2.5	3.2	23.4	
13	"	K ₀	杯 III	2 b	11.4	7.1	4.3	62.3	
14	"	H	小形甕A II	—	14.6	—	—	—	
15	"	H	小形甕B II	—	15.2	—	—	—	
16	"	H	碗A I ?	2 a	18.4	10.8	12.0	58.7	
17	"	H	甕 D	—	21.4	—	—	—	
18	"	H	甕 E	—	19.1	—	—	—	
19	"	H	甕 B	—	—	—	12.5	—	
20	"	S	甕	—	—	—	11.1	—	
図版(1)	"	H	皿 A III	2 a	7.5	1.9	4.6	25.3	
" (2)	"	H	皿 A III	2 a・5 a	8.5	2.4	4.8	28.2	
" (3)	"	K ₀	杯 C II	2 a	13.6	4.6	6.8	33.8	
—	"	H	皿 A II	2 a	14.3	3.0	5.5	21.0	
—	"	K ₀	杯 B II	2 a	—	—	8.8	—	
—	"	K ₀	杯 B	2 a	—	—	7.1	—	
—	"	H	小形甕B	(2 b)	—	—	7.6	—	
—	"	H	甕	—	25.5	—	—	—	
—	"	H	甕	—	—	—	10.4	—	

第IV章 調査遺跡

図番	遺構	種別	器種	技法	口径cm	器高cm	底径cm	径高指数	備考
21	2住	K	椀 A I	3 a	19.1	6.5	11.0	34.0	輪花（ヘラ使用）4カ所
22	"	K	椀 A I	—	16.6	(6.1)	(8.8)	(36.7)	輪花（指頭）4カ所
23	"	K	皿 A II	3 a	14.0	3.1	6.3	22.1	
24	"	K	皿 A III	2 a	10.8	2.5	5.9	23.1	美濃？
25	"	K	皿 A III	2 a	11.6	2.5	6.0	21.6	
26	"	K	椀 A II	2 a	14.7	4.8	6.9	32.7	
27	"	K	椀 A	2 a	—	—	7.4	—	東濃？
28	"	K	椀 A	(5 a)	—	—	8.0	—	ハケ塗り施釉(内面), 猿投？
29	"	H	甕 D	—	21.2	(28.5)	(10.5)	—	
30	"	K	壺	(3 a)	—	—	9.5	—	ハケ塗施釉
31	土壇1	S	甕	—	—	—	—	—	胴径 32.8 cm
32	グリット	K	椀 A II	3 a	15.2	5.2	8.8	34.2	東濃？
33		K	皿 B II	—	12.6	(3.0)	—	(23.8)	東濃？
34		K	皿 B II	—	15.0	2.6	6.0	17.3	輪花（ヘラ使用）4カ所
—		H	甕 E	—	24.8	—	—	—	

表12 経塚遺跡平安時代砥石一覧

図番号	登録番号	分類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	破損	石質	備考
130	155	A	14.7	3.2	3.0	240	なし	ホルンフェルス	
131	156	A	—	2.9	2.4	(65)	あり	花崗斑岩？	
	157	A	—	2.8	1.8	(30)	"	"	
	158	A	—	3.1	—	(15)	"	ホルンフェルス	
133	159	B	—	—	—	(50)	"	"	
132	160	B	—	—	—	(95)	"	砂岩	

第3節 洩矢遺跡 (SMYA)

1 位置 (II-図1・2、図1、図版22)

岡谷市川岸橋原垣外10,160番地を中心に所在する。志平・経塚両遺跡同様、天竜川に向け北西へなだらかに広がる小扇状地の扇頂先端部にあたり、両側に山地が迫って平坦面は幅80～120 mと非常に狭い部分である。扇頂部の中心には諏訪神誕生まつわる洩矢神社があり、その前を横断する旧鎌倉街道や中央東線以北の扇央から扇端部は、現在人家が密集しているが、遺跡中心部らしく、昭和41年に地点は不明だが、埋襲と思われる曾利式土器のほぼ完形品が出土している。このように遺跡は扇央から扇端部に展開するらしいが、今回の調査地点は、その扇頂部の一部分約3,000m²のうちの600m²であり、遺構の集中した範囲は更に標高780～790mの40×30mとごく限られた部分であった。なお、洩矢神社境内の西南、山地の裾に湧水があって現在も使用されている。

志平・経塚両遺跡と雁行する本遺跡より東側には、付近で最も大きな扇状地があって、その扇端部にあたる中央東線と天竜川に狭まれた細長い地域に橋原遺跡がある。近年の調査で弥生後期の集落址が相当天竜川に寄った低い一帯に発見された。中央自動車道にかかる諸遺跡の大半が、扇状地の扇央乃至扇頂部の調査であるとき、あらためて扇端部位における遺跡の在り方に注目しなければならない。

2 発掘区の設定と調査の経過 (図1、図版22)

1) 発掘区の設定 (図1)

用地内にかかる部分も狭いので、全域の調査を目的とし、公団用道路センター STA 51+40～同51+80を東西の基準線とし、南北は STA 51+60で直角に振って求め、他遺跡同様東西は STA 51+20から51+70までをA地区、51+70以東をB地区として2m間隔のA～Y軸とし、南北はセンターライン基準に北側へ49～35、南へ50～63と2mずつ区切ってグリットを設定した。測量はすべて平板測量による。

2) 発掘調査の経過 (図1)

当初岡谷地区の調査は志平遺跡から開始される予定であったが、地主との折合がつかず、急拠本遺跡へ変更されたため、調査前段階の準備に手間どり、4月20日ようやく本調査に入った。遺跡中央を南北に走る小路があり、便宜的にこの小路を境に東西地区に区分し、緩傾斜であることを考慮し、最下列のグリット35列から発掘に入った。調査開始後西地区のAK40・42・44、AI42・44グリットで縄文前期諸磯式土器を中心とする遺物が比較的多く検出されたので、遺構の存在を予想し一応中止し、他グリットへ進んだが、全般的に遺構の存在を示すような遺物出土状態もなく、やや期待はずれを感じもった。ただ、西地区山地寄りのAK・AN列のグリッドは、耕作土下の黒色土層中より僅か縄文早期末の土器片が大石の間から1.3mほどの深さまで出土するが、地表下70～80cmで大石を含む自然礫が多くなり、下部への調査ができなかった。多分地形的にこの西側山裾にかけての沢が流れていたための礫、黒土層の厚い堆積の結果であろう。また、東地区のAW～BD38・40・42・44列は、ローム層まで約1.0～1.3m、耕作土(表



図1 洩矢遺跡付近の地形と調査区・遺構 (1 : 500)

土) 褐色土-黒色土-黄褐色土と堆積する層序も安定し、ローム面も余り礫など含まず住居址等を予測させたが、結果的には遺構は皆無であり、黒色土層中から僅か縄文土器や土師器が検出されたのみであった。

センターライン以下の低い部分は、前述した土器集中地点以外は余り期待できなくなったので、拡張をやめ、次第に高い50列以上へ調査を進めていった。ところが二段に分かれて畑地となっていた東地区では、数ヶ所のグリッドから焼土や集石、また土器片の多い部分が見つかり、遺構中心部はこの地区にあると判断し、南は用地境まで全面発掘することにした。ただ、この段階では中心部を通る小路は現在のまま残すという条件なので(後半、小路の下まで住居址が検出され、復旧すれば良いと変わる)、小路東側のみに限った。この結果、東側山地寄りには黒土層などの堆積が厚く、2 mをこえる部分もあるのでBB列までの範囲の調



図2 洩矢遺跡土層図 (1:80)

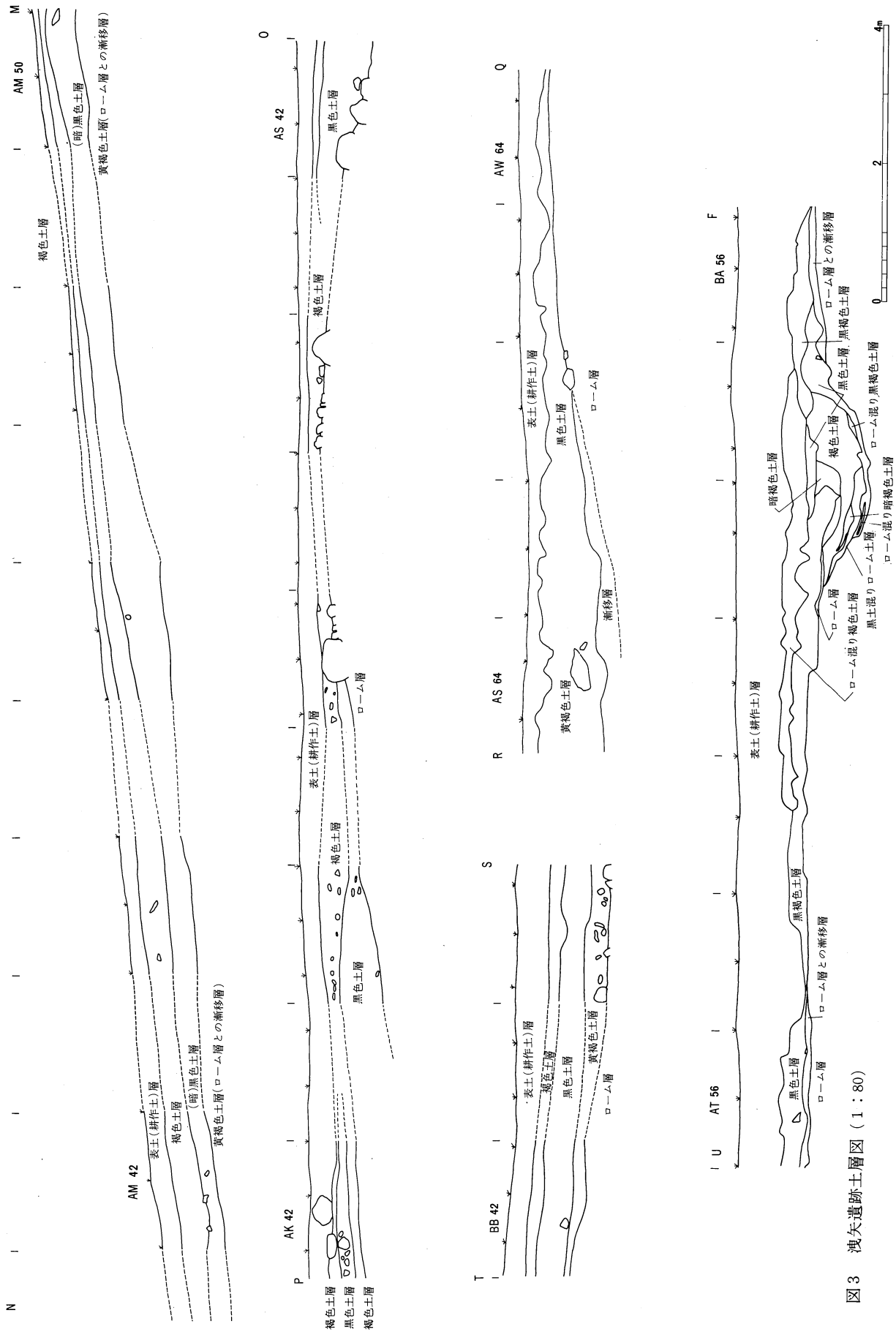


図3 洩矢遺跡土層図 (1:80)

査であったが、住居址・土坑・集石・焼土遺構などが検出された。一方、小路にかかる住居址(2号址)もあるので西側も拡張することにし、当初検出されていたロームマウンド3～5のあるAQ・AR列も東地区と連続させて発掘を進めた。しかし、扇状地のほぼ中心部を小路と2号址附近でクロスする幅2～4mの自然流らしい、人頭大の石を中心とした自然礫がローム層中にわずかにくいこむ状態で断続的にあり、遺構検出に日時を要した。一方先に残しておいた西地区の土器集中出土地点、黒色土層中に遺物の集中する部分があり、周囲を拡張したが、住居址らしい遺構は検出できなかった。

こうして用地内遺跡部分のほぼ全域を調査したが、最後に設営したテントを移動してその下部を調査したところ、先の自然流に一部重複したかたちで3号住居址が検出された。日時も予定をこえたので、まだ調査は完全に終了してなかったが、志平・経塚両遺跡の経過とのかねあい以後日継続することにし、3号址のみを残務整理とあわせ一部の人で調査をすすめることとし、6月4日ひとまず終了した。

3号址の調査は、自然礫の多い地域のため調査に手間どり、一応6月23日終了した。だがその折、当初灰陶器の大形破片や焼土が出土し、住居址の存在を予想したが、中心部が小路となって拡張できなかったAT46グリットで住居址らしい部分が発見され、ここは経塚遺跡調査中に再調査することにし、8月30日から9月5日まで別個に調査し、4・5号住居址を検出した。

延べ32日間に亘る調査であったが、不慣れな点もあり、余り順調に進まず、また、未調査部分を残すなど問題があった点反省している。

3 土層(図2・3)

本遺跡は南から北へ約5°～8°緩傾斜している上、狭い谷からの押し出しの頂点に位置しているので、地点による土層の相違がある。西側山寄りには前述した如く、浅い耕作土の下は黒色土層が厚く堆積し、ほぼ1m前後から大石を含む自然礫が含入する。地表下1.5mの石の間の黒土層まで縄文期の遺物が混在するのは確認したが、以下の層序は不明である。一方、反対側の東側山寄りには、ほとんど自然礫を含まず、耕作土(20～40cm)－褐色土層(20～50cm)－黒色土層(60～80cm)の順で地表と同程度の傾斜をもつローム層に至る(図2－DE断面)。黒色土層の上部10～20cm程度まで縄文土器や土師器の細片が検出できるが以下は無遺物層となる。黒色土層上面に多分平安期であろう焼土(F₁₃)がのっている。またやや上方になるとこの層序も変化(同FG断面)しているが、後世の攪乱によるもので、基本的には同じであろう。西側とちがい激しい自然流がなかったと判断できる。

扇状地の中央部、最も高い部分になると、層序は同一だが、ローム層まではやや浅く1mとなり、ローム層自体が小礫を含んだ砂質のやや表面不安定な状態となる。また、この部分は前項で記した人頭大の礫を含む自然流の痕跡が断続的にあり、遺構の構築にはやや不適地ともいえる。こうした中で、今回の調査で住居址など遺構の集中した東地区のセンターラインより上の地域は、基盤のローム層も粘性があって安定し、傾斜もゆるく住居址構築等には比較的条件がよかったと考えられる。こうした地域における住居構築は、日照時間などにも左右されようが、原地形の在り方がその重要な条件となったのであろう。

なお、土層図(図2・3)中、褐色土・黒色土層面(高所などローム面まで)に明瞭に残る段状の断面がある。これは図版23－2の1号住居址にみるように、傾斜地上方ではローム面まで切り込んでいる場合もあり、調査中特に、遺構の集中する範囲内で目についた。1号址を切ったり、黒色土層を切っている点、少なくとも平安期以降のものと思うが、時代を決定できない。また、西地区の縄文前期土器を集中的に出土した地点では、耕作土下に新しい堆積とわかる黄褐色土層(40～50cm)があり、次の黒色土層(60～40cm)の下部から更に

第IV章 調査遺跡

続く薄い茶褐色土層(10~20cm)までが遺物包含層となる。この茶褐色土層から次の暗褐色土層(40~50cm)にかけては大石を含む礫が次第に多くなり、以下やはり礫を多少含むローム層へと続く。こうした土層関係は、道を1つ隔てたAD~AJ 35・37グリットではみられず、耕作土の下に黒褐色土層が薄く堆積し、50cm前後でローム層となる。耕作による深部までの攪乱も所々にみられたが、自然流による礫の多い地域をのぞき全般的に土層は明瞭に区分できた遺跡といえる。

4 遺構と遺物

1) 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、6号住居址と土塚が3ヶのみであるが、他に土器集中出土地点を加えて説明したい。遺構は少ないが、調査地域全域から縄文期遺物の出土はあり、むしろ量においては平安期遺物より多く、時期的にも早期から後期に及んでいる。

(1) 第6号住居址 (図4・17-1~7、図版22-3、同24-1、同27-上)

AR~AT 55~57グリットを中心に検出された。用地内では高い部分で、東南・西北に1・2号住居址がそれぞれ近接している。付近一帯は地山のローム層が約5度の傾斜をもっているが、後述するように平安期以降、ローム層まで達するような段状遺構が二回以上構築されており、相当深くまで攪乱が及んでいた。1号址などはその影響が床面まで達しており、周壁は一部が残存したのみであった。本址付近も同様であり、グリット調査段階では住居址の存在を確認できなかったが、全面調査に切りかえてようやく検出できたほどで、周壁はほとんど削られて低くなり、傾斜の低い北西部は床面と同一レベルであった。そのため住居址の検出は、第III層の黒褐色土層中にあった炭化材の存在からであり、住居址埋土については十分な検討ができなかった。

検出し得た東南隅側の周壁や床面の遺存状態から推定して、径4.3~4.5mの不整形円形を呈する住居址といえよう。周壁は最も高い東南隅で15cm、次第に高さを減じ、東、南壁ともほぼ半分で消失する。周溝はない。床面は南側半分のみローム層乃至漸移層を踏みかためて堅かった。しかし、北側は一部にローム層か漸移層か区別のつかない部分や、周壁付近では、黒褐色土層を貼床したかと思われる堅い部分があったりして、或る程度攪乱をうけた状態が観察された。ほぼ水平ではあったが西側周壁近くは、ローム層中にくい込む自然礫などがあり、2号址、3号址にもかかる自然流による礫の堆積部分に近い状態となる。

柱穴はP₁(25×28、-21cm)、P₂(30×29、-29cm)、P₄(30×24、-32cm)、P₅(30×28、-31cm)の4本が位置的にもよく支柱穴としてよいであろう。P₃(25×30、-23cm)はP₄の支柱穴であろう。東南壁には壁を切って深さ16cmのピットが、また近くの壁外に深さ36cmの斜めに穿たれたピットがあるが、共に上屋構造と関連する柱穴としてよいであろう。その他、床面上には10ヶ前後の小ピットがあったが、いずれも柱穴とは認定できない形状である。床面上が焼けたり、焼土が存在するという明瞭な炉址は検出できず、図上の住居址内にある2ヶ所の焼土も、床面より5cm以上浮いており、2cm前後の厚さで炉址とはいえない。また、南壁外にある60×100cmの範囲に楕円形状に広がる焼土は、厚さ2.5cmあるがこれも5cm以上ローム層上より浮いていて、共に火災時におけるものと判断したい。

住居址中央より北西部に70×65cmの方形のピットがある。ローム層乃至漸移層を15cm掘り凹めてあるが内部に大きな自然石が底面より浮いて1ヶあり、埋土中の黒褐色土層から羽状縄文ある土器片が2片出土した。この部分は攪乱によって床面部分まで荒らされていたが、このピットのみは上面がわずかに削られていたにすぎず、底部にまで及んでいなかった。本址に伴う貯蔵穴的なピットとしてよいであろう。なお、



図4 洩矢遺跡第6号住居址 (1:60)

南壁中央部より西に寄ったP₃・P₄と周壁の間に、床面より6cm前後高いテラス状の部分がある。上面は余り堅くないので入口部とも考えられない。P₃・P₄との関係から周壁に沿った棚状の遺構とも思える。

なお、本址は火災をうけたらしく、住居址内埋土や床面に接して多数の炭化材が検出された。壁高のある東側に多い点から考えて、攪乱をうけた北・西側にも或る程度の存在を推定してよいであろう。最大のもは長さ40cm、幅7～10cmの板状で、二・三柱状の塊りも検出したが、大半は厚さ2cm前後の板材である。床面に接するものは少なく、大半が数cm浮いて黒色土層中に出土した。

本址に伴う確実な遺物は少量の土器(図16-1～7、図版27-1上段)のみである。図16の1・3・5は胎土に小石粒の混入が目立つ羽状縄文ある土器で、器内面は多少みがかれている。2は刺突のある凸帯、4は押し引きによる爪形文的沈線を共に口縁部に二条施し、4は口縁部小突起に太い刻目がある。5は連続爪形文帯による文様構成を示す焼成・胎土ともやや良好な土器である。7は他と趣を異にする胎土に小石粒を混入した灰白色を呈し、器表にはススの付着が目立つ。縦の擦痕らしいものが浅くつくだけである。図示した以外は細片でわずかに縄文ののこるもの、無文と他は文様不明のものである。これらは全部無繊維で典型例がないが、羽状縄文ある1・3・5は、胎土などから諸磯B式に比定できよう。4・5などはむしろ諸磯A式的だが、5は強いて求めれば諸磯B式の胴部文様にも通じるものがある。本址を含む付近からの出土土器は、土師器、黒色土器の杯、皿、甕の小片が約100片、灰釉陶器杯が数片あるほか、縄文土器が約150片ほどある。その内訳は繊維を含む縄文あるもの、諸磯B式の浮線文土器片が各1片のほか、斜縄文、羽状縄文あるもの60、無文40、中期初頭の平行沈線文土器片20ヶ、他不明の30ヶである。縄文ある

第IV章 調査遺跡

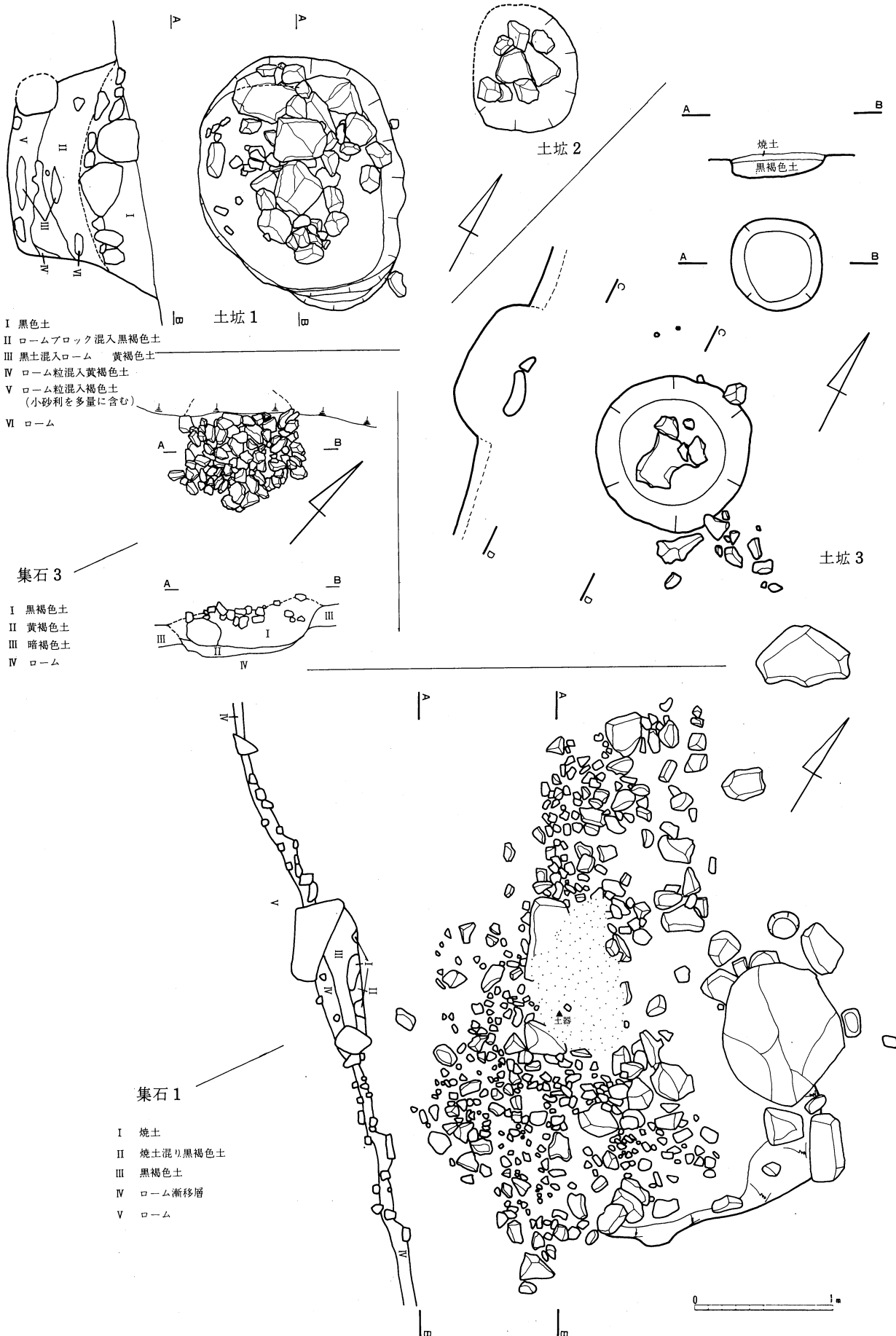


図5 洩矢遺跡土坂(1~3)、集石(1・3) (1:40)

無繊維の土器は図示した1・3・5と似たものが多い。

土器以外の遺物としては、定形石器は1ヶもなく、黒曜石の剥片のみであった。住居址床面出土の土器から、縄文前期中葉、諸磯B式期の住居址としてよいであろう。

(2) 土坑1・2・3 (図1・5・17)

① 土坑1 2号住居址の北3.5mに検出された。長径1.9×短径1.5mのやや不整形円形を呈し、ローム層を約1m前後穿った典型的な竪穴である。その上半部は人頭大の石を中心にほぼ穴の全面に石積があり、土坑が埋められたあと投げこまれたらしい。附近には自然流による石積列があるが、そこからの流入でないことは周囲にほとんど同種の石がないことからわかる。この石積(組)の間から縄文早期末に位置する頸部に隆帯をもち、金雲母と少量の繊維を胎土に含む一群の土器(図17-26)が十数片出土した。なお、上部の埋土からは土師器の小片もわずか出土している。

② 土坑2 土坑1の北東50mにある径1.9×0.85mの楕円形を呈する。掘り込みは極めて浅く内部には平板石10ヶ程を敷きつめた石組(積)がある。土坑というよりも一種の石組、或は集石とみた方がよいかも知れない。無文無繊維の縄文土器の小片が2片あるのみである。

③ 土坑3 6号住居址の南1.5mに検出された径1.1m、深さ25cm前後のタライ状を呈する。褐色土層面から掘りこんでおり、中央上部に人頭大の平板状角礫が置かれ、同一面の土坑南東外側に多数の石が散在していた。土坑内からは繊維を含む無文土器の小片が出土したのみである。附近からは土師器片が数片出土しているが縄文期の土坑であろう。なお、65cm北側に径70cmの円形の浅いピットがあり、黒褐色土の埋土上面を厚さ5cm程度の焼土が覆っていた。

以上の土坑のうち、土坑1と3は明らかに土器がプライマリーな状態の埋土中から検出されており、縄文早期～前期にかけてのものであろう。土坑2は浅く、付近からは土師器片も出土しており、やや不明瞭ではあるが一応縄文期としておきたい。

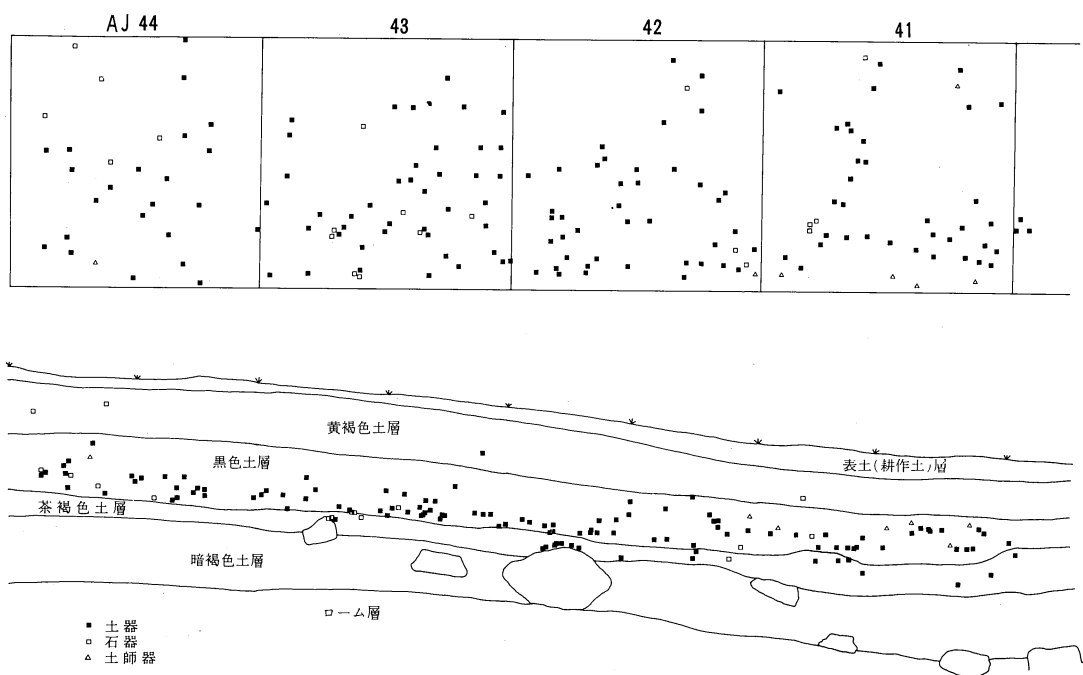


図6 洩矢遺跡土器集中地点遺物出土状態 (1:30)

(3) 土器集中地点 (図6)

今回の調査地域の中では西端部にあたり、付近には遺構はない。西側山寄りのグリットでは、当初から黒色土層に縄文土器、土師器の破片が出土していた。しかし、このA I～A K 36～38グリット付近は、縄文土器出土の傾向が他に較べて非常に多いので、周囲を拡張し、調査を進めたが、遺構らしいものは確認できなかった。耕作土下の黄褐色土層中はほとんど遺物がなく、次の厚さ50cm前後の黒色土層の上半部は、土師器片も混在するが、下半部は縄文期遺物のみとなり、ほぼ水平に密に検出されはじめた。しかし、土器出土面は、部分的に黒色土層が堅くなった部分もあるが、床面のような面的な拡がりはなく、かつ、その部分も黒色土層中にレベルを違えてあるので、遺構としてとらえることはできなかった。また、遺物は次の茶褐色土層中にも幾分出土したが、量も少なくなり、出土土器に層位的変化もなかった。次の暗褐色土層は無遺物層である。周囲を拡張して、遺物の広がりを追ったが、約7～8m四方の中に集中し、範囲外は極端に少くなる傾向があり、自然の流れによる上方からの堆積とばかりは考えられず、一応遺構としてここに取上げた。

出土遺物は土器、石器があるが、全般的にみると遺構外のそれとほとんど変わらないので、次の項で一括して説明したい。

(4) 遺構外出土遺物

縄文時代の遺物は、遺構に伴うものは極端に少なく、定形石器は1点もない。大半が調査地域全域から平均的に出土し、土器のみは上述した集中地点があった。土器・石器のみで土製品はなく、わけても土器の出土量が大半を占める。以下、土器、石器について概要を記したい。

① 土器 (図17～20、図版27～30)

早期から後期に及ぶが完形品は1ヶもなく、すべて破片で整理箱にして約20箱ほどである。以上、時期毎に大分類し、更に種別に細分して説明したい。

第I群土器(8～36) 早期末～前期初頭にかかるものを一括する。

- 第1類 山形押型文土器である。帯状施文する8は器内外面とも多少磨かれており、淡褐色で胎土も良好であるが、9・10は上・下が不明だが赤褐色を呈し胎土が粗い。同一個体かもしれない。
- 第2類 条痕文土器。繊維をわずかに含むが、焼成や成形は中位で灰褐色を呈する。貝殻条痕でなくやや堅めの繊維束風のものらしい。14・15は裏面にも軽い条痕がある。3片のみである。
- 第3類 低い山形口縁部に二及至三条の刺突文が、或は絡条体の圧痕文ある繊維を多量に含む灰褐色の土器⁽¹⁰⁾である。文様間はおし上げられたように隆帯となっている。前期初頭か或は東海地方の早期末葉的な感じがある。
- 第4類 撚糸文がある土器(11～13)で、繊維を多量に含み、赤褐色で焼成・胎土とも粗い。同一個体らしいが、13は丸底に近い部分である。
- 第5類 口端で3mm、頸部で5mmと薄手作り。口唇に縦の刻目が入り、口縁に半截竹管で下から刺突した文様帯が三～四条、空白部を残して施文され、以下斜縄文となる類である。繊維を含むが焼成・胎土などは中位で、刺突文や繊維含入の点で岡谷市下り林遺跡出土例と似ている。
- 第6類 頸部が段状にくびれる一群の土器である。器形は深鉢で尖底らしい。平縁と波状口縁があり、幅広の口縁部文様帯が、頸部で段状にくびれ、胴部は斜縄文或は無文となる。口縁部文様帯は地文に胴部と同じ斜縄文を全面に施し、口縁部と頸部段状部に刺突文を一条めぐらし(口

縁部にはない場合もある(20)、その間に同一施文工具による押引き沈線文を横「八の字」状⁽²¹⁾、或は波状⁽²²⁾に施文する。19では刺突が円形に近いが、押引き沈線文間にも行なわれている。数個体分の破片がある。すべて繊維を多量に含む厚手な点は共通するが、金雲母を含み胎土・焼成のよい黒褐色のもの⁽²³⁾や、胎土や形成が悪く、黄褐色を呈するものなどがある。岡谷市下り林遺跡で、同類の完形土器が出土し、茅山下層式に比定されている。23・24も同類であらう。⁽³⁾

第7類 24・27・31で同一個体らしい。波状口縁の深鉢で、波頂部より沈線を垂下させ、それを軸に下向きの同一沈線を引く。地文に斜縄文があり、文様構成的には諸磯A式に近似例があるが、繊維を含み、胎土などは第6類とほぼ同じである。

第8類 縄文を主体とする土器で、すべて繊維を含む。33は中厚手の粗い造りの単純な深鉢であるが、尖り気味の口唇部の下に、かすかに間隔をおいて縦の短い沈線をめぐらす。器形的には頸部に段状の名残りがみられるので第6類とほぼ同一時期であらう。25・28・32・36は縄文のみの破片だが、すべて赤褐色を呈し精選された胎土をもち、器内面が研磨されている点が共通している。関山式土器などにみられる内面研磨ともやや趣を異にする一群である。

以上、第I群土器は縄文早期末葉から前期初頭にかかるものであるが、信州各地、特に諏訪方面では断片的に出土しているが、まとまったものはなく、型式名も付けられていないので、やや詳しく説明を加えた。

第II群土器(37~87) 縄文前期を一括した。出土量は最も多く70%以上を占める。

第1類 繊維を含まぬ縄文のみの土器(37~53)である。単節の斜縄文が多いが、無節や羽状縄文もわずかある⁽³⁸⁾。

第I群土器に較べて器厚も全般的に薄くなり、胎土・焼成も良くなっている。破片数では最も多い。縄文の種類についての検討はしてないが、余り繊細な縄文は少なく、やや大きく撚りの悪いものが多い。諸磯A式土器の明確な破片がなく、諸磯B式土器のみなので、同一時期と考えたい。なお、本類の中でも42・44は他の土器と判然と区別できるような灰褐色を呈し、小石粒を混ざる胎土や薄手造りを特色とする西日本の土器である。しかし、北白川下層式そのものでなく、両者の折衷様式ともいえる。

第2類 諸磯B式土器を一括した。縄文或は浮線文や平行沈線文をもつキャリパー状の深鉢(54~64)と無文の浅鉢類(56・59・62・65)である。爪形文をもつ類が一片もない点が注目される。破片は多い。

第3類 諸磯C式土器(79・80・83・84)。図示した以外破片のみ。地文に条線文を施し、結節状浮線文で渦巻文を描く80や平行沈線文のみの79・80・83であるが、ボタン状突起のある破片はない。

第4類 諸磯C式以降の前期末葉のものを一括した。地文に斜縄文をもち、その上に結節状浮線文を付す74・75、粘土紐のみの86・87、平行沈線文や刺突文間に三角形印刻文のある77・78・81・82・85などである。第3類同様図示した以外数片あるのみである。

第5類 東海・近畿など西日本の土器を一括した。薄手造りで、灰白色~灰褐色と明瞭な区分ができる。66は半截竹管による平行沈線文のみの文様で北白川下層II式か。67~69・71は浅鉢系の細い粘土紐に細かい刻目を入れたり⁽⁶⁷⁾、縄文を押捺するもの(68・71)で、後者はやや厚手となり、赤褐色で純粹の西日本系土器とは一風異なる。69のごとく粘土紐上をX状に切るものも

第IV章 調査遺跡

ある。67の一部に朱が塗られているが、この種の土器の多くは朱塗土器であつたらう。粘土紐の在り方などから北白川下層Ⅱ式～Ⅲ式に位置づけたい。

この他、第Ⅱ群に入るがやや不明瞭な無文の複合口縁をもつ72や、器内面にも粘土紐を貼付した73のような土器がある。以上第Ⅱ群土器は縄文前期中葉の諸磯B式を中心とするが、中でも諸磯A式や同B式の中の爪形文のある種類が一片も出土していない点が注目される。

第Ⅲ群土器(88~135) 中期土器である。大きな破片もあるが量は少なく、中心部が今回調査地点より下方の扇端部寄りにあることが推測される。

第1類 中期初頭の一群である。平行沈線文の多用と押しきをもつ隆起爪形文など、器形の大型化と共に厚手化する一群で、かつての梨久保式を含めて九兵衛尾根Ⅰ式に比定される。99・104・106・110・111・130などは、押しき爪形文やY字文、細沈線文など、竈畑Ⅰ式的な前期末葉に入る要素をもつ一群もある。本類の中では九兵衛尾根Ⅰ式が最も多かつたが、一括した出土状態でなく、調査区域全域から出土している点、該期の中心部は明確にできなかった。

第2類 第1類より更に量は少なく、20片程度である。中期中葉の土器である。新道式(125)や藤内式(115・126・129)は小破片が多い。本類か1類かの帰属はむづかしいが、113・114の木目状撚糸文、116・117の結節のある縄文などもある。また、122は胎土に小石粒を混入した黄褐色の単純な深鉢で、平行沈線文を不規則に全面へ施文するのみの土器である。諸磯C式乃至前期末葉とも考えられるが、胎土などが123の平出三類A土器と近似しており、一応、本類へ含めた。

第3類 中期後半を一括した。図示した以外10片程である。細い隆帯による曲線文間を沈線で埋める曾利Ⅰ～Ⅱ式辺に位置づけられよう(133~134)。

第Ⅳ群土器(136~151) 後期土器を一括する。量は更に少なく、図示した以外は無文土器のみである。磨消縄文をもつもの(137・138・141)や平行沈線文のみ(140・144・148)で、後者についてはやや不明瞭な点がある。

143は数条の平行沈線による縦の流水文ある土器で中期末からあるが、本群に含めた。この他、無文土器がある。後期初頭の一群としてよいであろう。

以上、遺構外出土土器を四群に大別して概述したが、諏訪地方全般からみれば、余り良好な資料といえる内容ではなく、新知見を加えることもない。出土土器からみて、今回の調査地点は、縄文前期中葉の諸磯B式を中心とした小規模な遺跡で、中期・後期初頭については埋襲の出土や分布調査から扇端部のより天竜川に近い部分に中心があることが推測できよう。第Ⅰ群の早期については、本遺跡の如く、わずかな量しか出土しない遺跡が多く、キャンプサイトの的な位置づけでよいであろう。

② 石器(図21~25、表1・2、図版31~33)

本遺跡出土の石器は、弥生時代の石庖丁1点と平安時代の砥石3点を除いては、すべて縄文時代のものと思われるが、縄文時代の遺構に伴うものは1点もない。従って明確な時期決定は不可能である。しかし、出土している縄文土器の大半が前期である点は考慮してよいであろう。以下石器を器種別に分け、その中で分類可能なものは分類しながら概略を述べていく。

A 石 鏃(1~21)

出土した石鏃は、使用痕のあるものとして分類された石器を除くと小形石器中最も数が多く、21点を数

える。そのうち4点はチャート製で、他はすべて黒曜石製である。無茎凹基が大半を占めるため、基部の挟りと側縁の形から以下のように分類した。

第I類 無茎凹基

- a. 挟りが非常に深く、外湾する側縁を持つもの(1)
- b. 挟りが深く、直線的な側縁をもつもの(2~4)
- c. 挟りが深く、外湾する側縁を持つもの(5)
- d. 挟りが浅く、内湾する側縁を持つもの(6)
- e. 挟りが浅く、直線的な側縁を持つもの(7・8)
- f. 挟りが浅く、直線的な側縁と外湾する側縁を持つもの(9)
- g. 挟りが浅く、外湾する側縁を持つもの(10~13)

第II類 無茎平基

- a. 直線的な側縁を持つもの(17)
- b. 外湾する側縁を持つもの(18)

第III類 無茎円基 いわゆる飛行機型石鏃状の側縁を持つもの(19)

第IV類 有茎 外湾する側縁を持つもの(20)

その他として、無茎凹基の欠損品(14~16)や基部欠損のため形態不明なもの(21)がある。

無茎凹基の石鏃が多いことが特徴であるが、その中でも形態はバラエティーに富む。調整は全般に丁寧であるが、17のように片面にかなりのふくらみが残るもの、素材となった剥片が極めて薄いため、調整を全面に施す必要がなかった11や13も見られる。無茎凹基の石鏃の欠損部位は、脚部(4・8・12・14~16)と尖頭部先端(1・3・4・9・10・12・14・16)に多い。なお7の先端部は著しく磨耗しているが、石鏃として以外に使用されたのかもしれない。

B 尖頭器状石器 (図7・21-22)

黒曜石製で、二次加工されて使用された後、更に加工が施されたものである。最終的な形態が尖頭器に類似しているため、「尖頭器状石器」と仮称した。以下その製作過程を述べる(図7)。

まず素材となる剥片に二次加工を施して何らかの形を作る。この時に形成されたのはL面の1であるが、全体の形は不明である。R面の2も、風化具合からみて1と同程度の古さと思われるので、最初の調整は両面全体に施されていたようである。この時の調整剥離面に使用痕が見られるが、それには2種類ある。1つはL面の左半部に見られる石器の長軸に対してほぼ斜めの方向に走る線状痕である。他は同じくL面の右半部にあり、石器の長軸に対して垂直方向に線状痕が走っている。線状痕の方向が異なり、右半部の線状痕の方が強くつけられているので、使用方法も違っていたように思われる。

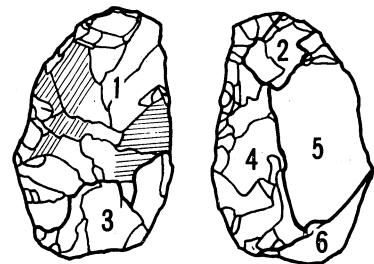


図7 尖頭器状石器の加工過程

次に何らかの理由で再度加工される。最初にL面の3の部分が剥離され、R面に移って4の部分に丁寧な調整を、そして5が剥離されているが失敗だったのであろうか、大きく挟れすぎてしまい、その後の調整はほとんどされていない。最後に6が剥離されているが、この面はポジティブ・バルブを持っている。こうして最終の形ができあがっているわけだが、3~6の部分には使用痕は見られない。

第IV章 調査遺跡

C 石 匙⁽²³⁾

1点のみの出土である。やや二等辺三角形に近い体部とその頂点につまみ部がある。調整は丁寧で両面とも全面に施されているが、R面は偏平に近く、L面はかなりふくらんだ形状をしている。つまみ部は棒状に作り出されている。刃部は両面加工であるが、使用痕は認められない。北白川下層式土器に伴う形態に似るが、つまみ部の作り方などやや変化している。

D スクレイパー^(24~34)

13点出土している。大きく分けて、刃部の加工が片面だけのもの^(24~27)と両面にわたるもの^(28~34)がある。石質別にみると、黒曜石製は小形でそれ以外は割合大形である。小形例は刃部以外の調整剥離も比較的丁寧で、全体の形もよく整えられているが、大形のもの⁽³³⁾を除いては雑な調整剥離しか加えられていない。⁽³⁴⁾は緑色片岩製で、原石の表面の一部を剥がしたままの状態の剥片にほとんど手を加えず、刃部にのみ小さな調整剥離を加えている。また上辺部は磨耗しており、更に上皿部から側辺部にかけては線状痕がみられる。

E 石 錐^(35~38)

35はつまみ部の一部を欠損しているものの、ほぼ完形品であり、全体に丁寧な加工が施されている。つまみ部の挟り込みは浅く、平面形は三角形に近く、断面は比較的偏平である。36はつまみ部を欠損しているが、調整は入念であり、断面は菱形を呈する。この石錐には使用痕が見られ、使い方が窺える。先端には1mm×2mm弱の方形に近い偏平な自然面が残っており、この面にある円状の線状痕が実体顕微鏡によって観察できる。また錐部の側縁にはつぶれと磨耗が見られる。この3つの使用痕から、先端を対象物にあて、回転させながらかなり深くまで挟り込ませたことが推察できる。

35・36に対して、37・38は雑な加工しか施されていない。素材として先が細くなっている黒曜石を用い、錐部となる先端の近くのみ側縁からわずかな調整剥離を加えている。錐部上半部からつまみ部にかけては、ほとんど調整剥離が見られない。

F ピエス・エスキーユ^(39・40)

ピエス・エスキーユについては岡村道雄氏⁽⁴⁾がその定義を明確にしておられるが、本遺跡においてそれをほぼ充たすものは9点あり、そのうち2点を図示した。39は縦長で厚ぼったいが、自然面を多く残した剥片を素材とし、40は薄手で平面形はほぼ長方形である。使用痕としては側辺にごくわずかな刃こぼれが見られるだけであるので、岡村氏が言われるように、上下両端が主要なワーキング・エッジと考えるべきであろう。⁽⁵⁾

G 使用痕のある剥片・石核・原石

本遺跡においても使用痕のあるものについての観察を行ったが、肉眼で判別できる刃こぼれと刃つぶれのみを使用痕として扱った。明瞭は線状痕などは肉眼でもある程度は観察可能であるが、それは認めることができなかった。石質は、1点のみチャートで、あとはすべて黒曜石である。分類は基準に従っているが、素材別に見ると表1の通りである。素材としてはI類(剥片)とII類(石核)が圧倒的に多いが、そのうち使用痕のあるものの割合を比較すると、I類がはるかに多い。これは、使用に適する刃部の角度が剥片に最も多く形成されているからである、と考えられる。

表1 素材別使用痕あるものの割合

素材	使用痕		計
	有	無	
I 類	111 (33%)	230 (67%)	341 (100%)
II 類	30 (11%)	245 (89%)	275 (100%)
III 類	3 (5%)	53 (95%)	56 (100%)
計	144 (21%)	528 (79%)	672 (100%)

(II類には残核・被剥片を含む)

I類の大きさは、重さでみると3g以下のものが多いが、これは素材に小さなものが多かったせいであろう。少し大きめで形の良い剥片は、おそらく定形化された石器を製作するのに多く用いられたのであり、それに適さない剥片は二次加工されずに使用されたのではないだろうか。使用痕部については、B類(刃こぼれ)とC類(刃つぶれ)がともに見られるが、C類はあまり多くない。更にもその形態をa類・b類・c類の3つに分類したが、これは単独で存在する場合もあるし同一縁辺上に連続している場合もある。刃部のごく一部が使用されたか、刃部が広範囲に使用されたかの相違を物語るものである。また、同一個体にA・B類、a・b・c類が組み合わさって存在する場合がまま見られるが、使用方法や使用状態の相違を考えさせる。

II類やIII類には厚手のものが多く、面どうしのなす角度も大きいものが多いが、中でも鋭角的な部分に使用痕がついている。つまり、当然といえば当然だが、使用に適する部分を適宜使用されたように推察される。

H 打製石斧(79~89)

欠損品も含めて22点出土している。分類の基準に従って154頁の表2に示したが、本遺跡では形態に偏りがみられる。

側縁の形ではII類が非常に多く、I類とIV類はほとんど無い。また、側縁に抉りのあるものが多いという特徴も指摘できる。抉りには2種類あり、1つはノッチ状に、もう1つは、いわゆる分銅型とは異なるが、側縁の一部が緩やかに抉れているものである。いずれも着柄のためにつけられたと思われるが、特に83には紐擦れ痕と思われる痕跡が見られる。83は他と異なり、片側縁に磨滅している2つのノッチが1cm強の間隔をおいてつけられている。なお、もう片方の側縁にはノッチは見られないが、断面の厚さから見て、欠損している可能性も考えられる。

次に刃部形態を見ると、頭部欠損品も含めてB類が半数以上を占め、A類は1点のみである。このように側縁と刃部の形態による分類では偏りがみられるのであるが、出土品の絶対量が少ないし、欠損によって側縁・刃部のいずれかまたは両方の不明なものが7点もあるので、これをもって特色の1つとすることは性急すぎるであろう。

本遺跡出土の打製石斧には使用痕の見られるものが多いが、その大部分は磨耗痕である。磨耗痕は刃部付近と側縁部がほとんどで、胴部にまでそれが及ぶと明確に判断できるのは85のみである。85は片面に緩やかなカーブを持った自然面を多く残し、もう片面には粗い調整剥離が施されている。自然面を多く残した方は刃部がカーブして片刃となっているが、この面を下にしたワク的な使われ方が予想される。使用痕は刃部先端から両面胴部に及ぶが、自然面の方は面が滑らかなこともあって、線状痕として残っている。

I 横刃型石器、粗大剥片石器(91~94)

横刃型石器に分類されるものは8点出土し、そのうち4点を図示した。分類の基準に従えば、IB類は90、IIA類は91と、IIB類は92、IVA類は93があり各々他に2点ある。背が大きく外湾しているIII類と、刃部が内湾しているC類は見られない。

90は薄手の剥片を利用したもので、調整剥離はあまり施されていない。ただ、刃部にノッチが認められる。91も薄手で、刃部に調整剥離が見られる。92は現代の庖丁のような形をしている。これには背つぶしが施されているが、刃部を含めて他の部分にはほとんど加工が見られない。93は緑色片岩の剥片を素材とし、刃部の一部はかなり磨耗しており、集中的に使用されたことが窺える。なお、背部とした方もかなり鋭くなっているので、こちらも刃として使用された可能性がある。この93を除いて使用痕がはっきり認め

第IV章 調査遺跡

られるものはない。

94は粗大剥片石器と呼称したが、これは、硬砂岩製の母岩からとれた大きな剥片に簡単な刃部加工を施したものである。自然面と主要剥離面との間に形成された鋭角部分を刃部としているが、更に、上端部から打撃を加えて自然面を剥離し、それと主要剥離面との間に形成された鋭角部分にも調整剥離を施して刃部としている。

J 磨製石斧(95~99)

6点出土し、1点は刃部を欠損している。95は横断面が偏平なかまぼこ形をした小形品で、緑色片岩製の母岩の表面から剥離された剥片を素材としており、この剥片の周辺部に調整剥離を加えてから研磨したものである。研磨痕は片面から縁辺部にかけて見られるが、自然面側はほとんど見られない。研磨は入念でなく、処々に調整剥離面が残っている。96は蛇紋岩製で比較的大形だが、胴部から頭部にかけて欠損している。研磨は不定方向であるが極めて入念である。なお、刃部先端には敲打によると思われる刃こぼれが見られる。97は緑色片岩製の小形品。調整剥離が深かったためか、研磨をし残した所がかなり見られる。また、刃部先端が研磨されて平らに落とされているが、一度使用して刃こぼれしたものを再生したのだろうか。98は蛇紋岩製の小形の定角式で、刃部先端には細かい刃こぼれが見られる。99は緑色片岩製で大形である。頭部は欠損しているが、入念に研磨しており、研磨方向は長軸に対してほぼ垂直方向が多い。刃部片面には大きな刃こぼれが見られる。

K 敲打器(100)

100は三角形の断面を持った細長い敲打器である。敲打痕は両先端に見られるが、あまり強い敲打ではないようである。図示してないがもう1点出土している。これは全体的に細長い形をしており、胴部が張って先が細くなっている。敲打痕は一方の先端に見られるが、もう一方の先端は欠損しているために不明である。

L 磨石、特殊磨石(101・102)

磨石は3点、特殊磨石は1点出土している。101は半分以上の部分が欠損しているが、復元すると楕円形になるようである。周辺部を除いた上下両面に磨耗が顕著である。102は半分程度欠損している特殊磨石である。胴太、先細であるが、胴の2面が平らで、残りは丸みを帯びている。先端はやや丸みを帯びているが、ほぼ平らに作られている。

M 凹石(103~106)

10点出土しているが、石質・形状とも様々である。103は偏平で平面が三角形に近い不整形を呈する。凹みは両面に数個づつつけられており、深さは1.5mm~4.5mmまでいろいろである。104は歪曲した直方体形で、石の表面全体が磨耗しており、凹みは4面にある。105は乳棒状の凹石である。図示した面には広範囲な凹みが見られ、反対側には小さな凹みが数個つけられている。なお、この凹石の先端は磨耗している。106はひっかき傷のような浅い凹みが2面にあり、一部を除いて全面に磨耗痕が見られる。更に上縁周辺部には大小の剥離が顕著に見られるので、敲打器としても使用されたようである。

N 石皿(107・108)

2点のみの出土である。107は完形品であるが、一部に褐色の自然面が残っており、この自然面を薄く丁寧に削いで石皿を製作したようである。上辺部と左辺部はきちんとした縁が形成されているが、右辺部と下辺部は盛り上がりがあり、縁が明確になっていない。108は安山岩製で、程欠損している。風化していることもあるが極めて美しい。皿部は比較的深く抉られており、縁も丁寧に作られている。この

石皿の裏面には大きな凹みがあり、凹石としても機能したようである。

○ その他(41・42・109)

41は黒曜石製で、背つぶし加工があるが、刃部加工はなされておらず、かなり刃こぼれが見られる。42は、22と同様に、調整剥離が少なくとも2度にわたる黒曜石製の不定形石器である。図8のL面・R面の1は自然面である。素材の形は不明だが、それに2と3の剥離面が形成されて使用される。R面の4もこの時のものと思われるが、ここにも使用痕が見られる。使用痕は線状痕で、その方向は、2と4が石器の長軸に対してほぼ平行、3は長軸に対してやや斜めの方向である。この使用后、5が一撃で大きく剥離される。次にL面とR面の細かい調整剥離が施されて現在の形ができあがっているわけだが、ここには使用痕は見られない。

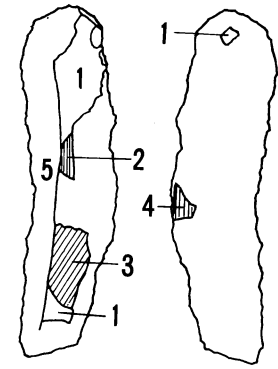


図8 不定形石器の加工過程

109は、平面形約12cmの不正円形で高さ4cm、重さ877gの扁平な石である。上面と下面は、部分的にとり残しはあるにしても、一回の打撃で平らに剥離されている。外周部は、角をつぶすようにして、全面に調整が施されている。この石の用途は詳らかではないが、上面にごくわずかな凹みがあるようにも見えるので、小形石器の加工台であったかとも考えさせられる。同様の石はもう一点出土している。

③ 石製品(図25-114)

石製品はわずか1ヶのみである。滑石製で、片方の側辺に半円の穿孔が施されている。外周には明瞭な研磨痕が残っており、その方向も不定であるので、きめの荒い石などと擦り合わせて形を作ったのであろう。穿孔は1つだけであるが、もう一方の側辺にわずかな凹みが見られるので、こちらへも穿孔を意図したかもしれない。縄文前期に多い滑石製の装飾品の未製品としてよいであろう。

以上、本遺跡出土にかかる縄文時代の石器及び石製品を概観したが、再述するごとく、遺構伴出例が皆無であるうえ、時期的に前期のみと断定できないので、他遺跡との比較検討や石器組成などの点に触れず、分類と観察の結果のみとなった点、諒とされたい。

2) 弥生時代の遺物(図20-149、図25-110)

遺構は検出できなかったが、遺構外出土遺物として土器と石器がある。土器は櫛描波状文ある弥生後期の小片が10ヶ程数グリットから検出された。近くの志平遺跡出土土器と同一時期のものである。石器は打製石庖丁がある。砂岩の薄い横長の剥片を利用し、全体の形を整えた上、背部の半分程には背つぶし状の小剥離を加え、刃部先端は両刃に近い形に研磨が施されている。刃部を半分近く欠くが、使用痕など観察されず、紐かけの穿孔のあともない。形状や研磨から弥生時代のものとしてよいであろう。

近接して橋原・志平両遺跡があるので、混入と理解してもよいが、本遺跡の天竜川に近い扇端部付近も該期遺構検出の可能性もあり、一応記述した。

3) 平安時代の遺構と遺物

(1) 第1号住居址(図9・26、図版23・34)

当遺跡の中では、一番山側に検出された住居址である。図や写真でわかる如く、本址はローム面上には、1.5~1.0m間隔で東面に走る段状の遺構があって、全面を切断されている。そのためローム層まで掘り下

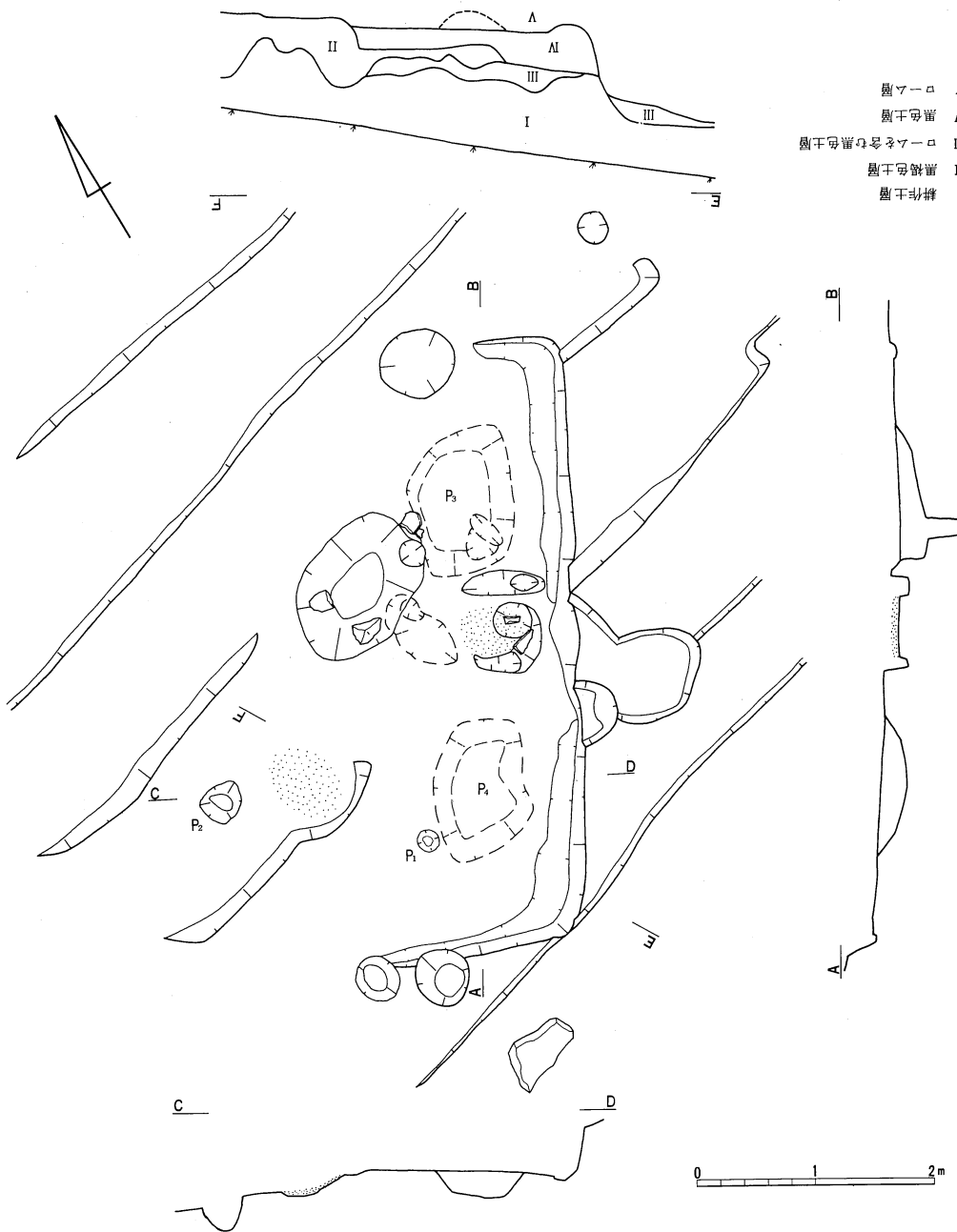


図9 洩矢遺跡第1号住居址 (1:60)

げた時点で
ようやくプ
ランの一部
を確認する
ことができ
た。斜面に
位置してい
るため、傾
斜の低い北
側では、ロ
ーム層を切
り込んでい
ないうえに、
耕作により
荒されて南
東側3分の
1がわずか
に残存して
いるのみで
ある。

プランは
一辺約5m
の方形と推
定され、主
軸方向はS
-60°-Eで
ある。埋土
は、炭化物、

ローム粒を少し含む黒色土層で傾斜にそった自然堆積である。床はローム層中にある南東側3分の1では、固くたたきしめられ住居址中央付近は良好で、壁周辺は軟弱となる。北西側3分の2は、耕作により、攪乱されておりまったく不明である。残存している壁高は南東壁南側で最も高く40cm、わずかに残る南西壁で22cm、カマド附近を除いて残存する周壁部にのみ幅28~5cm、深さ5cm前後の周溝がめぐっている。柱穴はP₁(18、-24cm)、P₂(36×31、-30cm)が南西壁側の床面上から検出されたが、P₁は小さすぎ、P₂は形状から共に支柱穴とは認定できない。対称地点にも柱穴らしきものはない。南西壁上に並ぶ2つのピットやP₃の南隅にある径16cm、深さ50cmのピットもあるが、共に位置的にやや難がある。支柱穴のない住居とも考えられる。

カマドは、南東壁中央に位置し、石組粘土製カマドと思われるが、攪乱のために大半が破壊されており、わずかに支脚石、焼土及び袖石1ヶが見られるのみである。焼土の両側には、袖石が組まれていたと思わ

れるピットが検出され、右側の袖部と思われる所には、ローム粒を多量に含んだ土が、丘状に低く盛られているのが見られた。カマドの両側のタタキの床下から P₃ (120×90、-20cm)、P₄ (150×75、-20cm) が対称的位置から検出された。P₃からは土師器片が若干出土しており、貯蔵穴が何らかの理由で埋められたものと思われる。P₂の南東に接して攪乱のため床が破壊された面よりも低い位置に幅50cm、高さ18cmの段差を伴う焼土が検出された。丁度、カマドの焚口部から煙道部にあたる付近のように5cmの厚さで焼土が堆積していた。焼土中より灰釉陶器杯、土師器片が出土しており、石組などないが、カマドの残存と思われる。攪乱のため新たな遺構を確認することは不可能であったが、この焼土をカマドとする住居址を切って、1号住居址が造られたものと思われる。

カマドの前面に径125cm×86cm、深さ45cmの断面が摺鉢形のピットが検出された。埋土は炭化物を若干含む、漆黒に近い黒色土で住居址埋土とは明らかに異なり、それを切って掘られていた。しかし、ピット内からは、人頭大の石2ヶと刀子完形品(図25-6)1本、土師器、須恵器片若干が出土しており、その帰属は問題が残る。平安期以降の土塚墓的なものへ、住居址中の遺物が流入したものか判断できなかった。

遺物は、カマドから南東コーナー付近に集中しており、南東壁周溝中には並べて置いたかのように、土師杯が出土した。攪乱が激しく土器など小片となったものが多い。

出土遺物には土器と鉄器がある。(図26-1~24、図25-6)

土器には土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。土師器のうち供膳形態は杯B7、杯C41、杯D11、皿B1を含む60点以上あり、煮沸形態は数点のみで小形甕B1点を含む。黒色土器は100点以上あり、杯B5、杯C29、皿B1を含む。杯Cには、9・10にみられるように体部下半手持ちのヘラケズリがなされるものが若干ある。6の器表外面には「仁」の字が墨書され、12には一見漆状の炭化物が付着する。須恵器は壺の破片が1点のみである。灰釉陶器は30点近くあり、椀A12、皿A4、皿B6、壺1を含む。底部には糸切り痕が残ったりヘラケズリされるものがある。釉はつけがけされるものが大半である。生産窯の確定は困難だが、東濃産に似たものがある。折戸53号窯期の産と思われるものが過半を占める。

鉄器には刀子が1点ある。6がそれで両関造りである。

(2) 第2号住居址 (図10・26、図版24)

1号址の北西、3号址の北東各6mに位置し、縄文期の6号址とは1.5mと近接している。本址もまた6号址同様、グリット調査の段階では確認できず、全面調査で検出しえた住居址である。本址西半部は自然流による礫の堆積が多い部分であり、3号址と同じく、その礫の中に構築したため、相当不明瞭な部分が多い上、調査経過で述べた段状遺構による破壊や、遺跡中央部を通る小路のため、床面近くまで部分的には後世の攪乱が及んでいた。

検出した周壁は東南壁と西南壁の一部コーナーのみで、それも壁高が10~7cmしか確認できず、かつ床面も周壁近くが不明瞭で、プラン認定はむずかしいが一辺4.2mの隅丸方形と推定してよいであろう。主軸方向はN-49°-Eで他の住居址と方向がやや異なる。床面は南半の一部P₅周近がよく踏みかためられた以外不明瞭である。地山がローム層というより、小礫を多く含む砂質の漸移層のためであろう。柱穴は4本あるが、やや不規則である。P₁(35×32、-17cm)、P₂(50×43、-12cm)、P₃(38×30、-19cm)は、それぞれ、周壁の内側か、または周壁に重なっているが、P₂が壁の中央部なのに対し、P₁・P₃はやや一方に寄りすぎている。主柱穴とするには浅いが、漸移層上面の削平を考えると否定もできない。しかし、P₃はやや外側に傾斜して穿たれ、かつ焼土(カマド)に近すぎる点問題もあろう。P₄(28、-18cm)は焼土をはさんでP₃と並ぶが、



図10 洩矢遺跡第2号住居址 (1:60)

方形であり、周りに埋没した自然礫があって柱穴的でなく、P₂も小形で浅く明確な主柱穴を指摘できない。東南・西南両壁の接するコーナー北には、105×85cm、深さ23~17cmの底面が平坦な方形大形ピットがある。内部の埋土はプライマリーな柔かい黒色土層であったが、遺物は出土していない。

当初、P₅周辺に僅かの焼土があり、床面に近く土器が出土するので、崩壊したカマドを想定したが、焼土は上部からの混入で攪乱されたものであることが判明した。むしろ、カマドは北東壁中央部P₃とP₄の間に2~5cmと薄くはあるがやや広範囲に焼土が検出された部分を当てたほうがよいであろう。ただ、焚口部や火床に当たる床面の状態は余り火熱をうけた様子がなく、カマドと断定する明瞭な根拠はないが、焼土中から小片の土師器が数点出土したことや位置的にみてカマドと推定したい。カマドに使用した石や粘土片もなく、その上面すれすれまで後世の攪乱をうけていた痕跡がある。

遺物の出土状態は床面上に密着するものは少なく、大半が床面上数cmの黒色土層中であり、P₅や推定カマド付近にやや多い傾向があった。砥石が1点グリット調査の折黒色土層上部から出土した。

出土遺物には土器と石器がある。(図26-25~33、図25-111)

土器には土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。土師器のうち供膳形態は70点以上あり、杯B 1、杯C 5、杯D 2を含む。煮沸形態は甕の破片が若干あるのみである。須恵器は杯Cが1点ある。灰釉陶器は20点以上あり、椀A 11、皿A 5、皿B 1、壺 3を含む。底部にヘラケズリがなされるものはほとんどなく、糸切り痕をそのまま残すかナデを加えている。生産窯の確定は困難だが、東濃土岐・美濃産に似るものがある。折戸53号窯期末の産かと思われる。

石器では砥石が1点のみ出土している。111は砂岩製の小形品で不整立方体状である。あまり使い込まれたものではないらしく、砥面にはやや凹凸が見られる。

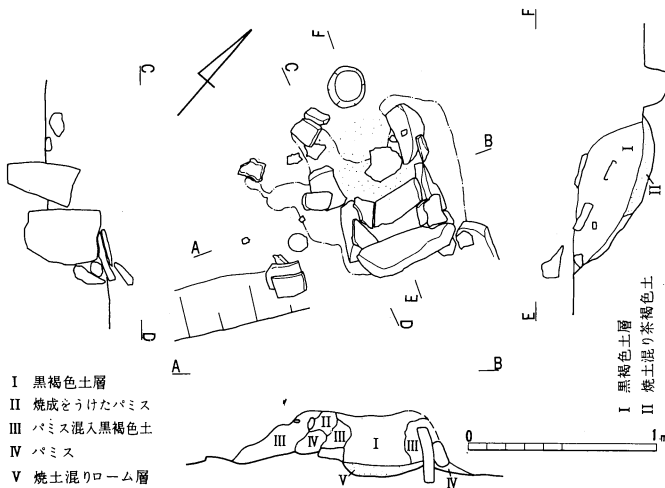


図11 洩矢遺跡第3号住居址 (1:60)・カマド (1:40)

居址の南東壁と北東壁には特に多かった。北東壁外部に集石状に散在する石は、さらに北へのびて2号址西側一帯の自然石の堆積地帯へとつながっている。この3号址を構築する時点では、2号址でも同様自然堆積の石を取り除きながら竖穴を掘りすすめたことと考えられる。

平面形は東西5.0m、南北4.6mの平行四辺形風につぶれた隅丸方形で、主軸方向はS62°Eである。残

(3) 第3号住居址 (図11・25~28、
図版24・34・35)

2号址の西南6.5mに検出された。附近はグリット発掘時から遺物量が多く、表土層下の黒色~黒褐色土層の面で住居址の埋没がほぼ予想された。発掘をすすめてみた結果、本遺跡のなかでは最も良好な遺存状態の住居址であるとわかった。黒褐色土層下の褐色土層は、その下部がロームへの漸移層に相当するが、この褐色土層は大小の石を非常に多く含み、住

第IV章 調査遺跡

在する壁高は南東壁で22cm、北東壁で20cm、南西壁で40cmであった。傾斜の低い西北壁の掘り込みは土層の境界が明確であったのはっきりとらえられ24cmあった。つまり、住居址の埋土は黒色土で、外側は褐色であった。

カマドは南東壁中央よりやや北に偏っており、粘土やパミスを芯に入れた石組粘土で構築されている。カマドの底には厚さ15cm前後の焼土が多量に残っていた。カマドのほかに2つの深さ約10cmの浅い小形地床炉(F₁・F₂)が住居址中心部よりやや南に寄っており、共に内壁ロームが赤く焼け、焼土と灰が少量を残していた。F₂は隣りの大ピットにつながっているが、ともに鍛冶作業に関連するものであろう。南西壁中央部の大ピットは20cmと浅く、底は自然礫を含むローム土であり、凹凸があって水平でなく、また、東南壁は明確でなく、床面へと連続している。この大ピットの周壁には大きな自然石がローム中から露出している部分がある。内部から羽釜片をはじめ土器片が出土した。カマド北側には、内外黒色の杯・甕・羽釜などがたよって出土した。

柱穴はP₁～P₇の計7個あったが、その配列は不規則である。南西壁中のP₁(33×30、-28cm)とP₂(44×40、-22cm)、中央のP₃(51×46、-53cm)、東南壁のP₄(52×40、-19cm)が主柱穴とみられる。P₅(28×29、-29cm)は支柱穴、P₆(40×28、-20cm)、P₇(25×28、-13cm)は鍛冶用大ピットや炉に関連する柱穴であろうか。北西壁および北東壁の近辺に残りの主柱穴が存在するはずとみて床面を精査したが検出できなかった。床面は壁に沿った周辺部を除き極めて堅緻である。とくに鍛冶用炉としたF₁・F₂の周辺は固く、バリバリの床であった。周溝は南西壁に一部のみ設けられ他の部分にはない。

遺物は埋土中からも、拳大・幼児頭大の石とともに破片で多く検出された。そのうちには、縄文時代の磨石、黒曜石片、縄文土器片数点なども含まれていた。当初帯金具とした不明鉄器(図25鉄製品-2)も埋土中より出土している。また灰釉陶器の半個体が床面より25cm浮いて、カマドの西南部より出土している。北壁近くの床面から小形壺(図27-54)が出土。西壁近くでは床面より少し浮いて、緑釉陶器の破片(図12)がみられ、その近辺から羽口(図25土製品-6)が半分ぐらい出土した。カマドの南袖部からも羽口の破片が出土している。このほかに鉄製品などが多く南壁に張り付いた状態で鉄鏝(図25鉄製品-3)が、カマドの手前の小穴の底からは鉄鎌片(同図-7)が出土した。P₂の底からは砥石(図25-113)と鉄滓が伴出した。カマドの北側の床面上からも砥石(図25-112)が出土した。カマド内壁の崩解したスサの入ったかたい拳大前後の粘土塊(図版33-4)はカマドの周辺から鍛冶用ピット内にかけて比較的多くみられ、鉄滓は2片のみであった。住居址の中央北寄り床面には大きな安山岩台石が据えられていたが、この上面は剝離痕が明瞭に残り、鉄分の小さな物質が付着、あちらこちらに赤色に変色した部分が残っていた。鉄鍛冶の作業に関する台と判断される。この台石の北側には扁平な安山岩平石が床上におかれていた。安山岩扁平台石はカマドの北側にもあった。また、この住居址の東方、約3mの地点に表土層直下の黒色土層から土師器杯の底部が検出されている。

この住居址の出入口は確認できなかったが北隅の浅い方形の張り出し部が可能性がある。なお、埋土上部から床面までの遺物出土ドットを作成したところ、埋土の浅い西側部分には出土が薄く、深くなる東側半分に集中していた。

1・2・6号址でも触れた段状遺構は、本址付近までは達していない。当初記したように、本址東側から2号址にかけての自然流による礫の散在する部分までで終わっているようである。

出土遺物には土器、石器、鉄器、羽口、鉄滓がある。(図12・25～28、図版33～35)

土器には、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉及び緑釉陶器がある。

供膳形態の土師器は70点以上あり、椀A 1、杯B 22、杯C 25、杯D 11を含む。54は分類し得ない杯で体部が張り、いったん内湾した後口縁部は外反する。ロクロ成形され底部に糸切り痕がみられ、器表内面は剥落が著しいが、剥落後炭化物が付着している。外面はナデられ、炭化物が付着し、全面に二次的焼成がみられる。56は椀Aで、体部下半は内外面ともナデ、上半から口縁部にかけてはヘラミガキがなされる。

煮沸形態の土師器は30点以上あり、甕D 2、羽釜10以上、小形甕A 4、小形甕B 2、小形甕C 3点を含む。65・66は甕Dに含めたが、口縁部の外反はごく小さく、本来の甕Dとは異なるが、その系譜をひくものと理解しておく。65は口縁部にヨコナデ、体部には内外面とも軽いハケメがなされる。66は口縁部にヨコナデ、体部外面に軽いヘラケズリ、内面にハケメがそれぞれ加えられる。64は小形甕だが分類に含めきれない。ややゆがんだつくりで体部はいく分かふくらみ、内面に稜をつくって外屈し、口縁部は短かく小さく外反して立ち上がる。器表は口縁部はヨコナデされ、屈曲部以下は内外面とも細かく軽いハケメが加えられる。体部下半の外面の器表は剥落し、内面も器表が荒れ、外面には部分的に炭化物が付着する。

羽釜は器形がある程度推測できるものが9点ある。器形は大別すれば胴部が張り出して深いaと胴部が丸みを帯びてすばまる浅いbの2種類がある。aには口縁部が内傾して胴上半部が張り出す58～60・63と、張り出さず円筒形になる62がある。前者は上伊那郡箕輪町南大原第二遺跡第1号住居址⁽⁷⁾、後者は飯田市清水遺跡第34号住居址⁽⁸⁾、伊那市月見松遺跡第67号住居址⁽⁹⁾出土の類似例がある。bには口縁部が直立し胴部は丸くすばまる61と、口縁部が外傾し直線的にすばまるものがある。前者は諏訪市城山遺跡⁽¹⁰⁾の土坑1より出土した完形品、茅野市判の木山東遺跡第4号住居址⁽¹¹⁾出土品等、後者は山梨県北巨摩郡長坂町柳坪遺跡B地区第2号住居址⁽¹²⁾出土品等の類例がある。これらの類例はいずれも折戸53号窯期の灰釉陶器を伴っており、本址も含めておおむね同時期のものと考えられる。本址の羽釜はいずれも胎土が緻密で、混入物中に雲母が目立つ。鏝は大きなものと小さなものがあり、水平につけられるものと下向きにつけられるものがある。整形は甕に比べてやや丁寧で、鏝より上はナデ、下は軽いハケメで仕上げるものが多い。

黒色土器は70点ほどあり、杯B 8、杯C 24点を含む。須恵器は、壺と甕が1点ずつである。灰釉陶器は20点以上あり、椀A 14、皿A 2、皿B 1、壺 3、甕 1点を含む。底部にはヘラケズリのあるものもないものがある。生産窯は確定できないが東濃産に似たものがある。折戸53号窯期の産であろう。

緑釉陶器(図12)は推定口径10.1cmの小形の椀である。胴部下
半以下は欠損して不明である。断面四角形の高台がつくものであろう。口縁部が短く外反し、胴部との境界に深い沈線を1条めぐらす。内外面は丁寧に篋で磨いたのちに、緑釉が塗られている。釉は黄緑色の釉に濃緑の釉がまだら状にみられる。胎土は緻密・硬質で暗赤紫色である。小形椀で硬質の緑釉陶器は松本市城山腰上遺跡等、長野県下でもかなりの類例が知られる。3号住居址出土の土師器等とほぼ同一時期の所産であろう。

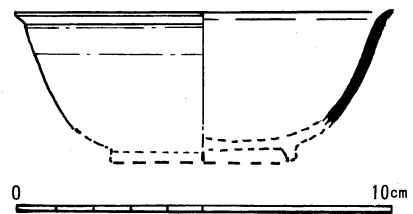


図12 第3号住居址出土緑釉陶器(1:2)

石器(図25)は大形の砥石が2点出土した。112はカマド北側の床面上から出土した細長い砥石で頁岩製である。断面は不整形で4面とも使用されているが、各面の使用の程度には差がある。使用方向は長軸とほぼ平行である。113はP₂の底から出土した断面五角形の砥石で砂岩製である。5面のうち4面は使用されているが、残りの1面は使用面が剥脱したらしく凸凹な状態である。使用面のうち向かい合った2面には、幅1mm深さ0.5mmを最大とした条線がかなり見られるが、鉄製品の成形のために使用されてきたものと考えられる。

第IV章 調査遺跡

鉄器・鉄製品(図25)は8点ある。釘・鎌・鎌が各1点、性格不明のものが5点である。鎌(3)は本址南壁中位にはりついて出土した。篋被部を持つ尖根の定角鎌であろう。鎌(7)はほぼ完形品で、現存長4.7cm、刃部は内湾しそのカーブは直径6cm程の円弧となる。着柄角は130°を計る。

羽口は1点出土した。図25の土製品中6がそれで先端部のみ残る。鉄滓は2点、301.2g出土した。(図版33-4)

(4) 第4号住居址(図13・28・図版25)

グリット発掘の際、土師器の椀が出土したので、住居址の埋没を予想して拡張したところ、黒色土層中ではあるが、固い床面とカマドの石組に突き当たった。面的に抜げていくと遺物が点々と出土した。ところがカマドの他にカマドが壊されたと思える石組と焼土があって、2軒の住居址が重なっていることに気がついた。最初に検出した保存のよいカマドの方を4号住居址とし、後の壊れたカマドの方を5号住居址とした。5号址が古く4号址が新しいという関係である。主軸方向はN-28°-Wである。

4号址のプランは、南側のカマド周辺のみ判明したが、残りの大半は不明瞭であった。ただ、床面の範囲からは5号址カマドの接点あたりが北西隅になり、そのまま東側に壁がのびているように観察された。そのため一辺の長さは3.5mであることが推測される。壁高は南壁のカマド付近で25cmある。床はカマドの周辺から北側に黒色土中に構築された堅緻な面がとらえられた。5号址との差は10cmであり、5号址の上に、黒色土中に軟質の黄褐色をした小石を含む状態の貼床をしていた。4号址の堅緻な床が確認できた範囲は図に一点鎖線で示したとおりである。東側床面は全体に堅い面はとらえられず、部分的に残存していた。そして、薄い焼土が広範囲に広わり、その中に完形に近い椀(図28-67)が出土した。かたい床面部分ではあったが黒色土層につくられたのか、柱穴や貯蔵穴などの施設は未確認に終わったが、南壁に築かれたカマドだけは良好な状態で残っていた。カマドの位置は、南西隅の曲り具合からすると、南壁中心というより南西側に寄っているとみられる。石組粘土による堅固な構造で、奥壁及び両袖に偏平な石を配して焚口には小形の偏平石を置き、両袖には黄褐色ローム混り黒色土や、わずかに黒色土を含んだローム土が芯の偏平石

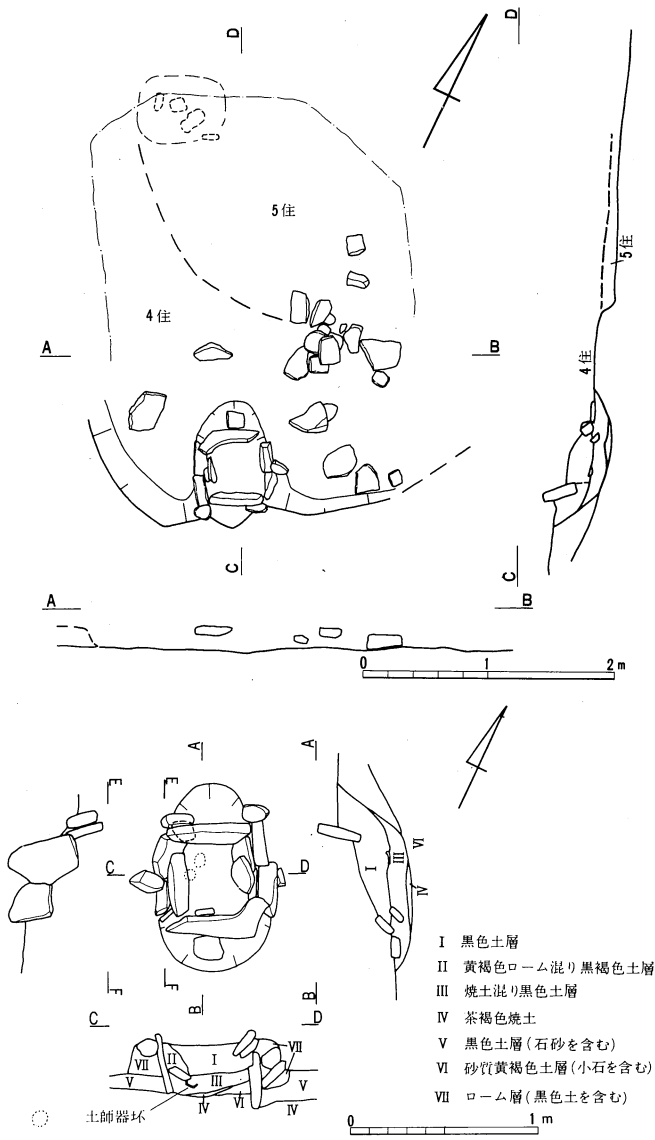


図13 洩矢遺跡第4・5号住居址(1:60)と4号址カマド(1:40)

を包んでおり、粘土で固めていたことがわかる。焚口の扁平石の上にはカマド手前の上石がずれ落ちていた。煙道は確認できなかった。カマド内には土師器杯(図28-7)と破片とが遺存していた。また、カマド周囲と5号址との境の床面には石が散乱していたが、4号址のカマド石の一部と5号址のカマドに使用した石であろうか。

土器には土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。供膳形態の土師器は20点程あり、杯B 4、杯C 9、杯D 4点を含む。煮沸形態の土師器は10点近くあり、甕B・甕D各1、甕E・羽釜各2点を含む。羽釜のうちの1点は図示しなかったが本址埋土中より出土し、5号址出土の破片と接合した。平底から直線的に外に開き、口端部は平坦につくる。罫は、断面が丸く下向きにつけられる。器表はナデられるが、内面にはハケメが残る。3号址の出土品と比較すれば、浅いD類の中に加えられよう。

黒色土器は40点程あり、杯B 8、杯C 7点を含む。須恵器には甕2点がある。76は底部から立ち上がる付近にヘラケズリがなされ、体部下半はタタキの後ナデられる。灰釉陶器は10点以上あり、椀A 6、皿A 3、壺・甕各1点を含む。底部にはヘラケズリが認められるものと糸切り痕をそのまま残すものがある。釉はつけがけされるものが大半である。生産窯は確定できないが東濃産に似たものがある。折戸53号窯期の製品が大半であろう。

(5) 第5号住居址 (図13・28、図版25)

4号址に貼床され、かつ、黒色土層中に築かれているため、4号址以上にプランはまったく不明瞭であり、かろうじて南壁の輪郭がおおよそ確認できたにすぎない。壁にあたる部分にわずかではあるが砂質黄褐色土が認められた。その西壁にあたるほぼ中央に石4個をとともう厚さ5cmの土がみられたが、石のまわりにローム土を入れてあったことなどからここがカマドと認定できよう。しかし、その位置が2号址同様やや変則である点が気になる。床面は南壁付近が一部残存しており堅緻である。やや褐色味をおびた黒色土で、軟質の黄褐色をした小石を含み、4号址の床との違いが識別できた。しかし、北側の大半は攪乱を受けていて全く不明であり、柱穴なども確認できなかった。床の断面をみると5号址の床が中間で盛り上っているのは、4号址の貼床の一部に固い所があったためであろう。なお、5号址の西には縄文時代のものと思われる集石が3あった。これは、5号址が築かれる時点で直線的に切られている。

出土遺物は土器(図28-77~83)のみで、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。供膳形態の土師器は10点ほどあり、杯C 6、杯D 1点を含む。杯Dの内面には煤状炭化物が付着する。供膳形態の土師器は底部と小破片が若干ある。須恵器は甕が2点ある。灰釉陶器は椀Aが1点あるのみである。時期的に他住居址と大差ないであろう。

(6) 焼土遺構 (図14・27、図版25-3)

2号址の北方にあたるAY~AW54、AY~AW52、AW・AX51の各グリットにわたって、約5×3mの範囲に東西に細長く広がる焼土が検出された。この性格が即断できないため焼土遺構と各づけて、その断面を十文字に2本とってみたところ、焼土面の下部には、内部に焼土をもつ小形のピット11個が埋没していることが判明した。そこで、これらのピットをF₁~F₁₁と呼ぶことにして調査をすすめた。

F₁(75×60、-10~15cm)の平面形は楕円形で底面は皿状である。底に最高6cmの真赤なローム土の焼土が積り、ほぼ内面全体にひろがっていた。この焼土の上に乗せられた状態で土師器小形甕の半個体分⁹⁰が横倒しになって遺存した。この小形甕は半分を切り取られたような状態で焼土粒を含む褐色土が入っている内

第IV章 調査遺跡

面を上に向けていた。このF₁は焼土遺構の中でも最も多量に焼土が残っており、半完形に近い土器の遺存状態からみても最も新しい時期と判断される。

F₂(70、-15cm)は平面は楕円形で浅い皿状を呈するが、底面は凹凸があり平らではなく、焼土が少量みとめられた。F₄(50、-12cm)は平面が円形でタライ状であり、焼土が5cmの厚さで残っていた。F₅(60、-35cm)も平面が楕円形でタライ状であり、底は平坦である。内部に黒褐色土が充填し上面の一部に焼土がみとめられた。F₆(50×40、-30cm)は平面が不整形のタライ状で、底は平らではなく凹凸があった。内部に人頭大～拳大の石があったが、これらに焼けた痕跡はみられなかった。F₇(70×40、-30cm)は南側にF₈～F₁₁が連結しており、北に土壇4と切りあっている。平面が卵形で断面がタライ状である。底に厚さ7cmほどの焼土が多量に残っていた。F₈(75、-35cm)はF₇の南に広がる。平面不整形で、タライ状を呈する。内部に木炭粒を含む焼土が微量みとめられた。F₉(70～80、-30cm)はF₈の南に接し平面が不整形、形状がタライ状である。内部に焼土がみとめられた。F₁₀(100×65、-20cm)はF₉の西側に連結し、平面長楕円形を呈し、形状はタライ状である。内部に焼土が充填していた。F₁₁に次ぐ多量の焼土であった。F₁₁(40×45、-10cm)はF₁₀の南壁中央にある。平面が楕円形で形状はタライ状である。内部に焼土が微量みとめられた。

これらF₁～F₁₁はすべて火熱を受けているため壁と底はボロボロして軟弱であった。また焼土遺構に関連すると考えられる柱穴が4本あった(P₁～P₄)、径20～30cm、深さ20～40cmの円形で、遺跡の中央部をまたぐように4本が位置している。P₁・P₃、P₂・P₄の間隔は約3m、P₁・P₂、P₃・P₄は1.35mと1.15mとや、後者がせまいが、何らかし上屋構造を考えられないであろうか。これ以外に柱穴が存在するのではないかと

みて周辺を精査したが検出できなかった。

なお、この焼土遺構には土壇4～6が近接する。焼土を伴わないこと及びその形状から焼土遺構とは直接に関係は無いと考えられるが、二・三土師器などを出土するのでほぼ同時期のものと考えたい。

これらF₁～F₁₁の重複関係を正確にとらえるよう精査したが不明の部分も残っ

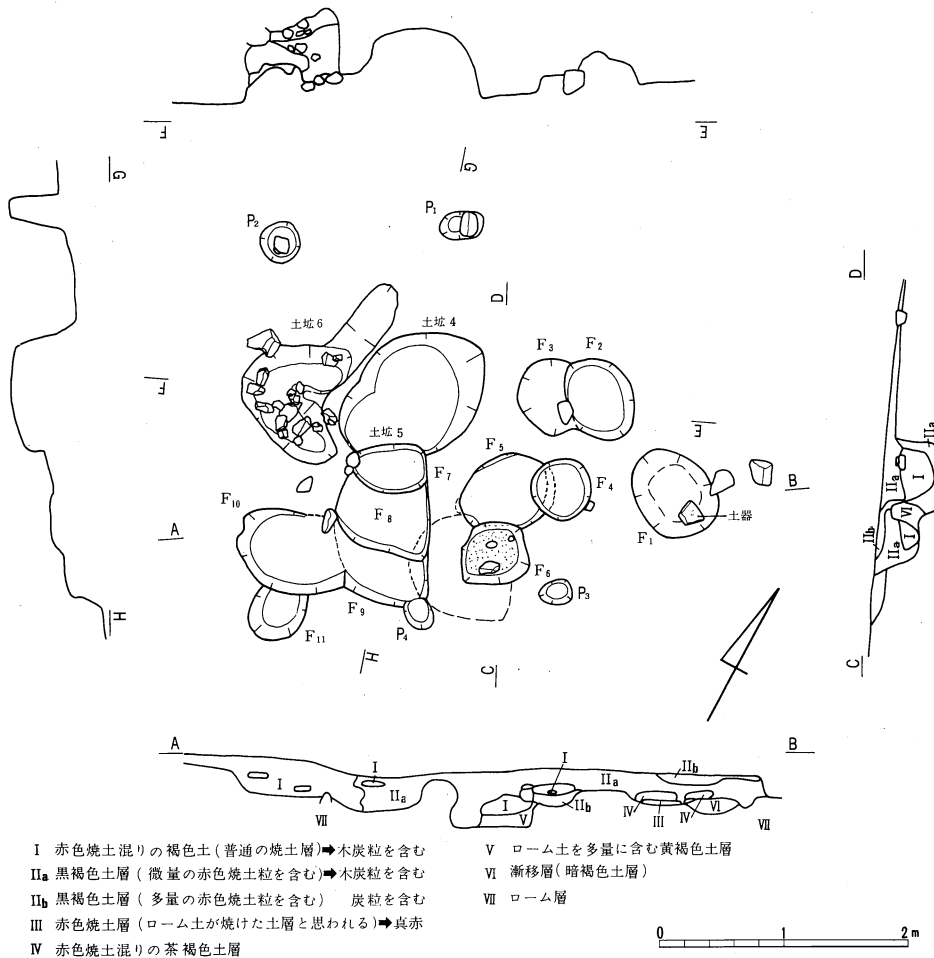


図14 洩矢遺跡焼土遺構(1:60)

た。重複関係の判明したものを中心に述べておくことにする。まずF₂とF₃とは浅い皿状のため前後関係は不明。F₄とF₅は、F₅の上にローム土を貼ってF₄が作られていたのでF₅→F₄の順序が判明。F₅とF₆は、F₅の一部をF₆が貼っていたのでF₅→F₆の順序。F₇と土塚5は、土塚の一部をF₇が貼っていたので土塚5→F₇の順序が考えられる。F₇とF₈とは、F₈がF₇にわずかに切られるという関係であったのでF₈→F₇でよいであろう。F₈とF₁₀、F₉とF₁₀は、焼土の堆積状態からF₈→F₁₀、F₉→F₁₀の順序であろう。F₁₀とF₁₁は、F₁₁がF₁₀に切られるという土層の関係からF₁₁→F₁₀としてよい。

以上の重複関係と相互の位置関係からみれば、F₁～F₁₁が同時に構築され、使用されたものではなく、一時期の数は約半数の5個以上であったと判断される。

F₁から出土の厚手の土師器小形甕をはじめ、各ピット内およびそれを覆う焼土の中、また焼土遺構の周辺からは、土師器、灰釉陶器の破片が出土したのであるが、他の時代の遺物を全く含まない。したがって、平安期に属する遺構とみられ、1号～4号住居址と深い関係があったものといえる。

従来、こうした遺構は類例が無く、その性格も即座には決定しがたい。この焼土遺構に関して重要なことは、柱穴4個から想定される上屋がかけられていたらしいことで、かつ、ほぼ同時期の4・5号址、2号・1号址からは一定の距離を保って、その空間に構築されている事実である。この遺構の性格について、①土師器などの土器の焼成場であった。②季節的に使用する屋外の共同調理場であった。という二つの解釈がある。上屋の存在とF₁での小形甕の遺存状態は②の解釈に有利だが、確定はできない。類例を待つて究明すべきである。

出土遺物は土師器と灰釉陶器(図28-84~90)のみで他はない。

土師器は甕が2点ある。90は小形甕で分類しきれないものである。平底から丸みをおびて立ち上がり、胴部は心もちふくらみ、いったん内傾してから口縁部は小さく外反する。器肉は厚く、粘土紐の積み上げの痕跡が明瞭に残る。底部はへラケズリされ、胴部外面は荒いハケメの後へラケズリされる。内面には工具の痕跡が残る。口縁部外面はナデ、内面はハケメが加えられる。灰釉陶器は30点以上あり、椀A17、皿A4、皿B3、壺2点がある。底部はへラケズリ、ナデがなされるものと糸切り痕が残るものがあり、釉はつけがけされる。折戸53号窯期の製品であろう。

(7) 土塚4・5・6 (図14)

土塚4 焼土遺構中に土塚5と重複して検出された。原形は径90cm、深さ約50cmの円形でややすり鉢状に穿たれている。ローム層上面と同じレベルには約10cmの厚さでローム混りの褐色土貼床があったが、次の重複する土塚5の同一面にはそれがないので、4→5前後関係が推定できる。土塚1の附近から縄文土器の出土も多いので縄文期のものとも考えられるが、土師質の無文土器小片2ヶが検出されているので平安期と考えてよいであろう。

土塚5 土塚4に大半が重複する。原形は径70cm程度の円形であったが南側一部をF₇に切られている。そのため掘りあげてみると平面形は4・5連結してわずかにダルマ形になる。埋土は上層にローム土混りの黒褐色土があり、その下部は黒褐色土で、周囲の壁ぎわはローム土ブロック混りの黒褐色土であった。黒曜石剥片と土師器杯の小片が出土した。切りあい関係からみて平安期と考えられる。

土塚6 土塚4・5の西側に近接している。平面形は約100×60cmの不整形でハート形に近い。最深部で60cmある底は水平ではなく、凹凸が激しい。上部に多量に下部に少量の拳大の石が散在し石の間には木炭粒が少しあった。ローム土の大きな塊が3ヶ所あり、土塚上面をふさぐ状態であった。石を取り除き埋

第IV章 調査遺跡

土をさらって掘り進めると最終的な平面形は不整L字状になった。形状は通常のピットと全く異なり、遺物の出土も無く性格や用途は不明である。2ヶ以上の重複とも考えられる。

(8) 集石 1 (図5、図版26-7)

調査地点では最も高い部分にある。AU64グリットを中心に発見された。平面は長軸4m、上(高)方幅2m、下(低)方幅1mの三角形状を呈し、20~15°程度のローム層乃至漸移層の傾斜地に人頭大から拳大の自然石を無雑作に集積している。東側には直径1mもある大石があって、それを利用したように、南側傾斜の高い部分に深さ18cm~25cmの住居址周壁のようなローム層の掘り込みが1.8mつづく。しかし、内部は床面のような状態でなく、軟かく、凹凸も激しい。

なお、この大石は、傾斜の低い部分におさえて挿入した20cm大の自然石が3ヶあり、その横に小ピット(25×20、-18cm)が斜めに穿たれている。集石の中心部には1m×70cmの方形に厚さ10cmの焼土があった。集面上面よりはやや焼土面が高く浮いた状態であるが、この焼土部の下方には大石があって、それを利用している状態が断面図から知ることができる。焼土の南隅に近く、土師器杯や甕の小片がまとまって10片ほど出土した。集石周辺のグリットからは縄文土器片も検出されているが、集石の中の焼土から出土した点を重視して平安期の遺構としてよいであろう。自然的な集石であるとする見解もあったが、焼土が集石の中心部にあり、かつ集石の堆積ともかみあっているので、一応遺構と考えたい。屋外炉ではないか。

(9) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物には土器・土製品・鉄器がある。

土器(図28-91~108)には土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。供膳形態の土師器は400点以上出土しており、杯B60、杯C100、杯D20、皿A1点を含む。皿Aはいわゆるカワラケに近い。煮沸形態の土師器は20点以上あり、甕E5、甕F1、羽釜6、小形甕A3、小形甕B4点を含む。黒色土器は150点以上あり、杯B6、杯C50点以上を含む。須恵器は10点以上あり、壺1、甕は5点以上ある。灰釉陶器は100点以上あり、椀A30、皿A15、皿B20、壺5点が含まれる。底部は糸切り痕のままのものが目立つ。いずれも折戸53号窯期の製品であろう。

土製品には土錘(図25土製品-1~3)が3点ある。いずれも径1.5cm、長さ4cm程で、IBa型に属する。鉄器(図25鉄製品)には釘・紡錘車のほか性格不明の鉄片がある。

このほか、遺構外からは内耳土器の小破片、近世陶器、近世・近代の鉄製品などが出土している。

4) その他の遺構と遺物

(1) ロームマウンド1~5 (図15、図版26-8・9)

5基検出したが、時間の関係で完掘したものはなく、一部切断して構造の確認のみに終わった。2号住居址の北側にほぼかたまっているが、規則性はなく、出土遺物もない。

ロームマウンド1 2号住居址の北東にあって、土壇1、焼土遺構、大形ピットの真中にある。長径は3.3m、短径2.5mの不整楕円形を呈す。中央部のローム塊(1.6×1.9m、厚さ55cm)はわずかに盛り上がる。まわりの黒色土層は底面(-16cm)で約10cmの幅でローム塊と接する。この底面に近い部分やローム塊中に拳大の自然礫が僅かに存在する。5基のうち最も典型的な形状を呈している。

ロームマウンド2 長径2.4m、短径1.8mの楕円形。中央のローム塊は他と多少相違して、単一でな

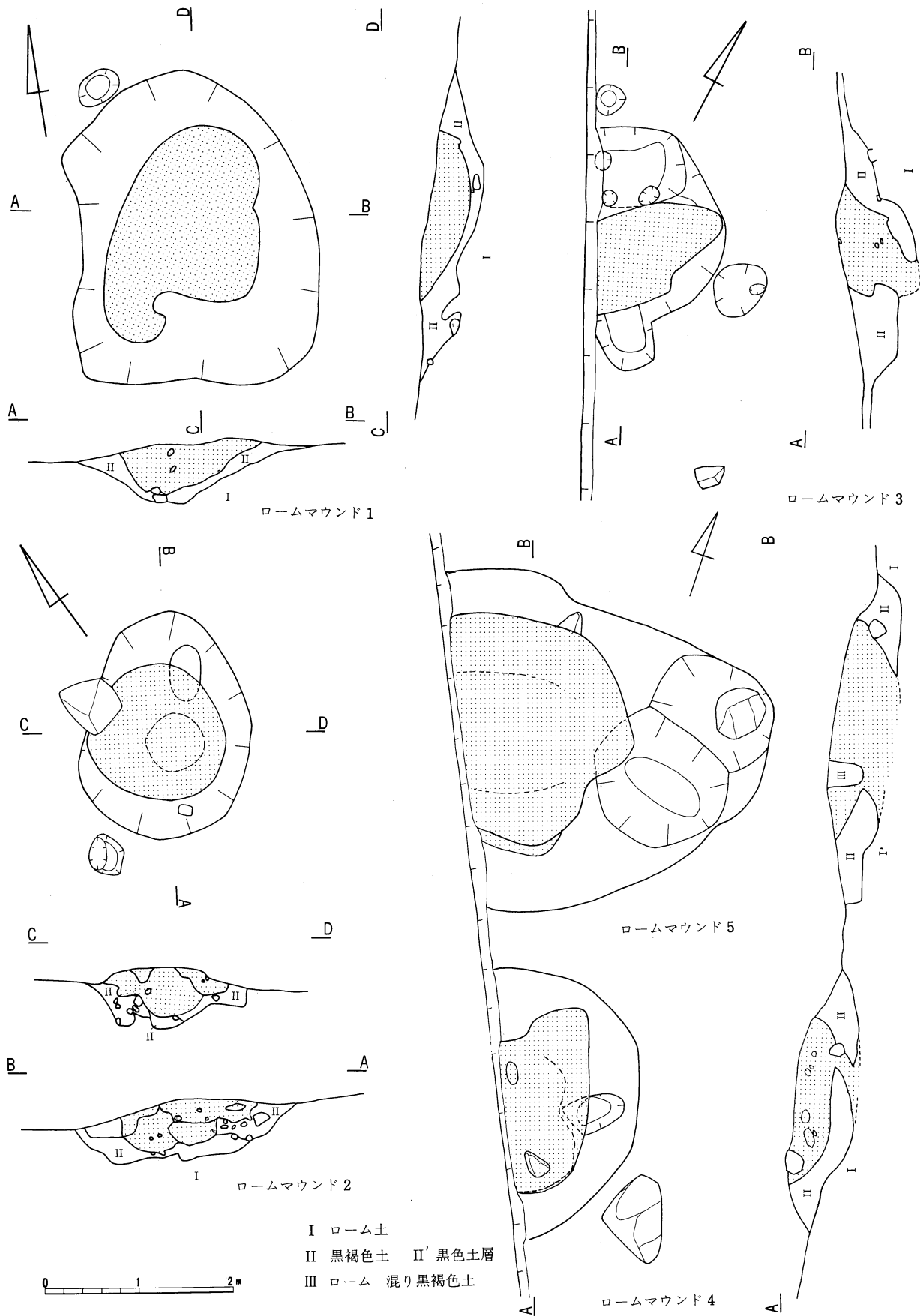


図15 洩矢遺跡ロームマウンド(1~5)(1:60)

く、黒褐色土の中へロームが混入するものやロームが多く黒褐色土が少ない層があったりして複雑である。しかし、ピット底面(-65cm)は黒色土層で、1と同様、ローム塊が浮いた状態となる。小形である。

ロームマウンド3・4・5 3基は全掘せず、半分のみ検出した時点で止めた。3基ともピット内にローム塊が浮く1・2と異なり、むしろ、黒色土層がローム中層へ掘り込まれたような構造である。しかし断面作成のために切断したので、底面近くの確認が不十分である。調査中の感想では1・2に較べると自然的成因、例えば風倒木などの結果生じたような土層状態であった。粘性がなく、自然礫を多く含むロームなので、黒色土層の落ち込みも余り固くしまらない部分があったり、底面に更に小形ピットが掘られる場合もある。

まだ結論のでないロームマウンドであるが、人工的な例と自然的成因があるのではないだろうか。1・2は明らかに黒色土層のくい込み状態といい、ピット壁や底面の在り方は前者であるが、3～5は後者のようで余り目立った特色を指摘できない。今後更に検討すべき遺構であろう。

(2) 集石2・3 (図5、図版26-6)

集石2は、ロームマウンド1の東5m、焼土F₁₃の西1.5mに検出された。ローム面でなく、黒色土層中に拳大の石を10ヶ前後無雑作にほぼ径50~60cmの円形に並べた構造で、焼土・灰もなく、石が火熱を受けた状態もなく、その配置にも特に注意すべき点はない。焼土F₁₃より約20cmレベルは低い。勿論自然に集積した状態ではないが、時期は決定しがたい。

集石3は、5号住居址構築の際4分の1程度切られているが、径90cmのほぼ円形を呈する。暗褐色土層から掘り込まれロームを15cm前後掘り凹めているが、下部には石が少く、上半部に拳大の石がきちんと積まれており、多少ふくらんでいた。付近には自然流による礫の堆積部分はあるが、明らかに人工的な形状

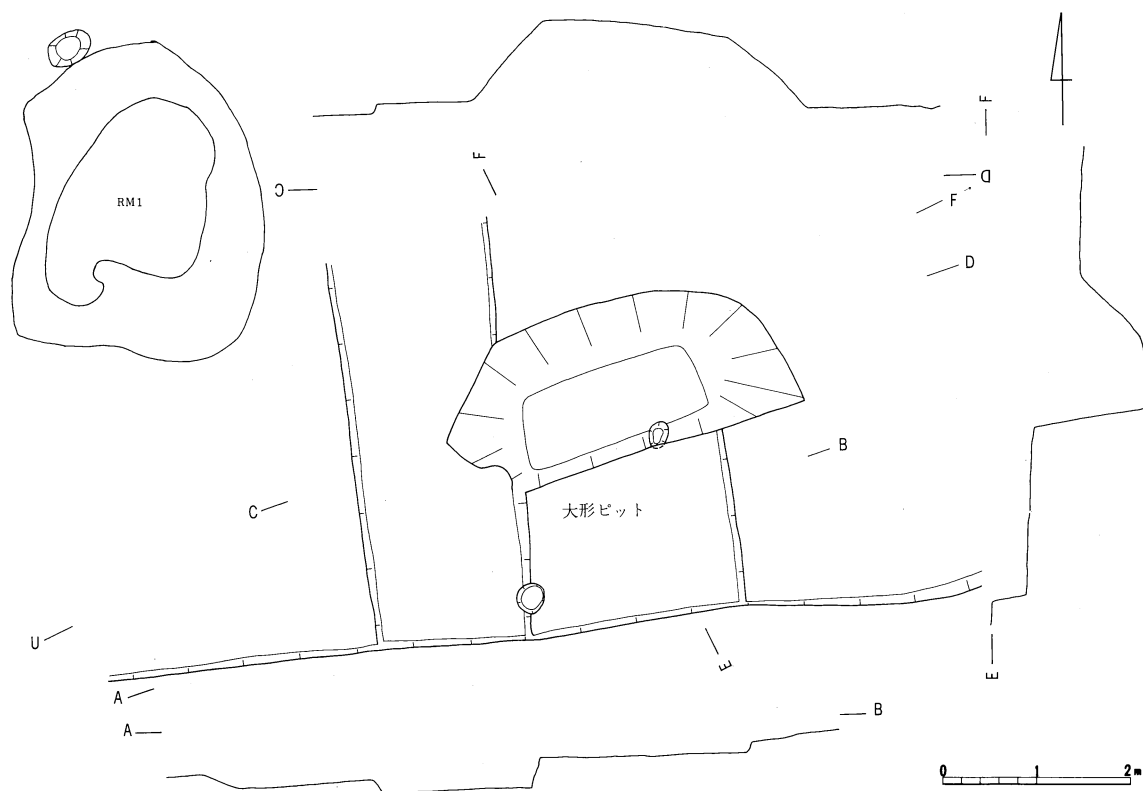


図16 洩矢遺跡大形ピット (1:80)

である。火熱をうけた痕跡はない。遺物の出土はなく、ここへ含めた。ただ近接するグリット出土遺物に縄文早期末から前期の諸磯式土器片が出土しており、縄文期の可能性も高い。

(3) 大形ピット (図16、図版25-2)

1号住居址の北4.5mに単独に発見された。東西3.7m、南北1.6mのカマボコ状の形を呈する。直線的な南側はほぼ垂直に近く、ロームを1.2m掘り込むが、他はやや斜めに掘り込む相当深いピットである。底面は2.0m×80cmで平坦であり、住居址床面ほど明確でないが踏み固められたような状態である。周壁の一部には金属製品による掘り込みのあとが部分的に観察された。この上面で後述する段状遺構を切断しているので前後関係は判明するが、検出面はローム面であり、埋土の状況から最近の「モロ」ではないことは確認できた。黒色から黒褐色土層の埋土も1号址の床面上のものと同一である。なお、南側の垂直に近い壁の中央に径20cm前後が深さ40cmの小ピットが穿たれていた。柱穴的なものであろうか。大形ピット内の埋土中からは遺物は一片も検出されないが、耕作土の下部から黒色土層上部にかけてグリット調査時点で縄文土器・土師器の小片と黒曜石の剥片が出土している。

(4) 段状遺構 (図2・3・9・16、図版23-2)

調査地域のうち中央小路東側の高所に当る部分、遺構が多く検出された範囲に発見された。調査以前、この範囲は傾斜面を横切って70cm～90cmの段差のある2枚の畑が作られていた。調査が進行するに従い、この畑の土堤と同じ方向、即ちほぼ東西に階段状の遺構があることが判明した。耕作土層下部の黒色土層や所によっては茶褐色土層面が直線的に落込んでおり、当初は住居址の存在を予測したが、周壁の如く曲らず、かつ数m離れたグリットに連続するような直線状のものであることが確認できた。その結果、全面発掘に切りかえた折、一応、最近のものと予測して、その上面を追ったところ、平坦な段階状の幅は一定でなく70cm～1.2m程度と差があり、平坦面部分は特に踏みかためたような状態でないので近時の畑として処理し、より下部へ調査を進めた。ところが、こうした段状遺構はローム層面まで及んでいることが、傾斜の高い1号住居址付近で確認され、引続きより低くなる大形ピット付近まで拡がっており、ここでは傾斜に平行したものだけでなく、直角方向を向く部分も一部分のみだが検出された。上部段階の黒色土層中の記録が不充分だったのでローム層面との対比が困難であるが、一回だけでなく2回以上にわたる結果であることは間違いない。なお、遺物は縄文土器や土師器・須恵器の破片が出土しているが、この遺構に直接結びつくような出土状態は何もない。

1・6号住居址の周壁や床面が切られており、一方、大形ピットがこれを切っているが、その時期を決定することはむずかしい。本遺跡は第2次世界大戦中から戦後にかけて開拓されたが、それほど深く掘り下げたことはないという(なお、耕作土下部から当時密殺した羊の骨が出土している)。地形的にみても余り良好な耕地とはいえず、近世における開発も積極的に考えられない。この点に関してはまとめの項にゆずって、調査の概要を記述するにとどめたい。

(5) 焼土地点 (図1)

F₁₂は、集石2の西側にあり、径40cmの円形を呈す。厚さ2～5cmで、黒色土層上部にのる。付近からは縄文土器片や土師器も出土するが、焼土中からは何も検出されず、時期を決定できない。

F₁₃は集石2の東側、調査区域の東端にあり、径1.5mのほぼ円形の範囲に厚さ20～50cmあるが、完掘は

第IV章 調査遺跡

できなかった。褐色土層の下層になる黒色土層を掘り凹めたような状態で検出された。F₁₂同様付近からは、縄文・平安期の土器片は出土するが、本址に確実に伴出する遺物はない。相当広範囲であり、かつ焼土も多く、注意すべきであろうが現地表面よりその下面は1 mあり、土層関係からも近時のものではないが、時期不明である。

5 ま と め

以上、調査の概要を述べたが、地形的な面では、先の志平・経塚両遺跡より相当狭く条件が悪いにもかかわらず、縄文期1、平安期5の住居址をはじめ、土壇、集石等を調査することができた。扇状地というより崖錐に近い山あいの狭い緩傾斜地、それも最奥部の猫額大の土地にまで、住居を営んだ両時代の実相に驚くと共に、あらためて、常識的な遺跡認識観の誤りを痛感する次第である。

本遺跡では、こうした縄文時代や平安時代における遺跡のあり方を究明する資料を提供したが、未だ充分な他資料の集積や検討を行っておらず、ここで論ずる段階に達していない。その他出土遺物についても同様であり、ここでは簡単に問題点の指摘と今後の課題を述べてまとめたい。

1) 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代については、早期の土器が出土し、本遺跡の最初の足跡を教えてくれた。押型文土器などが、一般的にこの諏訪地方でも比較的標高の高い山間などに多い傾向は現在でも訂正は要さないが、本遺跡や志平遺跡の如く、天竜川に面したやや低い地形上にも出土する点、彼等の行動範囲が意外に広いことを知ることができる。勿論、定住的な拠点でなく、獲物を追っての一時的な通過地点であったろうが、次の早期末葉の頃になると、土壇1にみる如く、或る程度、ここに留った結果を示す遺構が残されている。これが次の前期になると、中越・阿久遺跡例⁽¹⁴⁾をあげるまでもなく、既に「ムラ」を形成し、縄文時代は一つの画期を迎えている。とくに諸磯B式期はその一つと頂点でもあり、遺構・遺物の急激に増加する。詳細なデータはないが、諏訪地方でも前期遺物で最も多いのは該期であろう。6号址は規模など余り明確ではなかったが、諸磯B式期の4本柱円形タイプと認定してよい。中部地方における前期住居址の集成結果によれば、諸磯B式期は11例中円・方形プランがほぼ半ばしている。この中には本調査団が現在整理中の諏訪郡原村阿久遺跡例⁽¹⁵⁾は入っていない。阿久遺跡10数例は、単純な構造のものが少なく、伴出土器も諸磯A・B両式がある。現在その分析を進めているが、その結果によれば、該期住居址自体のみならず、集落構成などより巨視的な視点からの諸事象が究明されるであろう。この阿久遺跡を除くと県内では集落全体を調査した遺跡はほとんどなく、多くとも数軒、大半が1～2軒の検出である。本遺跡などは、その立地上からも10軒以上の住居址の存在を予想することはできないが、出土土器量の中に占める諸磯B式土器の割合から考え、未調査部分も含めて、多くとも2～3軒程度ではなかろうか。或は本遺跡の如き立地上にある場合は、阿久遺跡など地域の核となるような遺跡と異なって単独な一家族による一住居址という想定もあり、この場合、古く神田五六氏が指摘した⁽¹⁶⁾ように季節的移動も考慮してよいであろう。今後は住居址自体の構造分析もさることながら集落の在り方にも積極的な方向づけが必要であろう。

縄文土器は完形品もなく、余りまとまった資料もないので、次の2点につき触れるにとどめたい。第I群第6類土器は繊維を含み頸部の段状くびれという早期後半の特徴をもつが、その文様構成などに特色があり、関東地方の茅山式期に比定できてもそのものでなく、今後資料の増加があれば、南信地方における一型式として独立できる可能性がある。その他、第I群土器の中には第7類のようにその帰属が不明瞭な

ものが多い。一般的に県内では縄文早期後半から前期初期の土器編年については、良好な遺跡が少なく、断片的資料による単純な周辺地域との対比に終始している感がある。最近、伊那谷を中心にややまとまった新資料が増加しつつあるので、今後期待できそうである。

第II群の中、諸磯B式土器については分類の中でも述べたが、文様構成の一種である爪形文を付す土器が一片もないことである。これは諸磯A式が欠落している本遺跡の中にあつて、諸磯B式の細分案検討に一つの資料を提供したことになる。浮線文や平行沈線文など、次の諸磯C式の主文様要素につながる文様をもつ土器のみが出土している点は確かに注意すべき点であるが、しかし、先述した如く本遺跡の在り方からみて、未検出に終わった点は調査面積の狭さなど外的条件に起因する方が大きな比重を占めるであろう。この点もまた阿久遺跡への期待が大きい。

縄文時代の石器は遺構に伴出した例がなく、資料価値の点でやや問題もあろう。全般的傾向としては、石鏃など小形品で狩猟具的な石器に対し、打製石斧や石皿など、所謂植物栽培乃至加工具的な石器も少なくないことである。縄文中期土器は量的には少ないが、この傾向を前期一般と解釈することはできないであろう。なお、打製石斧の形態分類からみると、前期を中心とした本遺跡はII・III型、即ち短冊型が主となり、近接する縄文晩期主体の経塚遺跡でIV型（分銅形）が加わり、中期初頭の船霊社遺跡ではI～III型に平均的に分布して量が増加する点が指摘でき、それぞれの時期的特色を示している。また、横刃型石器は中期に圧倒的に多いが、本遺跡は少なく、形態的にもまた確立されたタイプがなく、バラツキがある。ただ、一ヶではあるが、北白川下層式に伴出する二等辺三角形の体部とその頂点につまみのつく石匙や滑石製品が出土していることは注意してよいであろう。いずれにしろ、こうした石器個々の分析を通じ、今後石器組成においても編年の追究が必要であろう。

4) 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構のうち、ほぼ同時期と考えられる住居址は1号址の重複を加えて6軒存在したことになる。完掘例が少ないが、規模については1辺5m前後の1・3号址と、4m程度の2・4・5号址に単純に大別できる。しかし、両者とも支柱穴は余り規則的でない点、この時期に共通している。カマドは2号址を除き、傾斜の高い壁際に設けられている点、カマド構築と周壁の関係が知られる。カマド位置から出入口部が傾斜の低い方になることを予想してよいが、関連する施設は3号址を除き検出されていない。4・5号址がやや離れるが、1・2・3号址は各々5m前後の間隔で並んでおり、全体的にみれば、4・5号址を含めた住居址の配置が、こうした地形上の一般的在り方ではなかったろうか。しかし、1号址にみられた新旧の重複関係を考慮して今少し分析してみると、1号址（新）と3号址はカマドの位置と棟方向が一致しており、共に遺物がやや多いのに較べ、2号址はカマドの位置も異なり、遺物も少ない。出土土器から細分はできないが、1（新）・3・4号各住居址と、1（旧）・2・5各号住居址に前後関係を与え、3軒を単位とする集団の想定も考えられる。ただ、この場合、3号址は埋土の上半部に遺物が多い点、それらを投棄した別のグループを考慮しなければならない。5～6軒を単位とするか、2～3軒とするか、非常にむずかしい問題である。本遺跡に近い海戸遺跡⁽⁸⁾は、地形的には平坦地であるが、古墳～平安時代の住居址が16軒検出されている。これらは同遺跡発見の弥生時代住居址と同じく、带状の「塊村的」集落を形成するが、時期毎には分散してまとまりがなく、その傾向はより下降するに従って激しくなるといわれている。また住居址が古墳時代前半期の大形から次第に中形化する現象も指摘され、それらが当時の政治的・社会的動向を背景にしていることも説明されている。本遺跡の位置する平安時代となると、すでに相

第IV章 調査遺跡

当広範囲な地域を一括するような政治権力が当然存在し、個々の住居の住民を直接支配する体制が完成している。この時代に本遺跡や経塚遺跡のように、礫が多く、条件の余り良くない小扇状地にまで住居を構えた人々はどのような背景を考えるべきであろうか。ちなみに本遺跡と同時期の小規模な集落が、例えば、八ヶ岳山麓の尾根東側に点々と存在する。こうした例も含めて追究される点であろう。

なお、3号址については、鉄製品や鉄滓、羽口などの遺物のみでなく、ピットの在り方や台石の存在等、単なる住居というより、鍛冶的な場をもつ住居としてよいであろう。ただこうした集落における一般住居址と本址の如き例などをまだ充分検討していないので、ここでは指摘するにとどめたい。また、本址からは緑釉陶器が1片のみではあるが出土している点、留意しなければならない。最近、県内でも出土例は増加しているといえどもまだ貴重品的な意味が強い。岡谷市関係の中央自動車道にかかる遺跡では今回が初めての出土であり、市内全域でも例が少ない。このほか、3号址では10個体近い羽釜の出土を注目すべきであろう。県内をみても一住居址からこれほど多数の羽釜の出土例はない。単なる住居址でない内容をもつ本址からの出土なのでなおさらである。このように3号址は鍛冶的遺構、緑釉陶器の存在、羽釜の多量など注目すべき在り方であるといえよう。鉄製品については集落内における需給関係などを解明するため、もう少し資料の集積を持ちたい。

焼土遺構は、調査時点でもその切り合い関係が複雑な上、ピットを伴うなど、その性格解明はむずかかった。本例ほど重複する類似類は余りないが、住居址から適当に離れた場所に位置する点からも屋外における炉址としてよいだろう。ただその場合使用目的が何であるか問題は残ろう。

この他、時期は決定できなかったが、相当深いローム層上まで及んだ段状遺構については、付近の古老の話しでは畑を作る場合でもこれ程深く掘ることはないという。同じような地形上にある志平遺跡では、段々畑にするため、扁平大形の石を土堤状に並べていたが、この場合は、明らかにロームに達し、30～50cm掘っていた。しかし、本遺跡の場合は段の間隔が70～100cmと狭く、畑とするに難がある。2回以上にわたる構築はあったらしいが、それにしても単なる畑とは考えられない。ちなみに、洩矢神社の背後にある関係上、それに結びつける遺構との解釈もあるが、やや根拠が薄い。

- 註1 戸沢充則 『岡谷市史』上巻(第一編) P174 1973
- 2 高林重水 『橋原遺跡発掘調査の概要』 『信濃考古』56 1979
岡谷市教委 『橋原遺跡—昭和53年度中央本線、岡谷・塩尻間線増設工事の施行に伴う長野県岡谷市橋原遺跡発掘調査報告書(概報)』 1979
- 3 註1に同じ 口絵図版22
- 4 岡村道雄 「ピエス・エスキューについて—岩手県大船渡市基石遺跡出土資料を中心として—」 『東北考古学の諸問題』 1976
- 5 註4に同じ
- 6 最近、竹岡俊樹氏は、サヌカイト製の剥片を使って使用痕のつき方を実験され、3種類の使用痕を報告しておられる(「香川県朱雀台第一地点における石刃技法の分析」『考古学研究』104 1980)。剥片の使用法とそれに伴う使用痕を観察した興味深い実験で、黒曜石でも実験する必要がある。
- 7 箕輪町教委 『大原第二・三遺跡緊急発掘調査報告書』 1979
- 8 飯田市教委 『清水遺跡』 1976
- 9 長野県教委 『中央道報告—伊那市その2—昭和48年度』 1974
- 10 〃 『中央道報告—諏訪市その1・2—昭和48年度』 1979
- 11 〃 『中央道報告—茅野市原村その2—昭和50・51年度』 1979

- 12 山梨考古学研究会 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・明野・葺崎地区内—』
1975
- 13 橋崎彰一 『日本の陶磁 古代・中世編 2—三彩・緑釉・灰釉—』 中央公論社 1976
- 14 宮田村教委 『中越遺跡—昭和43年度緊急発掘調査概報』 1969、『同、44年度』 1970、中越遺跡調査団「中越—中越遺跡第5次発掘調査速報』宮田村教委 1976
- 15 長野県中央道遺跡調査団 『長野県諏訪郡原村阿久遺跡発掘調査概報—昭和51・52年度』 1978
- 16 長崎元広 「中部地方における縄文前期の竪穴住居」 『信濃』31—2 1979
- 17 神田五六 「縄文諸磯期に於ける低地性集落と高地性集落」 『信濃』4—9 1952
- 18 註1に同じ P 289～291

6号住居址



その他



0 5 10cm

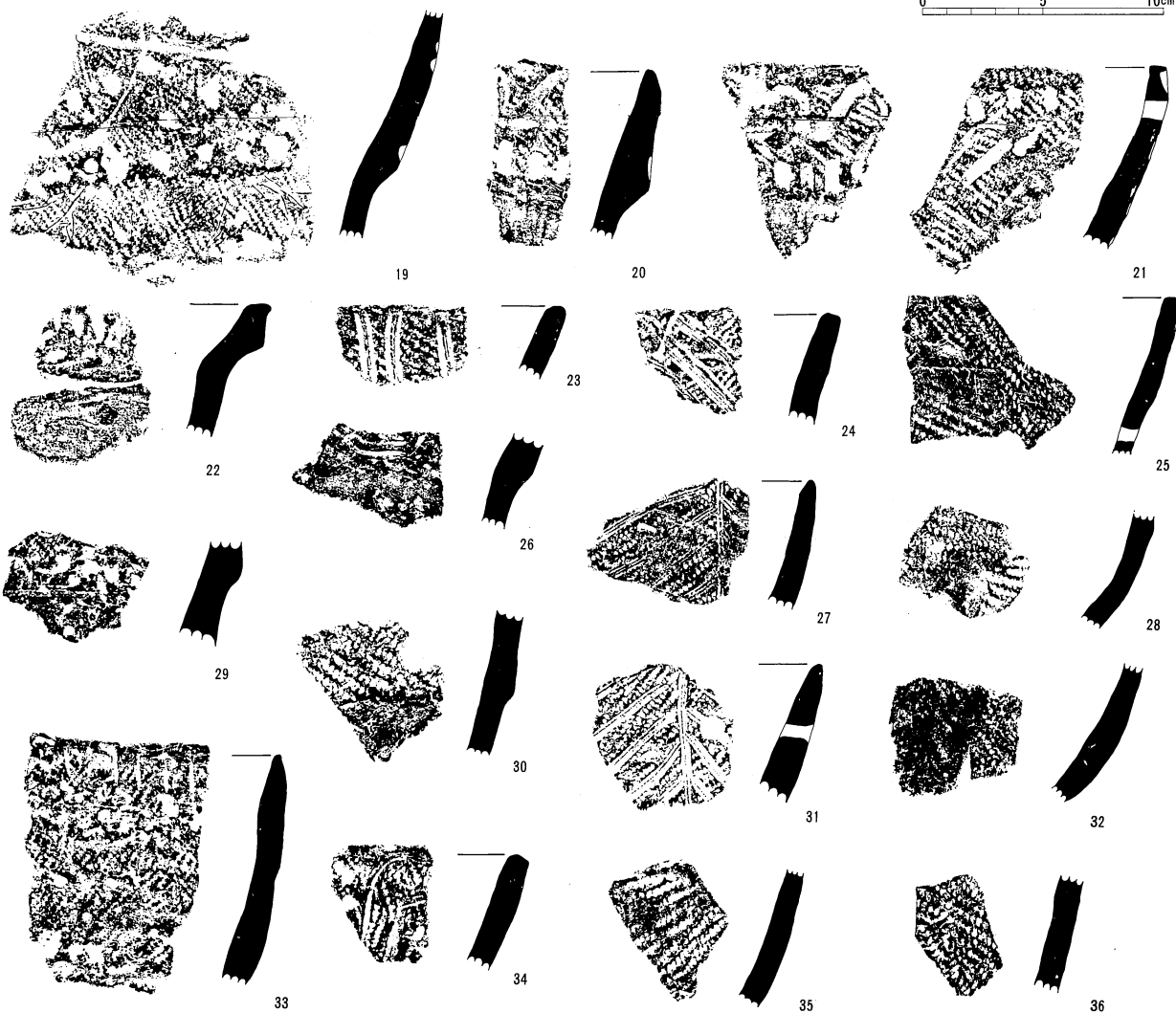


図17 洩矢遺跡縄文時代土器拓影図（6号址出土・I群）（1：3）

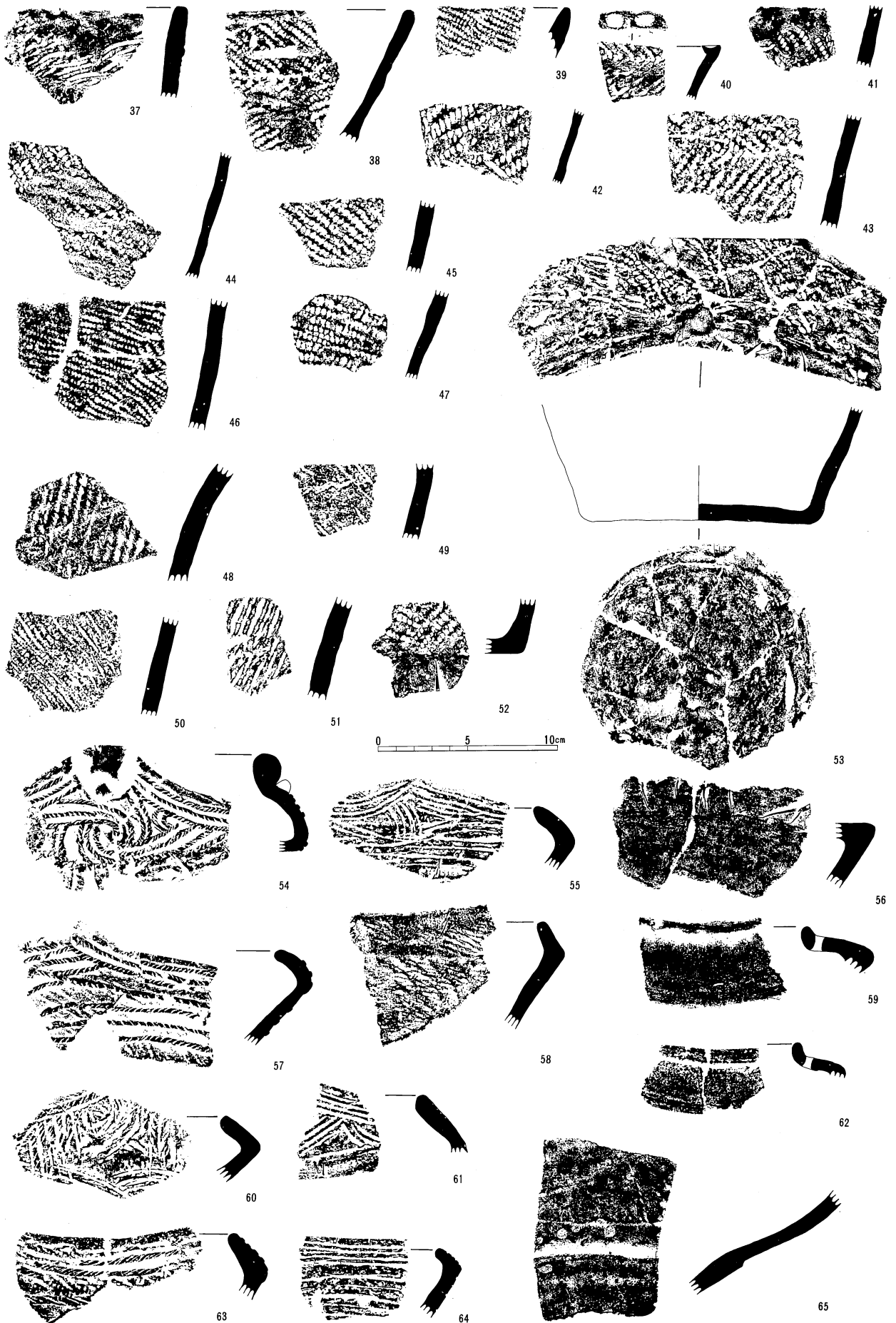


图18 洩矢遺跡縄文時代土器拓影图 (II群) (1:3)



図19 洩矢遺跡縄文時代土器拓影図(Ⅱ・Ⅲ群)(1:3)



図20 洩矢遺跡縄文・弥生時代(149)土器拓影図(Ⅲ・Ⅳ群・他)(1:3)

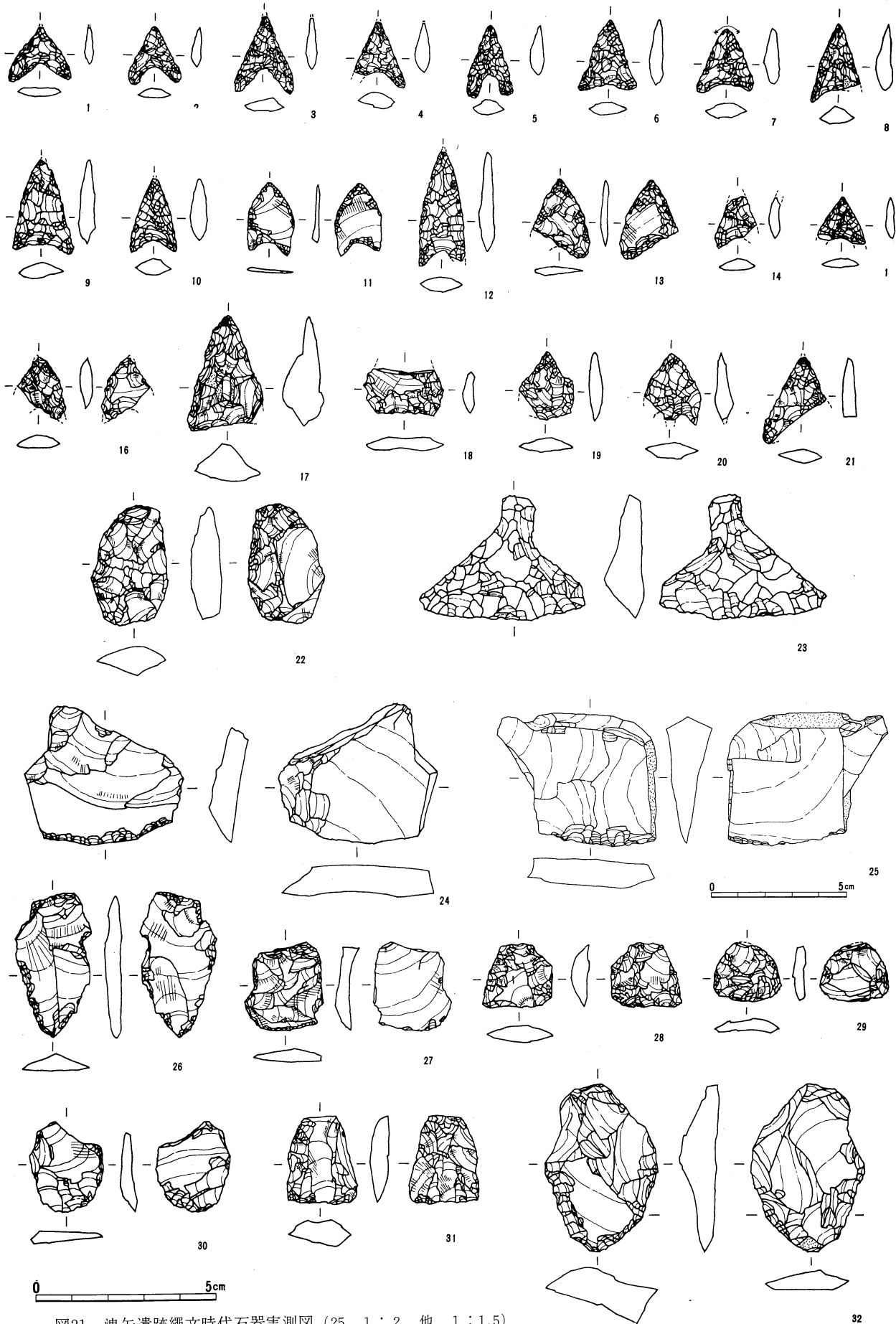


図21 洩矢遺跡縄文時代石器実測図 (25 1:2、他 1:1.5)

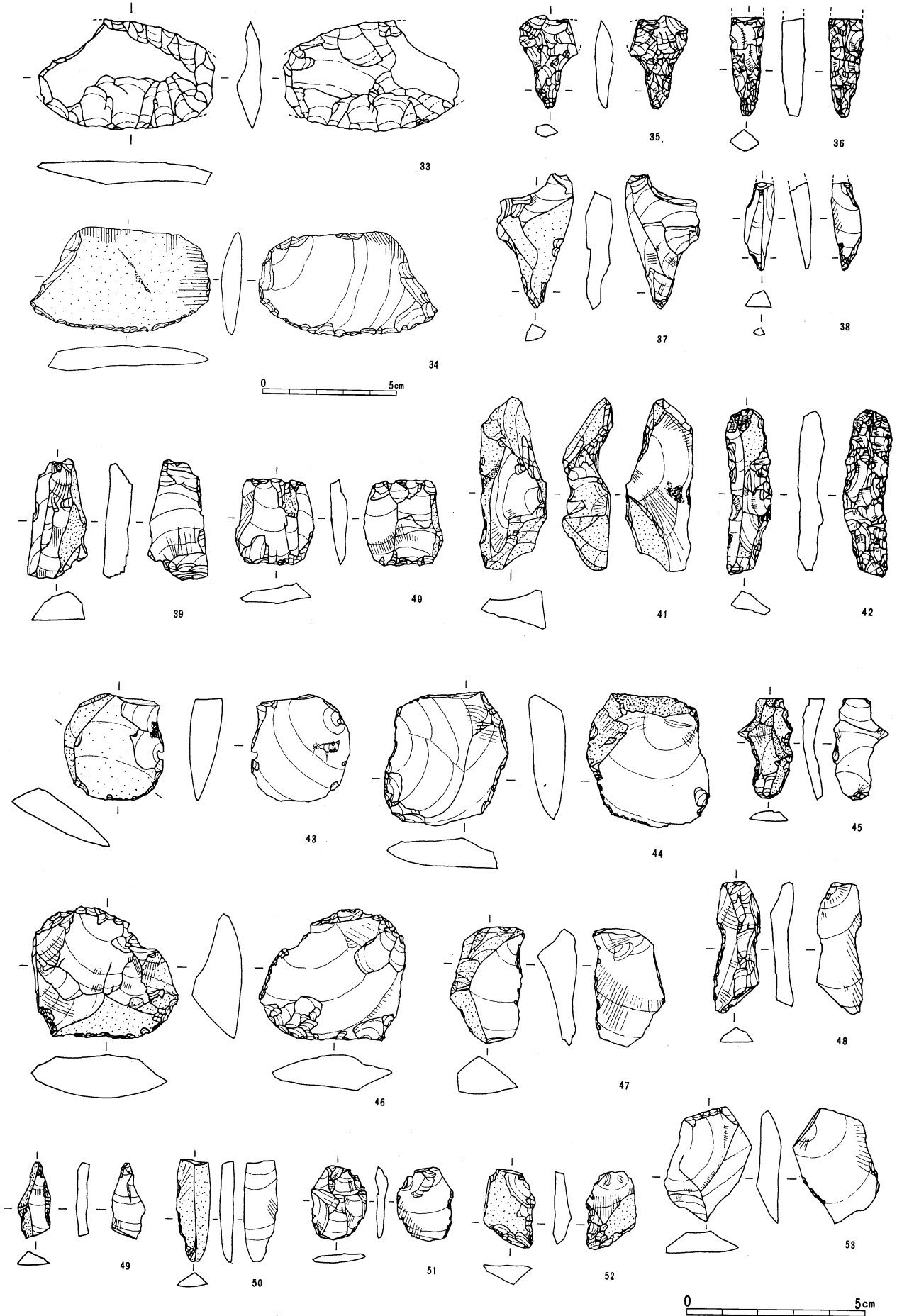


図22 洩矢遺跡縄文時代石器実測図 (34 1:2、他 1:1.5)



図23 洩矢遺跡縄文時代石器実測図(1:1.5)



図24 洩矢遺跡縄文時代石器実測図(95~98 1:2 他 1:4)

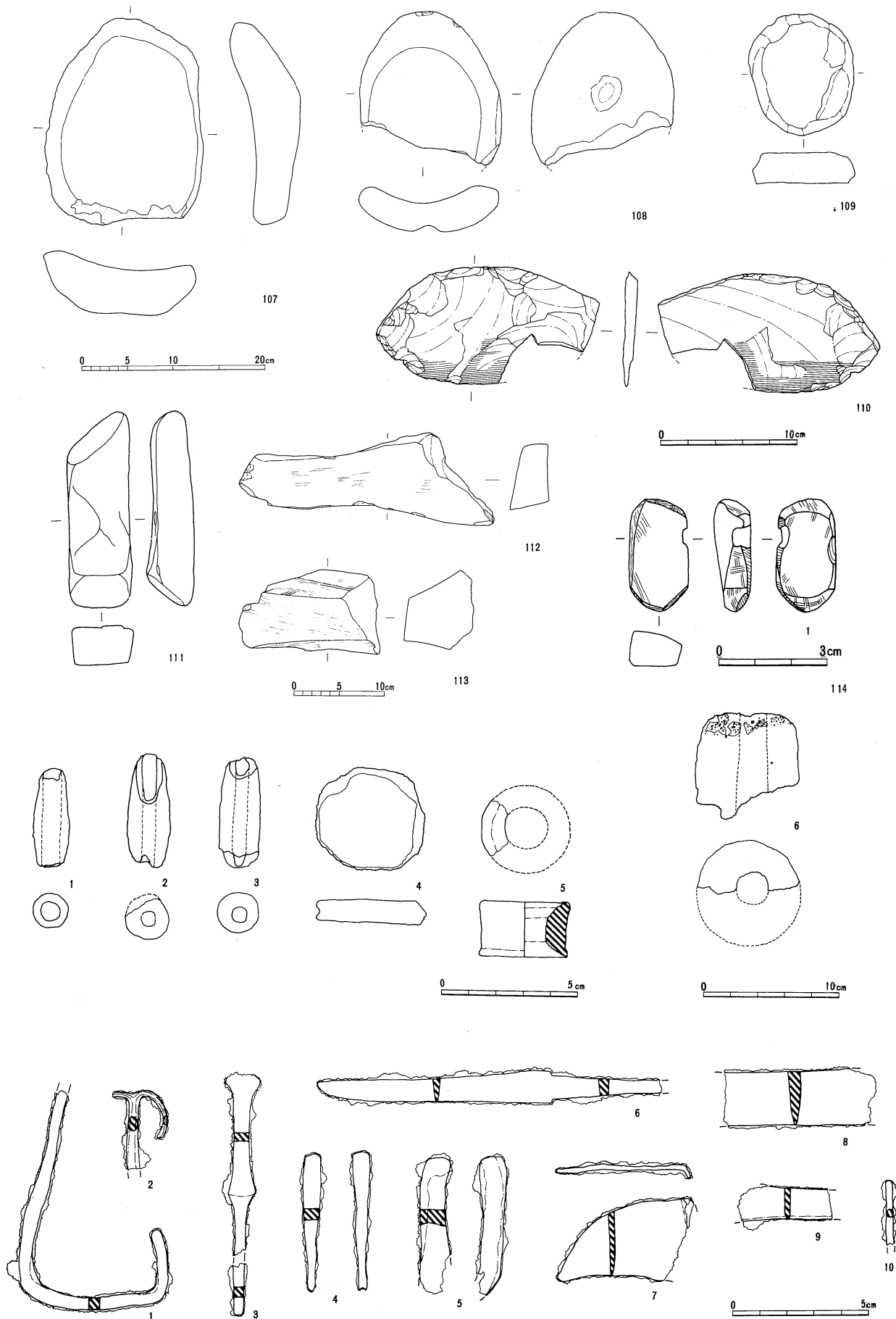
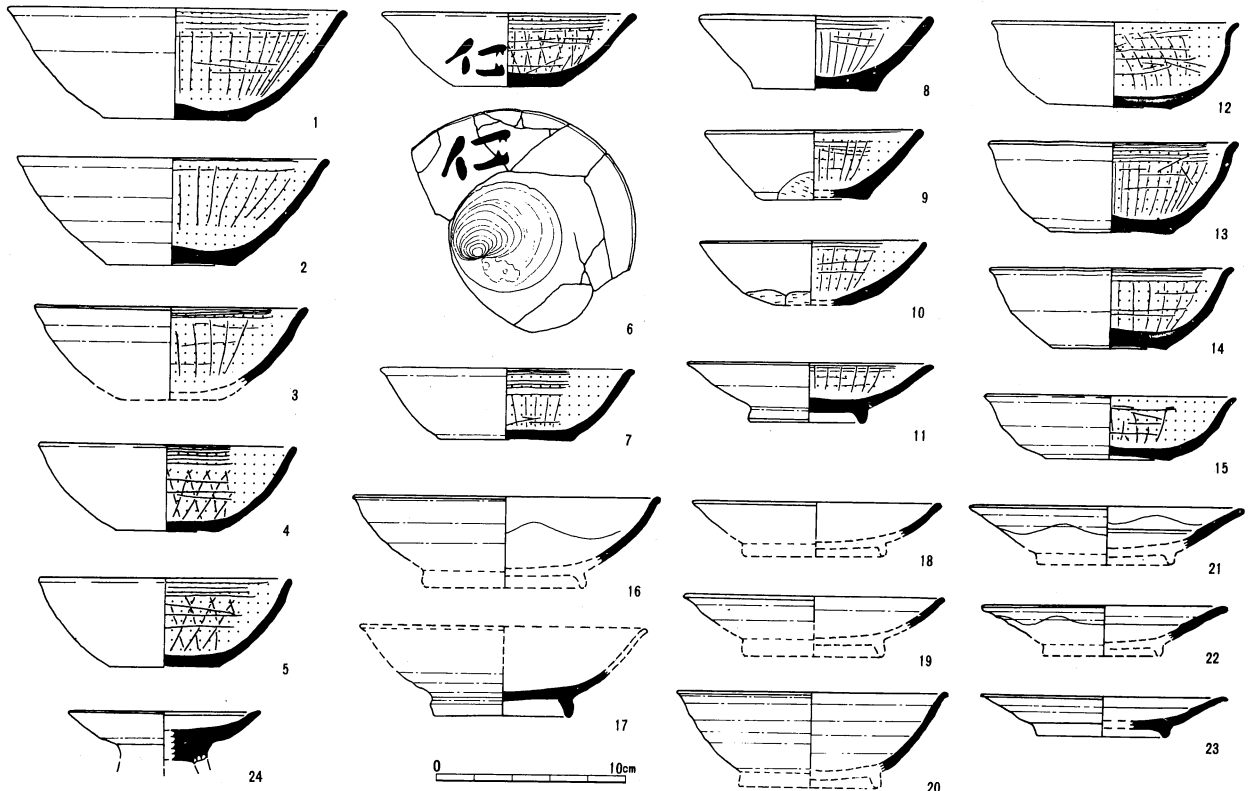
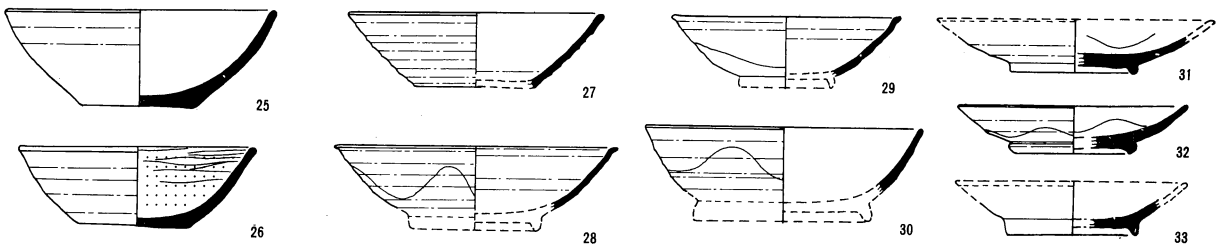


図25 洩矢遺跡繩文・弥生・平安各時代石器・石製品・土製品・鉄製品実測図

1号住居址



2号住居址



3号住居址

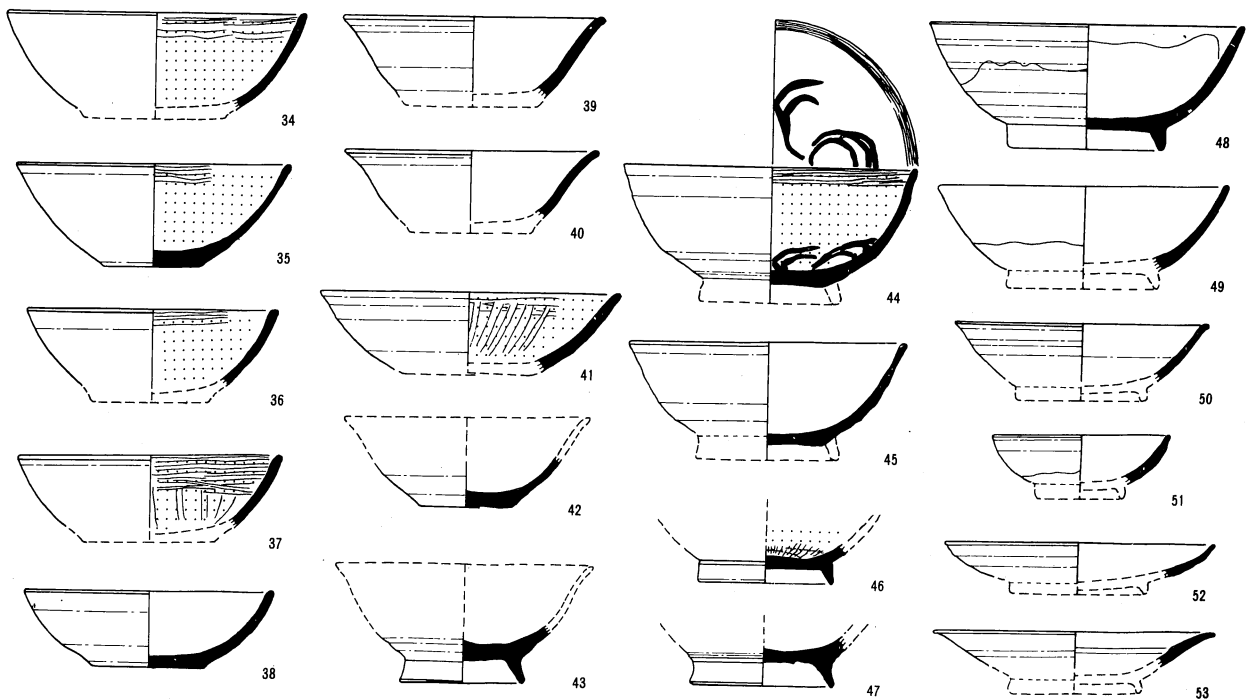


图26 洩矢遺跡平安時代土器実測図(1:4)

第IV章 調査遺跡

3号住居址

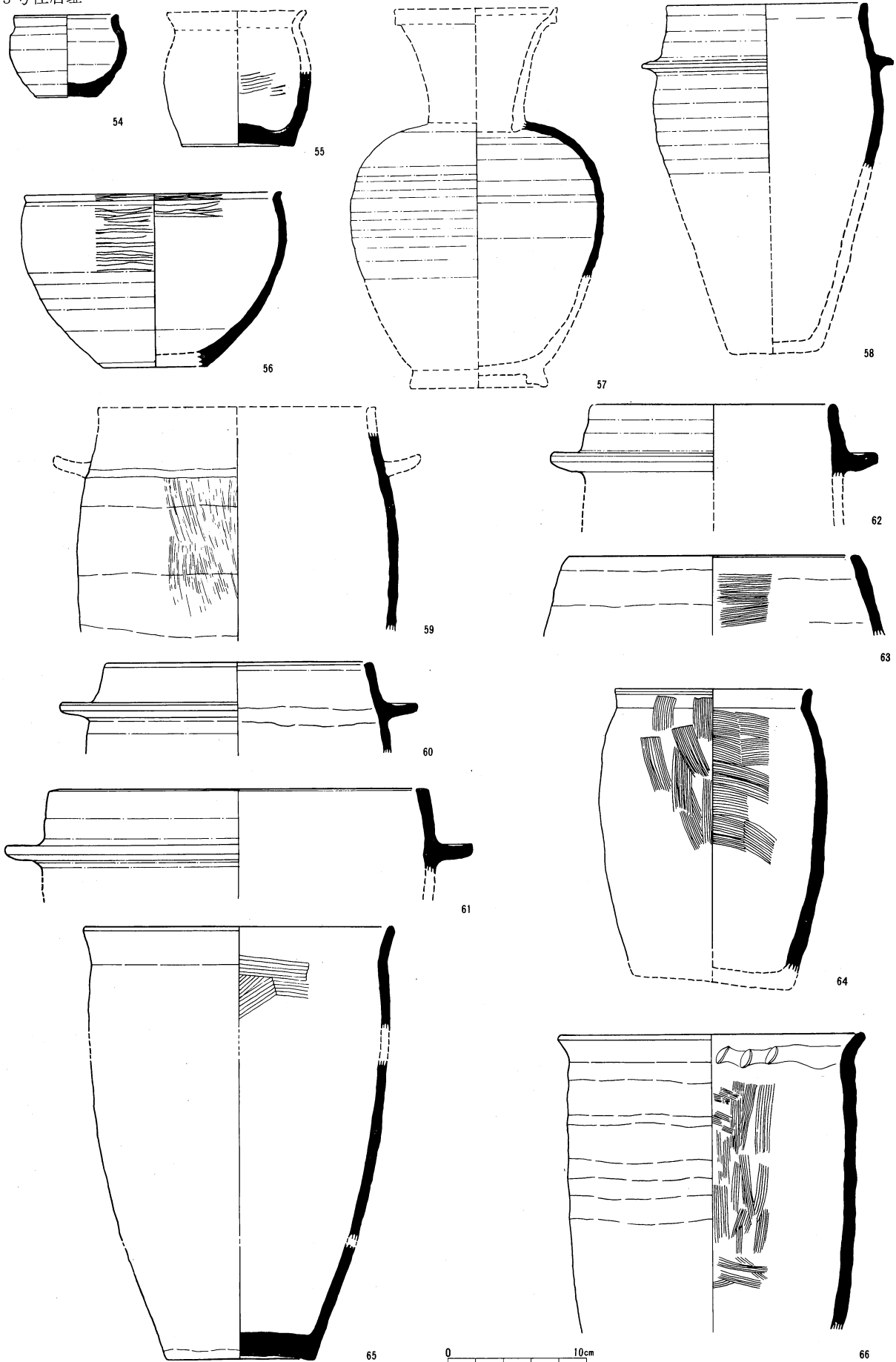
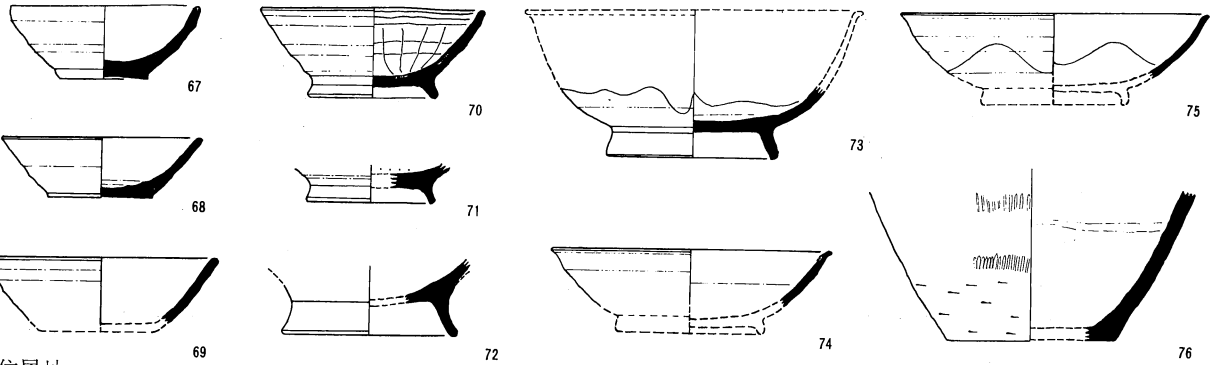
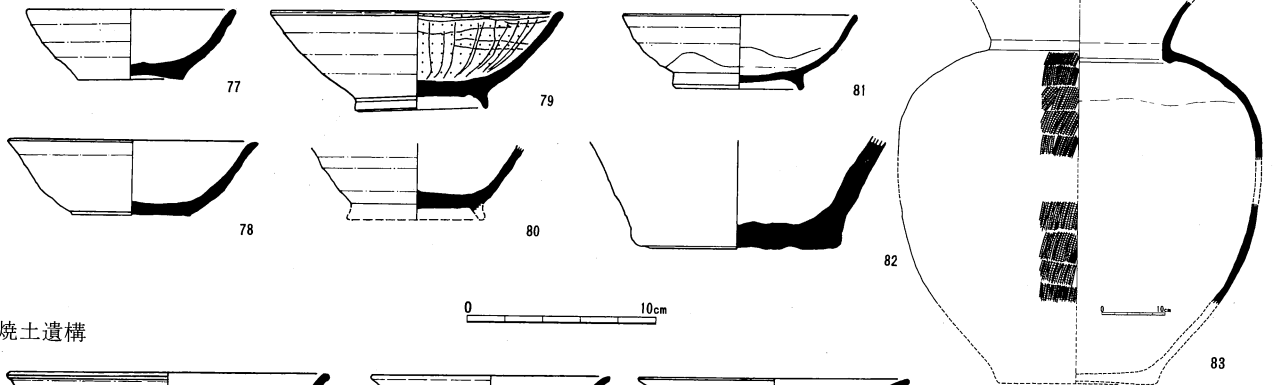


図27 洩矢遺跡平安時代土器実測図 (1:4)

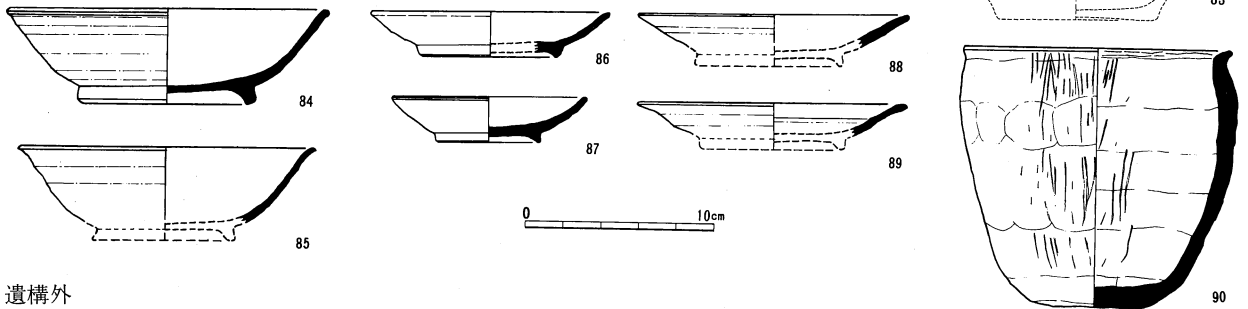
4号住居址



5号住居址



焼土遺構



遺構外

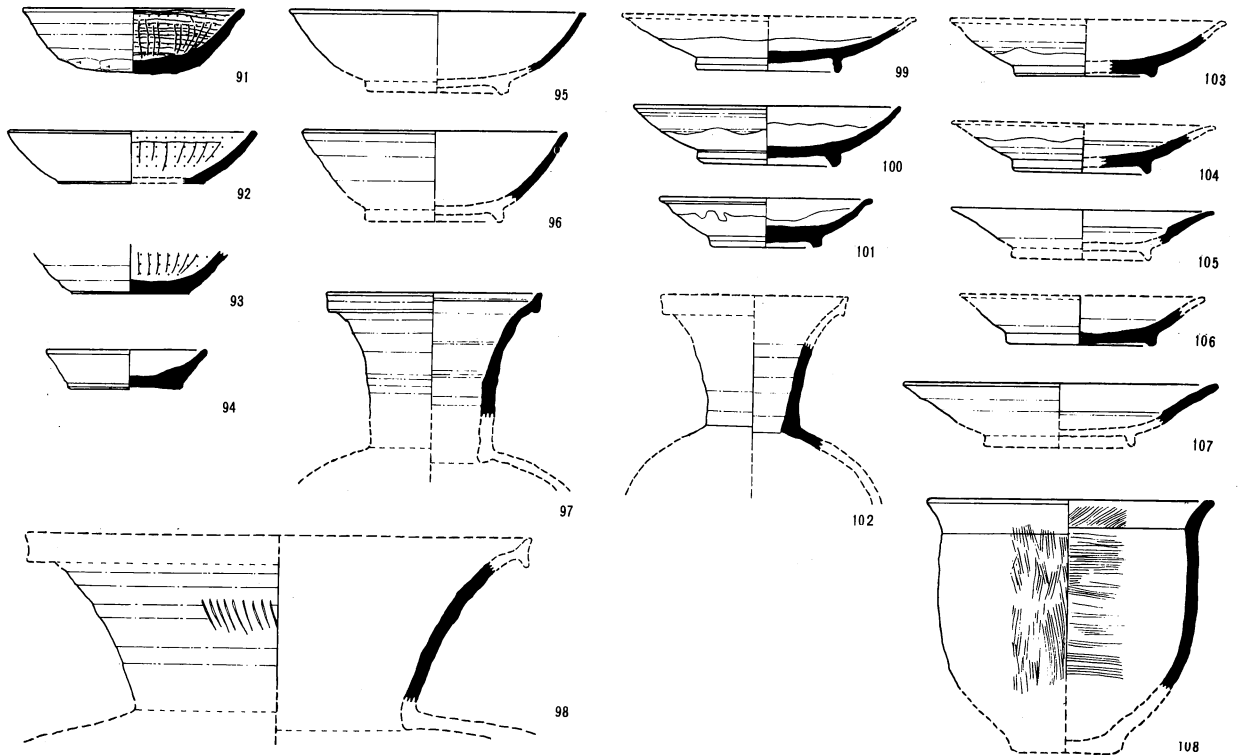


図28 洩矢遺跡平安時代土器実測図(1:4)

第IV章 調査遺跡

表2 洩矢遺跡縄文・平安時代石器一覧

石鏃

図番号	登録番号	長さ mm	幅 mm	最大厚mm	重さ g	石 質	分類	欠 損 部	備 考
20	1	(20)	16	6	(1.2)	チャート	IV	c, d	
1	2	(15)	18	2.5	(0.4)	黒曜石	Ia	a	
11	3	20	13	2	0.4	"	Ig	—	
8	4	21.5	(12.5)	4.5	(0.7)	"	Ie	c	
10	5	(20)	13	4.5	(0.8)	チャート	Ig	a	
3	6	(21)	16.5	3.5	(0.7)	黒曜石	Ib	a	
4	7	(18)	(14.5)	4	(0.6)	"	Ib	a, c	
12	8	(32)	(13)	4	(1.5)	チャート	Ig	a, c	
2	9	16	14.5	2.5	0.3	黒曜石	Ib	—	
5	10	20	13	4	0.5	"	Ic	—	
13	11	(22)	(16)	2.5	(0.6)	"	Ig	a, c	
15	12	(13)	(13)	2.5	(0.3)	"	I	c×2	
14	13	(14)	(11.5)	3	(0.3)	"	I	a, c×2	
16	14	(17)	(13.5)	3.5	(0.5)	"	I	a, c×2	
6	15	20	16	3.5	0.8	"	Id	—	
7	16	18	16	4.5	0.9	"	Ie	—	尖頭部磨耗
9	17	(26)	17	4.5	(1.4)	チャート	If	a	
17	18	32	(21)	11	(4.5)	黒曜石	IIa	c	
18	19	(13)	(22.5)	4	(1.1)	"	IIb	a	
19	20	19	(15)	4	(0.8)	"	III	c	
21	21	24	(17)	4	(0.9)	"	不明	b~c	

(。分類は洩矢遺跡独自のものである。
 。欠損部の記号…… a.尖頭部 b.側辺部 c.脚部 d.茎部)

その他

図番号	登録番号	器 種	長さ mm	幅 mm	最大厚mm	重さ g	石 質	備 考
22	22	尖頭器状石器	33	21	8	5.8	黒曜石	線状痕
23	23	石 匙	34.5	46.5	11	11.0	チャート	
28	24	スクレイパー	18	20	5	1.6	黒曜石	
29	25	"	(16)	18.5	3	(1.1)	"	
24	26	"	38.5	44	8	16.7	珪質頁岩	
33	27	"	31	(49)	7.5	(10.1)	砂質粘板岩	
30	28	"	(25)	21	4	(1.7)	黒曜石	
31	29	"	24	19.5	7	3.2	"	
32	30	"	46.5	31.5	11	16.0	チャート	
25	31	"	49	59.5	17	45.2	"	
26	32	"	40	21	4.5	3.5	黒曜石	
27	33	"	24.5	22	5.5	2.5	"	
34	34	"	39	67	8	26.5	緑色片岩	線状痕
	35	"	26	25	5	3.3	黒曜石	
	36	"	22	20	8	3.1	"	
36	37	石 錐	(28)	10	5.5	(1.6)	"	つぶれ, 磨耗, 線状痕

図番号	登録番号	器種	長さmm	幅mm	最大厚mm	重さg	石質	備考
35	38	石錐	26.0	(16)	5.5	(1.7)	黒曜石	
38	39	"	(24.5)	8.5	5	(1.0)	"	
37	40	"	38	20.5	8	5.2	"	
42	41	不定形石器	47	13.5	7	4.4	"	
40	42	ピース・エスキーユ	24	22.5	5	2.7	"	
	43	"	23	16.5	6	2.2	"	
	44	"	23.5	19.5	8	3.3	"	
39	45	"	34.5	16	10	4.7	"	
	46	"	21	35	10	6.2	"	
	47	"	32.5	15.5	9	4.3	"	
	48	"	21	18.5	7.5	3.1	"	
	49	"	34.5	17.5	7	4.0	"	
	50	"	21.5	14.5	7	2.5	"	
	51	"	38	17.5	9	3.9	"	背つぶし
41	52	"	48.5	19	13	9.8	"	

使用痕のあるもの

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅mm	最大厚mm	重さg	石質
43	1	I Ba	30	27.5	10.5	8.4	黒曜石
	2	I Ba	28	15	3	1.3	"
	3	I Ba	23.5	31	7.5	3.9	"
	4	I Ba	36	25	9	5.7	"
	5	I Ba	27	20.5	6	2.4	"
	6	I Ba	18.5	24	6.5	2.6	"
57	7	I Bb	27	22	3.5	1.5	"
	8	I Bb	19	15	3.5	0.9	"
	9	I Bb	16.5	28	4	1.5	"
	10	I Bb	37	22	8	5.3	"
	11	I Bb	38	17.5	10.5	6.5	"
	12	I Bb	34.5	15.5	7	3.1	"
	13	I Bb	22.5	18.5	8	2.5	"
	14	I Bb	26	19	5.5	1.8	"
	15	I Bb	25	20	3.5	1.5	"
	16	I Bb	14	21	4	0.7	"
	17	I Bb	25.5	18	6	2.7	"
	18	I Bb	34	12	7.5	3.1	"
	19	I Bb	27	16.5	5	1.1	"
	20	I Bb	17	21.5	4	1.4	"
	21	I Bb	12.5	23	3.5	0.9	"
	22	I Bb	12	20.5	3.5	1.2	"
	23	I Bb	20	15	2.5	0.7	"
	24	I Bb	15.5	17.5	3	0.6	"
66	25	I Bc	44	24	13.5	13.7	"
	26	I Bc	18	28.5	2.5	1.3	"

第IV章 調査遺跡

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅 mm	最大厚mm	重さg	石質
	27	I Bc	19	19	4	1.6	黒曜石
59	28	I (Bb+2Bc)	26.5	29	6	5.2	〃
	29	I Bc	20	20.5	3.5	1.0	〃
	30	I Bc	20	17.5	5	1.7	〃
	31	I Bc	12.5	16	2.5	0.6	〃
	32	I Bb	18	25	7	2.6	〃
	33	I Bc	16	29	3	1.3	〃
	34	I Bc	26	38	12	9.1	〃
65	35	I (2Bc)	19	14.5	3	0.9	〃
	36	I Bc	12	22	4	0.9	〃
	37	I (2Bc)	13.5	21	4	1.1	〃
	38	I (Ba+Bc)	39	21	10	6.9	〃
	39	I (Ba+Bb+2Bc)	13	26.5	3	0.8	〃
	40	I (2Bb+2Bc)	14	27.5	10	2.6	〃
	41	I (Bb+Bc)	13.5	40.5	12	3.6	〃
	42	I (3Bb)	23	25	6	2.4	〃
	43	I (Bb+2Bc)	22	21.5	4.5	1.8	〃
	44	I Bb	32	19	7.5	2.9	〃
	45	I (2Bb+Bc)	31.5	19.5	5	2.7	〃
	46	I (Bb+Bc)	18	19.5	5	1.8	〃
	47	I (Ba+Bb)	27	20.5	5	2.4	〃
	48	I (Bb+Bc)	17.5	22.5	4	1.3	〃
71	49	I (Ca+Cb)	30.5	20	6.5	2.5	〃
	50	I (Ba+2Bb)	17	11.5	2	0.5	〃
	51	I (Ba+Bb)	29	14	5.5	1.7	〃
	52	I (Bb+Bc)	49.5	31	9	10.3	〃
	53	I (2Bc)	16	27	7	2.2	〃
	54	I (Bb+Bc)	32.5	10.5	5	1.2	〃
	55	I Ba	34.5	11.5	7	1.8	〃
	56	I (3Bb)	18	20.5	5.5	0.9	〃
44	57	I (2Ba+2Bc)	38	35	10	13.5	〃
	58	I (Bb+2Bc)	14.5	18.5	5	1.5	〃
	59	I (2Bc)	28	29.5	11	5.4	〃
	60	I (2Bc)	17.5	25	5	1.7	〃
67	61	I (2Bc)	21	14.5	2.5	0.7	〃
	62	I (Ba+Bb+Bc)	24	28	12	5.6	〃
62	63	I (Ca+Bb+Bc)	22	21	3	1.3	〃
46	64	I (Ba+Bb+Bc)	37	41	13	18.0	〃
64	65	I (3Bb+Bc)	19.5	31	5	2.4	〃
	66	I (Ba+2Bb)	29	23.5	8	4.3	〃
	67	I (2Ba+2Bb)	30	33.5	8.5	6.6	〃
50	68	I (Ba+2Bb+Bc)	28.5	9.5	4	1.0	〃
45	69	I (2Ba+3Bb+Bc)	28	15.5	4.5	1.7	〃
	70	I (2Bb+Bc)	28	15.5	5	1.9	〃

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅 mm	最大厚mm	重さg	石質
54	71	I (Ba+2Bb)	35.5	14	7	2.9	黒曜石
	72	I (2Bb+2Bc)	14.5	15.5	2	0.5	〃
	73	I (4Bb)	19	14	3	0.5	〃
	74	I (2Bb)	18.5	12.5	2	0.4	〃
58	75	I (2Bb+3Bc)	36	29	7	7.3	〃
	76	I (Bb+Bc)	34.5	35	11	7.4	〃
60	77	I (Bb+2Bc)	19.5	30.5	4	2.0	〃
	78	I (Ba+Bb+Bc)	40	35	17	13.0	〃
	79	I (2Bb)	39.5	22.5	11	5.8	〃
53	80	I (Ba+Bc)	32	24	7	4.8	〃
	81	I (Ba+Bb+Bc)	24.5	14	4	1.1	〃
	82	I (Bb+Bc)	26	24.5	4	2.2	〃
	83	I (Bb+Bc)	18	13	4.5	0.8	〃
63	84	I Bb	21.5	21	5	1.5	〃
47	85	I (Ba+Bb+Bc)	33	21	11.5	5.9	〃
	86	I (Bb+Bc)	23.5	11.5	4.5	1.0	〃
	87	I (Bb+Bc)	30	17	6	1.9	〃
61	88	I (3Bb+Bc)	15.5	27.5	3	1.0	〃
	89	I (Bb+Bc)	14.5	26.5	3	1.3	〃
	90	I (Bb+Bc)	18	11	3	0.5	〃
	91	I (Bb+Bc)	33	12	7	1.5	〃
	92	I (Bb+2Bc)	18	15	3	0.8	〃
69	93	I (Bc+Ca)	29	24	8	3.2	〃
70	94	I Cb	24.5	18	3	1.2	〃
52	95	I (Ba+Cb)	22	14.5	5	1.6	〃
	96	I Cc	33.5	14.5	6	2.9	〃
	97	I (Bb+Cb)	23	23	5.5	2.5	〃
68	98	I (Ca+Cc)	14	14	2	0.4	〃
	99	I (Ba+2Bb+Bc+2Ca +Cc)	21	15	3.5	0.6	〃
	100	I (2Bc)	21.5	17	4	0.8	〃
	101	I Bc	22.5	25	4	2.0	〃
	102	I (3Bc)	17.5	17	3	0.6	〃
51	103	I (Ba+2Bb+Cb+2Cc)	21	15.5	3.5	1.0	〃
55	104	I (4Bb+5Bc)	32	21.5	7	4.1	〃
	105	I (Bb+3Bc)	39.5	14	9	7.4	チャート
	106	I (Ba+Bb+Bc)	30	20	13	5.5	黒曜石
56	107	I Bb	27.5	28.5	8	4.4	〃
	108	II Bc	38	21.5	9	7.4	〃
	110	II (Ba+2Bb+Bc)	48	22.5	16	13.0	〃
	111	II (Ba+Bb)	59	25	11	8.7	〃
	112	II (Bb+2Bc)	30	39	11	10.4	〃
	113	II (Bb+Bc)	31	30.5	11.5	8.0	〃
76	114	I (Ba+Bc)	31	20	10.5	6.9	〃

第IV章 調査遺跡

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅 mm	最大厚mm	重さ g	石質
	115	II Ba	29	25.5	10	5.0	黒曜石
	116	II Bc	24	19.5	10	4.1	''
	117	II Ba	18	19.5	8	2.2	''
	118	II (2Bb)	22.5	15	7	1.9	''
	119	II Bc	37	18.5	5	3.1	''
	120	II (2Ba + Bc)	30	20.5	6	3.8	''
	121	II Bb	25.5	21	15	6.6	''
74	122	II (Bc + Cc)	28	20.5	6.5	3.8	''
	123	II (2Bc)	19.5	20	11	2.9	''
	124	II Bc	29	22.5	11	4.3	''
	125	II (3Bc)	17	33	12	6.5	''
	126	II (Ba + 2Bc)	30.5	17.5	16	4.9	''
	127	II Bc	18.5	22	6.5	2.7	''
	128	II Bc	31	21.5	9	4.6	''
	129	II (2Ba)	19	16	6	1.7	''
	130	II (Bb + 3Bc)	29.5	23	10.5	4.4	''
	131	II (2Bb)	18.5	26	10	3.7	''
	132	II Bc	18	16	5	1.2	''
75	133	II Ba	16	15	6	1.6	''
	134	II Bb	13.5	29.5	8	2.2	''
	135	II (2Ba + Ca)	38	32	16	15.6	''
	136	II (3Bc)	25	21	6	3.0	''
72	137	II (Bb + Ca)	21	25	7	3.9	''
	138	II (2Bc)	25.5	17.5	8	3.4	''
73	139	II Cc	48	34	20	27.9	''
	140	I 2Bc	33	17	7	3.1	''
	141	III (Ba + Bc + Ca + Ce)	41	33.5	18	21.5	''
	142	III Bb	46	26	28	18.5	''
77	143	III (Bb + Ca + Cc)	36	29.5	15.5	12.6	''
48	144	I (Ba + Bb)	37	13	6	2.7	''
49	145	I (Ba + 2Bb)	21	9.5	4	0.6	''

打製石斧

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅 mm	刃幅mm	最大厚mm	重さ g	石質	欠損部位	磨耗部位
78	1	IC	121	64	65	19	107	緑色片岩		側縁部
81	2	IIα B	105	61.5	57	21.5	158	硬砂岩		
79	3	Iα C	(81)	48	47	11	(51)	砂岩	頭部	側縁部, 刃部
80	4	II B	83	43	41	15	67	緑色片岩		側縁部, 刃部~胴部
87	5	III B	118	38	33	8	55	''		刃部
82	6	IIα B	140	55	51	10	97	珪質砂岩		
	7	II B	96	46	38	15	78	緑色片岩		
	8	II B	(94)	(53)	46	17	(90)	砂岩	頭部~刃部	刃部
83	9	IIα C	83	46	44	10	53	''		側縁部, 刃部
	10	IIα C	109	38	25	18	88	砂岩		

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅 mm	刃幅mm	最大厚mm	重さ g	石質	欠損部位	磨耗部位
	11	ⅡB	100	42	38.5	21	109	砂岩		
84	12	Ⅱα C	92	41	40	18.5	81	珪質砂岩		側縁部, 刃部
89	13	Ⅲα C	112	41	41	17	98	緑色片岩		刃部
85	14	Ⅲα A	92	41	37	15	62	砂岩		刃部
86	15	ⅢB	91	48	41.5	12	63	粘板岩		
88	16	B	(63)	(52)	49	19	(79)	硬砂岩	頭部~胴部	側縁部, 刃部
	17	Ⅲα	(99)	(66)	不明	(11)	(170)	珪質砂岩	刃部	
	18	B	(74)	(47)	45	(16)	(70)	砂岩	頭部~胴部	
	19	C	(73)	(47)	(45)	16.5	(67)	緑色片岩	"	
	20	不明	(58)	41	41	11	(31)	砂岩	"	
	21	B	(45)	(54)	49	(15)	(30)	緑色片岩	"	側縁部
	22	B	(56)	(49)	43	(15)	(44)	"	"	
	23	B	(62)	(33)	35	11	(25)	"	頭部~片側辺部	刃部

αは側縁に抉りを持つもの

横刃型石器・粗大剥片石器

図番号	登録番号	分類	長さmm	幅 mm	刃幅mm	最大厚mm	重さ g	石質	備考
92	1	ⅡB	45	101	46	8	45	緑色片岩	
91	2	ⅡA	47	(65)	51	5.5	(22)	"	
90	3	I B	50	82	52	5	21	"	刃部にノッチあり
93	4	ⅣA	35.5	85	86	6.5	21	砂岩	
	5	I B	33.5	102	62	12	41	粘板岩	
	6	ⅣA	70	116	40	15	130	砂岩	
	7	ⅡB	61.5	127	110	34	315	"	
	8	ⅡA	56	54	52	6	22	緑色片岩	ノッチあり
94	9		72	95	85/59	14	118	硬砂岩	粗大剥片石器

磨製石斧

図番号	登録番号	長さmm	幅 mm	刃幅mm	最大厚mm	重さ g	石質	欠損部位	備考
96	1	(52)	41	38	15	(44)	蛇紋岩	頭部~胴部	定角式
98	2	52	29	28	10	28	"	————	定角式
97	3	57	27	25	9.5	(23)	緑色片岩	頭部の一部	
95	4	57	36	36	11	34	"	————	
99	5	(81)	45.5	41	23	(144)	"	頭部	
	6	(53)	(23)	不明	(11)	(41)	"	胴部~刃部	

その他

図番号	登録番号	器種	長さmm	幅 mm	最大厚mm	重さ g	石質	備考
	1	礫器	(102)	(77)	(58)	(501)	塩基性安山岩	
100	2	敲打器	115	43	35	234	安山岩	
	3	"	144	71	60	834	塩基性安山岩	胴部磨耗, 先端敲打
101	4	磨石	(99)	(58)	(47)	(260)	砂岩	
	5	"	(134)	74	45	(900)	輝石安山岩	
	6	"	107	80	41	549	砂岩	
102	7	特殊磨石	90	58	58	393	輝石安山岩	

第IV章 調査遺跡

図番号	登録番号	器種	長さmm	幅 mm	最大厚mm	重さ g	石質	備考
	8	凹石	152	86	45	835	輝石安山岩	敲打痕, 磨耗
	9	"	85	67	25	267	"	
103	10	"	98	111	39	488	"	
	11	"	98	74	26	158	"	
104	12	"	110	58	50	164	"	特殊磨石
	13	"	67	40	32	118	"	
	14	"	118	63	36	323	"	
105	15	"	110	40.5	28	172	緑色片岩	先端磨耗
106	16	"	145	76	42	731	輝石安山岩	敲打痕, 磨耗
107	17	石皿	226	174	57		"	
108	18	"	(167)	157	37	915	"	裏面に凹み
109	19	?	133	115	40	877	"	平石
	20	?	149	121	49	1,360	"	"
112	21	砥石	280	101	40	1,270	頁岩	第3号住居址(平安時代)
113	22	"	(154)	(93)	(80)	980	砂岩	" "
111	23	"	107	34	26	160	"	第2号住居址(平安時代)
	24	凹石	(110)	(89)	(50)	(385)	安山岩	
110	25	石庖丁	64	123	8	65	砂石	弥生時代, 刃部研磨

表3 洩矢遺跡平安時代金属製品一覧

図番号	番号	出土地点	製品名	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
6	1、	1号住居址	刀子	(12.6)	1.15	0.3	(15.2)	ほぼ完存 茎尻欠損 両関造り
2	2	3号住居址		(2.8)	0.45	0.5	(3.5)	
1	3	" 床	釘?	(14.7)	0.5	0.5	(15.4)	カギ状
5	4	"		(5.0)	1.05	0.55	(10.0)	
3	5	" 南壁にはりつく	鎌	(8.5)	1.25	0.3	(12.2)	刃先・茎中央部欠損
7	6	" ピット内	鎌	(4.7)	2.95	0.1	(9.2)	
9	7	" カマド内	紡錘車の軸	(3.35)	1.15	0.1	(3.2)	板状
10	8	" カマド内		(2.25)	0.2φ		(0.6)	
	9	"						棒状 断面丸形
	10	AT60・61・62	丸釘	9.6	0.4φ		8.25	
	11	"	木捻子	4.3	0.75φ		8.0	
	12	AU54	キセルの吸口	7.6	0.9φ~ 0.45φ		8.5	
	13	"	紡錘車の軸	(2.3)	0.6	0.5	(1.25)	
	14	"		(7.85)	0.7φ		(11.0)	断面丸形
	15	"		(4.5)	0.8	0.7	(4.25)	
4	16	"		(5.0)	0.6	0.5	(9.0)	断面角形
8	17	AX~BA56	紡錘車の軸	(5.5)	0.2	0.5	(19.5)	板状
	18	"		(20.8)	0.4φ		(22.0)	U字状

表4 洩矢遺跡平安時代土器一覽

() は推定復元値

図 番号	遺構	種別	器種	技法	口 径 cm	器 高 cm	底 径 cm	径 指 高 数	備 考
1	1住	Ko	杯C I	2 a	17.8	5.9	7.5	33.1	
2	"	Ko	杯C I	2 a	16.4	5.7	6.8	34.8	
3	"	Ko	杯C II	—	14.4	—	—	—	
4	"	Ko	杯C II	2 a	13.6	4.6	5.4	33.8	
5	"	Ko	杯C II	2 a	14.3	4.7	5.8	32.9	
6	"	Ko	杯C II	2 a	13.4	3.9	5.8	29.1	墨書「仁」
7	"	Ko	杯C II	2 a	13.4	3.8	7.0	28.4	
8	"	H	杯C II	2 a	12.4	3.9	6.6	31.5	
9	"	Ko	杯C III	2 a	11.6	3.7	5.6	31.9	底部立ち上り付近, 手持ちヘラケズリ
10	"	Ko	杯C II	2 a	12.0	3.3	4.2	27.5	底部立ち上り付近, 手持ちヘラケズリ
11	"	Ko	皿B II	2 a	13.0	(3.2)	(6.4)	(24.6)	
12	"	Ko	杯C II	2 a	13.0	4.6	6.5	35.4	外面に漆状の炭化物付着
13	"	Ko	杯C II	2 a	13.2	4.8	6.5	36.4	
14	"	Ko	杯C II	2 a	12.9	4.3	6.0	33.3	
15	"	Ko	杯C II	2 a	13.3	3.4	6.6	25.6	
16	"	K	碗A I	3 a	16.3	—	—	—	東濃?
17	"	K	碗A	2 a	—	—	7.6	—	重ね焼痕, 底部に煤状炭化物付着, 東濃?
18	"	K	皿A II	—	13.2	—	—	—	
19	"	K	皿A II	3 a	13.9	—	—	—	東濃?
20	"	K	碗A II	—	14.4	(5.2)	(7.6)	(36.1)	ハケ塗施釉, 東濃?
21	"	K	皿B II	—	14.6	—	—	—	東濃?
22	"	K	皿B II	—	13.0	—	—	—	東濃?
23	"	K	皿B II	2 a	13.0	2.2	7.0	16.9	重ね焼痕, 東濃?
24	"	H	皿B I	2 a	10.2	—	—	—	
	"	Ko	杯B	2 a	—	—	(6.2)	—	
	"	H	杯B	2 a	—	—	(7.4)	—	
	"	H	小形甕 B	(2 a)	—	—	(8.2)	—	
	"	K	碗A II	3 a	15.2	—	—	—	東濃?
25	2住	H	杯D II	2 a	13.2	4.0	6.0	30.3	
26	"	Ko	杯C II	2 a	12.6	4.2	6.0	33.3	
27	"	S	杯C II	2 a	13.6	4.0	6.5	29.4	
28	"	K	碗A II	—	15.0	—	—	—	東濃?
29	"	K	碗A II	—	12.2	—	—	—	
30	"	K	碗A II	—	14.8	—	—	—	土岐?
31	"	K	皿A II	2 a・ 5 a	14.8	2.9	6.7	19.6	重ね焼痕, 東濃?
32	"	K	皿A II	5 a	12.2	2.6	6.7	21.3	美濃?
33	"	K	碗A	2 a	—	—	7.2	35.4	
	"	H	杯D II	2 a	14.4	5.1	6.0	35.4	
	"	Ko	杯C I	—	16.0	(4.3)	(7.0)	(26.9)	
	"	K	碗A	2 a	—	—	8.8	—	重ね焼痕, 東濃?
	"	K	碗A	—	—	—	9.6	—	

第IV章 調査遺跡

図 番号	遺構	種別	器 種	技 法	口 径 cm	器 高 cm	底 径 cm	径 高 指 数	備 考
	2住	K	皿B	—	—	—	9.5	—	
	"	K	壺	—	12.5	—	—	—	
34	3住	Ko	杯C II	(2 a)	15.9	(5.5)	—	(34.6)	
35	"	Ko	杯C II	2 a	14.6	5.5	5.3	37.7	
36	"	Ko	杯C II	(2 a)	13.3	(4.9)	—	(36.8)	
37	"	Ko	杯C II	(2 a)	14.0	(4.6)	—	(32.9)	
38	"	H	杯D II	2 a	13.2	4.1	6.0	31.1	
39	"	H	杯D II	(2 a)	13.9	(4.7)	—	(33.8)	
40	"	H	杯D II	(2 a)	13.6	(4.4)	—	(32.4)	
41	"	Ko	杯C II	—	15.8	(4.3)	—	(27.2)	
42	"	H	杯D	2 a	—	—	4.8	—	
43	"	H	杯B	5 a	—	—	6.6	—	
44	"	Ko	杯B II	2 a · 5 a	15.6	(7.2)	—	(46.2)	暗文
45	"	H	杯B II	2 a	14.9	(6.2)	—	41.6	
46	"	Ko	杯B	3 a	—	—	7.2	—	
47	"	H	杯B	5 a	—	—	7.8	—	
48	"	K	碗A I	2 a	16.7	6.6	8.5	39.5	東濃? 重ね焼痕
49	"	K	碗A II	—	15.4	(5.5)	—	(35.7)	東濃?
50	"	K	碗A II	—	13.5	—	—	—	
51	"	K	碗A III	—	9.4	(3.4)	—	(36.2)	東濃?
52	"	K	皿A II	—	14.4	—	—	—	東濃?
53	"	K	皿B II	3 a	15.0	—	—	—	東濃? or 猿投?
54	"	H	杯 III	2 a	7.5	5.9	4.5	78.7	2次の焼成, 炭化物付着, 内面器表剥落
55	"	H	小形甕 C	(1 a)	—	—	7.8	—	
56	"	H	碗A I	—	18.2	12.3	7.3	65.6	
57	"	S	壺	—	—	—	—	—	
58	"	H	羽釜	—	14.2	—	—	—	(a)
59	"	H	羽釜	—	(19.7)	—	—	—	(a)
60	"	H	羽釜	—	18.9	—	—	—	(a)
61	"	H	羽釜	—	17.2	—	—	—	(b)
62	"	H	羽釜	—	27.0	—	—	—	(a)
63	"	H	羽釜	—	20.7	—	—	—	(a)
64	"	H	小形甕	—	14.1	(22.5)	—	—	
65	"	H	甕D	—	22.2	31.0	10.5	—	
66	"	H	甕D	—	22.1	—	—	—	
	"	Ko	杯B	—	—	—	6.5	—	
	"	H	甕	(5 b)	—	—	10.4	—	
	"	H	小形甕 B	(2 a)	—	—	6.2	—	
	"	K	碗A I	—	16.8	—	—	—	
	"	H	羽釜	—	18.0	—	—	—	煤付着, (b)
	"	H	羽釜	—	20.6	—	—	—	(a)

図 番号	遺構	種別	器種	技法	口径 cm	器高 cm	底径 cm	径高 指数	備考
	3住	H	羽釜	—	25.1	—	—	—	(a)
67	4住	H	杯DⅢ	2 a	10.0	3.9	2.6	39.0	
68	"	H	杯DⅢ	2 a	10.6	3.2	5.5	30.2	
69	"	H	杯DⅡ	—	12.4	—	—	—	
70	"	H	杯BⅢ	2 a	11.8	4.8	6.8	40.7	
71	"	Ko	杯B	2 a	—	—	6.8	—	
72	"	H	杯B	5 a	—	—	9.3	—	
73	"	K	碗AⅠ	3 a	(17.8)	(7.8)	9.0	(43.8)	重ね焼痕, 猿投? or 東濃?
74	"	K	碗AⅡ	—	15.0	—	—	—	
75	"	K	碗AⅠ	—	16.2	—	—	—	
76	"	S	甕	(5 b)	—	—	8.8	—	
"	"	Ko	杯B	2 a	—	—	(7.5)	—	
"	"	H	甕	—	—	—	10.5	—	
"	"	K	碗A	2 a	—	—	7.4	—	東濃?
"	"	K	碗AⅠ	—	17.3	(5.0)	—	(28.9)	ハケ塗施釉
"	"	K	碗AⅠ	—	18.5	—	—	—	
"	"	K	壺	—	11.0	—	—	—	東濃?
"	"	H	羽釜	—	30.2	—	—	—	5号住居址出土の破片と接合, 器表外面に炭化物付着, 底部は2次焼成を受ける,(b)
77	5住	H	杯DⅢ	2 a	11.1	3.7	5.5	33.3	内面, 煤状炭化物付着
78	"	H	杯CⅡ	2 a	13.2	4.0	6.2	30.3	
79	"	Ko	杯BⅡ	2 a	15.5	5.7	7.0	36.8	
80	"	Ko	杯B	2 a	—	—	7.3	—	
81	"	K	碗AⅡ	3 a・ 5 a	12.4	3.9	6.9	31.5	東濃?
82	"	H	甕	—	—	—	10.2	—	
83	"	S	甕	—	—	—	—	—	
84	焼土 遺構	K	碗AⅠ	3 a	17.0	5.0	9.5	29.4	猿投?
85	"	K	碗AⅠ	—	16.2	—	—	—	
86	"	K	皿AⅡ	5 a	12.6	(2.4)	(7.3)	(19.0)	美濃?
87	"	K	皿AⅢ	2 a	10.4	2.5	5.5	24.0	
88	"	K	皿AⅡ	—	14.3	(2.7)	—	(18.9)	
89	"	K	皿BⅡ	—	14.3	(2.5)	—	(17.5)	
90	"	H	小形甕	—	14.3	5.4	13.7	—	
"	"	H	甕	—	—	—	7.0	—	炭化物付着
"	"	K	皿AⅢ	—	(11.0)	—	—	—	
"	"	K	皿BⅡ	—	(15.0)	—	—	—	
"	"	K	碗AⅡ	—	(14.2)	—	—	—	
"	"	K	碗AⅡ	—	(15.1)	—	—	—	
91	遺構 外	Ko	杯BⅢ	2 a・ 3 b	11.8	3.4	4.2	28.8	
92	"	Ko	杯CⅡ	2 a	13.2	2.8	7.6	21.2	
93	"	Ko	杯C	2 a	—	—	6.1	—	

第IV章 調査遺跡

図 番号	遺構	種別	器 種	技 法	口 径 cm	器 高 cm	底 径 cm	径 高 指 数	備 考
94	遺構外	H	皿AⅢ	2 b	8.5	2.1	6.1	24.7	
95	"	K	椀AⅡ	—	15.7	—	—	—	
96	"	K	椀AⅡ	—	14.0	(4.7)	—	(33.6)	
97	"	K	壺	—	11.5	—	—	—	
98	"	S	甕	—	—	—	—	—	
99	"	K	皿AⅡ	5 a	(15.6)	(2.9)	7.6	(18.6)	
100	"	K	皿AⅡ	3 a	14.2	3.1	7.3	21.8	
101	"	K	皿AⅢ	2 a	11.3	2.6	5.9	23.0	美濃?
102	"	K	壺	—	—	—	—	—	東濃?
103	"	K	皿AⅡ	—	(14.6)	(3.0)	7.4	(20.5)	
104	"	K	皿BⅡ	2 a	(14.0)	(2.6)	7.0	(18.6)	
105	"	K	皿BⅡ	—	14.0	—	—	—	
106	"	K	皿B	—	—	—	7.6	—	
107	"	K	皿BⅠ	—	16.7	—	—	—	美濃?
108	"	H	小形甕 AⅡ	—	15.2	—	—	—	
	"	Ko	杯C	2 a	—	—	5.2	—	
	"	H	杯D	—	—	—	4.8	—	
	"	K	椀A	2 a	—	—	7.2	—	東濃?
	"	K	椀AⅡ	—	(13.1)	—	—	—	猿投?, 東濃?
	"	K	椀AⅡ	—	(15.8)	—	—	—	猿投?
	"	K	皿AⅡ	3 a	14.2	3.2	7.0	22.5	輪花(ヘラ使用)4ヶ所 東濃?
	"	K	皿AⅠ	—	(16.8)	—	—	—	
	"	K	皿AⅢ	2 a	10.4	2.4	5.5	23.1	ヘラ記号 東濃?
	"	K	皿AⅡ	—	(14.4)	—	—	—	
	"	K	皿BⅡ	—	(14.4)	—	—	—	
	"	K	皿BⅡ	—	(14.2)	—	—	—	
	"	K	壺	—	(14.1)	—	—	—	
	"	K	壺	—	(12.5)	—	—	—	

図版
35-(1)

第4節 船霊社(小田井)遺跡(SFTB)

1 位置 (Ⅱ-図2、図1、図版36・37)

本遺跡は、岡谷市湊花岡小田井、北小路、南小路(岡谷市湊上海戸4477番地他)に所在する。諏訪湖西岸に沿ってつらなる湊地区のほぼ中央に、諏訪湖へ注ぐ小田井沢が形成したこの地区で最も大きな扇状地があり、遺跡はこの扇頂部から扇中部にかけ、約200m四方の広がりをもって立地している。中央道が通過するのは、この扇状地の扇頂部下附近で、発掘調査を行った部分は、海拔795m～785mの範囲で、諏訪湖面とは26～36mの比高差がある。扇状地は諏訪湖に向って北東部へ開扇し東南部と北西部は急峻な斜面をもつ尾根が張出してきており、中央部がやや高く、東西に張出す尾根境へ向いならかに傾斜している。扇状地を形成した小田井沢は、幅1m程に治水され、北西寄り流れている。中央道用地より諏訪湖側は海拔782m附近より湖岸まで人家が建てられており、北西の尾根は霊湊山と呼ばれ、久保寺古墳が位置し、東南の尾根東には小手場沢遺跡が小扇状地上に立地している。

遺跡が立地する扇状地からは、湊小学校の旧敷地等を中心にかなり多くの遺物が古くから採集されていたようで、縄文時代中期(藤内式、井戸尻式、曾利式)、弥生時代後期、土師器、須恵器、陶器、内耳土器など各期にわたる土器片とともに、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石皿等の縄文時代の石器や、時代不詳の土錘の発見もあり、湊地区では中心的な集落遺跡の一つとして注目されてきていた。

岡谷市史によれば、本遺跡が立地する扇状地には、従来、小田井北小路遺跡、南小路遺跡、船魂社遺跡、尊霊塔遺跡があったが、同一地形でもあり、出土遺物等から同一遺跡とみた方がよいと記載されており、遺跡台帳にも小田井遺跡として記入されている。これにより本稿で報告する船霊社遺跡は小田井遺跡と呼称するのが本来ではあろうが、県登録台帳や事前に実施された諏訪清陵高校による分布調査の結果では、⁽¹⁾船霊社遺跡として報告されており、また、その結果道路公団との契約も船霊社遺跡で行なっている。すでに出土遺物への注記も船霊社遺跡(SFTB)として終了しており、整理作業も完結している現在、すべてを小田井遺跡と変更するのは混乱を招くとの見解に立ち、岡谷市当局の了解を得て本書では「船霊社遺跡」として報告することとした。

2 発掘区の設定と調査の経過 (図1、図版36・37)

1) 発掘区の設定 (図1)

グリッドの設定は、遺跡内を走る二本の公団用道路センターラインのうち、諏訪湖側のセンターラインを使用した。従来の方法を踏襲し、STA 77+40とSTA 77+80を直線で結んで東西の基準線とし、STA 77+40の点で直角に振り南北の基準線とした。南北の基準線は磁北より約50度東へ傾く。STA 77+00をC地区の始点とし、D地区はSTA 77+50を始点とした。小地区(グリッド)の設定は、大地区の設定にあわせ従来の方法で行なった。小田井沢より西(B地区)は地形の起伏がはげしく、諏訪湖側のセンターラインを使用するのグリッド設定は困難であったので、山側のセンターラインを使用した。STA 76+60とSTA 77+00を直線で結んで東西の基準線としSTA 77+60で直角に振り南北の線を求めた。STA 76+60の点か

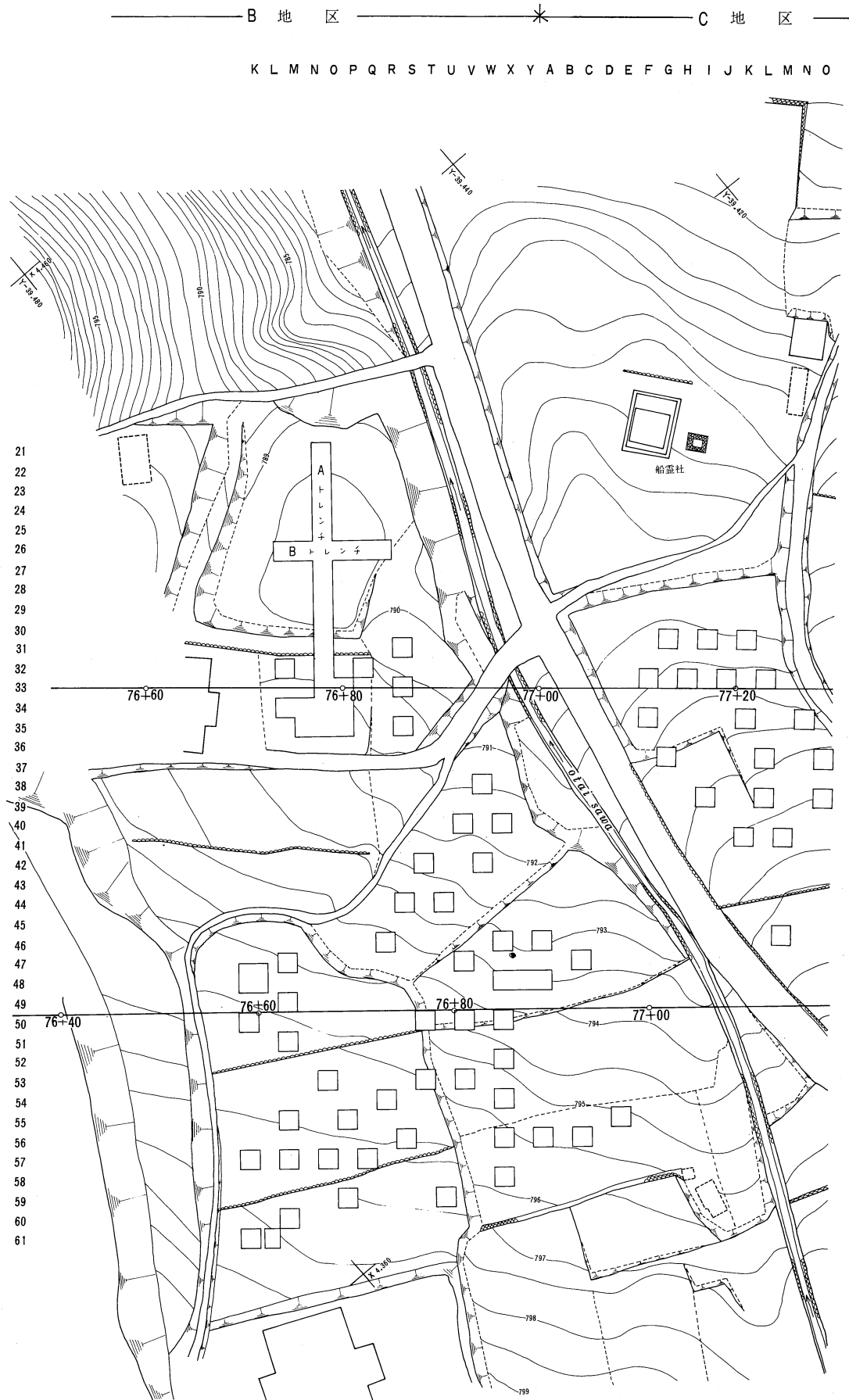


図1 船霊社遺跡付近の地形と調査区・遺構 (1:600)

— C 地区 — * — D 地区 — * — E 地区 —



29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62

第IV章 調査遺跡

ら東西、南北へ小地区割りをしていった。そのため、C、D地区のグリッドとは東西方向で1mのズレが生じている。測量は総て平板測量によった。水準点は公団用BM=0-8、H=784.8480を基準点とし、遺跡内の任意の点へ標高を求め使用した。

2) 発掘調査の経過

昭和52年度——9月20日、小手場沢遺跡の残務整理班を除き、本遺跡へ主体を移す。しかし、用地内に2ヶ所—小田井沢北西と東側山地寄り畑約750㎡—の未買収地が残ったため、それを除き下草刈りやグリッド設定にかかる。土砂運搬の便を考慮し、傾斜地の低い部分から調査を開始する。上記東側山地寄りの未買収地の下側—DT~EB35~29の畑では、グリッド調査ですでに縄文中期土器の集中的出土地点があり9月末には1・2号住居址、さらに小道をはさんだ東側DO~DR32~30付近からは焼土や鉄滓を多く含む平安時代の3号住居址、その南約15mのDI~DK38~36を中心とする地域では重複した同じ平安時代の4・5号住居址が検出された。こうして低→高所へと移るに従い、10月に入ると4・5号住居址の南数mの未買収地ぎりぎりの地点に平安時代の8号住居址が、もう少し高所となるセンターラインより上の東側山地に近いDN~DP56~58グリッド付近から1・2号と同時期の9号住居址が次々と発見された。なお、3号址は拡張の結果3軒の重複と判明し、6・7号住居址とする。

一方、これら住居址調査と同時に、扇状地中央部にある船霊社東・南側一帯の最も高い部分もグリッドを設定して発掘をすすめたが、ほとんど遺構らしいものはなかった。耕土が10~20cmと浅く、地盤のロームもその上面に拳大の礫を含む余り安定しないものであった。この結果、本遺跡の中心部は東側山寄りと判断し、未買収地(53年度調査部分)を囲む、北・西・南側に重点を移した。しかし、時間的余裕がなく、全面的な調査体制に移行できず、DF47~48付近でピット群や、かたい床状のローム面と土偶の出土、9号住居址付近のグリッドで数ヶの土壇が確認されたにすぎなかった。53年度のように重機を使って全面調査を行えば、住居址は無理としても、土壇、集石などは相当検出できたであろう。

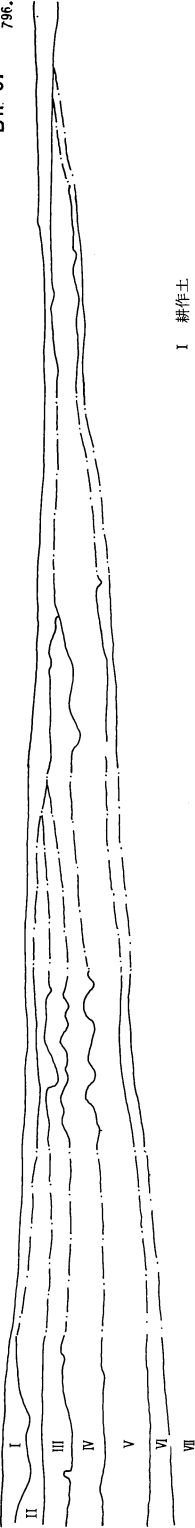
11月4日、1~9号住居址などの遺構の実測を終了し、今年度の調査を一応終了した。

昭和53年度——昨年度、未買収のため調査できなかった用地東境の畑(D地区)を中心に、あわせて小田井沢西の畑の発掘調査を行なった。道路公団と地主との契約が成立されていないため、4月より調査に着手できず、5月12日、発掘器材の搬入と整備を始め、5月15日より発掘調査に着手した。昨年度の遺構検出から見て、D地区への遺構の集中が考えられるため、未買収地の全面発掘を中心とし主力を注ぐ事とし、B地区は、遺物の散布も少なく、遺構々築のための広さに欠ける地形等から、グリッド掘りを主とし、遺構が検出された場合は拡張する方法をとった。

D地区の表土除去をバック・ホーで行なっている間、B地区湖寄りのグリッド掘りを最初行なう。黒色土が深く、遺物もごく少量しか検出されない。D地区はバックホーで10~20cm程の表土除去がすんだ所から、グリッド抗を打ち発掘に着手した。5月17日DR-52、53グリッドに遺物の集中箇所があり、19日住居址を確認、昨年度からの遺構番号の続きで、10号住居址とする。DQ-44、45グリッドにも遺物の集中と、黒色の落込みが見られ、11号住居址とする。黒色落込みのすぐ南に大きな自然石があり、壁に利用されていたと考えられる。5月27日より、公団地形測量図(200分の1)の不足部分の地形測量を始め31日に終了する。5月29日、DO~DQの37・38グリッドで黒色落込みを検出、さらに湖側へ広がるので、確認のため幅50cmの溝を、DQラインに沿って入れた所、2軒の切り合いが認められ、12・13号住居址とする。6月7日、DU、DV39・40グリッドの遺物集中ヶ所を14号住居址とした。11号住居址と同様、東壁に大

BK-57

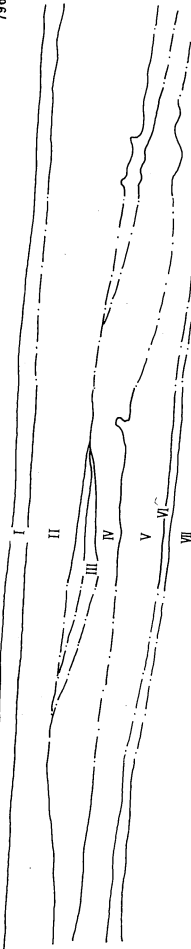
BR-57 796.0m



- I 耕作土
- II 黒色土
- III 暗茶褐色土
- IV 黒褐色土
- V 粘質黒色土
- VI 暗黄褐色土
- VII ローム

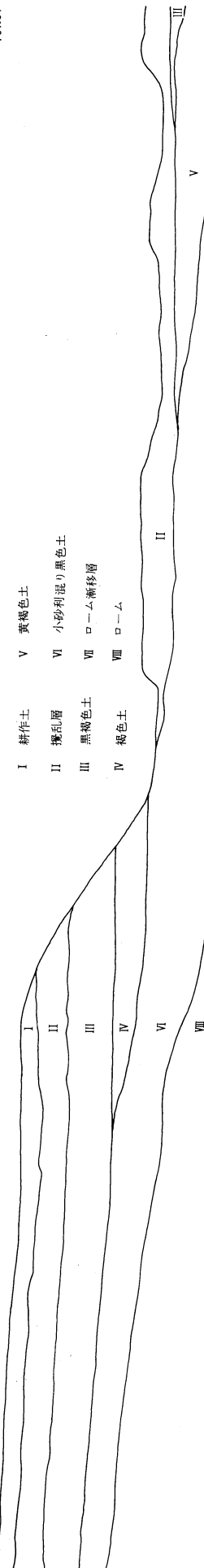
BM-51

BM-47 796.20m



BO-31

BO-22 791.54m



- I 耕作土
- II 攪乱層
- III 黒褐色土
- IV 緑色土
- V 黄褐色土
- VI 小砂利混り黒色土
- VII ローム漸移層
- VIII ローム

DO-40

DY-40 786.56m



- I 黒褐色土
- II 炭混り黒褐色土
- III ローム粒混り暗褐色土
- IV 砂質暗褐色土
- V 黒色土
- VI 暗褐色土
- VII ローム

図2 船靈社遺跡土層図 (1:80)

第IV章 調査遺跡

きな自然石を利用している。土坑は11号住居址周辺から、12・13号住居址にかけて多数検出された。遺構の検出は6月25日にほぼ終了し、測量・写真撮影等に移り、主力をB地区へ移動し、グリッド掘りを進めた。B地区は全体的に遺物の出土は少なく、縄文時代後・晩期の土器片がまばらに出土した他は、BT-34・35グリッドより須恵器大甕の口縁部、BP-47・48グリッドより猿投窯のものと思われる長頸壺の破片が集中して見られたのみで、遺構は全く検出できなかった。並行して、住居址内、土坑内出土の遺物と、サンプルに取上げた土の水洗いを進めた。7月12日すべての作業を終了、器材撤収、最終チェックを行ない、7月15日、船霊社遺跡の発掘調査を総て完了した。

3 土 層 (図2)

遺跡のある扇状地は、中心部が小高く、左右へ傾斜している地形のため、中心部と扇状地両境では若干の相違が見られる。扇状地中心の小高い部分は、表土の堆積が少なく、15~20cm程で、拳大から人頭大の礫を含む褐色、ロームの層となり、遺物の散布もほとんどない。住居址・土坑等多数の遺構が集中している扇状地東側は、黒色土、黒褐色土、ローム層と単純な堆積を示す土層で、黒色・黒褐色土層が下部へ行くに従い若干深くなり、70~80cmを計る。発掘区上部では40~50cmの厚さである。小田井沢の流れる部分で低くなり、西側は一段高くなる。小田井沢西区(B地区)の、沢にのぞむ部分は、黒色土層が薄く、15~20cmであるのに対し、斜面境は黒色、黒褐色土等の沖積層は1.5mと深くなる。ローム層まで6層に分けられ、Ⅲ層以下は、細かな石、砂等を含み、粘性のある土層で、以前水が流れていた可能性があり、小田井沢は現在地を流れる以前に、西側扇状地境に流路があったと思われる。

4 遺構と遺物

1) 縄文時代の遺構と遺物

(1) 第1号住居址 (図3・4・5、図版38・39・50)

本址は用地内遺跡範囲の東南隅DU・DV-32・33グリッドに検出された。北側には縄文中期前葉の2号住居址が近接している。グリッド掘りの際、土器片が耕作土(表土)層から多く出土したので住居址の埋没を予想して掘り下げた。表土層を除くと逆三角堆土として木炭粒を少し含む含炭黒色土層がレンズ状にあり、この下部には含炭ローム粒混り褐色土層が凹レンズ状に、そして最下部には含炭ローム土混りの黄色の強い褐色土層が堆積していた。これら表土層を除く埋土中には幼児頭大から拳大の自然石が多く入っている。

平面形は、径5.8mの円形であるが、土地の傾斜の関係で東側半分の壁が不明であり、床も非常につかみにくかった。検出された西側の壁は保存がよく、西壁中心部でローム面から20cm、落込み確認面からは40cmの壁高である。床はローム面に形成されているが西半部は大部分が堅緻で、炉・P₁・P₄を結んだ範囲は特別、バリバリの堅い床となっていた。しかし、東半部はやや軟弱な部分があり一部に木炭状ローム土混り黄褐色土で張り床した部分もある。なお、床は西から東方向に向って傾斜している。また、西南の一角には拳大内外の石が床面にぎっしりとあったが、元来からロームに含有されていた自然石である。炉(90×60、-10cm)はほぼ中心部につくられた地床炉で、4個の石が添えられ中心には凹石と小石があった。

柱穴はP₁~P₁₁の11個ある。P₁(39×30、-30cm)とP₂(30×20、-27cm)、P₃(20、-43cm)とP₄(25、-43cm)、P₉(25、-52)とP₁₀(30×28、-14cm)という近接し合う3対のあり方と、意識的に埋め立てられた柱穴を含むことから、この住居は建直しをうけており、本来の支柱穴は5~6個であると判断される。特別の埋土をもつ柱穴は、

P₂、P₆、P₁₁である。P₂では埋土中位に5cmの厚さでローム粒混りの黒褐色土があり、その上に厚さ10cm、径15cmのローム土からなる黄褐色土の塊が入っていた。P₆(53×35、-36cm)では黄色ローム混り褐色土のブロックと22×30cmのローム土塊が入っていた。P₁₁(35×28、-38cm)では黒色混り黄褐色ローム土がつめられ上部にわずか黒褐色土が乗っていた。この柱穴のあり方は建直しの際に埋め戻された古い柱穴を示している。周溝は全くみとめられず、北壁に壁体保護のための小穴が2個あるだけである。P₁の底には石が敷かれている。北側床面に径80×60cm、深さ20cmの穴があり、底部に径10cm内外で深さ10cmほどの小穴

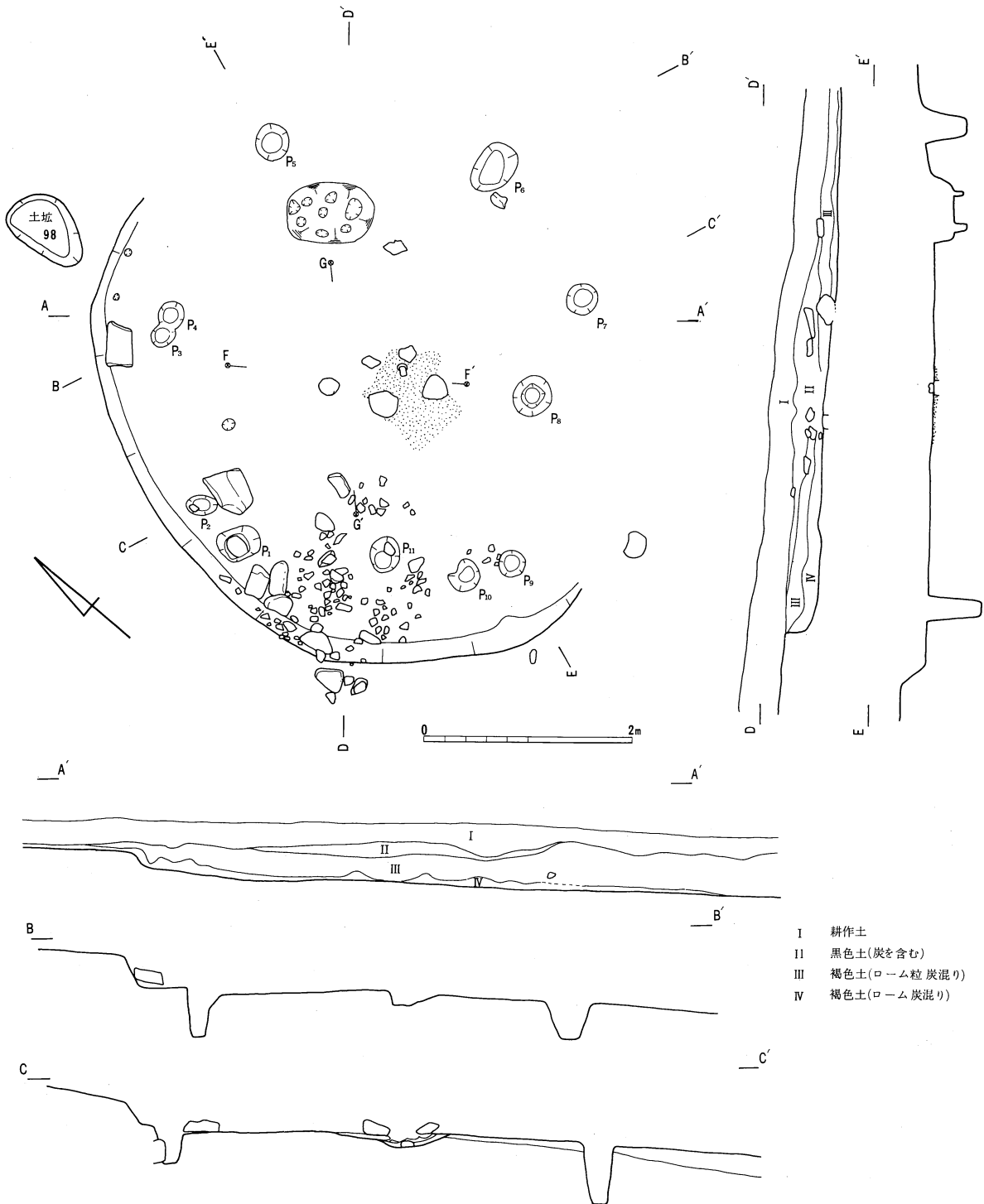


図3 船霊社遺跡第1号住居址 (1:60)

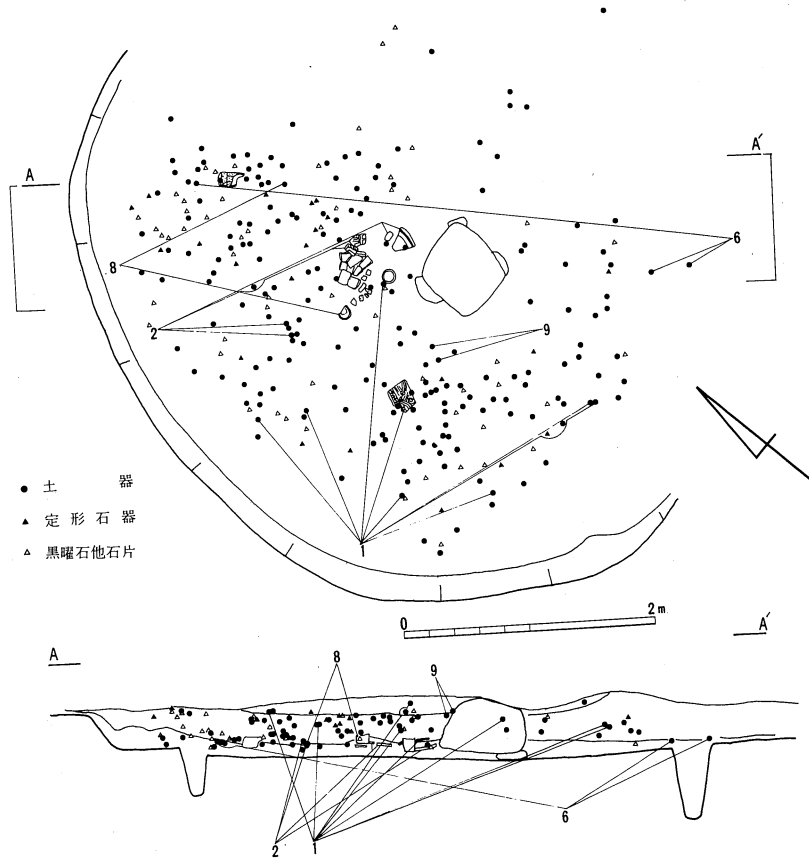


図4 船霊社遺跡第1号住居址遺物出土状態と土器接合関係(1:60)

を8個もつ。遺物も無く樹根による攪乱坑であろう。この床の上にあたる位置から床面の高さより3cm浮いて厚さ2.5cm、径6×5cmの木炭片があった。

西端のP₂の東つけ根部に43×35cmの扁平な安山岩が床上に置かれていて、作業台のように思われた。表面にかすかに打痕が残っていた。P₃の西壁寄りにも床より少し浮いて40×25cmのまな板状の扁平石があるが敲打痕はなかった。P₁の南にも壁に接して床上に3個の自然石を組んであるが性格はつかめなかった。炉の周辺には自然石や土器が集中する箇所があった(図4)。炉の上に1人では動かすことができない大石(68×50、厚さ40cm)が、炉の添石2個と凹石を支えにして乗っており、この大石の西側に3~8cmほど床から浮いて図48の土器1、5、8の3点が大小の角礫の散乱するなかにつぶれていた。そのうち5は、床より3cm浮き直立していて上部に石をかぶせてあり、8も床より6cm浮き直立の状態、上に幼児頭大の石が乗っていた。またStone 1と2とは接合して、立ててみると角柱状の立石にも見えるが確認はない。表面は全体に赤色化していて火熱を受けていると観察された。また、これらの土器と石のまよりの周辺には7がP₄の内側に床より10cm浮いて横たわっているなど大きい破片が散在しておりこのあり方は、本住居が廃棄された直後に大小の石とともに土器が投棄された疑いを抱かせる出土状況であった。

他の遺物には、P₉の内側床面に密着して、琥珀の小指大の小塊1点が出土した。また埋土中の中位からは多くの土器片や自然石に混って土偶片(図85-1)が3点出土したが特別の出土状態は示していなかった。埋土上位には関西系の縄文土器片の出土もある。

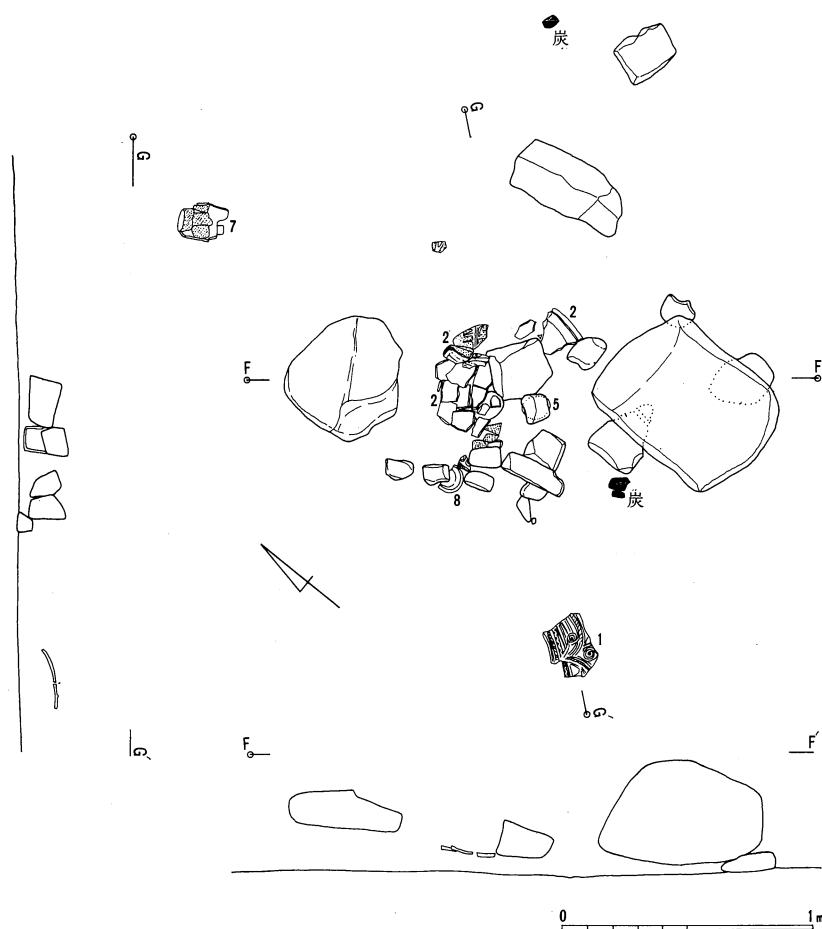


図5 船霊社遺跡第1号住居址炉址付近遺物出土状態(1:30)

(2) 第2号住居址(図6、図版39)

本址は、用地内遺跡範囲の東境から検出された。住居址の約半分のみが用地内のため完掘できなかった。南には1号住居址が、西には3・6・7号住居址が近接する。表土を約40cm程掘り下げた時点で落込みを確認するが、遺物の量は少ない。埋土はローム粒が混る褐色土があるのみで他にはない。耕作のための攪乱による結果かも知れない。埋土中には、幼児頭大から拳大の礫が多く入っている。検出面よりさらに30cmほど掘り下げた時点で床面に達しさらに床面に沿って広げていった所、住居址のほぼ中央部、用地境すぐの地点より石囲炉が発見されたが遺物の出土は非常に少ない。

およそ半分のみを検出であったが、直径約7mの円形のプランをもつものと思われる。傾斜地に構築してあるため、傾斜上部の壁は深くしっかりしているが、傾斜下部の用地境へ行くに従い壁は低くなる。南西部の壁高40cm、北方向用地境では壁高が半分の20cmを計る。周溝はなく、壁から床面へとつながる。床面は、東部分がやや傾斜するがほぼ平坦であり良好な状態といえる。炉址の南60cm程に大石(50×45×25cm、30×30cm)2ヶが床面より10cm程浮いた状態で検出されたほか、床面・壁にも径20~30cmの石が見られる。炉は石囲炉で、6軒発掘された縄文時代の住居址中、本址のみである。幅5cm、長さ25cm程の板状、柱状の石6ヶで囲われており、さし渡し40cmの不整形を呈す小形のもので焼土は余りない。

柱穴はP₂(100、-11cm)を除き、床面にP₁、P₃~P₁₅の14本、壁際に2本、計16本ある。床面にある柱穴

第IV章 調査遺跡

は、壁の円周に添っており、円形に立てられていたものと思われるが、本数の多い事や、P₃(60×35、-30cm)とP₄(65×30、-48cm)、P₅(40×23、-40cm)とP₆(70×37、-30cm)、P₇(50×45、-50cm)とP₈(40×36、-50cm)というように二本ずつ隣りあい対となっていることなど、住居の建て直しが行なわれた事も考えられる。

遺物の出土は少なく、土器片50数片の他は、埋土中より打製石斧2点、横刃型石器2点、使



図6 船霊社遺跡第2号住居址(1:60)

用痕ある剥片7点の他は、黒曜石片が少量のみである。床面上わずかに浮いて見られる土器は新道期のもが多く、縄文中期前葉の頃の住居址と思われる。

(3) 9号住居址 (図7、図版40・50・51)

本址はDO-57グリッドを中心に検出された。グリッド掘りの際に、表土層を取り除くとすぐに含炭黒色土層があらわれ、縄文中期初頭の土器片も少し検出された。そこで住居址の埋没を予測して掘り下げていくと、住居址の輪郭をつかむことができた。埋土は、床面上に三角堆土として木炭片を少し含むローム粒混り褐色土が堆積し、この上に凹レンズ状のローム粒混り黒褐色土層、さらに逆三角堆土として木炭を多量に含む黒色土層が厚く堆積し表土には褐色土層が堆積していた。土層の堆積断面図には、東と南の

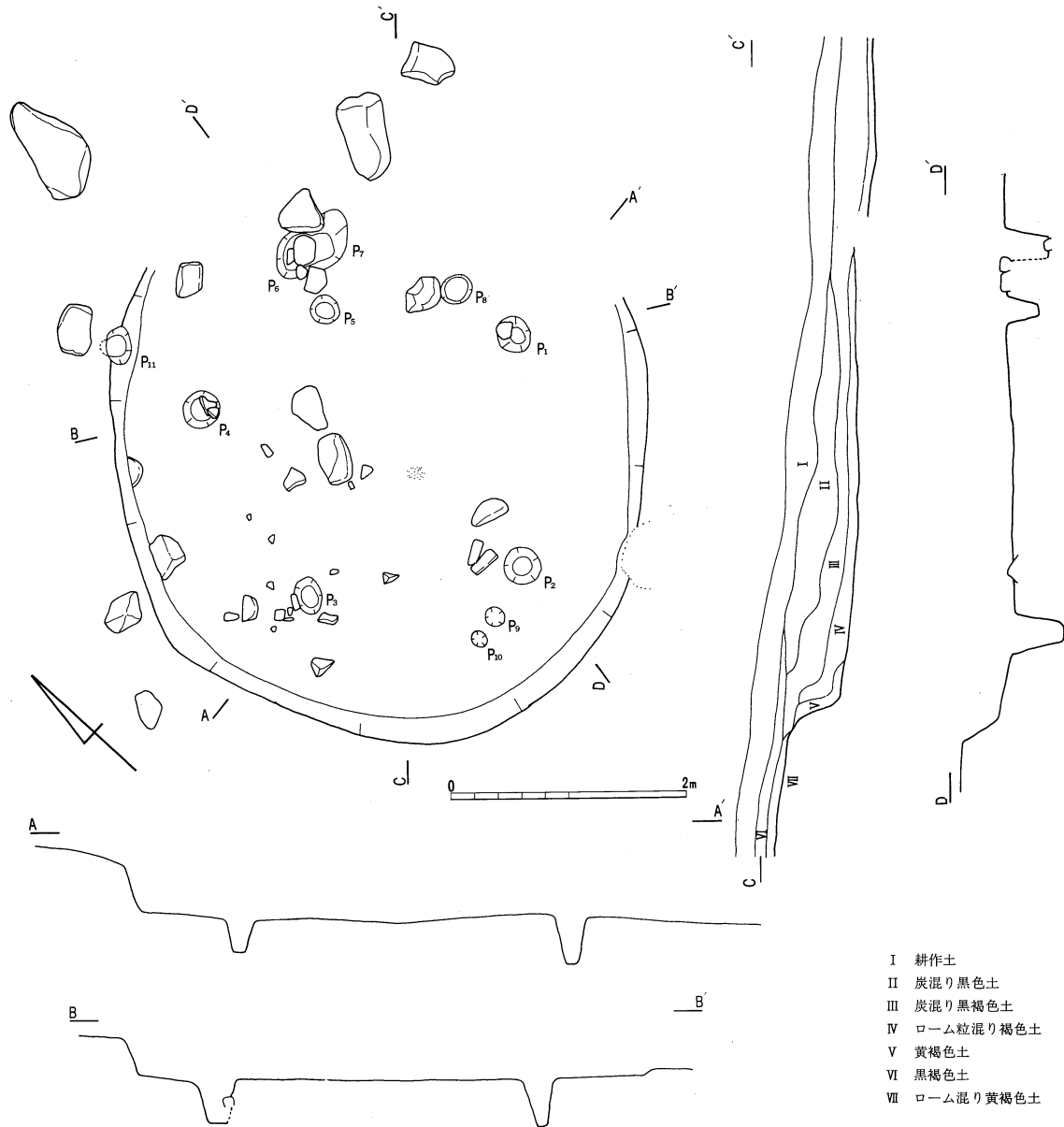


図7 船靈社遺跡第9号住居址 (1:60)

方向すなわち山手の方から土砂が流入した状況がよく示されている。

平面形は、南北約5m、東西約4.7mの楕円形である。住居はローム面を切り込んで築かれているので、壁は地形的に低い側の北東部を除き明確につかむことができた。壁高は、西壁で40~50cm、北壁で35cmをはかる。床は、全体に堅緻でほぼ水平であるが壁ぎわが少し高くなる部分があった。周溝はない。また、北東部がこの住居の出入口らしく、長さ70cm、径40cmの大きい自然石があって、この端から1.1mほど炉に近い部分は床が非常に堅く、しかも他の床面より少し高くなっていた。炉の周囲径1.3mの範囲は床が少し低くなっている。炉(10×10cm)は中心部に焼土が微量みとめられたにすぎない。炉の南北にある人頭大の石は床に少しくい込んでいる。

柱穴は炉を中心にP₁(30×27、-42cm)、P₂(30、-45cm)、P₃(32×22、-24cm)、P₄(31、-41cm)、P₅(25、-25cm)の5個の主柱穴がめぐり、出入口の支柱穴とも考えられるP₆(40×35、-25cm)、P₇(35、-21cm)、P₈(25、-21cm)、奥壁に

第IV章 調査遺跡

は何らかの支柱穴と考えられる P₉ (15, -13cm)、P₁₀ (13, -17cm)、北壁上には深さ40cmで住居の中心に向かって斜めの柱穴らしき P₁₁ (30×22, -40cm) がある。炉をはさんで P₁₁ の反対の壁上にも深さ35cmの穴があったが、撓乱の穴のように観察された。P₁ と P₃ は柱の根元に補強のための石を詰めたらしく P₁ では1個、P₃ では3個残っていた。P₂ の北側には二つに割れた長方形の鉄平石が床面上にあったが単なる自然石ではなく、何かに使用したものと考えられる。P₃ の底には石が敷かれていた。また P₃ の周辺には小さな石が散在するが床面にくい込むものもあり自然のものである。P₆・P₇ の上部には扁平石が3個あったが敲打痕もみられず石器ではなかった。P₅ の東側床面から小指大のアワ状炭化種子(図版69-8)の小塊1点と豆状炭化種子(同10)1点を検出した。近辺には中期初頭の九兵衛尾根Ⅱ式の深鉢2個体17・16が床面上につぶれて出土しているので、周辺部は撓乱は受けておらずそれらの炭化種子が後世の混入とは考えられない。この住居は遺物の全体量が少なかったが石鏃が多いのが特徴であり、埋土中も全般に遺物の量は少なく、多くが床上に密着していた。

(4) 第10号住居址 (図8・9、図版40・51)

本址は、遺跡用地内の西南、南側の山の急斜面と扇状地の境で検出された。DS-52・53グリットの黒土層中に遺物の集中がみられ、ローム層直上まで掘り下げて確認された住居址である。平面形は南側の壁はしっかりと残っていたが、北側の壁は検出できなかったのではっきりとしないが、おそらく径4.6mの円形を呈すると思われる。北側の黒土層中に細長くたたきしめられた様な床状の遺構が検出されたが何であるか、はっきりとしなかった。

住居址の埋土は3層から成っている。最下層のⅢ層はソフトロームで壁際にだけあり、Ⅱ層はローム粒子を含む暗褐色土で、壁際から住居址の中央に向かって傾斜をもち堆積している。Ⅰ層はロームの微粒子を含んだ粘性をもつ黒土層である。住居址の東側のやわらかい黒褐色土は撓乱と思われた。

壁は住居址が傾斜地に構築されているため、北側は残存しないが、南側の残っている壁高は30cmある。床面は堅くしまっており、やや東へ傾斜をもっていた。ピットは6個あり、そのうち主柱穴は P₁ (35×25, -23cm)、P₂ (30×18, -54cm)、P₃ (20×17, -47cm)、P₄ (33×30, -18cm) の4本と思われる。P₅ (21×17, -19cm) は柱穴と同様の深さ、形態を示しているので支柱穴と思われる。P₆ (20, -50cm) は炉の横で焼土を取り除く際に検出されたもので、深さ、形態は柱穴と同じ形を示しているが、柱穴なのかどうかははっきりとしない。P₁ と P₂ の間には P₂ とつながって幅8cm、深さ5cmの周溝が検出された。炉は埋壔炉で、径25cmの底部のない土器を口縁部を上にして埋めてあった。深さ32cmの穴を掘り、その中に土器を入れたと思われ、埋壔炉の内部は上層5cmが、焼土と焼土混りの黒褐色土で、下層はすべて黄褐色土が堆積している。焼土は埋壔炉の周辺にも及んでおり、厚い所で6cm堆積しており内から黒曜石の碎片が多く検出された。

本址よりの遺物出土状況は、ほとんどⅠ層に集中したが約200点と少ない。床面及びその直上は約15点の土器片と黒曜石片、埋壔炉、南壁にたてかけた状態で壁際に伏さって出土した石皿だけであった。本址の年代は、埋壔炉から、九兵衛尾根Ⅱ式と推定される。

土器については後でふれるが、埋壔炉に使用された土器は、キャリバー形の器形でRLの縄文を地文にもち、孤線状隆帯で沈線を伴う区画をもつもので、口縁部は炉として使用されたためか赤褐色でポロポロしている。他に器形を復元できるもの2個体分とミニチュア土器が1点出土した。

石器は少なく、使用痕のある剥片が11点、石鏃2点(1点は脚部のみ)、打製石斧が3点と南壁際から出土した完形の石皿だけである。

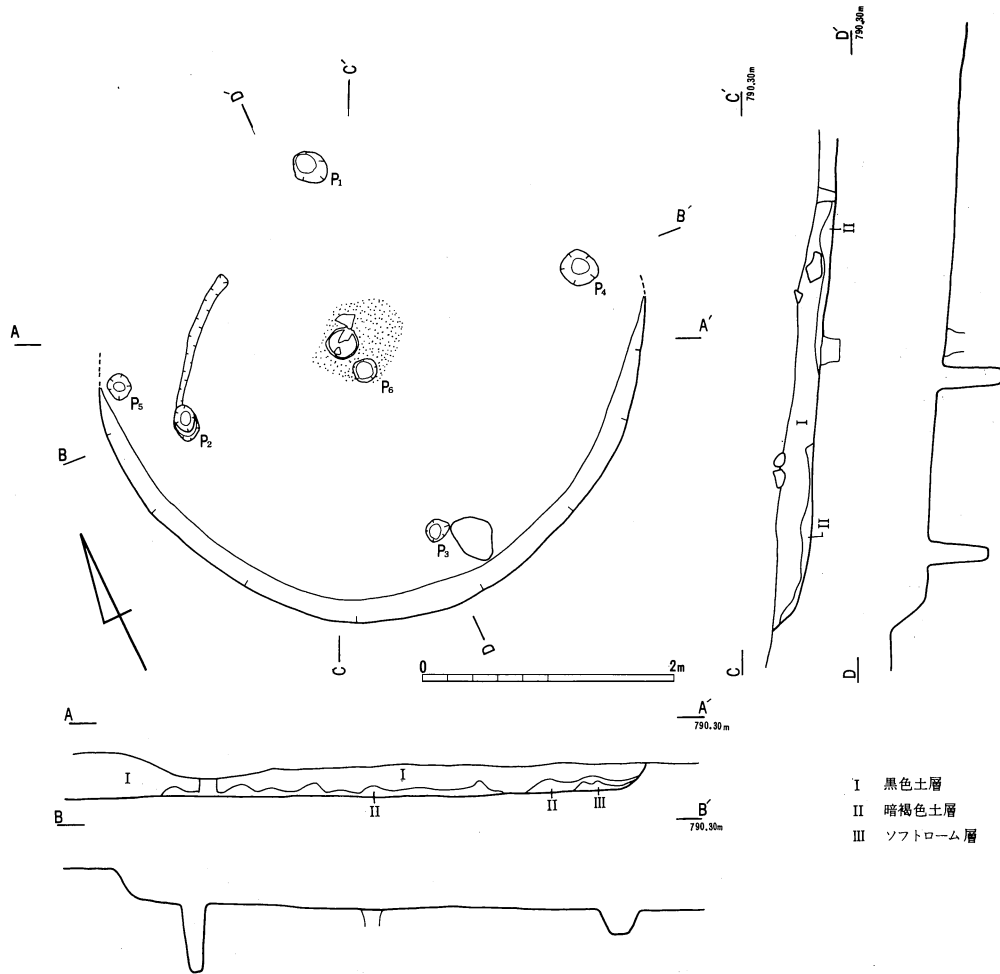


図8 船靈社遺跡第10号住居址 (1:60)

炭化物は、炉内からクルミの果皮、石皿の下から楕円形と球状の小粒の炭化物が出土したが、種は同定し難い。

(5) 11号住居址 (図10・11、図版41・51・52)

本址は、南西から北東へ緩やかに傾斜している地に検出された縄文時代中期初頭の住居址である。

住居址は、この付近に多く出土する巨大な輝石安山岩の脇にローム層中へ掘り込まれており、東側に検出された14号住居址と同様にその巨石を住居址の壁の一部としている。この巨石は平坦な面を住居址の内側に露出させ、ほぼ北方向に対峙する格好であった。

規模・平面形は、東西3.67m、南北3.63mとやや小型であるが、きわめて正円形に近いものである。壁、床面はロームで非常に固く、壁は南西部で最も高く57cm、低い北東部で8cmを計った。柱穴はP₁(30×15、-39cm)、P₂(20×17、-42cm)、P₃(25×20、-39cm)、P₄(20、-43cm)、P₅(28×20、-39cm)、P₆、P₇の7本がある。このうち、P₆(32×20、-80cm)、P₇(25×20、-85cm)は埋土中、II層上において既に確認できたもので、黒褐色の軟らか

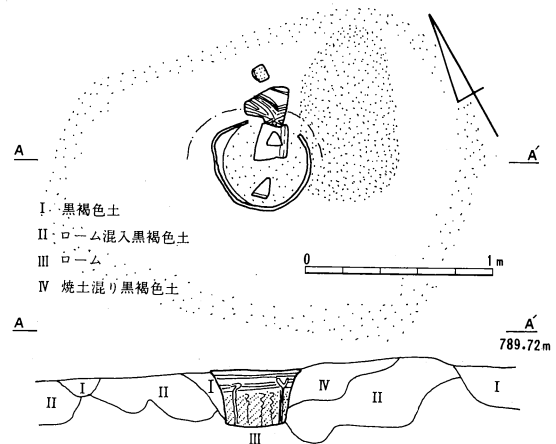


図9 船靈社遺跡第10号住居址埋葬炉 (1:40)

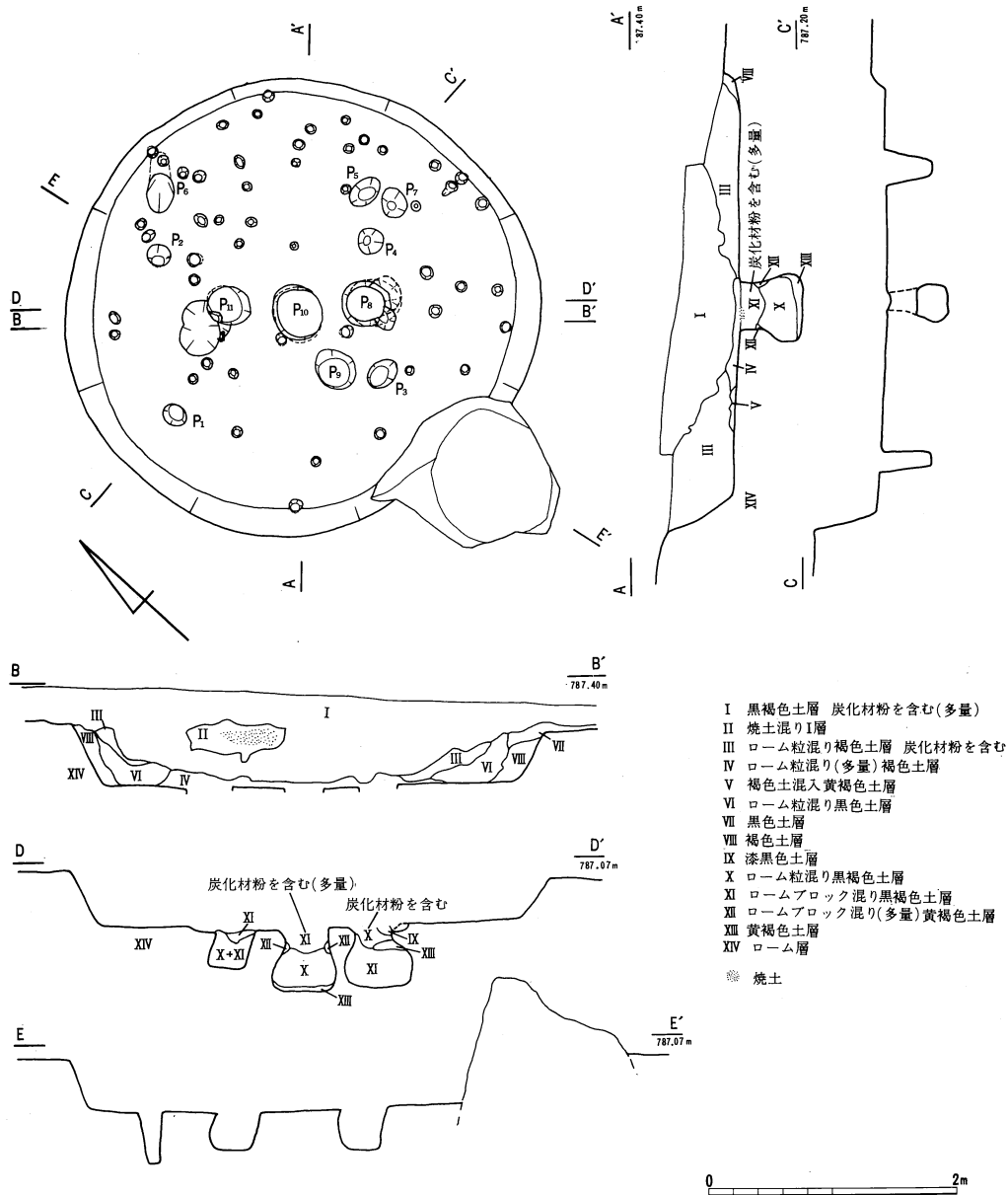


図10 船霊社遺跡第11号住居址 (1 : 60)

い土が、P₆・P₇とも斜めに床面中に入っていた。これに対して、P₁～P₅は、床面で確認したもので、主として黄褐色土が落ち込み、床面からの深さも37cm～45cmであった。検出状況からして、前者は後者にくらべ埋没時期が遅く、本址とは別のものと考えられる。また、床面に多数の小さなピットを検出した。深さは5cm～10cmで、特に配列などは見られないが、恐らく住居址内施設のために設けられたものとする。

P₈(40、-50cm)、P₉(40×35、-35cm)、P₁₀(35×30、-54cm)、P₁₁(35、-30cm)は柱穴とは異なり、いずれもかなり胴膨れした掘り込みである。このうちP₈とP₁₀が、他の2つのものにくらべ若干大形で15cm程深く、典型的なフラスコ状を呈していた。なおP₁₀の上層から少量の炭化材を混じえた焼土が検出された。

本址からは、土器、石器、土製品、それに若干の自然遺物等が出土した。土器の量はかなり多く、約800片を数えた。また、石器も40点余を出土、ほとんどが埋土から得られている。埋土中の遺物のあり方を見ると、その大部分がI層中に集中しており、若干その周辺の土層中まで拡がって分布する。壁際のⅦ、Ⅷ層中にはほとんど見られず、床面遺物といったものも大きな個体で把えることはできない。I層は住居址

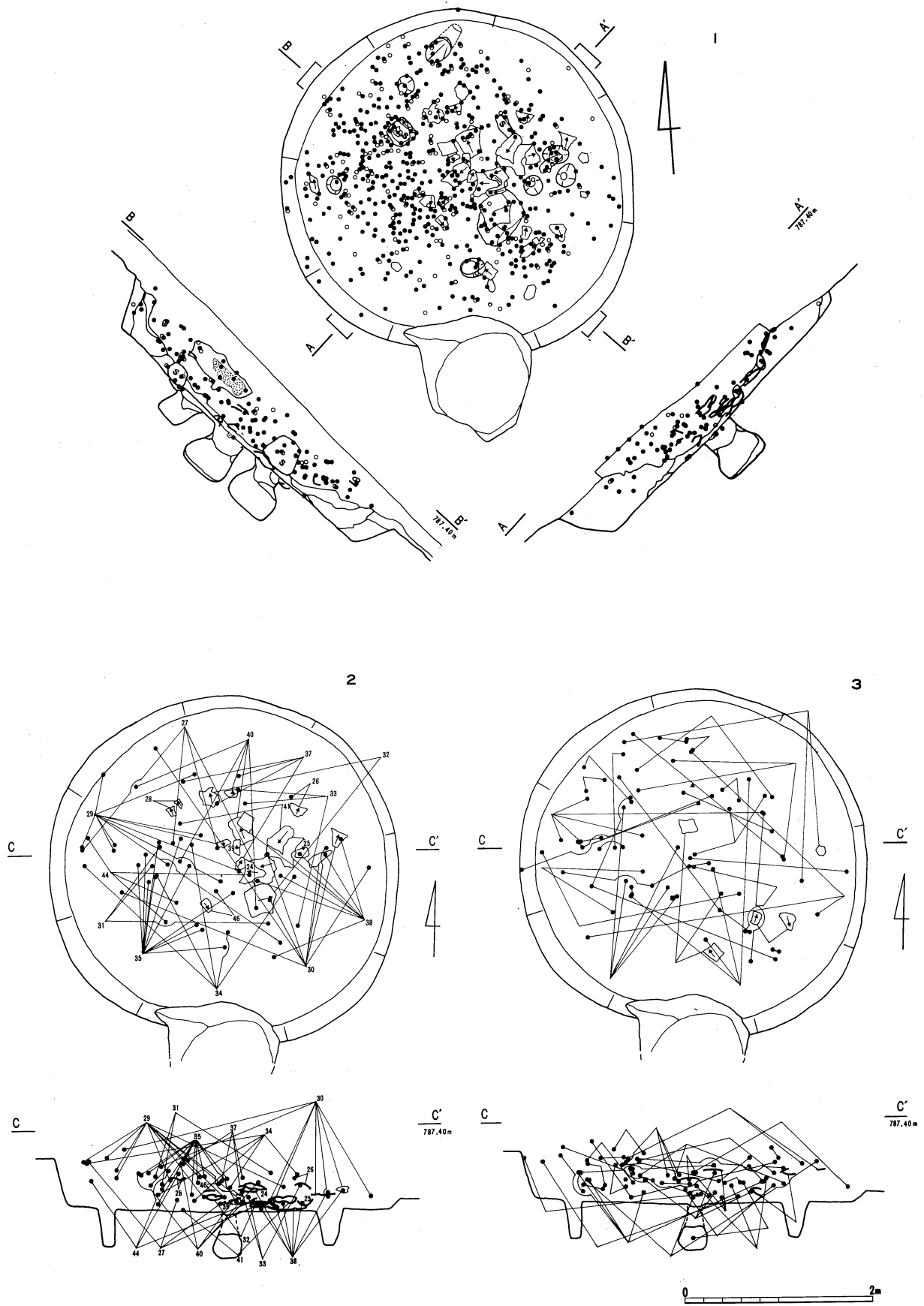


図11 船靈社遺跡11号住居址遺物出土状態と土器接合関係 (1 : 60)

第IV章 調査遺跡

内における一番新しい堆積土であり、ゆるやかなレンズ状を呈して落ち込んでいる。これらにより本址は自然堆積の過程における土器廃棄の様相、いわゆる「吹上げパターン」といわれる状態を示していた(図11)。

土器は完形のまま出土したものは1点もなく、比較的大きな破片がレンズ状堆積の低い部分に集中しており、そのほとんどが狭い範囲で細かくつぶれて出土している(11図-1)。24と39はいずれも部分的に欠損はしているものの本址では良く残り、しかも破片が散乱することなく一ヶ所から得られた遺物である。32と27はやはり部分的に若干欠損をしているが、比較的良好に接合できた資料である。この2点は底部と胴部とがかなり離れて出土。32の胴部はP₈が完全に埋没する時に期を同じくして廃棄されたものと思われる。(図版41-1)。また、27の底部は胴部より西側に散乱し、断面図で見ると、ちょうどレンズ状堆積の下端を示すが如くの散らばり方を見せている。このことは27が西から東側へ、人為的に廃棄されたことを示している。同傾向の例としてはほかに29、35、38などがあり、かなり広範囲に散乱する遺物とは異なって、一定方向からの土器投棄の可能性を示唆するものと思われる。

図11-3は、図化した土器以外の接合関係を示したものである。図11-2よりも若干小破片が多いためか、一つの土器の接合破片数の量の少なさにしては、かなり広範囲にわたって散布しているものが多く見られる。これらは恐らくある程度の時間的経過の中での所業の結果と予想されようか。

304は、本址プラン検出中にP₁₀、I層、西側の小竪穴からの土器が接合された資料である。レベル的にも距離的にも離れており、投棄のされ方が他の土器とは違い注意される。

なお、土器は井戸尻編年で九兵衛尾根II式の様相を示しているものがほとんどである。ただ、29の口縁部にある縦方向への押し引きは、他の遺物と比較すると、ほぼ同時期ながら、若干新しい様相を示している1点である。

石器および使用痕の見られない剥片等は図11-1に「○」で示している。分布状態も上述した土器となんら変化なく全く一致している。つまり、土器と同時に投棄しているのである。しかし、石器は完形で出土する点、若干土器とは異なっているといえよう。なお、石器については、表7の石器一覧表を見られたい。

11図-3中の「▲」は土偶の脚部、(図85-5)、「■」は顔面付土器(図65-277)の出土地点を示している。これらは投棄された土器と異なるような扱いは受けてはいないと思われた。自然遺物では、炭化したクリの種子2個と、クルミの内果皮4個分量程である。II層中から得られたものであり、I層の堆積経過中にここで焼けたものである。また、P₈内からもクルミの内果皮片が出土している(図版69-6・7)。

(6) 第14号住居址 (図12・13、図版42・52・53)

本址は遺跡用地内の東北、南西から伸びてきた尾根の急斜面と、扇状地境すぐ近くから検出された。本址の位置する附近より黒色土の堆積はやや深くなり、遺構検出面まで70~80cmある。DT・DU・DVの39・40グリッドに遺物の集中が見られ、住居址の存在が予想された。また、11号住居址と同様、遺物集中区のすぐ北東に大石があり、壁に利用されたものと思われる。表土下約70cmで住居址のプランが確認でき14号住居址とした。十字にセクションベルトを残し、住居址内の掘り下げを行なった。

土層は最上層に黒褐色土が30~40cm堆積し、その下に黒色土が15cm程の厚さで部分的に見られ、住居址内の埋土は、炭の粒が混じる黒褐色土、焼土が混じる黒褐色土があり、床面上はローム粒が多量に混じる褐色土が堆積していた。住居址北寄りに、100×80cmの範囲で、厚さ約30cm程の焼土が認められたが、焼土は壁から住居址中心に向い落ち込んでいる状況から、本址の廃絶後に投げ込み等により堆積したものと判

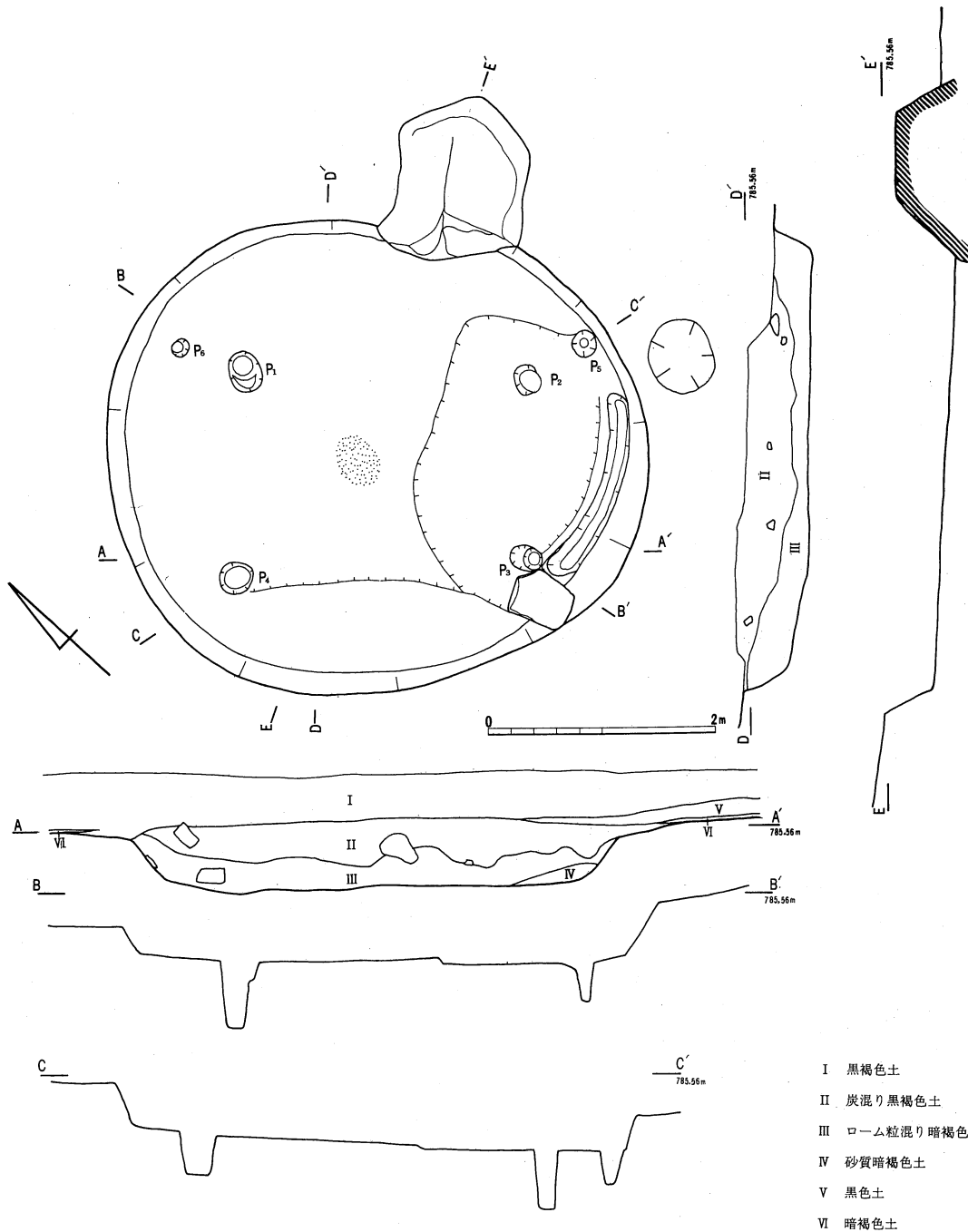


図12 船靈社遺跡第14号住居址 (1:60)

断される。

本址のプランは南東部がややせばまるがほぼ円形を呈し、東西4 m、南北4 m 70 cmを計る。周壁は斜面上に本址が構築されていることもあり、南から南西部は残存状態はよく50cmを計り、次第に低くなり、北壁は25cm程である。北東壁には150×110×60 cm余の安山岩の自然石が利用されている。周溝は南から南東部壁直下に、長さ1.7 m、幅20 cm、深さ5～10 cmのみ認められるだけで他にはない。床面はほぼ平坦で固く、良好な状態であるが、南東から南西へかけ5～6 cm程凹んでいる。炉は地床炉であるが、50×35 cmのせまい範囲にしか認められず、焼土の厚さもわずかである。柱穴は6本検出されたが、主柱穴はP₁(35×27、-58 cm)、P₂(25×22、-51 cm)、P₃(29×22、-32 cm)、P₄(30×28、-37 cm)の4本と思われ、P₁、P₂に対し支柱

第IV章 調査遺跡

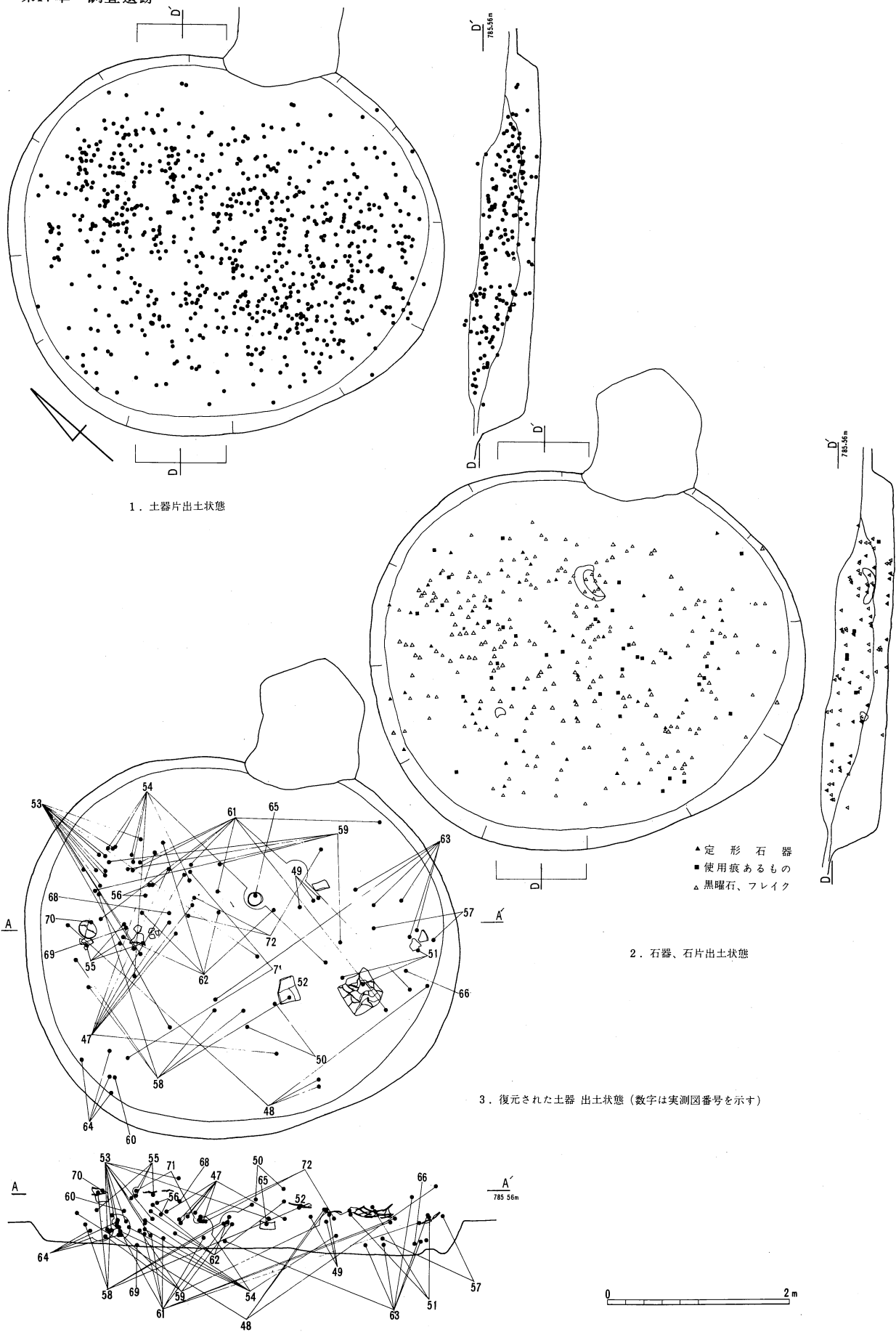


図13 船霊社遺跡第14号住居址遺物出土状態と土器接合関係 (1 : 60)

穴P₅(22、-30cm)、P₆(17×16、-36cm)がそれぞれ立てられていたと推定される。

本址より出土した遺物のほとんどは、床面より20~40cm浮いた状態で検出された。土器形式はすべて九兵衛尾根Ⅱ式に属し、他形式のものは認められなかった。土器は器形の判別できるものが27個体あり、そのうち25個体分は深鉢形土器であり(図53-47~図55-70)、2点が浅鉢である(図55-71・72)。いずれも第Ⅱ層から第Ⅲ層上部にかけての出土であり、図13に示した如く、住居址北側に集中する傾向をもっており、埋土の状態等からも考え、本址が廃絶された後に、住居址北方向より主に廃棄されたと見ることができよう。しかし、埋土中の土器と、50~60点ほど検出された床面直上の土器片は、いずれも九兵衛尾根Ⅱ式に属するものであり、住居址の廃絶後、遺物が投棄されたのは長い時間の経過があった後とは思われない。石器の数も多く、石鏃18、石匙2、打製石斧14、横刃型石器11、磨製石斧5、凹石9、石皿1があり、他に、黒曜石の原石・石核・剥片に、刃つぶれ・刃こぼれの使用痕が観察できるもの91点と全住居址中最も多い。これと同様黒曜石片も多く400点を越す。本址の北約2mに黒曜石の原石・石核が集中して出土していることから考え、本址に黒曜石や、黒曜石製石器の多いことは注意される。擦切りの長さ2cm・幅1.2cmの石錘が埋土中より出土している。

(7) 竪穴1 (図14、図版43-7)

本址は11号住居址の西側に位置し、南西から北東への緩斜面上に検出された遺構である。この周辺は砂礫を混じえた黄褐色土が漸移層となっており、ロームの上を薄くおおっている。なお、本址北側は土壇11が切っている。

遺構は、漸移層から掘り込まれ、ロームまで達している。埋土は2層であり、1次堆積は小ローム塊を含む土層が壁際にわずかに堆積し、次によくしまった黒色土がほとんど一層となって落ち込んだ様子がわかる。北側にはロームの混入が多く、自然堆積による埋没を

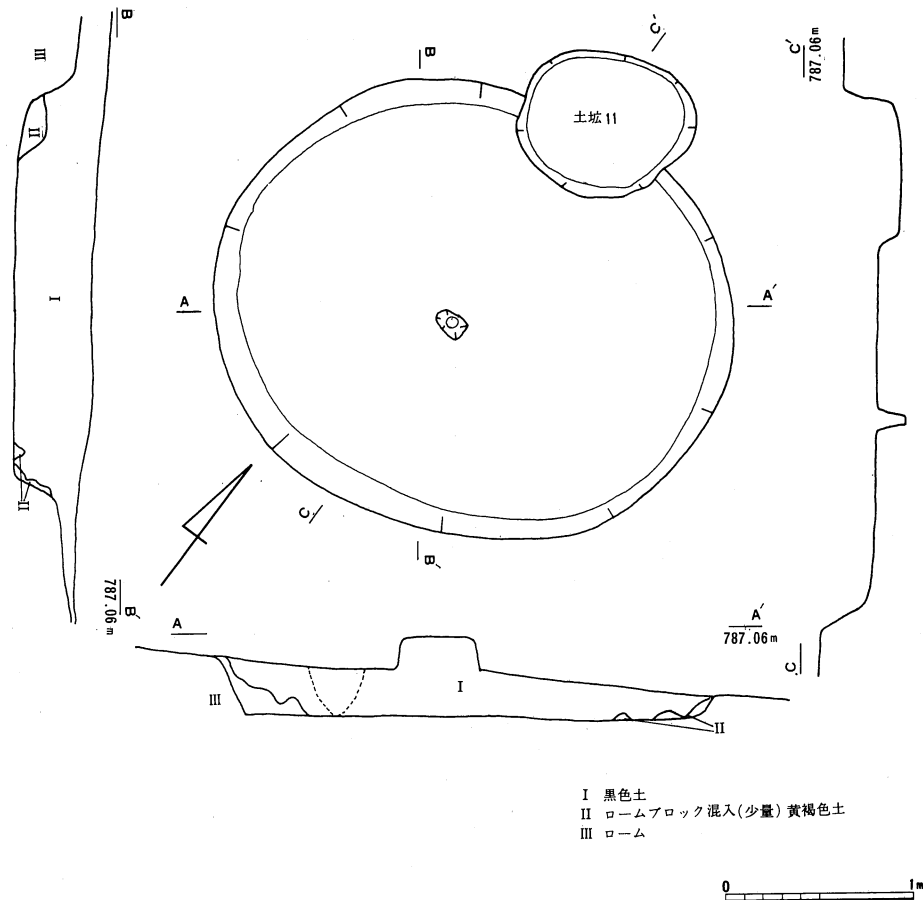


図14 船靈社遺跡竪穴1 (1:40)

第IV章 調査遺跡

示していた。規模は東西2.8m、南北2.35mと小形の楕円形を呈している。

壁・床面はいずれもロームであり、壁の立ち上がりは明瞭に検出できた。床面は最大直径5mm程の砂粒を多く含み、特に硬さはもっておらず、中央部が周囲に比べて若干凹んでいる。柱穴は、中央やや南寄りに小形のピット1ヶが検出されている。炉、焼土等は見当らなかった。

出土遺物は土器の小片10点程であり、いずれもI層中からのものである。北陸系の土器(図70-398)、九兵衛尾根I式の要素を残した土器(図70-399)等がある。なお、I層中でも最下レベルからの1点が11号住居址(図66-304)と接合できた。

(8) 土 塚 (図15~18、表6、図版42・43・53)

表6は次の要領で記述を行なっている。

① 形態は、平面と断面から便宜的に次の如く分類を行なった。平面は検出面における開口部の平面形態を示すものであり、長軸と短軸の数値を用いて、或はカタチというものの視覚的観念も入れて

- A. 円形 — 長軸、短軸の軸長差が長軸に対して15%未満のもの
- B. 楕円形 — " 15~50%の範囲内にあるもの
- C. 長楕円形 — " 51%以上のもの
- D. 隅丸方形を呈すもの E. 隅丸三角形を呈すもの

の5つに大別し、特に形の崩れたものは不整として、ダッシュ(′)を付し、長軸が45cm以下のものは小形(S)、短軸が120cm以上のものは大形(L)を冠した。

断面は現場において実測した土層図を用い、壁の形態と深さ、および底面の構造からa~fに分類した。これらはすべてローム層、或は漸移層中において検出された落ち込みをその対象としている。

- a. 袋状、或は、フラスコ状のもの b. スリ鉢、或は、鍋底状のもの
- c. 口径の割に深く、円筒状のもの d. 口径の割に浅く、皿状、或は、タライ状のもの
- e. 底面が傾斜していたり、落ち込みが緩やかで底面がある程度の広さをもたないもの
- f. 底面が段状をなし、深部と浅部を有しているもの

② 大きさの数値は図面を再測して求めたものであり、軸長はすべて開口部の計測値である。また、深さについては各々の検出面から底面に至るまでの数値であり、断面形の線どうしを直線で結び、底面から垂直線を立てて最大値を計測した。

③ 土塚内の小さな落ち込みは小穴という表現で示した。

④ 出土遺物については、土器は図番号、拓本番号で示し、小片のものは単に「土器」とだけ表現した。

石器については、一覧表があるので器種のみを記し、使用痕跡も見られない黒曜石は「ob」としている。

⑤ 時期は、土塚内より出土した遺物、或は切合い関係から判定している。

遺構図は、主に、多量の遺物を出土するもの、断面、平面形態も考慮して、特徴的なものを掲載したにとどめ、全部は載せていない。また、図中のドットは、土器、石器から使用痕のない剥片まで入れており、土器に関しては接合できたものを線で結んで土層図の中に表現している。

調査区域内の土塚の占地状態は、すべて南東部に位置しており、しかも6号を除いて、住居址が検出された範囲内にとどまる。また、そのなかでも、ロームマウンド1号の北東部に集中して検出された。

図18によって長軸、短軸の軸長差を見ると、Cを除いたものは、すべて1:1から3:5の間に入っている。規模をみると、特に大型の6号を除いて、長軸で1.4mの内におさまっている。また、短軸長が40~

60cm、長軸長が45~70cmの間に全体の35%近くの35基が集中している。

形態的にみると、Baというものは1基もなく、D・Eとしたものは、本来A、或はBと分類されるべきものが変形した可能性を考慮することができよう。Cの長軸方向をみると、南北に長いものも多く、N3°、12°、58°、E、N5°、25°、Wという数値を示していた。

土壇の中で壁、或は、底面に小穴を穿ったものが、7、10、22、44等8基ある。それらは、



図15 船霊社遺跡土壇全体図 (1:400)

A、或はBのb、dのものに多い。小穴の数は1個のもの5基、2、3、8個のものが各1基であった。また、底面が非常に固くなっていたものが10基ある。Aに多く、a、bで各4基ずつを占めている。

次に断面について見てみると、aは、7、11、13、25、31号の5基で、すべてAの形態である。13号はその典型的なものであり、他の4基は13号のように、袋状の状態が全周せず、壁の一部が胴を外側に張っており、それは掘込面上側に多いようである。また、31号は、底面中央に薄く砂礫を敷いており、特異なものとして注意される。bは、5、10、34、40、60、62号など24基である。dの深いものであり、検出面

第IV章 調査遺跡

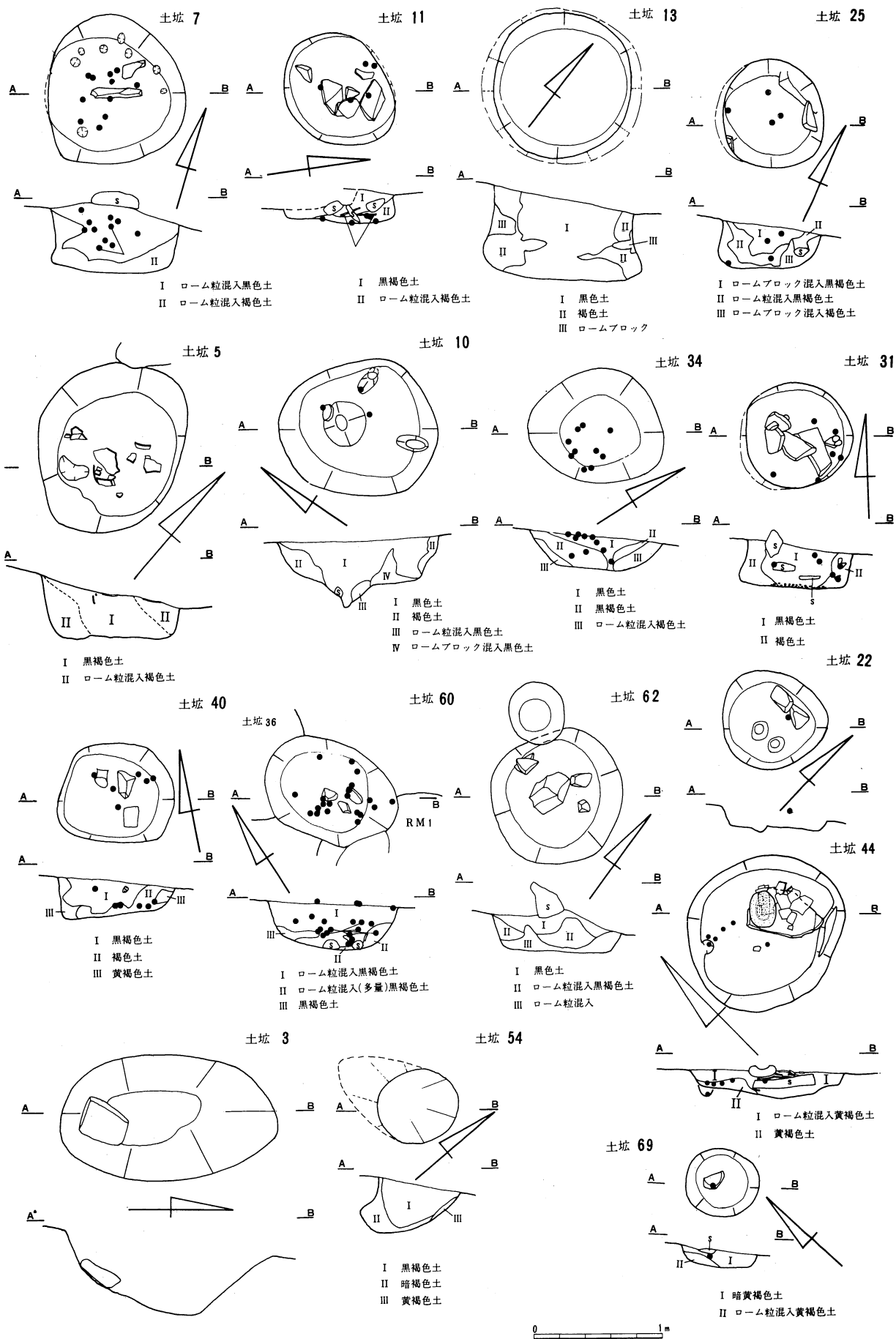


図16 船靈社遺跡土塚 (1:40)

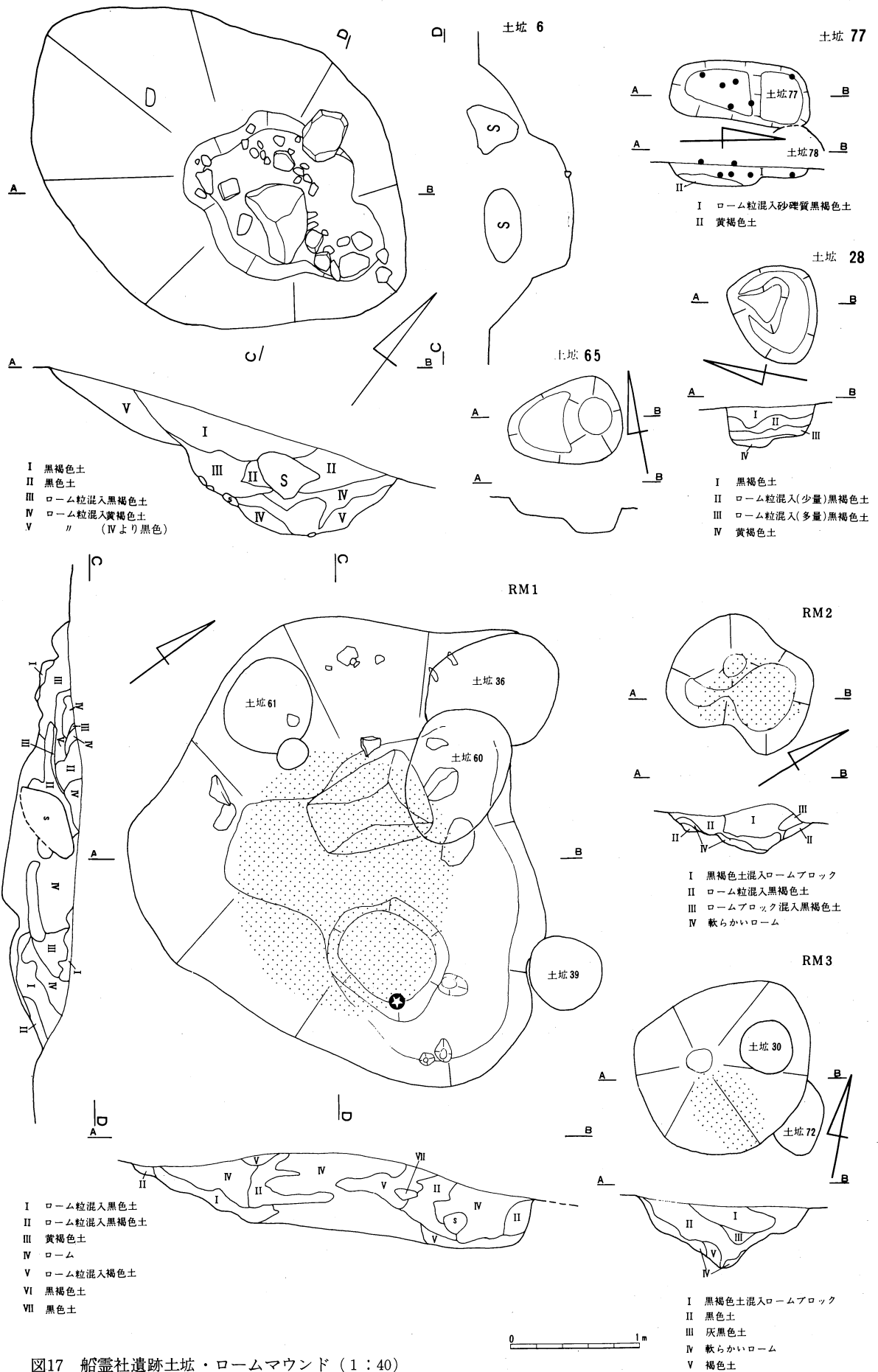


図17 船靈社遺跡土壇・ロームマウンド (1:40)

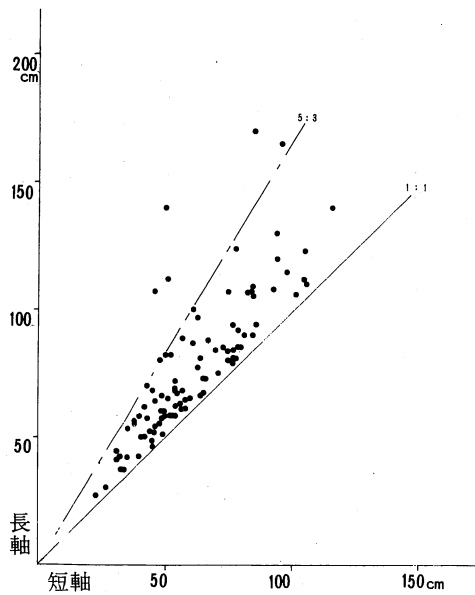


図18 船霊社遺跡土壇長軸・短軸相関図

がほとんどローム層上になってしまったが、本来の掘込面を考え合わせるならば、dのなかにもこのbに入るものがあると思われる。cは8基である。柱穴的な土壇であり、多くが木の根等により底面を破壊され、なかには手の届かない程深くなってしまったものもある。

dは、22、24、69号など32基を数え、もっとも多数を占めている。bが、A、Bの形態だけであるのに対し、dは、A、Bのほか、E 5基、C 1基を含んでいる。eは、3、54号など20基である。1、2、3号のように大形のものもあれば、54号のように自然的影響力を受けたと思われるものも見られる。fは、6、28、65、77号等5基である。床面に段差をもたせることにより、区切って機能化させているものではないだろうか。51年度の居沢尾根遺跡では、楕円形の土壇が2段底をなし、深部に底部穿孔の浅鉢が逆位

で、浅部に深鉢が正位で据えられて出土している例が見られたが、同様のものであろうが広さの関係もあってかBが5基と多い。

土壇埋土の堆積状態については、断面で見ると、自然埋没の様相を示すものがほとんどで、13号などはその典型的なものである。本遺跡内において何らかの遺物を出土する土壇は55基あり全体の半数以上を占める。遺物には、土器、石器、土製品等があり、このうち土器を伴わない土壇は5基であり、土器は、九兵衛尾根Ⅱ式の様相を示すものが主体となっている。

図56-77は、44号土壇の遺物である。埋土中の大きな平石と、石皿の間につぶれた状態で出土したもので、胴部のみ半分程しか残存せず、この程度の遺存状態を示すものに、5、11号がある。また、この44号のように自然石を埋土中に入れているものが、11、31号など25基あり、遺物を包蔵する土層と一致している。12、13号住居址内から検出された土壇は、いずれも上面に住居址の貼床が施されていた。80号などは住居址とほぼ同時期と思われるが、他の土壇の遺物は縄文土器が主体であった。

遺物が土壇内で機能していたことを示すものはなく、また、各々の規模、或は形態によつての遺物出土の傾向、偏りは特に見られず、それは土壇が自然埋没したのに伴つての遺物の混入を示している結果であると思われる。これらの埋没開始の時期は、土壇1・80を除いては、遺物を出土しなかったものも含めて、ほとんどが縄文中期初頭に属するものと思われる。

なお、土器は82と83号、90と96号、22号と11号住居址出土のものが接合されている。また、土壇41の414・415は新道式土器の様相を見せている1点で、時期的には2号住居址の遺物と一致している。

(9) 黒曜石集中地点 (図19、図版43-4~6)

4・5号住居址の東、DK-34グリッドから1ヶ所(第1地点)、14号住居址の北約2mのDS-38グリッドから1ヶ所(第2地点)、いずれも耕作土下の黒褐色土層中から検出された。

第1地点では、自然堆積した安山岩の大石に囲まれる様な状態で77点が出土した。そのうち65点は原石で、他は剥片、碎片である。原石は最大7.5×3.8×2.1cm、最少2.5×1.7×1.0cmで挟雑物を若干含むものもあるが総じて漆黒を呈す良質なものである。いずれも剥片がはぎ取られたものではなく、自然面や風化面

をもつ、柱状・板状・塊状の外形をもっている。集中範囲は40×25cm、深さ15cmで、掘り込み等は確認できなかった。

第2地点では、黒褐色土中の60cm四方の範囲に50余点の原石、剥片、破片が集中して検出された。このうち36点が原石で、28点は20cm四方の範囲に15cmの深さでおり重なっていた。周囲には黒褐色土中のため掘り込み等は確認できなかった。原石は第1地点のものより大きく、最大7.4×3.8×2.5cm、最少2.2×2.0×1.5cmであるが、ほとんどが大ぶりのものである。第1地点の原石と同様、自然面、風化面を残すものが多く、剥片がはぎとられた痕跡を残すものはない。挟雑物を含むものであるが、全て漆黒で良質な石質をもち、形状は柱状・板状・塊状である。

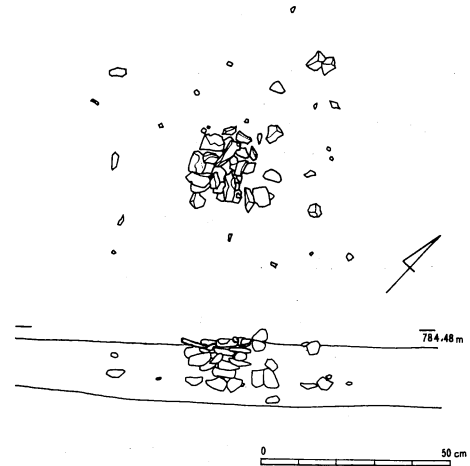


図19 船霊社遺跡黒曜石集中地点（1：20）

第1、第2地点ともに、土器等の出土はなく黒曜石のみの出土で、時代を明確にはできないが、これだけ多くの原石が集中して出土したことについては、石器製作のために黒曜石をストックしておいたとしか考えられず、おそらく、縄文時代中期初頭の住居址群にかかわる遺構であると考えられる。長崎元広氏が『山麓考古』第12号(1980, 1)で「黒曜石貯蔵例と交易」と題し、この種の黒曜石集中に関して述べており、住居址内に貯蔵される例(海戸遺跡36・53号住居址他)と、屋外に貯蔵される例(梨久保遺跡、P₂・P₃、屋外に穴を掘り埋納他)があり、13遺跡22例について述べ、縄文時代中期に特に多く見られ、このような例は諏訪盆地に集中していることを指摘している。さらに、集落内消費のみではなく、交易品としても扱われていたと述べている。おそらく、船霊社遺跡の集中して検出された黒曜石も、そのような性格をもっていたものであろう。

なお、11号住居址北東6mにあるロームマウンド1号の底面にある落込みからも、径3～4cmの黒曜石の原石が20点程集中して検出された。この落込みはおそらくロームマウンドに先行する土坑と考えられるので先の二例と同様、黒曜石集中箇所と判断され、掘り込みをもつ例としてあげることができる。

(10) 焼土検出地点 (図1)

ロームマウンド1号の南東DR-40グリッドより焼土を検出した。焼土の範囲は100cm×60と広く南東から北西へ楕円形状に広がっており、黒褐色土下層から暗褐色土層にかけて存在していた。このレベルは住居址、土坑等を検出した面よりも若干浅い土層中である。焼土の状態は、鮮朱色を呈しており、中央部よりも周囲の方がよく焼けている。炭化材、灰、礫等は含んでおらず、また、全体に厚く、最大厚30cmを計る。平面・断面を見てもこの焼土周辺には落ち込みらしきものは見当らず、ただ北寄りには、暗褐色土下層からローム層へ掘り込んだ土坑63が検出されたのであるが、位置、レベルとも若干異なっており、この焼土は土坑に結びつくものではない。焼土内からの遺物の出土は皆無である。

2) 古墳・平安時代の遺構と遺物

(1) 第5号住居址 (図20・87、図版44・62)

扇状地の最も中央部に寄ったD I～L、36～39グリッドを中心に、4号住居址と切合って検出された。東南4mに12号、西南3mに8号各住居址が近接している。ローム層上面で検出されたが、緩斜面であり

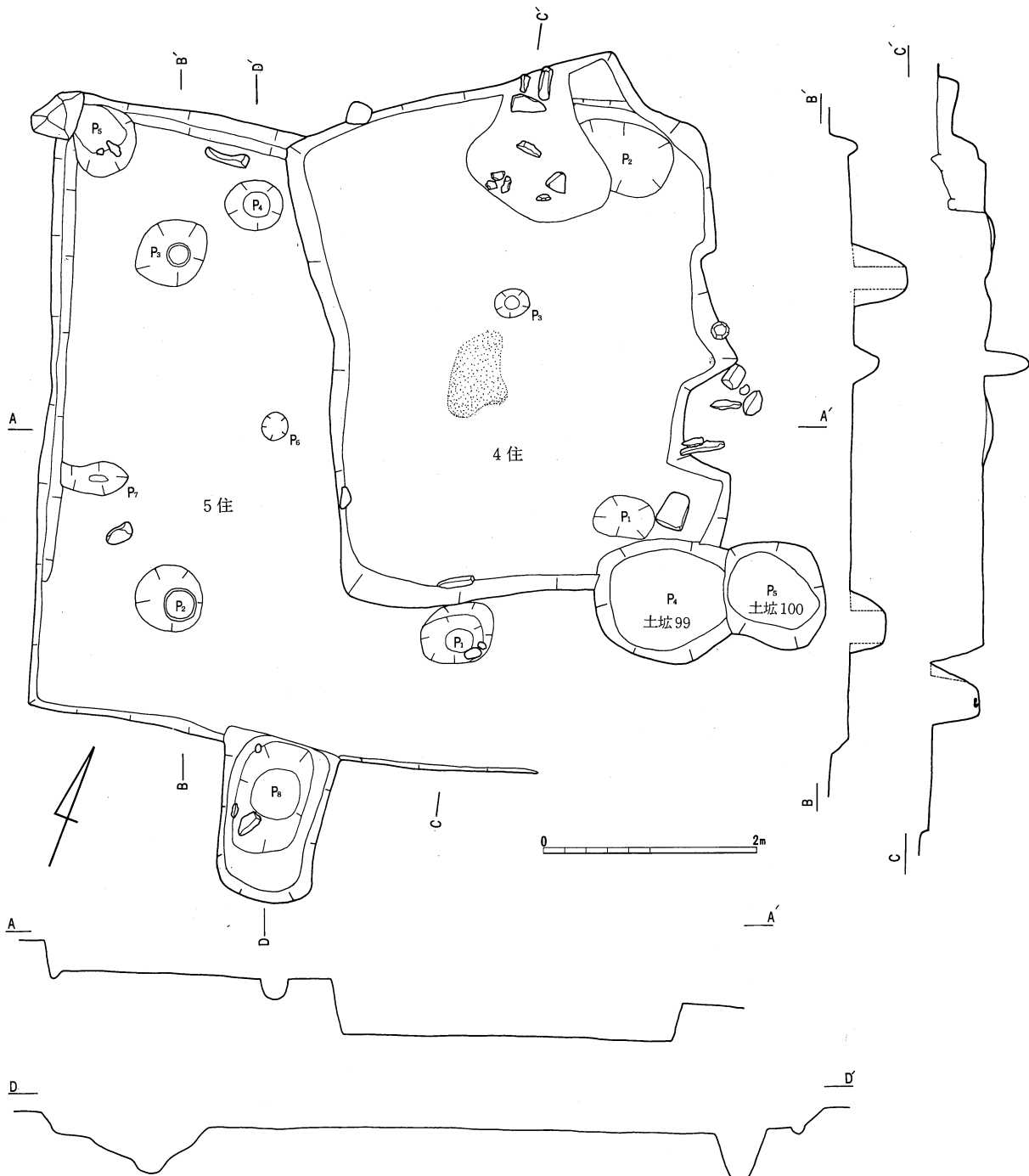


図20 船霊社遺跡第4・5号住居址 (1:60)

南壁ではロームへの掘り込みがないことや、重複する4号址によって東側半分を切られているためプランは不明であるが、ほぼ東西5.2m、南北5.7mの方形を呈する。主軸方向はN20°W。

壁高は一番高い西壁で24cm、南・北壁は10cm前後で低い。周溝(幅10、深さ7cm)は西壁から北壁にかけてある。南壁中央には1.5m×97cmの長方形張り出し部が付属する。住居址全体の埋土は炭化物や小礫を若干含むしまりのある黒色土層で、自然堆積による埋没状態を示している。床面はローム層を掘り込んだ住居址西側半部はたたきしめられて良好であったが、東側は黒色土層中のため明確にはつかめなかった。

柱穴は主柱穴4本型であるが、内1本は4号住居址に切られてない。P₁(68×57、-44cm)、P₂(65×60、-33cm)、P₃(65×62、-50cm)がそれで配置もよい。とくにP₁~P₃には明瞭な掘り方が確認された。ローム粒乃至プロ

ックを含む褐色土層の中央よりに黒土が丸く残り、その部分が掘り方よりやや深めにローム層を掘り込んでいた。P₆・P₇はともに5cm前後で浅く、特別に柱穴とは考えられない。住居址西北隅には下半部が埋没している自然石が壁として利用されているが、その下にP₅(70×60、-51cm)がある。やや袋状に石の下へ掘り込まれていて、埋土の黒色土層中から土師器杯(図87-2)1ヶが出土した。貯蔵穴であろう。南壁の張り出し部P₈は二段になり、浅い方は住居址埋土と同一の黒色土が、深い部分は褐色土が充満し、拳大から幼児頭大の礫を多く含んでいた。浅い上段部からは甕(図87-6)、杯(同-1)が出土し、甕と杯はあたかも甕から杯へものをあけるような格好で杯の上へ甕の口縁が横倒しになった状態(図版44-5・6)で出土している。貯蔵穴と思われるピットである。

カマドは、北壁中央付近にあったと思われるが、4号住に切られており、検出することはできなかった。しかし、カマドの左側にP₄(54×46、-40cm)があり、内部には焼土が堆積していたので、カマド横に通常見られるピットと考えてよいであろう。

遺物(図87)は比較的少なく、床上からは甕(5)がわずかに復元できるのみであるが、北西コーナーのP₅及び南壁の張り出し部から杯、甕が出土した。P₅及び張り出しピット(P₈)から出土した杯は、いずれも杯AⅡに分類され、強く内湾する口縁部が大きな弧をえがき口端まで連続する半球状の深い器形をもつ。口縁部外面には指圧痕が若干残り、器面全体に細かなへら磨きを施している。器肉は厚く、器面は茶褐色で光沢がある。胎土には1~2mmの砂粒を含み、粘質の高い粘土が使用されており、焼成は堅く良好である。3の杯は有稜の内面黒色土器である。へら削りを施し、その上をていねいにへらで磨いている。胎土は茶褐色を呈し、細かな砂粒を含んでいる。焼成は良好である。4の杯は須恵器で、器面内外にロクロナデの痕が残る。薄い暗灰色を呈し胎土中に細粒の砂を含み、焼成は中程度である。12号住居址からの流れ込みと思われる。5は小形甕の口縁部でほぼ直線の胴部から、口縁部が外反する器形をもつ。器肉は薄く、胎土は細かな砂を含み、焼成は中程度である。6の甕は全体に成形が粗雑であり口縁部の内外面がヨコナデされている他は器面全体に粘土紐目がはっきりと残る。胎土に3~4mmの砂粒を若干含み、金雲母も中程度に含まれている。焼成は良好である。

図示した他には内面黒色の丸底の杯破片、有稜杯の稜部小破片、甕の底部・胴部片や須恵器甕の胴部破片、土師器杯の小破片が出土したのみである。

杯や甕の器形からみて古墳時代後期に属する住居址である。

(2) 第13号住居址 (図21・22・87、図版47・48・62)

本址はDP~DR34~37グリットを中心に検出されたが、12号住居址に住居址の西隅から西壁を切られている。北西には4・5号、北東に3・6・7号住居址が隣接している。東西4.8m、南北4.8m、主軸方向はN8°Wで、ほぼ磁北と同じくする。

埋土はローム粒まじりの褐色土が大部分を占め、ローム粒まじりの黒褐色土、焼土などが不規則に入り込んでおり、自然堆積していたのではなく、12号住を構築する際に攪乱されたと思われる層序を示している。傾斜地に造られており、斜面上方には12号住居址があるため、当初プラン等は確認できなかったが、12号住居址の床面確認のための補助トレンチを入れた際、その延長上でまず床面と東側周溝が確認でき、さらに床面を広げることにより全体の平面形を確認し得た。そのため壁は、北西方向で12号住居址と切り合っている部分からカマドまでのわずかな間に、20~10cm程と、同じく12号住居址と切り合っている南西隅から南壁までが、32cm~20cmの高さで残存しているのみで、北壁カマドから東壁には全くなく、周溝が

第四章 調査遺跡

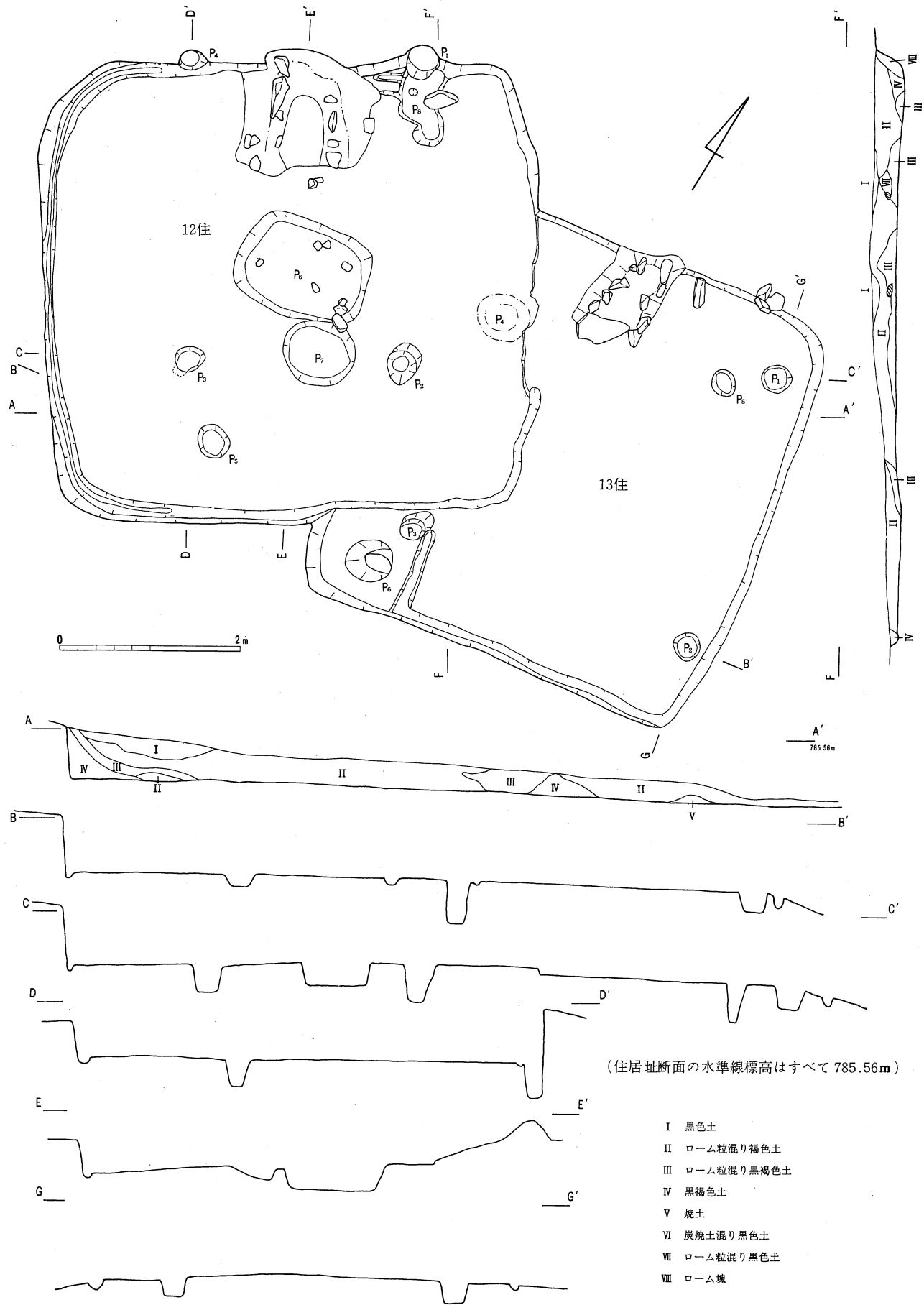


図21 船靈社遺跡第12・13号住居址 (1:60)

まわっているのみである。床面はやや凹凸のある地山のローム上に、厚さ10cmほどロームを混じた灰褐色土で貼床されており、堅く良好な状態である。貼床下に縄文時代と思われる土塊81・83・84・88・102が検出された。周溝はカマド東の北壁から東壁、南壁へとまわり、南壁の中心から90cm西へ行き、直角に折れ曲り1m北方へ伸び止まっている。幅10cm、深さ約15cm～10cmである。

主柱穴はP₁ (30×30、-21cm)、P₂ (30×25、-25cm)、P₃ (30×40、-44cm) の3本と、残りの一本は12号住居址東隅貼床下から検出されたP₄ (60×50、-38cm) の4本で、壁際にいずれも立てられている。P₅はP₁の支柱穴と思われる。P₆は、西南壁隅に掘られ、底部に石が置かれている。55×45cmのほぼ円形で、深さは60cmと主柱穴の約2倍の深さをもっている。貯蔵穴の一種であろう。

カマドは北壁中央部に築かれた石組粘土カマドである。粘土部はほとんど崩れ落ち、石組の頭部が露出した状態で検出された。石組の遺存状態はよく、両袖石はそれぞれ4枚の平石が、床面を約10cm掘り込み立てられている。焚口部の天井石がカマド前部に、最奥の天井石がカマド右内側へずり落ちていた。支脚石は完全な姿で遺存していた。長さ23cm、一辺10cmの角柱状の安山岩を用い、床面下へ直径20cm、深さ10cmの穴を掘り立てている。カマド内は焚口部が一番強く

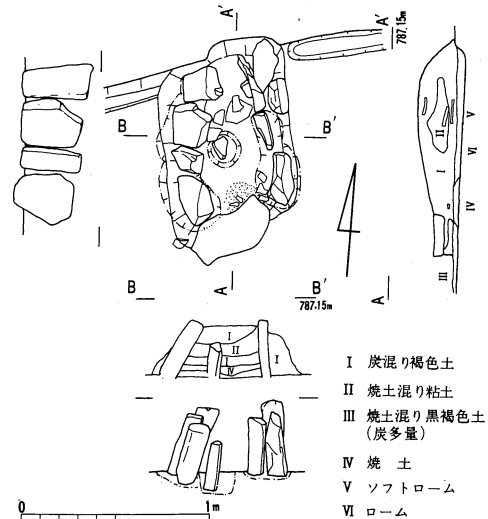


図22 船靈社遺跡第13号住居址カマド (1:40)

燃焼をうけており、15×30cmの範囲で厚さ5cmの真赤に焼けた焼土が残るが、全体としては、強い焼成をうけていない。

遺物 (図87-7-14・64) は土師器杯C、須恵器蓋各1点のほか、土師器甕、甑各2点が主たるもので、図示してはいないが、土師器甕の口縁部片、小形甕口縁部片、土師器杯破片等が埋土中より出土している。

杯7は丸底をもち、底部から口縁部にかけてゆるやかに内湾し、器高上半で立上り気味となる器形をもつ。器面外部はへら削りの後、ていねいにへら磨きされ、内面も同様に緻密なへら磨きが施されている。底部外面にはへら削りの痕が残る。9の杯は内面黒色土器で、底部が厚くへら削りされ、胴下半は指圧痕が残る。口縁部は横ナデされ、内面はハケ目がわずかに残る。他所からの混入と思われる。蓋8は須恵器で、成形痕が顕著に残る。天井部はへら削りされ、口縁部から立上りまではロクロナデされている。内面はロクロナデされた後、ミダレナデがされ、天井部裏面はタタキの後にミダレナデがなされている。暗青灰色を呈し、胎土に1～2mmの石英粒、細砂粒を含み、焼成は良好である。64の小形甕はカマド内より検出された。口径12.6cmの小さなものである。10の壺は胴部上半を欠くが、口径19cm、器高26.8cmに復元される。厚めの底部から丸く張る胴部からゆるやかに外反する口縁部へと続く。内面はヨコナデされ外面には縦方向へのナデ痕が見られる。胎土は暗茶褐色を呈し、微砂粒、雲母が混じられている。焼成は良好である。甕は4点出土した。11は筒状の細長い体部から外反する口縁部をもち、内面「く」の字の頸部に稜線がつく。器内外面は口縁部を除きハケ目が施されている。甑は2点出土した。1点は把手がつくが、他にはない。13の把手がつく甑の外面下半はへら削りされ、口縁部、内面はヨコナデされている。14の甑は、外面に縦方向のハケ目が施され、底部には横方向のハケ目がわずかに残る。内面上部は横方向にへら磨きされ、下半は縦方向に磨かれている。胎土に微砂粒、雲母を含み、焼成は非常によい。

7の杯、8の須恵器蓋や甕・甑の形態から、5号址と同様古墳時代後期に位置する住居址である。

(3) 第3・6・7号住居址(図23・24・88・89、図版45)

2号址(縄文中期)の北西に近接して検出されたが、2号址同様、3分の1が用地外のため完掘できなかった。今回の調査では、最も傾斜の低い、北側にある住居址となる。当初は1軒と考えたが、調査の進行に伴い、更に2軒の住居址が重複している可能性が生じ、3号のほか6・7号址を追加した。しかし、結果的には3軒の重複を明確に区分することができず、ここでは一応、一括して記述したい。

まず、一番外側にある3号址は、部分的にローム面まで耕作による攪乱を受けていたため(図23の鎖線)検出面はローム層からである。黒色土層の落込みが比較的明瞭に区分でき、傾斜の高い西壁が最初に検出された。6.3mと長い壁高は15~20cmと浅い。しかし、この西壁につながる南壁部分は耕作によってローム上面が削平され、まったく不明であり、一方、北壁も、西壁から1.5m前後まではたどれるが、それより先は、やはり攪乱によるローム層の削平で消失していた。調査部分から推定すると一辺6.3~6.0mの方形プランが考えられる。周溝は北壁から西壁のほぼ中央付近までと、西壁南端に一部あるのみで連続せず、幅15~10cm、深さ約3~5cmと浅い。床面は周壁に沿った部分では、ほぼ水平に検出されたが、良く踏み固められたという状態ではなく、ローム層の場合もあるが、黄褐色乃至褐色土層による貼床部分もある。住居址中心部は、黒色土層の落ちこみがあり、後述の6、7号址と重複し、3号址の床面と認定できるような部分は全然なかった。3号址に伴った柱穴は、西南隅から1.8m離れた貼床された部分にあるP₁(29×23、-50cm)と西壁中央よりやや南によるP₂(32×23、-50cm)がある。P₁はその位置からは本址の支柱穴としてよいが、他は攪乱部や用地外で検出できなかった。P₂も本址に伴う支柱穴であろう。

3号址の西・南壁付近より中心部に向かって床面の検出中に更に一段の落ち込みが判明したので、これを6号址とした。3号址の推定南壁より1.0~1.5m北(内)側に南壁が検出された。用地境まで4.2mにわたり、中央部がわずかに張り出すが、ほぼ直線的に3号址床面を10~25cm掘り込んである。西壁も南壁につづく1.2m付近までは直線的であるが、それより先は、ローム層や褐色土層を20~30cm掘り込んだ、周壁らしくない、傾斜をもった、不明瞭な周壁となり、弯曲しながら北壁へつづく。この北西部一帯の埋土は上が黒色土層であるが、床面と同じレベルやそれ以下は、ローム粒を混じた黒褐色土となり、部分的に耕作による攪乱があったり、かつ、羽口、鉄滓などと共に土師器小片が散在し、明確に層位をとらえられなかった。また、北壁の中央には焼土がわずかにあり、カマドの存在も予想されたので、とりあえず、住居址南側から追及することにした。6号址の南壁は中央部より東側は浅くなり、壁自体も不明瞭であるが、西側から西壁にいたる部分は地山の傾斜に沿って深くなり、ほぼ垂直に近く、比較的良好な遺存状態であった。幅10~15cm、深さ5cm前後の周溝が3号址同様、南壁と西壁の接続するコーナー付近にあり、他は断続的に痕跡が残る。床面は周壁に近いのか余りよく踏みかためられておらず、貼床的な部分が大半で、ローム層上の床面は、わずかに用地境に近い不明瞭な周壁付近のみであった。しかも、床面自体は水平でなく、凹凸があり、西側へ傾斜している。柱穴はない。こうして6号址の南側からの調査も、わずか60~100cmで、再び黒色土層の落ちこみにあたった。これが7号址である。

7号址は、6号址の内部に作られているが、南壁、西壁の一部のみの検出であり、他は用地外であったり、6号址と重複するような形なので、プラン等を明確にできなかった。6号址の南壁から60cm前後内側にある長さ2.6mの南壁は、ほぼ直線的であり、6号住床面を25~35cm掘り凹めている。西壁も約2mつづくが、中央部に向かうに従い、6号址の床面自体が傾斜しているため、壁の掘り込みも浅くなり、自然消滅してしまう。周溝や柱穴はない。本址の中央部より東側の埋土(図23-C・C'断面)は粘質のある黒褐

色土であり、木炭粒（所により多くなる）やローム粒の混入がやや目立ってくる。しかし、住居址中央部西側では、黒色土層がやや深くまでレンズ状に堆積していた。床面はほぼ水平であるが、余り堅緻でなく、中央より用地境にかけては、ロームを混入した貼床部が明瞭に残っていたが、西・南壁付近ではローム面に小石などが入っている部分も見受けられわずかな凹凸もあり、余り良好な状態ではない。西・南壁コーナーに5cm程床面より浮いて焼土（径20cm、厚さ2～3cm）があり、また南壁の用地境にあるF₁（80、-40cm）は、最終段階で検出されたが、人頭大の石や焼土を多量に含む層があり、深すぎる点はあるが、本址のカマドと推定できないことはない。なお、北壁に近い同じ用地境にも径20cmの範囲に厚さ5cm前後の焼土F₂

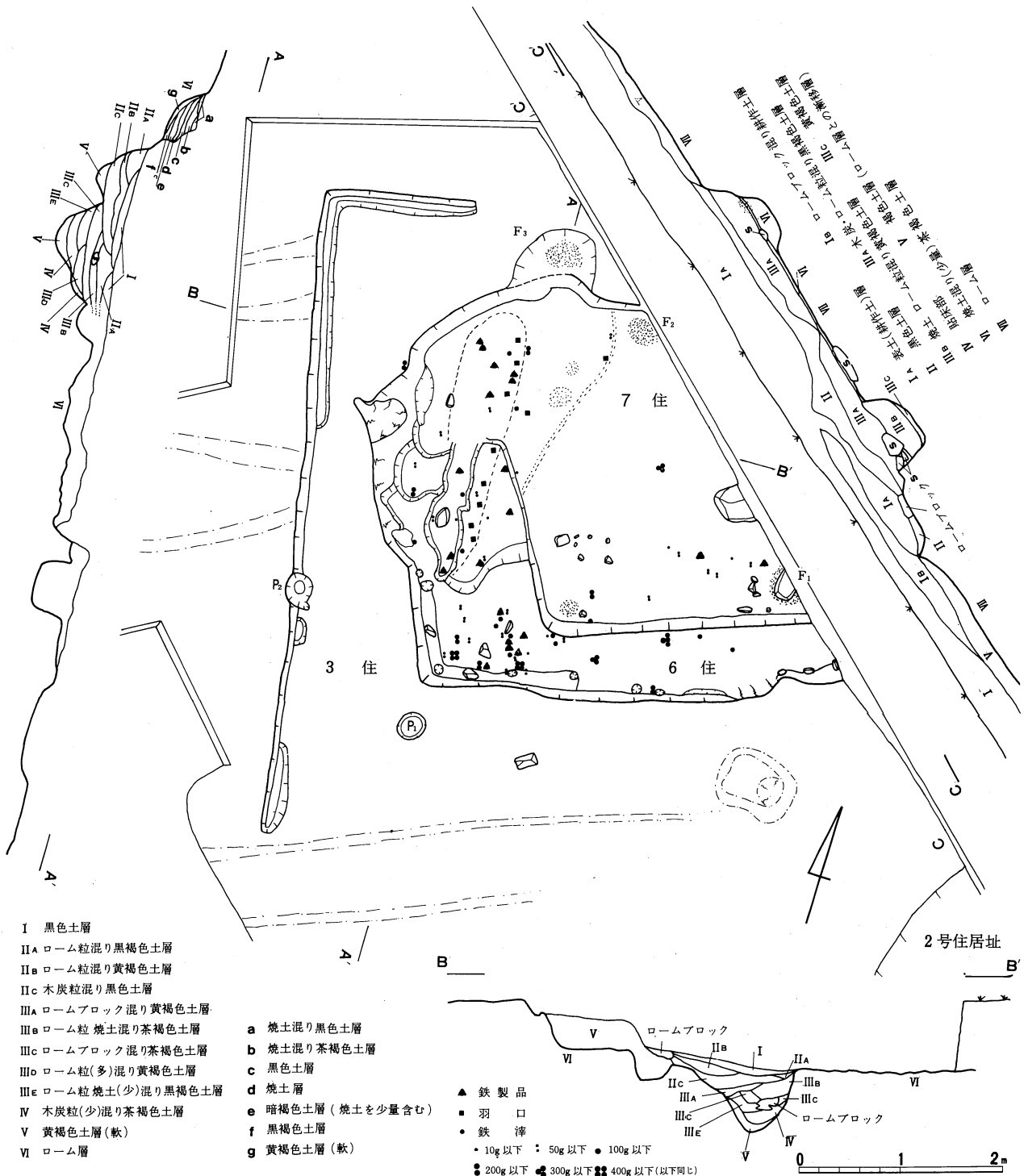


図23 船霊社遺跡第3・6・7号住居址(上面)(1:60)

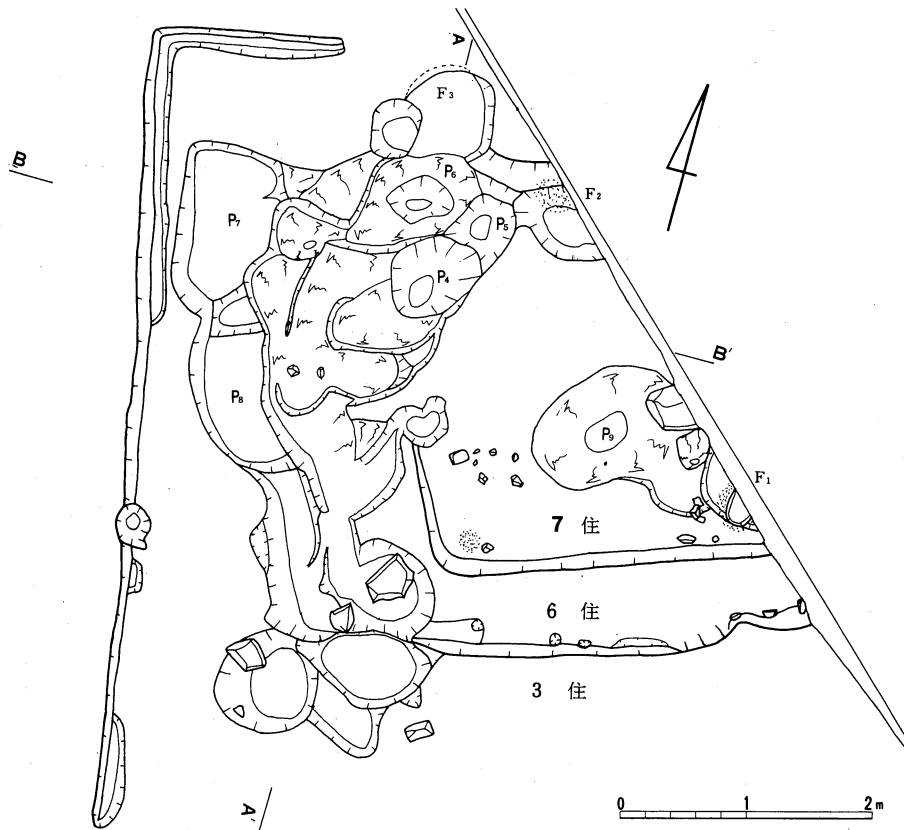


図24 船霊社遺跡第3・6・7号住居址(下面)(1:60)

が貼床の中から床面上にかけて存在した。このF₂の貼床下は浅いピットであるが、ピットを埋めて貼床してあり、かつ焼土の在り方からみてカマドではないらしい。

以上の3・6・7号址のうち、6・7号址の西壁から北壁にかけての部分は、調査当初から、切り合い関係や土層の堆積状態が複雑であったため、一応6・7号址の床面レベルで整理したが、6号址の黒色土層、7号址の木炭粒、ローム粒を混入した暗褐色土の各埋土も、この部分では明確に区分できず、かつ遺物の出土が多くなり、相当深くまでの落ち込みを予測させた。わけても注意すべきは、6号址の西壁よりから床面レベルを10cm前後掘り下げて、7号址の西壁北隅を切り、6・7号址北壁部にいたる、上辺の幅40~50cm、長さ2.5m前後の溝状部分と、この北端に連続して検出された、ピット群である(図24)。この一帯は先述したように部分的に深耕による攪乱があったが、溝状部分は、やや多くの木炭粒を含み、所々にかすかに焼土や灰のある黒色土層が落ち込み、中から羽口・鉄滓・鉄製品が連続して出土した。(図23、図版45-3)。この部分は多少北側(ピット群)に向い低く傾斜している。羽口は全面に、鉄製品は北側と溝外になる6号址南西隅の部分に多い傾向を示した。羽口の出土状態は溝に平行しているが、規則性はなく、無雑作に廃棄されたという感じである。この溝状部分の南半は、6号址の床面レベルを切り、北半でも7号址のそれより深くまで掘られているが、ただ、中央部から北壁よりの一部分の範囲に7号址の床面レベルとほぼ同じ高さにローム粒を混えた黄褐色土層上面が堅く貼床状を呈するところがあった。しかし、これも面的な広がりではなく、部分的で、かつ所によっては5cm~10cm前後の高低があるなど、6・7号址を独立する住居として把握する根拠がほとんど得られないような状況であった。

そこで、中心部はあとにし、周辺から追うことにする。まず北壁にあるF₃(50×40、-30cm)は、当初3号址床面レベルにわずかに焼土が存在したのみであったが、多少掘り下げたところ図示するような形状となった。カマドの焚口部のような状態で、内部は焼土が互層に堆積しているが底面は火熱をうけた痕跡はない。前

面は明らかに6・7号址の北壁部構築で切られており、その先後関係が明瞭にわかる。カマドとすれば、6・7号址に付属するかとも考えられるが、カマド横のピット（貯蔵穴）とすれば3号址に伴うとしてもよい。付近には袖らしいものは何もなく、その性格を決定できない。また、このF₃の前面、換言すれば溝状部分の北半部は、最終的にはローム層を50～60cm掘り込んだP₄(72×65、-63cm) P₅(45×48、-30cm)、P₆(50×38、-20cm)のほか多数のピットが連続していることが判明した(図24、図版45-1・2)。平面的にみると、3号址の北西コーナーに三角形にこのピット群が存在することになる。これらピット群の切り合い関係は余り明瞭でなく、P₄・P₆をみてもその断面から先後関係を追及できない。最も深いP₄の埋土をみると6～7層に及ぶ各層とも南から北へわずかに傾斜し、比較的多く焼土や木炭粒を含む層とほとんど含まぬ層が互層となり、その間に拳大から幼児頭大の河原石や同程度のロームブロック数ヶ所が入っている。ピット最上層の黒色土層が溝状部分の下部にあたり、羽口や鉄製品の多い部分もこの層前後で、遺物はこの層につづくローム粒混り黄褐色土層以下は極端に少なくなる。

ピット埋土の断面でみるかぎり、ピット群は余り大きな掘りかえしなどなく、自然堆積の様相を示している。しかし、溝状部分のレベルは図23の二重点線の部分(7号址北西コーナー)まで何度か掘りかえしが行なわれたような層序関係が認められた(水平になる層がなく、乱雑な堆積状況である)が、この部分が遺物の包含層であり、それ以外にはほとんど遺物はなかった。なお、P₇・P₈などの外側部分もその上面にわずかに土器片や鉄滓の小片をみるのみで大半は遺物が出土せず、ローム粒混りの黄褐色土層や茶褐色土層が埋土であった。

以上のごとく、3・6・7号址は最終段階で日時がなく、十分な調査を実施できず、かつ東側部分を未掘に終わったため、その全体像をつかめなかった。とくに、これが3軒の住居址の重複であるか否か、また3軒とするならばその先後関係はどうかという点でも、結論が出せない。そこで現時点における考えを記してまとめたい。

まず、3号址は、その床面が周壁付近のみで、中心部はほとんど6・7号址・溝状部分、ピット群によって切られており、最終段階の住居址でないといえよう。次の6号址は3号址床面を切っているが、床面は南壁部分のみで、大半が7号址と溝・ピットなどに重複し、同一レベルに貼床が全然なかった。ために6号址が7号址より新しいともいえない。では、6号址床面を切っている7号址が最も新しいのであろうか。西南部の溝、ピット群の上面にある痕跡的な貼床は、そのレベルが7号址床面にあたるが、範囲が狭くかつ部分的で、所によつて6号址床面レベル付近までのぼるものもあるなど、少なくとも床面から新旧は論じられない。ただ、用地境セクションからみれば、住居址中央部は、ローム上を更に貼床しており、中にはその下部からP₉(150×90、-30cm)などが最終段階で検出されるなど、住居址らしい一面もあり、6号址を切っている南壁付近の調査中の所見では、7号址が6号址より新しいとの考えが多かった。なお、7号址の埋土であるローム粒・木炭粒混りの黒色土層からは遺物はほとんど出土せず(土器小片などは深耕による攪乱土中であつた)、6号址床面レベルから上に遺物の出土が目立った。調査中の認定でも単純に3→6→7号址の順を主張する声もあつた。

しかし、一方では、この3つの住居址を別個のものとして、一括してとらえる考えもある。即ち、羽口、鉄滓など製鉄址に関連する遺物の多出した溝状部分を重視し、一般的な住居でなく、製鉄関係遺構としてみる場合である。一番外側にある3号址が上屋構造をもつ住居で、内側の6・7号址は作業場の役割を果たしたのではないかと見る解釈である。この場合、作業場は、炉址の使用度が進むにつれ次第に浅くなり7→6号址と床面レベルの改築があつた(或はその反対も考慮できるが)とするか、或は、7号址の作業場に

第IV章 調査遺跡

対し、6号址は特に住居内における棚状の部分と見なす考えである。小規模な家内製鉄関係遺構は今回調査の洩矢遺跡第3号住居址(123頁)でも指摘された如く、県内でも散見するが、本址の如き例はなく、相当規模の大きい製鉄址と考えてよく、その点からもこの一括した想定を否定もできない。いづれにしろ3・6・7号址としたが、その実態は不明な部分が多い。今後、更に検討を加えたいと思う。

次に遺物の出土状態は、耕作土中位から次の黒色土層までの30~50cm程度が主となり、ドットを落してみると、溝状部分を中心に南側に濃密であるが、先述した如く、7号址埋土中にほとんどないように深い部分や調査区域東半には余り検出されない。また、他の住居址と異なり、器形のわかるような大形土器破片や完形品は少なく、ほとんど小片のみで、遺物の中心は鉄製品や羽口、鉄滓など鍛冶関係が多い点特記すべきであろう。以下その概要を土器から記してみたい。

重複して検出された本址であるが、土器の出土量は多い方ではなく、器形の判別できるものは少ない。3号址より出土した土器のうち、器形が判別できたものは、杯6点のみで、他に、甕の破片が3個体分以上検出されたが、全体の器形を知り得ない。図88-15は、土師器杯で、杯EⅡに分類される甲州型の杯である。底部の半分と胴の一部が検出されたのみであるが、口径11.6cm、器高4.8cmに復元でき、径高指数は41前後であると推定される。胎土は赤色を帯び、若干の微粒砂を含み焼成は良好である。底部内面はへら磨きの後、中心より放射状に幅約1.5mmの暗文が施こされ、胴部内面も同様に、二本を一組とした暗文が縦に施こされている。底部から立上った部分には横に一条暗文がまわる。底部はロクロ回転を利用したへら削りの後へら磨きが施こされており、墨書痕が見られる。字形は一部分のため判読できない。船霊社遺跡より出土した甲州型杯3点のうちの1点であり、本址の時期を決定する資料である。16は須恵器杯底部で高台をもつ。他に1点同様の破片がある。胎土は暗灰色を呈し、焼成は良好で右回転のロクロにより成形されている。17も須恵器杯で、底部に糸切痕が残る。器内外面に水びきの痕が見られ、全面ロクロナデにより整形されている。胎土は暗灰色を呈し、細砂粒を含む。他に同様な小破片が1点ある。土師器甕の破片が3個体分以上あるが、いずれも全体の器形を復元できない。

6号址から出土した器形の判別できるものは図89-40~43の4点と、甕2点分があるが、甕は3号址検出のものと同様全体の器形を復元できない。40は内面黒色の杯で、胎土に細砂粒を含み、外面は茶褐色を呈す。焼成は良好である。内面は横方向にへら磨きされ光沢を帯びるが、口唇部は炭素の付着が少なく、黒褐色を呈している。底部は糸切りされ、糸切痕の上へ窯印であろう直交する二本の沈線がへらによりつけられている。41・42は須恵器杯の底部である。いずれも糸切痕をもち、器内外面ともロクロナデの痕が残る。ロクロ回転は右方向である。43は須恵器蓋Bに分類される。宝珠つまみの中心は凹み、若干もり上げる程度である。天上部は、つまみから3cm幅が2回に分けへら削りされ、後の部分は内外面ともナデにより整形されている。胎土に、黒色、白色の微粒砂を含み、暗灰色を呈し焼成は良好である。甕は、底部から胴部の一部の破片が2個体分ある。いずれも全体の器形を判別できないが、1点は甕Eに分類され得る。他に、須恵器杯の小破片がある。7号址よりの出土土器はない。

3・6号住居址より出土した土器は、3号住居址の杯E、須恵器杯B・C、6号住居址より出土した杯類・蓋より、十二ノ后遺跡で行なわれた、奈良・平安時代の土器編年の第5様式にあたり、9世紀前半に属するものであり4・8・12号址と同時期に営まれた住居址である。3・6・7号住居址はその切り合いから単純にはその新旧を決定できそうであるが遺構の項の記述の如く相当むずかしい。ちなみに出土土器には大幅な時間差は認められず、3号址の廃絶と、6号・7号址の構築の間にはほとんど差がないといつてよいであろう。

次に鉄製品は3・6・7号址を一括すると次のようになる。

刀子 3 鋤 3 紡種車 3 賀多奈 1 不明鉄製品 18 計 28点

明確なものは4品目10点であるが、不明品の中に今少し検討すれば帰属が判明するものが数点ある。しかし、約30点近い鉄製品の出土は該期にあって多いといえる。その出土状態は、溝状部分の羽口出土地点の周辺や、6号址の南西コーナーの鉄滓集中地点に多く、他は少ない。これらの鉄製品のほか、鉄滓(スラグ)もまた多く、201点、総重量10,264gある。ちなみにやや多いと思われた4号址は13点、1,361gであるとき、本址の特異さが目立つであろう。ただ、溝状部分には意外と少なく、6・7号址の南壁寄りに比較的多く、とくに、6号址はそれが集中して出土する傾向がある。(図23の7号址内の鉄製品・鉄滓等の出土は、すべて6号址床面レベルより上であって、7号址埋土中でない。といってすべてが同一レベルではなく、6号址床面レベルから上方30cm前後の間である。)

羽口は溝状部分に沿って列状に9ヶ、やや離れて1ヶの計10ヶが出土した。完形品がないので個体数は多少少なくなるかも知れない。しかし、この溝状部分には、当初、鉄滓とまちがえた粘土に鉄分の多量に付着した小破片や、粘土内にワラ状圧痕の残る、カマドの壁の剥落した部分のようなものもあり、その中には羽口もあることを考えると、或はもっと個体数は多い可能性もある。いづれにしろ、こうした羽口の出土状態は、他の鉄製品や鉄滓などの関係とも興味ある事実を示している。こうした点についてはまとめの項で今少し追及してみたい。

以上、3・6・7号址は、3軒の住居址の重複であるのかどうか結論が出せなかった。ただ、溝状部分やピット群の検出、羽口・鉄製品・鉄滓等の出土状況から、相当規模の製鉄関係遺構であることは間違いないであろう。当時の製鉄関係の遺構については、まだ充分資料が集積されない面があり、本址は不十分ではあるが、該種遺構究明に良好な資料を提供したといえよう。資料操作にまだ不十分な点もあるので、本址については、後日あらためて再考する機会をもちたいと思う。

(4) 第4号住居址 (図20・25・86・88・89・92・93、図版44・63)

5号住居址を切り、ローム層を切り込んでいる長方形の住居址である。平面形は4.6×3.6mを計り、壁高は西壁42cm、東壁37cm、主軸方向はN28°Wである。

埋土は炭化物・小石を若干含むしまりのある土層で自然堆積を示している。南東コーナー壁には、土坑99があり、これを切って貼り床としている。柱穴は、床を精査したにもかかわらずP₃(30×28、-42cm)の1ヶが住居址中央に検出されたのみである。南東コーナーにP₁(60×40、-31cm)の鍋底状のピットが検出されたが柱穴というよりも、貯蔵穴と考えられる。床はローム層を深く掘り込んでいるため、耕作による攪乱をほとんど受けておらず、固くたたきしめられていて、良好であるが、東壁周辺では軟弱となる。床上には、人頭大からやや大きめの石が点在しており中にはカマドに使われた平石と思われるものもある。ただ住居址中央から、カマド石に至る範囲に貼床した浅いピット及び焼土が所々に検出された。これらピットの性格は不明であるが、不整形を示すものもあり、住居址を造る時に石を抜いたものであろう。(図20には省略)。まとまっていたP₃南の床下の焼土は、10cmの厚い堆積を示すが、どのような性格のものかは、はっきりしない。おそらくカマドの灰をかき出して、床の低い所に埋めたものと思われる。

カマドは石組粘土カマドで北壁東よりに設置されている。全長1.3m、幅75cmである。攪乱を受けていないため焚口部の天井石がずり落ちている以外は、燃焼部、煙道部ともに原形をとどめる良好な遺存状態で、今回調査した5遺跡では勿論、近辺でも余り例をみない遺存状態であった。袖部の石組は平石を1列

第IV章 調査遺跡

に並べ、ローム粒を多く含む粘土でおおい補強されている。袖間隔は45cmである。支脚石は見られなかったが燃焼部の焼土上には高杯の脚が検出された。燃焼部天井石を補強している粘土内に土師器小形甕（図89-38） $\frac{1}{2}$ 個体が、左袖部には、性格不明の十字形鉄品（図92-31）がそれぞれ出土している。焚口部は床面よりやや低くなり、燃焼部にかけて焼土が厚く見られる。煙道部は約30°の急角度をもち、煙出口部では水平となる。カマドの東には浅い鍋底状のP₂（98×65、-17cm）が見られ、このピット内及び周辺の床上には、多数の土師器、須恵器片が出土した。

当初本址は1軒だけで単独と考えたが、発掘が進むにつれ直線的でない東壁中央よりやや南

に寄ってもう1ヶのカマドが検出された。その結果、東壁がくの字形に角度を持ったり、プランが不整形であることから、一軒でカマドを2ヶ所有するより、二軒の重複と考える可能性がでてきた。この南側に検出されたカマドも、石組粘土カマドで焚口部、燃焼部の一部及び天井石が壊されており、燃焼部から煙道部にかけての両側の袖石がわずかに残っている。長さ1.1m、幅60cmで石組は1列に並び、支脚石を伴い、支脚石及び焼土上には、甕の破片が多く見られた。焼土6cmの堆積が見られ、焼土両側には、石組の平石をたててあったと思われるピットが検出された。このカマドの主軸方向は5号址を切っている4号址とほぼ同方向であり、或は5号址のカマドとも考えたが、柱穴の配置、平面形全体のバランスから無理であり、やはり4号住居址の建て替え、或は重複とする考えが妥当性あるであろう。しかし、床面の状態や周辺の調査から別個のものとする積極的資料もなく、別の住居址とせず、本址に含めた。

遺物（図88~89）はカマド周辺に集中しており、特に、カマド横のP₂付近に多く見られる。これらの土器は完形品または一括土器として取り上げられたものはなく、すべてが破片であったが、これらを接合した結果、39の四耳壺、15~28の杯、31~38の甕が復元された。土器片の接合関係は広範囲に及び、集中箇所から遠くなる程、接合数は少くなり、中には住居址の反対側まで接合しているのが見られる。これらの分布の方向を見ると、北側から南側へその接合関係が広がっていることが、認められる。このことは住居址の埋まる時に、この方向に強い力が働いたものと思われる。

出土した杯類は土師器の杯B、杯C、内面黒色の土師器杯B各1点、同杯C 5、同皿Bと須恵器杯C各

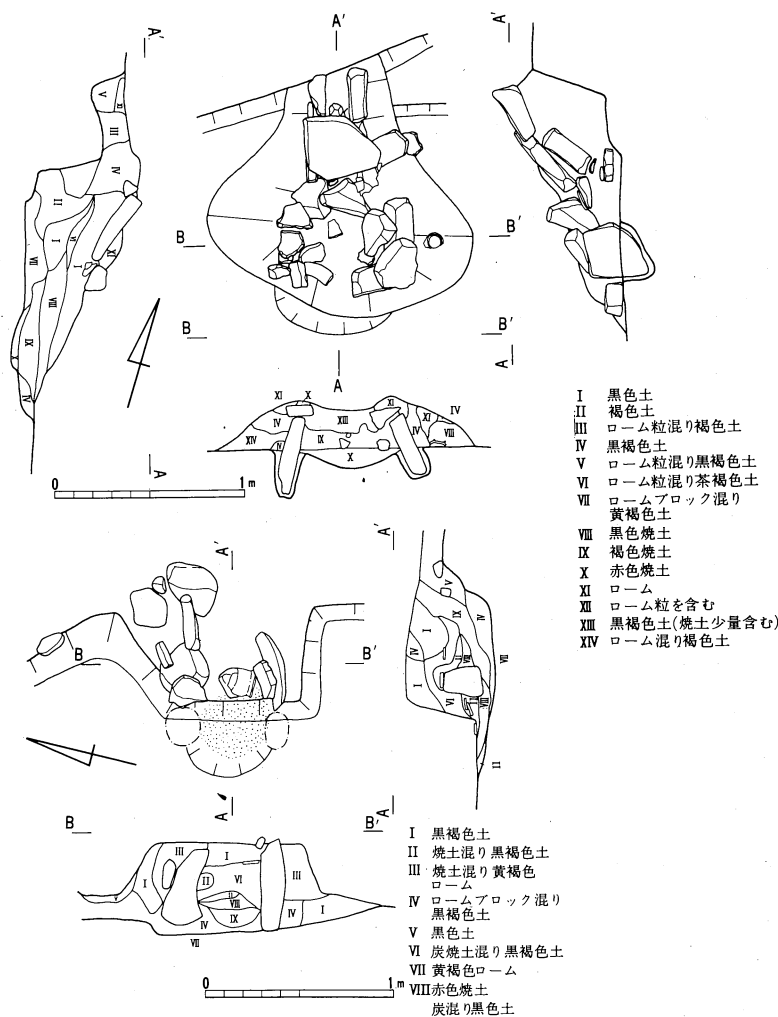


図25 船霊社遺跡第4号住居址カマド（1：40）

1点の他に、須恵器長頸壺の口縁部が1、土師器鉢1、土師器甕6、小形甕2、須恵器四耳壺1点の図示した土器の他に、土師器、須恵器、内面黒色の杯・甕類の破片、須恵器甕の破片等、古墳・平安時代を通じ、本址で一番多くの土器を検出した。他に鉄製品(図92・93)では、刀子4(2)、馬具の破片と思われるもの2、鉄鏃1、鋸ノミ1(31)、他器種不明の破片3、鉄滓13と鉄製品の出土も多い。土錘(図86-52・76)も4点ではあるが出土している。

杯類は、高台があるもの2点の外はすべて平底の杯で、内面黒色土器が全体の6割を占めている。18の杯は高台のある土師器で、外面はロクロナデされ、内面口縁部はヨコにみがかれ、底部までは縦方向にいいいなへラミガキが施されており、光沢をもった褐色から黒褐色を呈している。胎土には2mm以下の砂粒を多量に含み、焼成は良い。他の杯類は27の須恵器をのぞき、ほとんど同じ器形をもち、径高指数も30前後を示す。いずれも糸切り底で、外面はロクロナデで、内面はへラミガキが施されており、成形調整ともほぼ同一である。甕も同一手法による製作と思われる甕Eが大半を占めている。ロクロによる成形の後、外面全体をハケにより3～4段にわけて調整し、口縁部はロクロナデされ、器内面の口縁部は横に走るカキ目が施され、胴部から底部へかけてはナデの痕が残る。36の甕は1点のみ違い、器面内外はすべてハケにより調整され、底部外面にはへラ削りの痕が残る。器形も甕Eが細長い烏帽子状の脚部から急に外反する口縁部をもっているのに対し、胴部から口縁部にかけてはなだらかに外反し、頸部が長くなっている。39の須恵器四耳壺は、外面に上方から下方へタタキ目が施され、胴最下部はへラ削りされている。内面は底部はヨコナデされ、胴部中央はタタキ押えをスリ消し、肩部から頸部にかけてロクロナデが行なわれている。胎土は1～2mmの砂粒を含み、淡青灰色を呈し、焼成は良好である。以上の土器より、本4号住居址は諏訪地方土器編年の第5様式にあたり、9C前葉～中葉の平安時代前半に位置するものと思われる。

(5) 第8号住居址(図26・86・90、図版46・64)

本址はD地区のほぼ中央、DK-42グリッドを中心にして検出された。北東には4・5号住居址が、東には12・13号住居址があり、発掘された平安時代の住居址の中では、一番西境、扇状地の最上部に位置している。傾斜地への構築のため東壁は検出できなかったが、ほぼ1辺4.2mの方形プランをもち、主軸はN27°Wの方向を向く。

傾斜地上部の西壁は30cmと遺存状態はよい方であるが、傾斜地下部へ行くに従い壁高は低くなり、東壁は検出できなかった。壁高も余り高くないため、埋土の状態もはっきりとはつかむことができなかったが、黒褐色土が一面に落込んでおり、わずかに西壁から黄褐色土の流れ込みが見られたのみで、自然堆積による埋没と判断した。周溝はカマド西から西壁、南壁直下に検出されたが、カマド東から東壁には検出できなかった。周溝の幅は10cmで、深さはかなり差があり、浅い所は4cm、深い所で20cmを計るが、深い部分は西壁の壁際のピット周辺に限られる。床面は平坦で良好な状態である。床面、壁際より13のピットが検出されたが、いずれも規則性はなく、大きさにも差があり、支柱穴と判断できるものはないが、西壁際のP₁₁(25×20、-8cm)、P₁₅(25×20、-15cm)と、南壁を斜めに掘り込むP₁₀(70×45、-70cm)、床面のP₄(30×22、-15cm)は、上屋施設に関係のある柱穴と見ることができよう。P₈・P₉は、段差があるピットで、中央部のP₉は約60cmの深さをもつ。いずれも貯蔵穴の類と見ることができよう。

カマドは石組粘土カマドである。袖石は両袖ともに残っていたが、右壁の石組は残っておらず、左壁石組がカマド内へ3枚落込んでいた。袖石部の天井石はそのまま残っている。カマド内には甕がすえられた

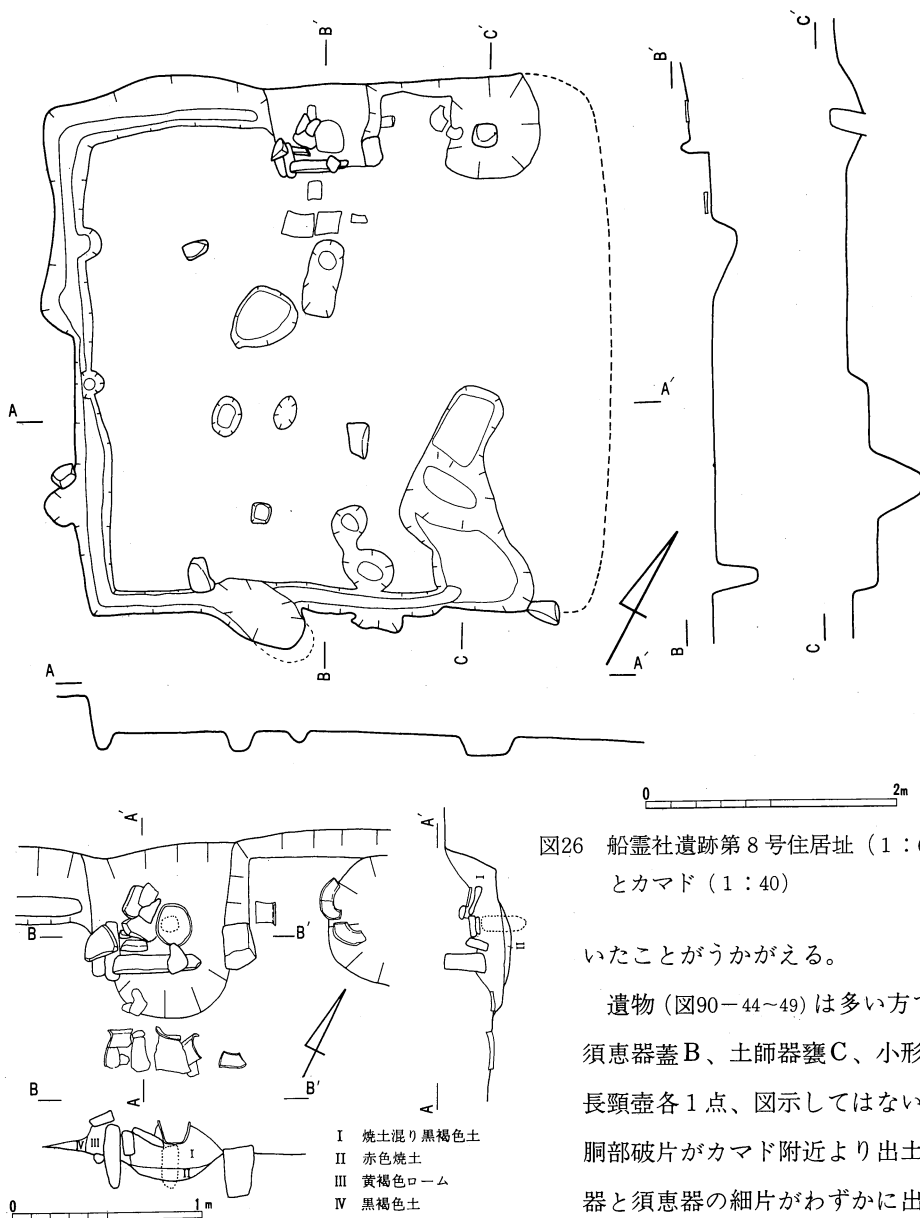


図26 船霊社遺跡第8号住居址 (1:60) とカマド (1:40)

ままの状態出土した。上部は欠くものの底部は支脚石の上に乗し、日常使用されていたままの状態である。カマド前には甕の口縁部が、カマド東の貯蔵穴ふちに灰釉短頸壺口縁部片が出土した。カマドの袖石間は70cm奥行80cmある。

カマド底部には焼土が厚さ10cmで堆積しておりよく使用されて

いたことがうかがえる。

遺物 (図90-44~49) は多い方ではない。土器として須恵器蓋B、土師器甕C、小形甕、灰釉短頸壺、同長頸壺各1点、図示してはないが、甕Fの口縁部と胴部破片がカマド附近より出土している他は、土師器と須恵器の細片がわずかに出土しているのみである。他に鉄滓8点、土錘 (図86-56) 1点がある。

須恵器の蓋B (44) は身に擬宝珠状のつまみをもち身にかえりはない。擬宝珠部分と、口縁部はロクロナデされ、宝珠下からは削りが施こされている。内面はナデられている。胎土には小砂粒を含み、暗灰色を呈し焼成はよい。内面口縁部から1.5cmの所で表面の色調が黄灰色から暗灰色にかわっている。おそらく直径10cm前後の他の器と重ね焼きした際にできた変化と思われる。甕45は口縁部をのぞく器外面すべてと、内面口縁部にハケが施され、器内は縦方向にユビナデの後がのこる。器内は薄く、胎土に1mm前後の小砂が混入されており、焼成はよい。46の甕も器内は薄く焼成が良好である。外面はハケを施した後にナデられており、ハケ目はうすく残る程度である。最下部はヘラケズリの痕がのこる。小形甕47は糸切りの底部からやや外湾する胴部がゆるやかに外反する口縁部へと続く。器内外面ともロクロナデが、また底部外面近くにハケ目がわずかに残っている。器高に対し、口径と底径が大きく、ずんぐりした器形である。

灰釉短頸壺 (48) は胴下部から底部を欠くが、幅1cmの頸部が、球状に張り出した胴部へと続く端正な器形をもつ。頸部から胴部上半には厚い淡緑色の釉薬が斑点状に、全体には自然釉がかかる。内面と外面胴部上半はロクロによるヨコナデ、胴下半部はヘラ削りにより調整している。胎土には小さな黒色の小砂が

含まれており焼成はよい。折戸10号窯か、上っても鳴海32号窯の製品と思われる。諏訪地方土器編年5様式にあたり9世紀前半から中葉にかかる住居址と思われる。

(6) 第12号住居址 (図21・50・84・86・92・93、図版47・48・64・65)

13号住居址を切り、用地内範囲の北東境寄りにある。北西に4・5号住居址、北東に3・6・7号住居址が構築されている。東西5.4m、南北5mの隅丸方形の平面形をもち、主軸方向はN32°Wを指す。

西壁が傾斜地上部となるため非常に遺存状態が良く、壁高30~40cmを計り、ほぼ垂直に立ち上っている。斜面下方の東へ行くに従い壁高は低くなり、13号住居址を切る位置では10~20cmと低い。13号住居址を切っている東壁は黒土層中のため確認できなかった。幅20cm、深さ5~10cmの周溝が壁直下を東の一部を除きほぼ全周する。埋土は遺存状態の良い西壁際を見ると、まず黒褐色土が流れ込み、次いでローム粒混りの黒褐色土が落込み、その後全体にローム粒混りの褐色土に覆われており、自然に埋没されていた様子がうかがえるが、13号住居址を切っている部分では若干の土層の乱れが生じている。床面に多少の凹凸はあるが、堅くたたきしめられており、南から北東にかけて13号住と切り合っている部分は貼床されており、床面下から検出された縄文時代の土壇上も貼床されている。

支柱穴は北壁カマドの左右に、壁外にとび出して掘られているP₁(35×35、-32cm)、P₄(30×20、-36cm)と、それに対するP₂(45×40、-42cm)、P₃(33×27、-30cm)の4本で、P₅(38×35、-14cm)は入口部の柱穴と考えられる。住居址中央部にP₆(140×110、-26cm)、P₇(80×70、-23cm)の大形のピットがあり、カマド右壁下は貯蔵穴と推定されるP₈(70×50、-10cm)がある。支柱穴P₃は中心部を向き斜めに掘り込みが見られ、P₁、P₄も住居址内へピット壁が傾むいており、柱を抜き取る行為があったとも考えられる。

カマドは石組粘土カマドで、天井石は抜き取られたのか残存してはいなかったが、左右の袖部はほぼ完全といってよい状態で遺存していた。左右の袖部には、30×30cmの平板な安山岩を3~4枚ならべ、床面

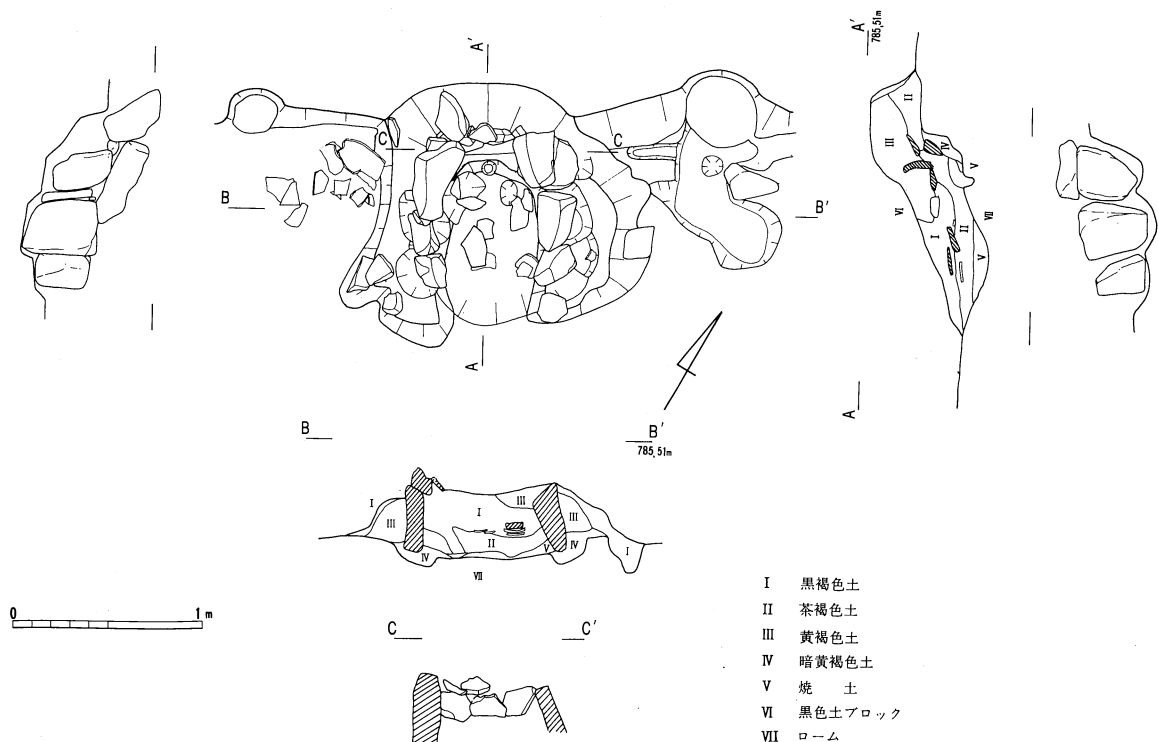


図27 船靈社遺跡第12号住居址カマド (1:40)

第IV章 調査遺跡

を約5～10cm程掘り凹めて立て天井を支えるためかその上へさらに長さ30～40cm、幅20cmの石を置いている。粘土の遺存状態もよく、床面より粘土最頂部までは約60cmある。焚口部床面は約10cmの厚さで50×50cmの範囲がよく焼けた焼土となる。カマド奥壁には20×15cmの平板な石を貼りつけ補強している。径8cmの煙道が壁外へと続いており、支脚石はない。袖間60cm、奥行1.2mを計る。

遺物(図50-50~60)は土師器杯E 2、須恵器杯C 1、須恵器蓋B 2、土師器甕D 1、同E 1、同F 2、小形甕C 1、同D 1点の図示したものの他は甕Eの胴部破片や同Fの破片等がある。50・51の土師器杯は一般的に甲州型と呼ばれるもので、ロクロで成形された後、50は器高中ほどより下部と、糸切りされた底部をへらで削り、磨いている。器高上半はロクロナデの後磨いている。内面は底部と器壁に鋸歯状の暗文を施している。51は同様な手法が用いられるが、器外面下半の削り痕の幅がせまい。51には「七九」の墨書があり、50にも51とほぼ同じ箇所にも墨書痕がみられるが、割れ口にかかるため、文字を判読できない。両者とも全体に赤褐色の色調で胎土は非常によい。52の須恵器杯は底部にへら削りを施し、他は内外面とも水びきの後が残る。口縁部は横ナデされている。胎土中に微粒な砂を多く含み、暗青灰色を呈す。径高指数28を示す。

甕はC・D各1点とF 2点、小形甕C・D各1点がある。甕C(56)は胴がふくらむ筒状の胴部から急に外反する口縁部をもち、外反する内側に稜線がつく。器外面には全体にハケ目が縦に施され、口縁部内面はカキ目と横方向のハケ目がその下へわずかに施される。底部外面はへら削りされている。甕D(55)は筒状の胴部にわずかに外反する口縁部をもち、外面口縁部と胴部に縦位のハケ目が密にはないが施こされ、底部上はへら削りされ木葉底である。内面は頸部と胴下半部の一部にハケ目残り、粘土つなぎ目にユビ押えの痕が二段にはっきりと残る。胎土は暗黄褐色を呈し、外面胴下半は黒色を呈し煤の付着が見られる。甕F(57・58)は武蔵型と呼ばれるもので、器肉は非常に薄く、胎土は赤褐色を呈し微粒砂を多く含むが焼成は非常によい。内面と口縁部がヨコナデされ、外面はへら削りの痕が全面に残る。胴上部と外面最下部は横・右斜め下から、ピッチの短いへら削りが、胴部に施されるピッチの長いへら削りの後へ行なわれている。底部外面もへら削りである。59の小形甕Cは外面胴部と内面胴上半部に細かな痕を残すハケ目が施され、その後外面最下部がへら削りされており、底部もへら削りされている。口縁部は横ナデされ、器面内外に成形痕の指おさえの痕が残る。胎土は暗褐色を呈し、一部に煤の付着が見られる。60の小形甕Dは器面内側のほとんどにハケ目残り、外面は胴下半の一部に縦位のハケ目が一段のみまわり、最下部はへら削りされている。底部外面もへら削りである。胎土中に細粒の砂を含み色調は茶褐色を呈す。外面の約半分が焼けただれもろくなっている。いずれもカマド及びその周辺より出土した。

土器の他に特筆すべきことは、土錘の出土量が非常に多いことである。131点の出土のうちの35点(図86-57~69・77-80)が本址より出土しており、遺構外出土の土錘を除けば約60%を占める。住居址全体から出土し、カマド内にも多く見られたことはカマド使用中に、土錘の焼成を行なったと考えられる。また、鉄製品(図92・93)も多く、刀子(8)・鍬(11・14)・留金具(36・37)各2点、鋤(35)・鎌(48)・鋤鍬先(42)各1点等で、他に羽口がカマド内より1点、鉄滓も4点ほど出土している。図84-253、261の砥石も本址よりの出土である。特に鉄製鎌は2点出土のうち1点が本址からであり、鋤鍬先は本址のみの出土である。住居址の規模や以上の出土遺物からみて、本遺跡より検出された平安時代前半の住居址中、注意される住居址であろう。

(7) 遺構外出土遺物 (図91-61~63)

縄文中期初頭、古墳時代後期、平安時代前半の住居址群が検出されたD地区の小田井沢をはさんだ北西

のB地区より、古墳・平安時代に属する若干の遺物が検出された。B地区は、地形、土層の項で記したが、靈湊山の急斜面下は沖積層が厚く、小田井沢寄りはずぐ地山のローム層となるが遺物はすべて1.5~1.6m堆積した沖積層中より出土した。61の杯は、内面黒色の有稜の杯Iで、底部を欠くが口径14cm、器高5cmに復元される。胎土は茶褐色を呈し、細砂粒を含み焼成は良好である。器内外面はへら削りの後横方向に細かなへら磨きが施されている。古墳時代後半の杯である。62の長頸壺は口縁部・胴部の一部を欠くが、口径17.0cm、器高33.9cm、底径10.6cmに復元できた。全体に淡褐色の釉がかけられ、頸部には黄褐色・淡青色の釉が一部に厚く流れている。胎土は淡青灰色を呈す。外面器高中位より下半はタタキの後ロクロナデされその後にハケ目が若干施され、底部近くはヨコ方向のへら削りが右まわりにされている。内面と底部外面はへら削りされている。内面は右まわりのロクロナデがされているのみである。頸部は胴部成形の後につけられ、頸部接合後ロクロナデされている。口縁がやや広がり、肩部が張りゆるやかに底部へとつながっていく端正な器形をもつ。平安時代の須恵器と思われる。

63は須恵器大甕の口縁部から肩部へかけての破片である。口径24.1cmを計る。頸部より下外面は器面全体にタタキ目が残るが、内面にはなく横方向にナデられている。肩部には二条の沈線が横走する。頸部下半はナデられ、幅3.5mmの浅い沈線を二条横走させ、その上部に5本の歯をもつ櫛状工具で、波状文を二条横走させている。口縁部は二段に成形され稜をもつ。胎土中に微砂粒を多く含み淡青灰色を呈す。焼成は中位である。

62はBK-47・48グリッドから、63はBO-34・35グリッドから集中して破片が検出されたが、遺構は検出されなかった。

3) その他の遺構と遺物

(1) 柱列1 (図28、図版49)

本址は、西から東にかけての緩やかな傾斜地上に検出された総計6本の掘立柱址である。耕作土下層中からロームに掘り込まれており、各々の柱穴の規模は約20cm前後、深さ13~29cmであった。柱穴内に落ち込んでいた土は黒褐色で軟かく、底には砂礫が薄く見られた。このことは水を伴った流入による自然堆積を示すものであろう。

本址の主軸方向はN17°Wを示し、等高線に沿って建てられている。西及び北列は中央に柱穴が見られず2本組、他は3本組である。柱間隔は東西が各々1.5m、南北が2mと2.1mである。検出面でみると、南北間での比高差はさほどないが、東西では47cmとかなり高低差があり、柱穴の底面のレベルも東西で比較すると、34cm、50cmという数値であった。なお、東側中央の1本はロームマウンド1号

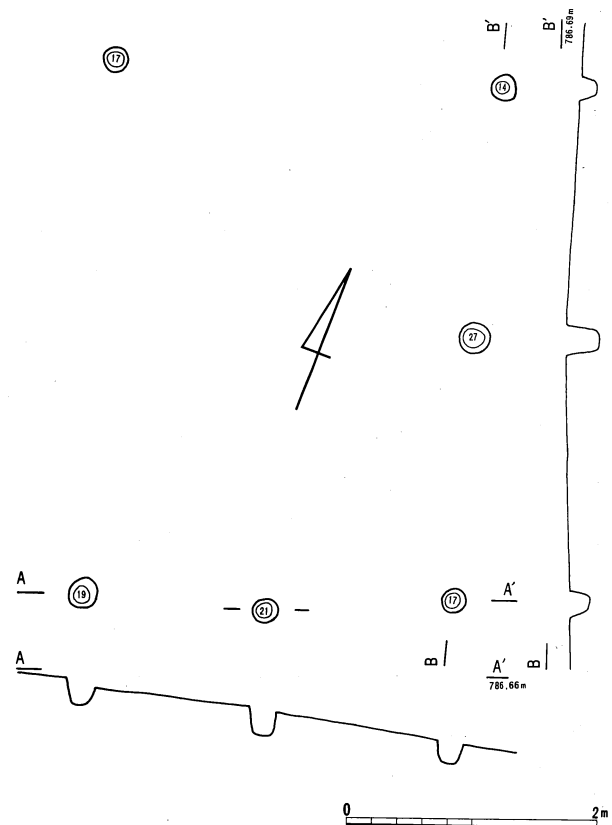


図28 船靈社遺跡柱列1 (1:60)

第IV章 調査遺跡

のマウンド部および土壇61号を切っている。

本址を検出する途中、周辺から若干の縄文土器片を得ることができたが、いずれも本址と関わるものではない。ただ柱穴内に入っていた土は、本遺跡内においてみられる住居址、もしくは土壇等の土質とはかなり異なり、附近の耕作土に近いものであると思われた。恐らく相当に新しい納屋、小屋的な建物ではなかったであろうかと推測される。

(2) ロームマウンド (図17)

本遺跡において確認されたロームマウンドは4基であるが、今回はそのうち3基を調査した。

1号は、他の2基にくらべるとはるかに大形のものであり、1.9m×1.65mのロームの周囲を、黒色土、黒褐色土、褐色土等がベルト状に巡っており、その規模は東西2.8、南北2.9mを計る。周辺には土壇が多く、マウンド部、或は周囲の黒っぽい土が、土壇36・60・61号、柱列1号の柱穴等に切られている。黒色土等は四方からクサビ状にマウンドの下に向かって斜めに落ち込んではいるが、完全にマウンドの真下までは入らない。また、マウンド部は1m×60cm程の大きな丸い自然石を含んでおり、自然のロームに近い状態で、2・3号のようにブロック状にはなっておらず、土層間における激しい動きなどを見せてはいない。クサビに落ち込んだ黒っぽい土層中には、自然石が若干混入するが、マウンド中にはさきの大石以外は見られない。また、底面から突出した石も少ない。

これに対して、2・3号は比較的小形のものであり、3号は土壇30に切られ、土壇72が本址に先行していた。マウンド部を形成している2次ロームもブロック状を呈している。規模は2号が1.1m×70cmで瓢箪形、3号は円形で1.4m×1.2mある。周囲から落ち込む黒っぽい土は、2号では深いクサビ状を、3号ではすっぽりと2次ロームの下を廻って典型的なロームマウンドを形づくっている。

なお、1号の底面東側に91cm×78cmを計る円形の落ち込みがあり、土層ではクサビ状に入っている土質との変化は見られないが、あまりにも底面が平坦なこと、また、遺物の集中が見られることなどを考え合わせると、ロームマウンドに先行する土壇と考えられる。

3基のうち、遺物を出土したものは、1号と2号である。1号からは土器、石器、土製品が出土した。これらは主としてマウンドの上部、及びクサビ状に落ち込んだ黒っぽい土の中に包含されており、特に土壇60、61の周辺と、底面東側の円形落ち込みの上部面にあたる黒褐色土中に多く見られた。土器はいずれも破片であり、10点程(図72-442-444)である。いずれも九兵衛尾根Ⅱ式の様相を示している。石器は凹石、剥片石器が各1点である。また、土偶(図85-1)の足部がロームマウンド上の大石付近から出土している。なお、図中底面の㊸の所からは直径3～4cm前後の黒曜石が約20点程集中して出土した。これらは黒曜石集中箇所2から得られたものより、石質が悪く、表面には多くの古い傷跡が見えている。縁辺はつぶれが多く残り、ほとんど原石であった。

2号からは、土器片2点(図72-445)と黒曜石3点を得たにとどまる。南寄りの黒褐色土中からのものであり、土器は、やはり九兵衛尾根Ⅱ式のものである。

これらの遺物のなかでロームマウンドの性格を明らかにするような状態で出土したものは1点もないが、1号については、底部に黒曜石の集中箇所があり、その上にロームのマウンド部があることを考えれば、おそらく、1号は、縄文時代以降の所産と見て間違いのないと思われる。

5 まとめ

1) 縄文時代の遺構と遺物

(1) 集落

縄文時代中期前葉新道期の2号住居址をのぞき、他の5軒はすべて中期初頭の九兵衛尾根Ⅱ式に属する住居址である。岡谷市内の遺跡から中期初頭の土器が採集されたり、発掘調査されたものを『岡谷市史』より拾いあげれば、天竜川沿岸部には後田原・広畑等12遺跡、塩嶺山地とその周辺には、海戸・下り林等9遺跡、長地山地とその周辺では、扇平・梨久保等6遺跡、横河川扇状地部には、片間町・榎垣外の2遺跡、計29遺跡があげられているが、船靈社遺跡のある諏訪湖西岸部には断片的な資料を出土した御頭屋敷・矢垂の2遺跡のみである。これは、この地区の遺跡が、せまい扇状地上に立地する小規模の遺跡群であり、開発等による破壊もうけずに、調査される遺跡がなかったことにも原因してはいよう。いずれにしろ本遺跡は諏訪湖西岸部における縄文時代中期初頭の集落としては最初に調査された遺跡である。

住居址は小田井沢が形成した扇状地上に立地しているが、扇状地中心部の小高い場所は避けられ、北東部扇状地境に張り出している尾根に寄った場所を選地し、扇状地上部から下部へ、ほぼ一列に並んで構築されている。風除けのために急傾斜をもつ尾根そばに構築されたのか、あるいは日照時間を多く得るために場所が選ばれたためであろうか。

一般的に中期中葉の集落の在り方は環状集落的な円形を基本としたものといわれているが、中期初頭にあたる本遺跡では、少なくとも用地内だけの調査であるが、住居址の配置は「円」とならず、尾根にそって列状に点在することは間違いない。地形的制約といっても本遺跡内には「環状集落」を構成し得る地形的条件はありながら、列状に並んだ点は今後集落構成究明に1つの問題を提起したといえよう。

2号住居址を除き、1・9・10・11・14号の5住居址はすべて九兵衛尾根Ⅱ式の土器をもつ。1・11・14号住居址には、遺物の廃棄がなされているが、廃棄された土器と、住居址に関わる土器の間には差がなく、両者とも同じ九兵衛尾根Ⅱ式である。このことは、住居址の構築、使用、廃絶、土器の廃棄の間にそれ程大きな時間差がなかったと解釈してよいであろう。諏訪湖西岸の本遺跡近辺は未調査部分がほとんどであり、本遺跡の他に中期初頭の遺跡の存在はなく、諏訪湖西岸に位置する遺跡は、尾根間に形成された小扇状地上に立地していることを考えあわせれば、他地区から遺物が廃棄されたとは考えにくい。おそらく本遺跡内での他遺構からの廃棄と考えてよいであろう。

集落の広がりについては、若干時期差はあるが、同じ岡谷市内の扇平遺跡、梨久保遺跡等の発掘例を見ると、住居址数は10軒内外にとどまっており、小扇状地上に立地する地理的環境や、本遺跡のすぐ諏訪湖寄りの湊小学校旧敷地内より、藤内・井戸尻・曾利式の土器が採集されていることも考えれば、中期初頭にかかる集落の範囲は、ごくせまい範囲内とも考えられ、本遺跡が立地している場所がその中心であったと考えたい。天竜川沿岸から、横河川扇状地にかけて立地する同時期の遺跡の所在に関連し、本遺跡の立地・規模から、他地域からの移住（例えば漁撈を対象とするなど）も考えられ、今後、諏訪湖盆を中心とした該期遺跡・遺物の検討が詳細になされることを望みたい。

(2) 土器 (図48～74、表7、図版50～54、表6)

本遺跡からは、縄文時代中期初頭の土器を主体とし、少量ながら前期・中期中葉・同末葉・後期後半・晩期末葉の土器が出土した。こゝではそれらを次のようにまとめて説明したい。

第四章 調査遺跡

第I群—前期、第II群—中期初頭、第III群—中期前葉、第IV群—中期中葉、
第V群—中期末葉、第VI群—後期、第VII群—晩期

時期的には第II群が中心であり、前項「集落」でも述べた如く、諏訪湖西岸地区での縄文中期初頭の集落遺跡として、まとまった資料が検出された初めての例でもあり、今後、該期文化の広がり、他地域との交流などを解明する上で本遺跡の占める位置は大であるといえる。その意味で、本稿では第II群土器に焦点をあわせ、その胎土成形など基本的観察データをやや繁雑になるが重点的に記述することにしたい。なお、表7の土器一覧表を参照されたい。

① 第I群土器 (図69—400、図版54—8)

口縁部破片1点のみが土坑1から出土した。器形は円筒形で、胴部がやや脹らみをもち底部にいたる単純な深鉢で、LRの斜縄文が器全面に施されるのみである。胎土に黄褐色の砂粒を若干含む焼成良好な土器である。なお、器面にシダ類の葉と思われる圧痕がある。諸磯A式に比定できよう。

② 第II群土器 (図48—74)

i 胎土・色調

砂粒の混入はどの土器にも見られ、金雲母を含むものが大半を占める。一方、平出三類A系の石英粒を含み、焼成が良好な土器や、チャート粒を含むものが少数ながら存在する。327は他と異なり、表裏面に白色粘土を使っており、割れ口断面をみると真中の黒色粘土が白色粘土にサンドイッチ状に挟まれている。胎土に金雲母を含む例が大半であることは、該期土器製作上の一特徴としてよいだろう。

色調は褐色系であるが、バラエティーに富む。黄褐色、薄い黄褐色、赤褐色、灰褐色、黒褐色と黒色などであり、主な色調をとり出せない。

ii 成形 (図29)

成形については、相当観察したが現段階では粘土紐(帯)積み上げ法かどうか決定できない。しかし、部分的な成形と

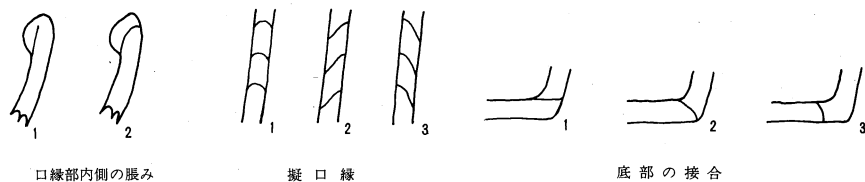


図29 土器成形の模式図

しては、a—口縁部内側の脹らみの作り方に2種類、b—口縁部・胴部の接合としての擬口縁に3種類、c—底部の接合方法で3種類観察された。aでは折り返し口縁(1)と粘土紐の貼付(2)、bでは擬口縁が丸みをもって接合するもの(1)、内傾するもの(2)、その反対に外傾するもの(3)がある。

cでは円板状の底に直線的に胴部が接合するもの(1)、円板状の底の周縁が傾斜をもち接合する例(2)、胴部から底部側縁内までのものに円板状の底を接合するもの(3)、があり、3の例は多くない。接合面・キャリパー形土器頸部に指圧痕を残すものもあった。

iii 整形 (器面調整)

ケズリ、ナデ、ミガキの3点について観察した。ケズリは、土器成形後に器面を削り、その後、ナデ及びミガキが行なわれることが多いので、その痕跡を見つけることはむずかしい。しかし、一般的にケズリの多くは、表面では深鉢—縦位、浅鉢—斜位となるが、ナデ、ミガキの場合は内外とも横位が大半を占める

ナデの工具になるとへら状工具に棒状工具が加わるが、時には指によることもあったであろう。また滑

らかな器面に細い線状の痕跡が認められる場合が多いが、反対に何の痕跡もなく、工具や方法が確認できない例もある。

ミガキの工具もナデと同一工具である。幅広い線状の痕跡を残し、光沢をもつものもある。赤色乃至黒色顔料が塗られる土器はすべてこのミガキの工程をへている。

ケズリ、ナデ、ミガキの器面調整法は、文様が器表面全域に施文される該期土器にあっては、非常に観察しにくく、主に内面でとらえざるを得なかったことや、全般的傾向を抽出するためには破片全部を検討すべきであるが、その時間的余裕もなく、充分とはいえない。ただ完形乃至完形に近い土器、特に無文土器、浅鉢、大形破片の観察結果では、約75%程度はミガキ段階まで行なわれていることは指摘できる。また、ケズリからナデ、ナデからミガキの3工程が全部行なわれるのか、ケズリ→ミガキでナデ段階を省略するのか、といった細かな器面調整の検討はできなかった。

iv 器形(図30)

器種別にまず分類し、次に口唇部、底部両形態の分類を行った。

器種は深鉢、浅鉢、その他の三種に区分してその類型化を行なったがまだ充分とはいえない。

深鉢A 円筒形で底部から口縁部に向かって直線的な胴部をもつもの

B 円筒形で底部から口縁部に向かって脹らみのある胴部をもつもの

C 円筒形で底部から口縁部に向かってゆるやかに広がり、口縁部が外反するもの

D₁ C型に近い円筒形だが、頸部がややくびれ、口縁部が多少内湾気味のもの

D₂ D₁型に近い円筒形だが、胴部は短かく、口縁部が内湾してキャリパー形に近くなるもので、小柄な土器

E キャリパー形で、底部から頸部へゆるやかに脹らみながら開き、頸部でくびれ、口縁部が内湾しながら開くもの

F キャリパー形で、E形より胴部が一段と丸く脹らみ、球形となる大形の土器

G 甕形に近い器形で、口縁部は短かく外反し、頸部でくびれ胴上半部に最大径があって底部へつぼまるもの

浅鉢A 口縁部が短かく「く」の字状に強く内屈して直線的に底部にいたるもの

B Aよりも口縁部の屈曲はゆるく、底部から頸部までの胴部立上りがやや急となるもの

C 口縁部は不明だが、胴部は肩部に最大径があって、ゆるく底部へつぼまるもの

D 口縁部が内屈せず、底部から直線的に口縁部まで開くもの

E 底部からゆるやかに胴部が脹らみをもち開き、口縁部が内湾気味に立ち上るもの

その他の器形A 有孔罅付土器

以上、深鉢、浅鉢、その他の器形と三区別し、更にそれを14に細分してみた。深鉢が大半を占めることは勿論だが、その細分の全土器中のパーセンテージなどを出す所までは至らず、今後の課題としたい。

口縁部の形態は2種類である。

I 波状口縁 II 平口縁

口縁部の形態は5区分できる。

a 先端へ向い薄くなるもの b 丸味を帯びるもの c 口唇端が平坦となるもの

d 内面が脹らみをもつもの e 内面に「く」の字状に屈曲するもの

底部の形態は外形と内部から4種と2種に区分した。

第四章 調査遺跡

- I 胴部からゆるやかにつぼまり底部にいたるもの
- II 所謂「張出し底」といわれる、底部縁が外側に張出すもの
- III 胴部から直線的に底部にいたる筒形状のもの
- IV 浅鉢にみられる皿状に開く底部のあるもの
 - a 底部内側の中央部が厚く張らむもの
 - b 底部円側が平坦なもの

v 文様

文様をできるだけ細かく分析してその要素を取り出してみた(第III群土器の要素も含めた)。

まず地文としては、次の4種に分類できる。

- 1-単節の縄文及び無節の縄文
- 2-単節の縄文+結節縄文
- 3-半截竹管状工具による沈線及び条線
- 4-無文

次にこれら地文の上に施文される文様を施文工具からみると4つの大きな類別があり、更に細分ができる。

A 半截竹管工具及び竹管状工具による施文

- a 二条一組の沈線
- b 突き刺し(交互刺突文、列点文も含む)

- c 背を上向きにした押し引き
- d 背による沈線(棒状工具との区分困難、同一視する)

- e 押し引き〔結節沈線〕(dと同じく棒状工具との判別区分困難なので同一視する)

これは大部分が中期前葉におい

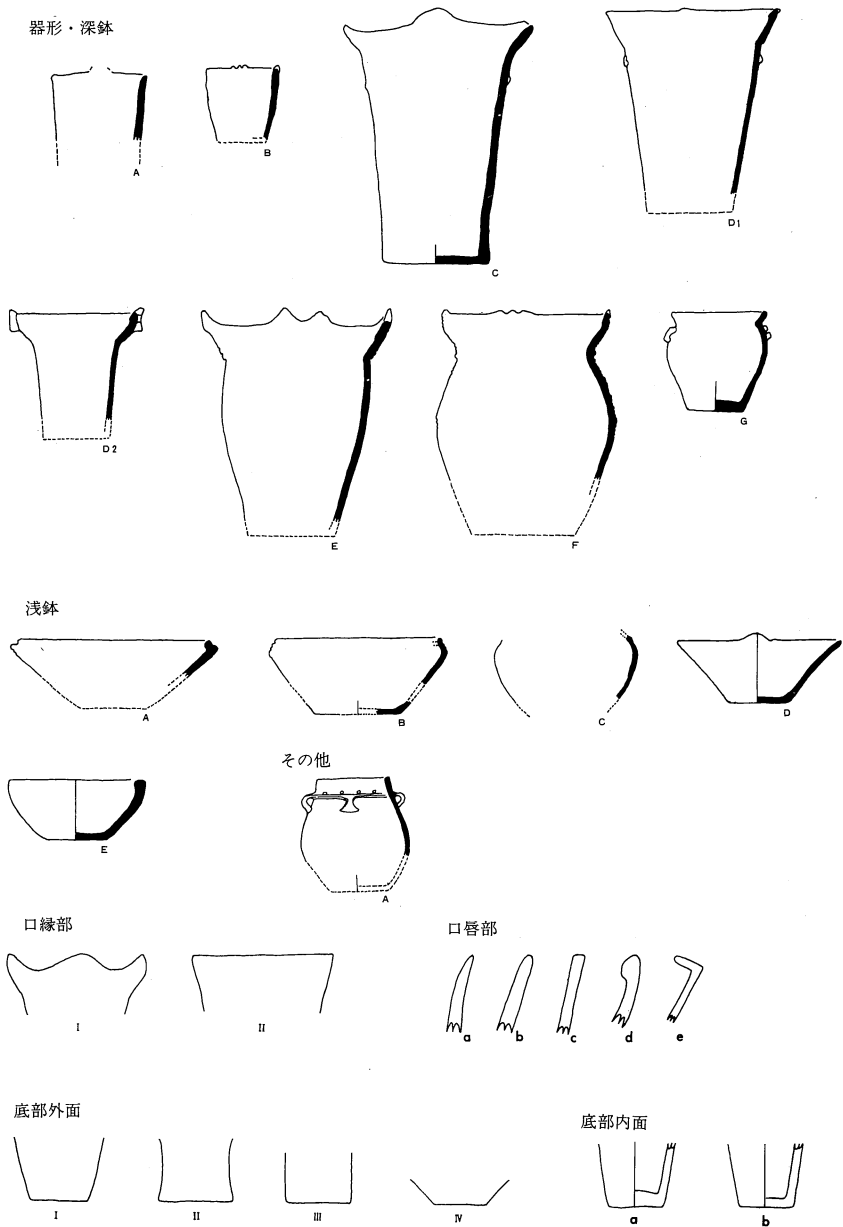


図30 器形及び口縁部・口唇部・底部の形態分類

て盛行する文様で、第Ⅲ群土器に入るものもあるが、更に5つの細分ができる。

e₁ C 状 e₂ C 状 e₃ □ 状 e₄ < 状 e₅ □ 状

B 棒状工具による施文

a 突き刺し

C へら状工具による施文

a 沈線文 b 突き刺し

D 貼付け施文

a 隆帯 b 突起及び把手

次に文様の基本的な表現を分類すると次の二種となり、更に細分できる。

沈線文 イ 横位沈線文 ロ 懸垂文 ハ T字状懸垂文 ニ 楔(十字)状懸垂文
ホ 渦巻き状及び円状沈線文 ヘ 弧線状沈線文 ト 波状沈線文
チ コンパス文 リ 楕円状及び方形状沈線文 ヌ 格子目状沈線文
ル 楕円状凹文

隆帯文 イ 横位隆帯文 ロ T字状懸垂文 ハ Y字状懸垂文 ニ Y字状+T字状懸垂文
ホ 鉤状懸垂文 ヘ 波状隆帯文 ト 渦巻き状及び円状隆帯文
チ 下向き弧線状隆帯文 リ 隆帯上に突き刺しを伴うもの ヌ 押圧隆帯文
(不明なものは一覧表では「」としてある。

なお、文様表現の中にある三叉文(三角印刻文)は、その施文方法にも変化があるので、次の4種に分類した。

イ 削り取るもの ロ 沈線を組み合わせるもの ハ 突き刺しを組み合わせるもの
ニ 粘土紐によるもの

以上文様についての施文具や表現要素の分類を行ってきたが、全般的な総括にまで至っていないので最後に該期に多い隆帯による区画を主文様要素とする土器と玉抱き三叉文ある土器についてのみその分類を試みた。図31が前者で、下向きの弧線文の区画とその合せ目にできる三角状の区画文が主体となり、必ず沈線が伴うことがわかる。細かな説明は繁雑となるので省略する。また、こうした表現は隆帯による区画文だけでなく、上向きの弧線状沈線及び連続楔状沈線を基本とする土器にもあるが、未だ十分な分析は行っていない。

後者の隆帯及び沈線弧線文中の玉抱き三叉文については、その三叉文のみの表現方法は前述したが、その構成は様々であり、その中でも最も多いのが玉抱き三叉文なので、その分類(図32)を行ってみた。

- 1 三叉文・円文はへら状工具で削り取られる。
- 2~4 三叉文は削り取られ、円文は沈線となる。
- 5 三叉文・円文ともに沈線となる。
- 6 三叉文・円文は沈線になると共に文様自体が同一化する。

この1~6の区分はそのまま文様の移行とも考えられ、玉抱き三叉文の簡略化を示す系譜とも一致するらしいが、これも分析不十分で結論は今後待ちたい。

vi 文様帯について(図33)

深鉢の文様帯の構成を示すと図33のようになる。

第IV章 調査遺跡

円筒形(器形分類A~C)の場合は口縁部文様帯と胴部文様帯に、キャリパー形(D~H)は口縁部、頸部、胴部の3文様帯に分かれる。円筒形は口唇部近辺に無文帯を残すものと残さないものがあり、また、口縁部下部で文様帯がくぎられる場合もある。キャリパー形は口縁部の中でも口唇部近辺で文様帯が分かれる場合があるが、それを口唇部文様帯と表現する。また、F・Gの器形の場合、胴部の張り出した部分の頂点を境として文様帯が分かれる例が大部分である。

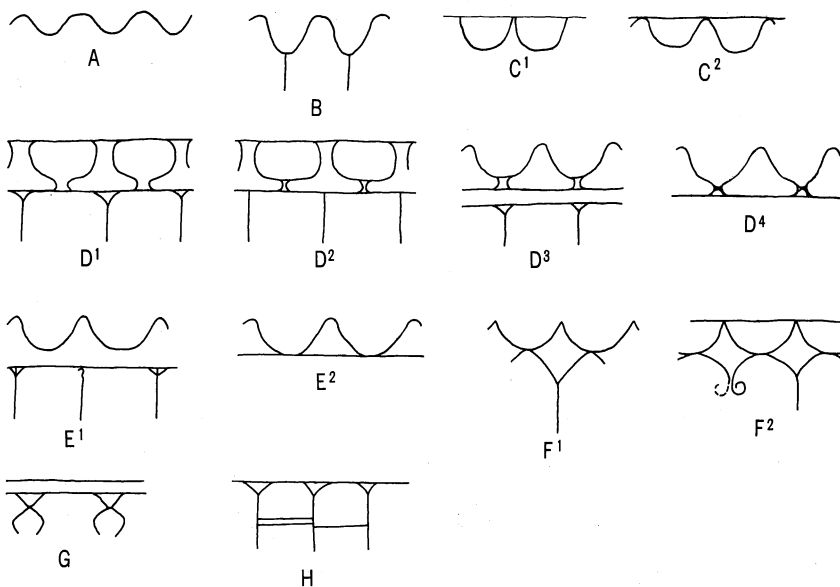


図31 隆帯による区画文の種類別模式図

円筒形の土器の文様帯は、文様帯が分けない場合は縦位の文様がほとんどで、口縁部文様帯だけの場合は横位の文様となり、両文様帯をもつ場合は

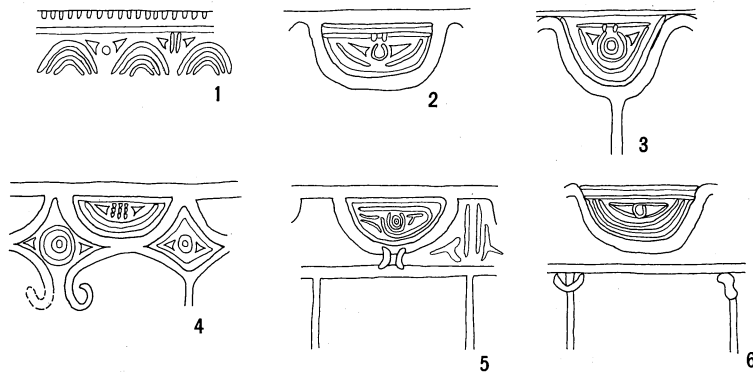


図32 玉抱き三叉文の種類別模式図

口縁部は横位、胴部は縦位である。キャリパー形D及びEの文様帯は、口縁部、頸部、胴部各文様帯に分かれる場合は口縁部から頸部の文様帯は横位、胴部の文様帯は縦位の場合がほとんどである。中には地文となる縄文の撚りが同じでも口縁部文様帯と胴部文様帯では施文の方向が違うものや、口唇部文様帯と口縁部及び胴部文様帯の縄文を施文する方向が違うものがある。前者の場合口縁部は横位に、胴部は縦位にころがしている。それに対し後者は、口唇部は横位に、口縁及び胴部は縦位にころがしている。キャリパー形Eの土器の中で、平出三類A系は少し変っており、口唇部と頸部文様帯は横方向、口縁部と胴部文様帯は、縦方向の施文である。キャリパー形Fの場合、張り出した部分より上は横方向、下は縦方向の施文である。また、キャリパー形D及びEと同じく口唇部文様帯で縄文の方向を違えるものもある。キャリパー形Gの場合は、口縁部と胴部の張り出した部分より下は縦方向で、2つにはさまれた文様帯は横方向である。

浅鉢の場合は図化しなかつたが、口縁部が横方向で、胴部には文様がほとんど付かないが、付く場合は縦方向である。以上の結果から文様帯により施文の方向には規則性が認められ、土器製作の中において、文様帯別による施文の方向に一定のルールがあったことがうかがわれる。

vii 文様単位について

図上復元土器などを含めて観察した結果、4単位のもののが大半を占めて最も多く、中に3~5以上の単

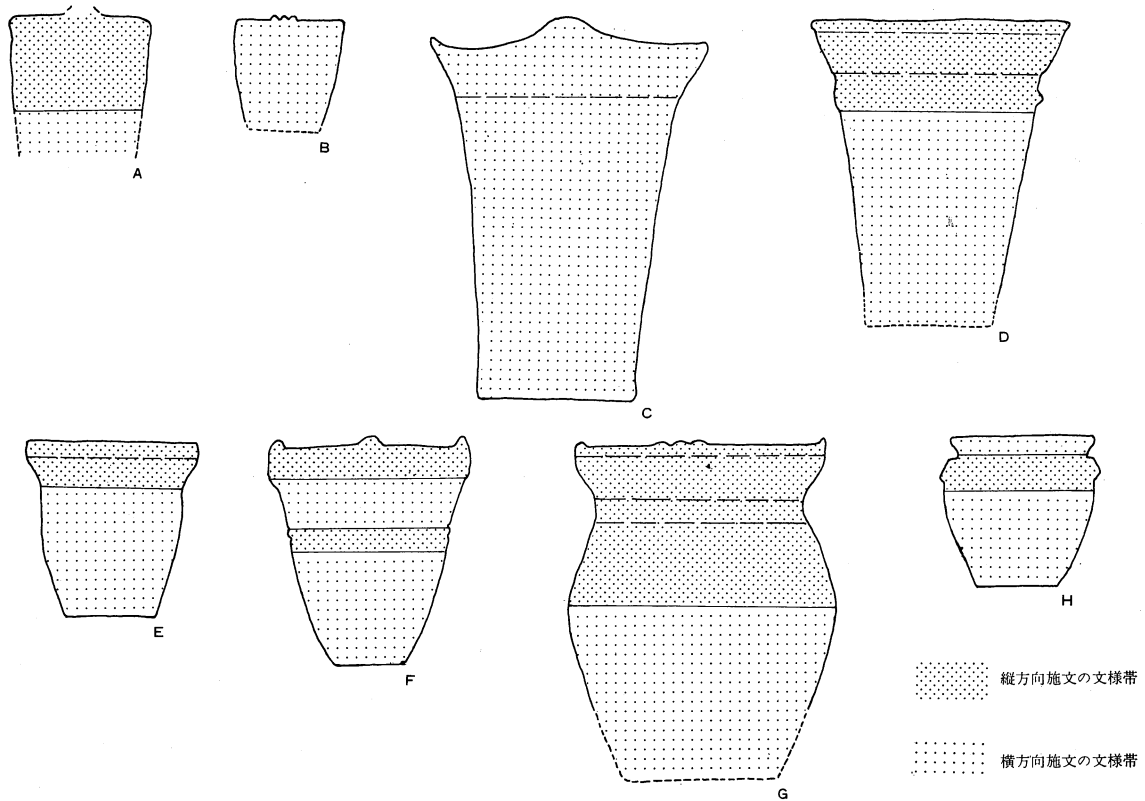


図33 器種別文様帯の模式図

位のものもあるがごく少ない。

以上、第II群土器についてその成形、整形、文様構成など各項について分類してきたが、まだ分析途上のものもあって、総括的な説明ができない。諏訪地方を中心とした考察は後日へ譲ることにする。なお、最後に第II群土器に伴う二、三の土器やその編年的位置について述べておきたい。

まず、諏訪・伊那盆地・松本平地方で第II群土器に伴う平出三類A系類似土器について触れておきたい。遺構内や遺構外からも出土しているが、次の第III群中期前葉の土器と区別が難しいので遺構外のものはいえて省いたが、遺構内から9点(38・61・223・279・312~315・419)出土している。半截竹管状工具による施文を中心とし、石英粒及び砂粒を含む胎土・焼成の良い土器である。38は胴部のみだが、半截竹管状工具の施文と縄文の間に、へら状工具による細かい格子目状沈線文を施文する特異な文様をもっている。なお、頸部文様として施文の順番は、格子目状沈線、縄文、半截竹管状工具による沈線の順である。横位の沈線と懸垂する沈線の真中に楕円状凹文あるのも珍しい。同施文、同系列の土器片が遺構外から1点(516)出土している。九兵衛尾根II式期におけるこの系統の土器の特徴であろう。337は縄文のみであるが、胎土が酷似しており同系統の土器としてよい。これらの資料は、提示した資料は少ないが、文様等から考えて下伊那郡松川町庚申原遺跡第19号住居址出土土器と並んで、平出三類A系統土器の発生段階を示唆する興味ある資料といえる。⁽⁸⁾

次に他地域からの搬入土器について述べてみよう。完形品はなく(復元実測したもの2点)破片だけであったが、北陸系(新崎、上山田古式)、東海系(北裏C式)、瀬戸内地方も含めた関西系(船元II式)が検出されている。

北陸系(36・200・327・329・390・430・444・487・524・525)⁽⁹⁾

木目状撚り糸、蓮華文、半截竹管状工具による半隆起線文、口唇部真下に半截竹管状工具の背を上向き

第IV章 調査遺跡

にして施文した押し引き（爪形文）が主となる土器である。

東海系⁽¹⁰⁾ (63・107・111・325・431・428・489～491・526～529)

器壁が薄く、良好な胎土・焼成で、隆帯及び半截竹管状工具による半隆起線上に同一工具の背を上向きにして施文した押し引き(爪形文)をめぐるものが主流で、中には縄文を施文とし、前記した押し引きを巡らしたり、半截竹管状工具やへら状工具により施文するものもある。

関西系 (12・113・488)

器壁が薄く良好な胎土・焼成で、小さな円形刺突列点文が口縁部に施文され、無文のものと同じ長い爪形文や硬い繊維を材料としたと思われる荒い縄文を地文にするもので、口縁部内面に前記した縄文を施文する例もある。

以上が他地域からの搬入土器であるが数量的にいうと全体の1%にもみえない。これらの中では、北陸系のものが一番多く、次に東海系、関西系と続く。

次に本群に伴う特殊な土器について触れておきたい。

顔料が塗られた土器及び塗られた痕跡を残す土器が4点検出できたがすべて浅鉢である。顔料の塗られた土器は、iii整形の項で記したが、顔料の塗布を良くするためか4点とも丁寧に磨かれている。顔料は赤か黒色を呈しているが、原材料は、はっきりとしない。なお顔料の塗られた土器として、14号住居址の浅鉢の底部(72)は内面に黒色顔料が塗られており、DU-39グリット出土の浅鉢D(494)は口縁部の内面の一部に赤色顔料の痕跡を残している。4号住居址外の浅鉢D(498)には内面に黒色顔料が塗られており、EA-31グリットの浅鉢E(500)では、口唇部及び口縁部に赤色顔料の痕跡を残している。

また、本群土器に伴う特殊な例として第11号住居址から出土した顔面付土器(277、図版52)がある。顔面は口縁部の中ほどにつくり出されており、土器の器形は深鉢C形で、口縁部上部でややくびれを持って口唇部が立ち上がる器形である。地文にRLの単節の縄文が、胴部にはRLの結節縄文もプラスされ施文されている。胴上部には隆帯の弧線状文と横位隆帯を組み合わせた区画文が見られ、その中の三角状区画文内には、沈線による玉抱き三叉文が見られる。口唇部には山状突起が付き、その斜め下に縄文の文様帯を挟んで顔面が表現されている。胎土は薄い黄褐色を呈し、表面は黒みを帯びた赤褐色で、金雲母と砂粒を多く含んでおり、焼成は比較的良好である。

顔面の輪郭は、先端が丸いハート形で、沈線と3を横に倒した様な形の隆帯で現わしている。隆帯は眉と鼻を表わし、目、口は短い沈線で表現され、目は吊り上がり、口は引き締った感じで真直ぐである。目の下の縄文は撚りは同じだが方向を違えて施文している。同一個体で顔面の一部と思われる破片があるので顔面は器面に最低2つ、多くて4つ対称的に付いていたと思われる。該期の顔面付土器、顔面把手の資料は少ないが、形としては先端が丸くなったハート形を示すのが特徴となろう。顔面付土器の顔面が把手化すると顔面把手となるが、当時期には顔面把手が存在するのでこれが変化したとは考えられない。しかし、性格は同じ様なものではなかったか。今後の資料増加を待ち検討していきたい。

最後に第II群土器の編年的位置について多少述べておきたい。本群土器の主体は、九兵衛尾根II式期の文様要素である隆帯の下向き弧線文及びその区画文、沈線の上向き弧線文、連続する撚糸文などである。しかし、猪沢式期から主流となる竹管の背を下にした押し引き(結節沈線)文をもつ土器も少なからず検出されている。つまり、古い要素の中に新しい要素が生み出されてくると、その新要素は徐々に浸透し、広まって行き、古い要素が新しい要素へ変化していく。中には根強く残る要素もあるが、第II群土器は文様要素や構成を主として考えるならば、九兵衛尾根II式が普遍化した時期から、猪沢式の新しい要素が生み

出される九兵衛尾根II式の新しい部分までに位置する。換言すれば、九兵衛尾根II式の初期から猪沢式との中間型式まで含む土器群である。こうした点から考えると、住居址の出土状況や、他地域の土器伴出関係、器形、文様の再検討によって、細分の可能性もあろうが、これは今後の課題としたい。

なお、土器については武藤雄六氏の御指導をうけた。厚く感謝したい。

③ 第III群土器 (図49・50・59・60・70・72・73)

文様については第II群土器vの中で述べたeが主体となる土器群である。猪沢式、新道式がこれにあたる。胎土、成形は第II群にほとんど類似するが、胎土に金雲母を含むものが減少する点を指摘できる。猪沢式はe₃の□状押し引きが特徴である。第II群土器の中にこの要素を含むものがあるが、本群に比定できず、遺構内、及び遺構外においてははっきりと猪沢式と認められるものは2点(177・501)出土しているのみである。

新道式はe₄の<状押し引きが主な特徴である。この土器が出土する遺構としては、2号住居址と土壇41があるが、出土数が少なく、遺構外からもそれほど多くは出土していない。完形品はなく、2号住居址内に図上復元できるものが2点(15・16)あったのみで破片が大部分である。15はミニチュア土器で、胎土、焼成共に良好で内外面が磨かれている。A器種で□状の細い押し引きが施文されている。16は浅鉢底部で内面が磨かれており、胎土、焼成共に良好である。なお、破片の文様は次の6種に区分できる。

- i. <状・□状押し引きをもって三角及び楕円区画文を構成するものや、その中にジグザグの押し引き文を施文するもの。(178・179・207~208・414・415・482・484・486・521~523)
- ii. 半截竹管状工具による二条一組の沈線を施文したもの。(171・180・191・198・204)
- iii. 半截竹管状工具で二条一組の沈線を多用し、胎土の良好な平出三類A系の土器(猪沢式から新道式の間では変化が少ないので、猪沢式期のもも含んでいる。)(170・173・174・197・477~481・517~519)
- iv. 縄文を地文としたもの
 - a. 地文だけのもの(172・168・186~193)
 - b. 隆帯を伴うもの(163・164)
 - c. 半截竹管状工具の二条一組の沈線を伴うもの(189・190・194・200)
 - d. cの押し引き及び突き刺しを伴うもの(196・200)
- v. 無文であるが指圧痕が見られるもの(169・181・184・185)
- vi. 無文のもの(176・183・212) 183は有孔鏝付土器である。

④ 第IV群土器 (図74-536)

DE-32グリットから1点のみ出土した。器形は小破片であるのではっきりしないがキャリパー状の深鉢と思われる。胎土に砂粒を若干含み、色調は薄い黄褐色で焼成も良好である。器面には隆帯の区画もち、中をへら状工具で縦に沈線を入れて楕形文を呈している。井戸尻I式かIII式であろう。

⑤ 第V群土器 (図74-547・548)

中期末葉の土器は、わずかに2点出土したのみである。547はBS-25グリットから出土した深鉢の胴部片で、RLの縄文とRLの結節縄文を施文している。胎土は灰褐色で砂粒を若干含む焼成良好な土器である。548はBP-50グリットから出土した深鉢の胴部片で、RLの縄文を施文とし、隆帯を曲線状に貼り付け、その内面を磨り消している。胎土は黒褐色で砂粒を多く含む焼成はやや悪い。

⑥ 第VI群土器 (図74-537~540・550, 図63-265・266, 図71-44)

後期前半の土器が9点出土したが、縄文をもつものともたないものの2種にわかれる。前者は3点あり、538はDR-35グリットから出土した胴部がやや張る深鉢片であり、RLの縄文を地文として湾曲した2本

第IV章 調査遺跡

の沈線を施文し、その中を磨り消している。胎土は薄い黄褐色で砂粒を若干含む焼成は良好である。539は第8号住居址の埋土出土。胴部が脹らむ深鉢の頸部から胴部の破片である。粗いLRの縄文を地文として頸部を磨り消して、先が曲がった横位の沈線を施文している。胎土は灰褐色で砂粒を多く含む焼成は悪い。540はCX-68グリット出土の深鉢胴部片。RLの細縄文を地文とし、押圧隆帯の懸垂文が貼付けられ、湾曲した二本の沈線間を磨り消している。胎土は黒色で、器面は灰褐色を呈し砂粒を若干含む焼成の良好な土器である。

縄文をもたないものは6点あり、593はEA-31グリット出土の深鉢の胴部片。湾曲した沈線と直線の沈線懸垂文を施文し、直線に平行して列点を押捺している。胎土は赤褐色で砂粒を若干含む焼成は良好。549はB区のAトレンチで出土。深鉢の胴部破片で沈線による曲直線文を施文している。表面・内面共に縦位のケズリ痕が残っている。胎土色調焼成は539と同じ。550はBR-49グリット出土。深鉢の胴部片で、楯状工具による波状沈線の懸垂文を施文している。胎土は黄褐色で砂粒を多く含む焼成は悪い。566は第10号住居址の埋土から出土した深鉢の把手である。表面は上向きの弧状に隆帯を貼り付け棒状工具を突き刺した円文が見られ、裏面にも沈線に囲まれて円文がある。下部には穴があいていたと思われる痕跡も残っている。胎土は黄褐色で砂粒を多く含む脆く、焼成も悪い。565は第10号住居址埋土出土。深鉢の胴部片で沈線の懸垂文が施文されている。表面は縦位のミガキ、内面は横位のミガキで整形されている。胎土は灰褐色で若干砂粒を含み焼成は良好。441は土壇出土95の粗製の深鉢の底部。無文で、器面に縦位のヘラケズリ痕と底部の端部に横位のナデの整形痕が残り、底には網代痕がついている。胎土は薄い黄褐色で砂粒を若干含む焼成は良好である。

本群中で537・538・549・550・266は称名寺式併行、539・540・265・441は堀ノ内式併行としてよいであろう。

⑦ 第Ⅶ群土器 (図74-551-560)

晩期末葉の土器は10点出土した。すべてB地区のグリット及びトレンチからである。551・552は口縁部に何条かの沈線がはいり、胴部は無文となる深鉢、551は口縁部に山状突起をもち、552は口縁部下破片。両者共に胎土は黄褐色で砂粒を含み焼成は良好である。553から559は条痕文系の土器である。553は深鉢の口縁部で口唇部と口縁部下の隆帯に押圧を加え、胴部と内面に条痕をもつ。胎土は灰褐色で石英粒及び砂粒を含み、焼成は良好で固く焼き締まっている。554は深鉢の頸部で、押圧隆帯を貼り付けており、口縁部・胴部及び内面に条痕がつけられる。胎土は赤褐色であるが内面は黒色であり、砂粒を多く含む焼成の悪い土器。555から559は器面に条痕をもつ深鉢の胴部片。すべて胎土は砂粒を若干含む土器でどれも焼成は良好。560は弥生中期と思われる土器で、楯状工具を使って斜位の楯描文を交差させた文様をもち、胎土は灰褐色で砂粒を若干含む焼成は良い。

⑧ その他の土器 (図版54-1~8)

製作途上に付着したものの圧痕が認められる土器がある。

A 種子圧痕が残るもの 4点出土したがすべて第Ⅱ群土器である。これらの圧痕が何の種子であるかは、今後の検討をまちたい。図版54-7は第1号住居址出土深鉢(2)の胴部に見られ、長さ5mm、幅1.5mmの流線形の種子圧痕。他に同じ出土地点の深鉢の胴部片にもある。長さ6mm、幅2.5mmの流線形を呈す種子圧痕。同5も第1号住居址埋土上層出土の深鉢無文の胴部片。大小二つ並んで残っており、大きい方は、長さ6.5mm、幅2.5mm、小は長さ5mm、幅2mm。両者共に流線形の種子圧痕である。同4は第11号住居址出土深鉢口縁部片(284)で、長さ4.5mm、幅2mmの楕円形の種子圧痕である。

B 葉の圧痕が残るものが2点出土した。図版54-8は土坑1出土の第I群土器で、シダ類の葉と思われる圧痕が残っている。同1は第1号住居址から出土した深鉢の底部(400)で、底に木葉痕がある。これは土器製作時に下に敷いた葉の圧痕であろう。

C 網代圧痕が残すものは計19点(内4点は薄く残っていただけなので図示しない)出土し、土坑95の1点(441、図版54-2)は第V群土器、第2号住居址の1点(212)は第III群土器、残りはすべて第II群土器であった。

⑨ 別遺構の間で接合された土器

別遺構の間で接合された土器や、胎土・文様・焼成等が一致し、同一個体と認められる土器が5例ある。第1号住居址と第10号住居址(79・88)の間で口縁部が接合するものが2個体ある。遠く40m離れており、標高差は6mある。第1号住居址と第14号住居址(1と349)の例は口縁部の同一個体であり、14m離れ、標高差が2m。第10号住居址と土坑7(260と401)では口縁部と胴部の同一個体があり、15m離れ、標高差が2.3m。第11号住居址と竪穴1(304)の間では胴部が接合する。8m離れ、標高差が1mある。

5例とも緩傾斜地であるので自然に移動したとも考えられるが、最初の例のように2つの遺構間で2例の接合資料が出てくると、どちらかの住居址で廃棄があったものと考えられるが、今後このような資料が増加するにつれて解明されていくであろう。

以上、船霊社遺跡出土の縄文土器の概要を述べ、とくに第II群土器については、やや繁雑になったが、胎土、成形、文様、器形などを分析してみた。しかし、分析のみで、その結果を総括するまでにいたらず分析素材の提供に終わった点を反省している。ただ、第II群土器が九兵衛尾根II式(五領ヶ台II式)から猪沢式(阿玉台I式)へ移行する時期にその中心があることは間違いなく、今後、諏訪地方は勿論、中部・関西両地方の中期初頭～前葉土器の編年的研究に新資料を追加した点、その果たす役割は大であろう。

(3) 石器(図76~83、表3・8、図版55~61)

船霊社遺跡からは、総数830点の石器が検出された。本遺跡は若干の後晩期の土器片を出土してはいるが、中期初頭の短い時期に限られ、この時期における石器のあり方を知る上での好資料となろう。以下器種別に若干の考察を述べながら概述する。なお、黒曜石の石質については、A-透明度が高いもの、B-漆黒なもの、C-赤いシマ等、赤色が入るもの、D-夾雑物が点状に入っているもの、E-夾雑物が縞状に入るもの、F-風化等して白色を帯びているもの、の6種に分けて一覧表に記入した。

A 石鏃(図34・76-1~62、図版55-1)

64点出土した。縄文期の住居址からはほぼ半数の33点が出土し、そのうちの65%にあたる18点が14号住居址に集中する。石質は11・53・57の3点がチャート製で、他はすべて黒曜石製であり、使用されている黒曜石はほとんどがAの透明度の高い良質な石質であり、剥片、原石等からもかなり材質のよい黒曜石を選んで使用していることがうかがえる。

形態を十二ノ后遺跡での分類基準にあわせ、基部、側縁、先端の状態から10形式(12)に分類した。

- a. 正三角形、ないしは正三角形に近い二等辺三角形の基部に深い抉りをもつもの

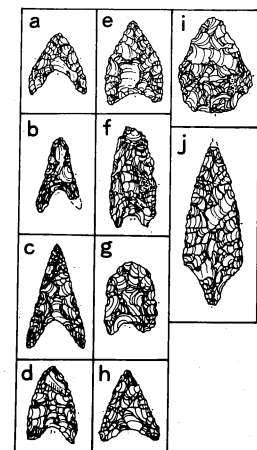


図34 石鏃の形態分類

第IV章 調査遺跡

- b. 側縁が内湾し、先端は鈍い
- c. 二等辺三角形を呈し、側縁は直で、抉りはやや深い
- d. 側縁が外湾し、抉りは中程度で円みをもつ。
- e. 先端がすぼまり、側縁は大きく外湾し、抉りはやや浅い
- f. 細長いプロポーションをもち、側縁はほぼ平行し、抉りは浅く円みをもつ。加工技術は粗い。
- g. 先端が円いか平らな状態を呈する。
- h. 二等辺三角形で抉りが浅い
- i. 最大幅が下辺にあり円基である
- j. 有茎のもの

これらの多くは、丁寧な加工が両面に施こされているが、14号住居址から出土した石鏃は全体的に剥離が大まかであり、厚みもあり、粗雑な加工である。f 形態はすべて14号住居址より出土したもので、全石鏃中でも特異な形態である。

66点中欠損品は32点で半数を占める。このうち片脚のみの欠損が14点と一番多く、両脚欠損が10点、胴部より先端までの欠損が7点で、脚部の破損が約8割を占めている。形態別では、c 形態が18点と一番多く27%を占め、次いでe 形態が16点24%と、二等辺三角形が基本となる形が全体の半数を占める。大きさでは、長さ 1.4～2.4cm、巾 1.0～1.6cmの中にほとんどが入る。重さは最少 0.2g、最大 5.5g、0.4～2gまでが普通で、0.4～0.9gと 1.8～2.0gが多く、形態、重量ともに集中が見られる。

B. 石匙 (図77-63~65、図版55-2)

3点のみの出土である。63・64は丁寧な調整がなされているが、65は石質の関係からか剥離も大きく雑である。63は両刃で、64・65は片刃であり、3点とも横型で、64・63は大きな身部に小さなつまみをもっているのに対し、66のつまみ部は大きい。刃部は63が直刃で、他の2点は外湾する刃部をもつ。石質は、3点とも違い、チャート、粘板岩、砂岩、が使用されている。

C. 石錐 (図77-66~71、図版55-2)

6点出土した。棒状のものと、つまみをもつものの2形態ある。5点が棒状で(66~70)つまみのあるもの1点(71)である。65は長さ 8.3cmと最大であり、加工も丁寧である。黒曜石の角柱状の原石を使用し、頭部と先端部の一部に自然面を残して加工調整している。角柱の相対する2稜からそれぞれ接する2面へ剥離を行っている。4つの稜のうち3つの稜ははっきりと残っているが、他の1稜は相対する2稜からの剥離が接し消滅しており、断面は三角形に近い。67~69の3点は、1面あるいは2面に自然面を残し側縁に調整剥離をほどこし、錐部のみをやや丁寧に作り出している。断面は三角形である。70は一部に自然面を残すが、全体に調整がなされ、一番小形である。断面は錐部がレンズ状になる。71は平板な自然石から錐部を作り出している。つまみ部は自然面がそのまま残り、小さな錐部がつく。石錐6点中、使用痕が認められるのは67のみである。錐部先端に細かなつぶれ状の使用痕が観察できる。

D. スクレイパー (図77-72~74、図版55-2)

剥片の一辺あるいは円周部に調整剥離を行ない、刃部を作り出しているものをあてた。3点のみの出土である。72は黒曜石の断面楔形の原石を利用し、直な一辺に両面から剥離を加え刃部を作る。73・74は1次剥離された剥片の周囲に剥離を加え外湾する刃部をもつ。73は片面加工、74は両面加工の刃部をもつ。3点ともに使用痕は認められない。

E. 石核

8点出土している。このうち7点は剥片をはぎとる方向は一定せず、2～3の方向から打撃が加えられている。幅0.5～1.5mm、長さ2～2.8cmの剥片がはぎとられている。いずれも良質の黒曜石が用いられている。1点は長さ1.7cmの小形なものであるが、プラットフォームを有し、逆円錐状のマイクロコア的な形をもっている。幅0.5～1cm、長さ1.7cm程度の剥片がとられている。これも良質な黒曜石製である。

F. ピエス・エスキーユ

54点出土している。両極に打撃をうけたときに生じる細かなつぶれがあるものすべてピエス・エスキーユとしてとらえた。すべて黒曜石製である。礫核を使用したものと剥片を使用したものの二種に分けることができ、礫核を使用しているもの36点、剥片は18点と前者が倍も多い。また、長さ・幅とも大きなものは礫核に多く、大小にバラエティがあるが、剥片使用のものは、長さ2～3cm、幅1.2～2.6cmの中へすべて入り、大きさのバラツキは少ない。平面形はバラバラであり二者ともに定形はないといえるが、これは、両極に打撃による細かなつぶれがあるものをすべて選び出したからでもあろう。そのために、典型的なピエス・エスキーユとはややかけはなれているものもあるが、縄文時代の各時期において見られるこの種の石器については、製作技法、機能等、各時期における共通点や差異などの比較研究が今後必要となつて来よう。

G. 使用痕のある剥片・石核・原石

398点が認められた。すべて黒曜石製である。剥片を利用したもの285点—72%、石核を利用したもの90点—23%、原石を利用したもの23点—5%の割合で出土したが、圧倒的に剥片が利用されていることがわかる。使用痕あるものの検討は、経塚遺跡で試みられているのでここでは省略し、船霊社遺跡での出土分布状態をD地区のみ取りあげ図示(図35)してみた。黒曜石の剥片・石核・原石は、縄文時代の遺構周辺に集中して見られ、特に14号住居址と、その附近に集中している。それに比例して使用痕あるものの出土が見られる。個々のグリッドでは出土点数の差があり、数も少ないので、割合は出しにくいだが、グリッド全体を見ると、使用痕のない黒曜石数に対する使用痕あるものの割合は18%を占める。同様に住居址別に見てみると、1号12%、2号21%、9号16%、10号15%、11号34%、14号22%となり、遺跡全体では20%となる。石器の総個体数に対する割合は53%である。

1つの個体につけられた使用痕は表1のようになり、Iでは2.2、II—2.1、III—2.1と平均2個の使用痕がつけられている。また、使用痕の種類別数は表2のようになり、刃こぼれ状の使用痕が95%、刃つぶれ5%と刃こぼれ状が圧倒的に多い。また、使用痕部の形態は外湾するもの24%、内湾するもの43%、直なもの33%と、内湾するものに集中する。各縁辺が一定でない凹凸のある剥片等を使用しているのであるから、使われた縁辺の形により、つけられた使用痕の形も変わってくるはずであるが、内湾、直な縁辺をもつものが全体の76%にも及ぶということは、使用する辺を選んでいても考えられる。

黒曜石の一次剥離でできた剥片の鋭いエッジ部を使用し、竹・木を実験的に削ってみたが、ここで取り上げたと同様な刃つぶれ、刃こぼれ状の痕跡を得ることができた。直な辺を使用したか、削る対象の大きさにより、使用痕部が内湾するものもできたが、実

表1 使用痕の数別・素材別数一覧

	I	II	III	合計
1ヶ所	65	25	6	96
2 "	129	37	10	176
3 "	68	21	4	93
4 "	20	5	3	28
5 "	3	2	0	5
合計	285	90	23	398

表2 使用痕の種類別、素材別数一覧

	I	II	III	合計
Ba	154	38	12	204
Bb	241	67	15	323
Bb'	23	13	0	36
Bc	190	59	19	268
Ca	8	5	0	13
Cb	10	5	0	15
Cc	7	5	4	16
合計	633	192	50	875

第IV章 調査遺跡

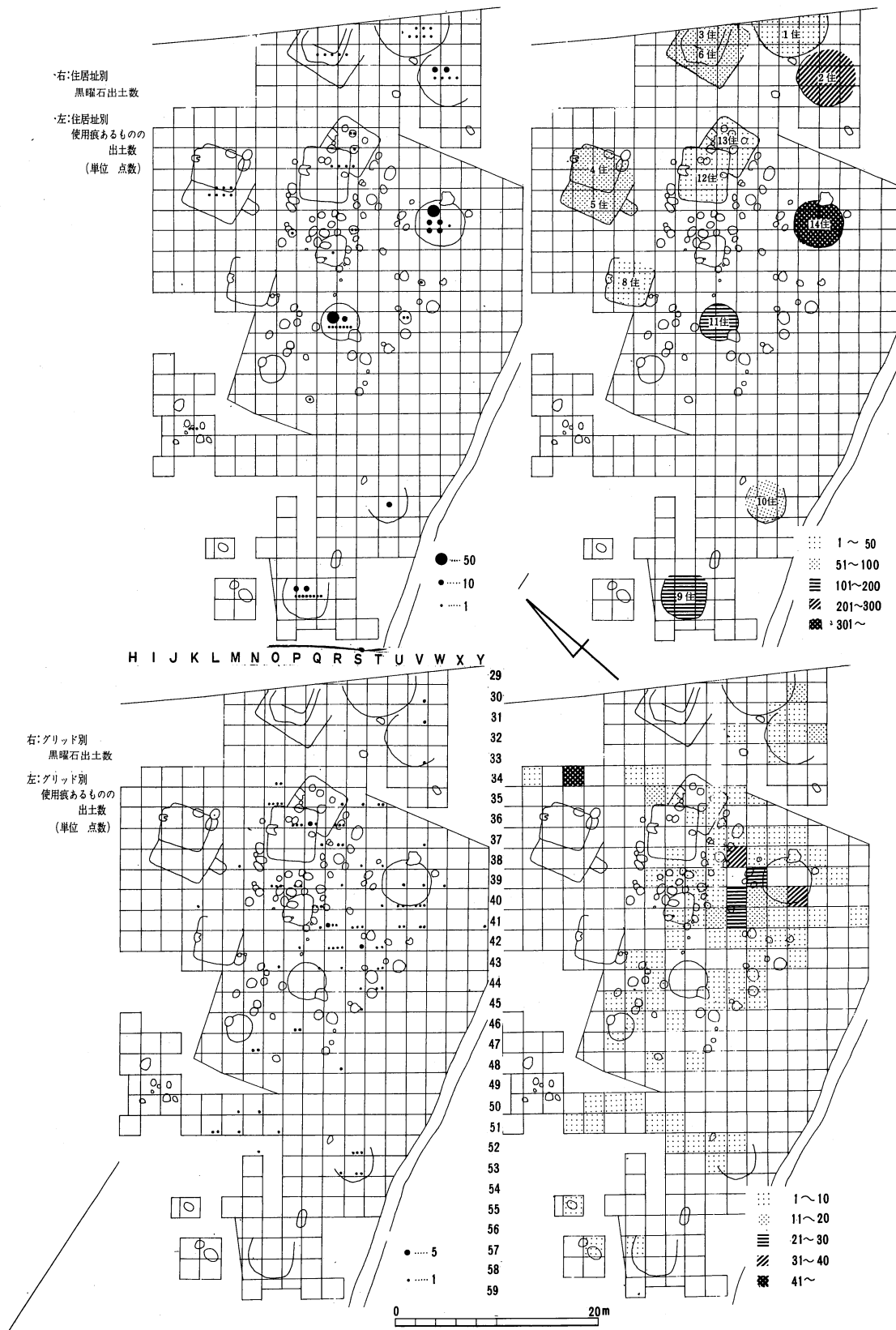


図35 使用痕あるものと黒曜石片出土分布図 (1 : 600)

験個体数が少ないために、使用による使用痕部の変化等については断言できない。今後同様の実験を試みていきたいと思っている。簡単な実験ではあるが、ここで取り上げた使用痕は、木・竹等を削る際にもつくことがわかった。おそらく骨等も加工したと考えられる。しかし、使用痕部の形態・数・使用されている素材等より、特定の作業のために使用されたのではなく、それぞれの作業のために、任意の石材を使用したとの感が強い。

H. 打製石斧 (図36・78～80-149、図版56・57・60・61)

154点が検出された。定形石器の数に占める割合は44%と定形石器中で一番多い。使われている石材は粘板岩65点-42%、砂岩30点-19%、緑色片岩・砂質粘板岩各25点-16%、硬砂岩7点-5%、

塩基性安山岩・珪質砂岩1点ずつで、粘板岩・砂岩類が8割を占める。これらの石は、すべて天竜川上流部で産するとのことで、比較的手に入り易い場所から持ってきていることがうかがえる。形態別に見ると、Iの撥型が43点-28%、IIの短冊型49点-32%、IIIの短冊型48点-31%の割合となり、II・IIIを合せた短冊型は97点-63%となり、短冊型の打製石斧が多用されている。このことは短冊型が使い易い、あるいは作り易い形であり、一般的な形であるといえようか。分銅型は皆無である。他方、刃部形態を見ると、A一直刃をもつもの20点-13%、B円刃をもつもの38点-25%、C斜刃をもつもの38点-26%と、直刃をもつものが少ない。破損により再加工されたものの中にはあり、すべてが最初に作られた刃形ではないが、全体の傾向としては、円刃、斜刃が多用されていることがうかがえる。側辺・刃部の形態から、短冊型で円刃・斜刃をもつ打製石斧が船靈社遺跡では一般的なものといえよう。

154点のうち7割の91点が欠損品である。刃部のみ欠けるもの19点、胴部から刃部が欠けるもの23点に対し、頭部が欠けるもの25点、胴部から頭部が欠けるもの10点であり、46%が刃部側を欠き、38%が頭部側を欠く。頭部・刃部ともに欠き、胴部のみ残るものは13点-14%である。遺構別に見ると、11号址からの出土数が一番多く25点、14号址14、1号址7、9号址4、10号址2、2号址1点、平安時代の住居址からは13点、埋土中より出土しているが後世の混りものと思われる。

使用痕が認められる打製石斧は41点出土した。1点に線状痕が残るものの他はすべて摩耗痕で側縁線にほとんどがついている(図版60-1~3)。石器の身部にまで及ぶものは少なく、側辺部・刃部よりわずかに身部に入る所についているものが多い。図36に示したように側辺部のみについた摩耗痕をみると、胴下半から刃部にかけて磨耗しているものがほとんどであるが、I B・II B類は胴上半部から頭部にまで及ぶものもある。また、使用痕のついているものは、Bの円刃類に集中する傾向がみられる。線状痕が観察された打製石斧は図78-93 1点のみである。刃部は丸みを帯び、その頂点を中心として線状痕が見られた(図版60-1)。

打製石斧の身部に凹みがつけられているものが2点出土した(図78-83、図79-110)。83は胴部やや刃部寄りを中心に、表裏に1ヶ所ずつあけられている。わりと鋭い先をもつ物で、何回も突かれたためにできた凹みで、直径2cm、深さ2~3mmの大きさである。110も83と同様であるが、片面は1ヶ所、もう片面は3ヶ所の凹みが見られる。凹みの規模は83よりも小さく浅い。打製石斧の機能を果たすためのものではなく、後につけられたものと考えられる。

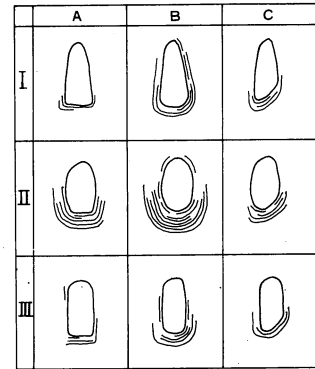


図36 打製石斧の形態別縁辺につく磨耗痕の位置模式図

第IV章 調査遺跡

I. 横刃型石器 (図80-150~161、図81-162~188)

検出された点数は50点で、定形石器の中では、打製石器・石鏃・ピエスエスキーユに次いで多い。形態別に見ると、円刃をもつもの16点-32%、直刃をもつもの19点-38%、内湾刃をもつもの15点-30%の割合となり、直刃をもつものが若干多い。背部の形態は刃部に対し直な背をもつもの26点-52%、丸みをおびる背をもつもの11点-22%、三角形に近い背をもつもの13点-26%と直な背をもつものが半数以上を占める。しかし、背を直に加工してあるものは少なく、自然面、あるいは第1次剥離によってできた面をもつものも多く、167に見られるように、エッジの鋭い部分を敲いて背つぶしを行なっているのを見れば、横刃型石器の必要とするものは、横長の刃部のみであり、手、指があたる鋭い部分には、単に当りを軟らかくするための背つぶしや、調整加工が加えられるのみで、全体としての器形を整える加工は背部等には行なわれていないともいえる。

165は身部に凹みがつけられている。打製石斧同様、先の鋭いもので幾度も突かれたための所産といえる。打製石斧83・105につけられたものに比べ、全く凹んでおらず、痕跡が残るのみである。

使用されている石質は、粘板岩が一番多く29点、砂岩14、緑色片岩6、珪質砂岩1点と、粘板岩が約6割を占めている。14号址より12、1・11号址各4、9号址3、2号址2点が住居址から検出された。いずれも顕著な使用痕らしきものは見あたらず、わずかに磨耗を感じさせるものが1~2点ある程度である。

J. 小形打製石斧 (図82-189~197)

18点が出土した。いずれも長さ5~8cm、幅3cm前後、厚さ1~1.5cmの大きさと、打製石斧のミニチュア的な形態をもつ。単なる剥離ではなく、両面ともに二次剥離が行なわれ、刃部も細かな剥離がなされて作り出されているものもある。使用痕など観察されないが、形の整った一群であるので取り上げた。経塚遺跡からも同様な形態をもつものが出土しており、今まで見過ごされていたことも考えられ、用途など全くわからないが、今後注意していかなければならない石器と考える。石質は砂岩・粘板岩がほとんどで、珪質砂岩が2点あり、使用される石材は、打製石斧・横刃型石器と同様である。

K. 石槍状石器 (図82-198・199)

198は砂岩製で、第一次剥離によって作られた厚さ約1cmの剥片の縁辺の両側に二次剥離を行ない木葉状の形を作り出している。二次加工の剥離は粗いが、旧石器時代のポイントを連想させる。199は珪質砂岩を用い、自然面を残す剥片を利用している。打製石斧と同じ作られ方がされており、側辺には刃つぶし状の細かな打痕が残る。先端部が7mmと薄いのに対し、上半部は1.6cmと厚くなる。

L. その他の打製石器 (図82-200~205)

200・201の2点は打製石錘である。いずれも粘板岩と転石をそのまま用い、両端に1~数回の打製を加えただけのものである。201は打撃により裏半面が剥離してしまっている。

202~204は打製石斧の破損品や、第一次剥離によってできた剥片の周囲を二次加工し刃部を作り出したものと思われる。図示したもの他に6点出土している。用途など解らないが、横刃型石器と同様の用途が考えられる器種である。205はぶ厚い身部をもち、原石からはぎとられたままの剥片が使用されている。身部裏面は、第1次剥離面をそのまま残し、表は上部に簡単な剥離を行ない、自然面を残す鋭角な面に数回の調整を行ない刃部を作り出している。塩基性緑色岩を用いている。東北地方に多く見られる筥状石器に類似する形態をもっている。

M. 磨製石斧 (図82-206・219、図版59-1)

25点出土した。4点が定角式、21点が乳棒状で、他の2点は未製品と考えられる。206・209は蛇紋岩製

で、比較的形が整っている。ともに破損品であり、刃部、頭部をそれぞれ欠く。両者ともに、身部に磨痕が残り、側辺部近くには磨かれた面が稜線を残して見られる。207は頭部のみで、やはり整形の際の磨痕がいくつもの面を作り残っている。208は砂岩製で刃部の一部を欠く。210～217は乳棒状磨製石斧である。すべて破損しており、図示していないものもすべて刃部、胴部、頭部の一部の破片である。乳棒状石斧を作っている石質はすべて塩基性緑色岩である。

表3 船靈社遺跡縄文時代石器の石質別一覧

器種 石質	石 鏃	石 匙	石 錐	ス ク レ イ パ ー	石 核	ピ エ ス エ ス キ ー	使 用 痕 あ る も の	打 製 石 斧	横 刃 型 石 器	小 形 打 製 石 斧	石 槍 状 石 器	磨 製 石 斧	乳 棒 状 石 斧	凹 石 ・ 磨 石	石 皿	そ の 他	計
黒曜石	64		6	2	8	54	398										532
チャート	2	1															3
粘板岩		1						65	29	8						6	109
砂質粘板岩								25									25
珪質粘板岩											1						1
砂岩		1						30	14	5	1	1				3	55
硬砂岩								7									7
珪質砂岩								1	1	2						2	6
緑色片岩								25	6	3							34
塩基性緑色岩												21				1	22
蛇紋岩												3					3
複輝石安山岩														27	4		31
塩基性安山岩								1									1
頁岩				1													1
計	66	3	6	3	8	54	398	154	50	18	2	4	21	27	4	12	830

完形品がなく、破損品のみが残されたという事実は、再利用を意図していたものか、使用されたのが住居址近くだったといえようか。かなり固いものを加工したのか、はげしい使われ方をしているといえる。215には打製石斧・横刃型石器に見られたと同様な凹みがわずかに残る。218は一面を粗く剝離し形を整え、もう一面は磨かれた痕が残る。側辺の一边には背つぶし状の細かな打痕が残る。219は乳棒状磨石斧の破片を再び磨き、再利用している。この二点は磨製石斧を作るための未製品と考えた。

N. 凹石・磨石 (図83、図版59-2)

38点出土した。244の塩基性緑色岩を除きすべて多孔質の複輝石安山岩が用いられている。凹石の形態はバラバラで統一性がなく、凹みの数は、表裏に1ヶ所ずつのもの(220~230)が一番多い。他に表裏の凹が1:2の231、233、2:0の236・238、2:2の234と統一性はなく、凹の状態もはっきりと深くあくものは少なく、いずれも崩れた状態のものが多い。232・234・235は磨石としての機能もあわせてもっている。凹石が14点に対し磨石は8点出土している。239~244は丸い自然石を利用しているのに対し、243~245・247は平板状の自然石を利用している。245は表面に細かな擦痕状のミゾが残り、砥石的な使用がされていたことも考えられる。246は磨石というより石棒の破損品とも考えられるが、かなり風化しておりどちらとも決め難い。これらの凹石・磨石に使用された多孔質の複輝石安山岩な塩嶺層のものに類似しているとの鑑定をうけ、他の石質と同様、比較的入手し易い場所から持ち運ばれていることになる。いずれもかなりの風化のはげしい石が使われており、縄文時代前期に見られる形の整った、石質のよい凹石・磨石と較べれば、石質に関してはかなり無頓着であり、形もさほど気にされていないといえよう。

O. 石皿 (図84-248~251、図版59-3)

4点のみの出土である。10号住居址から出土した248は、壁際に伏せられた状態で検出され、同住居址で使用されていたことが推定される。大形品で凹みも深い。249は14号住居址の埋土中より出土した。約4分の1を欠く。凹部は深い、250は土坑44から検出された。土坑内の平石上に土器が乗り、その上にこの石皿が置かれた状態で出土している。土坑の性格を知る点で貴重な資料といえるが、石皿としての機能

第IV章 調査遺跡

を考えて、土坑内へ入れたものであろうか。長さ19.1cmの小形品である。251も土坑64から出土した。破損品ではあるが250と同様の性格をもつものであろう。石質はすべて複輝石安山岩である。

以上、出土した石器について器種別に概述してきた。縄文時代中期中葉から末葉にかけて、植物採集活動に関係ある石器の占める割合が高くなることは従前より指摘されていることであるが、船霊社遺跡でもそれはあてはまる。定形石器のうち、打製石斧154点、横刃型石器50点、凹石・磨石25点、石皿4点と、これらが占める割合は6割になる。中期中葉から末葉にかけての割合よりは低いが、植物採集経済の占める率が高くなっていることが類推できる。他方、石鏃の出土が64点と後続時期に較べその出土量は多い。もちろん遺跡規模により数量は左右され得るが、住居址6軒という規模から考えれば多い。石鏃が使用される狩猟のみではもちろん当時の食糧を得る手段が満たされていたとは考えられず、手近にまとまった量の食糧を得るには採集が簡単で合理的な方法であったろうことは考えられるが、中期中葉から末葉にかけての狩猟に対する頻度に較べ、中期初頭に位置する本址の方がその頻度は高かったことが、この石鏃の出土量から推察される。このような石鏃が多数出土する例は、諏訪湖北岸に位置する海戸、梨久保遺跡で知られており、梨久保遺跡では表採により多数の石鏃を得、第3・4次の発掘調査では88点の石鏃を検出している。またこの他に石錘の出土も多いと述べている。海戸遺跡においても同様な指摘がされており、井戸尻期から曾利期への打製石斧と石鏃の数の増減について、井戸尻遺跡群と、海戸遺跡とを比較し、井戸尻遺跡群では石鏃が1住居址平均4本から1本へと減るのに対し海戸遺跡では8.5本から7.5本とはほぼ同数に近いことをあげ、天竜川や、諏訪湖沿岸地域では、井戸尻遺跡群で縄文中期の退嬰期にある曾利期にも、水辺に居を構える海戸ではなおかなり活潑な生産力や文化の上昇が、相対的にはあるが示していると述べている。

同時期にある遺跡でも、その立地する環境により文化の内容、継続状態に差があることを指摘しておりその意味では、縄文前期と、爆発的に高まる中期文化との狭間にある中期初頭に位置し、また、諏訪湖岸に立地する本遺跡の石器組成のあり方は注意されるものであり、今後増加する該期研究へ好資料を提供することになろう。

(4) 土製品 (図85・86、表10、図版61)

船霊社遺跡から縄文時代に属する土偶・土製円板・土器片錘の三種の土製品が出土した。土偶5個体分、土器破片を再加工して作った土製円板・土器片錘が43点である。

A. 土偶 (図85-1~4、図版61-3~5)

1の土偶は1号住居址より出土した。胴部破片3点が接合され、さらにDH-48グリッドから出土した足部とも接合した。胴部は2、3cmの板状に作られ、胴から尻にかけては、粘土紐を貼りつけ表現している。右腰部には棒状工具により3点程刺突文が残る。胴部内には0.5mmの穴が三本上から下へ貫通している。両側の2本は足部の接合のため、真中の1本は頭部接合のため、棒が埋め込まれ、焼成のため焼失し、空洞が残ったものと考えられる。足は5.2×4.4cmの楕円形を呈し、直径3.2cmの脚部へとつながる。そのため、内股の感じをうける。裏面の粘土紐貼付場所と脚部にはユビでなでた痕が残っている。焼成はよく焼きしまっている。2は足部の破片であるが、胎土・焼成から1の左足部の破片を思われる。棒状先のあとが残っている。4は土偶頭部である。首部で破損しており、首中央部には2mmの胴と接合のための穴が2.4cmの深さであいている。頭部上面は平らで周囲を5mm程つまみ出し土堤状にめぐらせ、耳部には鐙状

の張り出しを一周させ、両耳部は2mmの小穴が穿たれている。鼻は粘土をつまみ出し表現し、目は棒状工具で細長く引かれている。額部左半分にはへら状工具により二条の沈線が下がる。後頭部には髪表現であろうか。1.7cmの径で円状に周囲をつまみ出し、下部には棒状工具により沈線が施されている。胎土中に雲母・石英粒・微粒砂を含み、焼成は非常によい。5は土偶足部で、指圧痕が残る。脚部の割れ口中央やや右寄りに接合のための小穴がある。カカト部分には半截竹管による押し引きで、逆U字状に沈線がつけられ、その脇を一本ずつの同様な手法による沈線が下がる。3も土偶足から胴下半の破損品と思われる。足部には指の表現であろうか、棒状工具により沈線が二本引かれ、刺突文が足から脚部へかけてつけられている。

B. 土製円板・土器片錘 (図85-6~29、図86-30~48、図版61-q)

土製円板・土器片錘は土器片を加工した遺物なので一括して扱うことにした。まずその形状から、円板状をI型、ほぼ正方形をII型、ほぼ長方形または楕円形をIII型とした。II型のなかの切り込みを持つものをA、更にそれが長軸、短軸両方向にあるものをa、一方向のみにあるものをbとし、切り込みを持たないものをBとした。そして、II型同様、III型のなかの切り込みを持つものをA、切り込みを持たないものをBとし、更にAを、切り込みが長軸・短軸両方向にあるものをa、一方向にあるものをbと二つに分けた。

以上のように7形態に分類し、II-A-a、III-A-bと表現した。形態別に量をみると、I型が12個で約3割を占める。III-B型は13個でI型のもつと合わせると6割に達する。II-B型とIII-A-b型はともに6個であった。III-A-b型のなかに、口縁部を利用し、3箇所切り込みを持つものが1個(30)あったが、本遺跡では極めて特異な例である。II-A-a・II-A-b型は共に数は少なく1個のみである。また、片側に切り込みが2箇所あったものが2個ある。約9割が土器の胴部を利用して作られたものである。周囲はおそらく石で平面に対しほぼ直角に研磨されている。使用されている土器片はすべて九兵衛尾根II式に属する文様をもち、住居址の時期と一致する。諏訪湖を対象としての漁撈が行なわれていたものと考えられる。

2) 古墳、平安時代の遺構と遺物

(1) 古墳時代後期の集落と土器 (図87、表9)

古墳時代後期に属する住居址は、5・13号住居址の2軒であり、いずれも平安時代の住居址に切れ重複して検出された。主軸方向は5号址N20°W、13号址N8°Wを示し、いずれも北壁中央部にカマドを持つ。住居址が選地している場所は、扇状地と東南端に近く、縄文時代の住居址が構築されている場所よりやや扇状地の中央に寄っている。縄文時代の集落の項で述べたように、南に山を背負った地形のため、少しでも日照時間が長い場所を選んだためであろうか。あるいは、風除けのために、東南方向の尾根を利用していたとも考えられる。2軒は6mの間隔をもち、ほぼ東西に並ぶが、これより上部には該期遺構は構築されておらず、本遺跡内におけるこの時期の遺構の上限と思われる。本址より扇状地下部には、土師器、須恵器等の土器片が採集されており、おそらく平安時代の集落と同様に、集落の中心は諏訪湖寄りへ下るものと思われる。

諏訪湖西岸地区において、古墳時代の住居址が確認されたものは、中央道西宮線にかかる発掘調査によ

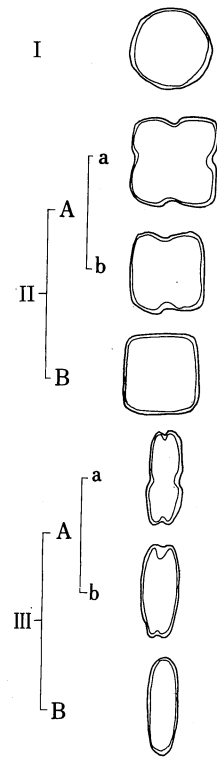


図37 土器片遺物の形態分類

第IV章 調査遺跡

るものが始めてであり、新井北遺跡5号住居址（古墳時代後半）、新井南遺跡2号住居址（古墳時代前期後半）の2軒が調査されている。他方この諏訪湖西岸地区には8基の古墳が所在し、その中には諏訪地方では古い様相をもつ小坂糖塚古墳や、蕨手刀を出土した大林古墳など特異な古墳が含まれており、また、この地区の古墳群は南東に隣接する上社古墳との関係が深く、諏訪祭政圏とのかかわりが見られ、湖北に存する川岸古墳群、今井・横川古墳群、山田古墳群の三つの古墳群と性格が違っているといわれている。船霊社遺跡の北西に張り出す霊湊山上の突端には久保寺古墳が、西南扇状地奥には大塚古墳が立地しており、本遺跡に営まれた集落との関係が注意され、さらに諏訪湖西岸に位置する8基の古墳群と、新井北・同南の2遺跡と船霊社遺跡とを含んだ古墳時代集落との関係など、今後に残された問題となろう。調査例が増しさらに進んだ研究がさなれることを期待したい。

本書で報告されている5遺跡中、古墳時代の遺構、遺物が検出されたのは船霊社遺跡のみであるので、古墳時代の土器分類については、第三章の分類の項では触れなかったが、この期の土師器については金鑄場遺跡において分類がなされており、本遺跡から続く諏訪湖南東に位置してもおり、古墳時代後期の土器分類は金鑄場遺跡のそれを踏襲した。なお、金鑄場遺跡の分類にあてはまらないものは、新たに追加してある。分類の基準については金鑄場遺跡を参照されたい。

古墳時代後期に属する5・13号住居址からは、土師器・内面黒色土器・須恵器が出土し、供膳形態の土器には、杯・蓋が、貯蔵形態の土器には、壺・甕・小形甕がある。平安時代の住居址に切られている関係からか、器種・量ともに少ない。このうち器形の判別できるものは、土師器杯4、壺1、甕6、小形甕2、曾、2で、内面黒色土器杯2、須恵器蓋1の計18点のみである。土師器が15点で全体の83%を占める。船霊社遺跡の古墳時代後期の住居址と同時期の住居址で、同じ諏訪湖西岸に位置する新井北遺跡の5号住居址の出土土器を見ると、土師器杯2、同甕4、同壺1、須恵器甕1と、器種量ともに少なく、内面黒色土器は皆無である。船霊社の5・13号住居址の出土遺物と比較してみれば、土師器杯Aが新井北遺跡には見られず、土師器杯K、須恵器甕は船霊社にはない。土師器壺、甕の形態にも若干の相違が見られる。他に比較できる資料がこの地区にはないために速断はできないが、新井南遺跡の古墳時代前期に属する2号住居址から、土師器の壺3、埴1、台付甕1、高杯2、小形丸底土器1、小形甕1、杯5の計14点がセットとして出土しているのを見れば、古墳時代後期に属する本遺跡の住居址からは器種・量ともにその出土は極めて少ないといえる。集落のあり方にも問題があるであろうし、他方面からの考察が必要になろう。今後の資料の増加を待ちたい。

(2) 平安時代前半の集落と土器 (図88~91、表9)

平安時代前半に属する住居址は、3・4・6・7・8・12号の6軒が検出された。第8号址を本遺跡での集落の上限とし、4号・12号、3・6・7号住居址が扇状地下方へ連なって検出された。選地は古墳時代後期の5・13号址と同様、扇状地東南端よりやや中央寄りにされている。集落の中心は過去の表採等による調査から見て、扇端部にあると思われる。各住居址の主軸方向は、半掘の3・6・7号址は確認できないが、4号址N28°W、8号址N27°W、12号址N32°Wとほぼ同一方向を向き、3址ともに北壁中央部にカマドを構築している。いずれも石組粘土カマドで、遺存状態は非常によい。4号址には東壁にもカマドが築かれており、建て直しの可能性もある。住居址間はそれぞれが5~6mの間隔をもち、主軸方向、出土遺物等より見て、ほぼ同時期に営まれた住居址であると思われる。

本遺跡が立地している諏訪湖西岸地区で、土師器、須恵器、灰釉陶器等の土器が採集されている遺跡は

10ヶ所を数え、湖に向い開扇する扇状地上や丘陵上に立地し、古墳時代後期にくらべ、かなりの集落が西岸に営まれていていると思われる。この時期に属する発掘例は、新井北、南遺跡があげられるが、新井北遺跡では5軒の平安時代後半の住居址が検出されており、新井南遺跡では同じく12軒の住居址が発掘されている。また、本書で報告されている洩矢遺跡でも、5軒の平安後期の住居址が検出されている。古代、中世を通じ、現岡谷市の大部分は金刺氏の治下にあり、湖西岸に立地するこれらの集落群は、おそらく金刺氏の政治・経済の根底を支える最少単位として位置していたものと思われる。

船靈社遺跡の平安時代前半にかかる住居址にはそれぞれ特徴が見られる。4号址は土器類の出土が一番多く、また、鉄製品の中で、鏃・壺蓋・鏢ノミ・鎌などを出土しており、8号址は、本遺跡で灰釉陶器をもつ唯一の住居址でもある。12号址は、住居址の規模は最大であり、甲州型杯・武蔵型甕の他地域の色彩の濃い土師器をもち、鉄製品では、鏃・鎌・鋤鋤先等があり、また、土錘の出土量は遺跡中最も多い。羽口・鉄滓が列状に検出され、鉄製品も多い3・6・7号址は鍛冶的色彩の濃い住居址として注意される。このように本遺跡で検出された住居址は、集落の中心的位置をもっているものと思われ、かつ、鍛冶など専門化された特殊技能をもつものもあり、諏訪湖側へ広がるであろう該期住居址群の中にあつて上部にその構築位置を占めるこれらの住居址は、集落構成の上でも注意される。131点が出土した土錘は、新井北・同南の両遺跡から出土している244点の土錘の量とともに、諏訪湖を対象とした漁業が盛んに営まれていたことを説明しているが、近世に入り、諏訪湖漁業権を半独占的にもっていた旧花岡・小坂の両村の背景⁽¹⁸⁾に、この時期の諏訪湖漁業があるのかも知れない。

出土した土器類は、十二ノ后遺跡で行なわれた諏訪地方の奈良・平安時代の土器編年の第5様式にあてはまり9世紀前半に位置するものである。出土した土器には、土師器、内面黒色土器、須恵器、灰釉陶器があり、供膳形態の土器の器種には杯、椀、皿、鉢、短頸壺、蓋があり、貯蔵・煮沸形態の土器には甕と小形甕がある。器形の判別したものが64点あるが、土師器が29点45%と約半数を占め、次いで須恵器が20点31%、内面黒色土器は14点22%、灰釉陶器1点2%の割合となり、土師器が半数を占めるのに次いで須恵器が多用されている。灰釉陶器は短頸壺1点のみが器形を知り得るもので、他に1片、おそらく手付瓶の胴部把手の部分と思われる破片があるが、器形、時代とも判別できない。8号址より出土した灰釉短頸壺は、鳴海32号窯式か折戸10号様式に比定でき、本遺跡において1点のみの存在は、非常に特異なものであるといえる。土師器では杯が5、鉢1、甕18、小形甕5点と、約8割を煮沸形態の土器が占める。反対に内面黒色土器はすべて供膳形態の杯、椀、皿であり、須恵器においても杯8、蓋5、壺5点と供膳形態の土器がほとんどを占め、供膳形態の土器と、煮沸形態の土器にははっきりと差ができる。

器種別にみると、高台がつく杯B類は土師器、内面黒色土器が1点ずつ、須恵器が2点と計4点あり、ロクロ成形され、糸切痕のつく平底をもつ杯C類は、土師器1、内面黒色土器11、須恵器6点と6割を黒色土器が占める。甲州型とよばれる杯Eは3点出土している。杯に占めるC類の割合は7割の高率であり、その中で内面黒色の杯が4割と多用されている。3点出土した杯Eはいずれも、箱形からC期の逆梯形状の器形へ移る過渡的な器形で、A期にみられた外面の篋磨きが省略されている。いずれも墨書痕が見られる。3点のうち2点が12号住居址、1点は3号住居址からの出土であり、2軒の住居址の本遺跡においての中心的な存在を考えると、その所有に意義があるのであろうか、注意される器種である。

甕はすべて土師器で17点を数え、E類が8点と約半数を占める。C・D・G類が1点ずつ、F類は2、不明3点である。E類の8点のうち7点が4号住居址から出土しており、また、F類の2点は12号住居址から出土しているなど、住居址において器種が限定され使用されていたことも考えられる。

第IV章 調査遺跡

平安時代の土器資料は諏訪地方においてかなり増加してきているが、平安時代後期に属するものが多く、本遺跡と同じ平安時代前半にかかるといえる。地域的に見て隣接する伊那谷、山梨県との関係や、平安時代後期になり増加する灰釉陶器の初現など触れることができず、本遺跡内での概述のみに終ってしまった。

(3) 鉄製品 (図92・93、表11、図版67～69)

船霊社遺跡においては、7軒の住居址から58点・遺構に伴わないものが38点、総数96点の鉄製品が出土している。その内訳は、刀子17・鉄釘15・鉄鏃7・鋸4・鑿2・鎌2・留金具2・馬具2・紡錘車の軸2・紡錘車1・鏝鑿1・賀多奈1・不明鉄製品32点他である。住居址別の出土数としては、6号址が18点と最も多く、次いで12号址の13、4号址の9、5号址の2点と続き、8号址が1点である。また、他に3・6・7号址から13点出土しているが帰属住居址は不明である。

スラグは、6軒の住居址から228点・13033.5g、遺構に伴わないものが24点・1286g、総数252点・14319.5gが出土している。住居別の出土数としては、6号址が194・9570gと最も多く、次いで4号址から13点・1361g、7号址から6点・539g、12号址から4点・430g、8号址から6点・193g、5号址から4点・77.5gが出土している。また他に、3・6・7号址から1点155gが出土しているが、帰属住居址は不明である。

羽口は、3軒の住居址から19点出土している。住居址別の出土数は、6号址から16、7号址から2、12号址から1点出土している。

以下、これらの鉄製品・スラグ・羽口について説明し、若干の考察を行なうことにする。

A. 刀子

3軒の住居址から9点、遺構外から8、計17点が出土しており、鉄製品の中では最も多い出土数である。身部・関部・茎部を持ちおおよその形状が考察しえるものは4点(1・8・14・16)ある。各部の造りにより分類すると、

① 身部の造り A. 平造り——全製品

② 刃先の造り a. 直線をなすもの(2) b. 軽いそりを有するもの(3・5・8)

③ 関部の造り I. 両関造りで鈍角をなすもの(8) II. 両関造りでほぼ直角をなすもの(5) III. 片関造りで刃関のみを有するもの(3) IV. 片関造りで棟関のみを有するもの(2)

④ 茎尻の造り a. 刃上りの急なもの(7・8)

身部に鞘の木質を残存するものが2点(No.5・8)、茎部分に柄の木質を残存するものが2点(No.2・4)ある。刀子の出土数は、他の鉄製品に比べ圧倒的に多く、その機能も削る・切るなど多目的であり、今後各方面から検討される必要があろう。(鉄製品一覧表のみにあって、図示しないものは一覧表のNo.をつけ、「No.○」で記入した)

B. 釘

6号址から1、8号址埋土上部から1、遺構に伴わないものが13、

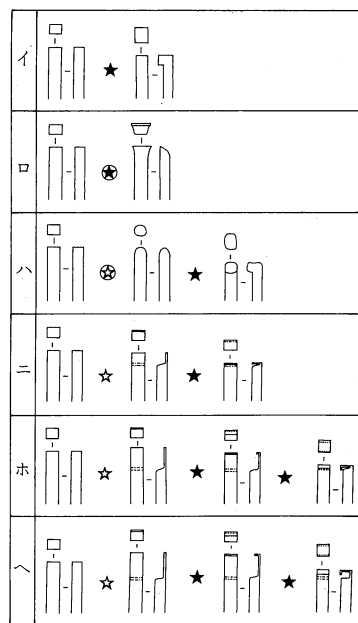


図38 釘の製作過程模式図

計15点出土している。いずれも断面方形の角釘であり、15点のうち全形の考察可能な完形品とほぼ完形品は13点ある。

- 長さによる分類は、I. 10cm以上の大形のもの(22・23)
- II. 7cm前後のもの(20・21)
- III. 6cm前後のもの(18・19)
- IV. 4cm前後のもの(17・25・26・28・29)

の4分類になる。しかし、釘の製作方法が一本一本を鍛えるというものであり、厳密なものではなく大まかな分類になる。また、釘の一端には何らかの加工が施されて皿部を形成しており、その製作工程により分類できる。その分類は、

- イ) 端部を折り曲げ皿部とする所謂「折り釘」
(17~22・24)
- ロ) 端部の片面を叩き延して皿部とするもの(23・26)
- ハ) 端部を打ち加工を施して折り曲げ、皿部を楕円形とするもの(25)
- ニ) 端部の一側を叩いて平らにし、折り曲げ皿部とするもの(27)
- ホ) 端部の一側を叩いて平らにし、コ字に折り曲げ皿部とするもの(28)
- ヘ) 端部の一側を叩き延し、雁首型とし皿部とするもの(29)

の、6分類になる。釘の機能が木材と釘との摩擦力に依存されている点より、断面周囲の長さを観察したものが図39である。これによると、

長さとは無関係にほぼ一定の数値の範囲(1.4~3.6)に収まっている。また、これは、脚部の幅と厚さとの関係とも関連するためにその比を出してみると図40に示す通り、1:1~1:3の範囲に分布している。

C. 鏃

12号址から2、4号址・5号址から各1、遺構に伴わないものが3、計7点出土している。全形状が復元考察可能なものは6点(9~14)ある。14は、根の造りが一面は丸く他面に稜線を持つ片丸有稜ともいべきもので、篋被と茎の間には鈍角の関を持ち明確に区別されている。10は斧箭式広根鏃で関部は鈍角をなしている。11は、短冊型の鑿頭式鏃で先

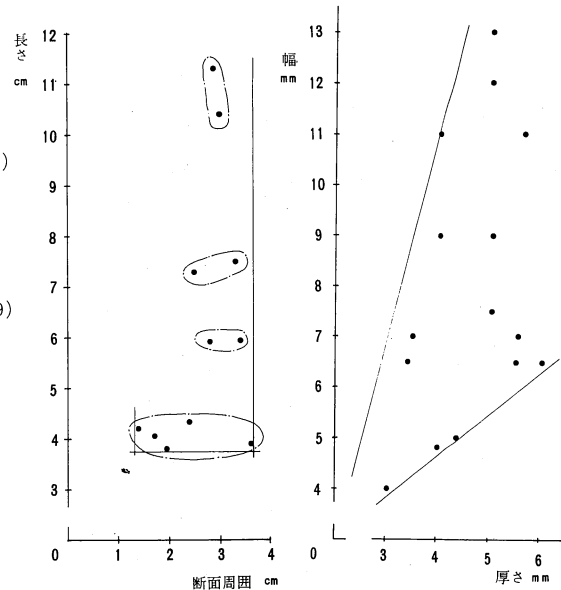


図39 釘の断面全周と長さの相関

図40 釘の幅と厚さの相関

表4 中央道関係遺跡出土鉄鏃一覧

遺跡名	時代	^a 住居址数	^b 出土住居址数	b/a	備考
酒屋前	中島式期	3	1	0.33 1/3	
本城	8C中期	2	1	0.5 1/2	
城山	8C後期	1	1	1.00 1/1	
中道	8C末~9C	9	1	0.11 1/9	馬具・尾錠etc 出土
千鹿頭社	8C末~9C前	1	1	1.00 1/1	
本城	8C末~9C前	14	2	0.143 1/7	
若宮	8C末~9C前	3	1	0.33 1/3	
中道	9C後~10C	26	2	0.077 1/13	
沢入口	10C前期	5	1	0.2 1/5	刀子・鏃・鏃の3 点が結びつく
月見松	10C中期	3	1	0.33 1/3	
山本田代	10C中期	6	2	0.33 1/3	
菖蒲沢	10C中期	5	1	0.2 1/5	
手洗沢	10C中期	1	1	1.0 1/1	
中道	10C後~11C	28	1	0.036 1/28	
堂地(狐窪)	10C後~11C	16	1	0.06 1/16	
荒神山	11C~12C	2	1	0.5 1/2	
足場	12C	14	1	0.071 1/14	中心的住居址と 思われる。

第IV章 調査遺跡

端にそりの有る片刃造りである。篋被から茎にかけてねじれている。9は、根が正三角形に近く両丸造りであり腸袂の返りがある。12は、根がほぼ長方形の鑿頭式鎌で、そのある片刃造りで篋被から茎へ鈍角をなしており、茎部はねじれを生じている。11・12は、いずれもそのある片刃造りで篋被から茎へかけてねじれを生じている点から、あるいは鑿であるかもしれない。

住居址出土の鎌は、その所有形態の問題等々興味ある事柄といえる。表4は、中央道関係の遺跡より鎌を出土した住居址数の

表5 中央道関係遺跡出土鉄鎌一覧

遺跡名	時代	a 住居址数	b 出土住居址数	b/a	備考
千鹿頭社	8C中期	1	1	$\frac{1}{1}$	
菖蒲沢	9C前期	3	1	$0.33\frac{1}{3}$	
中道	9C後~10C	26	1	$0.038\frac{1}{26}$	
堂地(大原)	9C後~10C	2	1	$0.5\frac{1}{2}$	
沢入口	10C前期	5	1	$0.2\frac{1}{5}$	2点出土
中道	10C後~11C	28	2	$0.071\frac{1}{14}$	
堂地(大原)	10C後~11C	3	1	$0.33\frac{1}{3}$	
南高根	11C	1	1	$\frac{1}{1}$	
中道	11C後~12C	4	1	$0.25\frac{1}{4}$	
足場	12C	14	1	$0.071\frac{1}{14}$	鎌先出土

一覧表であるが、同時代の住居址数に関係なく出土住居址数は一乃至二と少なく、中道遺跡20号住居址は尾錠・轡金具等も出土する最大級の住居址であり、足場遺跡8号住居址は遺跡の中心的住居址と思われる等々、鎌を出土した住居址は、遺跡の中で特別の位置を占めているようである。本遺跡では、12号・4号各住居址が平安時代前期に属しており、表4の傾向と一致するといえる。

D. 鎌

4号・12号址から各1点ずつ計2点出土している。4号址出土のもの(49)は、竈左側壁附近より出土している。身の先端のみであるが、刃の内湾半径Rは64mmで最先端は鋭い丸みを帯びている。12号址柱穴附近より出土した例(48)は、身の先端が折れ曲がっているが完形品である。基部は直線を示し刃は内湾しており(R=127.5mm)最先端は丸みを帯びている。基部と柄とのなす角θは112.5°である。鎌は農作業における収穫という2次の作業に際し使用されるものであり、住居址出土の鎌はその所有形態など種々の課題をもつといえる。表5は、中央道関係の遺跡より鎌を出土した住居址の一覧表であるが、同時代の住居址数に関係なく出土住居址数は1乃至2と少なく、本遺跡においてもその傾向と一致するといえよう。

E. 鋤鎌先

12号址から耳部の破片が1点(42)出土している。耳部のみ破片であるため全形状の復元は不可能である。鋤鎌先は農作業における耕作という1次の作業に際し使用されるものであり、鎌同様興味ある問題をもつといえよう。

F. 鑿

6号址から1、遺構に伴わないものが1、計2点(15・16)出土している。いずれも上端部には使用時の打撃によりできたものであろう変形がみられ、また側面には木質が付着残存している。

G. 賀多奈(短刀)

6号址から1点(32)完成品として出土している。寸結物(7寸3分)の平造りである。切先附近の数cmの範囲に繊維状の異物が一定の方向を示さず附着しており、編み物の上にも置かれていたものであろうか。

H. 鋸鑿

4号址から1点(3)出土している。ほぼ完成品であり、カマドに密着して出土している。刃先は丸く(所謂丸鑿)、基部と鋸部とは一体の造り出しではなく接合によるものである。

I. 鋤

12号址から1、3・6・7号址(帰属住居址は不明)から3、計4点出土している。3・6・7号址出土の3点は、いずれも内面に木質が附着残存しており、そのうちの2点(33・34)は、外面にも木質が附着残存している。34の木質附着残存状況から輪にしてから使用したものではなく、細長い板状のものを直接巻き付けたようである。径に対する幅の広さが大きなもの(33・35)と、小さなもの(34・No.42)とに大別されるが、使用箇所による相違であろうか。

J. 紡錘車

6号址から紡錘車が1、3号・6号・7号址から軸が2点出土している。6号址の紡錘車³⁰⁾は10片に分離しており、また軸が細片化しているが出土状態などよりほぼ形状を把握することは可能である。しかし、繊維を固定する部分を欠いているため全長は不明である。

K. 馬具

4号址より坪鐙の一部と思われるものが2点出土している。破片であるために全形状を復元することは不可能であるが、2点は同一体の破片と思われる。

L. 留金具

12号址より2点出土している。36は端部に穴を1つもつものの破片であり、全形状は不明である。37は端部に穴を造り出したもので、一部であるためにその全形状は不明である。

M. 不明鉄製品

本遺跡において完形品でないために、あるいはその用途が不明であるために帰属が明らかでないものが32点出土している。以下、特徴あるものを説明する。

44・43やNo.77～81・No.90・94・95は棒状をなし、鏃の筧被・茎、釘、紡錘車の軸、錐、刃子などの一部とも考えられるがその区別は極めて困難である。40・41・No.85は環状をなした帰属不明の製品である。41は一端に4つの深い切り込みが入り4点が鋭く尖り出ている。矢の逆輪状のものである。38・39は杯の蓋のかえり部の一部か、たち上り・受部の一部と思われる一片³⁸⁾と、底部から体部へかけての一片³⁹⁾と思われる。この2片は同一個体の一部とみてほぼ誤りはないと思う。計測可能な前片より径は7cm程である。46は4号址出土の鉄滓中に混じていたものであるが、三角形をなし長辺は薄く刃状をなしており、両面に木質が残存附着している。削り工具の部品かあるいは完形品であろう。No.73も同様のものであるが、6号址の鉄滓中出土のもので2片が錆びついている。47は6号址出土のものであるが、刀子状のものを3つに折り重ねたもので鉄の再生の過程のものとも思われる。鉄の再生過程を知る上での好資料といえよう。他に寛永通宝2枚、キセル吸口3点、引金具1点が出土したが、いずれも近世以降のものである。

N. スラグ

鉄製品ではないが、製鉄関係品としてスラグ(鉄滓)と羽口が出土しているので本稿で一緒に扱う。6軒の住居址から228点・13033.5g、遺構に伴わないものが24点・1286g、総数252点、14319.5gが出土している。3・6・7号址からは、201点・10264gと全体の72%、4号址(13点・1361g)に9.5%、12号址、(4点・430g)に3%と、集中的に出土している。

スラグの外状による分類は不明瞭ではあるが、椀状を呈するものと塊状を呈するものに別けられる(スラグの捨てられ方によるものと思われる)。また、中には表面に木質が附着したもの(No.95・182・208)、石が附着したもの(No.138)、鉄製品が附着したもの(No.202)などがある。No.199は、内眼観察においてほとんどといってよい程鉄分を含んでおらずガラス質の状態を呈しており、No.248～253は、鉄滓とは言い難く、鉄くずであろうと思われる程鉄分を多く含んだものである。

第IV章 調査遺跡

0. 羽口

3軒の住居址から図上復元可能なものは8点を含めて19点出土している。完形品出土はないが、最大のもは、現在6号址の16cmを計るもの(図93-5)である。これにより全長はそれ以上であるとはしか推定できないが、6号址出土品(図93-6)より羽口の基部の形状がわかるので全形状の推測は可能である。

図41に示すように、外径は5.9cm~7.4cmの間であり、内径は2.4cmから4.4cmの間にありほぼ一直線上に分布しているといえる。基部の内径が他の内径に比べ著しく大きい点が注目できる。

羽口の全形は、先端部は体部より徐々に細くなり、通風孔へと連なる。外部の鉄滓の附着状況などより、羽口の装着は10°ほどの角度を持って行なわれていたことがわかる。体部は円筒状の直線を呈し、整形はハケナデが行なわれている。基部は直線的にやや末広になり底部は平らになっている。

最後に、本遺跡より出土した特徴的遺物により各住居址の位置付けを考えるとともに、住居址内における鉄製品の出土位置について触れておきたい。

上述のように、4・12号住居址では多数の注目すべき鉄製品がまとまって出土した。天竜川上流域では平安時代における鉄製品の住居址からの出土例はあるが、出土量は少ない。その意味で出土量からの単純な比較は問題もあろうが、4・12号址は本遺跡内では、ある特定な性格を有するといえよう。

3・6・7号址は、製鉄に関係する遺物を多量に出土しており、製鉄に関係ある遺構として他の住居址と区別してよいであろう。

住居址の遺物出土位置については、前述のように4・5・8・12・13各号址と3・6・7号址とは性格が異なるために、ここでは分けて扱うことにする。前者の住居址出土位置をモデルハウスに記入したものが図42であるが、これによると鉄製品の出土位置は3つのグループに分かれることがわかる。第1のグループは竈の前左側、第2のグループは住居址内ほぼ中央、第3のグループは竈の反対辺左隅である。住居址内で使用しないであろうと思われる鎌・鎌・鋤鉄先・鏝鏝の出土位置は規則性がない。これにより、3つの出土傾向は意識的なものというよりも単なる偶然の傾向といえるのではないと思われる。それに対して3・6・7号住居址からは、鉄製品・鉄滓・羽口・焼土が出土しているが、これらの遺物の関係は、

- ①焼土の一端から列をなして羽口が出土している。
- ②羽口の出土箇所には鉄製品が出土している。
- ③羽口の出土箇所での鉄滓の出土は極めてわずかである。
- ④鉄滓の多く出土する地点は、南及び西壁周辺に集中している。
- ⑤鉄滓集中出土地点には鉄製品は集中して出土している。
- ⑥焼土と鉄滓出土地点は相対置する。
- ⑦鉄製品の集中出土地点(羽口出土地点及び鉄滓出土地点)以外の出土は粗い分布状態で示す。

といえる。これより、3・6・7号住居址内での空間区分は、中央部が作業空間であり、周辺部が収納・廃棄物収納空間となっているといえよう。

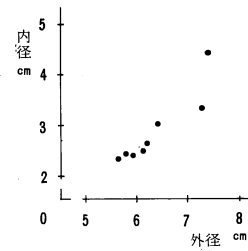


図41 羽口の内径と外径の相関

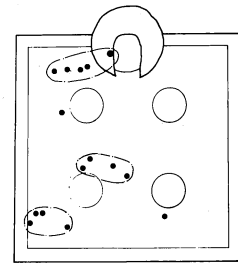


図42 住居址内における鉄製品出土地点模式図

(4) 土 錘 (図43~47・86、表10、図版66-2)

土錘の形態を紡錘形をI、管状形で胴径が大きいものをIIと大きく2つに分類した。(図43)

I型のなかには紡錘形で長さ数cmを越えるやや大形なものをA、長さ4~5cm程度のをB、径のわりに長さがなく、ずんぐりしたものをC、ごく小さなものをDと細分し、Bを更に、中央部が膨らんだ最も一般的なものをa、中央部がくびれているものをbとした。II型も一般的なものをA、同程度の大きさで、中央部がくびれているものをBとした。表示はI-B-a、II-Aとした。

また、土錘の欠損状態については、図44の如く完形をI、破損品をIIとし、IIの中で一端破損をA、両端破損をBと二つに分けた。更に、割れ方が長軸方向に対し、直角に近いものをa、割れ方が長軸方向に対し斜めをb、割れ方が半截状のものはC、ひとつの形では表わすことのできないものはII-A・C-aというように組合せて表示し、II-Dとした。

以上の分類をもとにして遺跡より出土した土錘の形態、破損状態について若干の考察を試みたい。131個の土錘のうち、完形品は65個で、66個は欠損品であった。一部欠損あるいは、磨滅しているが十分に土錘の機能を果たし得ると思われるものは完形と見なした。

形態別にみると、I型の紡錘形が大半(66%)を占め、II型の管状形は極めて少ない(5%)。欠損などにより形態判別不可能なものが39個(29%)あったが、これらのうち、約30個はI型に、約10個はII型に属すると思われる。欠損状態を観察すると、66個のうち一端が欠損しているものが36個(約55%)、両端欠損13個(約20%)その他の欠損品は17個(約25%)である。なお、後世の耕作等による欠損と思われるものも若干あった。

次に土錘の重量・長さ・孔径・胴径について計測してみた。重量については図45で明らかのように、3~6gのものが多く30個(約50%)。次いで0~3gが20個、6~9gが11個と続く。これらはすべてI型で、残る4個は15g以上のII型であり少ない。長さは、35~45mmが35個で全体の約半分を占め、45mm以上が10個、25~35mmが15個、25mm未満が7個であった。孔径は、3~4mmが39個で(約30%)、4~5mmが35個、2~3mmが25個の順である。数mmを越えるものは全体の2割に及ばず、7.5mmのものが1個、8mmが2個、9・10mmが各1個である。なお、最少孔径は1.5mmで3個あった。胴径については、5~15mmの間にほぼ集中する。

図46の相関図に示したように、I-B-b型の長さは40~50mm、重量4~8gのものが多く、I-C型は長さ25~37mm、重量2~6gが多い。I-D型は長さ18~30mm、重量2g以下が殆んどである。I-B-a型は胴型10~15mmでスマートな形と言うこ

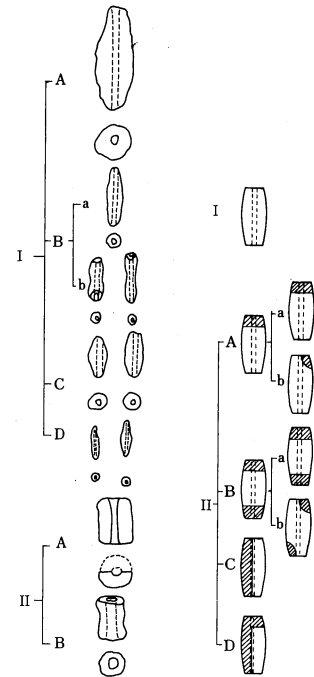


図43 土錘の形態分類 図44 土錘の破損部分分類

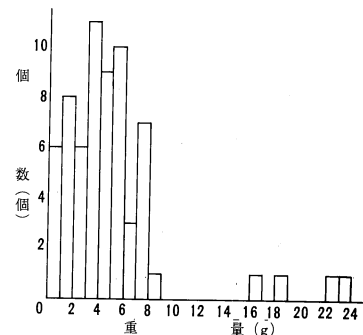


図45 土錘の重量分布

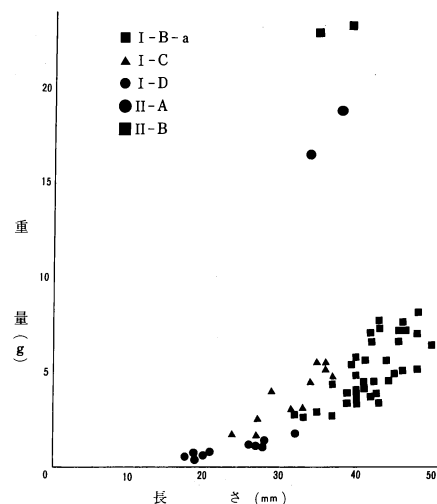


図46 土錘の重量と長さの相関

第四章 調査遺跡

とができ、I-C型は胴径8～15mmで、I-B-a型と余り差はないが、5～15mm長さが短い。I-D型は胴径5～6mm、長さ18～20mmと、胴径7～8mm、長さ26～28mmの二つに分かれる。重量を除けば、II-A型とII-B型は同程度の大きさである。なお、形態による孔径の差は顕著ではない。

色調は全般的に褐色を呈し、黒褐色、黄褐色、茶褐色など様々である。黒色・黒褐色のものは胎土も良く、キメ細かで、焼成も良好である。II型のもは黒褐色系統のものが殆んどで、硬く焼かれている。孔は円形が大部分で、わずかではあるが楕円形もあり、土錘の中心部を貫通する。半載状に割れたものやその他の欠損品などから、カヤ等の細い円筒状のものを、また、II型のような孔径が大きなもの、やや太い棒状のものが用いられたものと思われる。

I-B-a型の土錘の中に、両端をきれいに切断したものが10個、一端にのみそれが認められるもの(欠損品のため一端は不明)が5個ある。これらは極めて特異な例で一般的には、1個ずつ細いカヤ等の円筒状のものを粘土で包み整形したと考えられるが、これは整形の後、適当な長さに両端を切断している。粘土が中心部の筒を覆ってしまったためか、大きさを揃えるためなのであろうが、このような土錘は第12号址からの出土例が8点と一番多く、4号址から2点、グリッドから5点ある。グリッド出土の2点も12号址上であり、15点中10点が12号址に所属すると見てよく、両端を切断する土錘は、12号址の人のみの技術であったことが考えられ興味深い。なお、12号址の両端切断土錘7点の長さ・胴径・孔径・重量の関係を示したものが図47である。長さは40～50mm、胴径12～16mm、孔径3～4mm、重量6～8gに集中しており、同一人の作業結果とも考えられる。またを総計131点の土錘のうち、37%にあたる48点が、12号址と、関係グリッドから出土している。両端切断の土錘とも関連し、本遺跡において、土錘の製作が12号址に集中していたことも推察でき、集落の構造を知る上で注意される。

本遺跡における土錘の標準タイプは、I-B-a型といえる。この型の土錘は現在諏訪湖漁業での漁具の中には見ることはできないが、下諏訪町立博物館の展示資料及び同館発行の展示解説図録『漁具』中や、小林茂樹著『諏訪湖の漁具と漁法』(昭和49年)中に、刺網の中で、わかさぎ・ふな等の小魚を獲る時に使用する「きよめ網」のやと(おもり)には、現在でも、カヤの先に粘土を丸めて、後カヤを引き抜き、乾燥させ焼いて使用している例が紹介されており、大多数の漁網のおもりが鉛製になっている今日でも、土製のおもりが使用され続けていることは注意をひく。以上のように、本遺跡から出土した土錘は、漁具として使用されていたことに間違いなく、それも、I-B-a型に代表される小形の土錘は、刺網類にその使用を求めることができると思われる。II型とした円筒形の大型のものは、持っている重量から、大型の網類、あるいは、網全体が流されなためのおもりに使用されたと考えられ、「きよめ網」より大型の「たけたか網」での使用、あるいは「投網」のおもり、「きよめ網」の一番端やつなぎ部分へつけるおもり等々が想定される。他に土製品としては紡錘車が1点出土している。

(5) その他の遺物 (図版69)

炭化物(植物種子と木材片)と琥珀・貝殻がある。所属時期の判明するものと不明のものがあるので、こ

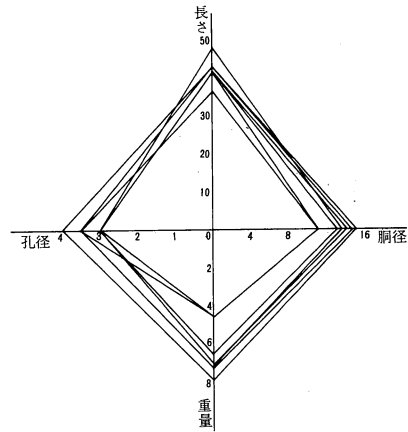


図47 両端切断土錘の相関(重量単位はg、他はmm)

こにまとめておく。

縄文時代の住居址には、検出困難なほど細片化しているが、植物種子風の炭化物が比較的多く目についた。この場合、必ず近辺には小さな炭化材がある。火災等による家屋の廃絶といった大量の炭、焼土があるわけではないが、床面近くの黒色土層(褐色土層)中に部分的に検出された。マメ、クリ、クルミ、アワ状のもの、他に2点の種子らしいものがある。特に、14号址は他の遺構にみられないほどクリの半果皮の出土量が多く、注意してよい。これに対し、古墳時代以降の住居址からは、植物種子風のもの全く検出できず、6・13号址に他の遺跡より若干多めの炭化材片を出土したのみである。6(3・7)号址は小鍛冶的遺構が存在し、羽口、鉄滓などと共に板材のような細片が採集されている。また、13号址で直径3～4cm大の棒状炭化材の一部が出土した。縄文時代の炭化種子類とちがひ、古墳～平安時代の遺構の場合特徴ある出土状況は認められなかった。

縄文中期初頭の1号址は遺構でも触れた如く、炉に近い床面で琥珀のポロポロに近い細片が出土した。赤褐色で、淡黄色のシマが入る。該期における琥珀は他に例もあるが、相当精査しないと判別困難であり、今後住居址の調査に十分注意すれば類例が増加すると思われる。

なお、耕作土ではあるが、2枚貝の貝殻3点が出土している。大形のものアサリかハマグリ、小形はシジミの類である。共に石灰分がとけはじめている。遺構中のプライマリーな土層からの出土ではないが、一応報告しておく。

- 註1 諏訪清陵高校地歴部考古班「諏訪西山地区における遺跡踏査報告」 『土』7 1973
- 2 昭和51・52年度調査 未報告 (56年刊予定)
- 3 長野県教委『中央道報告—諏訪市その4、昭和49年度』 1976
- 4 戸沢充則『岡谷市史』上巻(第一編) 1973
- 5 岡谷市教委『扇平遺跡』 1974
- 6 " " 『郷土の文化財—梨久保遺跡』 1976
- 7 鶴飼幸雄「平出第三類A土器の編年の位置付けとその社会的背景」 「信濃」29—4 1977
林茂樹「縄文中期土器平出三Aの系譜—月見松遺跡と山溝遺跡」 『長野県考古学会誌』27 1976
- 8 長野県教委『中央道報告—松川町地内1、昭和46年度』 1972
- 9 小島俊彰「北陸の縄文時代中期土器の編年」 『大境』5 1974
- 10 紅村 弘『東海先史文化の諸段階』 1975
- 11 なお縄文土器については註以外に下記文献を参考とした。
宮城県教委『上深沢遺跡、東北自動車道遺跡調査報告書I』 1978
富士見町教委『曾利』 1978
山口明「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」 『駿台史学』43 1978
藤森栄一編『井戸尻』 中央公論美術出版 1965
武蔵野美術大学考古学研究会『宮の原貝塚』 1972
青森県教委『三内澤部遺跡』 1977
岩手大学考古学研究会『大館町遺跡』 1978
新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班『吉野屋遺跡』 1974
藤森栄一「中部高地の中期初頭縄文式土器」 『富士国立公園博物館研究報告書』16 1966
富士見町教委『阿原端下遺跡発掘調査報告』 1976
勝山市教委『古宮遺跡発掘調査報告書』 1978
「中央道報告書—茅野市、原村その2 昭和52・53年度」 1979

第IV章 調査遺跡

- 「中央道報告書、箕輪町、昭和47年度」 1973
「中央道報告書、伊那市その2昭和47年度」 1978
「中央道報告書、松川町地内昭和46年度」 1972
佐藤達夫「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間」 『日本考古学の現状と課題』 1974
谷井彪「勝坂式土器の文様構造について」 『埼玉考古』16 1977
- 12 註3に同じ
13 八幡一郎・藤森栄一他『岡谷市海戸遺跡第1次調査報告』 岡谷市教育委員会 1967
14 註6に同じ
15 長野県教委『中央道報告—岡谷市その3、昭和50年度』 1976
16 註4に同じ、446頁
17 註3に同じ
18 小林茂雄『諏訪湖の漁具と漁法』 下諏訪町立博物館 1974
19 3・6・7号址については本文参照
20 註1～9以外に次の文献を参考とした。
山田水呑遺跡調査団『山田水呑遺跡調査報告書』 1977
神奈川県教委『神奈川県埋蔵文化財調査報告15 上浜田遺跡』 1979
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告区』 1978
後藤守一「上古時代鉄鍬の年代研究」 『人類学雑誌』54—4 1939

1号住居址

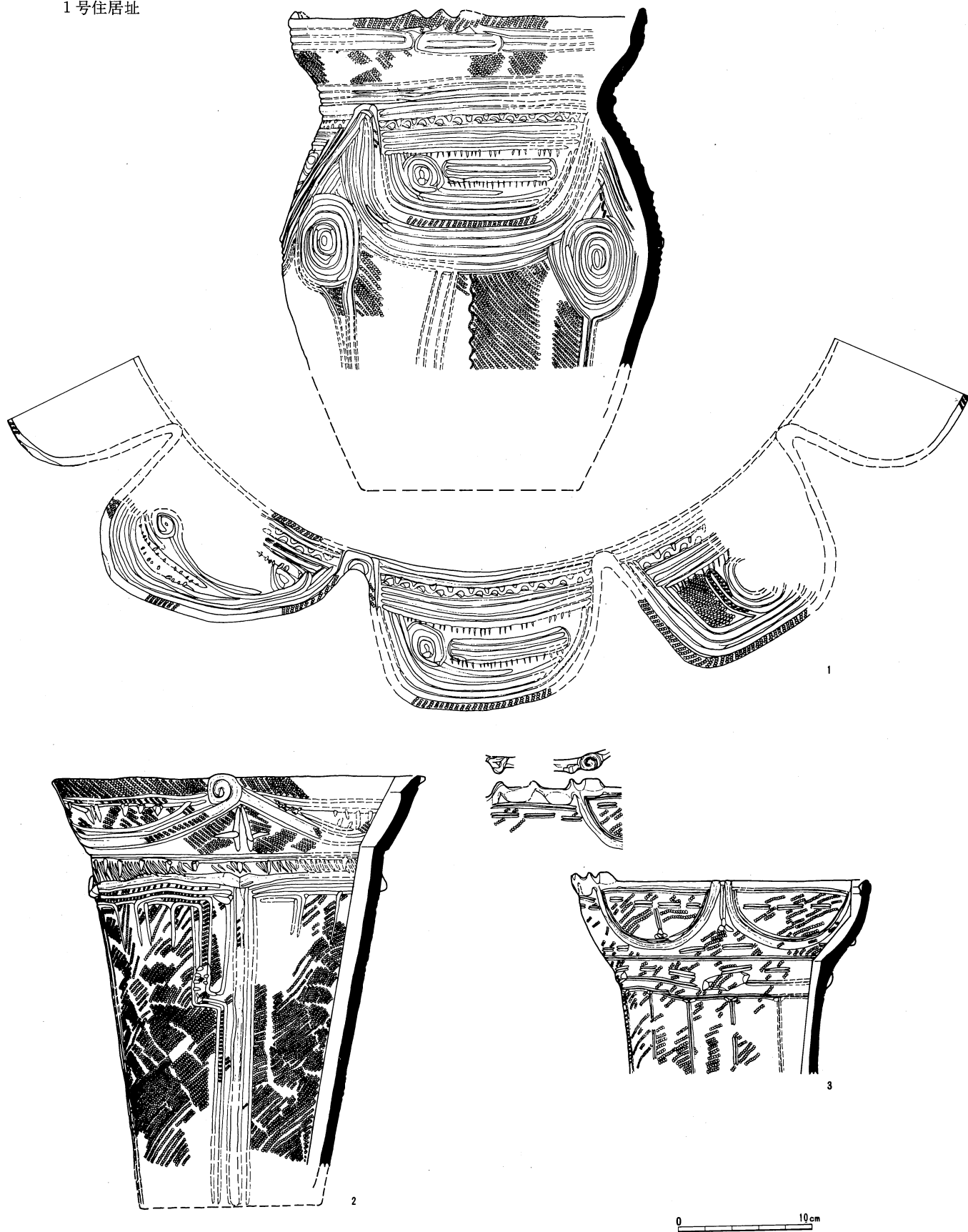


図48 船靈社遺跡縄文時代土器実測図（1：4）

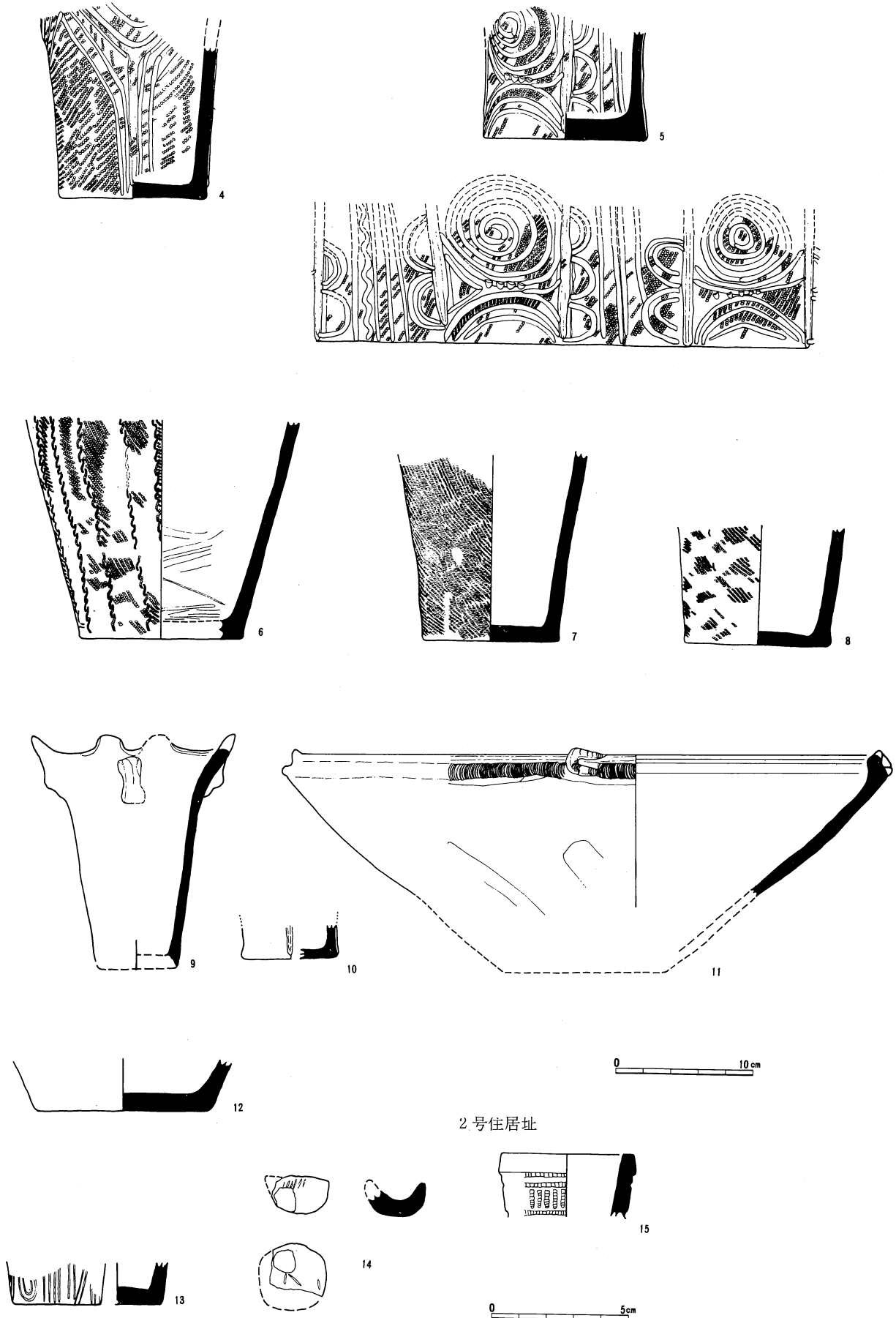
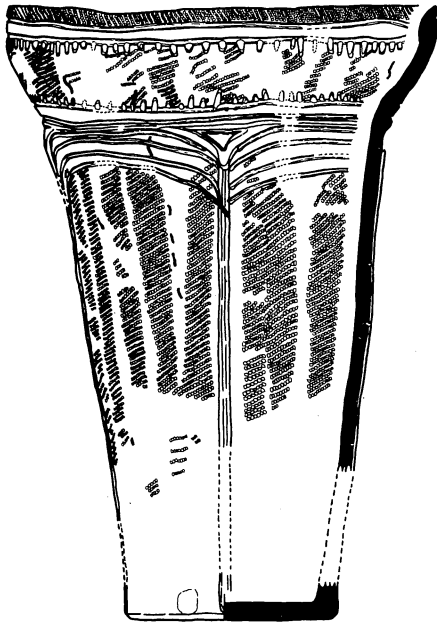
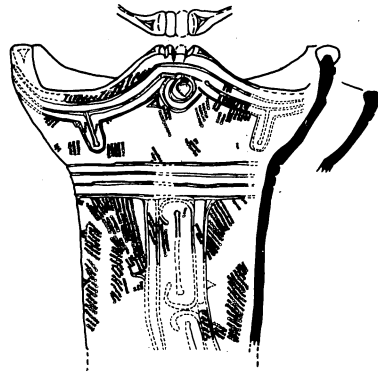


図49 船靈社遺跡縄文時代土器実測図 (14・15 1:2、他は1:4)

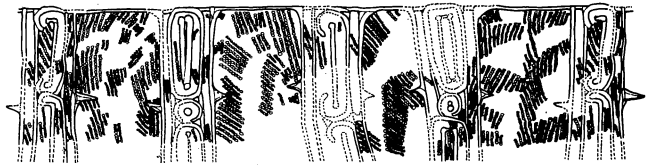


16

9号住居址

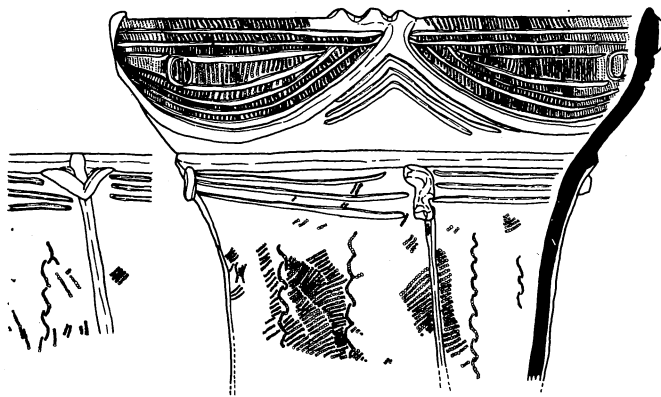


17

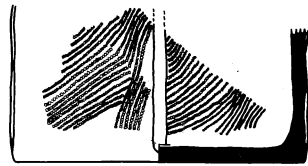


18

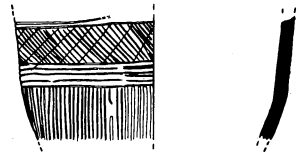
10号住居址



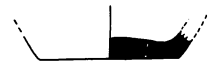
19



20



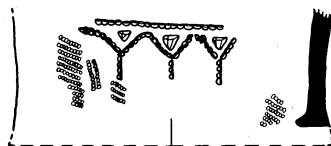
21



22

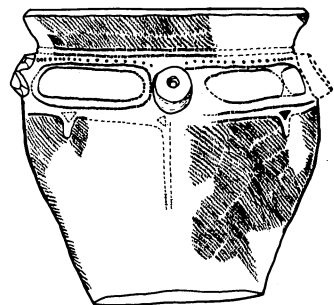
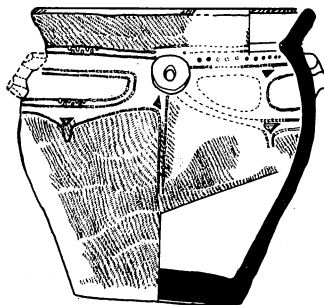
0 10cm

11号住居址



23

0 5cm



24

图50 船靈社遺跡繩文時代土器実測図(1:4)

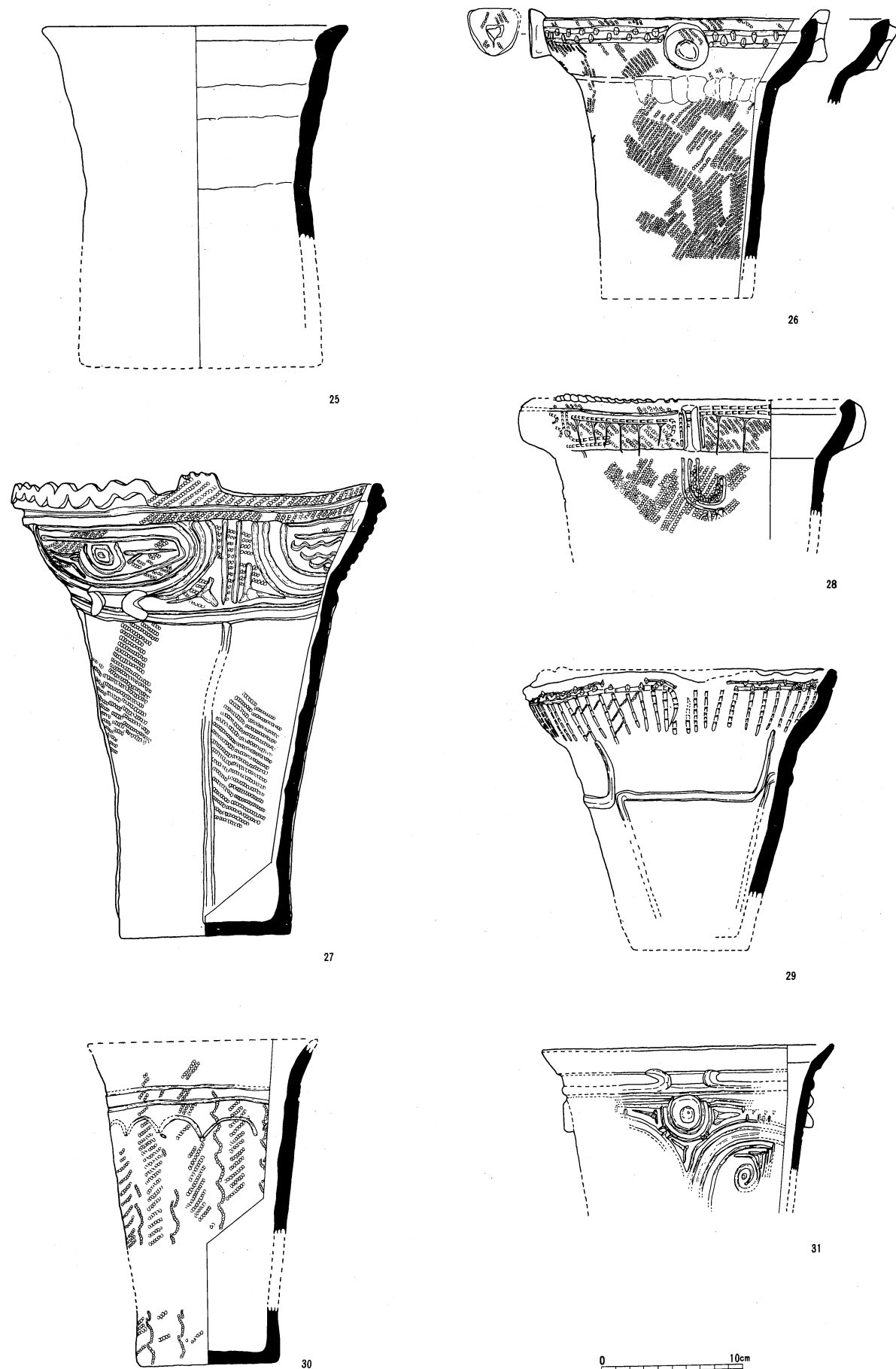


図51 船靈社遺跡縄文時代土器実測図（1：4）

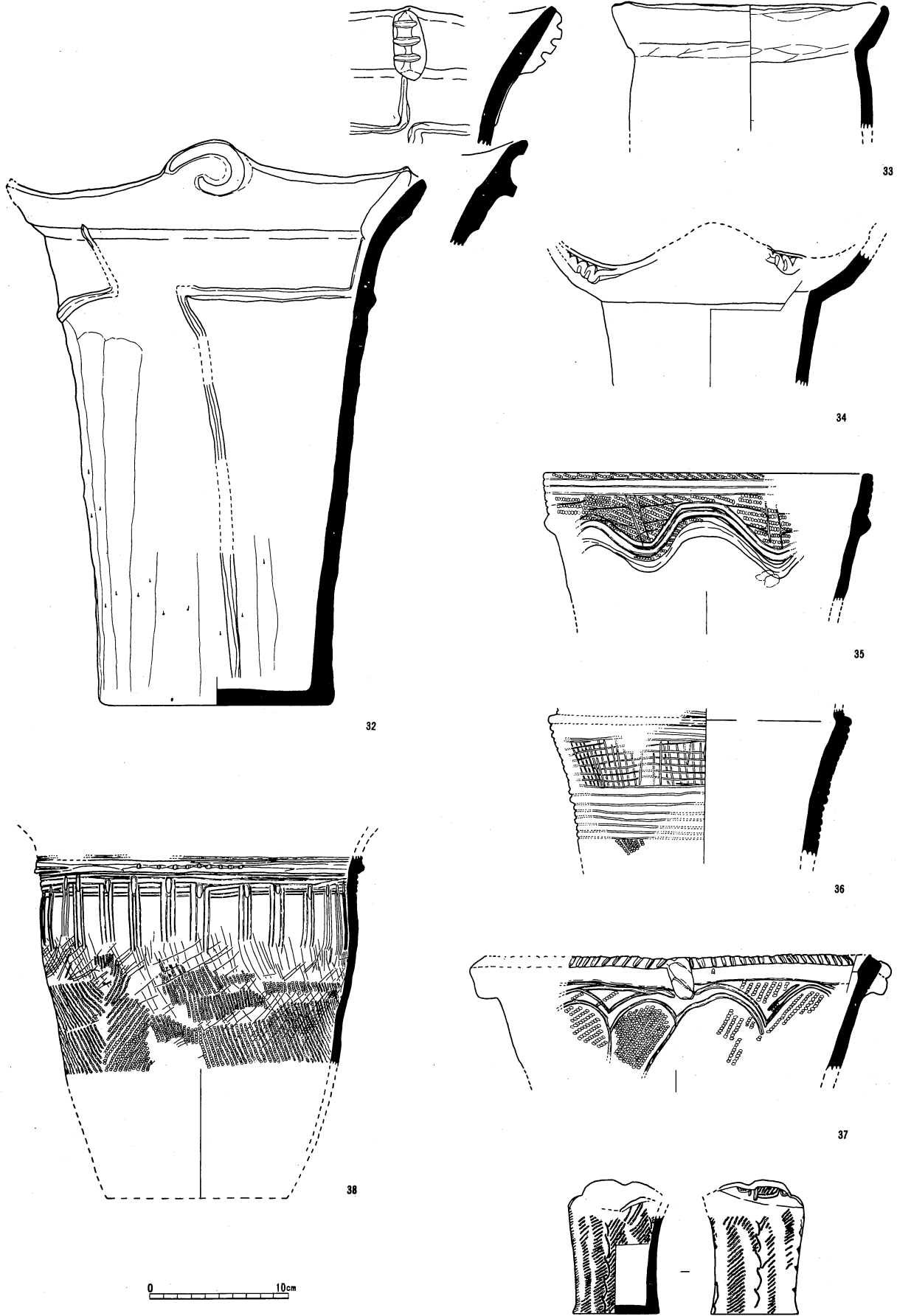
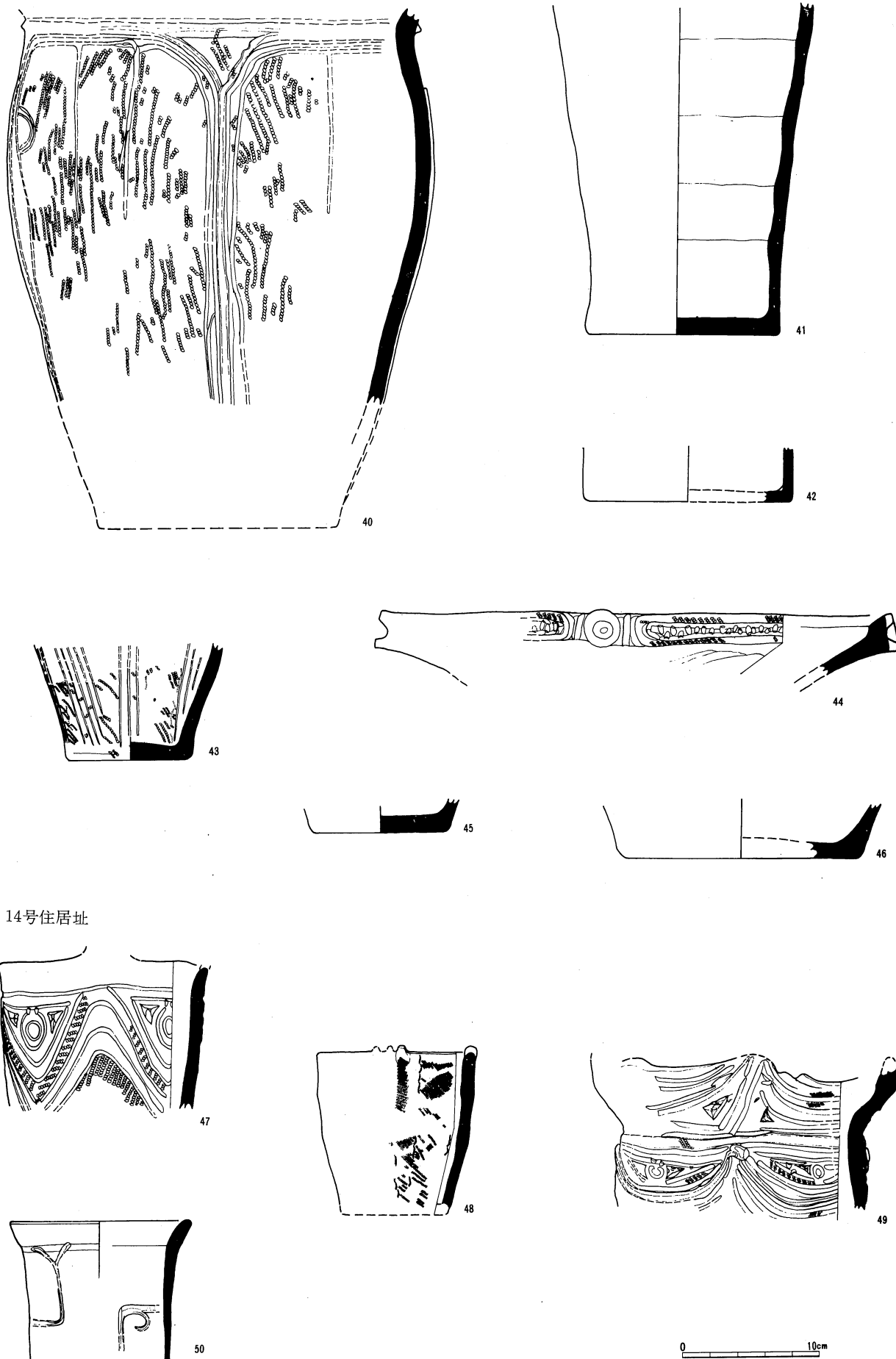


図52 船靈社遺跡縄文時代土器実測図 (1:4)



14号住居址

图53 船靈社遺跡繩文時代土器実測図（1：4）

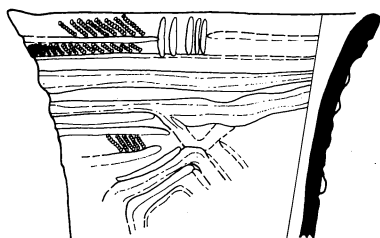
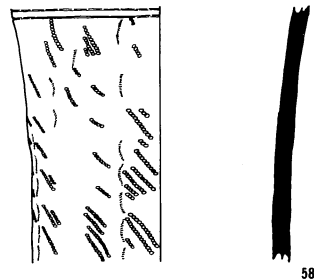
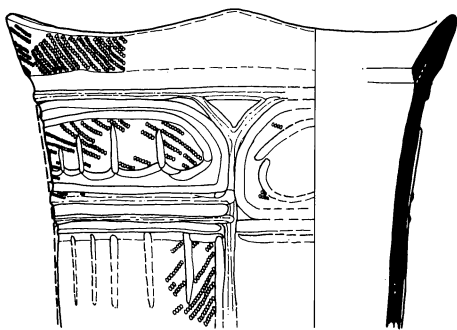
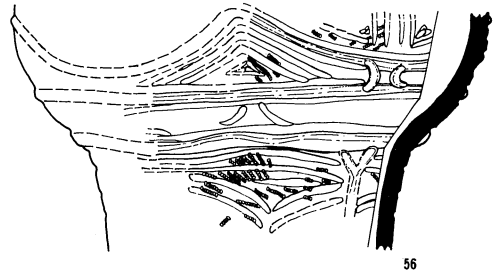
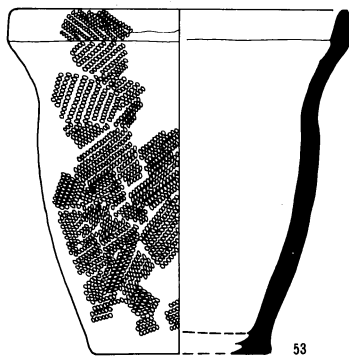
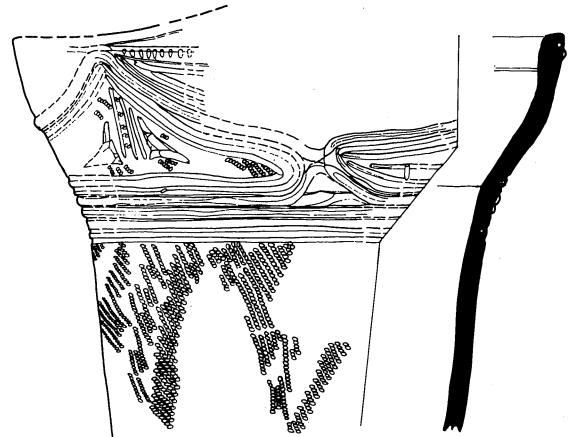
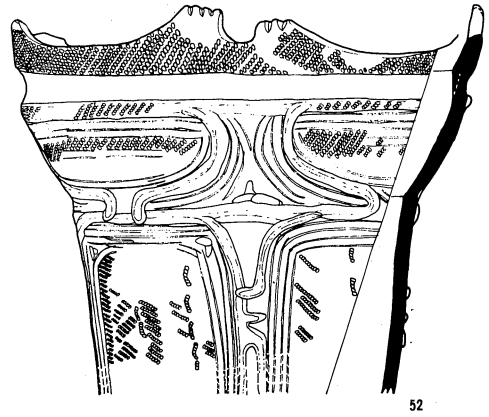
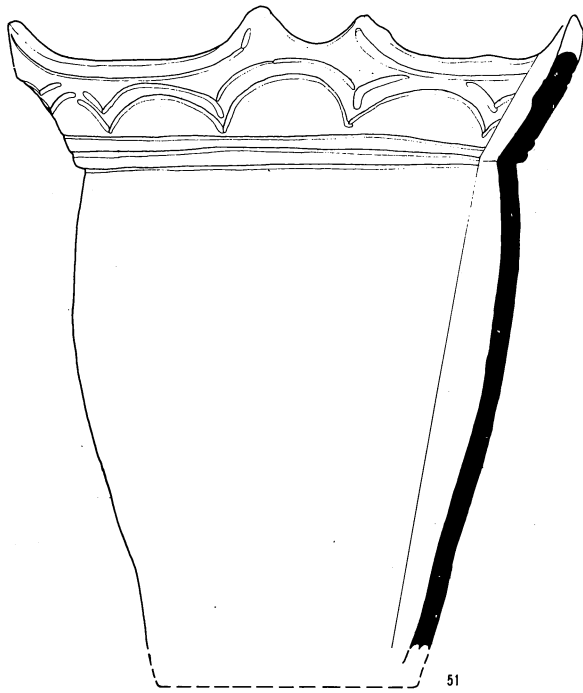


图54 船靈社遺跡繩文時代土器実測図 (1 : 4)

0 10cm

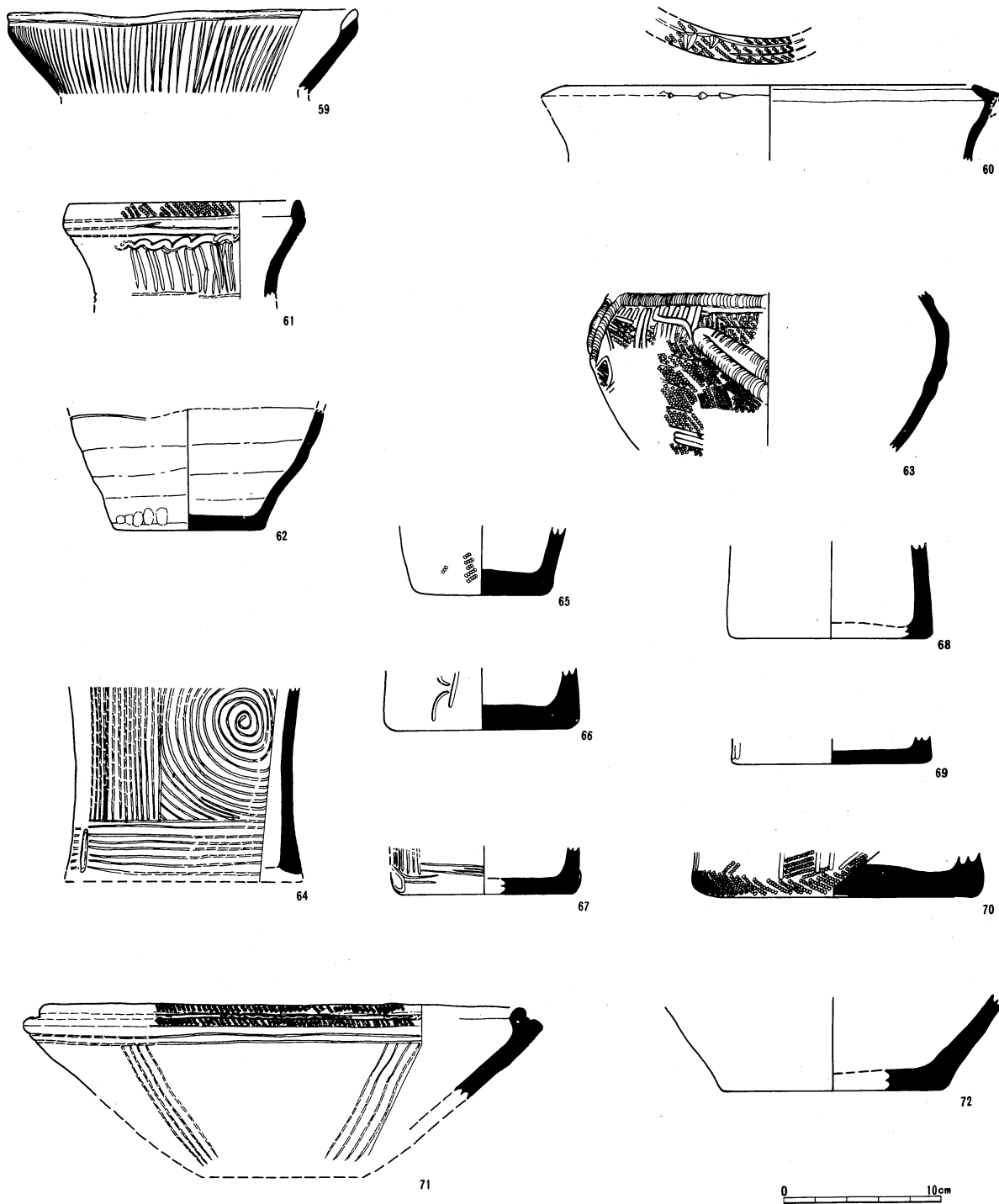


図55 船靈社遺跡縄文時代土器実測図(1:4)